

アルケミアストーリー～クロとエルの物語～

cloverlight

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「人のやさしさ」を知るRPGなのにストーリーが重くて辛い○アルストの世界を、色々なことを考え感じながら旅する、主人公のクローバーと、そのYOMEエルサイス、2人の物語。

目次

第1話	怪しい村	1
第2話	救済者	3
第3話	真相を追う者達	7
第4話	錬金術と等価交換	11
第5話	エナの暴走	15
第6話	風車小屋の下で	20
第7話	エルの回想1	24
第8話	エルの回想2	27
第9話	エルの回想3	30
番外編く	海辺のクロとエルく	34
第10話	クロの思い	39
第11話	エルの思い	43
第12話	意見のすり合わせ	47
第13話	真夜中の襲撃者	52
第14話	月夜の戦闘	57
第15話	不老不死の対価 その1	61
第16話	不老不死の対価 その2	65
第17話	眠りにつく前に	69
第18話	旅立つ者達	74
第19話	彷徨える：	79
番外編く	ソラちゃんのお使い 前編く	84
番外編く	ソラちゃんのお使い 後編く	89
第20話	リーヤンのペンダント	97
第21話	連邦の酒場で	102

第22話	兵士？盗賊？	107
第23話	タイマン	112
第24話	騙す者と騙された者	116
第25話	ネズミ	120
第26話	反省会	126
番外編	ユイゼのストーリーカー前編	131
番外編	ユイゼのストーリーカー 中編	136
番外編	ユイゼのストーリーカー 後編	142
第27話	レイカとカツツとフェンダーク	148
第28話	原野の湧き水を求めて	154
第29話	嘘つきの顔	159
第30話	豚がしゃべった	164
第31話	家畜の運命	169
第32話	ハッピーエンド？	175
番外編	熱とエルの過去 前編	180
番外編	熱とエルの過去 中編	185
番外編	熱とエルの過去 後編	189
第33話	ポニーテール	195
第34話	機械人形	201
第35話	議論の相手	204
第36話	友達	209
第37話	束の間の平和	214
番外編	騎士の子とクロの過去 前編	219
番外編	騎士の子とクロの過去 中編	224
番外編	騎士の子とクロの過去 後編	228

第38話	食材を求めて	234
第39話	人は正論では動かない	238
第40話	乱戦その1	244
第41話	乱戦その2	247
第42話	師弟対決	249
第43話	準備中	254
第44話	パーティー	259
番外編	にもともふと汗疹の葉 前編	264
番外編	にもともふと汗疹の葉 中編	269
番外編	にもともふと汗疹の葉 後編	275
番外編	にもともふと汗疹の葉 番外編	282
第45話	魔王城	287
第46話	魔王の役目	292
第47話	嘘つきユーキ	298
第48話	酔っ払い	305
番外編	夏祭り	311
第49話	塔の外	318
第50話	共闘	324
第51話	空から降ってきたもの	327
第52話	プリン	331
番外編	誘拐されたソラ その1	338
番外編	誘拐されたソラ その2	343
番外編	誘拐されたソラ その3	349
番外編	誘拐されたソラ その4	357
第53話	奪う者	364

第54話	許す者	367
第55話	ポーラの旅立ち	372
第56話	『でも…』の続き	376
番外編	Yamiの取り扱い方	その1
番外編	Yamiの取り扱い方	その2
番外編	Yamiの取り扱い方	その3
番外編	Yamiの取り扱い方	その4
第57話	火傷	401
第58話	帰ってこない兄	406
第59話	不満と波	410
第60話	地下工場の秘密	その1
第61話	地下工場の秘密	その2
第62話	否定	423
第63話	消えたマナ	427
第64話	命の価値	432
番外編	Enjoy☆海!!	その1
番外編	Enjoy☆海!!	その2
番外編	Enjoy☆海!!	その3
番外編	Enjoy☆海!!	その4
第65話	嘘つきの末路	462
第66話	夢をもつということ	468
番外編	乙女達のアドバイス	473
第67話	酒場に集まる冒険者	478
第68話	追われる魔王ちゃん	482
第69話	封印	487

第70話	魔王ちゃんは渡さない	492
第71話	フエンダークとドレイク王	498
第72話	2人+1人	504
番外編	迷子のレア その1	508
番外編	迷子のレア その2	513
番外編	迷子のレア その3	518
番外編	迷子のレア その4	522
第73話	城門下の騒ぎ	527
第74話	紳士オーク	531
第75話	連邦の王	535
第76話	地下牢	540
第77話	知らないからこそ	543
第78話	魔王国の宝	547
第79話	炎に追われて	550
第80話	英雄の休息	555
第81話	恐怖と差別1	559
第82話	恐怖と差別2	562
番外編	レッコとラトの経験値 その1	566
番外編	レッコとラトの経験値 その2	572
番外編	レッコとラトの経験値 その3	578
番外編	レッコとラトの経験値 その4	584
第83話	望まぬ再会	590
第84話	ポーカーゲーム	595
第85話	ポーラの決意	601
第86話	寝物語に	606

番外編	ユイゼお姉ちゃん	その1	609
番外編	ユイゼお姉ちゃん	その2	613
番外編	ユイゼお姉ちゃん	その3	618
番外編	ユイゼお姉ちゃん	その4	623
第87話	魔王ちゃんの願い		632
第88話	願いを取り次ぐ巫女		639
第89話	神を信じるか？		646
第90話	最強の人類		651
第91話	教団の研究		656
第92話	ドラゴン戦その1		661
第93話	ドラゴン戦その2		665
第94話	本当に欲しかったもの		669
番外編	リフルとルアナの肝試し	その1	674
番外編	リフルとルアナの肝試し	その2	678
番外編	リフルとルアナの肝試し	その3	684
番外編	リフルとルアナの肝試し	その4	688
第95話	フエンダークの頼み事		691
第96話	開戦のプロローグ		698
第97話	暴走する機械人形		703
第98話	悪夢		708
第99話	ハクロ王子の希望		714

第1話 怪しい村

のどかな村だった。

村の入口の高台から、村全体を見下ろす。

小川や畑、家畜小屋が見える。小さいながらも劇場もあるようだ。なんてことない普通の村。ありふれた風景。

栄えているわけではないが、寂れているわけでもない。人々の暮らしが、日々繰り返され、それなりの幸せと温かさがある。

始めはそんな印象を持った村だった。

後ろを振り返り、今度は村の入口に建てられたアーチを見上げる。

【不老不死の村】

そう堂々と掲げられた看板。

そしてもう一度村を見下ろす。

村の広場に立てられた、村の雰囲気とは不釣り合いな、大きな白いテント。

一気に怪しさが増す。

「どう思う?..」

私の冒険のパートナー、エルサイスが、金髪のロングヘアをかきあげながら、そう尋ねてきた。

なんとも抽象的な質問だ。

「どう思うって言われてもねー。」

広場のテントを見下ろす。

結構な数の人が集まって、熱を孕んだ異様な空気が漂っている。

「エルはどう思ってるの?..」

「僕?..うーん...まあ怪しいよね。」

エルサイスはそういうと、困ったような苦笑いを浮かべた。

そうだ。怪しいのだ。

きな臭い、面倒くさい、やばそうな香り。

「クロはなんか嫌そうだね。」

特に何も口に出さなくても、こうして、私の心の内を見事に言い当てる彼に、居心地の悪さを覚える。

バツが悪い顔でそちらを見ると、エルサイスは嬉しそうに目を細めた。

私は大きなため息をつく。

言いたいことは色々あったが、すべてため息に溶かしてだした。

「とりあえず、村の人の話を聞いてみようか。」

私はそう気を取り直すと、村の広場へ向かって階段を降りていった。

第2話 救済者

「この村には劇場もあれば、のどかな自然もある。愛くるしい動物もいる。もつとも、それはどこの農村にもある風景。」

吟遊詩人を名乗るトミーという男は、そう語りながら、右目を隠すように垂れ下がったクリーム色の前髪を、大げさにかきあげた。

あくまで私個人の主観だが、吟遊詩人というやつは、どいつもこいつもキザつたらしくて、ロマンチストで、ナルシストだと思う。

どれをとつても私の嫌いなタイプだった。

「この村がほかと違うのは……」

そこでたつぷり間をとるトミーに、イラツとする。

「そう。人を不老不死にするという、不思議な術を使う『救済者』様がいることだ」

自信たつぷり感情を込めた吟遊詩人の全力に、私は「へー。」

と適当な返事を返す。

後ろでエルサイスが笑いを堪えてるのがわかる。

肩透かしを食らった当の本人のトミーは私のぞんざいな様子をものともせず、救済者の偉業を語り継ぐのが自分の使命だと言うようなことを、勝手にベラベラ話していた。

トミーはひとしきり話して満足したのか

「ま、いろいろ見ていっておくれ」

というと、優雅なターンを決めるて去っていった。

「うさんくせーな。」

つい本音が漏れる。

「クロ、口が悪いよ。」

エルサイスはそう注意しながらも笑っている。

「不老不死とかなりたいか？」

「なりたい人はいるんじゃない。まあ僕らだって、半分不老不死みたいなもんじゃん？」

冒険者は神の加護を受けることにより、冒険の途中で倒れても、教

会で復活することができると。

「それとこれとは別でしょ。」

神の加護は、冒険者のみに与えられ、冒険を終えればなくなる。永遠のものではない。

元々私は、不死の冒険者になるのにも、あまり気が進まなかったのだ。

でも、彼が、エルサイスがいたから、一緒に冒険をするという条件付きで渋々了承したのだ。

「まあ僕らは不老不死になるためにここに来たわけじゃないし、真相が見えればそれでいいんじゃない？」

それもそうだ。

死なない人を意図的に作り出すことが、本当に出来るとすれば、それは世界の摂理や真理を覆す。

世界のパワーバランスを崩す可能性がある。

「まあ真相がわかったところで、何が出来るわけじゃないんだけど…。」

私たちは無力だ。目の前で起こっている世界の流れを止めることは出来ない。

でも、だからといって、無関心ではられない。

野次馬でも、何でもいい。無知のまま朽ち果てていくくらいなら、知るために行動したい。

例えばそれが己の死を招こうとも。

「救済者様!!」

広場から聞こえてくる声を頼りに、救済者様とやらを探す。

広場にはられた大きなテントのそばには、不老不死になりたい人たちが集まっている。

「これは…宗教だな…。」

思わずそう呟いた。

老若男女、様々な事情を抱えている人が、一様に救済者を求めている。その目には、不老不死への憧れと渴望が宿っていた。

「狂気って、こういうことを言うんだろうね。」

エルサイスが飄々とした雰囲気で、どこか他人事のように呟いた。一人の男がテントのすぐ横にいる女性の前に進みでる。

白い布地に青い紋章の入ったローブ、まるで聖職者のような女は、優しげな笑みで男を迎え入れる。

男はその白衣装の女の前で跪くと、祈りを捧げた。

白衣装の女はその祈りに応えるように、手を高く掲げた。

「…零は無でなし、無は零でなし…。汝が命脈は、混沌と特異点で、やがて永遠とならん……」

男の体を一瞬黒い靄のようなものが包む。

それは、よく目を凝らしてなければ見えないものだが、なんだか不吉なものを感じた。

「我らの神のお導きにより、あなたの天命は運命のくびきより解放されました。あなたはこれより死を恐れる必要はありません。」

私とエルサイスは顔を見合わせた。

「まだ実感はないでしょうが、あなたには神の祝福が宿ったのです。」男の様子に、変化はみられない。

あんな簡単なことで、本当に不老不死になれるのだろうか？

エルサイスも、同じ疑問を抱いてるようだ。

驚きというより、訝しげな顔をしている。

「うさんくせー。」

エルサイスにしか聞こえない声で、そう呟いた。

この村は、何が真実なのかさっぱりわからない。

次々と与えられる情報のどれもが怪しく、うさんくさい。

しかし、真実だという証拠がないように、嘘という証拠もない。

なんだかモヤモヤするのだ。

「クロ、どれが真実かなんて、些細なことだよ。世界はね、嘘と本当が混ざりあつてできてるんだよ。」

「わかったような口を聞くな。私はそんな優等生の答えは求めてねーんだよ。」

白か黒かに分けられるものばかりではないのは、百も承知だ。しかし、その真理の上に胡座をかいて、考えることを放棄できるほど、私

はお利口さんではないのだ。

私の返しを最後に、彼は押し黙ってしまった。

少し言いすぎたかと思いい、目だけ動かして、気づかれないようその表情を伺おうとしたのに、なぜかバツチリ目が合った。

驚いて、目が合ったまま固まってしまふ。そして、すぐに気まづくなつて、大げさに顔ごと目を逸らす。

「心配してくれたの？ありがとう！」

エルサイスが嬉しそうにニッコリ笑う。

だからこいつは嫌いなんだ。

熱くなる顔を振り払うように、私は救済者の前に進み出た。

第3話 真相を追う者達

「あら、あなたも神の奇跡を賜りたいのですか？」

そう僕らに話しかけた救済者様と言われる女は、女性と言うよりも、少女と言った方がいい様な顔立ちだった。

「(若いな)」

それが僕の最初の感想だ。

しかし、彼女の目の奥に広がる虚無の光は、見た目の若さでは表現出来ないような、暗さを持っている気がした。

クローバーの様子を少し伺う。

燃える夕焼けの様な黄金色の瞳で、女を睨みつけていた。何が真実か見極めてやるといふ、強い意思を感じる。

「(心配するだけ無駄だな。)」

クローバーの意思の強さを舐めてはいけない。公国の酒場のマスター、チップの石頭よりは固いはずだ。

僕はクスクス笑いを押し殺す。

クローバーのことを考えるのは本当に楽しい。

「奇跡を受けると、永遠の命を手に入れることができます」

クローバーのことは一旦頭の隅に追いやって、僕は救済者の言葉に耳を傾ける。

「しかし、それは神への誓いと同等価交換によるもの」

「等価交換？不老不死になる代わりに、何か差し出すことになるの？」

クローバーが口を挟む。

永遠の命の代償とは如何なるもののだろうか？

「そうですね、与えられた生は、神のため、世界のために尽くすことになります」

クローバーも、僕も眉間のシワを深くする。

何とも曖昧な代償だ。神または世界の奴隷になるといふことを言ってるように聞こえるが、それがどういふことで、どれほどの代償なのか、さっぱりわからない。

「あなたに、その覚悟はありますか？」

口を開きかけたクローバーの肩に手を置き、発言を制止する。
どうせ反射的に「ねーよ。」と言おうとしたのだろう。

制止されたクローバーは、僕をギロリと音がしそうな不満の目で睨みつけてきた。

「(かわいいいなー)」

まさに暖簾に腕押し、糠に釘、クローバーの如何なる感情も、僕にとってはかわいいのだ。

本人はかわいいと思われることが大嫌いの様だが、そう思っていることすらかわいい。

「冒険者の僕らでも出来ますか？」

ここで儀式を完全に拒否すれば、情報を引き出す先を失ってしまふ。ここは、儀式を受ける可能性を残しつつ、最終的には受けられないのがベターな手だろう。

「あなたは既に神の加護をお持ちでしたか。神の奇跡を頂戴するのは、旅が終わり、加護が終わった後でも遅くはないでしょう。救いを求める人はたくさんいるのです。人々を、ひとりでも多く救うのが、神が私に与えてくださった宿命なのです。」

彼女はそういうと、儀式を受けるために待っている人々の中に消えていった。

「私は忙しいから、冷やかしは帰れ。ってことかな。」

僕がそう呟くと、クローバーが苛立ったように大きな舌打ちをした。

「こーら、品がないよ。」

そう注意しても、何処吹く風だ。

クローバーはとにかく直接的だ。自分の気持ちを隠したり、誤魔化したりしない。思ったことをすぐに口に出す。

交渉や駆け引きには、めっぽう向かない性格なのだ。

そこは僕がカバーしなくてはと思う。

「あら、おふたりさん。いいところで会ったわね。」

そう声をかけて来たのは、僕達と同じ冒険者のエナ。

僕らより少し先に冒険に出た先輩冒険者で、まだ僕達が冒険に出た

ばかりの頃は、色々教えてもらったりもしたが、今はもう対等に張り合える位の仲だ。

「あいつらの話聞いた？なんかうさんくさくさくない？」

「うさんくささしかないね。」

クローバーがそう返す。

この村に来てから、クローバーは何度「うさんくさい」と言っただろうか？

「くさいくさいって、匂いすぎて鼻が曲がらないか心配だよ。」

僕の皮肉に、クローバーが睨み返してきた。目だけで「黙れ」と言っている。

あまりのプレッシャーに、流石にまずいと感じて、僕は黙ることを選択した。

「あいつは、新興宗教の勧誘員」

「新興宗教か。私が言った通りだ。」

クローバーが得意げな顔をする。少し機嫌が直ったようで安心する。

「(単純っていいな)」

思うだけで口には出さない。

「死ななくなる術を、人々に施してるんだっていうけど、本当の目的がまったくわからないの。今は、村の外からも施術してもらいに来る人がいるらしいけど……。」

「まあまあ人気があるってことか……。」

クローバーが呆れたように言う。

宗教とは、心の拠り所だ。この世界は冷たく、辛く、苦しみに満ちてる。そんな、あらゆる理不尽を抱えて生きていくためには、神様と言われる、全てを超越した存在が必要な人もいる。

幸か不幸かわからないが、僕には、そしてクローバーにも、今までに、神の存在が必要になったことはない。

つまり、僕もクローバーも、こんな馬鹿げた宗教に集まる人の気持ちだが、まったくもって理解できないのだ。

エナは、救済者が使う術は、僕達冒険者が受けている神の加護とも

違うと続けた。

「待って、そもそも神様って複数いるの？」

クローバーが急にとんちんかんなことを言い出す。

「信仰の違いの分だけ、神様はいるんだよ。ある国ではね、八百万の神って言うてね……」

「800万なんて覚えきれないだろ。」

「全てのものに神様が宿るって考え方のことだよ。」

話が大分逸れてきた。

「とにかく、僕らが受けている神の加護と、さっきの救済者がやっている不老不死の術は、まったく違うものなんですよね？」

話を戻すため、そうエナに確認する。

「そう、神の加護のフリをしているけど、彼らは自分たちの手で作った技術で、人々を死なない体にしてるようなの」

「そもそも神様じゃ無いのか！」

クローバーは、冒険者の加護と、不老不死の術は性質的には一緒で、信仰する神様が違うから、違うものと言っているだけと思っただけらしい。

面白い考え方をするものだと、感心してしまった。でも、そういう種なら話は早いし、危険も少なそうだ。

しかし、現実をもっと複雑らしい。

「そうやって人々を不老不死して、宗教の操り人形を作ってるのか……？とにかく、嫌な予感がするのよね……」

エナがそう続ける。

さっきの救済者が言った等価交換の代償「神のために尽くす」というのが、エナが言っているような、宗教団体の操り人形になるということなら、それなりの納得がいく。

「嫌な予感しかないな。」

クローバーがそう呟きながら、眉をしかめる。

「予感で済めばいいんだけど……」

僕は先に広がる毒の沼を見据えるような気持ちで、そう返した。

第4話 錬金術と等価交換

「釣れないなー。」

橋脚に肘をつき、もたれかかりながら、釣り糸を垂らす。

さつき釣れた長靴は、パートナーにプレゼントしてあげた。「ありがとう！大事にするね！」と言っていたが、汚れてる上にびしょびしよな長靴を、どう大事にするのか、疑問である。

半刻ほど前

「ということなんで、なにか情報あったら教えてね？あと、マナを見かけたら、この村にいるって伝えてね。またはぐれちゃってさ」

エナはそう言って去っていった。

その後村の人に話を聞いて回ったが、有力な情報は得られず、エナが探している、彼女の冒険のパートナー、マナにも会わなかった。

「クロ、引いてるよ。」

エルサイスの声にはつと我に返ると、竿を上げる。宝箱を引き上げたので、中身を確認する。

「骨……。」

「おめでとう。」

すぐさまエルサイスにプレゼントする。

「僕は体のいいゴミ箱じゃないよ。」

そう言いながらも、受け取ってくれる。案外良い奴かもしれない。

また釣り糸を垂らして、さらさらと流れる小さな川をただ見ている。た。

すぐ近くにある劇場から、くごもった声がうっすら聞こえてくる。

演劇が始まったのだろうか？橋を渡った先の小さな広場からは、噴水の吹き上げる音がして、もつと遠くの方から、家畜の鳴き声が風に乗ってくる。

のどかだ。

「こんなに気持ちがいいのに、それだけじゃ物足りないのかな？」

そう独り言を漏らす。

エルサイスは私のすぐ隣で、橋脚に背中をつけて座り込んでいる。

「はー。」

なんとなくため息。

激しい引きを感じ、竿を思いっきり上げる。ステイグマサーモン、大物だ。

エルサイスに渡して、サーモンのカルパッチョを合成してもらおう。

「エルはぎ、どう思うの?。」

「どうって?。」

「不老不死とか、永遠の命って、錬金術の分野でもあるでしょ?この村に起きてる不思議な術のこと、錬金術師としてどう思う?。」

エルサイスは、錬金術師として、様々なアイテムを合成してくれる。

じゃがいもからクロケットを、魔物の肉から釣り餌を、特別な石から強い武器を、料理から装備品まで色々作れるのだ。

「うーん。」

エルサイスは考え込んでいる。

また長靴が釣れた。最長記録更新したので、凶鑑を書き換える。まったく嬉しくない。

「錬金術っていうのはぎ、魔法とはまた違う。魔法は奇跡だけど、錬金術はどちらかというと、科学なんだよね。」

「科学?。」

「錬金術には材料が必要。クロケット1個作るには、じゃがいもが1個要る。僕らは、必要な材料が揃えば、それを組み替えて新しいものを作ることができる。ただそれだけなんだ。」

それだけでも私にとっては充分奇跡に思えるのだが、エルサイスにとってはそうでもないらしい。

「クロケット1個に、じゃがいもが1個、これが等価交換。じゃがいも1個から、クロケットは2個できない。質量保存の法則に反するからね。」

エルサイスはそう言うと、合成したばかりのサーモンのカルパッチョをこちらに差し出してきた。私はそれを手で摘んで食べる。

「難しい?。」

「うん、難しい。」

ここで知ったかぶりをしたって、どうせすぐ理解できていないことはバレるのだ。正直に答える。

エルサイスは少し笑ったが、柔らかい笑顔で、馬鹿にしているわけではないようだ。

「僕らはね、無から有を、または1から2を作り出すことはできないんだよ。」

「絶対に?」

「絶対に。」

エルサイスは語気を強める。

「錬金術の分野では、等価交換は絶対なんだ。クロケット1個には、じゃがいも1個が、そして……」

エルサイスが下がってきた黒縁メガネをクイツと上に押し上げる。

「永遠の命には、誰かの命が必要だと思うよ。」

メガネの奥の赤い目は、1ミリも笑っていない。吐きそうなくらい真剣だった。

「はー。」

ため息しかでない。

なんとも胸くその悪い話だ。一体誰がなんのためにこんな最悪なことをしているのだろうか。

「まあ、あくまで錬金術の分野の話だよ。彼らが言うように、神様が起こす奇跡なら、等価交換なんて関係ないでしょ?きつと。」

「神様なんて1ミリも信じてないくせに、よく言うわ。」

エルサイスの薄っぺらい慰めを一蹴する。彼なりの優しさなのだろうが、心にも無いことを悪びれる様子なく口に出すところは、薄ら寒さを感じる。

嘘も本音も、客観も主観も、ごちゃ混ぜにして話すエルサイスは、間接的で、掴みどころがなく、私には理解が難しい。

「確かに、神様は信じてないね。」

エルサイスは笑った。

「でも、錬金術の分野とは違う技術が使われている可能性があるのも事実だよ。」

「その可能性を信じたいね。」

「まあ望み薄だけど。」

「一体どっちなのだ。否定したと思ったら、肯定。肯定したと思ったら、否定。」

「救いがない話だな。」

「世の中救いがないことばかりだよ。」

「だからみんな神様に救いを求めるのか？」

「そうかもね。」

その神様自体に救いがないという、現実には、うんざりする。本当に酷い世の中だ。

「もうここまできると信じれるのは自分だけだな。」

そう漏らした私に

「僕も信じていいんだよ？」

と、エルサイスが大真面目な顔で返す。

普段嘘か本当かわからないことばかり言うから、これも冗談なのか、真面目なのか判断がつかない。

とりあえず、私は死んだ魚のような目で

「そうだね。」

と気のない返事を返した。

第5話 エナの暴走

私はそれなりの時間、釣りを楽しんだ。エルサイスも隣で話をしながら、付き合ってくれた。

ウイリススカープが6匹、ステイグマサーモンが3匹、長靴が4個、トレジャーいっぱい、そして珍しいワイルドキンギョが1匹。中々の大漁だ。

1度公国に戻って、魚をネコにあげようかと話していると、橋の向こう、噴水のある広場の方から、エナが走ってきた。

「ちようどいいところに居た」

そう言うエナの隣にはさつき見た白衣装の女、救済者がいる。なぜだか胸騒ぎがする。

「寝たきりの爺さんがここにいるんだけど、爺さんに奇跡をかけてもらって、こいつらが本物かどうか、見極めようと思うのよ」

私もエルサイスもギョつとする。

「(魚だけに：。)」

そんなめちやくちやくだらなないギャグを思いついたが、口に出す状況ではないのは、流石にわかった。

「一緒に証人になってよ」

そう言うエナに、私は違和感を覚える。

エルサイスの様子を伺う。あまり表情は動いていないが、気乗りしない様子だ。

「それってその爺さんを実験台にするってこと？」

私の問いにエナが答える前に

「順番もありますから、その人だけ特別というわけには」

と、救済者が口を挟む。

「いいから、ほら、こつちこつち！」

エナは私の質問には答えずに、爺さんの家の前に救済者を引っ張っていく。

「こういう寝たきりの人ほど、助けなきやいけないんじゃないの？それとも、動ける人しか助けられないっていうの？」

なんとも安い挑発だ。いくら火がつきやすい私でも、こんな馬鹿げた挑発に乗ったりしない。

「そんなことはありません！」

しかし、救済者は乗るようだ。エナと共に、家の中へと入っていった。

「なあ、馬鹿げてると思わない？」

私は絶望的な気持ちでエルサイスに問いかける。

「馬鹿げてるけど、みんな真剣なんだよ。困ったことに。」

エルサイスは、困ったような、悲しいような、複雑な表情を浮かべている。

エナのやろうとしていることは、ものすごく乱暴なことだ。他人の人生を大きく変えてしまうかもしれない重大なことを、実験台として扱おうとしている。

「こんなの止めさせないと！」

「そうだね。」

珍しく意見が合った。

不老不死になるという事の重大さを、どうしてこんなにも軽く見ているのだろうか？

ここに集まって救済者を求める人々も、エナも、永遠の時を生きるということに、畏怖の念を感じないのだろうか？

私は困惑しながら、寝たきりの爺さんがいるという家の扉をノックした。

扉を開けて中に私達を案内してくれたのは、エナだった。

この家の主人のフジは、ベットに寝たきりになっていて、立ち上がれない様だ。

「私は『救済者』ケイト。頼まれてあなたに奇跡を授けに参りました。」

白衣装の女が、そう言って、礼儀正しくお辞儀をする。

救済者に名前があるとは考えもしなかった私は、思わずキョトンとしてしまう。

よくよく考えれば、どんな人にも名前はあつて当然なのだが、私も

知らず知らずのうちに、救済者を人ではない何かとして、特別視していたのかもしれない。

宗教とは厄介だ。信じていなくても、こうやって無意識に心を惑わせ、判断を鈍らせる。

私は改めて気を引き締める。

「そんな得体の知れんモノはいらん！帰れ！」

寝たきりのフジが、寝たきりとは思えない大きな声で怒鳴り返す。かけていた丸メガネは揺れ、空中に唾が飛ぶ。

こんなに大きな声で怒れる人が、なぜ寝たきりなのだろうか？充分元気ではないかと思う。

「あのさ、おじいさんさ、奥さんがかわいそうじゃないの!？」

ずるいやり方だ。本人ではなく、身内を人質に取って、その人がかわいそう、不幸になるといつて不安にさせる。宗教勧誘でよく使う、人の優しさに漬け込む卑劣なやり方。

それを救済者のケイトではなく、エナがやっているのだ。

「ちよつと、奥さんは関係ないでしょ。本人がやりたいか、やりたくないかが、大事なところだ。」

エナをたしなめる。

エナは邪魔しないでと言うような目で、こちらを睨んできた。負けじと私も睨み返す。

「フニエはワシがいけないほうがいいんじゃない！ひとのことはほうっておいてくれ！」

フジだつて負けてない。

「そのまま意地張つてぼつくり逝くくらいなら、怪しげな術でも受ければいいじゃない。怪しげな術が失敗したって、このまま逝つたって！結果は一緒なんだから。」

「あなたには倫理観つてもものが備わつて無いんですか？」

エルサイスが呆れた様な声で言った。人の命を何だと思っているのだろうか。

「少しは未来を見なさいよ！頑固ジジイ！」

エルサイスの声に被せるようにエナが怒鳴る。

「やめろ！」

フジが怒鳴り返す。

「嫌なら逃げてご覧なさい。どうせ、手一つうごかせないんでしょ！」
頭がおかしいとしか思えない。

冒険を始めた頃、エナは、色々教えて世話を焼いてくれた。廃工場まで一緒に薬草を取りに行ったこともあった。ちよつと変わっているけど、先輩冒険者として尊敬している部分もあった。

でも、今日このエナの姿を見て、その思い出はすべて灰となる。残ったのは、軽蔑と得体の知れない恐怖だ。

「やめろというにー！」

「ちよつとーやめてあげてー！」

フジに加勢する。

「ワシはそこまでして、生き長らえたたくない。死んだら死んだで、それがワシの運命じゃー！ほうっておけ！」

まったくの正論だ。

エナはこの頑固ジジイを説得するのは無理だと思ったのだろう。

「ほら、あんたらもやっちゃいなさいよ。それとも、失敗するのがコワイの？」

と、ケイトの方を煽りだした。

「エナーやめてー！」

懇願に近かった。裏返った、恥ずかしい声で叫ぶ。

救済者のケイトは、戸惑った顔をしながらも、まっすぐフジに近づく。表情とは裏腹に、その足取りに迷いはみられない。

「こんなの間違ってる！」

そう言って、フジとケイトの間に入ろうとした私の腕を、エルサイスが強く引つ張って止めた。

「てめえ」

思わず悪態が漏れる。私のドスの効いた本気の声に、エルサイスは怯む様子がない。

ただ真剣な、そしてどこか悲しげな表情で、諦めたように首を左右に振るのだった。

「零は無でなし、無は零でなし…」

ケイトが奇跡の祈りを始める。

私はとてもそれを見守る気分にはなれず、エルサイスの腕を乱暴に振り払うと、フジから顔を背け、窓の外に目を向けた。

暖かい午後の光が降り注ぐ窓辺で、小さな黄色い鳥がさえずっていた。

世界はこんなにも美しいのに、なぜここは、こんなにも汚れているのだろうか。

行き場のない感情を、押し殺すため、私は小さく舌打ちをした。

第6話 風車小屋の下で

「クロ。」

優しく声をかけると、クローバーは寝転がって目をつぶったまま「うーん……う？」

と眠そうな返事を返した。

濃い赤い前髪が、太陽に透けて、燃えるようなオレンジ色になっている。

柔らかい風が吹き、風車がギシギシと音をたてながらゆっくり回る。

クローバーは、風車小屋のウッドデッキの上に、仰向けに寝転びながら、両手を頭の下に置き、夢うつつ船を漕いでいた。

僕はその隣に座り、その様子を幸せな気持ちで眺めている。

「お茶ができたよ。飲む？」

「うっ……うーん……。」

クローバーは曖昧な合図打ちをしたかと思うと、すやすやと寝息をたて始めた。

僕はゆっくりお茶をノドに流し込む。アロエベラから合成したお茶は、独特の風味がしたが、これはこれで悪くない。

廃工場に魔王が現れたという噂を、公国の酒場で聞いた僕達は、この滅びの村まで様子を見に来た。

滅びの村にある廃工場では、トツポがまた悪さをしようとしていた。

そう、また。だ。

廃工場の魔物は前に一度退治したのだ。特に苦労もなく、魔物はクローバーの一撃で、あっけなく倒れた。その時に魔物はトツポと名乗っていた。魔物に名前はない。名前がある魔物は『魔王』というらしい。

魔王という肩書きは似合わない弱さだが…。

今回もトツポは

「不死身のトツポ様の前に、のこのこ現れるとはなんたる愚行！我は

決して死ぬことはない！我が死なぬ以上、貴様らが倒れる以外、道はないのだ！」

などと喚き散らし、クローバーを散々イラつかせ、彼女の「うるせえ黙れ。」

の一撃、脳天を貫くスカルティガーで倒れた。

魔王は倒すと、また強くなって復活すると言っていたが、前とさほど変わらない弱さだった。

そんなこんなで魔王退治を終え、僕らは今滅びの村入口近くにある、風車小屋の下で休憩をとっていた。

こんなにゆつくりするのは、本当に久々だった。

不老不死の村で、フジが奇跡を受けるところを見たあとから、クローバーは荒れていた。

レベリングだと言いながら、エリアボスを飽きるほど狩りまくり、無理な戦闘で死にかけたり、実際テバキゾクに1人特攻して、教会送りになったりした。

釣りをしたり、海辺ではしゃいだり、草原に寝そべって昼寝をしたり、ベンチに座っておしゃべりしたり、酒場で大きな声で歌ったり、そういう時間が、最近はめっきり減っていた。

戦って、戦って、疲れたら宿に戻って、また戦って。

クローバーは、戦いの中でしか、自分の気持ちを整理できないのかもしれない。

難儀な性格だなと思う。

そんな彼女が、久々の休息を取って、リラックスしながらうたた寝をしている。

むにやむにや寝言を言いながら、クローバーが横向きに寝返りを打つ。

僕はとつさに手を出して、ウッドデッキから落ちないように、その背中を支える。

手が触れた背中は、小さくて、暖かくて、柔らかかった。

このまま抱きつたい衝動に駆られるが、理性を総動員して我慢する。そんなことをしたら、起こしてしまうだろうし、起きた瞬間が、僕

の最期になる可能性が高い。

僕はクローバーのことが好きだけれど、それ以上に大切だと思っ
ている。拒否ができない状況で、そういうことをするのは、反則だ。

それに僕は、今の関係を壊せるほど、無謀でもない。

要するに、臆病者なのだ。

そんな僕の葛藤を知る由もないクローバーは、規則的な寝息をたて
ながら、夢の世界を楽しんでいる。

クローバーは、あの日のことを、自分の中でやっと整理出来たのだ
と思う。

心も体も傷つきながら、戦って、戦って、自分と向き合った。そう
して手に入れた答えが、どんなものなのか、僕にはわからないけれど、
彼女が納得できたならそれでいい。

ゆったりとした時間が流れる。

滅びの村はその名の通り、滅んでいたので、人が通ることは滅多に
ない。

時々、僕らのような冒険者が、ふらつと迷い込むことがあるが、今
日はそれもなく、僕とクローバーの貸切状態だ。

朽ちた家々や、無人の教会。村を横断する古い吊り橋の向こうに
は、巨大な木がそびえ立ち、葉っぱが風に舞ってそよそよと音を立て
る。

まるで時間が止まっているかのような錯覚に陥る。

不老不死の村は、見えなくても村のそこかしこから、誰かが住んで
いて当たり前前の日常を送っている空気が感じられた。そのどこにで
もありそうな、温かさから、のどかだなと思った。

それとは対照的に、この滅びの村は、良くも悪くも、とても静かだ。
風の音と、風車が回る音しかしない。

これはこれで、僕は嫌いではない。むしろ、静かなのは、好きだ。
でも、かつてここに住んでいた者達からしてみれば、それは寂しい
ことなのだろうと思う。

不老不死の村の酒場のマスター、ロックは「救済者がこの村の賑わ
いを取り戻した」そんなようなことを言った。

不老不死の村が、この滅びの村のようになることを、救済者が防いでいる。

それは素晴らしいことなのだろう。

それでも僕は、まだモヤモヤしたものを抱えている。

本当に救済者は素晴らしい善人なのだろうか？

あの日、フジが不老不死になった日のことを思い出す……

第7話 エルの回想1

フジは奇跡を受けると、すぐに立ち上がった。つい数秒前まで、すら自分で動かせなかった老人が、立ち上がったのだ。

流星に僕は驚いた。

そこにタイミング良く、フジの奥さん、フニエが帰ってきた。

そして

「あら……あんた。これで夢が叶うわね。外へ出たい！また旅に出た
いって。あんたの可愛いヨメも体が動くうちに、一緒に行くよ！」
と言い出したのだ。

フジは口では救済者の奇跡を受けることを拒否していたが、フニエの話では、本当は元気になって、また旅に出ることを望んでいたようだ。

だからといって、不老不死になることが、最良の選択だとは、僕は思わない。

この技術は確かに素晴らしい力を持っているが、その力に頼ることのリスクが一切わからないのだ。

誰もそれを質問しないし、説明しない。リスクをないものとして扱っている。

僕はそこに作弄的なものを感じるのだ。

クローバーは眉間にシワを寄せ、憮然とした顔で、ことの成り行きを見守っている。

元気になったフジは、寝たきりの時と変わらず、口達者で、フニエと言いかい合いをしている。

フジはさつきからずっと怒鳴っているが、もうそれが癖というか、そういう話し方だけで、別に怒っているわけではないようだ。

エナに向かって怒鳴ったときも、必死に拒否していたわけではなく、ただそういう話し方だったというわけだ。

なんとも紛らわしい。

「しわくちやのくせに、誰が可愛いヨメじゃ？」

「そんなしわくちやに、あんたが一目惚れしたんだろ!？」

「そんなの昔の話、忘れたわ！」

惚気け話の言い合いを聞かされて、僕もクローバーも呆れ返る。

フジはたった今不老不死になり、人生を大きく変えたのだ。その事の重大さをまったくわかっていない。もつと真剣に話し合った方がいいのではないか？

「これから、どうするんですか？」

たまりかねた僕が、そう尋ねた瞬間、フニエは

「ウウツ……」

とうめき声を漏らすと、その場に倒れた。

近くにいたクローバーが、とつさにフニエの体を支える。フジがそこに慌てて飛んでいき

「ばあさんー！」

と呼びかける。

僕も駆け寄ると、フニエの手首を取り、脈を測った。

顔色は悪くない。脈拍も、呼吸も正常。

フジが突然元気になって、介護から開放された安心感から、疲れが一気に出たのだろう。

「エル、ベットに寝かすから手伝って。」

突然の状況にもかかわらず、クローバーは意外に冷静だ。

僕はクローバーと位置を代わって、フニエを抱き上げると、ゆっくりベットに寝かせた。

細くて、軽くて、少し力を入れたら折れてしまいそうな老人の体だ。

これが当たり前なのだ。それが生きるということなのだ。

「ばあさん、しっかりしろ、ばあさん」

フジの呼びかけに、フニエはうつすら目を開けた。

「ワシの面倒を見るのに、無理をさせちまったな。」

「いいえ…それよりも…じいさん、おなかはすいていないかい？」

フニエの言葉に、僕とクローバーは衝撃を受けた。

この夫婦は、あくまでこの先も、「日常」を続けていく気のようなのだ。

不老不死になろうとも、心労で倒れようとも、食べて、寝て、旅を

して、いつもの当たり前を続けていく。

その姿に、僕は複雑な感情を覚える。とても整理がつかない。

クローバーは、顔に手を当て、うつむいていた。溢れ出す感情の嵐を、押しえ込んでいるようにも見える。

「無理をするな！そんなのはワシが！」

「あら………元気だった時も、あなたが食事を作ってくれた記憶なんて私にはないけどね？」

寝込んでいるというのに、フジに負けず劣らず、フニエも口達者だ。

「……ああ！もう！今日は寝てなさいよ！あとで酒場から調達してきてあげるから！」

エナが2人の間に割って入る。

エナはこうなることを予見していたのだろうか？この夫婦の意思の強さを、始めから知っていてこの話を持ちかけたのか？

「……すまないね………」

フニエが力なく言う。

「あ、行くのは私じゃなくて、このふたりなので、お礼はそちらへどうぞ！」

急にエナに話を振られた僕とクローバーは、面食らってしまった。

クローバーは怒りを込めた目で、エナを睨み返したが、エナはその様子にまったく気がついていないようだった。

ここにいつまでも居るよりは、外に出て、新しい空気を吸った方がいい。僕はそう判断して

「……じゃあ、早速、酒場にふたりの食事をとりに行こうか？」

と言って、クローバーと一緒に、家を後にした。

第8話 エルの回想2

不老不死の村酒場は閑散としていて、僕ら以外に客はいない。いつもたくさんの人で賑わっている公国の酒場とは大違いだ。

この店の主人、ロックは、僕らが入ってくるなり

「冒険者がこんな田舎の酒場に何用だ」

と言つて、訝しげな顔をしていた。

フジが元気になった代わりに、フニエが倒れたので、2人の食事を取りに来たことを伝えると

「そうか……ついに、救済者の奇跡を受け入れたんだな」

と感慨深そうに漏らした。

酒場はどこかホコリっぽく、人が毎日行き来するような、空気の流れを感じない。

テーブルも、手前の方はよく使われている形跡があるが、奥の方はもうずっとそのままのようで、物置のようになっていた。

ロックが食事を用意している間、僕とクローバーは酒場手前のカウンターに座つて、少し話をした。

「気分はどうだい？」

「最悪だよ。」

クローバーが不機嫌そうなため息をつく。

「あの時、君を止めたこと、怒ってる？」

フジとケイトの間に、立ちはだかろうとしたクローバーを、僕は止めた。

これ以上何をして、無駄だと判断したからだ。あの時、誰がどう動こうと、フジは不老不死になっていただろう。

蓋を開けてみれば、あの場で、本当に救済者の奇跡を望んでなかったのは、僕とクローバーだけだったのだ。

一番部外者で、なんの関係もない、傍観者の僕らだけが、どうにかしようと、もがいていた。

なんとも滑稽な話だった。

「あの瞬間は殺してやろうと思っただけ」

確かに、あの時のクローバーの、瞳孔が開ききった目は、誰かを殺してもおかしくない目だった。

「でも、まあ、今は、しょーがないかなって思ってる。」

クローバーはそう言うと、甘えるように僕の肩に寄りかかってきた。

珍しい。

「なんだろう……これでいいはずじゃないのに……。なんで……。なんでなんだろうね。」

それがクローバーが今言葉にできる精一杯の気持ちなのだろう。

僕はそんな彼女を慰めようと、肩に手を回して抱き寄せようとしたが、おもいつきり振り払わられてしまったので、断念した。

こんなときでも、ガードがめちやくちや固い。

思わず笑ってしまった。

「できたぞ。このクロケットを届けてやってくれ。これなら歯の弱い年寄りも食べられるし、力もつくぞ！」

ロツクはそう言つて、食事の入った籠をクローバーに渡した。

「この村は、あの救済者のおかげで、賑わいを取り戻した。本当に彼女が来てくれて、よかったよ」

ロツクはそう言いながら嬉しそうに笑った。

確かに、この村は、ゆつくりと衰退を迎えているようだった。

それはこの酒場の様子を見るだけでも、明らかなことだ。

それを救済者たちが食い止めている。

この村で最初に見た光景を思い出す。僕が「狂気つて、こういうことを言うんだろうね。」と言ったあの光景だ。

あれが「賑わい」と呼べるものなのだろうか？

本当に、これでいいのか？

何が正しいのか？ 何か正しいのか？

僕はため息をついた。

いくら考えても、栓のないことのように思える。

クロケットをフジとフニエに届ける。

家に入ると、救済者もエナも帰ったようので、フジとフニエの2人は、

また言い合いをしていた。

「またケンカしてるね……。」

そう言ってクローバーを見る。

これだけケンカをしているのに、家の中は綺麗に片付いていて、手入れが行き届いている。ケンカの最中に開けた壁の穴も、壊れた備品も見当たらない。

つまり、そういうことなのだ。

「まったく、うるさいじいさんとばあさんだ。どっちもぽっくり逝っちゃえばよかつたんだ。」

クローバーが不愉快そうに呟く。

いつもなら注意するところだが、今日は7割くらい同意できたので、好きに言わせておくことにした。

フジとフニエの2人は、散々言い合ったあと、やっと僕らに気づき、食事を受け取った。

「あら、クロケット。ひさしぶりだねえ。さあ、じいさん、おなががいってるんだろ？ どうだい？」

「ふん。……こんなもの。いつものスープのほうがよっぽどうまいわ！」

「ふふふ……」

結局最後はこうやって惚気け話を見せられる。なんとという茶番だろう。

この夫婦は、ずっとケンカ漫才をやっているようなもので、それが2人のコミュニケーション手段なのだ。

傍から見れば、馬鹿らしくて、非効率で、疲れそうなものだが、それが2人の「愛」というものなのだろう。「けなし愛」とでも名付けようか。

クローバーは呆れ返って、首を左右に振っている。理解ができないらしい。

僕も、そういう心理はわかるが、理解はできない。

僕らは、ため息をつきながら家をあとにした。

第9話 エルの回想3

家を出ると、夕飯の香りが鼻をつく。

もうすっかり夕方になっていた。

人々はどこか忙しくなく、家路への帰り支度を始めている。

「(帰る家があるのはいいことだな。)」

どこか他人事のようにそう思った。

「どうやら、あの『救済者』という人たちは、本当にただの善人だった
ようね……。」

エナがそう言いながら、歩み寄ってきた。

もうとつくに帰ったものだと思っていたから、少し驚く。

それにしても、本当にあれだけで、救済者を善人だと言い切るのか。
フジとフニエが、「日常」を続けていく素振りを見せたとき、エナは
ここまで読んでいたのかと、驚いたが、どうやらそれは買い被りだっ
たらしい。

彼女は、本当に何も考えてないのだ。

行き当たりばったりで、結果がどうなろうと知ったことではないの
だろう。

今回は無理やりだが、丸く収まった。でも、いつもそうなるとは限
らない。

僕は、苦手なものや、嫌いなものはほとんどない方だ。

食べ物が好き嫌いだってないし、勉強も運動もそれなりにできる。

それに僕は、人を嫌いになれるほど、他人に興味がない。

でも、エナのことは嫌いだ。はっきりそう言える。

自分でも初めて気がついたが、僕という人間は、思慮深さが
ない人
が嫌いのようだ。

考えることを放棄している。または、考えることを重要と思っ
てい
ない。そんなやつが大嫌いみたいだ。

嫌いな人を前にしても、僕は表情を変えない。いつもの、にこやか
な笑みを顔に貼り付ける。

クローバーはというと、明らかに不機嫌な顔で、エナを睨み返して

いる。

「ごめんってば。あなたにお仕事を押し付けたことは謝る。」

クローバーの怒りは、そんな単純なものでは無い。もっと複雑で、言葉で言い表せないような感情だ。

エナはまったくズレているのだ。なにもかもが、どこかおかしい。

「私はちよつと劇場へお芝居をね……お芝居はね」

エナの目の色が少し変わる。

「交錯せぬ陰と陽、螺旋状に巻いて、やがては深淵に堕ち、収斂し、貫く隧道は両世界の新世界に通ず……」

「はあ?」

クローバーが不快そうに聞き返す。

何を言っているのか、さっぱりわからない。

エナは時々こうやって、気難しい言葉を無理やり使って、それを楽しむ癖がある。

ある国では、それを『厨二病』というらしい。ティーンエイジャーがよく罹る病だと聞いたことがある。

エナは、もうティーンなんて年齢ではない。1人の大人として、責任を問われる立場のはずだ。

しかし、いつまでも厨二病という病から脱出できないのは、彼女の精神年齢が幼いからだろう。

別にそれが悪いわけではない。厨二病も好きに楽しめばいいし、精神年齢が幼いなら幼いなりに、慎重に行動すれば、なんの問題もない。

エナにその自覚がなく、大人の行動力を持ったまま、子供のように振る舞うのが問題なのだ。

「なあってね!お芝居、ステキな恋のお話だったわ!」

最初は反発し合う冒険者と町娘だが、困難を乗り越えて結ばれ、反対を押し切り、最後は駆け落ちする話らしい。

その説明が、なぜあれになるのだ。

本当にさっぱりわからない。

「あんな恋にもあこがれるわ……」

そう言うエナの感想に、クローバーは

「へー。」

適当な合図打ちを返した。

僕は愛想笑いをしておく。

「ああ、でも……やっぱり……。私が冒険にほしいのは、胸を熱くさせるライバルね！」

「はあ……？」

思わず、呆れたような声を出してしまった。唐突過ぎて、流石に僕もついていけない。

「そのライバルはあなた！」

エナはそう言つてクローバーを指す。

クローバーはギョっとした顔をしている。あまりのことに、声も出ないようだ。

「それと旅路を共に行く相棒……。あつ！忘れてた!! マナを探さなきゃ……！それじゃ、またね！今度会う時には、もっと強くなってるのよ！」

エナは一方的にそう言い残すと、走り去っていった。

エナは嵐のような人だ。急にきて、僕らの心をぐちゃぐちゃにかき乱し、なんにも感じず、あつという間に去っていく。

「クロ？」

エナの走り去った方を見ながら、固まってるクローバーに、声をかける。

「ねえ、エル？」

「ん？」

「考えるだけ、無駄なのかな？」

クローバーは、なぜか悲しそうにそう呟いた。

「僕はそうは思わないよ。考えないで生きられたら、それは楽かもしれないけど、僕はそんな楽を享受できるほど、お利口さんじゃないからね。」

君もだろ？という思いを込めて、そう返す。

なにか返ってくると思っていたのだが、クローバーは、なにも返してこなかった。

そして、この時から、狂気のような戦闘の日々が始まったのだった。

番外編く海辺のクロとエルく

雪山と平原で、レモンを拾った。

「ハイボールに合成しようか？炭酸石もあるし。」

エルサイスはそういうと、クローバーが答える前に合成を始めた。

「ハイボールより、レモネードがいい。」

「レシピが無いからできないよ。」

錬金術師だからといって、エルサイスはなんでも作れるわけではない。
い。

エルサイスを含め、錬金術師の多くは『レシピ』を元に合成する。

その元となる『レシピ』を作れる先駆者は、ほんのひと握りの才能
を持った者だけだ。

そして、残念ながらエルサイスは、その先駆者ではない。

ハイボールは作れても、レモネードは作れない。

「お酒は好きじゃない。」

「クロはすぐ酔っちゃうもんね。いいよ、僕が飲むから。」

クローバーは自他ともに認める、下戸なのだ。気持ちよく酔う前
に、気持ち悪くなってしまうので、お酒は滅多に飲まない。

一方エルサイスは、ザルというより、沼だ。いくら飲んでも酔わな
い。

特にすることもなく、2人は平原を横切って、橋を渡り、神へ続く
道に入っていく。

「海でも見に行く？」

「なんのために？」

エルサイスの誘いに、クローバーは素っ気なく答える。

「海を見るのは楽しいじゃないか。」

「そうか？」

「正しくは、海ではしゃぐクローバーを見るのが楽しい。」

「お前時々馬鹿正直だよな。」

エルサイスは照れたように笑う。

「褒めてねーよ。」

クローバーは呆れながらも、海の方へと足を進める。
天気は快晴。歩いていると少し汗ばむような陽気だ。

ひねくれ天才錬金術師の家の前を通り過ぎ、裏手に回ると、砂浜へと続く道を下っていく。

「え？は!?今飲むの!？」

「まあいいかな?って思ってた。」

エルサイスは歩きながら、合成したばかりのハイボールを飲み始めた。空いた合成枠では、既に次のハイボールの合成を始めている。

「意外に行儀悪いんだな。」

「僕はそんなにいい子じゃないんだよ。」

「悪いやつって知ってたわ。」

エルサイスはクローバーの返答に肩をすくめると、ハイボールをゴクリと一口飲んだ。

海風が、2人の頬を撫でる。

クローバーは少し近づいてくる海に、高揚感を覚えたが、それがエルサイスにバレたら笑われると思い、踊る心を必死で隠していた。

エルサイスはというと、そんなクローバーの心の内はお見通しで、うずうずしているクローバーを見て、楽しんでる。

砂浜は白く、熱く、キレイだった。

「わーーーーー!」

どこまでも広がる青い海に、クローバーは思わず歓声をあげた。

それを見て、嬉しそうにニヤニヤするエルサイス。

「なんだよ。」

「別に。」

クローバーは一瞬迷ったが、エルサイスのせいで楽しめないのは損だと考え直すと、狩人の外套を脱ぎ捨て、海へと走り出した。

「さすがに暑いなー。」

この日差しに、エルサイスのソーサラーローブは厚すぎる。彼はクローバーが脱ぎ捨てた外套を拾うと、砂浜に座り込み、ステータス画面を開いて、軽装を探す。

暖かい日差しとは対照的に、海の水は冷たかった。クローバーはその冷たさに「きゃーきゃー」言いながら波と戯れている。

いつのまにか、コロセウムベストと、ジーニアスシューズの軽装に着替えたエルサイスが、その様子を目を細めて見ていた。

「エル！見て！魚がいる！」

そうはしやぐクローバーに

「釣り餌がないから釣れないね。合成枠空いたら作ってあげるよ。」

と、エルサイスが優雅にハイボールを飲みながら返す。

平和な時間だ。

エルサイスが砂浜に寝そべりながら、3杯目ハイボールを飲んでいるときだった、ほろ酔い気分で気持ちのいい酔いを楽しんでいたところに

「エル！見て見て！」

と、クローバーが声をかけた。

「んー？」

ふわふわした視界で、クローバーを捉える。

「え?!あれ?釣り餌は?」

クローバーの手の手で、立派なアルブマーリンがビチビチと暴れ回っている。

「素手で捕まえた。」

「……え?」

「え……?」

2人とも、顔を見合わせて沈黙。

次の瞬間エルサイスが爆笑した。

「なんだよもー。」

クローバーは不機嫌そうにそう言うと、アルブマーリンを海に離れた。

「だって、素手で魚を捕まえるなんて！」

エルサイスは笑いが止まらない。

「できるかなーってやってみたら、できた。」

「できちゃうクロはすごいよー！」

エルサイスは

「(野生児だね。)」

と思ったが、口には出さないでおくことにした。

クローバーは時々、ものすごく子供っぽくなる。子供のように、なんでも楽しめる。それは彼女の長所だろう。

その後も、2人はそれぞれたっぷり海を楽しんだ。

陽の光がだいぶ落ち着いてきた夕方には、クローバーは疲れて、両手を頭の後ろで組み、片膝を立てて砂浜に寝そべっていた。目は開いているが、トロンとしていて、眠そうだ。

その隣にはエルサイスがもう何杯目かわからないハイボールを飲みながら、座っている。

「気持ちいいね!」

エルサイスはそう言うのと、ハイボールを飲み干した。

「ねえ、私もレモネードが飲みたい。」

クローバーが不満そうに訴える。

「キスしてくれたら作ってあげるよ。」

「はっ。」

「そんなゴミを見るような目で見ないでおくよ。」

エルサイスはそう言うのと、愉快そうに笑った。

「どうせキスしたとしても、レモネードは作れないでしょ。」

「まあそうだけど。クロだって、どうせキスしてくれないだろう?」

「それはどうかかな?」

クローバーはそう言つて、イタズラっぽく笑ったが、エルサイスはまったく相手にしない。

クローバーがキスなんて絶対するわけないと、確信があった。

風が吹き、砂浜に砂埃が舞う。

エルサイスは目を閉じてそれをやり過ぎそうとした瞬間、頬になにか、冷たくて、柔らかいものが触れて、はっと目を開ける。

クローバーが顔のすぐ近くにあつて、心臓がドキドキする。

「え……生臭い……。」

エルサイスの頬に押し付けられたビーチフラウンダーは、ヌメヌメ

して、生臭く、弱々しく跳ねていた。

「びつくりした？」

クローバーはしてやったりの顔で、ものすごく嬉しそうだ。

エルサイスは真つ赤になる顔を抑えて、その場に崩れ落ちた。一瞬でもクローバーの唇を期待した自分が恥ずかしく、悔しい。

「そんなものどっから出したんだい？」

「さつき捕まえた。」

「素手で？」

「うん。」

エルサイスはもうお手上げだと言うように、大きなため息をついた。予想の遙か斜め上をいくクローバーに、手も足も出ない様子だ。

「まったく、君は本当に最高だよ…。」

「それ褒めてる？」

「どうだろうね…。」

「なんだよそれ。」

おもしろくなさそうに頬を膨らますクローバー。

このまま無理やり押し倒して唇を奪ってやりたくなる衝動を、必死で抑えるエルサイス。

両者の溝は思ったよりも深かった。

「そろそろ帰ろうか。」

エルサイスはよつとの思いでそう絞り出すと、立ち上がった。

「うん。」

クローバーはそう言うと、ビーチフラウンダーを海に離してから帰路につく。

海は夕日に照らされ、ルビーのように真つ赤に光っていた。

第10話 クロの思い

夢を見ていた。

船に乗って、川を渡る夢。

白い花びらが嵐のように舞っていて、少し息苦しいが、とてもキレイだった。

向こう岸に人が立っている。

白い花びらの中で、金色のロングヘアが揺れていた。

「エル。」

そう呼びかけたつもりが、声が出ない。

耳元で誰かが囁く。

「君も不老不死になるかい？」

ふと、夢から覚醒する。

覚醒した瞬間から、夢はどんどん霧散し、姿形も色も香りも、あっという間に失っていく。

残したいほどのものでもない。私は目を瞑ったまま、消散を受け入れた。

暖かい風が頬を撫でる。寝返りを打つと、瞼の裏に、太陽の強烈な光を感じて、思わず

「うっ……。」

と、うめき声を漏らす。

「クロ？起きた？」

そう言いながら、私の頭を撫でるのは、現実のエルサイスだ。

「(不躰なやつめ。)」

そう思ったが、まだ体は覚醒しておらず、振り払うことが出来ない。

「もうすぐお昼だよ。」

エルサイスは聞いてもいないことを勝手に話す。

「うーん……。」

私は曖昧な返事をする。

ふと、急に、瞼の裏の眩しさがなくなったので、私は恐る恐る目を開ける。

エルサイスが、覆いかぶさる様に、私の顔をのぞき込んでいた。「わっ!？」

あまりの近さに驚いて、私は慌てて体を起こす。「起きた？」

まったく悪気がなさそうな顔で、エルが微笑む。黒縁メガネの奥の赤い目が、イタズラっぽく光っていた。

わざとなのか、天然なのか、悩ましい。

こいつは本当に、いつも、ずるい。

パートナーとして、常に一緒に行動しているので、つい無防備なところを見せがちだが、油断すると、いつか間違いが起こってしまいうで、怖い。

そこは超えない紳士だと評価しているが、なんせ、何を考えているかまったくわからない男なのだ。

いつか押し倒されてしまうのではと、ビクビクしている。

「寝ぐせついでるよ。」

そう言つて、髪を触ろうとしたエルサイスの手を跳ね除ける。

エルサイスのことは、嫌いなわけではない。むしろ好きな方だ。好きだけれど、そういう好きではないのだ。

そこを間違えないための舵取りが、全部私任せになっている。

エルサイスは、私が拒否すれば、無理に近づいてこないが、気を許せば、どこまでも近づいてくる。

私の言動がそのまま2人の距離感になるのだ。その調整がすごく難しい。

エルサイスは、いつだつて私に拒否権を与えてくれているが、それは結局、彼自身の逃げ道でもあるのだ。

この関係を壊さないための逃げ道。

そして、それと同時に、彼は関係の舵取りからも逃げる事ができている。

なんてずるくて、臆病なやつなんだろう。

と言いながら、私だつて、その拒否権に甘えて、こんな中途半端な関係を続けているのだ。

エルサイスを一方向的に責められるものでもない。

私も結局エルサイスと同じ、ずるくて、臆病なやつなのだ。

急に起き上がったので、頭がクラクラする。顔を押しさえて、目眩をやり過ごす。

「大丈夫？」

エルサイスはそう言いながら、飲み物を差し出してきた。

素直に受け取ると、一口飲む。

なんともいえない独特の風味のする飲み物だ。

「なんだこれ。変な味だな。」

寝起きのかすれ声で言う。

「そう？ 僕は嫌いじゃないけど。アロエベラから合成したお茶だよ。」

もう一口飲んでみる。

やっぱり変な味だ。

エルサイスは、私の渋い顔を見て笑った。

少し強い風吹いて、エルサイスの金色のロングヘアが舞い上がる。

真上の風車が、ギシギシと音をたてながら回る。足元の芝生から、たんぽぽの綿毛が大空に飛んでいき、風車の影で見えなくなっていた。

乱れた髪を、慣れた様子でかきあげて整えるエルサイスに、既視感を覚える。

夢で見たのと同じような光景だ。

最後に聞こえた囁き、あれは確かに、エルサイスの声だった。

「不老不死か……」

フジのことがあってから、不老不死について、ずっと考えていた。

私は、戦いの中で傷ついたり、死んだり、復活したりしながら、死ぬことがないということが、どうしたことなのか、確かめようとしていた。

「クロは不老不死になりたいかい？」

夢と同じように、現実のエルサイスがそう聞いてきた。

「……。」

思いを巡らせる。

戦いの中で、私は何度も死んだ。そして、その度に教会で復活した。それが素晴らしいことだったかといえ、それでも無い。

死に慣れすぎた私は、死ぬ恐怖を感じなくなっていた。それは裏返せば、生きる喜びを感じなくなるということと一緒にだった。

生と死は、表裏一体なのだ。

緩慢に、そして永遠に続いていく毎日は、私から感情の起伏を奪い、何をしてても空虚な気持ちにさせる呪いのようなものだった。

永遠に時間があると、今しなくてもいいことが、多すぎる。それは結局、何もしなくてもいいことと等しい。

それが私の心を空っぽにする原因だった。

私にとって、死んでも復活できるという状況は、生きる喜びを失わせ、その苦しみをより顕著にしただけだったのだ。

「エル、この冒険者が受ける神様の加護という祝福はね、私にとっては呪いだよ。」

救済者が言う奇跡も、冒険者が受ける神様の加護も、聞こえはいいが、本質は呪いと一緒だ。

「私は死なないから、無茶をした。戦って、戦って。生きることのないがしろにした。」

エルサイスが黙って頷く。

「フジの爺さんがどう感じるかは、私にはわからないけど、少なくとも私に不老不死は合わないよ。私は『今』を生きたい性格なんだ。明日も明後日もずっとあると思うと、その『今』をサボっちゃうんだ。」

自嘲気味に笑う。

「だから、エルの質問の答えはNOだ。」

そう言ってお茶を飲み干した。

やっぱり美味しくない。

「次作る時は、紅茶にしようか?」

私の表情を察したエルサイスが、そう提案した。

「そうしてくれ。」

少しむせながら答える私に、エルサイスは笑った。

第11話 エルの思い

シュリンガー公国の酒場は、今日もたくさん冒険者で賑わっていた。

テーブルはどこもいっぱい、カウンターの中では、この酒場のマスター、チップが、鬼のような忙しさに目を回している。

「うん、うまい。」

私はそう言いながら、できたてのスタンポットを頬張った。

刻んだキャベツが入ったクリーミーなマツシユポテトに、少し辛口のグレイビーソースがマッチしている。添えられた自家製ソーセイジもジューシーで旨みが詰まって、最高に美味しい。

私の向かいで、エルサイスが、私の倍はありそうな量の食事を、あつという間に食べ進めている。

エルサイスは、身長は平均より大きい方だが、体重は普通位だと思う。どちらかと言えば、細い方かもしれない。

この食事が、一体どこに消えるのか、不思議でならない。

私が1人前のスタンポットを食べ終わる前に、エルサイスは食事を終え、「いちごパフェ」などというデザートを頼んでいる。

全身青で統一された、ソーサラーのローブを着た大柄の男が、ピンク色のかわいいパフェを食べるなんて、なんとも奇妙だ。

私が食後の紅茶を飲む頃、エルサイスはいちごパフェを食べていた。

「んー！美味しい！」

と目を輝かせる彼を見て、私は呆れる。

いったいどれだけ食べるつもりなのだ。

「あ、クロも食べる？はい、あーん」

私の呆れ顔を見て、何を勘違いしたのか、エルサイスはそ言うと、アイスといちごを乗せたスプーンを、こちらに向けてきた。

私は

「お腹いっぱいなので、お気になさらず。」

と言いながら、手で制す。

エルサイスは残念そうな顔をする

「クロは食べないから、そんなに痩せてるんだよ。」

と言いながら、スプーンを自分の口に持っていき、パクリと一口で食べた。

「人には適量ってものがあるんだよ。」

私は身長割には体重は軽い方だ。むしろ、痩せすぎかもしれない。

でも、私にとっては、このくらいが一番調子が良くて、一番動きやすいのだ。

それに、前衛として敵に向かっていく時は、身軽な方がいい。

お昼を過ぎれば、酒場も少し落ち着いてくる。閑散としてきたホールとは対照的に、カウンターの中では、チップが、今度は大量の洗い物に目を回している。

エルサイスは優雅に食後のコーヒーをすすっていた。

「ねえ?」

「ん?」

「エルはどうなの? 不老不死になりたい?」

「どうだろうね?」

すぐはぐらかす。こいつはいつもずるい。

不満の目で睨み返すと

「そんな目で見ないですよ。」

とエルサイスは笑った。

「そうだねー。僕もクロと同じかなー。不老不死にはなりたくないよ。」

エルサイスはそう言うと、テーブルに頬杖をつき、考え込むように目を瞑った。

「生きてるとき、楽しいこともあるけど、嫌なことも、辛いこともいっぱいあるじゃん。生きるってことは、その繰り返しな訳だけど……。いつか終わる楽しさだから大事にできるし、いつか終わる苦しさだからやり過ぎせる。まあそのへんの考えは、おおむねクロと一緒にだよ。でも本当はね……」

エルサイスは目を開けて、少しうつむいた。どこか悲しげな表情だ。

「そもそも僕は、なんで生きてるんだろうって考えた時に、その答えを持ってなかったし、別に答えが欲しいとも思わなかった。そうしたら、別に死んでも困らないなって思ってた。」

彼らしい答えだった。

いろんなものへの執着が薄い彼は、生きることへの執着すら薄いらしい。

「不老不死は、死にたくない人がなるもので、僕みたいな、死んでもかまわないって人には、必要ないものだね。」

「それって……」

「あ、死んでもかまわないからって、死にたいわけではないよ。」

エルサイスが、私の杞憂を一蹴する。

「今ちよつと心配してくれた？」

そう言っただけは笑ったが、ちつとも嬉しそうではない。困ったような、寂しいような笑顔だった。

時々エルサイスはこうやって、ロウソクのように、吹いたら消えてしまいそうな、儂げな表情をする。

普段は、殺しても死ななそうなの、それこそロウソクどころか、ガスバーナーのような強かさを感じるのだが、ふとした時に見せる弱さに、私は戸惑う。

エルサイスは、ヒラヒラ、のらりくらりなどという擬音が似合う。

裏と表、嘘と本当、強さと弱さ、両面を自由自在に操り、相手を翻弄する。

私はいつも惑わされてばかりで、どれが本当のエルサイスなのか、皆目検討がつかない。

エルサイス自身だって、どれが本当の自分の気持ちかなんて、わかっているのかもしれない。

嘘をついているうちに、どれが嘘で、どれが本当か、自分でもわからなくなってしまうたような、そんな不安定さ。

まるで迷子の子供のようだ。

難儀な性格だなと思う。

「まあクローバーが居てくれる限りは、死にたくはないかな！」
そう言って茶化す彼に

「お前は本当に馬鹿だな。」

と哀れみ混じりの本音をぶつける。

「酷いこと言うねー。」

そう道化のように笑うエルサイスに、1発げんこつをかます。

「痛っ!!」

殴られた頭を抱えて、うづくまるエルサイス。その目の端からは、涙が滲んでいる。

おもいつきり殴ってやったので、それくらいの反応が当たり前だ。ここで飄々と我慢するようだったら、泣くまで殴ってやろうと思っていた。

「せめてもの慰めだ。ありがたく受け取れ。」

私がそう言うと、エルサイスは、はっとした顔になり、最後ははにかむように笑った。

第12話 意見のすり合わせ

私も、エルサイスも、不老不死にはなりたくない。

では、フジはどうだったのだろうか？

彼は『また元気になって旅に出たい』とは、いったが、『不老不死にになりたい』といったわけではない。

本当にこれで良かったのか？

それは私も、そしてエルサイスも、自分と向き合う過程で考えてきたことだった。

酒場を出ると、冷たい風が頬を刺す。

「さっむ。」

シユリンガー公国は、冬の雪と、春の桜が共存する、不思議な国。

その景色は美しいが、桜が咲いているからと言って、暖かくはなく、季節は雪が降る冬そのものだ。

街ゆく人立ちは分厚いコートに身を包み、しっかり防寒対策をしている。

一方私が着ている、ワイルドローアの服は、布面積が幾分少なめで、腕も足も、そしてヘソまで出てしまっている。

この冬の国では、かなり浮いている軽装だ。

「風邪引くよ。」

エルサイスはそう言いながら、後ろから抱きつく仕草を見せた。

私はそれを拒否するように、エルサイスの顔に手を押し付けて、跳ね除ける。

「うぐっ。」

エルサイスが呻く。

こいつは隙があればすぐこれだ。危ない。

私は街の外へ駆け出す。

公国を出て、雪山と平原に出してしまえば、寒さはそんなに厳しくない。

思った通り、草原には、春のような暖かい風が吹いている。

私とエルサイスは、無言のまま、草原をフラフラ歩いた。

無理に言葉を交わさなくても、気まづくなることはない。気を使わなくていいので、ほっとする。

公国を出て、まっすぐ歩いていくと、川に辿り着いた。そのまま川辺に沿って歩みを進める。

エルサイスも、黙って私に付いてくる。

滝が見えてきたあたりで、私は腰を下ろした。

顔にかかる、僅かな水しぶきを楽しむ。

すぐ後ろの道をまっすぐ行けば、不老不死の村だ。エルサイスがそっちの方を見ながら

「クロはさ、あの夫婦のこと、どう思ってる？」
と聞いてきた。

あの夫婦とは、フジとフニエのことだろう。

「うーん。嫌いではないかな？多分。でも、よくわからない。エルは、どう思うの？」

そう聞きながら、エルサイスの顔を見上げる。

「僕？僕はね……。」

エルサイスはそう言いながら、私の隣に腰を下ろした。髪が、私の肩に触れて、くすぐりたい。

「不老不死になっても、フジさんは変わらなかった。フニエさんもね。あの2人は、どうなっても「日常」を続けて行く気だった。僕はそれは、素晴らしいことだと思うよ。」

べた褒めだ。

「まさに、健やかなるときも、病めるときも。だ。」

私は結婚の誓約を口ずさむ。

「そうだね。その覚悟とか、意思の強さとかに、僕は圧倒されたし、長年付き添ってきた、2人の愛を感じたよ。」

私もそうだった。すごいと思ったのだ。

「でも……」

そう、でも、なのだ。

「でも、あの2人は、本当に不老不死のリスクを理解した上で、そういう覚悟を持ったのか、僕はそこが疑問なんだ。」

「うん。」

2人は不老不死について、本当によく考えたのだろうか？
それがずっと引っかかっているのだ。

「私はね、思うんだ。」

そう言いながら、私は両手を上げ、ぐぐつと伸びをすると、後ろに倒れ込んだ。

仰いだ空は、雲ひとつなく、澄み切っていて、とても綺麗だ。

「考えたとしても、考えきれるものじゃないなってさ。」

「だからって、考えないって言うのかい？」

珍しく、不愉快そうな顔をするエルサイス。それだけ真面目に、この問題に向き合っているのだ。

「そういう意味じゃない。考えたり、悩んだりすることは大事さ。私とエルみたいには、空虚な気分になるかもとか、色々考えたかもしれない。でも、ある程度考えたら、もう踏み切るしかないのになって。」

不老不死は不可逆的なもので、1度なったら戻れない。かと言って、いつまでも迷っていれば、死というタイムリミットが待っている。「妥協論的な？」

そう言って、私の横に、エルサイスが寝転がる。

「命に妥協するのは、馬鹿馬鹿しいけどね。でも実際なってみないとわからないことだってある。」

エルサイスは納得していない様子だ。

しばしの沈黙。滝の水音だけが響く。

先に口火をきいたのは、エルサイスだった。

「なんかさ、僕らは、見当違いな考えをしてるんじゃないかって。」

「見当違い？」

「うん。そもそも、フジさんとフニエさんは、救済者側から、不老不死について、十分な説明を受けてるとは思えない。」

それは、私も、エルサイスも、エナも同じだった。

「その時点で、あの夫婦は、不老不死について、正確に考える機会を持って無かった。」

確かに、そうだ。

全ての取引はギブアンドテイクだ。

リターンにはリスクが、リスクにはリターンがある。

救済者側は、不老不死というリターンの話はするが、リスクの話はしなかった。

「でも、フジさんとフニエさんは、リスクを無視してでも、不老不死になる覚悟があったのかもしれないよ。」

あの仲の良い「けなし愛」夫婦だ。その可能性は十分ある。

私の意見に

「だとしても、救済者側からちゃんと、リターンを得ることで起こりうる、リスクの説明を、きちんとすべきだと、僕は思うんだ。」

と、エルサイスが反論する。

それが人間としての誠実さということだ。

「救済者が本当の善人だと言うなら、そうでないとおかしいってことか。」

そう私が言うと、横でエルサイスが「うん」と頷く。

「最初は、熟考しない夫婦に問題があると思ってたけど」

「きちんと説明しない救済者たちの方が問題か？」

エルサイスの話を、私が途中で引き継ぐ。

「そうだと僕は思うよ。情報が揃ってないまま、考えさせられて決めたことの責任を、2人に求めるのまあまあ酷な話だよ。」

エルサイスはそう言いながら、両手を空に向けて、伸びをする。

「まあリスクなんて本当に無いかもしれないけど。」

「リスクが無いなんて、1ミリも思っていないだろ。」

そう突っ込んだ私に、エルサイスは苦笑いを返すだけだった。ごまかされた感が拭えない。

「で、どうする？」

エルサイスが、起き上がりながら、私に聞く。

「何が？」

私も、お腹に力を入れると、勢いよく起き上がる。

「不老不死のリスクについて、調べてみるかい？」

エルサイスが、真紅の目を細めながら、イタズラっぽく笑う。

私は後ろを振り向き、不老不死の村へと続く道を見つめた。

第13話 真夜中の襲撃者

僕は壁に寄りかかり腕くみをしながら、噴水のある広場を見下ろし、外の様子を伺っていた。

クローバーは、両手を頭の後ろで組み、片膝を立ててベツトに寝転び、天井を仰いでいる。その目は開かれていて、眠そうなどころか、獲物を探すような鋭い光を放っていた。

部屋のランタンの灯が、ジリジリと燃える音だけが聞こえる。静かな夜だ。

数時間前に、不老不死の村を訪れた僕とクローバーは、救済者のテントの前で、この村の酒場のマスター、ロックに会った。

「おや、あんたら久しぶりだな。」

ロックは、酒場のマスターには似つかわしくない、筋骨隆々の体格をしている。特に腕は丸太のように太く、素手で熊を倒せそうな見た目だ。

僕は思わず自分の腕と見比べる。

腕相撲をしたら、多分僕の腕は、折られてしまうだろうと思う。

「最近夜になると、魔物が出るようなんだ。」

「魔物？」

クローバーが聞き返す。

「それも、人間が襲われるんだと」

「ここら辺の魔物はどれも穏やかな方で、畑や作物を荒らすくらいのことにはするが、積極的に人を襲う種は少ないはずだ。」

「それは変だなあ……」

「そういうクローバーに、僕は」

「救済者や不老不死と何か関連があるのかも……。」

と小さく耳打ちする。

ロックに聞かれてしまわないよう気をつけた。

「まあ、夜は外に出ず、うちの宿にでも泊まっておくこつた。」

そう言って去ろうとしたロックだったが、何か思いついたように、

立ち止まった。

「ん！そうだ！お前、腕は確かか？」

僕とクローバーは顔を見合わせる。

「救済者のおかげで、うちの村人は誰一人として死んではいないんだが、観光客が死ぬとなると、村としても非常に困る。できたら、その魔物を退治してほしいんだが……」

僕は「どうする？」と言うように、クローバーを見る。

クローバーは口元に手を当て、考えている。

僕らは不老不死のリスクについて調べにきただけで、魔物退治にきたわけではない。

しかしながら、この魔物が、不老不死と一切関係ないとも言いきれない。

悩むクローバーに、ロックは

「観光客が増えたおかげで、村は比較的財政も安定しててな、礼もある程度は用意できるぞ。」

と続けた。

失礼だが、こんな貧相な村が用意する礼など、クローバーにとっては、はした金にしかない。

伊達にエリアボスを鬼のように狩ってはいない。討伐報酬で少ないお金を稼いだし、定期的にドロップアイテムをマーケットに流して、それなりに儲かっている。

クローバーが悩んでいるのはそこではない。

「おい！あんた！未来ある若者を、前の用心棒のように捨て駒とする気か!？」

そう言っただけで会話に割り込んできたのは、あの不老不死になったフジだった。

「ああ……あれは俺が選択を間違ったんだ。この2人なら、冒険者だから死ぬことはないさ。」

そうフジに返すロックに、違和感を覚える。

クローバーも、僕にだけにしか聞こえない小さな声で

「なんか嫌な感じだな。」

と呟いた。

「死ぬことがないというだけなら、村人の我らが退治すべきじやろう。安易によそ者に頼むとは……浅はかな！」

フジは怒鳴ってばかりで口うるさく感じるが、言っていることは中々正論だ。

「ああ！気分が悪くなった！ワシは帰る！」

フジはそう言っつて、大げさに足を踏み鳴らし、不愉快を表現しながら去っていった。

「あのじいさん、奇跡を受けてからすっかり元気になってな。今じやすっかり力をもて余してるみたいで、ますます口うるさくなりやがった。」

それは大変だなと思う。

「あれ以上うるさくなれることがあるの？元気になったんだから、さっさと旅にでも出ればいいのに。」

クローバーが呆れ返ってたように言う。

「フニエさんの元気がなくてな。」

「あれからあまり良くなってないんですか？」

僕の問いかけに、ロツクはうなずく。

「フジのじいさんは食事をしに、たびたびこの酒場に来るんだが……。」

フニエは酒場に行く元気もないらしい。

「魔物を退治してくれるなら夜まで待ってくれ。それまでうちの酒場の2階を使うといい。宿になってるから。」

僕はもう一度、「どうする？」と言うようにクローバーを見る。

クローバーは何も言わず、決意を込めた表情で、ただまっすぐ前を見ていた。

静かな夜は続いていた。

僕はずっと窓の外を見ていたが、特に人通りもなく、動くものはいない。

酒場の上にある宿は、狭くて、少しホコリっぽい。部屋の大部分を

2つのシングルベッドが占領していて、床が見えるのは、出入口付近と、僕が今立っている窓辺だけだった。

クローバーは僕のすぐ傍のベッドに寝そべっていた。

狭いので、距離が近く感じる。ひよいつと手を伸ばせば、その柔らかな肌に触れそうだ。

僕は邪念を振り払うように、ファントムロッドを握り直す。

何かあった時のため、いつでも戦える準備はしてある。

クローバーは相変わらず、ベッドに寝そべっていて、今は目を閉じているが、寝ていると言うより、耳をすましているようだった。

部屋の出入口には、クローバーが愛用している青色の大剣、デモンブレイドⅡアビスが立てかけられてる。禍々しい意匠の大剣は、伝承にある深海の神の再降臨を願うものらしい。柄元には、目玉の様なものが刻まれていて、ギョロリとこちらを睨んでいるようにも見える。

「キヤーっ！」

静かな夜を引き裂くような悲鳴。

「何か声が聞こえた？」

そう僕が確認する前に、クローバーは素早く起き上がると、大剣を担ぎ、あつという間に外へと飛び出して行った。

僕も急いでその後を追う。

「魔物がでやがったぞ。」

階段を駆け下り、外に飛び出すと、ロツクがいた。

「すでにひとり、やられちまったようだ。魔物は入口の方に向かったぜ！」

その話を聞いているのか、聞いていないのかわからないが、クローバーは村の入口へと走り出していった。

「エル！人が倒れてる！」

暗がりの向こうで、クローバーが叫ぶ。

駆け寄ると、男が1人倒れていた。

「この男は……？ああ、そうだ、昼間、奇跡を授けてもらうって言ったヤツだ。あいつがどうしてここに……。」

ロツクがそう呟く。

「クソっ！魔物はどこに行っちゃ!?!」

「ぐるるうう……」

静かな夜にこだまするロックの声に混じって、魔物の呻き声がする。

クローバーはその声を頼りに走り出す。

「クロー！1人で行くって危ないよ!」

僕の制止をまったく聞くことなく、クローバーは走っていく。

速い。

僕はその背中を追いかけるのがやっとだ。どんどん離されていく。

クローバーは猫だ。

そのしなやかさと速さは、獲物をハントする猫そのもの。

「(あと、かわいさも。)」

そう思いながら1人で笑う。

まだまだ余裕だ。

村の入口へ続く、坂をかけ登っていた時だった。

前を走るクローバーが叫んだ。

「敵視認、距離20m、単体。パターン!」

戦闘に必要な情報だけを、淡々と伝えるクローバー。

「人間だな！血を……血をよこせ！肉を食わせろ!」

僕から姿は見えないが、魔物がそう叫ぶ声がする。

「攻撃開始。」

クローバーはそう短く言うと、自分の身長よりある大剣を振りかざし、月夜に舞った。

第14話 月夜の戦闘

走りの勢いを利用して、魔物の手前5mのところまで踏み切り、飛び上がる。

今宵は満月で、夜でもそれなりに明るく、視界は悪くない。

夜空に舞いながら、剣を振り上げ、下を見ると、魔物と目が合った。窪んだ目と大きな鷲鼻、異様に長い手、ブツブツした肌、痩せた巨人のような姿、オーガ族だ。

落下しながら、頭を狙って剣を打ち下ろす。スカルティガーの一撃。

入ったはずだが、手応えが薄い。肉を切った感じがしない。金属に弾かれたような感覚だ。

「かてえ！」

そう叫んで、エルサイスに報告する。

普通のその辺にいるオーガとは格が違うようだ。突然変異の亜種だろうか？

着地は成功。バックステップして、距離をとる。

「1.5秒だけ弱体化させるよ。」

やっと追いついたエルサイスが、そう言つて、魔法の詠唱を始める。

「(あんなに食べるから走れないんだ。)」

そう思いながら、次の攻撃の準備をする。

夜の冷たい風が頬に吹き付け、走った時に出た汗を冷やしていく。

しかし、寒さは一切感じない。

気分は高揚していて、むしろ熱いくらいだ。アドレナリンが出ているのを自覚する。

あたりが一瞬真っ暗になり、魔法陣が浮かび上がった。エルサイスの魔法、グランドクロスだ。

グランドクロスには、敵の物理・魔法両方の、攻撃力、防御力を下げ効果がある。

グランドクロスの光が魔物を貫いた瞬間、私は連続でスキルを叩き込む。

剣全体を凍らせて敵を貫く、氷晶刃。

水の力を纏った剣戟、流水剣。

どちらもオーガ族の弱点属性で、発動までの時間が短い単体スキルだ。

「攻撃予告あり。」

「了解。支援するからヘイト上がるよ。」

エルサイスが詠唱に入ると、魔物がそちらを向く。

エルサイスの使う全体魔法や補助魔法は、私の単体攻撃に比べて、ヘイトが高い。すぐ敵に狙われてしまう。その割に、彼は紙装甲なのだ。

「こっち向けー！デカブツ！」

プロヴオーグで挑発して、無理やりこっちを向かせる。魔物の目が、怪しく光って、私を捉える。

「ハニー」

剣を構える。恐怖は1ミリも感じない。むしろ気持ちがいい。私は戦っている。生きている。

私が前衛で、エルサイスを守りながら攻撃し、エルサイスが後衛で、私を支援しながら援護する。

それが2人の戦闘スタイルだった。

両手を振り上げるオーガ。

そこに、エルサイスのスペクトラルパウダーが滑り込む。光のカーテンが私を包み、物理防御力と魔法防御力をあげてくれる。

最高のタイミングだ。

魔物は、両手をめちやくちやに振り回し、連続攻撃してきた。

オーガの爪が、何度も私を襲ったが、被害は少ない。肌の表面に小さな傷がついた程度だ。

戦闘において、パートナーとの連携は、最重要事項だ。連携がうまく取れないと、戦闘が長引き、肉体的にも精神的にも消耗が激しくなる。

前に一度、エナと共闘する機会があった。

あの時は本当に最悪だった。思い出すだけで吐き気がしてくる。

簡単なボスのはずだったのに、まったく連携がはかれず、ものすごい苦労したのだ。

私が前衛で前にいたら、エナが私より前に出てきたり、後衛にスイツチするため下がったら、エナも下がってきたり、エナが指示を出すので、それに従っていたら、「自分で動いてよ」と怒られたり、もう本当に何がしたいのかまったくわからなかった。

挙句の果てにエナは「ふふ……この疼き！まさに生命の軌跡！」「闇の炎に抱かれて深淵に消散しなさい！」などと意味不明なセリフを吐き始め、事態をさらに混乱させた。

結局、見かねたエルサイスが助太刀してくれて、なんとか倒したのだ。

前に出たいのか、下がりたいのか、指示したいのか、されたいのかだけでなく、攻撃のタイミング、防御や支援、ヘイト管理などなど、様々な情報を共有し、お互いのしたいことと、してほしいことを考え、実践するのが、連携だ。

もう何千回と一緒に戦ってきたパートナーとの共闘は、余計なことを一切考える必要が無い。

基本的に、エルサイスは私の背中側にいるので、その姿を視界に収めることはできない。

でも、その存在はたとえようもなく身近に感じる。

考えていることも、何をしようとしているのかも、どうしてほしいかも、すべてを共有している気になるのだ。

私は、それが心地いい。

1人ではないと、仲間がいると、実感できる。

そんな理由で戦闘を好むのは、頭がおかしいといわれるのだろうが、そうやって誰かに接続できる術を、私はここにしか持っていないのだ。

エリアボスを狩りまくった戦闘狂の日々だって、生き続けることの絶望を確かめながら、1人ではないという希望に縋っていた。

こんな下らない承認欲求に付き合わされるエルサイスも、かわいそうだなと哀れみながら、自嘲する。

私は、振り返らない、迷うこともない、思う存分、剣を振り回す。攻撃された反撃に、魔物の脇腹にオーシャンリτζを叩き込む。いい手応えだった。

少しバランスを崩したので、2、3歩下がって体勢を立て直す。ふらついている私の後ろから、エルサイスがウオーターヴェインで追撃を加え、援護してくれる。

「攻撃予告あり。」

「ごめん、クールタイム中。耐えて。」

エルサイスが淡々とそう言う。

できないことを、できないとはつきり言う。それも大事なことだ。

「がってんしうちー！」

私は構わず突っ込んでいく。

エルサイスがファイバーフロウを唱える。一時的に武器の強度が上がり、物理攻撃力が高まる補助魔法だ。

デモンブレイドⅡアビスの刃が黄金色に光る。

いい支援だ。これならあと一撃でいける。

魔物の両手が振り下ろされる。

焼け付くような痛みが、右頬から肩、腕と走っていく。肌が破け、血が吹き出す。

それでも、一切怯むことなく、剣を振るう。

「これで最後だ！」

地を這う水の一撃、ウオーターズラツシュ。

「ぐわああああああ」

魔物は、断末魔をあげると、倒れた。

第15話 不老不死の対価 その1

バックステップして、魔物と距離をとる。

エルサイスが私の位置まで走ってきて

「大丈夫？」

と声をかける。

私はまだ塞ぎきらない傷から血を拭いながら

「大丈夫。」

と答えた。

魔物は苦しそうに顔を抑えながら

「ぐうううう」

と弱々しく呻いている。

その声に、私は嫌なもの感じた。言葉に表すにはまだ不明瞭な、予感のようなものだ。

「クロ、とどめを。」

エルサイスが杖を構えながら言う。

でも、私は動けなかった。頭の中で警告音が鳴っている。

警告音の中で、事実が回り回って、1つの結論を出す。パズルのピースがハマるような感覚だ。しかし、そこにひらめきの快感はない。むしろ、絶望の扉を開いてしまったような苦痛があった。

「どうしたの？」

訝しげに私を見つめるエルサイス。

私は剣を構えることもできず、ただ立ち尽くしていた。

「逃げた……！あっちにはフジさんの家が！急がないと！」

エルサイスがそう言うのが早いか、魔物は村の奥へと逃げた。逃げた。

気持ちが悪い。私はその場に膝をついて、こみ上げる吐き気を我慢した。

エルサイスが屈んで、私の背中をさすってくれる。

「クロ？大丈夫？」

とどめを刺さなかったことを、エルサイスは責めなかった。ただた

だ、私の様子を、戸惑いながらも心配してくれている。

「ごめ……ん。」

なんとか、そう絞り出す。

「いいよ。どうしたの？」

戦いの高揚感はきれいさっぱり消えていた。アドレナリンも切れ、傷の痛みを思い出していた。

「ああエルの言った通りだよ……。」

すっかり冷めきった思いでそう漏らす。戦いはあんなに楽しかったのに、本当に台無しの気分だ。

この魔物の話を聞いた時、エルサイスは「救済者や不老不死と関係があるかもしれない」と言った。

その関係に、私は気づいてしまった。

「どういうこと？」

「それを今から、確かめに行こう。」

魔物のあとを追って、階段を下り、村の奥へと足を進める。

走りはしない。早歩きくらいの速度で向かう。

エルサイスは何も言わずに、黙ってついてくる。

エルサイスは、私を問い詰めたり、疑問を挟んだりしない。

私はそれが嬉しかった。私のことをちゃんとわかってくれてる。

私が出したこの結論を、私の口から説明できる自信はない。

フジの家の前には、ロックが立っていた。

「お前が欲しいのはこれかー！」

ロックはそう言うと、肉を焼いた料理を魔物に差し出した。

「ぐるうううう」

魔物は声にならない叫びをあげながら、ロックから料理を奪うと、貪るように食べ始めた。

「あぶないー！」

どこからともなく、急にエナが現れて、ロックと魔物の間に立ち塞がり、魔物にとどめを刺そうとした。

「待ってくれー！」

「エナ！待ってー！」

私とロックが止めに入る。

その刹那、魔物を紫色の邪悪な霧が包んだかと思うと、魔物の姿は消え、フジがそこに立っていた。

「そういうことか。」

エルサイスは納得したように呟いた。私の行動の意味が理解できなかったようだ。

「……じいさんに、とどめを刺すのは、やめてくれないか。」

ロックがエナに言う。

「魔物の声を聞いた時から、なーんか嫌な予感がしたんだよ。どっかで聞いたことある声だったから。」

私は受け入れ難い事実にも、顔を歪めながら言った。

「……どういふこと？」

エナはそう戸惑いながら、剣を鞘に収める。

「すべては等価交換で成り立っている。無限の命を保つためには、命を食らう必要があるのさ。」

ロックはそう言うと、フラフラしているフジの体を支えた。

「ワシは、なにをやっていたんじや？」

いつもの威勢はどこへやら、フジが弱々しくロックに尋ねた。

「なあに、ちよつと肉が不足しただけさ。ただな……」

「何をしたのかは、皆まで言うな」

フジはそう言うと、うなだれた。

魔物になった時の記憶は、ちゃんとあるのだろうか？無かったとしても、感覚として残っているのかもしれない。

ボコボコに切りつけたことを、少し後悔するが、不可抗力だ。仕方ない。

「ばあさん？」

ロックの声に、みんなそちらを見た。

家の前に、フニエが怯えた様子で佇んでいた。

「ああ、村長さん……魔物は、どうなりました？」

そう聞いたフニエから、私は目を逸らした。

とてもじゃないが、私の口からそれをフニエに報告することはでき

ない。エルサイスも、黙っていた。

「無事でよかった。まあフニエさんは気にしないでいい。」

村長と呼ばれたロックは、そう言っつて、フジをフニエに引き渡した。ロックの適当過ぎるごまかしが、フニエに効くとは思えない。2人は今夜中に、むしろ家に入った瞬間に、この異常な自体に気づくだろう。

「どうするつもりなんだろうね。」

エルサイスが、私にしか聞こえない小さな声で言った。

「どうにもならんさ。」

私は気のない返事をした。

世の中どうにもできないものばかりなのだ。その先を考えるのは、フジとフニエであつて、私たちが予想したところで、意味はない。

「あとは、この村の問題だ。気になることがあるなら酒場で聞こう。」

不老不死の村の村長ロックは、そう言つたと酒場へ帰つていった。

第16話 不老不死の対価 その2

酒場は相変わらずホコリっぽかった。

しかし、前来た時よりは片付いていて、奥の物置みたいだったテーブルたちにも、クロスがかけられ、それなりに使用している様子が伺える。

私とエルサイスは、手前のカウンターに腰を下ろすと、ロツクからミルクの入ったマグカップを受け取った。とりあえず一息ついて落ち着く。

「クロ、傷はもう大丈夫?」

「うん。もう治った。」

戦闘が終われば、受けた傷はみるみるうちに治っていく。これも冒險者が受ける神の加護の1つだ。

私はマグカップに口をつけると、1口飲んだ。ほのかに甘い。なんだかほつとする。

「まさか、じいさんが魔物だったなんてね」

あとから入ってきたエナが、シヨツクを隠しきれない様子でそう言った。

元はと言えば、フジを魔物にした一因は、エナだ。そうなると知らなかったとはいえ、救済者のリスクを鑑みることなく、安易にフジに奇跡を受けるよう迫った。

その結果がこれなのだ。

エナはこれで、あの時のことを後悔してくれるだろうか?間違ったと認めてくれるだろうか?

そんな期待が心を過ぎしたが、すぐ押しつぶす。

きつとエナはそのままだ。これまでもそうだったように、これからもそうだろう。

私はこの友人とも呼べない隣人に、早々に見切りをつけた。

「じいさんは野菜とイモしか食ってなかったからな。たまに肉も食わなきゃ、ああなつちまうつてことさ。」

ロツクはそう言って、ため息をついた。

「この件は、くれぐれも口外はしないように頼めるか？」
ロツクの頼みに

「そんなことできるわけないでしょ！危ないじゃない！」
とエナが反論する。

「まあそりや公表したくなるよな。こんな重大なこと秘密にするのは
フェアじゃない。」

私もその案にのる。

「そりや困ったな……」

ロツクはそう言うと、考え込むような仕草を見せた。

「何が対価なのかはずつと気になっていたんだが、まさか肉を食べる
こととは意外だったよ。」

「え？村長さんも知らないで奇跡を受けてたんですか？」

エルサイスが信じられないと言うような声を出した。

ロツクはコクン頷いた。

「人間を魔物化し、永遠の命を得る。対価は、ほかの生きとし生けるも
のの魂。人間つてのは勝手だな。生きるために動物の肉を喰らう。
奇跡を使うと、その魂も共に喰らうようになるだけのことさ。悪いこ
となど何も無い。」

そう開き直るロツクに、違和感を覚える。

「それは結局結果論ですよね。」

エルサイスが厳しい声を出す。

「もし対価が、ほかの人間を食べなければいけないというものだった
ら、どうするつもりだったんですか？そのリスクはあつたはずです。
あなた方は、誰一人対価が何なのかわからずに奇跡を受けた。その危
険性がわかりますか？」

リスクを隠すことで、別のリスクが生まれる。

もつとひどいことになっていたかもしれないのだ。

「異常だと思わないの？」

エナが責めるようにロツクに詰め寄る。

「エナ、責めるのはいいけど、あなたもそつち側だよ。リスクを見てな
かったんだから。」

そう言っではみたものの、エナには暖簾に腕押しだった。私の話を聞いてはない。

エルサイスが「もうほつときなよ」と言うように、私の肩に手を置いて、制止する。

小さなため息をついて、気持ちを切り替える。

「思わないな。救済者がここに滞在し、その力を求める人間が押し寄せる限り、村には利益がもたらされる。」

ロックは自信たっぷりと言う。

「ならば、それは正しきことだ。」

「それがこの村の正義か。」

私は肯定も否定もしない。

「それ、ちよつと勝手すぎじゃない？そうやって人間を魔物にし続けて、何が生まれるの？」

エナが食い下がる。

「世界から見て間違っていることをしていたとしてもここは狭い村だ。村の中で正しければ、そこに暮らすものにとつての全てなんだよ。」

ロックの言っていることは一理ある。しかし、それは理論として破綻していないと言うだけで、それを容認できるかどうかとはまた別の問題だ。

「このことを知っているのは、私だけじゃない。じいさんも、ばあさんもみんな知ってるさ。」

沈黙が過ぎた。

エナは何も言い返せないようだ。そのまま不満げな表情で、乱暴にドアを閉めると、酒場から出ていった。

私もそれなりに子供っぽいところはあるが、エナも大概だ。相手にしてられない。

「報酬はこれでいいか？」

ロックはそう言うと、いくらばかりかお金をくれた。そこまでお金には困ってないが、仕事に対する賃金として受け取っておく。

「まあ今日のところはゆつくり休むといい。」

ロツクの言葉に甘えることにしよう。
色々ありすぎて、今日は疲れた。
私は眠い目を擦りながら、宿への階段を登っていった。

第17話 眠りにつく前に

「はー疲れたー。」

クローバーは部屋に入るなりそう言うと、目の前のベットに倒れ込んだ。

「そっち僕のベットじゃないの?」

魔物退治に行く前、クローバーは窓側のベットに寝ていたので、そっちを使うと思っていた。

「どっちだっていいじゃーん。気にするくらい潔癖でもないでしょ。」

クローバーはそう言うと、デモンブレイドⅡアビスを床にほおり投げた。

「もつと大事に扱いなよ。」

僕はそれを拾うと、壁に立てかける。

狭い通路を通って、窓側のベットに腰掛けると、髪をかきあげながら、深いため息をついた。

さすがに疲れた。

クローバーに倣って、仰向けにベットに寝転ぶ。

ばふんという音と共に、ホコリが舞い上がったが、意外にも、布団からはお日様の匂いがして、気持ちが悪かった。

「はー。」

隣から、クローバーのため息が聞こえてくる。

「なんとも言えない事件だったね。」

「うん。」

救済者が起こす奇跡とは、人を魔物化することだった。魔物化すると、不老不死になれる。その代わり、定期的に肉を食べなければ、人間の姿を失い、本物の魔物になる。

そんなことよく思いつくなど感心してしまう。

「エルはどう思う?この村のこと。」

僕がクローバーにそう聞こうと思っていたのに、先に聞かれてしまった。

「うーん。」

クローバーはベットに座り直すと、もぞもぞしながら狩人の外套を脱いでいる。

「この村の今のことだけを考えれば、そりゃいいんじゃない。人々が喜ぶ、村も潤う。万々歳だね。」

この不老不死の村にとって救済者は希望だ。少しずつ衰退していく村を救う正に救世主。

ただそれは、嘘と偽りと欺瞞で歪んだ上での希望だ。

「まあ長く持つとは思えないよ。」

歪みはいずれ、どこかで決壊する。その決壊が、この村だけの問題で収まるとは到底思えない。

これは世界規模の、生命に対する冒瀆なのだ。

「エル、私はね、ここにはこの正しさがあるのはわかってるよ。」

クローバーはそう言いながら、ロウポニーの髪を解き、頭を振った。伸ばしている襟足の髪がふわふわと部屋に舞う。

「でも、私がそれに従う義理はない。人の口に戸は建てられないよ。」
「不老不死の秘密を公表するのかい？」

「さあどうだろう？公表したところで、信じないやつはいるだろうし、奇跡を受けるやつも減らないかもしれない。この奇跡そのものを止めさせない限り、魔物化する人は増え続けるよ。」

「じゃあ？魔物化するのを止めさせるかい？」

そんなことができるだろうか？

もし止めさせるとなれば、この村と、新興宗教団体を敵に回すことになるだろう。

「そんなことはできないさ。」

クローバーはそう言うとき苦笑いした。

「この村のやり方は私は気に食わない。でも、だからといって、私にはこの構造をぶっ壊す力も、権利もない。自分が正しいと思うことを押し通すには、勇気と、それなりの力がある。あと、責任もね。」

クローバーはつまらなそうにため息をつく。

「どうせこんな祭りはいずれ終わる。終わった時に新たに出てくる問題に向き合うのは、私たちじゃない。愚かにも永遠の命を持ったやつ

らだ。」

「それだけで済めばいいけど。」

僕の考えている被害規模は、クローバーの考えより幾分広い。

「済まないなら、済まないで、その時戦うさ。まあ本当なら予防的な意味で、芽は今のうちに詰んでおきたいとこだけど……。」

「放っておいたら、取り返しがつかなくなりそうって気はするけどさ。僕としては、もうとっくに取り返しがつかなくなってるような気がするね。」

「無力だね。」

「人はみんな無力だよ。」

「まあ無力を自覚してただけまじだろ。」

クローバーはそう言うのと、深呼吸した。僕と同じで、お日様の香りを楽しんでいるのかもしれない。

「クロ、僕はね、最近よく『正しい』ってなんだろう？って考えるんだ。」
「随分哲学的な話だな。」

クローバーは寝転がったまま、足を使ってブーツを脱いでいる。行儀が悪い。

「正しさなんてさ、あってないようなものなのかもね。」

クローバーがブランケットにくるまりながら言う。

「そうかもね。考えても、考えても、答えはでない。」

正しいことが、正しいと評価されたり、感謝されるとは限らない。その『正しいこと』は、人の立場や、時代や、場所によって変わってくるからだ。なんと不安定なものだろうか。

「僕はさ、正しいことをして、感謝されたいとは思わないし、自分の正しさを、証明しようとも思わない。」

結局、そこに問題が起きるのだ。考え方の違いで済ませない人が、自分の正しさを相手に押し付けて、相手を攻撃したり、悪者にしたりする。

国同士の戦争なんか、いい例だ。あれもお互いの正しさや、正義を証明するためにやるものだ。

「そうだね。私もそうだ。私は私の主張を好き勝手にするけど、それ

が支持されなくなつて別に構わない。エナがいい例だ。私は彼女のやつてることに納得できないし、めちやくちやだと思うから、多少口出しするけど、それで彼女が変わらないからと言って、私がどうこうできることでもない。」

「まあ彼女は変わらないだろうね。」

「それでも構わないさ。気に食わないけど、まあ、それだけの話だね。」

クローバーがあくびを噛み殺し損ないながら続ける。

「私はね、自分の主張はするけど、他人の正しさの主張は否定しないよ。それと同時にね、誰かの正しさを証明するために、私が思う正しさを否定されたり、侵害されたら、そいつと戦うよ。」

「言論で？」

「時には物理で。」

クローバーは眠そうな声で「ふふつ」と笑った。

「物騒だね。」

僕もそう言うと言った。

「クロが戦う時は、僕も一緒に戦うよ。」

「そりゃ心強いね……。」

クローバーは夢見心地でそう言うと、枕に顔を押し付けて、すやすやと寝息をたてはじめた。

僕は立ち上がって、窓の外を見る。

向かいのフジの家は、まだ灯りがついていた。

2人は、どんな結論を出すのだろうか？

「はー」

ため息をついて、ベットに倒れ込む。

考えても、考えても、栓のないことばかりだ。

僕は、僕が思う正しいことを、信じてやっていくしかないのだ。

部屋のランタンの灯りをしぼる。夜が一気に部屋を満たした。

「おやすみ、クロ。」

もう隣で夢の中にいるパートナーにそう声をかけると、僕は目を閉じた。

眠りはすぐやってきて、僕の意識を暗くて深い穴の中にずりりと引

きずりこんでいった。

第18話 旅立つ者達

気持ちのいい朝というものを、私はまだ体験したことがない。

「クロー。そろそろ起きてー。」

「うーん……。」

ベットから動けないでいる私とは対照的に、エルサイスは既に着替えも終え、朝ごはんのサンドイッチを食べている。

「朝ごはんは？」

「いない……。」

「ちゃんと食べないと、元気でないよー！」

「お前は私の母親か……。」

そう呟きながら、ぼーつと天井を見ていた。

体は怠く、重い。思考は正常に回らず、頭は考えることを拒否している。

とにかく休みたい。

今日という日が、特段嫌なわけではない。毎朝こうなのだ。朝起き抜けが、1日の中で最も辛い。

「クロー！ほら！起きてー！」

エルサイスが、私の両腕を引つ張って、無理やりベットから起こそうとする。

「うううううう……。」

私は呻きながら、全体重をかけて、起き上がるのを拒否する。

「もうー！」

本当にエルサイスは母親みたいだ。

エルサイスが諦めて手を離れたので、私はもう一眠りしようと、ブランケットにくるまる。

「寝るなら僕も添い寝しちやおうかなー。」

エルサイスが聞こえよがしに言う。脅しだろう。

別にいい、来るなら来い、そんなことより私は寝ていたいんだ。そんな気持ちで、私は横向きに寝返りを打つと、目を閉じた。

暖かくて気持ちがいい、ふわふわした感覚が私を満たしていく。

そこにふと、異質なものが割り込む。

背中側に人の気配を感じた。エルサイスだ。本気で添い寝するつもりだろうか？

私はエルサイスの気配を必死で外に追いやって、ふわふわした感覚に縋りつく。

ブランケットの上から、エルサイスが私を包み込むように、ギュツと抱きついてくる。

無視する。

寝たい。今はそれしか考えたくない。

ブランケットの中にエルサイスの手が入ってきた。その手が、私のお腹に触れるか、触れないかの瞬間、私は素早く起き上がり、ブランケットを跳ね除けると、壁に立てかけてあるデモンブレイドⅡアビスを掴み、その剣先をエルサイスの喉元に向けた。

エルサイスは両手をあげて降参のポーズをとっているが、顔は笑っている。

「起きた？」

「このクソ野郎……。」

そう毒づく私をもともせず。エルサイスは

「瞳孔、開いてるよ。」

と、どうでもいい指摘をしてきた。

「さ、起きたなら顔洗っておいで、紅茶を合成してあげるから、朝ごはん食べながら飲みなよ。」

エルサイスは何事も無かったように、合成を始める。

「ちくしょう……。」

私は悪態をつきながら、頭をかく。いつにも増して、酷い目覚めだ。本当にこいつは、油断も隙もない。

眠気はすっかり飛んでいたが、体の怠さは残っていた。重い体をなんとか動かしながら、朝の準備をする。

私が朝食を食べ終わる頃には、外はすっかり日も上り、人々が活発に行き交っていた。

「これからどうする？」

「うーん？とりあえず村を出ようか？」

私はサンドイツチを口に押し込みながら答える。

不老不死の種がわかれば、この村にもう用はない。むしろ秘密を知っている私達は、この村にとって邪魔な存在だろう。

「救済者は？放っておく？」

「まあ話くらいは聞きに行っただいいかもね。」

私はそう言いながら、口に残ったサンドイツチを紅茶で押し流した。

不老不死の村は、相変わらずのどかだ。

この平和な日常の中で、おぞましい儀式が続けられているとは、誰も考えつかないだろう。

「……信じる者に祝福を。ああ、すみません。奇跡を受けにきたわけではないのですね。」

救済者ケイトも、相変わらずだな思う。

「あなたは……そう……ええ。そろそろ来る頃かと思っていました。」

ケイトはそう言うと、不老不死の秘密を自ら暴露していく。

内容は昨日推測した通り、奇跡は人を魔物化すること、肉を食べないと凶暴化することなどが、語られた。

「しかし、今すぐ救わなければ、助けられない人もいます。不完全な技術でも、求めている人はたくさんいるのです。」

「善人ぶりやがって。不完全な技術と知っていれば、諦める人もいたはずだ。お前は情報を隠すことで、その人たちから選択の自由を奪っているんだ。」

私が核心をつくが

「この奇跡でこの村に迷惑をかけるのは私の本意ではありません。」

とかわされてしまった。

「私はこの村から去りましょう。」

勝手にしろと思った。どうせここから去っても、他の場所と同じようなことを繰り返す気だろう。イタチごっこだ。

「ちよつと待ってくれ。あなたが出ていくことはない。」

そこにロックが割り込んできた。

「立ち去るのはあんたの方だ。彼女はこの村に必要な存在なんだ。」
「僕らは用済みってことですか？」

エルサイスが飄々と頬笑みながら言う。ロックの戸惑う様子を楽しんでいようだ。私よりタチが悪い。

「長らくこの村はうつつとした空気に満ちていた。」

ロックは村長としてこの村の衰退を、ひしひしと感じていたようだ。しかし、そこに『救済者』が現れ、衰退を止めるだけではなく、新たな黄金期を築きはじめている。

「この奇跡は我らの希望だ。『救済者』様は我らの救い主なのだ。」

ロックの答えに、私は

「こんな得体の知れない力に縋りついて、重大な欠陥を隠して、他人を欺き続ける村に、未来なんかあるか！」
と怒鳴り返す。

こいつらはずるい。自分たちが生き残るためなら、他者の権利を奪ってもいいと思っている。むしろ、奪っているとすら思っていない。悪いことなど何もしていないと、開き直っているのだ。

怒りで頭が熱い。エルサイスが私の肩を置き、ヒートアップするのを抑えてくれる。

ロックはただ悲しい顔をするだけだった。理解できない私を、哀れに思っているのかもしれない。

「冒険者さんよ、ワシらは旅に出る。これで許してはくれないか」

急に現れたフジが、割り込んできた。

「さあ、勧誘員さん。ばあさんも同じく施術してはくれないか？ いいな？フニエ。」

「いいんですか？本当に？一度受ければもう戻れませんよ。」

エルサイスが言う。そこには責める様子も、心配する様子もない。ただただ確認をしたいような声色だった。

「どうせ話し相手がいないと、退屈で困るんだろ？一緒にいっていき。永遠にね。」

「フニエさん……。」

ロツクが寂しそうに漏らす。

「本当にそれでいいの？…こんな…こんな…」

私は言葉が続けることができない。この2人の大いなる決断を、誰が止めることができるだろうか？

「ああ当然さ。だから、ロツクさん。世話になった冒険者さんたちを、差別するような真似はしないでくれるかい？」

この夫婦は、私たちが思っていたより、ずっと聡明で、ずっと偉大な人のようだ。全てを受け入れる覚悟がある。

私はその意思に敬意を払い、この場から身を引く決意をした。

「では、冒険者さんや。またどこかで会おう。」

私は、フジの言葉に頷いた。

「では、救済の儀式を行います……」

ケイトがそう言いながら、奇跡の施術を始める。

「僕らは先に行こうか？」

エルサイスの声に救われた。もう、この奇跡を見るのは、嫌だったから。

私はフジとフニエを見送る前に、不老不死の村をあとにした。

第19話 彷徨える…

「もうちよい左…行き過ぎ。前、前…ちよつとだけ左…痛い！行き過ぎだ！枝にぶつかつたじゃないか！下手くそ！」

「見えないんだから、仕方ないだろう！」

僕は今、クローバーの両太ももに顔を挟まれ、ある意味幸せな状況だ。ただ、その幸せを噛み締めている余裕はない。

「ちよつと右…。おけ。あと少し…。」

「ちよ…立ち上がらないで…バランスが！」

「危ねえ！ふらつくな！」

「いたたたたた！髪掴まないで！」

「取れた！」

その声に僕はホツとした。

跪いて、肩からクローバーを地面に下ろす。

ちよつと休憩がてら、涼もうというこで、僕らは丸岩周辺にきた。そこでクローバーが、木にたわわにビワが成っているのを見つけて、食べたいと言い出したのだ。

ビワは随分高いところに成っていて、身長180cmの僕でも、全然手が届かない。

僕はやめた方がいいと言ったのだが、クローバーが譲らず、仕方なく、僕がクローバーを肩車して取ることになった。

クローバーと密着できるしラッキーかもと、少しでも期待した自分の浅はかさを、僕は恨んだ。ラッキーなんてこと言っている場合は全然なかった。

肩の上でクローバーは、僕に確認もせず、勝手に左右に体重移動するので、僕はふらつかないよう必死に足を踏ん張らなければならなかった。さらにその上、ビワが成っている上の様子がまったく見えないう状態で、クローバーの右やら左やら前やら後ろやらの命令に、従わなくてはならない。

思ったより100倍ハードだった。

僕はクローバーより体は大きい、伊達に紙装甲の後衛をやっては

いない、体力は大きく劣っているのだ。

クローバーを地面に下ろすと、僕は膝をつき、肩で息をした。本当に疲れた。

クローバーはそんな僕に目もくれず

「やったー！美味しそうー！」

と、両手いっぱいビワの実を嬉しそうに眺めている。

達成感いっぱいクローバーとは対照的に、僕は疲労感いっぱいだ。

「そんなに私重かった？」

「いや、重くはないけど……」

重くはなかった。ただちよつと自由すぎた。

「情けないなー。」

クローバーはそう言いながら、ビワの実を一つもぐと、僕にくれた。

僕はその場に座り直すと、皮を剥いて一口食べた。

「あまーいねー！」

クローバーが嬉しそうに言う。確かに甘くて美味しい。これなら、苦労したかいがあったと言えるだろう。

クローバーは僕の隣に腰を下ろすと、ビワの実を一つ一つ丁寧に剥きながら食べていく。僕もそれに倣う。

「やっぱいいねー。冒険の醍醐味だねー！」

口の周りをビワの果汁で汚しながら、クローバーが言う。

「そうだね。たまにはこういうのもいいかもね。」

あくまで、たまには、だ。毎回は体力が持たない。

「あの夫婦も、旅を楽しんでいるかな？」

クローバーが言うあの夫婦とは、きつとフジとフニエのことだろう。

「どうだろうね。」

不老不死の村で彼らと別れてから、随分経つが、再会は果たしていない。

僕らは公国や連邦を行ったり来たりしているだけだが、あの夫婦はもつと遠くを旅しているのかもしれない。

「永遠の旅って、どんなものだろうね？」

「うーん……。クロはさ、カルタフィルスを知っているかい？」

「カルタ……何？」

「カルタフィルス。」

「何それ？」

クローバーはそう聞き返ししながら、川面で果汁で汚れた手と顔を洗う。僕はタオルを差し出し、クローバーに渡す。

「カルタフィルスは聖書に出てくる人だよ。別名、彷徨えるユダヤ人。」

神の子が、処刑場まで十字架を背負って歩いていく途中、門番のカルタフィルスが、神の子を嘲笑し、石を投げた。

「そのとき、神の子は『私は行く、お前は私が帰ってくるまで、待つていなければならぬ』って言ったんだって。」

「それが？」

クローバーは話が見えず困惑している。

「神の子はその後処刑されたわけだけど、いつか世界の救世主として、復活すると言われている。その時まで、カルタフィルスは神の子を待つていなければならぬ。神の子が復活する『いつか』まで、カルタフィルスはこの世を彷徨い続ける。」

「壮絶だな。神の子の呪いか。」

「そう。永遠の旅というのは、神が使う呪い。罰なんだよ。」

「暗い話だな。」

クローバーが眉をひそめる。

「どうせなら、夫婦は旅の果てに安住の地を見つけ、いつまでも幸せに暮らしました。めでたし、めでたし。って話がいいなあ。」

僕は笑った。

僕はクローバーのように、前向きに考えることはできない。世の中そんなに甘くはないのだ。

でも、クローバーの考え方も素敵だ。

どうせ僕らは、真実を追うことはできない。想像することしかできないなら、良い方向に考えたって、悪い方向に考えたって、僕らの自

由だ。

「好きに考えたらいいよ。」

「そうするよ。私はいい方に考えたいんだ。その方が少しは気が晴れるから。」

川は綺麗で透き通っていた。

クローバーは裸足になって、浅瀬に足をつけて涼んでいる。

クローバーは水が好きだ。海とか、滝とか、よく好んで見に行ったり、そこで遊んだりする。

僕も嫌いではない。水がいつぱい集まって、ゆらゆら揺れたり、流れていくところを見ると、なんだか落ち着く。

「僕らは、なんで旅をしているんだろうね?」

つい、そんなことが口をついて出た。特に意味があつたわけではない。ただ、なんとなく、そう漏らしていた。

「楽しいからじゃないの?」

クローバーが、キョトンとした顔でこちらを見ながら、当たり前のように言った。他にどんな理由があるというのだ?と言いたげな顔だ。

僕は数秒固まってしまった。そしてそのあと、思わず吹き出してしまった。

「ははは、そうだね。そうだよ。」

「何? 私今そんな面白いこと言った?」

笑っている僕を見て、クローバーは怪訝な顔をしている。

「いや、なんか、クロはすごいなーって。」

これまでの旅の中で、嫌なことはいっぱいあつた。今回の不老不死の村の話だって、なんとも言えない後味の悪いものだった。

村に立ち寄らなければ、変に首を突っ込まなければ、旅をしていなければ、そんな思いをすることはなかったかもしれない。

それでも僕らは、同じように旅を続けていく。

辛いことや、嫌なことがあっても、こうして楽しい日もあるから。

僕らは、今を楽しむ旅をする。それは不老不死になった者達が、永遠に失ったものだ。

それは、いずれ終わりを迎えるものの特権なのだ。

旅の先に、何があるのかはわからない。何があっても、クローバーとなら、乗り越えて行けそうな気がした。

「クロ、これからもよろしくね！」

「なんだよ、急に……。気持ち悪いな。」

僕の思いとは裏腹に、クローバーの態度は冷たい。

僕は笑った。

クローバーは眉をひそめて僕を見ている。

こういう日も、悪くないなど、僕は思った。

番外編くソラちゃんのお使い 前編く

「お前は馬鹿か？」

クローバーの暴言に、目の前の男は、眉をピクつとさせせる。

ハーフロングのコバルトブルーの髪からはみ出た、白い犬の耳。エアロコロッセウムベストの下に履いたエアロソーサラーローブからも、白い犬の尻尾が飛び出っていて、イラついたようにピクピク揺れていた。

「クロー、口が悪いよ。すみません、テイルさん。」

エルサイスが、クローバーを注意しながら、男に謝る。

テイルと呼ばれた男は

「相変わらず、口が悪いな。」

と言いながら、眉間のシワを深くした。黒縁メガネの奥の、黒い目は、不愉快そうに歪んでいる。

テイルは、クローバーが所属するボンド『シルフィード』のメンバーの1人だ。

ここは公国の酒場の2階。1階は多くの冒険者で賑わっているが、わざわざ2階に上がってくる者は少なく、今はクローバー、エルサイス、テイルの3人しかない。

テイルのパートナー、ソラは、1階で他のシルフィードのメンバーと楽しそうに談笑している。

金髪のショートカットが似合う、真面目そうな女の子だ。困ったように下がり眉がかわいらしい。

3人はその様子を眺めながら、暗がりの中、立ち話をしていた。

「頼みがあるから至急公国までこい。」テイルにそうメッセージを貰ったクローバーとエルサイスの2人は、連邦から牛車に乗って急いで駆けつけた。

しかし、テイルから告げられたのは

「ソラちゃんのお使いを見守ってくれ。」

という、なんとも奇妙な依頼だった。

それに対するクローバーの答えが「馬鹿か？」なのだ。

「くだらねえ…牛車代200ゼル返せよ…。」

クローバーは呆れ返ったままそう呟いた。

「まあまあ…ちゃんと最後まで聞こうよ。」

エルサイスが不機嫌そうなクローバーをなだめた。

「こないだから、ソラちゃんが、1度1人で旅をしたいって言っててな。」

「どうとう愛想つかされたか?」

クローバーが余計な合いの手を入れる。

「お前うるさい。」

「クロ、少し黙ってて。」

テイルとエルサイス2人に責められて、クローバーは面白くない顔をする。何か言い返そうとしたが、エルサイスの顔を見てやめた。テイルはわからないが、エルサイスを怒らせると面倒だと知っていたからだ。

クローバーは1階を見下ろすのをやめ、ターンすると、反対側の窓辺に腰掛けた。少し離れているが、話は聞こえる距離だ。

「さて、どうぞぞ。」

邪魔者は居なくなつたというように、エルサイスが先を促す。

「ソラちゃんは1人で外を歩いたことがまだない。」

「意外な話ですね。随分旅慣れてるように見えますけど…。」

「旅はずっとしてるからな。俺よりも長く。ただ、ずっと誰かと一緒にだ。」

テイルはそう言いながら、1階にいるソラを慈しむように見つめた。

「最初は親父と、次は俺と、ずっと一緒だった。だから、慣れてきたところで、1度1人で何か達成したいんだと…。」

テイルはそう言うのと、ため息をついてうなだれた。そういう経験は必要だと思いつつも、心配で仕方ない。そんな葛藤があるようだ。「なるほど。」

エルサイスはそういうと「どうする?」というような目で、クローバーを見た。しかし、クローバーは不貞腐れた様な顔をするだけで、

「俺が野盗だったのは、今関係ねえだろ！」

テイルがそうに吐き捨てる。バツが悪いようだ。クローバーはその様子を愉快そうに見ている。テイルを動揺させたことに満足していた。

「(性格悪いな…)」

エルサイスはやれやれと頭を振る。

「そんなに心配なら、自分で見守ればいいじゃんか。」

「そんなの見つかったら怒られるだろ！ちつとは考えろよ。」

テイルは自分の依頼にさつきと「うん」と言わない2人イラついていた。落ち着かない様子で手すりを爪でトントン叩いている。

「僕らだって、見つかったら怒られますよ。」

エルサイスが反論する。

「そこは見つからないようにやれよ！」

「その言葉、そっくりそのままバツで打ち返すわ。」

クローバーが呆れ返って言う。もう一度「お前は、馬鹿か？」と言いきそうな顔だ。

このままでは埒が明かない。

「この俺が恥を忍んで頼んでるんだぞ？」

テイルが低い声で凄む。

「それが人に頼む態度か？」

クローバーがテイルを睨む。

テイルもクローバーを睨み返す。

沈黙。

先に折れたのは、テイルだった。

「わかった。わかったよもう…。ソラちゃんのためなんだ…。頼む…。」

テイルはそう懇願すると、眉を下げ、困ったような顔をした。これが彼の精一杯のようだ。

エルサイスとクローバーは顔を見合わせる。

「どうする…?」

クローバーがエルサイスにしか聞こえない様な、小さな声で言っ

た。エルサイスは肩をすくめると

「クロの好きにしなよ。」

と、判断を丸投げにする。

クローバーは深いため息をついた。

本当はこんなくだらない話、蹴つて当然だと思っている。でも、普段絶対に頭を下げない男が懇願する話なのだ。

「(まあ今だって頭は下げてないが…)」

しかし、彼なりの誠意は伝わってくる。

1人の少女が、大人の階段を登る。その大事なイベントの手伝いをする。それは1つ先にいる大人の女性として、やるべき事の1つかもしれないと、クローバーは思い始めていた。

「わかった。やってやるよ。」

クローバーが呟くように言う。

「ただし、報酬はもらうからな。」

「報酬くらい、なんでもこい。」

テイルがニヤリと笑う。ずるそうな笑顔だ。

「言つとくけど、お前のためじゃないからな。あくまで、ソラちゃんのためだ。」

そう言うクローバーに、エルサイスは笑った。

「相変わらず、素直じゃないな。」

「うるせえ。」

3人は1階にいるソラを見下ろす。

大の大人3人があれこれ揉めながら、自分のことを話しているとは、露にも思っていないソラは、まだあどけない顔で、楽しそうに笑っていた。

番外編くソラちゃんのお使い 後編く

当日の朝は、晴れていて心なしか暖かかった。悪くないいい天気だ。

公国の門の前で、テイルとソラが最後の確認をしている。

「ハンカチは?」

「もった。」

「飲み物は?」

「もった。」

「忘れものは無いか?」

「もーテイル!大丈夫だってば!」

しつこく確認するテイルに、ソラは口を尖らせる。心配されること自体に不満があるようだ。

「ちよつと行つて、すぐ帰ってくるから!」

お使いは、公国から錬成施設に行つて、テイルのメイン武器、ファントムブレイドを強化して、帰ってくるというものだ。

テイルの武器を持っていくことで、テイルを無力化し、ついてこれないようにするあたり、ソラに策士の才能を感じる。

「国境沿いは物騒だから気をつけろよ!」

「わかつてる。もう行くね!」

ソラはそう言うのと、青色の連邦服を翻し、門を出ていった。

ソラの姿が見えなくなったあたりで、酒場の影に隠れていたクローバーと、エルサイスが出てくる。

「さて、僕らも行きますか。」

エルサイスがクローバーに声をかける。

「ソラちゃんがケガでもしたら、お前ら絶対に許さないからな。」

テイルがクローバーを睨む。

「うるせーやつだな。わかつてるよ。」

クローバーが面倒くさそうに返事をした。

エルサイスは、そんな2人の間に挟まれて、困つたようなため息をもらした。

雪山と草原は、春のような暖かい風が吹き付けていた。気持ちがいい。

ソラは、1人の解放感を楽しんでいた。隣に誰もいないのは少し寂しいが、誰の了解も得ず、いつ何をしてもいいという状況は、中々わくわくするものがある。

少し道を外れたところに、採取ポイントが光っているのが見えた。遠回りになるが、走って取りに行く。じょうぶな杖を拾った。

その様子を、クローバーとエルサイスは、少し離れた茂みの影から見ている。

「急に道を外れるから何事かと思ったわー。」

ほっと胸を撫で下ろすクローバーを見て、エルサイスは笑った。

「テイルさんに過保護とか言ってるけど、クロも大概だよ。」

「うるせえ。」

クローバーはそう言って、エルサイスを睨みつける。

「そろそろ国境だね。」

ソラは鼻歌交じりに、国境への道を下っていく。今にも踊り出しそうなくらい上機嫌だ。

「ちよつと待て。」

前に行くクローバーが、急に立ち止まったので、エルサイスはクローバーにぶつかってしまった。

「どうしたの?」

「しー。」

息を殺して、ソラの様子を伺う。

国境手前でソラは、豚のような姿をした魔物、オークに絡まれている。

「食べ物によこせー!」

「ごめんなさい。あなたが食べれそうな物は、今持ってないんです。」

ソラは困ったような声を出した。

クローバーとエルサイスに緊張が走る。それぞれ剣と杖を構え、何かあればすぐ加勢する用意をした。

「私この先に行きたいんです。そこを通してください。」

「食べ物をよくさないと通さないぞ。」

「そんな勝手な要望、聞き入れられません。」

ソラは中々強気だ。

「魔物を従わせたいなら、自分の力を示せ！」

オークはそう言うと、ソラの10倍はありそうな太い腕を振り下ろした。

それを見たクローバーが、加勢に飛び出そうとした瞬間、エルサイスはその肩を強く掴み、止めた。

「お前！」

クローバーが驚きと怒りでエルサイスを睨みつけている間に、ソラは軽々オークの攻撃を避けた。

「おいたが過ぎますよ！」

ソラはそう言うと、身を翻し、杖を構えた。

その華麗なステップに、クローバーは目を見はった。

ソラはすぐに詠唱に入り、オークにウォーターヴェインを放つ。水流に足を取られたオークは、その場に派手にすっ転ぶ。

「悪い子はーお仕置きですー！」

ソラがセラフイムウイングを唱えると、三対六翼の羽搏きが、オークを切り裂く。

「ぎゃっー！」

オークはそう短く言ったかと思うと、倒れた。断末魔をあげる暇さえなかった。

「まったくもう。」

ソラはため息をついた。

ポストに手紙を投げ込むような、そうすることが当たり前であつて、いちいちバタバタする必要がない。そんな落ち着いた対処だった。

少し離れた岩陰からそれを見ていたクローバーは、関心していた。

「ね、大丈夫だったでしょ？」

エルサイスはそう言うとウィンクした。クローバーは嫌そうな顔

で、それを手で払う。でも、反論はできなかつた。

ソラは、クローバーやテイルが思っているより、ずっと優秀なのだ。エルサイスはそれを見抜いていた。同じ厄介なパートナーを持つもの同士、感じるものがあったのかもしれない。

「やあ！今日は一人かい？」

公国側の国境警備兵、ブライトが、ソラに声をかける。

「そうなんです！」

ソラが嬉しそうに返事をする。満面の笑

みだ。そして、どこか誇らしげだ。

「一人旅は何かと物騒だ。お気をつけて！」

ブライトはそう言うのと、門を開け、ソラを通した。

ブライトに向かって、元気に手を振るソラが見えなくなるまで、クローバーとエルサイスは息を潜めて隠れていた。

あまり離されると見失ってしまう。2人は姿勢を低くしながら、走ってソラを追いかける。

その様子を、ブライトが訝しげに見ていた。傍から見れば、明らかに怪しい姿だろう。疑いの目を向けるブライトに、エルサイスは苦しい愛想笑いを返した。

国境沿いの道は、珍しく誰もいなかった。

ソラは道沿いに咲いている花を集めて、花冠を作りながら歩いていた。とても器用だ。

「テイルにあげよう。」

あの粗暴な男に、かわいい花冠が似合うとは思わないが、ソラはそんなことは気にしないらしい。

国境沿いを左に行くと、錬成施設前だ。錬成施設へ行く石段の途中、ソラが何かを食べているのに気がつく。

「エル、見てあれ！」

クローバーが小声でエルサイスに言う。

「ん？」

「あの子、プロシエツト食べてる。」

クローバーはそう言いながら、笑いをこらえるので精一杯の様子

だ。

最初に拾ったじょうぶな枝と、さつき倒したオークからドロップした魔物の肉で、自分で合成したのだろう。

「すごい美味しそうに食べてるね。」

エルサイスも笑い声を抑えるのに苦労していた。

ソラは、本当になんの心配もいらぬ、しつかり者だった。自分で自分の身を守るし、お腹がすいたら自分作って食べるし、帰った時のお土産まで用意している。

そのまま錬成施設の中へと消えていったソラを、クローバーとエルサイスは外で待ち伏せする。

建物の影に隠れながら、2人は言い合いをしていた。

「なんだか、バカバカしくなってきたよ。」

「だから僕は、本当に1人で行かせてあげるのがいいって言ったんだ。」

「私に判断を丸投げしときながら、後出しジャンケンしやがって。」

「過保護なんだよ。テイルさんも、クロも。」

「うるせえ。」

そんなことを言っているあいだに、ソラが出てきた。2人は息を潜める。

「さてと。」

ソラはそう言うと、帰り道とは反対の方、クローバーとエルサイスの方をくるりと向いた。

「そこにいるのはわかってるんですよ!」

クローバーもエルサイスも、ギクリと体を強ばらせる。何とかごまかせる策はないかと、クローバーが、エルサイスを見て助けを求めたが、エルサイスは首を左右に振って、お手上げだという顔をした。

「怒りませんから、出てきて下さい。」

万事休す。

クローバーとエルサイスは、両手をあげて降参のポーズを取りながら、ソラの前に出頭した。

「いつから気づいてた?」

クローバーがバツが悪そうに聞く。

「最初からですよ！もう！」

ソラは腰に手をあて、頬を膨らませる。怒った姿もかわいらしい。

「テイルの差し金ですか？」

「まあ、雇い主はそうですね。」

両手を上げたままのエルサイズが、苦笑いしながら白状する。

「まったく…。早く帰ってお仕置きしないと。」

ソラはそう言うのと、クローバーの手をとった。

「え？」

「ほら、一緒に帰りますよ！」

ソラはそう言うのと、クローバーと手を繋いで歩き出した。クローバーは戸惑いながらも、それに従う。

ソラ手は、とても小さいのに、力強く、暖かい。

エルサイズはその様子を、微笑ましく思いながら、2人のあとをついて歩いた。

「どういうことなのか説明してもらおうかしら？」

公国の酒場で、ソラがテイルに詰め寄る。

「え…いや…こ、これは…。」

テイルは両手をあげ、ソラから必死に目を逸らしながら後ずさりした。

完全に気圧されている。

「お前ら！なんで見つかったんだよ！ちゃんとやれよ！」

テイルは、クローバーとエルサイズに責任の追求をして、ソラから逃れようとしたが

「悪いのはテイルでしょ！関係ないくーちゃんやエルさんまで巻き込んで！ほら、2人に謝ってよ！」

と言われ、失敗に終わる。

「いや、でもー！」

「謝って。」

「あ、はい…。」

有無を言わせないソラの態度に、テイルは折れた。目を伏せながら「わ、悪かったな…。」

とボソリと呟いた。

「どういたしまして。」

依頼に失敗したことは事実なので、クローバーはバツが悪そうだが、とりあえず謝罪を受け入れる。

「本当に、すみませんでした。」

ソラが頭を下げる。

「いや、謝るのは僕らの方です。不躰についていつて、すみませんでした。」

エルサイスが丁寧なお辞儀をする。

「いえ、全部テイルが悪いんです。私を信用してくれないから…。本当に1人で出来るのに…。」

ソラは少し悲しそうな顔をした。

「君が心配なんだよ。こいつは。まあ私もだったけど。」

クローバーはそう言いながら、困ったように頭をかいた。

「道中ソラさんは、本当に1人で何でもしていましたよ。」

エルサイスがテイルそう説明する。

「そうか…。」

テイルはそう言うと、ソラ手を取った。

「ソラちゃんごめんね。次はちゃんと1人で行かせてあげるから。」

そう真剣な眼差しで言うテイルに

「もう次はいいわ。」

とソラが素っ気なく返す。

「私がいないと、テイルが何を悪いことするかわからないんだもの。見張ってなきやね!」

ソラはそう言うと、いたずらっぽくウィンクした。

誰も適わない。

その顔は、もう少女ではない。立派な1人の大人の女性の顔だった。

「今日は本当にすみませんでした。お礼にお食事を奢らせて下さい。」

全部テイルが払います。」

「え、まじで？じゃあ、すみませーん、この店で一番高い料理くださーい。」

「僕一番高いお酒で！」

クローバーとエルサイスは容赦がない。

「ちよ、お前ら!!ちつとは失敗の反省を…！」

「反省するのは、テイルでしょ？」

「あ、はい…。」

その様子に、クローバーとエルサイスは笑った。

4人はそのあと、大いに食べて、大いに飲んだ。

楽しい夕宴だ。

ソラが思い出したように、バックから花冠を出す。テイルは始めは嫌がったが、ソラの好意には逆らえない。

赤と黄色のカラフルな花冠を、恥ずかしそうに被るテイルの姿を見て、ソラは笑った。

それはどこかまだやっぱり、あどけなさが残る顔だった。

第20話 リーヤンのペンダント

久々に連邦地方のエリアボス、コノミグランマを周回した。

ドロップ品のマテリアルAを集めて、エルサイズが愛用している杖、ファントムロッドIを、もう1本合成するためだ。

合成が完成したら、錬成施設にいつて、鍛冶屋のスミナに限界突破してもらい、さらに強化する予定だ。

「あれ？合成に必要なマテリアルって99個だっけ？」

「90個だよ。」

私が聞くと、エルサイズがすぐ答えてくれる。

「じゃ、もうあるわ。今93個。」

「アクアウッドロッドは？」

「今持ってないな。プレジャーBOXから出るかな？」

「プレジャーBOXは何個ある？」

「132個……。」

私はメニュー画面を見ながら、頭を抱える。

今からここで132個ものプレジャーBOXを1つずつ開封していくのかと思うと、吐き気がする。

「明日でいいんじゃない？」

エルサイズが疲れた様子で言った。

もう午後遅い時間だ。今は、透き通る青い空を、風が気持ちよく吹き抜けているが、あと1時間もすれば、空は茜色に染まり始め、黄昏が訪れるだろう。

朝から周回を始め、お昼休憩もそこそこに、ずっと狩り通しだったため、さすがの私も、疲れを覚えていた。

「そうしようか。」

私はそう言うと、メニュー画面を閉じた。

2人で城塞都市への道をとぼとぼ歩いていく。

「お腹すいたなー。ビールが飲みたいよ。」

エルサイズがそう漏らす。

「私は早くシャワーが浴びたい。」

城塞都市の宿には、各部屋に小さなバスルームが付いているのだ。私はそれが毎回楽しみで、わざわざそのために、連邦まで牛車できて、泊まることもある。

アルブ連邦の都、城塞都市に入るには、通行許可証が要る。許可証は『義務を果たした者』つまり、この城塞都市に貢献した者のみに与えられるのだ。

私たちは随分前に、フクログマを討伐した見返りに、それを手に入れることができた。

しかし、私たちのように、義務を果たせるよそ者は意外に少ない。義務は果たせないが、引き下がることもできない。そんな者達が、城塞都市の門の前にテントを張り、居座っている。

私たちは、そのスラムのようなテントの前を通り過ぎ、門へと向かう。

この街は、ほぼ全ての建物が頑丈な石造りでできており、城塞都市という名にふさわしい見た目だ。そして、その石造りの城が、見事な景観を生み出している。ここは強くて美しい都だ。

だからこそ、義務がどうか言う前に、門の前のテントを、どうにかした方がいいと思う。

とりあえず中に入れて、生活保証してから労働させるなり、強制撤去で無理やり追い出すなり、好きな手を使えばいい。

テントがある限り、城塞都市の強くて美しい景観を、台無しにし続けるだろう。

「先にご飯にするか？」

「そうだね。何食べようかなあー。」

「肉が食べたい。肉が。」

「僕はビール。」

「ビールはご飯じゃない。」

「僕にとってはご飯の一部だよ。」

そんなたわいもない話を、エルサイスとしながら、街の奥にある酒場への道を歩いていた。

すると、急に誰かがぶつかってきた。

「わつと……！」

思いがけないタツクルに、私はよろけて尻もちを付きそうになる。
「おつと……！」

エルサイスが、私の腕を掴んで、転ぶの阻止してくれた。

「大丈夫？」

フラフラしている私を、エルサイスが心配そうに覗き込む。

「大丈夫。」

そう言いながら、ぶつかられた左手をさする。

「クロは軽いからすぐ飛ばされちゃうんだよ。」

「いきなりだったから踏ん張れなかったただけだ。」

そう答えながら、ぶつかってききたやつを探す。

「ああ、困ったわ、困った……。」

ぶつかってきた女は、謝りもせず、そう呟きながら、その辺をウロウロしている。

「おい、お前……！」

私がイライラしながら声をかけると、女はやつとこつちを見た。

ブロンドの内巻きカールの髪に、猫耳のカチューシャ、黒の連邦服からは、か細い足が伸びている。

「あ、あなた様方は、もしかして旅の冒険者様ですか？」

高い声には幼さが残り、どこか甘ったるさを感じた。

「はじめまして、私はリーヤン。この街に住む、か弱くしがない町娘。」
「はじめまして、リーヤンさん。」

エルサイスが、いつもの営業スマイルを顔に貼り付けて挨拶する。
本当にこいつは外面がいい。エルサイスの社交性が役に立つ時も多いが、私は嘘にまみれたこの笑顔が、あまり好きではない。

「まず、ぶつかつたことを謝れよ。」

私はお構い無しにリーヤンを睨みつけた。エルサイスが私の肩に手を置いてなだめてくる。

「すみません……。困り事で頭がいつぱいで……。」

リーヤンはそう言うと言を伏せた。

「実は私、盗賊に命の次に大事なペンダントを、盗まれてしまったんで

す。」

「それは大変ですね…。」

エルサイスが、そう返す。顔には同情の色を浮かべているが、心の中ではどう思っているのか全くわからない。

嘘がうまいやつというのは、見ていて感心するが、同時に恐れも感じる。何でも直接言う私よりも、どれが本当かわからないエルサイスの方が100倍怖い。

「兵士の格好をした盗賊は、この街の地下洞窟に逃げ込んだみたいで……。」

リーヤンは、無反応な私に話すより、エルサイスに話した方がいいと思っただろう。私には一切目もくれず、エルサイスの方だけ見つけて話している。

「兵士？」

「そう、兵士。兵士の格好をしていたのは、多分、元々兵士だったからでしょう。兵士崩れの盗賊は意外と多いのです。過去の地位を利用して、人を陥れる……。」

リーヤンは目を潤ませ、悲しそうな顔をする。

その姿を見て、私はもつと違うものを感じた。リーヤンがエルサイスばかりに訴えるのは、エルサイスが聞いてくれそうというよりも、もつと単純に、エルサイスが男だからかもしれないと思った。

「それで、できましたら、ペンダントを取り返したいのです。」

大きなタレ目に、小さな口、幼さが残る甘ったるい声。こういうのが好きな男は多いだろうと思う。

「中は魔物がウロウロ、私では盗賊ともまともに立ち会えるはずもなく……悲嘆に暮れてたところ、あなた様方のお姿をお見かけし……。」

「僕たち？」

「そうです、そのたくましいお姿！あなた様ならきつとやってくれるはず。盗賊を見つけてたら倒してほしいのです。」

なんとも都合がいい話だ。

「いえ、そこまですることはいいですね。ペンダントを取り返しても

「らえれば。」

「一体何様なんだか…。」

あまりの凶々しさに、私は思わずそう漏らしていた。それが聞こえたか、聞こえてないかわからないが

「タダとは言いません。お金はありませんが、私に出来ることなら何でもします。それくらい大切なものなのです。」

と、リーヤンが交渉してきた。

こんな弱そうな小娘が、私たちのために出来ることなど、皆無だろう。

「金が無いなら、話にならないよ。」

私が冷たく突き放す。

「それなら、道中、もし見かけたら、で構いません。私のペンダントを、取り戻す機会があつたら、お願い出来ませんかでしょうか…。どうかお願いします！」

リーヤンが、エルサイスに縋るように言う。見ていて気分が悪い。「じゃあ、約束はできませんが、見つかったら、届ける、つてことではないですか？」

エルサイスがにこやかな笑みで答える。それも見ていて気分が悪い。

「こんな茶番さつさと終わらせて、早く酒場でプロシエットにかぶりつきたい。」

「はい。それで構いません！よろしくお願いします！」

リーヤンはそう言いながら、体をくねらせた。

吐き気がしそうなほど、甘ったるい動きだった。

第21話 連邦の酒場で

「あー！最高ー！」

1日の終わりに飲むビールは、格別だ。この黄金一口は、全ての疲れを吹き飛ばしてくれる。

1杯目のビールをあつという間に飲み干した僕の向かいで、クローバーがプロシエットにかぶりついていた。小さな口を頑張つて大きく開けて、一生懸命食べる姿は、猫のような獰猛さと、かわいさを兼ね備えている。

「すみませーん！ビール追加でー。あとドフィノワーズ下さい。」

近くのウエイトレスを呼び止めて、そう注文する。

「かしこまりました！」

ウエイトレスは元気にそう返事をしながら、注文を書き留めると、厨房へ去っていった。

「ビール飲みすぎないですよ。」

クローバーがもぐもぐしながら言う。

「クロー、食べながら話さないの。」

「飲食代のほとんどは、エルが飲む酒代なんだからね。」

クローバーは僕の注意を聞きはしない。

でも、僕だつてクローバーの注意を聞きはしないのだから、お互い様なところはある。

僕は追加で届いたビールに口をつけ、半分ほど飲み干す。クローバーにバレないように、近くに居たウエイトレスに、小さな声で3杯目を注文する。

連邦の酒場は、公国の酒場に負けず劣らず、とても賑やかだ。

たくさんの冒険者や、兵士、街の人々が集まつて、食事をしたり、談笑したり、それぞれの時間を楽しんでいる。

「エル、さっきのリーヤンとかいう女の話、どうするの?」

「え?別にどうもしないけど……。」

あれは社交辞令というやつだ。僕の中で、機会があつたらやるといふのは、やらないと同じ意味。つまり、引き受けてはいない。それを

相手がどう受け取ろうと、僕には関係ない。

やらなかったところで、機会がなかったと言えはいいのだ。何の問題もない。

「あの女、エルの方ばかり見て、嫌な感じだったな。」

「あ？ヤキモチ妬いてくれた？」

「はっ。」

僕は、クローバーが時々する、このゴミを見るような冷たい目が、たまらなく好きだ。だからわざとこうして、クローバーが怒りそうなことを言ってしまう。

僕はきつと、頭がおかしい。世間一般でいう『変態』というやつかもしれない。そう自覚しながらも、改める気はない。狂っているなら、狂っているでいい。

犯罪ではないのだから、公的には許されるはずだ。ただ、私的には許されないうきもある。油断すると、すぐクローバーの拳が飛んでくる。

「冗談だよ。あれはまあ泣き落としの一種だよな。」

リーヤンは、自分の中の『女』を武器にして、あの手この手で、僕に縋ってきた。

「まあ僕には一切響かなかったけどね。」

彼女のしたことは、暖簾に腕押しだ。他の人にはどうかかわらないが、僕には全く効果がない。僕にとって、クローバー以外の女の人は、その辺の石ころと変わらない。別に気にも止めない存在なのだ。

「ああいうやつが好きな男はいっぱい居そうだな。」

クローバーが吐き捨てる様に言う。その口調から読み取るに、クローバーはリーヤンのことがあまり好きではないらしい。

確かに、クローバーとリーヤンは、対極に位置しているかもしれない。クローバーは自分の中の『女』を利用することを、嫌悪している節がある。

「エルはどう思うの？」

「何を？」

「あの女を。」

「リーヤンさんを？…うーん。別にどうも思わないかな？」

別に好きでも嫌いでもない。そこを判断できるようになるくらい、彼女に興味を持ってないというのが、僕の正直な感想だ。

クローバーは難しい顔をしている。何か言いたいことがあるようだが、うまくまとめられないのかもしれない。

「いいよ。好きなように話しなよ。」

僕が先を促す。

「うーん…。別にそんな話したいことがあるわけじゃない。ただ…何か、嫌な感じがしただけ。」

クローバーの言葉は曖昧だ。解像度が足りない。直感的に嫌なものを感じてはいるが、それを裏付けるだけの証拠がない。そんな感じだ。

「何かありそうな気がする？」

「どうだろう？全然わからない。ただ単に、ああいうクネクネしたやつが嫌いなだけかも。私はね、自分がかわいいとわかって、それを利用するやつが嫌いなんだ。女の涙とか、女の色気とか。」

クローバーはそう言うと、サイダーを飲み干した。アルコールの入っていない甘いやつだ。

「別にそれが悪いって言ってるんじゃない。やりたいやつは、好きにすればいいさ。そういう生き方しかできないやつもいるし。ただ、そういう色仕掛けに世間が慣れると、同じ女である私もとばっちりを食う。」

いつの時代も、女であるだけで、軽んじられるという事象は存在する。

『女だから』泣けば許してもらえたり、『女だから』代金の代わりに性的なものを要求されたり、リーヤンはそれを逆手にとって、武器にして生きているが、クローバーはそんなに器用ではない。

どんなに怒鳴られようと絶対に泣かないし、性的な要求されれば相手を殴り飛ばす。

生意気、可愛げがないと貶められ、嫌な思いもいっぱいしている。それがクローバーの強さなのだ。媚びず、膿まらず、色褪せず。

その強さが、僕は好きなのだ。

「生きにくい世の中だね。」

「まあ今に始まったことではないさ。」

クローバーはそう言うのと、苦い顔をした。

僕は男なので、その苦悩を凶り知ることはできない。

それでも僕は、クローバーの味方でありたいと思う。

あくまで、味方だ。

守ってあげたいとか、助けてあげたいとか、そういう態度は僕の傲慢なのだ。

クローバーは守らなくても、助けなくても、ちゃんと一人で生きている。僕はそばに居て、対等な立場で、それを見ているだけでいい。

「それ、一口ちょうだい。」

クローバーが届いたばかりのドフィノワーズを指さす。僕はスプーンでそれをすくってクローバーの口元まで持っていく。チーズが伸びて、湯気が出ている。

「ものすごくあつついよ。はい、あーん。」

「いや、あーんとかしたら絶対ヤケドするわ!」

クローバーは僕の手を制すと、自分のスプーンで皿から一口分取り、フーフーし始めた。

僕は心の中で落胆する。せつかくクローバーと「あーん」が出来る機会だと思ったのに、ガードが固い。

「んーおいひいーでも、あつふいー」

パクリとドフィノワーズを一口食べたクローバーは、その熱さにハフハフ言っている。

「(かわいいい…)」

今まで、クローバーのことを「ブス」とか「かわいくない」とか言うやつは、たくさんいた。それはクローバーがそいつの思い通りに、女らしく、弱く、へりくだった態度で振る舞わなかったからだ。

そんなことをしなくなったって、クローバーは十分にかわいいのに、と僕は思う。

世の中には、様々な生き方がある。リーヤンの様に生きたって、ク

ローバーの様に生きたって、どっちだっていいのだ。自分の持っているカードで、自分で思うように生きればいい。

僕はクローバーの様子を幸せな気持ちで見ながら、3杯目のビールを飲み干した。

第22話 兵士？盗賊？

雨の日というのは、それだけで憂鬱だ。

宿屋の窓から、街を見下ろす。

人通りはまばらで、みんなどこか早足で必要最低限の用事を済ませている。

エルサイスはベットの上面にあぐらをかいて、プレジャーBOXの開封作業をしている。

私はついさつき起きたばかりで、眠い目を擦りながら、彼が合成してくれた、クロムツシュを食べていた。

「あと何個？」

「あとねー…64個。半分くらい開けたね。」

「水杖は？」

「アクアウッドロッドはまだ出てないよ。今のところ火片手2、風両手1、土短剣1。」

ほしいものは中々出ないものだ。

ガチャだってそうだ。「とりあえず回しとくか」で回すといいのが出る。「これ絶対ほしい」で回すと出ない。あと、周りの人がみんな「UR上下揃った」と喜んでいいるからといって、「自分も回せば出る」と思っていると、絶対出ない。

世の中には、そういう目には見えない法則がいっぱいある。

「オーブばかりだよ。あと時々僕の強化素材。」

エルサイスがつまらなそうに言う。

「おーおー。強化素材飲んでいてよ。強くなれ、強くなれ。」

私の投げやりな言い方を、エルサイスは

「はいはい」

と言って受け流した。

城塞都市は、今日は珍しく雨天だ。大粒の雨が降り注ぎ、石畳の道を黒くしている。

雨の日は、余程のことが無ければ、冒険には出掛けず、街の中で過ごすことが多い。

私が雨が嫌いなものもあるが、雨の日の戦闘というのは、そうではない日よりもずっと難しいからだ。

視界は悪いし、足元はぬかるみで不安定だし、声を通りにくいし、思わぬアクシデントが起こりやすい。

そういうアクシデントがあると、消耗が激しく、やりたいことがあっても、結局達成出来ずに終わることが多い。

それなら最初から出掛けない方がいい。

「あ、出た出た。アクアウッドロッド。」

エルサイスが淡々と言う。

「おー、じゃあ合成しといて。」

「とりあえず、これあげる。」

エルサイスはそう言うのと、合成したばかりの紅茶をくれた。私はそれに口をつけると、また窓の外を見た。

雨は止みそうな気配はない。空は黒い重そうな雲でいっぱいだ。

「あ、クロ。」

「んー？」

「鉄鉱石足りないや。」

「え？」

「素材足りなくて合成できない。」

「えー……。」

これだから、雨の日は嫌いだ。

炎の洞窟は、ほんのり暖かく、カラツとしていて、雨の外より気持ちがいい。

フアントムロッドIを合成するのに、鉄鉱石が20個必要だったが、15個しか持っていなかったらしい。

鉄鉱石なんて、その辺でよく拾うので、個数なんて気にもしなかった。

酒場にいた他の冒険者から、この街の地下洞窟『炎の洞窟』に採取ポイントがあると教わり、取りに来たのだ。

ここは地下だから、雨に濡れる心配も無いし、ずっと宿屋でダラダ

ラ過ごすよりましだろう。

私は退屈は苦手なのだ。

「5個くらいすぐ拾えるだろ。」

「そうだね。」

次々エリア移動しながら、リポップした鉄鉱石を拾う。中々わかenaitときは、暇つぶしにその辺にいるコノミヤ、ベネツシーを狩る。

リポップ時間が長く、結構な時間がかかったが、それでも午前中には終わることができた。

「帰るか。」

暇つぶしの戦闘でほどよい汗をかいていたが、まだまだウォーミングアップというところだ。しかし、今日はもうすることは無い。いいトレーニングだと思うことにする。

「そうしようか。」

そう言ったエルサイスに続いて、出口に向かう。この炎の洞窟の最初のエリアは、連邦の地下牢として利用されている。

地下牢は炎の洞窟内部に比べて、ひんやりしていた。火照った体に丁度いい温度だ。

「あ。」

エルサイスが何か見つけたような声を出す。

「ん？」

そちらを見ると、兵士の格好をした長身の男がいた。フードを被っていたので、顔は見えない。

「あれ、昨日リーヤンさんが言ってたペンダントを盗んだ盗賊かな？」

「なんだあんた。俺がペンダントを盗んだ？何を言ってるんだ？」

男は中々耳ざとい。エルサイスの声に反応し、こちらに出てきた。

「俺はグレン。アルブ連邦の兵士だ。ここは我ら連邦兵士が警備をとされた場所。あんたらこそ、ここに近づくな。」

そう言った男は、赤茶色の髪の間から、黄色い腫れぼったい目を覗かせた。なんとなく陰気臭い。

エルサイスが「どうする？」と目配せしてくる。

リーヤンのことはどうでもよかったが、この兵士なのか、盗賊なの

かわからない男には、少し興味がある。

「本当に兵士なの？」

私の質問に、グレンは眉をひそめ、顔を歪めた。不快感を示したのか、正体がバレそうに焦っているのか、まだ判断はつかない。

「疑っているなら、証明書をみるか？」

グレンはそう言うと、ポケットを探る。

「……ない、だと……？どこへ行った……？まさか落としたのか……？」

そう焦る様子のグレン。

「何か怪しいね。」

エルサイズが私に耳打ちする。

ペンダントはどうでもよかったが、こいつが盗賊なら盗賊で、捕まえるのは悪くない。連邦に恩を売っておくことに、損はないだろう。

ただ、こいつが本当の兵士だった場合、大変面倒なことになる。

「どうだろうね？」

「あんたが俺を疑っても、俺がアルブ連邦の兵士であることは揺るぎがない事実だ。」

グレンはそう言ってこちらを睨む。

グレンは名前を名乗った。盗賊自分の名前を自ら名乗るだろうか？しかし、グレンは兵士の証明書を持っていないようだった。そんな大事なものを、まともな兵士が無くすだろうか？

「エルはどう思う？」

「うーん。まあ怪しいよね。僕の感想はそれだけかな。」

下手に手を出さない方がいいかもしれない。私がそう思った時、グレンの後ろに宝箱があるのを発見した。

「あの宝箱は？」

そう言うと、グレンは明らかに挙動不審になった。目を泳がせ、落ち着きなく腕を何回も組み替えている。

怪しい。そしてそれとは別に、宝箱の中身が気になる。

「俺はこの牢屋に近づこうとする者を、排除するよう陛下から申し使っている。」

グレンはそう言うと、腰から剣を抜いて構えた。

「あんたが立ち去らないなら、俺は命令に従ってあんたをこの場から排除する。」

何とも急で、乱暴な話だ。

でも、悪くない。私の中の、戦いの血が騒ぐ。ウォーミングアップは既に済んでいた。

「多勢に無勢じゃ卑怯だ。エル、手出すなよ。」

エルサイスは、何も言わず、数歩後ろに下がって身を引いた。エルサイスはいつだって私の意思を尊重してくれる。いいパートナーだ。

もう私は、グレンが兵士だろうと、盗賊だろうと、どうしてもよくなっていた。戦えて、それが楽しければそれでいい。

後悔先に立たず。

私はデモンブレイドⅡアビスを構えた。

第23話 タイマン

グレンと剣を合わせてすぐ、これは不利だなと気がついた。

この狭い地下牢で、デモンブレイドⅡアビスを振るうのは、中々骨が折れる。

私の背丈より大きいこの大剣は、振り回す度に、壁や床や天井に引っかかりそうになり、思うように動けない。

頭を狙って剣を打ち下ろすスカルティガーは、十分に剣を掲げられず、不発に終わった。

その隙を見逃さず、グレンが私の脇腹を狙って飛び込んでくる。いい動きだ。私は体を捻ってそれを避けつつ、剣を盾がわりにしてガードした。

金属と金属の擦れる音がする。

ガードしたグレンの剣を外側に弾き返し、そのまま薙ぎ払い、セイクリッドサークルを放つ。剣先が壁に擦れて、嫌な振動が手に伝わってくる。

戦いにくい。

大振りの私に対して、グレンは片手剣で小回りが効いている。1つ1つ丁寧な剣さばきで、迫ってくる。

正に、訓練された優秀な兵士のそれだ。

開始から、私は防戦を強いられていた。グレンから次々繰り出される剣戟を、時にはかわし、時には弾き、時には身を翻しガードする。

大きな剣が私の足枷となり、かなり押されていた。

エルサイスは少し離れたところで、私たちの戦いをただ見ていた。心配しているのか、呆れているのか、その表情を確認することは出来ない。

グレンが、左から右へと剣を振るう。私はそれをバックステップでかわしながら、グレンが空をかいた剣に、左手を添えるのを見ていた。

グレンは次、右上から左下へ振り下ろす。

そう先読みして、私はそれを下から上に弾き返す。タイミングぴつたり。不意打ちに驚いたグレンは、バランスを崩し、両手をあげたま

ま無防備な格好になった。

私はそれを見逃さなかった。鋭い突きの一撃、破甲衝を叩き込む。グレンの鎧にヒビが入り、防御力が低下する。

「このまま一気に畳み掛ける。」

その焦りが、ミスに繋がった。

突きで前に踏み出した体勢のまま、無理やり体を捻って、下から上に向かってファイアスラッシュを放とうとしたその瞬間、剣が床に引っかかり、バランスを崩してしまった。

「やつべ…。」

思わずそう漏らす。

それを見逃してくれるグレンではなかった。私の剣柄めがけて、強烈な一撃が飛んでくる。なんとか重心をずらして、体への直撃は避けしたが、手が間に合わない。

私は仕方なくデモンブレイドⅡアビスを手放す。

甲高い金属音と共に、私の大剣は後方へ吹っ飛んでいった。

「クロー！」

「エル！手出したら許さねえからな。」

エルサイスの呼びかけに、私はそう怒鳴り返す。

これは私の戦いだ。邪魔は絶対に許さない。

私は丸腰のまま、グレンに突っ込んでいく。

グレンは既に勝ちを確信したような余裕の表情で、剣を振り回す。その剣戟を、私は仰向けにスライディングしながら避ける。剣先が顔のすぐ上を通っていった。すれ違いざま、体を捻りながら手を伸ばし、グレンの腰にあったもう一本の剣を抜き払い、盗む。

「は?!お前！」

予想外のこと、グレンはイラついた声をあげた。

盗んだ剣は、グレンが今振るっている連邦支給の剣に劣る、サブ用のスチールソードだ。武器としての性能はデモンブレイドⅡアビスに遠く及ばないが、そこは私の技術でカバーすればいい。

「これで少しはマシになる。」

私はそう言って笑った。

私は戦うのが好きだ。自分に何ができて、何ができないか、限界を
知りながら、自分が持っている限られたカードで、最大の力を発揮す
る。

ここは、私の自己表現の場なのだ。

「くっそー」

そう毒づいたグレンに、ファイアスラッシュをお見舞する。

もう防戦一方を強いられることはない。リーチを気にせず、私は自
由自在に剣を振るう。

脳天を狙った一撃、スカルティガー。

円を描くように攻撃する、セイクリッドサークル。

上下左右ありとあらゆる体勢から、剣戟を繰り出し、グレンを翻弄
する。

剣と剣がぶつかり合う度、火花が散った。

グレンは剣を構え直すとまっすぐこちらへ突っ込んでくる。私は
それを正面で受け止める。

交えた剣越しに、グレンと目が合う。真剣な顔のグレンに、私は不
敵な笑みを返す。

力は男のグレンの方が上だ。押し切られてしまう。

弾かれて2、3歩下がったところに、グレンが剣を振り下ろしてき
た。そのタイミングに合わせて、さらにその上から剣を振り下ろす。

武器破壊だ。

グレンの剣は柄元から折れ、剣先は後ろへと飛んでいき、床に突き
刺さった。

グレンは折れた剣を見つめ、驚愕を浮かべると、膝をついた。
その姿に、私は持っていた剣を投げ捨て、グレンに返した。

もう勝負はついた。

体が熱い。肩で息をしていた。

「お疲れ様。」

エルサイスがそう言いながら、デモンブレイドIIアビスを拾って
くれた。私は

「ありがとう。」

かすれ声で返事をしながら、それを受け取る。

「久々にヒヤヒヤしたよ。」

エルサイスは笑っていた。なんとなく、怒られると思っていたから、少しほっとした。

「さあ？勝ったけどどうする？」

エルサイスにそう聞かれて、私は戸惑う。

私は戦いたかっただけで、その先どうしたいかなんて、考えもしなかった。

悩んでいるところに、宝箱が目飛び込んで来た。

「あれ開けようかな。とりあえず。」

グレンが動揺した宝箱だ。何か重大な秘密が隠されているかもしれない。

「ペンダントが入ってるかもね。」

エルサイスはそう言いながら、宝箱に手をかけた。

第24話 騙す者と騙された者

宝箱を開けると、中から魔物が現れた。

反射的に、僕とクローバーは武器を構える。

「よくぞ、このような狭いところに閉じ込めてくれたね！人間どもめ！」

魔物は怒りに体を膨らませながら、そう怒鳴った。

大きめの猫の様な出で立ちだ。しかし、後頭部にはフサフサしたたてがみがあり、額には大きな角、手には鋭い爪がある。猫よりは強そうだ。

「ま、魔物……なぜ……!?!」

さつきまでいなかった人の声が、急に割り込んできたので、僕はそちらを見た。

「リーヤンさん！どうしてこんなところに？」

顔を青くしているリーヤンと目が合う。

僕もクローバーも戸惑っていた。魔物の出現も、リーヤンの出現も、まったくの予想外だ。

「魔物ではないわー！我は魔王！かつて名も知れぬ冒険者に、この宝箱の中に閉じ込められたの！」

情報量が多すぎる。色々なことが一度に起こりすぎだ。

クローバーは既に思考を停止し、きつと魔王と戦うことしか考ええないだろう。

僕は必死で今の状況を整理する。

宝箱の中身は、ペンダントでも、財宝でもなく、封印されていた魔王だった。

リーヤンがここにいるのは、おそらく僕らのあとをつけてきたからだ。

なぜあとをつけてきたのか？

「さあ、我が敵はどいつ?!お前?それとそっちの女?」

魔王は血気盛んで、今にも襲いかかってきそうだ。

「キヤアア！」

リーヤンはそう悲鳴をあげると、走り去って言った。

居なくなったら居なくなっただいい。今は考えるキャパが足りない。退出したリーヤンのことは後回しにする。

「お前……騙されたな……。宝箱の中に財宝があるとでも教えられたか……」

グレンが立ち上がりながら言う。

「そうは言っただけで済ませよう。でも、あなたに大事なものを取られたと言うような話は聞きました。」

僕はそう言いうと、クローバーをチラリと見る。悔しさと怒りに顔を歪ませながらも、魔王を睨みつけている。騙されたというワードに相当腹が立っているようだ。

「やつは、かつて世界を混乱に陥れた魔王……。俺の責務は魔王が封印されたこの宝箱を守ること……。そして、復活したら命がけで封印する。それが俺の仕事だ！」

グレンはそう言うと、雄叫びをあげながら魔王に向かって行った。剣はクローバーに折られてしまったので、丸腰だ。

魔王は向かってきたグレンにパンチを繰り出した。

「ぐわあっ！」

グレンは簡単に後ろに吹っ飛ばされていった。先にクローバーと戦った時のダメージが残っていたのだろう。命がけの割には、あつけない戦いだっただけ。

「弱いな、次はお前か？」

魔王が僕らに照準を定める。

「エル、下がってろ。」

「クロ、ダメだよ。まださっきのダメージが残ってる。」

グレンがそうだったように、クローバーにだって、先の戦いでダメージはそれなりに残っている。一人で戦わせることはできない。

それに今のクローバーは、バーサーカー状態だ。騙されたという怒りで我を忘れてる。そんな精神状態で上手く立ち回れるわけがない。

「ゆくぞー！」

魔王はそう言うと、クローバーめがけて先制パンチをお見舞いした。グレンが受けたものと同じやつだ。

クローバーはそれを軽々かわすと、魔王の懐に飛び込み、ファイアスラッシュを放つ。そのまま無理に体勢を変えながら、スカルティガーをねじ込む。

動きが普通ではない。怒りに身を任せ、力でねじ伏せている感じだ。

「(八つ当たりされる魔王もたまつたもんじゃないな。)」

そう思いながら、僕は詠唱を始める。

怒りで無理やり体を動かす戦いは、そう長くは続かない。それは使える体力を前借りして、普段できない動きをしている状態なのだ。適正な体力配分ができないので、消耗が激しく、戦闘が長引けば致命的になる。

僕は援護を捨て、攻撃支援に徹する決断をする。さっさと終わらせてしまった方がいい。

ハイオーラで、物理攻撃力と魔法攻撃力を上昇させる。

クローバーの破甲衝で、魔王が仰け反つたその瞬間、僕はセラフィムウイングを唱えた。三対六翼の羽搏きが、魔王を貫く。

軽い。そう思った時には既に、魔王は地面に倒れていた。

思ったよりも、ずっとあっけなかった。魔王という割には、弱い。

「くっ…….またしても人間…….ときに…….だが…….これで終わりと思うなよ…….」

魔王はそう言うと、黒い霧となり消えていった。

「くっそ…….」

クローバーはそう言うと、膝をついた。相当疲れが溜まっている様だ。グレンとの戦闘のあと、休みなく激しい戦闘をしたのだ。無理もない。

「クロ、大丈夫？」

僕はクローバーに肩を貸すと、立たせた。紙のように軽い体だった。

「不覚…….」

僕らの後ろで、グレンがそう言いながら、よろよろと立ち上がった。「魔王を倒したところで、奴らが滅びるわけではない。魔王は倒してもどこかで蘇る。」

だから、封印していたのだ。悪さをしないように。それを僕らが解いてしまった。

「あんたは誰かに俺が盗賊だと吹き込まれたな。そして、あの宝箱を開けると」

「まあだいたいそんな感じだが、別に盗んだものを取り返そうとは思ってなかった。宝箱は何となく気になって開けただけ。」

クローバーが後悔を滲ませながら言う。

「それでも、盗賊だという情報がなければ、きっと気にもとめませんでしたよ。僕達は。」

僕はそうクローバーを弁護する。それは自己弁護でもあった。

「間違った情報とはいえ、お前にも正義感があったのだろう。」

グレンは僕たちに理解を示し、責めなかった。

僕たちはそれほど正義感があったわけではない。ただ、何となく、手を出してしまった。そんな感じだ。

あの時僕が「ペンダントを盗んだ盗賊かな？」なんて言わなければ、こんなことにはならなかったはずだ。

僕が変な興味を持ったから、余計なことをしたから、そんな後悔が頭の中をぐるぐる回る。

「もう2度とここへ来るな。俺の前には姿を現さないでくれ。」

グレンはそういうと、うなだれた。

「すまない…。」

「申し訳ありません。」

これ以上ここに居て、グレンに謝罪の言葉を浴びせたところで、グレンの気持ちは晴れないだろう。

僕らは言葉少なめに、炎の洞窟をあとにした。

第25話 ネズミ

「リーヤンさんは……いないね。魔王を見て逃げ出したのかな……？」

「あの女……見つけたらぶっ殺す……。」

「クロ、気持ちはわかるけど、殺すのはやり過ぎだよ。」

地上はまだ雨が降っていた。僕たちは近くにあったテントの下に入って、雨宿りする。

クローバーの怒りは、まだ収まっていなかった。腕を組み、イライラしたようにつま先をカツカツと踏み鳴らしている。

僕はというと、もうすでに気持ちを切り替えていた。終わったことをとやかく言っても仕方がない。

今回のことは、僕らではどうにもならなかった。100%悪くないとは言えないが、だからといって、責任の全てを取れる立場でもない。後悔も執着の1つだ。

僕は何かに興味を持ったり、執着したりするのが怖い。

興味を持って手を出せば、今回のように壊してしまったり、執着した結果、結局全て失ってしまったり、そんなことになるのを、ずっと恐れているのだ。

だから、僕はこの世界の色々なものから、距離を置いてしまう。最初から近づかなければ、傷つくこともない。僕はそうやって、いつも逃げている臆病者だ。

「とりあえず、話を整理しようか。」

僕はそういと、人差し指を立てた。

「1つ。リーヤンさんがペンダントを盗まれたというのは嘘だった。」
グレンが盗賊ではなく、本物の兵士だったこと、僕らのあとをつけていたこと、この2つ要素からその可能性が高い。

「1つ。リーヤンさんは宝箱の中身が魔物だと知らなかった。」

リーヤンは宝箱の中身が魔物だとわかると逃げていった。つまり、魔物を解放するためにあの宝箱を開けたかったわけではない。

「まとめ。リーヤンさんは僕らを騙して利用して、あの兵士を出し抜

き、宝箱の中身を手に入れるつもりだった。しかし、宝箱の中身は思ったものと違っていた。それで逃げた。」

「なーんか嫌な予感があったんだ。」

僕の考察を黙って聞いていたクローバーが、口を開いた。

「直感的には、わかってたんだけど……その違和感だけじゃ判断できなかった。」

昨日酒場で話していたことを思い出す。あの時は解像度が足りなくて、気づけなかったが、今はリーヤンの悪意が、はっきり輪郭を持ってわかる。

「仕方ないよ。僕だつてわからなかったし。」

僕らは、ため息をついた。

「最悪の気分だよ。」

クローバーはそう吐き捨てる、うなだれた。

クローバーのそんな姿を見るのは、中々辛いものがあった。

「とりあえず酒場で何か食べよう。」

暖かいものを食べれば、また気分が変わるかもしれない。

クローバーは力なく頷くと、僕の後ろをトボトボついて歩いた。

なんてタイミングだろうか。最悪なのか、最高なのか、判断に困る。酒場に入ると、入口すぐ前のカウンターで、リーヤンと、見たことのない大柄の男が言い争いをしていた。

「ちよつとどーゆーこと!? あなた、すごいお宝があるつて言ったじゃない! 錬金術で永遠の命を得ることができ、命の結晶を国王が隠してるとかなんとか」

「で? なかったのか?」

大柄の怪しい男は、リーヤンの剣幕にビクともしていない。冷静な様子でそう聞く。

「なかったどころじゃないわよ! ヘンな魔物が出てきたのよ!? もう少しで私も巻き込まれるところだったわ!」

リーヤンが狙っていたのは、命の結晶というお宝だったらしい。散々僕らを巻き込んでおいて、自分が巻き込まれそうになったことの

怒りを訴えているリーヤンに呆れる。自分勝手にも程がある。

僕は、今にもリーヤンに切りかかりそうなクローバーの腰に手を回し、制止する。肩を掴むくらいではとても抑えられそうにない勢いだ。

気持ちはわかるが、ここで問題を起こすのは得策ではない。

「なんだ、ガセだったのか。残念だったな。まあご苦労さん。それじゃあな。」

怪しい男はそういうと、立ち去る素振りを見せた。

「待ちなさいよ！こっちはそれなりに動いてるのよ。報酬出なさいよ！」

リーヤンがその背中を怒鳴りつける。

「バカ言っちゃいけないな。モノがねえのに、俺が何を出すって？」

怪しい男がリーヤンを蔑むように言う。

「俺はその命の結晶つてのが本当にあるなら、大枚はたいてでも買い取ってやろうと思った。が、ないなら、払うもんは何もねえ。それだけの話だろう。」

この男もずるいなと思う。

この男はリーヤンに命の結晶を取ってこいといいながら、本当に望んでいたのは、命の結晶が本当にあるかどうか確認することだったのだ。

隠したり騙したり、そんな汚い化かしあいには、僕らはたまたま巻き込まれてしまったようだった。

「オニー・クズー！ろくでなし！」

立ち去る男の背中に、リーヤンが罵声を浴びせる。

「ハハハ、言われすぎててな、痛くも痒くもねえ。そんなこたあわかつてんだろ？お嬢さんも同類なんだからさ。」

男はそう言って去っていった。男の姿を追い、振り向いたリーヤンは、やっと僕らの存在に気付き、驚いた顔をした。

「どうも、リーヤンさん。」

僕は、クローバーを抑えながら、いつもの笑顔を貼り付ける。

「お前…覚悟はできてるだろう？」

クローバーはそう言いながら、剣を抜こうとする。怒りで目が燃えている。

「クロ、ここで暴れたら危ないよ。お店の迷惑になるし。」

僕がたしなめる。

「じゃあ出たところで殺る。」

クローバーは何かと物騒だ。

「騙した私を恨んでる？そうね、でも私も騙されてたのよ。私を恨むなら恨めばいい。でも、あなたたちも恨まれてるのよ。あの兵士に。」

リーヤンはそう言つて、得意そうに笑つた。やっと本性を表したという感じだろう。

僕に言わせれば、その笑顔は、リーヤン自身の汚さ凝縮したような、醜い顔だ。

「勝手なことを！お前が私たちを巻き込まなきゃ、こんなことにはならなかったはずだ！」

クローバーが怒鳴る。

「良かれと思つてやったことでも、裏目に出るなんてことはよくあること。人間なんて多かれ少なかれ誰かを騙してる。その気がなくても、自分の利益になるよう、相手を利用してのよ。あなたも同じ。」

「あなたのような人と、一緒にしないでほしいですね。」

僕は笑顔の表情を崩さず言う。

僕は構わないが、クローバーがこんなゴミと一緒にと言われるのは我慢ならない。

「まあそういう恨まれる覚悟があれば、案外、なんだってできちゃうものよ」

リーヤンはそういうと、甘いマスクでニコつと笑つた。この顔に、騙された男は何人いるのだろうか？ますます不快だ。

「その覚悟ができないなら、何者にもなれず、くすぶるしかないでしょうね。」

リーヤンのその言葉を聞いたクローバーは、僕の腕を乱暴に振り払つた。

「（あ、リーヤンさん死んだかも）」

抑えがなくなつたクローバーは危険だ。再び、押さえつけようと手を伸ばした瞬間

「エルー！」

と、クローバーが叫んだ。僕は思わず止まってしまった。幸い、クローバーはリーヤンに切りかからなかった。そのままリーヤンを睨みつけ

「ネズミはどうして嫌われると思う？」

と聞いてきた。

急に何を言い出すんだと思つたが、僕はここで余計な口は挟まない。

これは長い間彼女と旅をして身につけた、ライフハックの様なものだ。クローバーは、話の途中で疑問を挟んだり、聞き返したりすると、その先を話せなくなってしまうのだ。

最初は話するのが面倒になっているだけだと思つていたが、よくよく聞くと、話したい気持ちはあるが、話の道筋を説明するのが苦手なだけようだった。

疑問や戸惑いを感じても、遮らず話させてあげる。それがベストな対応なのだ。

「うーん……。まあ単純に汚いからじゃないかな？ 不衛生っていうのは、それだけで病気や伝染病の原因になるからね。」

と冷静に答える。

「それなら、自分の悪事を認めず、人間はみんなやってるなんて主語を大きくして、責任逃れしてるこいつと、どっちが汚い？」

クローバーの言葉に、僕は微笑んだ。答えは一目瞭然だった。

リーヤンはたじろぎ、後ずさる。

「何者にもなれないだあ？ 舐めたこと言つてんじゃねーよ。お前みたいにネズミ以下になるくらいなら、何者にもならない方が1000倍ましだ！」

クローバーがそう怒鳴る。

「2度と私の前に姿を現すな！」

クローバーがそう言うのと、リーヤンは走って逃げていった。

去ってくりーヤンの背中を見つめる。どうせ彼女もきつと変わらない。またどこかで誰かを騙して、ずっと生きていくのだろう。みんなやっていると言い訳しながら。

クローバーは肩で息をしていた。怒りでかなり体力を消費したらしい。顔を抑えて、フラついている。

僕はその肩を支えながら、酒場のマスター、ルネツタに、いくつか料理を頼んでテイクアウトした。

「部屋で食べよう。早く休んだ方がいい。」

僕がそう言うとクローバー

「ああ。」

と、どこかうわの空で返事をした。

第26話 反省会

私は魔物が嫌いではない。

目の前に現れて、襲いかかられば、敵だし倒す。それは変わらないが、そこに憎しみや嫌悪感はない。

彼らは、純粹に戦いを求め、ただ真剣な命のやり取りをする好敵手だ。

そこに言い訳や、怨嗟はない。

そんな彼らに、私はシンパシーを感じるし、好感さえ持てる。だからこそ、人間と戦うのは嫌いだ。

私は宿の部屋につくと、ベットに倒れ込んだ。ものすごく疲れていた。

あとから入ってきたエルサイスが、テーブルの上に食事を広げる。とても食べる気にはなれなかった。

枕を抱いて、顔をうずめる。

グレンと戦ったことを、私は後悔していた。魔物になったフジと戦ったときも、そうだった。

戦っている時はすごく楽しいのに、終わった瞬間すべてが色褪せ、冷たく凍っていくような感覚に陥る。

魔物と戦った時にはない嫌な感覚だ。

「クロ？泣いてるの？」

「泣いてない…。」

そう言い返しながら、自分の声が涙で濁ってるのを自覚する。最悪の気分だった。

「珍しいね。」

エルサイスが面白がるような声を出す。嫌なやつだ。

泣きたくないのに、涙は次から次へと零れて、枕を濡らす。かろうじて嗚咽だけは我慢した。

「クロ、好きだけ泣くといいよ。」

エルサイスは、そういうと私の頭を撫でる。それを振り払う気力はなかった。

「僕はさ、クロみたいに、泣けるくらい感情を動かせないんだ。だから、クロが少し羨ましいよ。」

枕から顔を外し、エルサイスの顔を伺う。エルサイスは困ったような、悲しいような表情で、どこか遠くを見つめていた。

「こんなことで泣くなんて、バカバカしい…。」

鼻をすすりながら、エルサイスに言う。

「クロはなんで泣いてるの?」

そう聞かれて、少し考える。考えても答えは出なかった。

「わかんない。」

「そっか。」

私の答えに、エルサイスは笑った。

「なんか嫌なんだ。すごく、胸が苦しい。」

たどたどしく言葉を紡ぐ私を、エルサイスは黙って待っていてくれる。

「エル、もう私は人間とは戦わないよ。人間は魔物よりもずっと面倒で、複雑で…。」

とても私の手に負えるものではない。利害だとか、恨みだとか、正義だとか、色んなものが絡み合っていて、勝っても負けても、後味が悪い。

「こんな思いをするのは、もう嫌なんだ。楽しかったのに、あんなに美しかったのに…。いつも台無しになる。」

人間と戦うと、いつだって楽しいままおられない。高揚感は叩き潰され、達成感も得られず、後悔ばかりが残る。

「誰かと戦うつてことは、いつもそういう問題を孕んでいるのかもね。」

エルサイスはそう言いながら、クロケットを1つ、自分の口に放り込んだ。

物理的に傷つけ合うのだ。問題が起きない方がおかしいのかもしれない。

それでも、人間と魔物は、やっぱり違う。何が違うのか、説明できないのがもどかしい。

「リーヤンさんのことは、どう思ってるの？」

昨日酒場で私がエルサイスに聞いた質問を、そっくりそのまま返された。実際自分が聞かれると、中々困る質問だ。

「もう別にどうでもいいかなって。」

「意外な答えだなー。」

エルサイスはそう言うって笑った。私がまだ怒ってるって思っていたのだろう。「大嫌い」なんて答えを期待していたのかもしれない。

しかし、私は、ネズミ相手に構ってられるほど、暇ではないのだ。

「あんなやつは、殴り飛ばす価値もない。」

人は生まれながらに、持っているカードが限られていると、私は思っている。

私が見えるカードは、私自身が持っているカードと、パートナーのエルサイスが持っているカードだ。

その限られたカードの中で、私たちは最適解を探りながら、人生を歩んでいる。

リーヤンは、自分に足りないカードを、赤の他人を騙すことによつて補充し、目的を達成しようとした。

そんなやり方でしかできないリーヤンを私は蔑む。

カードが無いなら、パートナーや仲間を見つけて、正規のルートでカードを増やせばいいのに、彼女はそれができない。

かわいそうなやつなのかもしれない。

「リーヤンはもうどうでもいいんだ。あの女は変わらないよ。ずっとああやって生きてきて、成功体験もいっぱい重ねてるんだろうし。」

今回はたまたま失敗しただけかもしれない。いつも上手くいってれば、やめられなくなるだろう。

他人を騙すやり方は、パートナーや仲間を作るより、かかるコストが圧倒的に少ないのだ。

でも、それは麻薬のようなもの。コストをケチり続けければ、いつかそのしわ寄せが返ってくる。

リーヤンはもう普通の生き方はできないのだろう。

そうやって私は、リーヤンが重い十字架を背負っていると思うの

だ。罰はその十字架で十分だ。私があればこれ手を出す意味はない。

「私はね、自分の浅はかさとか、軽率さとかを後悔してるんだ。」

口に出したら、また泣きたくなくなってきた。涙がポロポロ頬を伝う。

エルサイスは私に気を使ってるのか、ずっと窓の方を見ている。泣き顔を見られるのは嫌だったから、少し嬉しい。

窓の外は、まだ雨が降っていた。止むどころか、ますます激しさを増し、大きな雨粒が窓を叩き、パラパラという音を立てている。

「クロが浅はかなのも、軽率なのも、いつものことじゃないか。」

エルサイスは中々痛いところを突いてくる。

「わかってるよ！そんなこと！だけど……嫌になっちゃったの！」

私の返しに、エルサイスは大いに笑った。なんだか悔しい。

「クロはかわいいね。」

散々笑ったあと、エルサイスが言った。

「かわいいっていうな。」

本気で落ち込んでいるのに、笑い飛ばすなんて、酷いやつだ。

「クロ、そのままでもいいんだよ。」

エルサイスはそう言いながら、また私の頭を撫でる。

「クロはそういう性格なんだからさ、今更だよ。」

そんなことはわかっているのだ。

慎重とか、冷静とか、そんなカードを、私は多分持っていない。持っていないからこそ、積極性とか、好戦的とか、そういうカードの使い方を控えなければならぬのだ。

鞘がないなら、剣を抜かない。ブレーキがないなら、アクセルを緩める。大事なことだと思うが、それが自分にできるのかわからない。

「クロができないなら、僕がやればいいよ。」

エルサイスはそういいながら、こちらを見た。

「クロができないことは、僕が。僕ができないことは、クロが。それでいいんじゃないかな？」

そう笑いかけるエルサイスから、私は目を逸らした。

なんだか気恥しい。

泣き顔を見られたのもあるが、なんだかよくわからない嬉しさとい

うか、くすぐったさがある。

この感情は何なのだろう？

「さあ反省会は終わりにしよう。もう十分だよ。お風呂にでも入って、ご飯食べて、元気出そう。」

エルサイスの提案に、私はコクンと頷く。

タオルを持ってバスルームに向かう私に

「僕も一緒に入ろうか？」

とエルサイスが言った。

「は？」

私が冷たい目を返すと、エルサイスは嬉しそうにする。こいつは頭がおかしい。

エルサイスは、本当によくわからない。

バスルームで熱いシャワーを浴びると、すべてが溶けていくように心が軽くなった。

そしてこれからご飯を食べて、エルサイスとたわいもない話をし、眠くなったら寝るのだ。

辛いことがあっても、苦しくても、そうして私たちは日常を生きていく。

そして、良くも悪くも、いずれ忘れていくのだ。

それなら、私は私の気の赴くまま、後悔と反省を繰り返しながら、進んでいこう。

番外編くユイゼのストーリーカー前編く

クローバーとエルサイスは、さつきまで国境沿いの道で釣りをしていた。しかし、今日の釣りはあまりいい結果ではなかった。次々釣れるレア度☆1の、ウイリスカープに飽きたクローバーは、釣りを諦めて、魚をコインに交換するため、ネコに会いに連邦まで歩いてきた。城塞都市に入る門のところまで、誰かが言い争いをしている。

クローバーはその声の方を見た。

「ユイちゃん!」

「くーちゃん!」

クローバーのことを、あだ名で呼ぶのは、クローバーが所属しているボンド『シルフィード』メンバーだけだ。

「ユイゼさんこんにちわ。」

エルサイスが挨拶する。

ユイゼはライトキャメルのショートカットをふわふわさせながら、目を細め、ニツコリ笑った。かわいらしさが滲み出ている。

「久しぶりだね。」

クローバーはそう言うと、ユイゼに笑いかける。

クローバーは女の子に甘い。特にかわいい女の子にはサービスがいい。口調も優しくなるし、笑顔だつて見せる。

「どうも、こんにちわ。」

ユイゼのパートナー、セリクが挨拶を返す。金髪のショートカットに、ライトブルーの目、鼻筋の通った好青年だ。

「ケンカですか?」

エルサイスが2人を交互に見ながら聞く。

ユイゼとセリクは、門の下で何か言い争いをしていたようだった。

「いえ、そういうわけではないんですけど…。」

ユイゼは困ったような苦笑いをする。

「エル、そういうこと聞くな。お前はデリカシーがねーなあ。」

「デリカシーがないとか、クロには言われたくないな。」

クローバーの拳が、エルサイスの腹に飛ぶ。

「ぐふっ……。」

腹パンを食らったエルサイスはゴホツつとむせながら、その場に崩れ落ちた。

「くーちゃん!」

ユイゼとセリクが怯えた表情を見せる。

「いつものことだから、気にしないで。」

クローバーはそういうと、何事も無かったようにユイゼに笑いかける。

「本当に腹パン……ゴホツつ……やめて……。」

エルサイスが虫の息で呟く。

ユイゼはオロオロしながら、エルサイスを介抱する。

セリクは自分の腹を押さえて怯えていた。あんなパンチ食らったら、一溜りもないだろうと思う。エルサイスが哀れだ。

「ケンカじゃないんですよ。」

ユイゼは困ったように笑う。

「セリクが、ネコアレルギーで……。」

「ネコアレルギー?」

クローバーが首を傾げた。

「そう。ネコアレルギーで、魚を交換しに行きたいんですけど、一緒に行けなくて……」

「ユイゼちゃん、1人で行かせたくないんだ。」

セリクが真剣な顔でユイゼに言う。

「お前は馬鹿か?」

クローバーが呆れ返ってセリクに言う。

「クロー、口が……悪いよ……。」

エルサイスはそう言いながら、よろよろと立ち上がった。腹パンのダメージがまだ残っているようだった。

「ここから数十mしか離れて無いだろ。赤ん坊じゃねーんだから……心配しすぎ。」

クローバーの言葉に、ユイゼは「そうだそうだ」と言うように、激しく頷く。

セリクは困った顔をする。2対1とは分が悪い。セリクは味方を増やそうと、エルサイスをチラリと見たが、エルサイスは肩をすくめるだけで、援護は期待出来なさそうだった。

「わかってるけど……こないだのこともあるし……。」

「まだ気にしてるの？もう大丈夫だよ！」

以前ユイゼの身に何かあったようだ。それが心配でセリクは離れられないらしい。

「なんかあったの？」

クローバーがユイゼに聞くと、ユイゼは内緒話をしたように、口を手を当てクローバーの耳に顔を近づけた。

「その件でくーちゃんに相談したくて……できれば2人で……。」

ユイゼが内緒話とは珍しい。クローバーは訝しげに思いながらも、「うん」と頷き、承諾した。

「わかった。私がユイちゃんと行ってくるから、お前らここで待ってろ。」

「え、僕も？」

エルサイスが虚をつかれたような声を出す。

「お前もだよ。私はユイちゃんと大事な話があるんだ。」

クローバーはユイゼの肩を抱くと、城塞都市へと入っていく。

「野郎どもはそこで遊んでろ。」

クローバーの言葉に、セリクとエルサイスは、困ったように顔を見合わせる。

そんな2人を置いて、クローバーとユイゼは、街の中へと消えていった。

残された、エルサイスとセリクは、城門前のベンチに座り、休んでいた。男2人で狭いベンチに隣同士で座る光景は、中々しよっぱいものがある。

「君のパートナーは、なんか……男らしいですね……。」

「クロが？そう見えます？」

セリクの言葉に、エルサイスは首を傾げる。

「クロは、あれでかなり、かわいいですよ。」

エルサイスがケロッツとした顔で言う。

「腹パンしてくるのに?」

「それは……やめてほしいですけど……。」

エルサイスは苦笑いしながら、さつき殴られた腹をさする。セリクは呆れたようなため息を吐いた。

「セリクさんは、どうしてそんなユイゼさんが心配なんですか?」

エルサイスがそう聞くと、セリクは真剣な顔になる。

「最近、ユイゼちゃんは、ちよつと変な冒険者に付きまとわれてて……。」

「ストーリーですか?」

「そう……あれはそういう類のもですね。」

事態は思ったよりも深刻そうだ。

ユイゼとセリクは、ちよつと前に、公国で新人冒険者の手助けをしたそうだ。ちよつと一緒に、街の外に錬金素材を取りに行っただけの、簡単な手伝いだった。その時、その冒険者とは、フレンド登録をして、すぐ別れた。

しかし、それから毎日のように、その冒険者からユイゼにメッセージが届くようになったのだ。

最初は挨拶、次に冒険についての質問、ユイゼはマメな性格だから、いちいち返信していたらしい。そして、そのうち「2人つきりで会いたい」というようなことが、何度も送られるようになっていった。

「それ、絶対会っちゃいけないやつですね。」

「デスヨネー。」

セリクがそう棒読みする。

会ったら最後、何をされるかわからない。

「もう無視してるんですけど、まだ送られてきてるみたいで……。」

セリクはそういうと、ため息をついた。

「ユイゼちゃんは優しいし、かわいいから、すぐ狙われちゃうんだよなあ……。」

「クロだつてすぐ狙われますよ。」

「命を？」

「うーん……。そうですね。僕以外はだいたいそつちを狙いますね。」
セリクは頭を抱える。エルサイスでは、話にならない。

「こうなることは、予想出来たのに！」

セリクは、ユイゼに一目惚れしたのだ。

あの日、冒険者になろうと、公国を訪れたとき、大事な髪飾りを無くして、酒場の前でまごまごしていたユイゼに、セリクは声をかけた。ユイゼが振り返った瞬間、セリクは雷に打たれたような衝撃を受けたのだ。

「そりゃ困つてるところを、ユイゼちゃんから声をかけられたら、惚れちゃつてもおかしくないよなあ……。」

実際は、セリクがユイゼに声をかけたのだが、セリクが言うように、逆の形だったら、更に強烈だろう。

「僕も大概ですけど、セリクさんもけっこう拗らせてますね。」

エルサイスが笑い飛ばす。

「うるさいなあ……。」

セリクは不満そうにエルサイスを睨む。

「言っちゃえばいいんじゃないですか？ そのストーリーカーに。」
「何を？」

「ユイゼは僕のだ！ 的な……。」

エルサイスは明らかに笑いを堪えている。

「君さ、面白がつてるだけでしょ？」

セリクは大きなため息をつくと、うなだれた。

エルサイスはその姿を見て

「(まだまだ若いなあ。)」

なんて思いながら、目を細めた。

番外編くユイゼのストーリーカー 中編く

「ストーリーカー？」

クローバーとユイゼは、ネコに魚を与えながら、例のストーリーカーについて話していた。

「うーん……。ストーリーカーかな？」

「はつきりしないな。何か嫌なことされたの？」

ユイゼはクローバーに、公国で手助けした冒険者のことを話した。

「珍しいな。ユイちゃん人見知りなのに。初心者のお手伝いなんて。」

ユイゼは引つ込み思案の上、かなりの人見知りなのだ。クローバーとも、会った当初は、セリクの後ろにずっと隠れていて、まともに会話ができなかった。

今は随分打ち解けて、こうしてクローバーのことを姉御のように慕っているが、ここまでするのは、中々大変で、長い時間がかかった。

「そうですね……。自分でもびつくりです。」

ユイゼはそういうと笑った。

「なんだか、助けたくなくなっちゃったんです。私も、冒険者になる前、セリクにいっぱい助けられて嬉しかったから……。」

公国の酒場の前で、大事な白い薔薇のコサージュを落としたユイゼは、セリクに声をかけられた。ユイゼは人見知りなので、ろくに返事もできなかつたが、セリクと一緒にコサージュを探し、一緒に冒険者の登録にも行き、その後も色々ユイゼを助け、今もずっと一緒に冒険をしている。

ユイゼはそのことに、感謝しているのだ。

ユイゼは、セリクのそれを、無償の奉仕だと思っているので、一方的に与えられるものに、負い目を感じていた。

実際セリクは、恋愛感情にまみれた下心が大いにあるので、それは一方的なものではないのだが、ユイゼは、まだそれがわからない。

「セリクには全然何も返せないから、せめて誰かに恩を返したいって思ってる。」

「私には理解できない発想だ……。」

クローバーは首を傾げる。

クローバーはもらったら、もらいっぱなしだ。返すとか返さないとか、どっちが多いとか少ないとか、まったく気にしない。

「それで助けたら、付きまとわれるようになったってこと？」

「うーん……。付きまといっっていうか、大量のメツセージが届くようになってしまっ……。流石に怖くなって、今は無視してるんですけど、まだ届いて……。」

「それを世間は付きまといっって言っただよ。」

クローバーはユイゼの危機感の無さに、ため息をついた。

優しいということは、一般的に良いことだが、こういった場面では、それが仇になる。ユイゼの優しさが、大事な判断を鈍らせてしまう。

「絶対2人きりで会っちゃダメだよ。」

クローバーの念押しに、ユイゼは申し訳なさそうな顔をする。

「それが……。会っちゃったんです。」

「え？」

クローバーの目が、一瞬点になる。

「だ、大丈夫だったの!? 何されたの? そいつすぐ殺しに行くから! 名前教えて!」

「ちよ、ちよつと! 落ち着いて下さい!」

ものすごい剣幕でユイゼの肩を掴むクローバーに、ユイゼは面食らう。

「な、何にもされませんでしたよ!」

「嘘! でも、デリケートなことだからね、無理に話さなくてもいいけど……。」

クローバーはユイゼが襲われたかと思っっているのだ。襲われたというのは、いわゆる性的なものを含んでる最悪なもののことだ。

「本当に! ちよつと腕を掴まれただけで、すぐ逃げてきたんです!」

数日ほど前、今日のように魚をネコにあげようと、ネコアレルギーのセリクを酒場に置いて、ユイゼ1人でマーケット前に行ったら、例のストーカーとばったり鉢合わせしてしまったらしい。

たまたまなのか、待ち伏せされていたのかは、判断ができなかった

が、とにかく会ってしまった。

「腕を掴まれて、ずっと会いたかったとか、好きだとかいわれたんですけど……私すごく恐くて。」

クローバーが「うんうん」と頷く。

「もうやめて下さい！」ってはつきり言って、振り払って逃げたんです。」

「ちゃんと言えたね！頑張った！」

クローバーは女の子には優しい。

「それから会ってはないんですが、メッセージはまだ届くんです……。」

「懲りねえ野郎だな。」

ユイゼはため息をついた。

「そのことがあってから、セリクはますます心配性になって、ずっと私から離れられないし、私もどこかビクビクしてて、なんていうか……疲れるんです。冒険が全然楽しめない……。」

「辛いよね……。」

クローバーはそう言いながら、ユイゼの頭を撫でる。

「なので、何かいい解決方法がないか、くーちゃんに相談したくて……。」

そう言われたクローバーは、ユイゼをじつとのぞき込む。ユイゼはその様子にたじろく。

「あ、あの……な、何……？」

「ユイちゃんはさ、好きな人はいる？」

まごまごしているユイゼに、クローバーが聞く。

「好きな人……？」

「うんうん。ユイちゃんには、もう既に好きな人がいるって、ストーリーに言っちゃえばいいんだよ。そしたら諦めもつくっしょ。」

「私の……好きな……人……？」

考え込むユイゼの肩を、見知らぬ男が急に掴んだ。

「ユイゼさん！」

「きやあ！」

悲鳴をあげるユイゼ。

クローバーは咄嗟に男にタツクルすると、ユイゼから男を引き剥がした。

思わぬ不意打ちにあった男は、派手に後ろに吹っ飛んでいった。

「レディに気安く触るとは、どういう了見だ？ 躰がなつてねーなあ。」
クローバーはそう言うと、ユイゼの肩を抱き、男の前に立ちはだかる。

「セーロスさん！」

セーロスと呼ばれた男は、クローバーを睨みつける。

ラベンダー色の髪が、右目を覆い隠すように垂れ下がっている。見える方の灰色の左目は腫れぼったく、陰気な感じだ。

「なんだお前は……。俺はユイゼさんに用があるんだ。」

セーロスはそう言いながら立ち上がると、クローバーに向けて、フアントムクローを構えた。

拳武器を使う冒険者は希少だ。拳武器を必要とする拳闘士のスキルは、熟練の冒険者であれば、高いダメージを叩き出せるが、初心者には扱いが難しいのだ。

「なんだ？ やるのか？」

クローバーも剣を構える。

「ああ！ くーちゃんやめて！」

ユイゼはクローバーを止めようと、その腕に縋ったが、クローバーはビクともしない。

「クロー！」

騒ぎを聞きつけて、エルサイスとセリクが走ってきた。エルサイスは武器を構えているクローバーを見つけると、肩を掴む。

「ちよつと！ 何すんだよ！」

「あのね、クロ、世の中には、戦って解決できることなんて、それほどないんだよ。」

エルサイスはそう言いながら、クローバーを後ろに下がらせる。

下がったクローバーの代わりに、セーロスとユイゼの間に、セリクが立ちはだかる。

「セリク！アレルギーが！」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ。」

「いったい何なんだ！俺はただユイゼさんと話がしたいだけなのに！」

セーロスが、イライラしたように言う。

「俺はユイゼさんが好きなんだ！ユイゼさんが拳闘士に憧れてるって言ったから、転職もしたし、ユイゼさんのために毎日メツセージを送ったし、ユイゼさんに会いたくて、毎日ネコの前で待ってたし……」クローバーはドン引きして震え上がっている。気持ち悪い以外の感想が出ない。

「セーロスさんごめんなさい！私にはもう……好きな人がいるんです！」

ユイゼの叫びに、セーロスは驚愕を浮かべる。セリクが一瞬後ろを振り返り、何か期待した目で、ユイゼを見る。

「私は……私は……くーちゃんが好きなんです！」

エルサイスが爆笑した。セーロスとセリクはあまりのことに驚いて固まってしまった。

ユイゼの指名を受けたクローバーは、剣を下ろし、頭を抱えている。

「ユイちゃん……気持ちは嬉しいが、そうじゃない……そうじゃないんだよ……。」

「えっ？え……？」

混乱したユイゼは、助けを求めてクローバーとセリクを交互に見たが、どちらも援護できそうな精神状態ではなかった。

ユイゼは盛大にズレている。どうしてこうなってしまったのか、誰もわからない。

「さあどうします？セリクさん。このままで本当にいいんですか？」

エルサイスが面白がって笑いながら言う。

「(他人事だと思いやがって……)」

セリクがそう、心の中で毒づく。

セリクは、エルサイスもクローバーも、どっちも苦手だ。この2人と自分は、相性が悪いと思っている。とにかく波長が合わないのだ。

乱暴者ですぐ手が出るクローバーと、何を考えているのか全くわからないエルサイス。どっちもセリクには理解できない。

「セリク……。」

ユイゼが継るような目でセリクを見る。

「ここで引いたら男がすたるぞ。」

クローバーがけしかけてくる。

「(本当に、うるさいやつらだ。)」

セリクはため息をつくど、顔を上げ、決意を込めた目で、セーロスを睨んだ。

番外編くユイゼのストーリーカー 後編く

「ユイゼは、僕の大事なパートナーです。君に渡す訳にはいきません。どうしても言うなら……」

セリクはそう言いながら、ファントムソードAを構える。

「セリクー！」

ユイゼが心配そうな声をあげる。エルサイスがそんなユイゼの肩に手を置き、下がらせる。

「男の戦いだ。手や口を出すのは、野暮ってもんだよ。」

クローバーはそう言いながら、口元に笑みを浮かべている。この状況を楽しんでいるようだ。

「お前……ずっと気に入らなかったんだ。いつもいつもユイゼさんの近くにいる、俺の邪魔ばかりしやがって。」

セーロスは灰色の目を光らせると、セリクに向かって拳をまっすぐ打ち付ける。拳闘士のスキル、正破だ。

セリクはそれをシールドオブシリウスで受け流すと、反撃にファイアスラッシュをセーロスの脇腹にお見舞する。

セリクの攻撃をまともに食らったセーロスは

「うぐっ……。」

と呻き声を漏らしたが、倒れはしない。

「思ったよりも根性あるな。」

クローバーは完全に他人事だ。腕組みしながら2人の戦いを見ている。

「ユイゼさん、2人ともあなたのために戦ってるんですから、ちゃんと見てないとダメですよ。」

エルサイスが、オロオロしているユイゼに、声をかけた。

「で、でも……！」

ユイゼはこんな展開は望んでいないのだ。勝手に物事が進んで行く状況に、ユイゼは恐怖と、何もできないもどかしさを感じていた。

セーロスが、轟音を響かせながら、轟雷を放つ。セリクは音に顔を歪めながら、盾でガードする。

「あーあれ、次、嵐の多段攻撃くるよ。」

クローバーがそう先読みする。

「多段攻撃?」

「拳闘士のスキルは特殊なんだ。正しい順番でスキルを発動させてバフをつけると、最後に多段攻撃で高ダメージが出せる。」

「そんな!セリクが危ない!」

「大丈夫、嵐がくる前に殺ればいいんだよ。」

「これで、終わりです!」

セリクがそう言つて、ペネトレイトを放とうとした瞬間、大きなくしゃみが連続で出た。

「ああ!!こんなときにネコアレルギーが!」

ユイゼが泣きそうな声を出す。

セーロスは、セリクの間を見逃さなかった。セリクの剣を拳で弾くと、嵐を連続で叩き込むため、腕を振り上げる。

その時

「ダメー!」

エルサイスの手をすり抜けたユイゼが、セリクの前に飛び出し、庇った。

セーロスは、慌てて拳を引つ込める。

「やめて下さい!セリクは……セリクは、私の……」

全員が、ユイゼの次の言葉を待っていた。

「私の……大事な人です!」

ユイゼがそう叫ぶ。

一瞬の沈黙の中、セリクのくしゃみが響く。

クローバーとエルサイスが爆笑する。

「え?えええ?」

ユイゼはなぜ笑われたのか、わかっていない。

「中々難しいもんだね。」

クローバーが目の端の涙を拭いながら言う。

「いやー、本当、若いね。」

ユイゼは自分の中の『好き』の意味に気がついていないのだ。それ

が『大事な人』という言い方に表れている。

「セリクさんも苦労するよ。」

セリクはくしゃみが止まらず、ユイゼの介抱を受けていた。

「ユイゼさん……僕は……。」

セーロスが、悲しい顔でユイゼを見る。

「答えはわかるだろ。ユイちゃんはセリクを庇って、お前は庇わなかった。」

クローバーの言葉に、セーロスは拳を下ろすと、うなだれた。

「ごめんなさい……。私はセーロスさんのことは……。」

「いや、もういいよ。すまなかった……。」

セーロスはそう言うと、くしゃみが止まらないセリクを見た。

「俺は、お前になりたかったよ。」

恋に破れたセーロスは、悲しそうに背中を丸めると、静かに去っていった。

「ユイゼちゃん、くしゅん！だ、大丈夫？くしゅん！」

「私はなんともないけど、今はセリクの方が心配！」

ユイゼはそう言いながら、セリクの口元にハンカチを当てる。

「とりあえず酒場に避難しようか。」

クローバーの声にみんな頷くと、4人は酒場に移動した。

酒場に入ると、邪魔にならないよう奥の席に座った。

ユイゼから素材を受け取ったエルサイスは、合成したネコアレル

ギー用の薬を、セリクに渡す。

「ありが……くしゅん！とうございます……くしゅん！」

セリクはくしゃみをしながら、水でなんとか薬を喉の奥に流し込む。

「あー、ほら、蕁麻疹まで出てるじゃない！」

ユイゼがセリクの背中をまくりあげながら言う。

「ダセエな。」

クローバーはそう言いながら、ウェイトレスを呼び止めると、適当な料理と飲み物を注文する。セリクがどうなろうとお構い無しだ。

「あー、僕ビールくださいーい。」

エルサイスが追加注文する。

自由な2人だ。

「ちつくしゅん！仕方ないじゃ……くしゅん！ないですか！……くしゅん！」

セリクはアレルギー反応のせいで、会話するのも困難な様子だ。

「無理ばかりして！アレルギーは恐いんだよ！酷いと死んじゃうんだから！」

ユイゼはそう言いながら、怒ったように頬を膨らませる。

「まあまあ、ユイゼさん、セリクさんもあなたを守ろうとしたんですから、そう怒らないであげてください。」

エルサイスがユイゼをなだめる。

「それで逆に守られてるんだから、世話ねーな。」

クローバーがウエイトレスが持ってきたクロケットを口に放り込みながら揶揄する。

セリクは言い返すことも出来ずに、うなだれた。

「セリク、セリクの気持ちはずい嬉しいの。でもね、セリクが私を心配するように、私もセリクが心配なの……。」

ユイゼはそう言うと、薬が効いてくしゃみの止まったセリクの手を握る。

「ユイゼちゃん……。僕はユイゼちゃんをあいつに取られたくなかったんだ。」

ユイゼはわかつてると言うように「うんうん」と頷く。

「ユイゼちゃん、僕は！僕はユイゼが……」

「セリクは私の大事な人なもの。どこにも行かないよ！」

フラグクラッシャー選手権があれば、きっとユイゼが優勝するだろう。

クローバーとエルサイスは、顔を見合わせると笑った。

「ユイゼちゃん……。ち」

セリクは一瞬悲しい顔をしたが、すぐに

「ユイゼちゃんらしいよ。」

と言つて微笑んだ。

それから4人は、少し早めの夕飯を一緒に食べた。

「セリクさんビールはいかが?」

エルサイスがセリクにジョッキを勧める。

「バーカ、セリクもユイゼも未成年だよ。」

クローバーはそう言いながらプロシエツトにかぶりつく。

「やけ酒もできないなんて可哀想だね。」

エルサイスは仕方なく、セリクに勧めたジョッキを自ら飲み干した。

「さつき見たら、セーロスさんフレンド解除になってました。」

ユイゼが安心したような、そしてどこか悲しいような顔で報告する。

とりあえず一件落着きというところだろう。

恋とは難しいものだ。自分の1番好きな人が、自分を1番好きになつてくれる。言葉にすれば簡単に思えるが、それが叶うのは、本当に奇跡なのだ。

「ユイゼちゃん、服にシミが!」

パスタのソースを服に跳ねさせたユイゼの胸元を、セリクが布巾で叩いて拭き取る。

「ありがとう。セリク。」

ユイゼも平気な顔でそれを受け入れている。

「(あー胸触ってるー。そういうことは普通にやるんだ。若いっていいなー。)」

エルサイスが目を細めながらその様子を見ていた。

ユイゼとセリクのように、お互いが1番とわかっていても、中々叶わないことだってある。

「セリク、これからもずっと一緒に旅しようね!」

「うん、ずっと一緒に。」

ユイゼとセリクはそう微笑み合った。

今は叶わなくても、若いユイゼとセリクの旅路は、まだまだ長い。その先で、いつか2人が幸せに結ばれることを、エルサイスは密かに

願
っ
た。
。

第27話 レイカとカツツとフエンダーク

久々に不老不死の村にきた。

フジとフニエのことがあってから、避けていたのだが、料理の錬金素材にどうしても牛乳が必要で、採取しにきたのだ。

採取ポイントがあるこの家畜小屋の前で、少女に声をかけられた。

「あ、こんにちわー」

「こんにちわ。」

「どうも。」

僕とクローバーが挨拶を返す。

「君、この村の人じゃないわよね？外からきたの？」

「そうですよ。僕たちは冒険者ですから。」

僕が少女と話している間、クローバーは我関せずで、家畜小屋の奥に回り込み、牛乳を採取していた。

クローバーは自分が興味を持てることしかしない。それは本当に徹底していて、感心してしまう。

「私はレイカー！この小屋をお父さんとお母さんから引き継いで、切り盛りしてるの。」

少し日焼けした健康的な肌に、頬にはそばかす。乾いた金髪の髪を、ポニーテールにしてまとめている。レイカと名乗った少女は、まだあどけない顔で笑った。

「(15, 6歳かな？まだまだ幼いな。)」

若くして仕事を持つのは大変だろうなと思う。

僕らは彼女より随分年上だが、こうして自由に旅ができている。それはそれで恵まれているのかもしれない。

「両親は何年前か前に死んじゃってね…。でも、全然大丈夫！村の人たちもいるし、ここで飼う家畜は、私の家族でもあるの！」

村の外からきた人が珍しいのだろう。レイカは饒舌だ。救済者のおかげで訪問客が増えているとはいえ、ここはまだまだ田舎だ。僕たちのような旅人が訪れる回数は少ないようだ。

「今はこのカツツが私の家族。この子がいれば全然寂しくないのよ

！」

「家畜に名前をつけるなんて、珍しいな。」

牛乳採取から戻ってきたクローバーが言った。

「いずれ食肉になる家畜は、ペットとは違う。情がわからないよう、名前をつけなくて昔本で読んだが…。」

「レイカさんにとっては、家族だからじゃない？」

僕の返答に、クローバーは

「そんなものか。」

と呟くように言うと、帰り支度を始める。元よりレイカにも、豚のカツツにも、あまり興味がなさそうだ。

「カツツ？おいしいお肉になって、みんなの栄養になろうねえ。」

レイカがそうカツツに語りかける。

家族と言いながら、それを食べる想定をすることに、何となく違和感がある。

しかしながら、生きていく上で、特にこの不老不死の村の人間は、食肉が欠かせない。

家族のように大事に育てて、最後は食べる。それが畜産業の運命なのだ。

「カツツ……？」

僕らが立ち去ろうとしたとき、レイカが心配そうな声を上げる。

僕もクローバーも、その声に思わず立ち止まって振り返った。

「どうしたんですか？」

とりあえず聞いてみる。

「何日か前から調子が悪くて、ぐったりしてるの。鳴くことも少なくなっちゃったし……。」

レイカはそう言いながら、不安そうに眉を下げる。今にも泣き出しそうな表情だ。

「カツツが話せたら、原因もわかるかもしれないのになあ。」

その言葉を聞いたクローバーは呆れ返った顔をした。

「豚がしゃべるわけないだろ。そんな怪奇現象勘弁してほしいね。」

動物が話すなんて、おとぎ話の世界だ。滑稽で馬鹿らしい。いや、

実際本当に動物が話出したら、きつと面倒だ。滑稽なんて笑っていられる事態ではないかもしれない。

「カツツ……どうしちゃったの？ねえ、私に教えてよ……？」

レイカは不安そうにカツツを見つめていた。

「はい、できたよ。」

「お、きたきたー！」

採取した牛乳を使って、ドフィンワーズを合成してあげた。クローバーはそれを嬉しそうに受け取ると、満面の笑みで一口食べた。

「あつふいー！」

ドフィンワーズの熱さにハフハフしているクローバーを見るのは、これで2回目だ。何度見てもかわいらしい。

ここは公国の酒場。ドフィンワーズは連邦の郷土料理なので、公国にはないメニューだ。それなのに、クローバーがどうしても食べたいと言いつ出し、わざわざ牛乳まで取りに行つて、僕が合成して作ったのだった。

かなり面倒だったが、クローバーのこの顔を見れたのだから、文句はない。

「体があつたまるねー。」

クローバーはそう言いながら、一口、2口と、スプーンを運ぶ。

「よう、久しぶりだな。」

そう声をかけてきたのは、フェンダークだ。

フェンダークとは、中々長い付き合いだ。初めて会ったのは、僕とクローバーが冒険を始めて間もない頃で、隙を見せて魔物の追撃にあいそうになったところを、助けてもらったのだ。

その時から彼は、僕らの前に度々現れては、助言や、手助けをしてくれる。

フラフラその辺を渡り歩いているようだが、冒険者っていうわけでもなさそうで、謎の多い人物だ。

「最近なにかおもしろいことはなかったか？」

フェンダークが、クローバーの隣に腰を下ろしながらいう。

「別に何も無いよ。」

「つまんねーな。」

フエンダークはそう言いながら、ウエイトレスを呼び止め、ビールと料理をいくつか注文する。

「あーそうだ、フエンダーク。動物がしゃべるようになる方法ってある？」

クローバーが思いついたように聞く。

「無いわけじゃないが、何か必要なのか？」

僕はレイカとカツツの話をフエンダークに説明しながら、合成したばかりのドフィンワーズに口をつける。熱くて美味しいが、ポリウムが足りない。ウエイトレスにプロシエツトを注文しておく。

「なるほど…。たしかに愛着あるモノが死ぬのはかわいそうかもしれないな。」

「愛着ってというか、収入源だよな。」

ドフィンワーズを食べ終わったクローバーが、口の周りを拭きながら言う。

「病気になった獣を助けたいなら、方法はなくもないんだぜ。魔物の力を使えばいいんだよ。」

僕もクローバーも、眉を寄せる。話の雲行きが怪しくなってきた。「そうすれば、話が出るようになって、何が悪いかわかるかもしれない。治療もできる。」

魔物の力は中々万能だ。人を不老不死にしたり、動物を話せるようにしたり、すごい力を持っている。だからこそ使い方を気をつけなければならぬと思う。

「便利なもんだな。」

クローバーが食後の紅茶を飲みながら言う。

「やるのか？」

フエンダーク届いたビールに口をつけると、一気に煽った。

「さあどうでしょう？」

別にはぐらかしたかったわけではない。本当にどうするかわからないのだ。僕はレイカにも、カツツにも、あまり興味はない。クロー

バーだって大概だろう。ただ何となく聞いただけに過ぎない。

「人のやることに口を出すつてことは、相手の人生を左右することなんだぞ。」

ビールの泡を手の甲で拭いながら、フエンダークが言う。

「大げさな。」

クローバーはそう言つて、フエンダークを笑い飛ばした。フエンダークは少しムツとした顔をする。

「俺は人を罵倒する。悔しきつていうのは時として、人生の障害を乗り越える大きな力になるもんでな。そのあと、そいつは障害に立ち向かうたびに思い出すんだよ。俺に罵倒された、つてな。」

そう自信たつぷりに笑うフエンダーク。

中々の悪趣味だ。

僕には、フエンダークの気持ち理解できない。僕は誰かの心にな残りたいなんて、思ったことが1度もないからだ。残ったところで何になるのかさっぱりわからない。

「それが痛快で、人の人生に介入するのをやめられねえんだ。」

「お前、思った以上に最低なやつだな。」

クローバーが冷たい目を返す。フエンダークは肩をすくめるだけで、何も言い返さない。自分でも、最低だつてわかつてやっているのかもしれない。

「障害を乗り越えるのに失敗したらどうするんですか?」

「そんなときは、なに、自分のことじゃねえんだ。気にせず『見て見ぬ振り』しろ。そうしないと、失敗を恐れて、何も動けなくなつちまう。」

随分無責任にも聞こえるが、一理あるように思える。

「今回のことというなら……。家畜はなんのために生きている? 第3者が手を出していい話題か、よく考えて動くんだな。」

フエンダークをそう言い残すと、席を立ち、去つて行つた。

「どうする?」

僕がクローバーに聞く。

「別にどうもしないよ。興味ないし。」

そう言うだろうと思つていた。

「私はフエンダークの気持ちが変わらんよ。他人の口出しで、自分の心が動いた経験がないからね。誰がなんと言おうと、私の人生に介入できるのは、私だけだ。」

クローバーはそう言うと、つまらなそうにあくびをした。

僕もクローバーの意見におおむね同意する。

「でも、レイカさんはどうだろうね?」

「さあ?好きにすればいいんだよ。『他人に言われたから』で、動くよ
うなやつは、そんなような人生をおくるだけさ。」

クローバーはそう言いながら、頬杖をつくと、眠そうに目を瞑った。
と、思ったら、ハツとしたように顔を上げ、乱暴に立ち上がった。

「どうしたの?」

急な動作に、僕はたじろぐ。

「あの野郎、食事代置いていかなかった!くっそ!食い逃げしやがっ
てええええ。」

クローバーはイラついたように伝票をテーブルに叩きつけると、乱
暴に座った。

「今度会ったら倍の金額払わせてやる。」

あのフエンダークのことだ。のらりくらりとかわして、きつと一銭
も払わないだろうなと思う。

僕は到着したプロシエットにかぶりつく。肉はジューシーで、柔ら
かく、うまい。

カツもいずれ、こうやって食べられる運命なのだ。そこに善悪は
ない。

僕は食べ物に感謝しながら、残さず料理を平らげた。

第28話 原野の湧き水を求めて

「あれ、レイカさんじゃない?」

エルサイスの声に、私は顔を上げる。

「誰だっけ?」

雪山と草原の川辺に、金髪のポニーテールの女の子が立っている。そばかすだらけの顔を見ても、誰だかさっぱり思い出せない。

「3, 4日前に、不老不死の村で見たじゃないか。」

エルサイスにそう言われて、記憶を掘り起こす。少し思い出した。家畜の豚に、カツツという名前をつけていた女の子だ。

あの日のことは、どちらかというところ、フェンダークに食い逃げされたことの方が印象深く残っていたので、彼女の存在はすっぱり抜け落ちていた。

「何してんだらうね?」

村や街の外は、魔物がウロウロしている。武器も持たずに、丸腰で出歩くのは中々物騒だ。

「声かける?」

エルサイスの質問に、私は少し考える。フェンダークが言ったことを思い出していた。

フェンダークは私に、第3者が手を出していい問題か?と疑問を投げ去っていった。

そんなこと、私にはわからない。

ただ、今までの経験上、私が手を出したところで、どうにかなったことなんて何一つなかった。

運命なんて言葉はあまり好きではないが、私が声をかけようと、かけまいと、物事は変わらず進んでいってしまうのだ。

フジの件も、リーヤンの件も、私の手の中を、物事があつという間に流れ落ちていった。いくらすくっても、指の隙間からこぼれ落ちていく水のように、どうすることも出来なかった。

何をしても変わらないなら、私はしたいようにするだけだ。

「こんなところで、何してるの?」

私はレイカに近づき、声をかけた。

私たちが声をかけると、レイカは驚いたが、同時にどこか安心したような顔をした。

そして、どうしてこんなところにいるのか、説明し始めた。

レイカの話はこうだ。

カッツはあれから、ずっと元気がなかった。そこに、村の人たちを不老不死にしているという噂の、新興宗教の救済者ケイトが現れた。

「こちらのお子さんの体調が悪いとお聞きしたのですが……」

とレイカに声をかけたケイトは、不老不死の技術を使えば、豚を元気にすることが出来る。と言った。

不老不死の施術を受けるには、獣の穢れを取るため、『聖水』が必要だとケイトに言われたレイカは

「穢れだなんて……カッツは私が丹精こめて育てた、美味しい豚なんです。」

そう反論したらしいが

「いくら愛情を注いでも、人間とは異なるもの。『聖水』は必要なので。」

とケイトに言われ、その聖水の原料である『原野の湧き水』を1人で取りに来たらしい。

一通り話を聞いた私たちは、眉を寄せる。

「またあいつかよ……。」

懲りない救済者だ。

ケイトが言っている不老不死の技術というのは、人間を魔物化するものだ。同じ技術を使うということは、豚を魔物化する気らしい。

「なーんか、フェンダークが言ってた話と一緒にだな。」

この時私は、いくら魔物化したとしても、豚が話すようになるなんて、針の先程も思わなかった。

「いくら必要だからと言って、無防備のまま1人で村の外に出るのは危険ですよ。」

エルサイスがレイカを注意する。

「でも……。」

そう一瞬目を伏せたレイカは、ハツとしたよう顔をし、

「それなら、お願いできないかな?」

と私たちに懇願するような目を向ける。

「もし、取ってきてくれれば我が家に古くから伝わる『ケバブ』のレシピをあげるよ。」

私は「どうする?」というように、エルサイスを見る。エルサイスは

「まあレシピが増えるのは嬉しいよね。」

と言うだけで、やるのか、やらないのかは言わない。はつきりしないやつだ。

私は本音を言えばどうでもいい。ただ、ここでレイカを放っておいて、そのあとレイカが魔物に襲われて怪我をしたとか、最悪死んだとか、そういうことになったら嫌だと思う。

話かけた時点で、もう関わってしまったのだ。ならば最後まで責任を持つ。

「わかったよ。いくつ必要なんだ?」

私がそう言うと、レイカは嬉しそうに顔を輝かせた。

私は水が好きだ。水がいつぱい集まって、ゆらゆら揺れたり、流れていくのを見ると、なんだか落ち着く。

原野の湧き水を取るため、私たちは雪山と平原の川辺を、上流の方へと歩いていった。

私の後ろを、エルサイスがついて歩いてくる。

私は振り返って、エルサイスの顔を伺う。

「どうしたの?」

「いや、別に……。」

そう言いながら、目を逸らす。

「自信ないの?」

エルサイスに言い当てられて、私はバツの悪い顔をする。

これは呪いだ。リーヤンのことがあってから、私は色々なことに臆病になっている。これは手を出していいのか?そればかり考えて、が

んじがらめになっていた。自分の行動や選択が、間違っていないか、ビクビクしているのだ。

「クロらしくないね。」

「私らしいってなんだよ。」

「クロはもつと後先考えないって言うか……」

「それ悪口？」

「私がムツとして返すと、エルサイスは笑った。

「褒めてるんだよ。」

とても褒められているとは思えない。

私は後先考えないで突っ走って、失敗ばかりしている。一度火がつくと、振り返れない、ブレーキが効かない、どこまでも走っていつてしまう。喜怒哀楽の感情に、理性がついていかないのだ。

リーヤンの件だって、楽しいと思ったら、止まれなくなってしまって、結果、取り返しのつかないことになった。

私はとにかく感情的で、理性の働きの弱い。

「僕は、クロのそういうところが、良いところだと思うなあ。」

「お世辞は要らない。」

「お世辞じゃないさ。チャンスを掴むのは、いつだって行動した人だ。」

エルサイスはそう言うと、私のロウポニーに結んでいる髪の手先を優しく撫でた。

「慎重に考えてるうちに、チャンスはすぐ逃げていくものだよ。」

「それでも、後悔することが多いよ。」

「やらない後悔より、やった後悔の方がマシさ。」

後悔しないということが、無理なのかもしれないと思う。それなら、エルサイスの言うことに分がありそうだ。

「それにさ、絶対的な『正しい』がないように、絶対的な『間違い』もないんじゃないかな？」

目からウロコ。暗い雲の隙間から、光が差し込むような感覚が、私を満たす。影が薄れ、世界が彩りを取り戻す。

私の表情の変化を察したのか、エルサイスが嬉しそうに微笑む。

なんだからわからないが、ちよつと悔しい。

「それに、本当に危ないときは、僕がブレーキになるよ。」

エルサイスはいつも私を止めようとしてくれる。肩に手を置き、呼びかけ、諭す。それは確実に、私の抑止力になっている。

しかし、私は、そんなエルサイスさえ吹っ飛ばして、暴走してしまうことがある。

「それでも止まれなかったときは？」

「そしたら仕方ないから、僕も一緒に走るだけさ。1人では行かせないよ。」

一緒に責任をとるということだろう。ちよつと心強い。

エルサイスは撫でていた毛先を離すと、その手を私の頭に乗せ、ちよつと乱暴に髪をクシヤツとしてくる。

「いつものようにすればいいんだよ。」

私は、いつものように、好きなことを、好きなようにやればいいのだ。1人ではないのだから。

なんだか、急に恥ずかしくなって、私はエルサイスの手を振り払うと、走り出した。

「さつきと原野の湧き水を取って、あの女の子のところに持っていこう。」

私がエルサイスにそう呼びかけると、エルサイスは、おかしそうに笑った。

私のことなど、すべてお見通しという感じだ。エルサイスの前では、何も取り繕えない。

それが嫌で、そして、それが心地いい。

私は、エルサイスを引き離すように、川の上流に向かって、ダツシユした。

第29話 嘘つきの顔

原野の湧き水を渡すと、レイカは嬉しそうに笑った。

「ありがとうございます！…これでカツツが元気になるかどうか、それはわからないけど……。少しでも可能性のある話ならお願いしたいの。」

まさに藁をも掴む思いだ。

宗教というのは、弱者を救済するためにあるものだど、僕は思う。

しかし、世の中には、弱者に寄り添う振りをしながら、既に弱っている者から、さらに搾取しようとする輩らが、ごまんといえるのだ。

宗教の中にも、そういう団体は少なからずある。

彼らは弱者を探し求めている。搾取するために、藁をも掴む者達を食い物にしているのだ。

そんな人たちにとって、今のレイカは格好の餌食だろう。

でも、豚を魔物化して、ケイトたちに一体何の利益があるのか、僕には皆目見当がつかない。

そこがわからないままなので、僕はこの件を、止めることができないでいる。

「あの人たちが村のみんなを不老不死にしているのは本当なんですよ？ だったら、それに賭けてもいいと思うの。」

不老不死の技術は、そんな素晴らしいものではない。奇跡なんてキレイな言葉で飾られているが、中身はおぞましい呪いだ。

「なんか、悪魔に魂を売り渡すような気分だよ。」

クローバーが眉間のシワを深くしながら言う。

ケイトたちの意図はわからない。ただここで黙ったまま、レイカに別の道を示さないのは、まずい気がする。真実を話して、レイカに選択を迫った方がいい、クローバーはそう思ったのだろう。

不老不死の技術の秘密をレイカに教えようと

「おい、不老不死の技術っていうのはな……」

そう話し出したところに

「原野の湧き水を持ってきましたか？」

と、ケイトが突然現れた。

「ああではそれをこちらへいただいた。」

ケイトはそう言いながら、手を差し出す。

僕らは、突然現れたケイトのせいで、真実を話すタイミングを完全に失ってしまった。

わざとだろう。偶然にしてはタイミングが良すぎる。

「お前……。」

「あら？あなたたちは……お久しぶりですね。」

クローバーの悪態に、ケイトは笑みを返す。

嫌な笑みだ。リーヤンと同じく、内面の醜さが滲み出ているように感じる。

ケイトはレイカから、原野の湧き水を受け取ると

「そちらのカッツくんを、私どもでお預かりしましょう。儀式の場へお連れします。」

と言った。

今から僕が不老不死の真実をレイカに話したところで、目の前のケイトが、すぐに否定するか、誤魔化してしまうだろう。

ただでさえレイカは追い詰められている。人は追い詰められると、信じたい方を真実だと思い込むものだ。

僕たちの言葉を信じる可能性は低い上に、嘘をつくなど反撃を食らうかもしれない。

「私も……。」

レイカはカッツに付き添うつもりで食い下がった。

「ごめんなさい。あなたはここで待っていて下さい必ずや、あなたの想いに応えて、この子の病気を治してみせますから。ね？いいですか？」

有無を言わせぬケイトの態度に、レイカは

「はい……。」

と答えるしかなかった。

「では……。」

と言うと、ケイトはカッツを連れて、去っていった。

「カツツ……大丈夫、かしら?」

レイカが心配そうに目を伏せる。

「どうだろうね。」

クローバーが気のない返事をする。

嘘でも「大丈夫」と言わないところが、クローバーらしい。

「……でも、きっと大丈夫ですよね!悪い方に考えたら、悪いことしか起こらないもの。いい方に考えていけば、いいことしか起こらないわ!」

「そうですね。」

僕はそう言うと、レイカにニツコリ笑いかけた。

心にも無いことを、しれつと言う。僕は、人が望んでいる言葉を与えるのは、得意なのだ。たとえそれが嘘だとしても。

悪い方に考えたら、悪いことしか起きないということは、まあまああることだが、いい方に考えていても、悪いことは起きるものだ。世の中そんな簡単ではない。

しかし、そんな正論をレイカにぶつけたところで、どうにもならない。

人が正論で動くなら、世の中はもっと楽に回っている。そうではないから、面倒なのだ。

レイカは僕の言葉で自信を持てたのか、嬉しそうに笑った。

僕はそこに、罪悪感も後ろめたさも感じない。嘘でも心が救われることはあるのだ。

「行くか。」

クローバーの声に続いて、僕らは家畜小屋を離れた。

「お前は本当に嫌な奴だな。」

家畜小屋から少し離れた広場の、小さな噴水の前で、クローバーは足を止め、僕に軽蔑の目を向ける。

「何が?」

「わざとらしくとぼけやがって。」

僕は思わず

「ふふっ……。」

と笑い声を漏らす。

「(クローバーはまつすぐでかわいいなあ。)」

そんなようなことを思う。

「何笑ってんだよ。」

「別に……ははは。」

クローバーの拳が僕のお腹めがけて飛んできた。

「ぐふっうー！」

思わぬ不意打ちに、まともに食らってしまう。

「ぐっ……うつつう……ケホケホ……。」

むせながらその場にうずくまる。

「ちよ……本当に……ゴホッゴホッ……腹パンやめ……て……。」

僕が苦しみながら抗議する。

「うるせえ！黙って殴られとけ！」

クローバーは中々理不尽だ。

クローバーは、気に食わないことがあると、すぐ僕のお腹にパンチを食らわせてくる。

これが当たると、息ができなくなるくらい痛いのだ。

「すぐく……痛い……。ゴホッ……。」

「んなの、当たり前だろ。痛くしてんだから。おめーが心にも無いことを、息するように言うのが悪い！」

クローバーは僕の嘘が大嫌いなのだ。

僕は、その人が言われたことを予想して、それが事実や、僕の思いに反していたとしても、言っただけだ。相手はそれで満足する。

それは余計な波風を立てないための、僕の処世術なのだ。

しかし、クローバーからすれば、僕は『不誠実』に見えるらしい。自分にも、他人にも『正直』なクローバーらしい見解だと思う。

クローバーを見ていると、本当に感心する。

その歯に衣着せぬ『正直』な物言いは、他人に嫌われることが多い。しかし、クローバーは、誰に嫌われようと、恨まれようと、全く気にしないのだ。

罵りを受けたり、逆恨みされたり、苦勞もそれなりに多い。それでも、お世辞をいったり、誤魔化したり、心にも無いことは言わない。僕は、そういう衝突が面倒で、すぐニコニコ笑って誤魔化してしまう。

敵は少ない方が動きやすい。僕は円滑な人間関係のためなら、多少の我慢と嘘は気にならない。

僕は、相手を思いやるふりをしながら、自分を守っているだけなのだ。

こんな嘘つきの僕よりも、何でもまっすぐ正直に伝えてくれるクローバーの方がよっぽど『誠実』なのだが、世の中は中々それを認めない。

結局みんな、自分に都合のいい言葉しか、聞きたくないのだ。

「お前、私にあの顔で笑いかけたら、殺すからな。」

クローバーは中々物騒だ。

「クロにはしないさ。」

深呼吸しながらそう返す。

「とゆうかできない。クロの前だと、自然に笑っちゃうからね。」

僕はそう言いながら、目の端溜まった涙を拭う。

呼吸は落ち着いたが、ダメージはまだ残っている。本当に勘弁してほしい。

「くだらねーこと言うな。」

クローバーはそう言いながら、僕から顔をそらす。後ろから見ると、耳が赤い。

本当は「照れてるでしょ？」と指摘したいが、2発目の腹パンが恐くて言えない。

仕方ないので、このニヤニヤしたくなる嬉しさは、僕の心の中にしまっておくことにした。

第30話 豚がしやべった

「まじか……。」

私は、思わずそう漏らした。

エルサイスを見る。いつも飄々としていて、ちよつとやそつとのこ
とでは動じないエルサイスですら、ドン引きした顔をしている。

そんな私たちにはお構い無しに、カツツは好き勝手なことを話して
いる。

「エル、豚がしやべってるよ……。」

「そう……だね……。」

苦笑いすらでない。ただただ気味が悪かった。

私たちはレイカに原野の湧き水を渡して、そのまま不老不死の村に
泊まった。

酒場の2階にある不老不死の村の宿は、相変わらず狭かったが、も
うホコリっぽくは無かった。それなりの頻度で、宿泊客がいるよう
だ。

朝になって、私たちがレイカとカツツの様子を見に行くと、カツツ
は既に新興宗教の元から、レイカの元に帰ってきていた。

「昨日は『原野の湧き水』を持ってきてくれてありがとう！おかげ様で
カツツは元気になったよ！」

レイカは私たちと顔を合わせるなり、そう嬉しそうに笑った。しか
し、すぐ顔を曇らせると

「……うん……元気になったんだけどさ……。」
と俯いた。そこに

「よおお、そいつはレイカのダチか？なんだかイナカくさいのと付き
合ってるな！」

と、聞きなれない声が割り込んだ。

ここには、私と、エルサイスと、レイカしかいない。

私はキョロキョロして声の主を探す。

「つて、おまえもイナカくさいけどな、ブフフ！」

カツツがそう言った。豚がそう言ったところを、私は確かに見た。

そして「まじか……。」と漏らしたのだった。

「こら、カツツ！そんな口の利き方しないの！」

レイカがカツツを叱る。

「なんだよお、レイカ！じゃあどういいう口の利き方すればいいんだよ！」

カツツは中々態度がでかいやつだ。豚のくせに生意気だ。

そのままレイカとカツツは言い争いをしている。

「これは……思ったより数倍インパクトあるな。」

私の言葉に、エルサイズが頷く。

動物が言葉を話す場面は、絵本やおとぎ話の中で、何度も見たことがあった。それはどれも違和感なく、かわいらしい描写で表現されていたので、別に変だとも思っていないかった。しかし、実際に見ると、それは違和感の塊だ。

糞で汚れた家畜小屋の中で、荒い息で唾を飛ばしながら、知性の欠片も感じられない丸々太った豚が、人間の言葉を話している。

私はとにかく気味が悪かった。

「あ……ははは……そう……なんかね……帰ってきたら言葉を話せるようになってたんだ。ちよつと口が悪くてね……。」

レイカは困ったように眉を下げた。レイカの戸惑いは相当なものだろう。病気を治すだけのはずが、カツツと話せるようになったのだ。

「でも、カツツと話せるようになって、この子の言葉をたくさん聞けて、すごく嬉しいんだ。この子とは家族なんだもの……寂しさも紛れてね。」

私たちと違い、レイカはカツツに、気味の悪さは感じていないようだった。それどころか、情まで湧いている。

これは危険だと思う。私がレイカに原野の湧き水を渡したのは、レイカの豚が病気で死んで、レイカが『収入源』を失ってしまうのが困ると思ったからだ。けして『家族』が死んでしまうのが可哀想と思ったからではない。

「俺もレイカを喜ばせることができて嬉しいぞ！それにもうすぐ俺は

美味しい肉になって出荷されるのさ！」

「意外だな。僕は豚が話したら「死にたくない！」って騒いで面倒なことになると思ってたけど……………」

エルサイスがそう呟く。

確かに、生き物の生存本能として、そうなるのが当たり前のように感じるが、カツツは生まれた頃から、レイカがずっと言い聞かせてきたおかげなのか、家畜としての自覚がしっかり出来てる。

「高い金額で売れて、レイカがもうかりや、レイカも嬉しくて、俺も美味しくて万々歳じゃないか！ブフフツ」

カツツそう笑う。

畜産業をよく理解している豚だ。

カツツは話せるようになったが「食べられたくない！」「死にたくない！」と騒がないので、思ったよりずっと楽で扱いやすいと思う。

ちよつと気味が悪いし、可哀想な気もするが、このまま出荷してしまえば問題ないだろう。

カツツにはその自覚があるし、それを望んでいる。

「カツツ…………。そうなのよね…………。食べ頃になったら、出荷しなきゃならないんだね……………」

「なんでそんなに寂しそうなんだよ、レイカ？」

悲しそうに目を伏せるレイカを、カツツが見上げる。

「私は…………。私は誰かにカツツを食べられたくない……………」

私はため息をついた。これはまた別の問題が起きそうだ。

「あなたが言葉を話すようになったから…………。あなたのこと誰かに奪われたくないのよ。あなたがただの豚だった時は全然、そんな感情は起きなかったのに…………。自分でも勝手だと思うけど……………」

本当に勝手な話だ。

「…………この子が、人間だったら良かったのに……………」

「むちゃなことを言うね。」

私が呆れたように返す。

「ね？どうして動物を殺す職業なんてあるのかしら。私はどうしてその家に生まれたの？どうして人間は…………肉を食べるの？」

「どうしてって、それは……」

レイカに詰め寄られたエルサイスは、戸惑った声をあげる。「生まれたらすぐ子豚の歯を抜くの。すごく苦しんで痛がって、子豚たちは鳴くのよ。でも、そうしないと人間や他の豚たちを傷つけちゃうから……そうまでして私たちは肉を食べなきゃならないの?」

「それが生きるって言うことだろ。」

私はそう言い切る。

「人間には動物に対してそんなひどい仕打ちをする権利が本当にあるのかしら……?」

レイカは随分勝手だ。今までやってきた畜産業を、馬鹿にしているとしか思えない。

「肉を食べるのが残酷だと思うなら、やめればいい。」

私は腕組みしながらレイカを睨みつける。

食肉をするのは、人間だけではない。動物だってする種はいる。彼らは、人間のように、こんな馬鹿馬鹿しいことは考えない。

生きるために食べる。そこには、言い訳も迷いもはない。

「私たちは生き物を食べて生きてる。動物だけじゃない。野菜や植物だって、生きてるんだ。」

エルサイスが私の肩を手を置く。それで私はレイカを怒鳴りつけたい気持ちを何とか抑える。

「結局、食肉を否定するのは自己満足なんだよ。本当に可哀想だと思うなら、何も食うな。霞でも食って生きてろ。」

私はそう静かに言うと、レイカの前から立ち去る。

人間は生まれた瞬間から場所をとる。生きるために、他者の命を奪って生きている。そこに善悪はない。可哀想だとか、酷いとか、そんな風に思うのは勝手なのだ。

本当にそう思うなら、自らが死ぬしかないのだから。

エルサイスが私のあとをついてくる。

「後悔してる?」

「いや、どちらかと言うと失望かな。」

私はエルサイスの質問にそう返すと、ため息をついた。

「レイカさんの覚悟が思ったより足りなかったね。」

エルサイスはそう言うのと、苦笑した。

「豚がしゃべったショックがデカすぎたかな。」

「そうかもね。」

救済者たちに、振り回されてばかりだ。本当に腹立たしい。

「レイカさん、どうするんだろうね?」

「さあ?好きにすればって感じだよ。」

食肉を否定する層は一定数いる。私はその人たちを否定しないし、好きにすればいいと思う。ただ、私たちにまで「食べるな」とか「食肉はおかしい」と言ってくることは、我慢ならない。

「彼女が豚を出荷するのを嫌がったところで、何にもならんさ。何しろ、彼女以上にあのカツツとかいう豚は、畜産業を理解してる。」

「変な豚だったね。僕の想像と全然違った。」

「私は豚がしゃべる想像すらできなかったよ。」

私はもう1度ため息をついた。

食肉の話ばかりしていたら、なんだかお腹が空いてきた。グーと、私の腹の虫が鳴る。

「何か食べに行こうか?」

音を聞いたエルサイスが、笑いながらそう言う。

「うん……。」

私は恥ずかしさに熱くなる顔を、俯いて隠しながら、そう返事をする。

生きていれば、腹が減る。食べることは絶対なのだ。それならせめて、楽しく美味しく食べて、糧になった生き物に感謝しようと、私は思う。

第31話 家畜の運命

不老不死の酒場は、それなりに人がいた。

公国や連邦に比べれば、全然少ないが、それでも以前の閑散ぶりに比べたら、2、3組が座っているだけでも、盛況と言えるだろう。

救済者よる経済効果は、それなりに出ているようだ。

「今度は一体、何の用だ？」

酒場のマスターで、この村の村長であるロックが、眉を寄せながらぶつきらぼうに言う。

昨日宿泊まろうとした時も、こんな感じだった。

私たちのことを、ものすごく警戒している。

無理もない。私たちはこの村の秘密を知る要注意人物なのだ。ロックにとつては、目の上のたんこぶみたいな存在だろう。

「別に何もしないさ。客として、ただ飯を食べにきただけだ。」

私はそう言うと、手近にあったテーブルに腰を下ろした。エルサイスもそれに続く。

ロックは不満そうにため息をつくとき、渋々ながらメモとペンを構えて注文をとる。

私たちはいくつか料理と、飲み物を注文する。ロックは注文をとると何も言わずに厨房へと去っていった。

「感じ悪いな。」

私はロックの態度にそうぼやく。

「まあ仕方ないんじゃない。」

運ばれてきた料理はどれも遜色なく美味しかった。私とエルサイスはそれを残さず平らげた。

エルサイスが食後のコーヒーを飲む頃、ロックがカウンターで、この村の農夫のモーフと話をしていた。

「そろそろ、もうほっとくわけにはいかないか。」

「ああ、あのままほっといたら、あの子が畜産を続けられなくなってしまふな。」

2人は厳しい表情で話している。

「あの子はまだ子供だ。畜産の厳しさをちゃんと教育してやらないといけないな。あの子代わりに、あの豚を出荷してやろう。」

ロックはそう言うと、モーフとともに酒場を出ていった。

「今の、レイカさんたちのことかな？」

「そうだろうね。」

エルサイスの質問に、私は気のない返事をする。

「無理に出荷しても、結局レイカさんは畜産業辞めちゃう気がするなあ。」

エルサイスはそう漏らす。

レイカの納得が足りなければ、出荷しようと、しまいと、壊れてしまふ。ロックたちの行動は善意の名を被った独り善がりだ。

「見に行く？」

私は別にどつちでも良かった。

「うーん……僕はロックさんたちにも、レイカさんにも、あんまり興味は無いけど……。ただあの豚のカッツには、錬金術師として学術的な興味が多少あるかな。」

エルサイスがそう言うのなら、行くのも悪くない。

私は代金をカウンターに置くと、レイカのいる家畜小屋に向かった。

豚のカッツは、レイカの好意で小屋の外に出ていた。レイカはカッツを狭い小屋に閉じ込めて置くのが忍びなくなったらしい。

「俺たちは古くから家畜を育てて、そして殺し、それを肉として出荷して生活している。」

先に来ていたロックが、レイカを説得していた。

「命を奪うことに罪悪感を感じる時もある。愛着ある家畜を殺すことをつらく思うこともな。」

畜産において、手塩に育てた家畜を最後殺すことは、絶対なのだ。家畜はペットではないのだから、かわいがるために世話をするのではない。最初から殺すために世話をするのだ。

そこには本来、罪悪感も辛さも、挟む余地がないはずだが、それで

も人間の感情として「かわいそう」と思うことはあるかもしれない。「だが、それでもそれらを自らの手で殺してきた。生きるためにそれは必要なことだ。」

「レイカ、お前はその金で育ってきたんだ。それを今更、殺せないと言うのか？」

「わかってます……わかってるよ！でも、この子は殺せない……！」

ロックとモーフの言葉に、レイカは悲痛な叫びをあげる。

レイカは理性ではわかっているのだ。自分は今まで、ずっとロックやモーフの言うようにして生きてきていた。しかし、カツツが話すようになって、カツツが家畜の豚だと思えなくなったのだ。

「私の友達、私の家族なの……！」

カツツに人間的なものを見出したレイカを、説得するのは難しいだろうと、私は思う。

殺すことも、食べることも、相手が家畜の豚だからできるのだ。その姿を見失い、カツツを人間の家族として認識しているレイカには、できない話だ。

「イヤだと言うなら、村の秩序に関わる。」

ロックが腕組みしながらいう。

「すぐにこの村を捨てて冒険に出ろ。その豚を連れてな。」

ロックは中々手厳しい。村の村長である彼は、とにかく村のルールだとか、秩序だとか、そんなものを心底大事にしている節がある。

悪くはないが、それで個人が犠牲になっていく様は、何とも言えないくだらなさがある。

「出て行けとは、随分乱暴だね。」

エルサイスがそう漏らす。私は

「いいんじゃないの。こんなしよーもない村出て行つたっけ。」
と、正直な気持ちを述べる。

ロックが一瞬私を睨みつけてきたが、私は気にも止めない。

「……わかった……カツツ……行きましよう。この村を出るのよ。」

レイカはそう言うと、カツツに手を差し出した。

「……冗談じゃねえな……」

カツツはレイカの手を取らないどころか、それを拒否した。

「え……う？」

予想外の出来事に、レイカは固まってしまう。

「町を出ていくななんて冗談じゃねえ。町の外で何を食えと？そして、俺は何のために生きればいいんだ？」

カツツはレイカの話し相手になる生き方では、満足しないらしい。

「俺は誰かに美味しく食われるために生きてきたんだ。それを町を出てくだけ？冗談じゃねえ！」

「酷い話だ。」

私は思わずそう漏らす。

カツツはずっとずっとレイカに「おいしいお肉になってみんなを喜ばせてね」と言われて育ってきたのだ。自分にもその自覚が芽生え、覚悟ができていたのに、最後の最後にレイカ本人から「殺せないから町を出よう」と言われたら、それは腹も立つだろう。

レイカは自分勝手だ。家畜を殺すことよりも、もっと酷いことをしている。レイカは最後の最後に、カツツから、今まで生きてきた意味まで奪おうとしたのだ。

私の心の中で何かがチクリと痛む。思い出したくないものを思い出しそうになったので、一生懸命他のことを考えるよう努めた。

今それは考えたくない。思い出したくない。パンドラの箱をぐるぐる巻にするように、頭を振って、思考を散らす。

そんな私をエルサイスが不思議そうに見ていた。

「カツツ、やめて……！」

レイカが泣きそうな声を出す。

「町の外に出て食うもんがなくなりや、俺が食うのはおまえだけ、レイカ！」

カツツはそう言うと、レイカの突進した。

「きやあ！」

レイカは恐怖に悲鳴をあげる。ロックとモーフが慌ててカツツを押さえる。

「カツツー！」

レイカが押しさえつけられたカツツを絶望したような顔で見ている。
「……俺を食え……俺は美味いぜ、レイカ……ブフツ……。」

中々男らしい豚だなど思う。レイカの思いを断ち切るため、わざとレイカを襲い、自分を食べるように言っつて、レイカがまた畜産業を続けるよう導いたのだ。

エルサイスはそれを興味深く見ていた。

私もエルサイスも、始めカツツを、ただの気味の悪いしゃべる豚としか思っつていなかった。例え話せるようになって、豚は豚だ。知性も品位も常識も持つていないと思っつていた。しかし、カツツはそれらをちゃんと持つていた。自分の生き方を自覚しながら、他者を思いやり、未来へと導く手助けまでした。

「これすごいなあ……。豚は最初から知性をもつてるのか？それとも救済者の儀式が豚にそれを与えたのか？……うーん……。」

エルサイスは口に手を当てながらブツブツと考察している。

「カツツ……私を襲うなんて、やっぱり魔物だったんだね。ゴメンね……。」

レイカはそう言っつと、泣き崩れた。

何とも悲しい話だなど思っつ。カツツの思っつは、レイカに正しく伝わっつていないような気がした。

「報われなっつ話だな。」

私をそう呟いた。なんとも後味が悪い。

カツツはロツクとモーフに連れられて行っつた。どこかは言われなくてもわかる。次会っつ時は、切り身になっつているだろう。

「みなさんには、ご迷惑をおかけしたので……その、あの子の肉でおいしい料理を作ります。出来上がっつたら、みんなで酒場でいただきますましよう！」

レイカはそう言っつと、悲しげに笑っつた。

「あなたも、お手伝いお願っつします。ケバブ、お願っつできますか？」

レイカはそう言われたエルサイスは、私の顔を見た。

「好きにしろ。」

私はそう言っつと、先に酒場に向かっつて歩き出した。

私たちは酒場で、豪勢な豚肉料理を食べた。食事をしたばかりだったので、あまり多くは食べられなかったが、どれも美味しかった。

私は肉にパン粉をまぶしてあげたカツレツという料理に感動して、普段なら食べられない量を食べていた。

「カツツは自分が何のために生きてたか、よくわかってた。」

「あの豚の方が、人間の私らより、よっぽど肝が座ってて、物分りがよかったよ。」

私はそう言いながら、カツレツを一口食べて、顔をほころばせる。すぐく気に入った。週1で食べたいくらいだ。

「本当なら私がそれをちゃんと理解してあげなきゃ、ダメだったのにな……。」

レイカはそう言うと、目を伏せた。後悔しているのかもしれない。「まあいきなり家畜が話し出せば、誰だって戸惑ってしまいますよ。」

エルサイスがそうレイカを慰める。

レイカはまだ幼い。こんな小さな少女に、生死の選択を迫るのは酷なことかもしれないと思う。しかし、レイカは畜産農家という有利なカードを捨てるわけにはいかないのだ。

「私は、畜産を仕事として生きる村の住人。私の仕事は動物を殺すこと……。これを超えないと1人前になれないんです……。」

レイカは覚悟しなければならなかったのだ。

運命というものがあるとしたら、カツツは、家畜として食べられるだけでなく、レイカを立派な畜産農家として育てるために生まれてきたのかもしれないと、私は思った。

私たちはカツツの命に感謝しながら、全ての料理を残さず食べて、幸せ時を過ごした。

第32話 ハッピーエンド？

「あ、お久しぶりです。」

久々に不老不死の村をふらつと訪れると、家畜小屋の前で、レイカが汗を流していた。

カツツの件から数週間経って、レイカは既に新しい豚を育てている最中のようだ。

「ほら、食べごろにはまだもう少しかかりますけどね。」

レイカはそう言って笑った。

もうすっかり迷いはないようだ。カツツの件はよい教訓になったのだろう。

「(まあシヨック療法みたいなもんだけど。)」

私はそう思うと、レイカを観察した。

私よりもかなり年下の、まだ幼い少女だ。両親を亡くし、少女は一人きりで、この世界を生きていかなければならない。

この少女一人の肩に、どれだけの重さの責任が乗っているのだろうか。

そんなことに思いを馳せる。

人が1人で生きていく、それは全て個人の責任の上に成り立つものなのだ。自己責任というものは、この世界で最も重く、恐ろしいものだ。だと私は思う。

私の責任は、半分以上エルサイスが持ってくれている。その代わりに、エルサイスの責任の一部を私は持っている。

このレイカには、そうやって責任を分け合う人がいるのだろうか。

「おおい、レイカー！干し草の補充終わったぞ！」

急にどこかで聞いたような声が割り込む。

「ちよつと！雇い主に対してその口の聞き方!?レイカさん、でしょ!」
レイカが怒鳴り返した先を見ると、派手なピンク色の髪をした青年が、飄々とした様子で手をあげている。

「俺よりも年下のクセに！そんなに「レイカさん」って呼んでもらいたかったら、俺を追い越してみろよ、ブフツツ。」

青年はそう言うのと笑った。どこかで見たような態度と、笑い方だ。まさかと思いながら、エルサイスを見る。エルサイスは口に手をあて、何か考え込んでいて、私の目線に気がついていないようだ。

「あ、あの子ね、なんか豚を育てたいって言って、村の外からきたの！ちようど人手も足りなかつたから雇つたのよ！」

「ほう。」

エルサイスが興味深かそうに合図うちを返すが、目線はレイカではなく、ずっと青年の動きを観察している。

単なる偶然なのか、それとも理解し難い現象が起きているのか。私には判断ができない。

「とても働き者で、気が回るんだけど……」

「おい、レイカ！」

「呼び捨てはやめて！」

レイカは、青年に怒鳴り返す。

「口がとっても悪いの、ね？」

青年はレイカの言うことを聞きはしない。

「レイカ、呼んでるだろ！ちよつとこいつ見てくれよ！」

青年はぞんざいな態度でレイカを呼びつける。これでは、どっちが雇い主なのかわからない。

「はあい！待って！……つて呼び捨てやめろ！」

レイカはそう言うのと、私たちをおいて、青年の元へ走っていった。

「ねえあれってさ……。」

私は我慢出来なくなつて、まだ青年を観察しているエルサイスに尋ねる。

「まあ可能性としては無くはないね。」

「まじかよ……。」

エルサイスの返答に私は驚愕する。

「偶然にしては出来すぎだし。」

エルサイスはそう言うのと笑った。

「必然だとしても、出来すぎに思えるけど。」

私は首をかしげながらそう返す。

「ハッピーエンドもたまには悪くないんじゃない?」

エルサイスはそう言うと、村の出口へと足を向ける。私はそれに続いて行く。

「え? エルの願望なの?」

「いや、可能性があるのは確かだよ。魔物は死なない。倒されても、魂は生きていて、また新たに作られた肉体に戻る。」

あの豚は、救済者の奇跡を受けて、たしかに魔物化したが、魔物そのものになった訳では無い。あくまで魔物血を入れたただけだ。

「そんなことが本当に?」

「わからないよ。」

エルサイスはそう言いながらも、口に手をあて考えている。

こうやって口に手をあてるのは、エルサイスのクセだ。何か熟考している時によくやる。こういう時は、何を聞いても曖昧で「そうかもしれない」とか「まだわからない」とかふわふわした答えしか返ってこないことが多い。

何かしらの答えが出るまで放っておくことにする。

考えながらも、エルサイスはちゃんと前を見て歩き、行き交う人を避け、段差につまづかないよう気をつけている。器用なものだなと思う。

暖かい風が吹いていた。天気は快晴。雲一つない青空が広がっていて、太陽が私の肌をジリジリと焦がす。

レイカは、あの青年と責任を分かち合うことができたかもしれない。彼の正体がなんであれ、それは喜ばしいことだ。

私は幼いレイカに「霞でも食ってろ」と言い放った。あれは本心だったけれど、わざわざレイカにそれをぶつける必要はなかったかもしれないと、少し反省する。

彼女は十分悩んでいた。自分だけの責任の上で、その重圧に苦しんでいたのだから、その上に赤の他人の私が正論をぶつけて叩くのは、酷な話だ。

言いたいことを言うのと、言わなければならぬことを言うのは、同じように見えて、全然違うのだ。

あの時、エルサイスが止めてくれたおかげで、怒鳴らなかつたのが、せめてもの救いだった。

それでも、私はあの時、レイカを許せなかつた。生まれた時から食肉になるように言い聞かせていたのに、レイカは最後の最後に裏切つたのだ。カツツが黙々と登ってきた梯子を、急に外した。

それでもカツツは自分の意思を貫いて、梯子を自分の力で登りきり、レイカまで救っていった。

改めて考えると、すごい豚だ。

私も、カツツと同じような経験をしたことがあるが、私は意思を貫けなかつたし、誰も救うことができなかった。

私を裏切つたのは、私の父親だった。

また嫌なことを思い出しそうになる。

顔を押しさえて、頭を振る。記憶の奥深くに眠る化け物を起こさないように、私はため息をついて、不満の種を追い出す。今更思い出したところで、終わったことは、どうにも出来ないのだから。

「うん。」

と、急にエルサイスが一人で頷いた。私は顔を上げる。

「なんかわかつた?」

私がそう聞くと、エルサイスは大真面目な顔で

「甘いものが食べたい。」

とだけ言った。

「はあ?」

急にこいつは何を言い出すんだ。エルサイスは本当にわからない。真面目なのか、冗談なのか、すっかりしてるのか、天然なのか。

「人間の体の中で、1番消耗が激しい場所って知ってる?」

「知らん。」

「ちよつとは考えてよ。」

エルサイスはそう言って笑う。いつもなら無視するが、今日はまあいいかと考えてみる。

「うーん……。ここかな?」

私は左胸を押しさえながら答える。

「ずっとドクドク動いてうるさいし、大変そう。」

「惜しいね。」

エルサイスはなんだか楽しそうだ。

「心臓っていうのは、実によくできた器官なんだよ。一切無駄がない。規則的に全身に血を送り込むだけの単純で、でもとっても重要な器官だからこそ、ものすごく効率的なんだ。」

私たちは話しながら歩き、不老不死の村を出た。足は自然と公国に向かっている。

「人間の体で1番消耗が激しいのはね、ここだよ。」

エルサイスはそう言うと、自分の頭を指さす。

「頭？」

「そう、脳が、つまり考えることが1番大変なんだ。考えたり、悩んだり、想像したり、感情をコントロールしたり、とっても複雑なんだ。」
「そう言われればそうかもしれない。私は体を動かしている時より、悩んでいる時の方が圧倒的に疲れる。」

「脳は大飯喰らいなのに、ブドウ糖しか栄養にできない。」

「ブドウ糖？」

「簡単に言えば砂糖だよ。」

エルサイスはそう言うと、私の頭を撫でた。

「考えてもわかんない時、何かに悩んでるとき時、暴れだしたい感情を抑えている時、そんな時は、甘いものを食べるのが1番さ。」

本当にエルサイスは、私のことをよく見ている。でも、踏み込んでほこない。丁度いい距離感だ。

「まあ悪くないな。」

エルサイスの手を振り払うと、私は笑った。

「いちごパフェあるかなあ？」

「私はケーキがいい。」

私たちはそう言い合いながら、公国の酒場を目指す。

真相はどうであれ、ハッピーエンドも悪くない。私はレイカとあの青年の幸せを密かに願った。

番外編く熱とエルの過去 前編く

朝、目が覚めたクローバーは、いつもの様に目を開けないまま、ベットの中でゴロゴロしていた。

クローバーは目が覚めてから起き上がるまでが長い。放っておけば、平気で1、2時間はベットの上でダラダラ過ごしてしまうのだ。

いつもは、エルサイスが無理やり起こしに来るのだが、なぜか今日はそれも無い。

いつもと違う様子に気がついたクローバーは、片目だけ開けて、隣のベットの様子を伺う。

クローバーは

「(きつと外出でもしてんだろ。)」

と軽く思っていた。

しかし、エルサイスはそこに居た。隣のベットに横たわり、寝息のようなものを立てている。

珍しい光景だ。エルサイスはいつも必ず、クローバーより先に起きて、テキパキ準備を済ませ、朝ごはんを準備した状態で、クローバーを起こす。彼はいつも完璧な状態で朝を迎えるのだ。

しかし、今日はクローバーが起きる時間になっても、まだ寝ている。

クローバーは眠いながらも、異変を感じた。

「エル?」

エルサイスは返事をしない。

クローバーは寝起きで靄がかかると必死で働かせ、昨日の様子を思い出す。

昨日特に変わったことはしていないはずだ。無理をしたり、ものすごい疲れることをした記憶はない。

「エル?」

もう1度呼びかけると

「う、うん……?」

と、エルサイスがかすれ声で返事をする。

クローバーは直感的に嫌なものを感じて、ベットから飛び起き、隣

のベットに駆け寄る。

「エル!？」

布団を引き剥がすと、エルサイスが浅い息を繰り返しながら横たわっていた。顔が赤く、明らかに具合が悪そうだ。

クローバーは、エルサイスの前髪をかき分け、額に手を当てる。

「あつっ!めっちゃ熱あるじゃん!」

「う……………」

エルサイスは意識がはつきりしない様子で、呻く。

「今医者呼んでくるから、ちよつと待ってろ!」

クローバーはそういうと、いつもなら絶対無理な、奇跡的な速さで支度を済ませると、足早に部屋を出ていった。

「よう、具合はどうだ?」

目が覚めたエルサイスに、クローバーが声をかける。

「クロ…………?僕…………」

「熱病だつてさ。今流行つてるらしい。」

クローバーはそう言いながら、エルサイスの背中を支えて起き上がらせた。そして、コップに入った水を渡す。

エルサイスは、コクリと小さく喉を鳴らすと、それを少しだけ飲んだ。

「もうちよつとだけでいいから飲み。脱水症状になるともつと苦しいぞ。」

クローバーにそう言われたエルサイスは、顔を歪めながら、何とかもう一口喉に流し込む。

「よし、いい子だ。」

クローバーは、そう褒めると、エルサイスをまたベットに寝かせる。「安静にしてれば、死ぬような病気じゃない。落ち着くまで、しっかり休んでろ。」

「クロ…………ごめん…………。」

エルサイスがかすれ声で謝る。

「別に謝ることないさ。」

クローバーはそう言うと、エルサイスの額に触れ熱を計る。

「だいぶ下がったけど、まだあるな。今寒いか？暑いかな？」

「わかんない……。」

クローバーは笑った。いつもと違う、ぽやぽやしたエルサイスを見るのは新鮮で、なんだか子供のようでかわいいと思ったのだ。

クローバーはエルサイスの手を握り、温度を確かめる。

「冷たいな。毛布かけよう。暑くなったら言えよ。」

エルサイスは熱で霞がかった視界で、クローバーを見ていた。握られた左手がほのかに暖かい。エルサイスはクローバーの柔らかい手を弱く握り返す。

「どうした？何かしてほしいことあるか？」

今日のクローバーは妙に優しい。そしてエルサイスもそれに甘えたい気分だった。

「手……このまま握って……ほしい。」

クローバーは意外な要望に目を丸くする。

「なんか子供みたいだな。変なやつだ。」

クローバーはそう言って笑った。でも、手は離さなかった。

「さあ、いい子はもう一度寝な。」

クローバーはそう言いながら、空いてる手でエルサイスに毛布をかけた。

エルサイスは安心したように息をつくど、目を瞑った。

夢の中でも、エルサイスは熱にうなされていた。

しかし、そこは狭い宿屋の簡易なベットではなかった。

豪華絢爛の天蓋付きベットの上で、ふかふかの羽毛布団に包まれて、エルサイスは寝ていた。

枕元には執事のハビエルがいて、額の濡らしたタオルを取り替えてくれている。

「母様は……？」

そう伸ばしたエルサイスの手は小さく、声も高く幼い。

子供の頃の夢を見ているのだ。

「お母様は、お父様と兄上様とパーティーに行かれました。」
ハビエルが答える。

そうだったと、エルサイスは思い出した。
両親と3つ上の兄は、肺熱病で死にかけているエルサイスを置いて、市長との食事会に出掛けて行った。

出掛ける間際、様子を見にきた父親に

「こんな時に、役に立たないどころか、迷惑なやつだ。」

と責められた。兄は苦しむ僕を見て

「お前なんか死んでしまえばいいんだ。」

そうせせら笑った。

母親はその様子を黙って見ているだけで、誰もエルサイスを庇わなかった。

こんな扱いを受けても、エルサイスは悲しいなんて思わない。

生まれた時から、ずっとこの調子で生きてきたのだ。今更何を言われても、何の感情もわかなかった。

死ぬのは怖くなかった。誰にも必要とされず、疎まれ、邪険にされ続け、望めば叶わず、手に入れば取り上げられる。エルサイスは何も持っていないかった。

「兄様……。」

小さな少女が、エルサイスの手を握る。

「ルル……父様たちと一緒に行かなかったのかい？」

エルサイスが苦しそうに咳をしながら、そう聞く。

5つ下の妹ルアンナは、ハビエルの隣で心配そうにエルサイスをのぞき込んでいた。

「兄様、死なないで……。」

ルアンナが、目に涙をいっぱい溜めながら言う。

この小さな妹だけが、エルサイスの唯一の救いだった。

「ルル……。」

エルサイスが手を伸ばし、妹の頭を撫でようとした瞬間、世界が反転する。

気がつくとき、エルサイスは、血に濡れたルアンナを抱いていた。興

奮した馬車馬が、すぐそばで暴れている。大人たちが、やかましくがなり立て、事態の収拾にあたっていた。

脳みその中から冷えていくような感覚が、エルサイスを襲う。急激に狭まる視野の中で、ルアンナの血がエルサイスの手を赤く染めていく。

息ができない。耳鳴りで何も聞こえない。

徐々に暗くなっていく視界の中で、エルサイスは苦しみがく。

「エル！」

誰かが、エルサイスを呼ぶ。

「エル！」

聞き慣れたその声に導かれるように、エルサイスは目を覚ました。

番外編く熱とエルスの過去 中編く

エルサイスの心臓は早鐘の様に鳴っていた。手足は氷のように冷たいのに、額は玉のような汗をかいている。

「大丈夫か？うなされてたぞ。」

クローバーが、エルサイスを心配そうに覗き込む。左手はずっと握ったままだ。

「ああ……ルル……。」

エルサイスがうわ言のように呟きながら、右手で顔を覆う。

「ルル？」

クローバーが聞き返すが、エルサイスには聞こえていないようで、返事は返ってこなかった。

エルサイスは、今ここがどこで、自分が誰なのか、ぼんやりと思いついていた。思い出すところそが、呪われた証。エルサイスは他の誰でもない、エルサイスだった。

「怖い夢でも見た？顔が真っ青だ。」

クローバーはエルサイスの額の汗を拭くタオルを取るため、立ち上がった。

その瞬間、エルサイスが右手を伸ばしてクローバーを抱き寄せた。

「わあー！」

あまりにも急だったので、クローバーは受け身も取れず、ベツトに倒れ込む。そこにエルサイスが覆いかぶさってくる。

「何!?!やだー！」

クローバーは突然のことに恐怖を感じて、すぐにエルサイスを押しおのけようとしたが

「ごめん。今だけ許して。」

と、エルサイスに懇願するように言われ、止まってしまった。

こんなエルサイスを見るのは初めてだった。抱きつくと言うよりは、すがりついてくるようなエルサイスに、クローバーは戸惑っていた。

「エル……?？」

呼びかけても返事はない。荒い息遣いだけが返ってくる。

エルサイスは俯いたままクローバーの肩に顔をうずめていた。金髪の長い髪が、その顔を覆い隠していて、表情は見えない。ただ、クローバーの肩を強く掴んでいる手は、僅かに震えていた。

クローバーはそんなエルサイスを可哀想に思っ、強ばらせていた体の力を抜き、受け入れる体勢をとる。

それに気がついたエルサイスは

「ごめん……。」

と言いながら、腕をクローバーの背中に回し、ぎゅっと抱きしめた。熱湯の入ったマグカップのように熱いエルサイスの体が、密着してくる。

「(このまま襲われたら、勝てないだろうな。)」

エルサイスの腕に大人しく抱かれながら、クローバーはそんなことを思う。

いくら後衛専門紙装甲のエルサイスでも、大人の男だ。完全なマウントを取られた状態で、クローバーが全力で抵抗したとしても、力では勝てない。

ただ、心配はしていなかった。それなりに信用していたから、クローバーはエルサイスを受け入れたのだ。

それに今エルサイスを拒否したら、何か大事なものを失ってしまう。根拠は全くないが、なぜかクローバーはそう確信していた。

一方エルサイスは、ただただクローバーにすがりついていた。そうしていないと、自分の体が、心が、全部バラバラになってしまう。そんな気がしていた。

さつき寝ている時に見たあれは、夢ではない。全部記憶だ。そこに、夢にあるような脚色や誇張はない。実際にあつたことを思い出して見ていたのだ。

もう十何年前の子供の頃の記憶だった。忘れたいののに、こうしてふとした時に、繰り返し思い出す。

血で染まった大事な妹の姿が、瞼に焼き付いて離れない。目を開きたいが、開けたら泣いてしまいそうで、それも恐かった。

クローバーを抱く手に、思わず力が入る。
「んっ……。」

エルサイスの腕の中で、クローバーが苦しそうに呻き声をあげる。ふと急に、クローバーが歌い出す。

1つ2つと花を数えていく、子守唄だった。

初めて聞いても、どこか懐かしいような、ゆったりとした歌だ。

小さな、でも、しつかりとした音程と、深みがある声でクローバーは優しく歌う。

エルサイスはクローバーの声に耳を傾けた。心地がいい。次第に腕の力が抜けていく。

そんなエルサイスの背中を、クローバーが赤ん坊を寝かしつけるように、テンポ良くポンポンと叩く。

悪い夢を見た時の対処法を、クローバーはよく知っていた。自分も何度もその経験があったし、その度に慰めてもらった記憶がある。

クローバーは、自分が母や姉たちにしてもらったことと、同じことを、エルサイスにしてあげた。

子供あやすように、優しく包む込むように。

最後の音が、空気に吸い込まれていくと、エルサイスは大きく深呼吸吸し、クローバーを解放した。

「落ち着いた?」

クローバーが起き上がりながら聞く。

「ああ……ごめん……。」

エルサイスはしゃがれ声で素晴らしいながらベットに座り直した。相変わらず、顔は髪で隠れていて、表情は見えない。

「クロ、ごめん……。」

「いいよ、別に。何か飲むか?」

「うん……。」

クローバーはベットから降りると、水を取りに席を外した。

クローバーがいない数十秒の間に、エルサイスは髪をかきあげ、前を向き、大きく深呼吸して、ベットサイドに置いてあるメガネをかけ、精神体勢を整える。

「ほい。」

クローバーが戻ってくる頃には、いつもの笑顔で

「ありがとう。」

と言えた。

見事な精神コントロールだが、クローバーはなぜだか悲しそうだ。

「大丈夫か？怖い夢見てたみたいだけど…。」

「うん……。」

エルサイスはコップの水を飲み干すと、ため息をついた。熱で頭が少しクラクラする。

「ルルの……妹の夢を見たんだ……。」

「妹？」

番外編く熱とエルスの過去 後編く

エルサイスは、街の有力者の次男として生まれた。家は3歳年上の兄が継ぐことになっていたので、兄は両親からも、周囲の人からも、とても大事に育てられていた。

一方エルサイスは、両親親族みんなが黒髪なのに、なぜか自分だけが、金髪のブロンドで生まれてきたこともあって、邪険に扱われていた。

愛人の子だとか、拾われ子だとか、色々言われていたが、当時、本当のことはわからなかった。

誰にも必要とされず、理由なく殴られたり、罵倒されたり、そんな毎日の中で、エルサイスは心を凍らせていた。悲しみも、寂しさも、怒りも、涙も枯れたエルサイスは、何が起きても感情を動かさないようになっていった。

「僕は要らない子だったんだ。でも、ルルは……ルアンナだけは、僕を必要としてくれた。」

5つ下のルアンナは、エルサイスによく懐き「兄様！兄様！」と言つては、エルサイスの後ろを嬉しそうについて回り、ブロンドの髪に触れては「キレイ！」と言つて、目を輝かせた。

そんなルアンナだけが、エルサイスの救いだった。

ルアンナのためなら何でもしてあげようと、父親に内緒で覚えた、錬金術教えたり、魔法の練習を一緒にしたりした。

ルアンナはますますエルサイスに懐き、2人はいつも一緒に、離れなかった。

「でも、ルルはもういない。」

エルサイスはそう言うと、ため息をついてうつむいた。「事故だった。」

ある日、エルサイスと同じ金髪の男が、エルサイスを迎えに来た。

偉大な錬金術師として名を馳せていた男は、母親の愛人で、エルサイスの本当の父親だと名乗った。

父親は事実には激怒して、母親とエルサイスを三日三晩閉じ込めて、

ポコポコに殴ったが、最後は男の提案を受け入れ、エルサイスの引き渡しに応じた。厄介払いができて丁度良かったのだろう。いつもはうるさい父親も、珍しくゴネなかった。

別れの朝、エルサイスを見送りに来たのは、執事のハビエルと、ルアンナだけだった。

ルアンナは、エルサイスが行くのを、泣いて嫌がった。エルサイスも、ルアンナを置いて行きたくなかった。新しい父親にお願いしたが、ルアンナを連れていくことは叶わなかった。

「兄様！行かないで！」

「ごめんね、ルル。大人になったら必ず迎えに行くよ！」

これが、ルアンナとの、最後の会話になった。

エルサイスの乗った馬車を追いかけてようと、ハビエルの手を振り払って走り出したルアンナは、後続の馬車に轢かれた。

「打ちどころが悪くてね。」

一部始終を見ていたエルサイスは、馬車から飛び降り、ぐったりしているルアンナに駆け寄り、抱き上げた。エルサイスは、ルアンナから血が流れ出ていくのを、ただ見ていることしかできなかった。

「その時のことを、今でもこうして夢で思い出すんだ……。」

言葉にしたら、また怖くなってきたエルサイスは、髪をかきあげて、感情を誤魔化す。クローバーが手を伸ばして、エルサイスの頭をよしよしと撫でる。

エルサイスは悲しげに笑った。

「僕がルルを突き放してれば、こんなことにはならなかったんじゃないかって。僕がルルの心を縛ってしまったから、ルルは……。」

「馬鹿だなあ。人を好きになることに罪はないぞ。」

クローバーがきつぱりという。

「そうだね。」

エルサイスは言葉ではそう同意するが、心までは簡単に変えられない。ルアンナを失った傷は、ずっと心に残り続けるのだ。何度も夢に見るほどに。

「でも僕は、人を好きになるのが怖い。同時に、人から好かれるのも恐

いんだ。」

だからエルサイスは、何かに興味を持ったり、執着したりすることを避けている。

ルアンナのように、失うのが怖いから、最初から持たない選択をしてしまうのだ。

エルサイス自身、自分の心は、空っぽだと思っている。

しかし、クローバーから見れば、色々な感情が小さな箱に押し込められているだけで、本当はいっぱいもっているのだ。

クローバーはエルサイスを抱き寄せた。

「わあ!?!クロー?」

いつもなら絶対にならない展開に、エルサイスは戸惑った声を上げる。

「馬鹿なやつだな。本当。」

泣きたい時に泣けないのも、怒りたい時に怒れないのも、クローバーからしてみれば想像を絶する苦痛だ。

早くエルサイスの箱を開けてあげたい気持ちはあるが、鍵がどこにあるのか全くわからない。

今はこうして、慰めるのが精一杯だ。

「クロ、ごめんね……。」

エルサイスはそう悲しげに呟いた。

「さあ、まだ熱があるから寝てな。」

しばらくエルサイスを抱きしめていたクローバーが、そう言って離れた。今でも少しでも彼の傷が癒えたらいいなと思っていた。

「もう眠くはないかな。」

エルサイスはそう言いながらも、ベットに寝転がる。メガネをしたままなので、眠る気は無いようだ。

「タマゴ粥でも食べるか?」

「レシピがないから合成できないよ。」

「料理は合成しなくなっちゃって作れるって知らないのか?」

「誰が作るの?」

「私が作るに決まってるだろ。」

「え?」

エルサイスはキョトンとした顔をしてしまう。クローバーが料理をしているところなんて、見たことがない。

公国の宿には、小さな流し台と、一口しかないガスコンロが、部屋の隅に置かれている。

今まで食事は外食か、エルサイスの合成で事足りていたので、自炊などしたこともなかった。

「待ってる。」

クローバーはそう言うと、ミニキッチンに立って、テキパキと料理を始める。

エルサイスはその様子を横目に、窓の外を見ていた。外はパラパラと雪が舞い、寒そうだ。窓の端は外の冷たさで曇っている。

ルアンナを失った日も、こんな雪がチラチラ舞う日だったなと思いつつ、エルサイスは自分の手をじっと見た。血で濡れてもないし、もう冷たくもない。

あの日起こったことは、誰のせいでもない、頭ではわかっていた。でも、エルサイスは自分を責めずにはいられなかった。ルアンナがそれだけ大事だったのだ。

「できたよ。」

クローバーがタマゴ粥の入った皿を持ってベット横に座る。刻んだネギの入ったタマゴ粥は、色鮮やかで、美味しそうだ。

「じゃあ……あーん！」

「は？」

甘えたように口を開けたエルサイスの頬に、クローバーが熱々のスプーンを押し付ける。

「あつついいいー！」

「甘えんな。」

「なんで!? 今なら絶対にいけると思ったのに！」

「そーいうとござぞ。」

クローバーはそう言うと、エルサイスに皿とスプーンを渡した。

「おかしいなあ……。」

エルサイスはぶつくさ文句を言いながら、タマゴ粥を一口食べた。

「うん。美味しい。」

「当たり前だろ。この私が作ったんだ。」

クローバーは得意そうだ。

タマゴ粥は熱くて、出汁の優しい味がして、美味しかった。エルサイスは残さず平らげた。

「いっぱい食べれたな。今暑いかな？」

「うん、暑い。」

エルサイスが額の汗を拭いながらそう答えると、クローバーは皿を片付けながら、タオルを投げて渡した。

「それで汗拭け。もうちょっとすれば、熱が下がってくるから、汗で体冷やしすぎるなよ。あとは大人しく寝てろ。」

「クロ、ありがとう。」

「どーいたしました。」

エルサイスは汗を拭くと、メガネを外し、ベットに寝転がった。そこに皿洗いを終えたクローバーがかえってくる。クローバーはベットの隣に腰掛けると、膝に本置き、片手で広げながら「ん。」

っと言ってエルサイスに左手を差し出した。

「いいの？」

エルサイスが目丸くしながら、クローバーを見つめる。

「今日だけ特別だからな。」

エルサイスがクローバーの手を握り返す。細くて、小さくて、柔らかい手だった。

「これが続くなら、僕ずっと病気でもいいな…。」

「馬鹿なこといつてないで、さっさと寝て治せ。」

クローバーの呆れ声に、エルサイスは「ふふっ」と笑い声を漏らす。エルサイスは、ルアンナのようになまた失ってしまうのが恐くて、誰かと繋がることを避けていた。しかし、いつの間にかまた、こうやってクローバーと繋がっていた。もう何も持たないと、決めていたのに。

恐いのは、今も変わらない。それでもエルサイスは今のこの状況に

心地良さを感じていた。

眠りはすぐにやってきた。

夢の中でエルサイスは、クローバーとルアナと一緒に、クッキーを作っていた。甘くて、美味しい、幸せな夢だった。

第33話 ポニーテール

僕らは国境沿いの道を、連邦へと向かって歩いていった。

今日はやけに風が強い。前を歩くクローバーの尻尾髪が、ふわふわと舞っている。僕の髪も荒ぶっていて、さつきから何度もかきあげて押さえていた。

「うざったそうだな。」

クローバーが振り返って僕に言う。

「切ってやろうか？」

「遠慮しとくよ。」

クローバーに任せたら、坊主にされかねない。

「短いのも似合うと思うんだけどなあ。」

「僕はこの髪型を気に入ってるんだ。」

クローバーはそんなものかと言うように、肩を竦めた。

幼い頃から、なぜかずつと長髪だったので、髪を短くするには抵抗があった。子供の頃、僕に錬金術を覚えてくれた師匠に、1度だけバツサリ切られたことがあったが、あまりの似合わなさにシヨックを受けて、しばらく外出せず家にこもった思い出もある。

しかし、こんな風の強い日は、この長髪に多少の不便を感じてはいない。髪が気になって、戦闘に集中できないし、ミスや判断の遅れも増える。

前後左右、様々な角度から、風が吹いて、僕の髪はどんどん絡まってく。手で梳くのも一苦労だ。

「まったく……。」

クローバーはぐちゃぐちゃの髪に苦戦している僕を見て、呆れたような声をだした。

そして、バツクからヘアゴムを出して

「これ使え。」

と僕に渡してきた。クローバーが尻尾髪を結ぶのにいつも使っているヘアゴムだ。

「え、僕結んだことないからできない。」

「はあ？そんな長い髪して結んだことねーとか嘘言うな。お風呂のときはどうしてんだよ？」

「お風呂は適当にぐちゃぐちゃ縛ってるけど、基本タオルで巻いて押さえてる感じかな。」

僕は長髪は好きだが、髪型のアレンジメントは苦手だ。結んだり、飾ったり、そういうことにあまり興味がなかった。

今まで髪を結んだことは何度もあるが、やったのは妹とか、自称彼女とか、師匠の愛人とか、いつも自分以外の誰かだった。

「仕方ねーな。ちよつとこつちこい。」

クローバーはそう言うと、連邦へ向かう道を少し外れて、坂を上った岬の端に建つ、民家に向かった。

遠目から民家にしては立派だなと思っていたが、近くで見ると中々の迫力がある。

2階建ての立派な民家には、風車がついていて、この強風のおかげで、ギンギン音をたてながら快適に回っていた。

クローバーは2階の玄関へ行く階段を避けて、建物の右側、物置の方へと歩いていき、ちょうど岩の影になるところに腰を降ろした。

「ここなら風もちよつとはましになるだろ。ほら、ここ座れ。」

クローバーはそう言うと、自分の足の間をぽんぽんと叩いた。

「何するの？」

そう聞きながら、クローバーの前に座る。

「何するって、髪を結ぶんだよ。」

バックからブラシを取り出したクローバーは、僕の髪を梳かす。

「いたたた！痛いよ！」

ぐちゃぐちゃに絡まった僕の髪は、中々梳かせない。ブラシが引つかかっては、髪が引っ張られ、痛い。

「大人しくしてろ。」

クローバーは力強くブラシを動かしていたが、乱暴ではない。慣れた手つきで、少しずつ丁寧に絡まった髪をほどいていく。

「エルの髪はキレイだな。」

独り言のように、クローバーが漏らす。

「サラサラ、キラキラしてて。」

太陽と海の光を反射する僕の金髪を触って、クローバーはどこか嬉しそうだ。

僕はこの金髪にいい思い出はあまりない。この髪のせいで、幼少の頃は散々な目にあつてきたのだ。

それでも、クローバーの嬉しそうな顔を見ると、その嫌な思い出が溶けていくような暖かさを感じる。

いつもそうだ。クローバーの何気ない言葉とか、仕草とか、そういうものに僕は救われている。いちいち言葉を飾らなくても、クローバーは大事なものを、いくつも僕にくれるのだ。

なんだか嬉しいような、恥ずかしいような気持ちになって、僕は俯いた。

「動くなって。」

僕の心を救っているとは露知らず、クローバーは中々厳しい。

「おっし、ほどけたかな？鏡がないのが残念だな。今のエルの髪、最高にキレイだ。」

クローバーとしては、ここまで髪を梳かしたことを自画自賛したのだが、傍から見れば完璧に僕のことを褒めているようにしか聞こえない。

僕はおかしくなつて笑つた。

「なんだよ？」

笑っている僕に、クローバーがつかつかってくる。

「別に。嬉しいなあと思つて。」

「お前はホント、変なやつだな。」

クローバーは怪訝な顔した。

「どうする？どんな感じに結ぼうか？」

そう聞かれても、なんと答えればいいのかわからない。どんな結び方があるのか、僕は知らないのだ。

「わかんないから、クロに任せるよ。」

「じゃツイントールとか。」

「それは嫌。」

「じゃ三つ編み。」

「それもちよつと……。」

「お団子は？」

「なんか選択肢がおかしい。」

「わがままだなあ！」

クローバーはそう言いながら笑った。僕をからかって面白がっている。

「無難にポニーテールにしようか。自分でも結べるような簡単な髪型の方がいいだろ。」

クローバーはそう言うと、ブラシで僕の髪を1つにまとめ始めた。

「よし、これでスッキリした。」

ポニーテールはあつという間に完成した。

「うんうん、この方がいい。似合ってるぞ。」

クローバーが満足げに頷く。

「首元がスースーするよ。」

顔の周りの髪が無くなつて、視界がかなり良くなつたと同時に、慣れない違和感を感じる。

「鏡があればいいのに。」

今自分がどうなっているのかすぐく気になる。

「あ、この家の窓に写せばいいんじゃない？」

クローバーはいい案を思いついたという感じで、そう言うと、2階の玄関に続く階段を指さした。

髪型を確認するためだけに、わざわざ他人の家の敷地に入るのは気が引けたが、今はどうしても見たいという欲求が勝っていた。

僕らは階段を上がって玄関の前に立つ。ドアの小さな小窓には、ちよつどカーテンがかけられていて、姿が写しやすい。

「おお……。」

僕は感嘆の声をあげた。

「似合ってるだろ？」

クローバーは得意そうだ。

「うん。いい……いいね！ありがとう！」

自分でも、似合っていると思った。毎日これでもいいかもしれない。

「後で結び方教えるから。」

「え、これからもクロがやってくれるんじゃないの？」

「自分のことは、自分でやれ。」

クローバーはそう言うと、色違いのヘアゴムを何本か僕にくれた。甘やかしてはくれないようだ。

それでも、僕は幸せ気持ちになった。

「さあ行くぞ。」

クローバーがそう言って階段を降りようとしたその時、下からブライドが上がってきた。黒いショートカットが良く似合う、真面目そうな青年だ。

「君たちも、エージンさんに用が？」

「いえ、たまたま寄っただけです。」

僕が答える。

「そうか。」

公国側の国境警備を任されているブライドが、こんな民家に何の用なのだろうか。

ブライドはドアの前で一瞬ため息をつくとき、呼び出しのベルを鳴らした。

返事はない。

「エージンさん、ここを開けてください。みんな心配してるんですよ。こんな人里離れたところにひとり暮らしして。」

ブライドが家の中に向かって、そう呼びかける。

「かまうな！私は孤独を愛する天才だ。自由にさせろ。」

家の中から、しゃがれた老人の声が返ってくる。

「天才とは大きくてもんだな。」

クローバーがどうでも良さそうに感想を述べる。

「病気になったらどうするんです？」

「薬ぐらいなら自分でなんとかできる！私は天才錬金術師なのだぞ！」

「1度でいいから、ここを開けてください！顔を合わせて話をしましょう、お願いします！」

ブライドは中々引き下がらない。

「やだねー！」

家の中から、ぞんざいな答えが返ってくる。

「放っておけばいいのに。」

クローバーがそう漏らす。

わざわざこんなところまできて、住人の安否確認をする必要があるのか疑問だ。

「エージンさん！」

ブライドがうんざりしたように呼びかける。

しかし、もう何も返ってくることはなかった。

「まったく……。」

ブライドはそう言い残すと去っていった。

一体なんのためにこんなことをしているのだろう。この家のエージンという人はブライドを拒んでいる。ブライドもこの仕事を好きでやっているわけではなさそうだ。どっちも迷惑してるのに、なぜやめないのだろうか。

世の中は不条理なこと溢れている。

「……まだそこに誰かいるのか？心配するなと言っただろう。ああ、土産があるならそこへ置いていけ。」

「ちやつかりしてるじいさんだな。」

クローバーは呆れ顔でそう言うと、階段を降りていく。

僕はもう一度小窓に自分の姿を写して、髪型を確かめると

「うん。いい。」

と呟いた。

僕は満足した気持ちで、クローバーのあとに続いた。

第34話 機械人形

「ねえ、あれなに？」

エルサイズをポニーテールにして満足した私は、また連邦を目指して国境沿いの道を歩いていった。

その途中、なんだかよくわからない鉄の塊が、崖から落ちそうになっっていた。

「危ない……！」

エルサイズが咄嗟に飛び出し、鉄の塊をこっちへ引っ張る。私も急いで加勢する。

「よかった。大丈夫ですか？」

「……………」

エルサイズが話しかけるが、返事はない。

「これ、何？」

「機械人形だよ。」

私が聞くと、エルサイズが答える。

「すごいなあ！自立型の機械人形を見るのは初めてだ！」

エルサイズはどこか嬉しそうに目を輝かせている。まるで秘密基地を見つけた少年の様だ。

もの言わぬ機械人形は、ただエルサイズを見つめていた。そう見えるだけで、何も見てはいないのかもしれないが、私にはわからない。

「動きますか？お家はどこですか？ひとりで帰れますか？」

エルサイズは構わず機械人形に話しかけている。

機械人形は何も答えない。

「なーんもしやべんねーな。」

私がそう言うと、エルサイズは困ったように眉を下げた。

「どうしよう……このままにしておいて、海に落ちたら困るしなあ。」

「海が汚れそう。」

私は素直な感想を漏らす。

「貴重な機械人形が壊れる方が困る。」

「エルがこういうのが好きだとは初めて知ったよ。」

エルサイスは普段、他人の安否など、まるで気にしない。心配して風を装うことはあるが、心の中ではどうでもいいと思っっていることが多い。

でも、この機械人形の話はちゃんと気にかけているようだった。「機械人形そのものよりも、これに使われてる技術が好きなんだ。僕は錬金術師だからね。」

学術的興味があるのだろう。

学問は裏切らない。身につけた知識だけは、誰がどうやっても奪えない。エルサイスはそれを痛いほどわかつているのだ。

「どうしようね？しゃべらないし、動かないし。」

機械人形は私を見つめるだけで、何もしない。

私は何となく、気持ちの悪さを感じた。こいつは機械だ。そこには意思も、感情もないはずなのだが、私を見下ろすこの機械人形を見ると、そのレンズの奥に何かしらの意識があるように思えるのだ。人間の感性とは、中々厄介だと思う。無いはずのものを、あるように感じてしまう。気をつけなければ、事実を見誤りそうだ。

「ビモット……どこに行つたのかと心配していたよ」

しゃがれ声の老人が、私たちの前に現れ、機械人形に話しかけた。

ビモットと呼ばれた機械人形は、そちらを向く。

何となく、嬉しそうに見える。

「あ、あのですね……」

エルサイスが老人に、ビモットが落ちそうになっていたことや、それを助けたことを説明する。

「そうか！あんたらがうちのカワイイ子の危ないところを助けてくれたんだな！」

老人はそう言うと、エルサイスに握手を求めてきた。随分他人との距離が近い。私の苦手なタイプだ。

「ありがとう、本当にありがとう。礼と言ってはなんだが、我が家へ来てはくれないか？美味しい菓子があるんだ。食っていけ。」

老人が、エルサイスの手をガツチリ握りながら言う。エルサイスはチラリと振り返って、私の顔色を伺う。行きたそうだ。

「好きにしるよ。」

私がそう言うと、エルサイスは嬉しそうに微笑んで、目を輝かせた。いつもこのくらい素直なら楽なのと思う。

「さあ、ビモット。行くよ。お客人も一緒だぞ。こわくない、やさしそうな人だ。」

老人はそう言いながら、ビモットを連れて歩く。

「おっと、そこに石があるから、気をつけて。あんよが痛くなるからな。」

老人はビモットをまるで本当の子供のように扱っていた。老人の対応を見ると、こっちが混乱してくる。機械人形なのに段々人間と同じように見えてきてしまう。

「ああ、疲れたら言うんだぞ?」

「ねえ機械人形って疲れるの?」

私はエルサイスの耳に顔を近づけ、こっそり尋ねる。

「さあ……多分疲れないよ……。」

エルサイスは苦笑しながら答える。

「心配なくらい大事にしてるってことなんだと思うよ。」
なるほど、と納得する。

「我が家はすぐその崖の所にある家だ。待っているぞ。」

私とエルサイスは顔を見合わせた。ついさつき、エルサイスをポニーテールにした時立ち寄った家だ。

ブライドをぞんざいな態度で追い返した老人と、今ビモットに優しく語りかけていた老人が、同一人物だとは思えない。

「天才錬金術師か……。」

老人がブライドにそう言っていたのを思い出す。

「何かすごい話が聞けるかもしれない。」

エルサイスは期待に胸を膨らませている。

「(まあ、珍しくエルの楽しそうな顔が見れるならいいか。)」

私そう思うと、今来た道に戻って、岬の民家へと歩き出した。

第35話 議論の相手

「よく来たな。待っていたぞ。」

老人はそう言うと、僕らに席に座るよう促した。

白髪の老人は、両サイドをスキンヘッドにしている、鼻の下に立派な髭が生えている。右目には奇抜な形のゴーグルをしていた。

「何か特殊なレンズなのかもしれないな。」

僕はあまり見つめすぎない程度に、ゴーグルを観察した。

あちこち見たくなくなってしまふ。僕は年甲斐もなく、ワクワクしていた。そんな僕をクローバーが肘で小突いてくる。落ち着けてもらいたい。

「改めて、礼を言う、ありがとう。私はエージンという。」

「こちらこそ、お招きいただき、ありがとうございます。僕はエルサイス。こちらは……。」

「クローバー。」

「です。」

僕らはそれぞれ自己紹介する。

エージンは棚からクツキーを出すと、皿に移し、僕らに振舞ってくれた。クローバーは遠慮なくそれを1つ取ると、口に放り込む。美味しかったみたいだ。口をもぐもぐしながら嬉しそうにしている。

「私は歳をとってはいるが、まだまだイケてる天才だ。」

エージンが話し出す。

「こいつはビモットとという。私の凄腕錬金術で作り出した機械人形だ。今はコイツと私の2人暮らし。言わば私の娘も同然だな。」

「娘？私は何となく息子だと思ってたけど……。」

クローバーが口を挟む。機械に性別は無いのだから、どっちでもいい気がする。

「息子か？いや、娘の方がいいな！」

エージンには、エージンのこだわりがあるらしい。

しばらく僕はエージンと、錬金術の話をした。エージンは博識で、僕の質問や疑問になんでも答えてくれたし、新たな疑問や問題点を見

つけてくれた。白熱する議論についていけないクローバーは、美味しいクッキーを食べながら、つまらなそうにあくびをしていた。「うーん……。いい線はいつてたと思っただけだなあ。ダメかあ……。」

カツツのことから思いついた、魔物化した動物が人間に転生する理論について、エージンにコテンパンに論破された僕は、ため息をついた。悔しいが、完敗だ。悔しがる僕を、クローバーが嬉しそうに見ている。

「楽しそうだね。」

クローバーはそう言いながら、クッキーを食べた。最後の1枚だった。

「そんなに食べると、夕飯が食べられなくなるよ。」

僕が注意しても、クローバーは肩を竦めるだけで、悪びれるようすはない。

「おお、うちたあ、ビモット。」

エージンがそう、ビモットに話しかけたので、僕もクローバーもそちらを見た。

「具合が悪いのかい？ちよつと見てやろう。」

エージンはそう言うと、ビモットの顔を覗き込む。

「ゴミが入ったわけでもなさそうだが……。ああ、これだ。採光レンズに傷がついておるな……。」

僕らから見れば、ビモットのようすはずっと変わっていなかった。エージンはその脅威の観察力で、ビモットの不調にいち早く気がついたのだ。

素直にすごいなと思う。

『『ジルコニア』が必要か。たしかここに……。ないな。』

棚の引き出しを漁っていたエージンは、困ったような苦い顔をした。

「とっつきましようか?。」

僕はつい、そう口に出してまっていた。

「おお……。お願いできないかね。この子の体調を治すために『ジルコ

ニア』という石を持ってきて欲しい。石炭ほどではないが、内陸の方ではよく見かける石だ。」

今更もう遅いが、クローバーの顔色を伺う。怒った様子も、面倒臭そうな様子もない。どうでもいいという感じだ。僕は少し安心する。僕は軽く準備をすると、ジルコニアを取りに国境沿いの道へと向かった。

今日のクローバーは、どこか機嫌がいい。テバサキにグラウンドショットを放ち倒しながら、気持ちよく体を動かしている。

「なんかご機嫌だね。」

「そうかあ?」

テバサキが落としたジルコニアを拾いながら、クローバーがどうでもよさそうな返事をする。

「私なんかより、エルの方がよっぽどご機嫌だぞ。」

「そう?」

言われても、自分ではよくわからない。

でも、お互いご機嫌なのだとしたら、それはそれで素晴らしく幸せなことだと思う。

「あのジーさんはどうだ?」

「どうって?」

「話してて楽しいか?」

「うーん……楽しいとはまた別かなあ……。何日も一生懸命考えた理論を、数分で論破されるのは、中々堪えるものがあるよ。」

僕はそう苦笑いをする。

「それでも、勉強にはなるから、すごい面白い。そんな感じかな?」

「やっぱり、楽しそうだ。」

クローバーはそう言うのと、嬉しそうに笑った。僕のこの複雑な気持ち、ちゃんと伝わっていない気もするが、クローバーが嬉しそうな別々に伝わらなくてもいいかと思う。

「私じゃさ、相手にならないからさ。」

「何の?」

「エルの議論の。私はエルが何言ってるかさっぱりわからん。難しくて。」

「気にしてた？」

「いや、全然。」

クローバーはあつけらんかんとしている。

「できないもんは、できないし。したいともあんま思わないし。」

クローバーは僕と議論がしたいわけでも、難しくて、おいてけぼりになることが嫌なわけでもないようだった。

「剣術つてのはさ、こうして雑魚ばかり狩つてると、知らないうちに腕がどんどん鈍っていくんだ。」

クローバーはそう言いながら、テバサキとメロミを、セイクリッドサークルでまとめて倒す。

「たまには自分の全力を出し切らないと、強さを保てなくなる。」

クローバーは、学問も同じだと考えたのだ。

「エルが思いつきり議論できる場ができて、ちよつと安心したよ。」

クローバーの理論は正しい。むしろ剣術よりも、学問の方が鈍りやすいと、僕は思った。

1人で考えていると、思考が固まりやすい。同じ考えに固執したり、間違いに気づけなかったり、簡単な見落としをしていたり、学問は腐りやすいのだ。

たまに誰かとしつかり全力で議論して、考えをアップデートするのは、とてもいいことだと思う。

クローバーが、そこまで僕のことを考えてくれるとは、思ってもみなかった。

「クロ、ありがとう。」

そうお礼を言う僕を、クローバーは鼻で笑った。

「別に、エルのためじゃないさ。エルの思考を整理するために、質量保存の法則とか、カタストロフィー理論とか、訳の分からない話を延々と聞かされるのが面倒なだけ。」

クローバーはそう言って笑った。どうやら照れてそう言ってるわけではないらしい。それが本音のようだ。

僕は苦笑いを返す。考え行き詰まると、ついつい1度クローバーにアウトプットして整理するクセが僕にはあった。クローバーは優しいので「うんうん」黙って聞いててくれたが、中々の負担だったらしい。

「嫌だった?」

「うーん……別にそんなに嫌ではないけど、寝たくないのに眠くなるのが困るね。」

僕は笑った。クローバーは本当に正直だ。

「さあ、ジルコニアが集まったぞ。じーさんに渡しに行こう。」

クローバーは集めたジルコニアを、僕に投げてよこした。中々の重さがある。

「加工するところ見てもいい?」

「いちいち顔色伺うな。面倒なやつだなあ。好きにしろ。」

クローバーはそう言いながらあくびをしている。

楽しいことをしていると、すぐ取り上げられた過去がある僕は、ついビクビクして、クローバーの顔を伺ってしまう。

クローバーは僕が楽しんでいても、怒ったり、馬鹿にしたりしない。むしろ、一緒に楽しんでくれる。そうわかっていても、幼い頃から染み付いた習慣というものは、中々抜けないものなのだ。

それでも、少しずつこの呪縛から抜け出せればいいと思う。

僕はウキウキしながら、エンジンの家へ向かった。

第36話 友達

ジルコニアを持って家に戻ると、エージンは手を広げて僕らを歓迎した。

「おお、『ジルコニア』を持ってきてくれたか、大いに感謝するぞ。こいつを使って磨いた採光レンズじゃないと、ビモットは調子が悪くなるんだ。」

エージンはそう言うと、テーブルにジルコニアと、いくつかの器具を広げた。

「あ、見てもいいですか?」

僕は慌てて、テーブルに近づく。絶対に見逃したくなかった。

「ビモットよ、ちよつと待っておるんだよ。」

エージンはそう言うと、加工を始める。僕はその1つ1つの動きを目を凝らして見ていた。

美しい、一切無駄のない、キレイな加工だ。キラキラと光を屈折し合う、美しい採光レンズが、あつという間に出来上がった。

僕は感嘆の声を漏らす。素晴らしかった。錬金術がもつと好きになった。

エージンは、出来上がったレンズをビモットに装着する。いたわるような、優しい手つきだ。

「よし、どうだい、ビモット。」

「……………」

ビモットは返事をしない。それでもエージンは「すっかり具合がよくなったみたいだな。」

と、嬉しそうに漏らした。

「世話になったな!」

エージンはそう言いながら、僕らを振り返った。

「どーいたしました。」

クローバー面倒そうに返事をするが、まんざらでもなさそうだ。

僕は天才錬金術師の加工が見ただけで満足だ。とても素晴らしい体験だった。今日宿に着いたら、余ったジルコニアで、僕も加工に

挑戦しようと思った。

「しかし、あんたらはなんでビモットを人のようにあつかったんだ？」

エージンが加工に使った器具を片付けながら聞いてくる。

「え？」

僕は首を傾げた。

「崖から落ちそうになっているのを助けてくれて、優しく声をかけてくれたろ。」

確かに、そうしたが、何か意図があった訳では無い。ただ単純に、そう動いてしまったとしか言いようがなかった。

「ずっと以前、私は公国において、こいつの研究をしてきたのだ。しかし、そこでやつと完成させたビモットを、公国は死なない兵士として使いたいというんだ。」

「愚かなのは、いつだって人間だな。」

クローバーが呟く。

こんな素晴らしい技術を、戦争の道具にするのは、なんとも言えない苦しさがある。

技術者に罪はないはずだ。僕らは、いつだって自分の興味や関心を、昇華させることばかりを考えている。

その技術を悪用するのは、いつだって僕らではない、権力を持った者達だ。

「私はこの子と2人で、連邦へ亡命してきたのだ。公国を出て、連邦へ行き……。そして今はここでこの子と2人きり……。」

迷惑な話だった。

高い技術を持ちたいと思うのは、錬金術師の性だ。それを悪用したいと思う人たちのせいで、この天才錬金術師エージンは、居場所を失っていったのだ。

「酷い話ですね。」

僕はため息をついた。こんなに美しい技術なのに、人を殺すのに使うなんて、もったいない。

「いまだに兵士が、わが子を兵器にせんとうちに来よる……。」

「ブライドさんのことですか？」

エージンは「うん」と頷く。

随分不条理なことをしてるなと思っただけだが、そういう理由があったのかと、半分納得する。でも、半分は納得できない。あの真面目で実直なブライドが、そんな姑息なマネをするとは、にわかには考えがたい。

「ブライドはそんなに器用なやつじゃない気がするけど……。」

クローバーも、同じことを思っているようだ。

「……なああんた。」

エージンが改まった様子で、僕たちに声をかける。僕とクローバーはブライドのことを考えるのをやめ、エージンを見る。

「私の友達になってくれんかね。」

「え?!」

「は?」

僕とクローバーは、同時に戸惑った声をあげる。この歳で、こんなにも丁寧な感じで「友達になってくれ」と言われるとは、思ってもみなかった。

「何を突然、という顔してるな。しかしな、結構ことは深刻なのだ。」

エージンはそう言うと、苦笑いを浮かべる。

「歳をとると、みな出不精になる。話し相手すらいなくなってしまう。そのおかげで、日に日に偏屈で、頑固になっていくものなのだ。」

それは確かにそうかもしれない。さっきクローバーと外で話していたことに似ている。たまには自分の考えを壊すような出会いがないと、頭はどんどん固くなって腐ってしまうものなのだ。

「叱ってくれる人がいないと……。いや、たとえ叱られてもそれを受け入れられず自分勝手に振舞ってしまうのだ。そんなじいさんの友達になんて、なりたくないだろうな。」

「そんなことありませんよ。」

僕は笑った。歳をとっていなくても、そんな振る舞いをする人を、僕は知っている。今日の前にいるクローバーのことだ。クローバーは、その何が悪いんだというように、首を傾げている。

我が道を行く人同士、仲良くなれるかもしれないと、僕は思った。

そこに、ノックの音が舞い込む。

「誰だ。」

エージンが返事をする。

「私です。ブライドです。」

「エージンは外出中だ。」

「めちやくちやな居留守の仕方だな。」

クローバーが笑った。雑な断り方が面白かったらしい。

「そもそも、ビモットは渡さんぞー！」

そう怒鳴るエージンに、ブライドは

「何度も言ってるじゃないですか。別にエージンさんの発明を盗もうってんじゃないですよ。ちよつと錬金のことで、教えてもらえたらなって……。」

と、悲しいような声で答える。

「jeeさん、気持ちはわかるが、ブライドはそんな器用なやつじゃない。ちよつと信用してもいいんじゃないか？」

クローバーの言葉に、僕も頷く。

「友達になる相手は、僕たち以外にもいるんじゃないですか？」

僕がそう言うと、エージンは少し考えた。

「……そうだ……私は自分に優しくしてくれようという者まで、信用できなくなつてたのかもしれないな。」

エージンは1度ため息をつく

「ブライド。用があるなら入っていいぞ。菓子でも食べるがいい。」

とドアに向かって声を張り上げた。

「いいのですか？」

ブライドが戸惑った声を返す。ドアの向こうからでは、エージンがなぜ急にそんなことを言い出したのか、さっぱりわからないだろう。

「ああ、歓迎しよう。」

エージンはそう言うと、笑った。いい笑顔だ。

おずおずと入ってきたブライドと目が合った。

「あれ？なんで……？」

「さあ？どうしてだろうね？」

クローバーは面白がるようにそう言うと、ブライドと入れ替わりで玄関に向かう。

「よかったら、また茶でも飲みに来ておくれ。」

「はい、是非！ありがとうございました。」

僕はそう言うと、クローバーと共に、エージンの家を後にした。

第37話 束の間の平和

私はベットのの上に寝転がり、本を読んでいた。

身分違いの男女が恋に落ち、周囲の反対を押し切って、駆け落ちする、そんな恋愛小説だ。随分前に、エナが不老不死の村の劇場で見たと言っていた演劇も、そんな内容だったなと思いつく。流行っているのかもしれない。

「つまり……。」

私はそうつぶやくと、本を投げ出す。まだ半分ほどしか読んでいない。

なぜこんな本を買ってしまったのだろうと後悔する。

公国で時々開催される『本の市場』に、私とエルサイスはよく行く。私は読書のための小説を、エルサイスは錬金術のための学術書を探して買うのだ。

この恋愛小説も、そこで買ったものだ。チョコレート色の布装丁で、金文字の美しいフォントと縁取りが、芸術的だった。それに目を奪われて、つい、中身を見ずに買ってしまったのだ。表紙は美しいのに、中身はスカスカだ。いや、見る人が見れば楽しめるのかもしれないが、私には合わなかった。

私は幼い頃、騎士になるための教育を受けていたので、最低限読み書きができなければならなかった。その勉強の一部として、よく小説を読んでいた。

小説は、事前知識が少なくても、言葉さえわかれば気軽に楽しめる。今でも、雨の日や、夜寝る前など、ちよつとした空き時間に、ぱつと本を開いては楽しんでる。

一方、エルサイスが読むのは、難しい学術書や研究書だ。それらは前提理解がないと、読み解けないものばかりなので、私は手が出ずらい。

今エルサイスは、黒い革張りの装丁の小さな本を広げて、時々何かを確認するように見ながら、ジルコニアを加工している。

テーブルの上で、ジルコニアがキラキラ光っていた。宝石みたいで

キレイだ。

「調子はどうだい？」

「んー？まあまあだよ。」

私が聞くと、エルサイスはかけていたゴーグルを外して、額の汗を拭う。

「加工自体はできる。でも、僕のはエージンさんのレンズに比べて、屈折率が悪いね。僕の腕じゃ、これ以上カット数が増やせないんだ。」

「ふーん……。」

よくわからない。でも、大変そうだ。

「時間もかかっちゃうしね。」

エルサイスはジルコニア加工するのに、さっきから2時間以上テールブルにかじりついていた。それでやっと1個完成させたのだ。いや、本人が納得していないので、完成とは言わないのかもしれない。

「エージンさんは確かに天才だよ。」

そう言いながら、エルサイスは笑った。目の前に立ちはだかる壁を見て、それを楽しむような感じだ。

私は、エルサイスのこういうところが好きだ。たとえば自分より遙か上の能力をもつ人がいても、腐らない。むしろ喜びを持ってそれを目標とする。

世の中には、そういう人を妬んだり、馬鹿にしたりして、自分の尊厳を保とうとするやつがごまんといえるのだ。

「まだやる？」

エルサイスがまだ加工を続けるのなら、先にシャワーを浴びておこうと思っていた。

「いや、もう今日はおしまいにするよ。目がチカチカするや。」

エルサイスはそう言いながら、メガネを外し、目をこすった。

「じゃあご飯でも食べに行く？」

「ああ……もうこんな時間なのか。クロ、ごめん。お腹すいてたでしよ？」

エルサイスがメガネをかけ直し、時計を見ながら言う。夕飯にするは、随分遅くなってしまうが、私は気にならない。

「別にいいよ。じーさんのところでクッキー食べたし。」

「このくらいの時間方が、私にとっても都合がいい。」

「そういえばそうだったね。僕はお腹ぺこぺこだ。」

「じゃ、行くか。」

私は勢いよくベットから起き上がると、宿を後にした。

連邦の酒場は、今日も盛況だ。食事をする人よりは、お酒を飲む人の方が長い時間帯なので、どのテーブルも酔っ払いで騒がしい。

エルサイスはウェイターを呼び止めると、料理を注文する。いつもより品数が多い。

「私そんなに食べられないからね。」

先回りして、牽制を送る。

「僕が食べるからいいよ。」

最後にビールと、サイダーを注文して、おしまいだ。ウェイターは足早に厨房に去っていった。

いっぱい食べられるエルサイスが、少し羨ましい。私は食べたくても、食べられないのだ。胃袋のキャパが小さい。大剣を振るうには、もう少し体重を増やした方が安定するのだが、中々難しい。

料理がくると、エルサイスは大いに食べて、大いに飲んだ。今日のエルサイスは、やっぱりどこか機嫌がいい。

「じーさんのところには、時々寄るようにしようか。」

「そうだね。友達になったし。」

エルサイスはそう言うのと笑った。私もおかしさがこみ上げてくる。

ボンド『シルフィード』とのメンバーとは仲良しだが、それは『同志』とか『仲間』という感じで、『友達』とはまた違う。

この歳になって、新しい、しかも随分年上の『友達』ができるとは思ってもみなかった。

エージンから見れば、私たちなんてただの小娘と小僧だ。こんな年端もいかない子供に、自ら「友達になってくれ」と頼むのは、相当勇気が必要だっただろうし、多少のプライドも捨てただろう。

それだけで私は、エージンをリスペクトできる。天才はただの天才

ではなく、奢らず、膿まず、褪せず、老齢になっても自分を磨き、挑戦していた。

「(どっかのクソガキとは大違いだな。)」

私は少し前に会った、ひねくれ天才錬金術師のアルスを思い出していた。

同じ天才でも、エージンの方がずっと格が高いように思える。

「ブライドはどのようなかな?」

「どうって?」

「公国の手先だと思う?」

私の疑問に、エルサイスは「うーん」と首を捻る。

「難しいところだね。ブライドさん自身は、ビモットを奪うとか、そういうことはしないとと思うけど、公国としては、あの技術は欲しいんじゃないかな?」

いつの時代も、高度な技術の発展と戦争はセットだ。文化の発展に寄与する美しい技術を、人間は人殺しの道具に使う。愚かなことだ。「かわいい息子を戦争の道具にされるのは、じーさんだって嫌だろうね。」

「エージンさんは娘って言ってたけど。」

私にはなぜか息子に見える。

「機械人形は、兵士として使うには都合がいいんだよ。命令に逆らわない、恐怖も痛みも感じない、それに死なない。」

エルサイスはそう言いながらも、どこか悲しそうだ。

「耐久度もあって、戦闘能力も高い。」

「パーフェクトってわけか。」

私は暗雲たる気持ちになった。

「エージンさんだって、最初はただの興味だったんだろうね。ビモットを作ったのは。」

「技術を生み出すやつに罪はない。使うやつの頭が未熟なのが問題なんだよ。」

私はため息をついた。人間は未熟だ。でも、私もその人間の一人なのだ。

「中々難しいね。」

エルサイスも、私に倣ってため息をついた。なんだか暗くなってしまう。

隣のテーブルで、拍手が沸き起こる。誰かの誕生日のようだ。大きなケーキが運ばれてきて、店員たちが、ハッピーバースデーの歌を口ずさむ。やがてそれは酒場にいる全員を巻き込む大合唱になった。

私とエルサイスも、その渦に参加する。今日はなんだか気分がいい。

戦争の足音は、私たちすぐ後ろまで、刻一刻と迫ってきていたが、私とエルサイスはまだそれに気づいていない。

誕生日の主役の青年が、照れくさそうにケーキのロウソクを吹き消すと、酒場全体に、拍手やら、指笛やら、ベルやら、様々な祝福の音が響き渡る。

今はまだこうして、束の間の平和を、私はエルサイスと2人で楽しんでいた。

番外編く騎士の子とクロの過去 前編く

エルサイスとクローバーは、午後からボンド『シルフィード』のメンバー、にもと、そのパートナーのもふと、釣りをする予定だった。その準備のため、2人は公国のマーケットで魔物の肉を買い、釣り餌を合成していた。

「リオン分隊長！」

1人の男が、そうクローバー肩を掴み、呼び止めた。クローバーは一瞬驚いたが、すぐ表情を固くする。

「分隊長ですよー！」

男は構わずクローバーに詰め寄る。

「人違いですよ。」

エルサイスは状況をよく飲み込めて居なかったが、普段あまり見ないクローバーの固い表情から、あまり良くないことが起こっていると判断し、男の手をクローバーから引き剥がした。

「そんな！第24分隊のアレンです！あなたの部下だった！」

アレンと名乗った黒髪の男を、クローバーは無表情で見つめ返した。どこか悲しげだ。

「分隊長、どうして？あのあと一体何が……」

しつこいアレンを、エルサイスが追い払おうと、口を開きかけた瞬間、クローバーがそれを手で制した。

「アレン、よく覚えてるよ。あの時は世話になったな。」

クローバーはそう言うのと、珍しく作り笑いをした。エルサイスがやるような、ニツコリとしたキレイな笑顔ではない。それはどこかぎこちないものだったが、それでもエルサイスはそれを見て驚くと同時に、いつもと違うクローバーに胸騒ぎを感じた。

「だが、アレン、私はもうリオンではない。」

声もいつもと違う、太く落ち着いた、中性的な声だった。

「今の私はクローバーだ。」

「リオン分隊長……どうして……」

「見ればわかるだろう？私は女だ。騎士にはなれないんだ。」

クローバーは自分でそう言いながら、深く傷ついていた。酷すぎて、笑ってしまうほど、辛かった。実際、クローバーは悲しい笑みを一瞬浮かべた。

「でも……」

アレンは中々しつこい。

「もう終わったんだ！」

抑えきれなくなったクローバーが、そう怒鳴り返す。アレンだけでなく、周りにいた人たちも、何事かと、クローバーを振り返る。

エルサイスがクローバーの肩に手を置いて、落ち着くように促す。クローバーは大きく深呼吸すると

「もう見かけても、話しかけないでくれ。」

と静かに言った。

アレンはまだ何か言いたげだったが、クローバーの傍に立つエルサイスが、目の力だけで「去れ」と言っているのを見て、怖気ついた。

「わかりました……すみませんでした……」

アレンはそう言うと、去っていった。

クローバーは俯いて、地面を見ていた。自分の足がそこにある。色白で、細い、女の足だ。

「エル、悪いけど、にもちゃんとの釣りの予定、キャンセルするよ……」

今のクローバーは、とてもそんな楽しい気分になれそうにもなかった。

「僕は別にいいよ。」

エルサイスはそんなことよりも、俯いたまま固まっているクローバーの方が心配だった。

「断りの連絡は僕から入れとく。」

そう言いながら、エルサイスはクローバーの腕を掴むと、引つ張って誘導する。

「1度宿に帰ろう。顔色が真っ青だよ。」

「……………」

クローバーは無言のまま、引きずられるようにエルサイスのあとを

ついて行く。ついさつきまで、にもとの釣りを楽しみにしていた面影はどこにもなかった。

宿の部屋に着くと、エルサイスは

「いくつか用事を済ませてくるから、留守番してて。2時間くらいで戻るよ。」

と言って、クローバーを置いて出ていった。

ちようど1人になりたかったクローバーは、その気遣いが嬉しかった。

クローバーはベットに座り込むと、年甲斐もなく、さめざめと泣いた。とにかく胸が苦しかった。泣いてこの苦しさを、さっさと外に吐き出したかった。

クローバーは、代々国の騎士として仕える家の、3姉妹の末っ子として生まれた。

騎士には、男児が望まれていて、クローバーは父親の最後の希望だった。『女』として生まれてしまった。

先に生まれた2人の姉たちは、騎士の家庭を支える淑女として、そしていずれ良い家柄の紳士と結婚するため、女性らしい行儀作法や、家事能力を身につける教育を受けていた。

一方私は、姉たちと同じ女の子だったが、父親の希望を叶えるため、幼い頃から騎士としての教育を受けることになった。

行儀作法、教養、剣術、武術、立派な騎士に必要なありとあらゆるものを、父親は幼いクローバーに叩き込んだ。

父親の教育は厳しかった。間違ったり、失敗したりすれば、容赦なく拳が飛んできたし、その上、泣き言は一切許されない。姉たちのように、『女だから』という理由で、譲歩されることもなかった。

クローバーは、自分が父親に殴り飛ばされている間、キレイなドレスに身を包み、優雅に紅茶を嗜む姉たちが、羨ましくて堪らなかった。

姉たちもそんなクローバーを気遣ってか、父親に内緒で、お菓子作りや、料理を時々一緒にしてくれたが、それが父親にバレると、クローバーだけが酷い罰を受けた。

父親はクローバーの中の『女』を否定し、男のように、立派な騎士になることを要求した。

それでも、幼い頃はまだマシだった。父親のスパルタ教育のおかげで、他の家のどの男の子よりも、強かったクローバーは、みんなに認められていた。

でも、年頃になってくると、様子が変わっていった。

相変わらずクローバーは誰よりも強かったが、ことある事に「女のくせに」「これだから女は」と、クローバーの性別を引き合いに出しては蔑まれるようになった。

クローバーは、声変わりしない高い声を隠すため、低く落ち着いた声を出すようにした。膨らんでくる胸は、サラシで潰した。そうして自ら、自分の中の『女』を否定するようになっていった。

12歳の時に、騎士の養成所に入った。女の名前での登録ができなかったのも、クローバーは『リオン』という新しい男の名前をもらった。

養成所での生活は地獄だった。

女だからという理由で、卑猥な言葉を投げかけられたり、不躰に体を触られたり、様々な嫌がらせを受けた。

それでもクローバーは負けなかった。騎士リオンとして、男たちと対等に渡り合った。

言いたいことははっきり言っただし、嫌なことは拒否した。大人しく、わかつたふりで黙っていれば、潰されてしまう。齒に衣着せぬ物言いは、ここで身につけた。

クローバーは男のようになりたいと思っていたが、その憧れの男たちから嫌がらせを受け、男を嫌悪するようになっていた。それでも、自分の中の『女』を否定しなければならぬ日々が続いた。

クローバーは、男でも女でもない。中途半端な存在だった。

18歳になったある日、小隊長だった父親の下で、最年少で分隊長を任された。

親の七光りだとか、枕営業だとか、悪口を言われまくったが、クローバーはそれを実力でねじ伏せた。

7人の部下を連れての、初めての遠征で、裏取りに来た敵小隊隊長の首を取り、大金星をあげたのだ。

その時クローバーの部下として、共に戦った1人が、さつき声をかけてきたアレンだ。

これでやっと本物の騎士になれる。みんな自分を認めてくれる。

そう思っていた矢先に、クローバーは父親から、酷い裏切りを受けることになるのだった。

番外編く騎士の子とクロの過去 中編く

「アジーロと結婚しろ。」

「はあ？」

クローバーは、父親が何言っているのか理解できなかった。

「アジーロはいい騎士だ。お前のことをよく気にかけていたし、認められている。」

「何言ってるんだよ……。親父……。」

頭の上から、冷水を浴びせられたような衝撃が、クローバーの中を駆け巡る。手足が冷たくなっていく。でも、頭の中だけは、怒りで熱く燃えていた。

アジーロとは、確かに仲が良かった。養成所でいじめられていた時は、何度も助けられたし、先の遠征では、クローバーの部下として、大いに力になってくれた。

でも、それだけだ。好きとか嫌いとかではない。同じ仲間だと思っていた。

「アジーロも、いいと言ってくれている。」

「ふざけんなよ！そんなの納得出来るか！」

裏切られた気分だった。何かの冗談であってほしいと思っていた。自分が今まで生きてきた大事な基盤が、根底から覆されそうになっている。

「もう決まったことだ。」

父親の意思は、固いようだ。

「私は今まで、お前を騎士にするために、努力してきた。周囲を説得し、根回しし、汚い取引もした。しかし、もう無理だ。これ以上お前を守ることはできない。」

「守ってくれなんてお願いしてねーよ！」

「騎士はそんな甘いものじゃないんだ！」

父親の怒鳴り声に、クローバーは一瞬怯む。でも、引けなかった。ここで引いたら自分の今までの人生が、全て無駄になってしまう。

「甘くないからこそ、誰よりも努力してきたんだ！なのに！」

「女は騎士にはなれないんだ。」

父親のきつぱりした物言いに、クローバーの心は、バラバラに壊れた。

「なんで……親父がそれを言うんだよ……。やっところまできたのに、なんで今更……。」

悔しかった。父親の願いである騎士になるため、ずっとずっと『女』であることに抗い続けてきた。それなのに父親は、最後の最後でクローバーを裏切った。

『女に生まれたこと』がクローバーにトドメを刺したのだ。

「もうお終いなんだ。騎士になるのは諦めろ。」

涙は出なかった。ただただ、深い闇が広がっていくような、絶望だけがそこにはあった。

そうして、騎士リオンは死んだのだった。

誰かが、宿の部屋の扉をノックしている。

「クロ？開けるよ？」

エルサイスはクローバーが返事をする前に、ドアを開け部屋に入った。

「ちよつとはスツキリしたかい？」

両手いっぱい抱えた荷物をテーブルに置きながら、エルサイスがクローバーに話しかける。

クローバーはベットに寝転がったまま、泣き腫らした目で、それを見ただけでいた。

「喉乾いたでしょ。チップさんから新作のジュースもらってきたから、飲むといいよ。」

エルサイスはそう言ってストローの刺さった紙コップをクローバーに差し出す。クローバーは無言のままそれを受け取ると、ベットに座り直し、1口飲んだ。

柑橘系の飲み物だ。炭酸が入っていて、爽やかな味わいだった。

「美味しい？」

「うん……。」

「ならよかった。」

エルサイスは買ってきた荷物の整理を始める。あまりクローバーを構わないようにしているようだった。クローバーはその気遣いが嬉しくて、そして少し寂しい。

「ねえ……。」

「んー？」

「私が男だったら、どうする?。」

「え?。」

エルサイスは首を傾げながらクローバーを見た。クローバーは真剣な顔で、ふぎけているわけではないようだ。

「どうするって言われてもなあ……。まあどうもしないかな?。」

「嫌?。」

「別に気にしないけど。」

「私はさ、男に生まれたかったんだ。」

クローバーが何か話し出しそうな気配を感じたエルサイスは、手を止め椅子に座ると、聞く体制を取る。

クローバーは、ポツリポツリと、リオンとして生きた数年間の話をエルサイスにした。エルサイスは、クローバーの話を静かに聞いていた。

「あの頃は、なんで私は『女』なんだろうって。ずっとずっと自分が『女』であることを呪って生きてた。」

クローバーは抑えきれなくなって、泣き出した。

「なんで……? 私には『女』なの?。」

「クロは、悪くないよ。」

エルサイスが、クローバーにハンカチを渡しながら言う。

「悪いのは『女』ってだけで差別するやつらだ。生まれ持ったものは変えられないんだからさ。」

そんなことはクローバーだってわかっていた。でも、その差別があまりにも大きすぎて、クローバーはたくさんものを失ったのだ。

「ねえクロ、僕はクロが男か女かなんて気にしないよ。僕はクロが強くて、優しくって、かわいいって知ってるし、そこに男も女もないでしょ

？」

「かわいいは余計だ。」

不満げなクローバーを、エルサイスは笑い飛ばす。

「辛い話をしてくれてありがとう。僕は男でも女でもない、クローバーっていう存在の味方だよ。」

エルサイスはそう言うと、クローバーの髪をクシヤッと撫でた。

クローバーは『女』のままだし、今から騎士にもなれないし、周囲の差別もなくなならない。何も変わっていないが、なぜかクローバーの心は、ほんの少し晴れていた。

こうして吐き出して、少しずつ折り合いをつけていくしかないのだ。過去は変えられないのだから。

「ところで……クロにお願いがあるんだ。」

「なんだよ急に。」

クローバーは涙をハンカチで拭うと、首を傾げた。

「材料は買ってきたから、一緒に、ホットケーキを作ってくれないかな？」

「はあ？」

なぜかわくわくしているエルサイスを、クローバーは呆れ顔で見つめ返した。

番外編く騎士の子とクロの過去 後編く

小さなキッチンに、クローバーとエルサイスはくつつくように立っていた。

「お前何個ホットケーキ作るつもりなんだよ。」

クローバーが小麦粉の入った大袋を抱えながら言う。

「どれくらい必要なかわからなくて……。」

「だからって、どう考えたって1kgも必要ねーだろ。」

エルサイスは、キッチンに立って料理をしたことが、一切なかった。幼い頃は専属の料理人がいたし、錬金術の師匠と暮らすようになってからは、師匠の愛人たちが入り浸っていたので、その人達が作っていたし、自分で合成ができるようになってからは、錬金術で料理をつくっていた。

「まずな、買い物段階で、料理は始まってんだよ。」

クローバーはそういいながらも、小麦粉の袋を開ける。

「じゃ、小麦粉を200g計る。」

「だいたいじゃダメ？」

小麦粉の袋を受け取ったエルサイスが、袋から直接ボールに小麦粉を入れようとする。

「あのなあ、料理初心者が失敗する最大の理由は……材料を！ちゃんど！計らないからだ！心に刻め！」

「はい！先生！」

エルサイスはそう言いながら敬礼する。クローバーもまんざらでもなさそうだ。

「私くらいになれば目分量でいけるが、ホットケーキ数枚作るのに、小麦粉1kgも買ってくるやつが、目分量なんてできると思うな。」

エルサイスはぐうの音も出ない。

おずおずと小麦粉を計量し始めるエルサイスの横で、クローバーはタマゴと牛乳を手早く混ぜ始める。

「懐かしいなあ。よくこうやって、母様や姉様たちと料理をしたよ。」

父親に結婚を言い渡されたクローバーは、騎士の養成所を辞め、実

家に戻った。

母親はクローバーを歓迎すると、今まで女らしいことを何一つ教えてあげられなかったことや、父親を止めることができなかったことを、クローバーに謝罪した。そして「結婚なんかしないでいい」と言ってくれた。

「あなたは、あなたの道を進みなさい。あなたにはその力があるわ。」
母親はそう言って、クローバーに1人で生きていくための術を叩き込んだ。

料理、洗濯、裁縫、整理整頓、自分のことは全部自分でできるように、教育してくれた。

特に料理は、しつかり教えてくれた。母親自身が料理好きだったこともあるが、毎日食べるものは、何よりも尊い生きる糧になるというのが、彼女の持論だったからだ。

先に結婚して家を出ていた姉たちも、私が実家に帰って来たことを聞いて、よく会いに来てくれるようになった。

「母様と姉様たちと、ホットケーキみたいな簡単なお菓子から、本格的なビーフシチューまで、いっぱい作ったよ。」

クローバーは混ぜたタマゴと牛乳に砂糖を加える。そこにエルサイスが、きちんと200g計った小麦粉をドサツと入れる。

「クロのビーフシチュー食べたいなあ!!」
「機会があつたらな。」

クローバーはエルサイスに泡立て器を持たせると、材料を混ぜるよう言った。

「ダメにならないように優しく混ぜろよ。」
「はい。」

材料を混ぜているエルサイスを横目で見ながら、クローバーはフライパンを火にかけ温め始める。

「家に戻って2年くらいはさ、すごい濃い体験をいっぱいした。」

庭を大改造して作物を育てたり、近所の子供たちを集めて剣術教室を開いたり、船に乗って旅行したり、真夜中に天体観測をしたり。

クローバーの母親は、クローバーが少しでも興味を持ったものは、

何でもやらせてくれたし、自らも様々な提案をし、クローバーの興味を引き出した。

「今思えば、母様は私に、世の中には騎士以外にも、色んな生き方があ
るって教えてくれてたんだなって。」

クローバーはそう言いながら、生地を混ぜていたエルサイスの手を
掴む。

「混ぜすぎ。そんなに混ぜたら泡立ちちゃうよ。」

「ごめん、ごめん。ついグルグルしたくなっちゃって。」

エルサイスは苦笑いを返す。

クローバーは一旦火を止め、熱したフライパンを少し冷ます。

「焼かないの?」

エルサイスは早く焼きたそうに、生地入ったボールを持ってソワソ
ワしている。

「落ち着け。一旦冷ましてからじゃないと、焼きムラがでるんだ。で
も、もういいかな?」

クローバーはそう言うと、再び火をつけた。

「エル、初心者が失敗する理由その2!」

「その2!」

エルサイスが復唱する。

「最初から強火を使う!」

「最初から強火を使うと失敗する!」

「火加減がわからないうちは、弱火もしくは中火で焼くこと。心に刻
め!」

「はい!先生!」

2人は顔を見合わせて笑った。

楽しい時間だった。

母親は、クローバーに色々な道を示してくれた。でもクローバー
は、何をやっても、剣術だけはやめられなかった。毎日朝と夕方、何
があっても必ず剣を振るった。

「生地入れている?」

「いいよ。入れすぎるなよ。」

エルサイスがフライパンに生地を流し込むと、一瞬だけ、ジュッと生地が焼ける音が鳴る。

「クロが、2年間実家で暮らしてる間、結婚の話はどうなったの？」

エルサイスが生地が焼けるのを待ちながら聞く。

「うん？母様がさ、今花嫁修業してるからって誤魔化してた。」

クローバーはそう言いながら笑った。

「結婚させる気なんてさらさらなかったのにね。」

強かな母親だった。クローバーが幼い頃は、父親に逆らえず、言われるがままだった。だからこそ、そのことを後悔して、傷ついて帰ってきたクローバーを、守ってくれたのだ。

「でもまあ、流石にそんなに長くは誤魔化せなかったよ。だからさ、アジローに直接言っちゃったんだ。私は私より弱いやつとは結婚しないって。」

「ハードル高いなあ。」

エルサイスは、クローバーに勝てる自信がまったくなかった。20mくらい離れたところから遠距離魔法で攻撃するとか、罨で動けないところを叩くとか、卑怯なやり方しか思いつかない。それでも尚、勝てる気はしない。

表面にプツプツとした穴が出てきて、ホットケーキが焼きあがってきた。クローバーはフライパンを軽く振ると、ポーンと生地を高く飛ばし、ひっくり返した。

「おおー！」

エルサイスは興奮した声をあげる。

「すごい！僕もやりたい！」

「やめとけ。掃除するはめになるぞ。」

ホットケーキの甘い匂いが、部屋を満たしていく。

「アジローさんはさ、それで納得したの？」

「うん？まあ元々私の性格はある程度わかってたヤツだからな。納得っていうか、まあほら……決闘だよな。」

「あ、本当に戦ったんだ。」

クローバーは澄ました笑顔を浮かべる。

「中々楽しい試合だったよ。」

「負けたら結婚だよ？よかったの？」

「負ける気しなかったからな。」

それほどまでに、クローバーは努力していたのだ。実際、クローバーはアジローに勝利し、結婚の話は無くなった。

「アジローさんはそれで引き下がったんだ？」

「ちよつとゴネたけど、もう私との間に信頼関係はなかったし、最後は諦めてくれたよ。」

クローバーはアジローを仲間だと、対等な関係だと思っていた。でも結局彼も、クローバーが『女だから』守っていただけに過ぎなかった。クローバーは、それが本当に嫌で、酷い裏切りの1つだと思っていた。

「親父はカンカンだったけど、その親父もぶつ倒したからな。」

「え？誰が誰を？」

「私が、親父を。」

エルサイスは震え上がる。

「そりや……クロのお父様も感慨深かったろうね……。」

「そうだな。まさか娘に倒される日が来るとは夢にも思わなかっただろうね。」

中々痛快な話だった。結局、クローバーを『女だから』で抑圧してきた者達は、誰一人クローバーに勝てなかったのだ。

「で、最終的に私は家を出て、冒険者になって、自由を手に入れました。めでたし、めでたし。」

クローバーはそう言いながら、焼きあがったパンケーキを皿に移した。

「ほい、できたよ。次のやつはエルが焼く？」

「うんうん、やりたい！」

クローバーはエルサイスに場所を譲ると、横で様子を見守る。

「火加減は？」

「弱火か中火です！先生！」

「よし、おっけー！」

過去は変えられない。クローバーは『女』ということだけで、今まで散々な目に遭ってきたが、今はこうして、エルサイスと対等な立場を築いて、楽しめている。

「だから!!やめとけってー!」

クローバーのマネをして、エルサイスがフライパンを振った。生地はひっくり返るどころか、そのままグチャッと床に落下した。

「ああー!」

悲痛な叫びを漏らすエルサイス。

「馬鹿なやつだな。」

クローバーはそう言いながらも笑った。

クローバーが『女』であることは変えようもない事実だ。でも、本来、女だからできないものも、男だからできないものも、ないはずなのだ。しかし、人の思想が、差別が、それを許さないことがある。クローバーはその被害者だった。

それでも今のクローバーは自由だ。

落ちた生地を片付けながら

「もう一回やっていい?」

とエルサイスが上目遣いで、クローバーに聞く。

「絶対失敗するからやめろ。」

クローバーは呆れ顔でそう返す。

クローバーは、剣で戦えるし、料理だってするし、無謀な挑戦をしようとするパートナーを嗜めることも出来る。

そうしてクローバーとエルサイスは、ワイワイしながら生地を焼き、出来上がったホットケーキを2人でお腹いっぱい食べた。

変えられないものを、嘆きたくなる時は、きつとまたくる。それでも、今は、この時間をただ楽しもうと、クローバーは思った。

そうして2人は暖かく幸せな時間を過ごしたのだった。

第38話 食材を求めて

クローバーが料理ができると知ってから、僕は時々食べたいものをリクエストするようになった。もちろんただ「食べたい」と言うだけではない。必要な食材や調理器具を集め、調理できる環境を整えるまでが僕の仕事だ。

今回はビーフシチューをリクエストしたのだが、公国の宿のミニキッチンでは作れないと言われたので、わざわざ酒場のチップさんに頼み込んで、空き時間に、場所や調理器具を貸してもらおう算段を整えた。

そして今は、食材の買い出しのため、クローバーと共に、連邦の大農園を訪れている。

「えつと……にんじん、じゃがいも、玉ねぎ、ブロッコリー、トマト……。」

僕はメモを確認する。全部揃うか不安だ。そんな僕の横で、クローバーはつまらなそうにあくびをしていた。

農園の入口までくると、老齢の兵士が

「この農園を荒らす者よ！老いたとはいえ、このバスタ、まだまだ後れは取らん……。」

と言いながら剣を抜いてきた。突然の出来事に僕もクローバーもポカンとしてしまう。

「我が牙のエジキとなれ！」

随分物騒だ。いつもの好戦的なクローバーなら、嬉々として剣を抜いて応戦しそうなものだが、今は完全にオフになっていたので、ただ呆れた顔をするだけで、動かない。

「僕たちは食材を買いにきただけの、冒険者ですよ。」

僕がそう言うと

「ふん！冒険者が殺せぬなど百も承知。だが、この刃には毒が塗つてある。傷ついたところから皮膚が溶解し、骨まであらわにするのだ！」

と、バスタが返す。全く人の話を聞いていない。

「そりや痛そうだな。」

クローバーはそう面倒くさそうに言うだけで、珍しく動かない。この老兵士にはあまり興味がないようだ。

「死ぬ以上の苦しみを与えてやる！覚悟しろ！」

沈黙が流れる。ピリピリしているのはバスタだけで、僕もクローバーも全く緊張感がない。

「どうした？なぜ武器を構えぬ？」

僕たちに戦う気がないと察したのか、バスタは少し考えると

「……失礼した。ワシの早とちりだったようだ。あんたらは客人か。」
と言って、剣を下ろした。

「さつきからそう言ってるだろ。」

「まあまあ……」

イライラしだしそうなクローバーを、僕はなだめる。ビーフシチューをつくってもらうまでは、機嫌を損ねてはいけない。

「ようこそ、ワシらが農園へ。客人ならばワシらの主に挨拶に行くがよいだろう。」

バスタはそう言うと、道を譲った。僕たちはおずおずとバスタの横を通って農園へと入っていく。バスタは目の前を通る僕たちを、鋭い眼光で品定めするように見ていた。

なんだか落ち着かない。クローバーをチラリと見る。何にも感じていないようだ。平然としたいいつもの顔で、僕の後ろをついてくる。バスタが見えなくなった辺りで

「珍しく剣を抜かなかったね。どうして？」

と、クローバーに聞いた。

「お前は私を猿だとも思ってるのか？私だって目があったやつ誰彼構わず切りかかるわけじゃない。」

クローバーはそう言いながらあくびをする。退屈そうだ。

「基準は？」

「強そうか、そうじゃないか。」

僕は苦笑いを返す。猿ではないが、人間でもないような気がする。余計なことを言うとは機嫌を損ねてしまうので、それは心にしまってお

く。

「バスタさんは強そうに見えなかった？」

僕がそう聞くとクローバーは少し考えた。

「経験値はありそう。ただ、興味を引かれるくらい特別なものは感じない。そんな感じかな。」

僕にはよくわからなかった。クローバーには、クローバーの感覚と
いうか、感性があるようだ。

基準はイマイチよくわからないが、それでも自分よりも強いと思う
者に向かつていくという辺り、クローバーらしいなと思う。

世の中弱い者いじめを楽しんでいるやつが溢れているのだ。

生き物の生存本能として、強い者に立ち向かうというのは、おかし
な話かもしれない。それでも、弱い者を探し出していじめるやつより
は、数万倍マシだと思う。

本能に従うだけなら、理性をもったに『人』生まれた意味が無いの
だから。

「おお……広いな……。」

クローバーの感嘆の声に、僕は顔を上げ、辺りを見渡す。辺り一面、
畑、畑、畑。

麦畑で、金色の穂が、頭を垂れて風に揺れている。背の高い作物は、
トウモロコシ畑なのだろうか？理路整然と並ぶ様は壮観で、美しい。
普段市場で見ることはない大きなカボチャも置いてある。

「キレイだね。」

僕は思わずそう漏らした。不老不死の村のような、小さな農村とは
違う。ここ大農園は、のどかとはいえない、壮大なスケールがある。

「ようこそ、私の農園へ。私はこの主ジャム。」

恰幅の良い中年女性が、僕たちにそう話しかけてきた。ふくよかな
体つきが、なんとなく農民らしく思える。

「ここは国の食を支える大事な施設。とはいえこの場所にきても面白
いことは何もないわよ？」

ジャムは、僕たちが冒険の1つとして、ここに立ちよったと思っ
たらしい。確かに、冒険者がここにきても、特に面白いことはないだろ

う。この平和な農園で、大冒険ができるとは考えにくい。

「あ、そうそう。変な動きはしないように気を付けなさい？ここは、魔物によく襲われるから、あちこちに罠が仕掛けてあるからね。」

魔物は畑の作物だろうが、なんだろうが、そこに食べられるものがあれば持つていつてしまう。彼らにとつては、自生してるものも、畑で育てているものも、全部同じただの食料なのだ。

「警備担当の兵士も、常にピリピリしているわ。」

「ああ、そうだね。」

クローバーがそうぼやく。バスタを思い出していたのだろう。

「だから、紛らわしいことをしたら、間違つて傷つけちゃうかもしれないから……なんてね。」

ジャムはそう言うのと笑った。僕らは笑えない。中々物騒な農園だ。「あら、作業終わったの？なら、今日の仕事は終わりよ。明日のために、休みなさい。」

ジャムは、目の前に現れた魔物に、そう指示を出す。魔物が人間の元で働くところは、錬成施設で見たことがあった。

「あなたは大切な働き手なんだから、倒れられたら大変なの。休養は大切。」

錬成施設同様、ここでも魔物たちは大切に扱われているらしい。それは中々喜ばしいことだ。

ジャムは魔物たちに次々に指示を出すと、僕らの方を向き

「まあ見学は大歓迎よ？ゆっくりしていつてね。」

と言つて去つていった。

「さて、どうしようか？」

クローバーが言う。

「うーん……とりあえず農園を見て回ろうか？直売所みたいなのが、どこかにあるかも。」

「そうだな。珍しい野菜が買えるかもしれないね。」

なんだかんだで、クローバーは楽しそうだ。僕は安心すると、農園の奥へと歩き出した。

第39話 人は正論では動かない

大農園を一通り見て回った。

ジャムは「何もない」と言っていたが、ここには野菜がある。その野菜を見るだけで楽しかった。

クローバーはトマトがなっているのを見つけると、もいでもいないうように軽く手に取り

「トマトは、この後ろが放射状になってるやつがうまいんだ。」と、僕に教えてくれた。

他にもキャベツは芯の切り口が五角形のものがいいとか、にんじんは真ん中の芯が細くて均一の太さのものがいいとか、農園を見回りながら、いい野菜を見分ける方法をいっぱい教わった。

「クロはすごいね！どうやって勉強したの？」

「別に勉強はしてない。ただ母様にそう教わったのを覚えてるだけ。」

クローバーはそう謙遜しながらも、どこか照れくさそうだ。

「(かわいいなあー。)」

思うだけで、口には出さない。今日はクローバーの機嫌を、絶対に損ねてはいけないのだ。

農園を1周したが、野菜を売っている場所はどこにもなかった。どうやらここは卸すだけで、直売はやっていないらしい。

「困ったなあ。ジャムさんに聞いてみようか？」

僕がそう提案しているところに、バスタが現れた。

「これはこれは冒険者殿、農園はどうですか？」

「あ、はい。楽しませていただいていますよ。」

僕はいつもの営業スマイルを返す。敵ではないとアピールしておくのは大事だろうと思っていた。

「ここは今や平和なのだ。一時は集団を成して、まるでこの農園を潰す気があるがごとく、襲いかかってきたものだが……。今や、ワシがいるとわかるや否や、逃げ出してしまっただ。」

「魔物も、面倒なやつは嫌なんだろうね。」

「しーっ！」

僕はボソツと正直な感想を述べるクローバーに、静かにするよう人差し指を立てる。余計なことと言って、バスタを怒らせたなら、もつと面倒なことになる。

「ああ、激しい戦いも、魔物たちの争乱も遠い昔の出来事のようにだ……。」

運良くバスタは、昔の思い出に浸っており、クローバーの言葉を聞いていなかったようだ。

「遠い昔、王より仰せつかった、この地を守れという命。すでにあれから数十年。連邦の兵士を勤め上げてなお、ワシは自らの意思でこの地の守護を務める。」

「暇なんだな。」

「クロー！お願いだから黙ってて！」

慌てる僕を見て、クローバーは意地悪な笑みを浮かべる。今日のクローバーは珍しくいたずらっ子だ。それは機嫌がいい証拠なので、いい兆候ではあるが、バスタを刺激するのはやめてほしい。

「人のために。土地のために生きることの素晴らしさよ。ワシの牙が多くの血を吸ったのも、この平和を築くためだと思うと、感慨深いわい。」

バスタはそう言うと、満足そうに笑った。バスタにとって、ここは故郷なのだと思う。生まれも育ちも関係ないが、ずっと守ってきた大事な場所なのだ。

「むっ………っ？」

バスタが鋭い眼光を、遠くに向ける。

「何かありました？」

僕がそう聞く前に、クローバーが、剣柄を握っていた。何か変化を感じとったようだが、僕にはわからない。

「バスタさん！」

農園の主、ジャムがバスタのところに駆け寄ってくる。

「わかっている。平和というのは戦いと戦いの間の、束の間の息抜きだな。」

「何か来るな。」

クローバーが隙のない目で辺りを見渡しながら言う。

「わかるの？」

「ちよつとこの村には仕掛けがしてあつてね。空気の動きが変わらるから、すぐわかるわ。」

ジャムはそう言うが、僕にはさっぱりわからない。

ジャムやバスタはここに長年住んでいるので、その変化に気がついて当然なのだろうが、今日初めてここにきたクローバーに、なぜその変化がわかるのか不思議だ。研ぎ澄まされた剣客の嗅覚なのだろうか？本当にクローバーには驚かされる。

「では、下がっておれ。我が剣は実践で培った殺人剣。」

「お手伝いしますよ？」

クローバーが戦いたいそうだったので、そう提案してみる。

「待て、下手に動くでない！ここまで罠をいくつも仕掛けてある。そこを抜けて、ここへたどり着いた時点で、敵の数は絞られる。」

「なるほど。先にふるいにかけて選りすぐったやつと戦えるのか。」

クローバーはなぜだか楽しそうだ。

「いいから下がっておれ。戦いの中では、おぬしの命、保証はできぬ。」

バスタはそう言うが、クローバーは言うことを聞きそうにない。

命の保証なんて、無くて当たり前なのだ。守ってもらおう気なんて、さらさらない。クローバーはクローバーの責任で剣を握る。それだけだ。そして僕はその責任を半分持つて、杖を握る。

「我が毒剣、肉は切れずとも、触れただけで命はないぞ！」

そう言いながら剣を構えるバスタの後ろで、僕とクローバーは戦闘態勢を整えた。

農園の小さな小道に現れたのは、魔物を十数匹引き連れた、1人の兵士だった。

「おまえ……」

バスタが驚愕を浮かべる。

「いぶさたしております。師匠。」

金髪の髪を逆立てた兵士が、バスタに近づくと、連邦の兵士のようにだ

が、いつも城塞都市をうろついている者たちとは、服装が違う。より高位の兵士なのかもしれない。

「おまえは……。」

「ああ、お忘れですかね、俺のこと。あなたの後輩のオスカーですよ。」
オスカーはそう言いながら、薄ら笑いを浮かべている。なんとなく、直感的に嫌なものを感じた。ベタバタしたオイルみたいな、絡みつくような笑いだった。

クローバーは剣を抜きこそしないが、劍柄から手を離さず、オスカーを睨みつけている。

「覚えておる。そのオスカーがなぜここに……。まだ連邦の兵士として働いているのだろう。陛下の命令か？この農場を守るためにか？」
「半分は正解。半分は不正解。陛下の命令なのは間違いないですよ。」
「では……。」

「この農村は魔物襲われて滅びたのです。」
「なんだとー！」

クローバーの頭に、クエスチョンマークが並んでいるのが手に取るようにわかる。こいつは何を言い出すんだという、怪訝な顔をしている。

「少なくとも、王はそう仰っています。」

オスカーは蔑むようにバスタを見てニヤリと笑う。自分の師匠を見る態度とは思えない、傲慢な顔だ。

「滅びた……だと!? どういうことだ？それが陛下のご意思か？陛下がなぜ、私を見放すのだ。」

「平和すぎると困るでしょ。武器は売れないし、兵士も減らさなきゃいけない。」

僕はピンときた。

連邦は、この村を1つ犠牲にすることによって、軍事力を拡大するための口実を手に入れる気なのだ。

「なんて非効率なことするんだろうね。」

僕がそのため息をつくとき、クローバーが

「どういふこと？」

と聞いてきた。

「この村が滅べば、みんな危機感を持つてくれて、軍事力にお金をかけても許してくれると思ってるんだよ。」

僕は呆れたようにそう答える。

いくら防衛に必要と正論を言ったって、軍事を拡大するのは、やはり困難なのだ。国民が納得しない。だから、こんな自作自演までして、国民をなんとか納得させようとしているのだ。

人は正論では動かない。その最たるものが、これなのだ。流石にここまでくると、本当に非効率で、腹立たしい。

「この村が滅びても死者は数える程度。他の村が滅びるよりも被害は小さい。」

そう言うオスカーに、バスタは「信じられない」と食ってかかる。信じられないのも無理はないだろう。でも僕は、オスカーの言っていることは真実だと思う。本当に馬鹿馬鹿しいが、政治運営として、これは間違っではない方法なのだ。

「村はそのまま残しますよ。この村の食料は貴重ですからね。だから、別にあなたも、死にたくなければ、みんなと一緒にここを捨てて逃げてくれればいいんですよ?」

「おのれ……」

「あなたの時代も、ここの農場主の天下も、そろそろ終わりということですよ。」

「とんだ茶番だな。でも、茶番の割には面白くねーわ。」

クローバーが不快感を露わにする。

「新しい時代には、既存利権の破壊が、新たな秩序が必要不可欠なのです。」

そう偉そうに講釈をたれるオスカーを、僕はただ悲しい思いで見ている。

話はわかる。そういう理論も、思想も、間違っではない。やり方だって、これならかなり合理的だ。

「国民を守るために必要なことは強い国家であること。そう陛下仰っていました。そのため、多少の犠牲は必要不可欠なのです。」

ただ、人は正論では動かない。それはこつちも同じだ。間違っ
てな
かろうと、合理的だろうと、僕らは納得出来ない。

「そんな理論、クソ喰らえだ。」

クローバーはそう言うのと、デモンブレイドⅡアビスを抜いて構え
る。僕もそれに倣い、フアントムロッドを握りしめる。

「上の命令は絶対。そう教えてくれたのは、師匠ですよ。」

「ああ、そうだ。上の命令は絶対……。ワシはこの土地を守れと陛下
に仰せつかったのだ。その命令従い、オスカー、おまえを許すわけに
はいかぬ！」

「目の前のものを守ろうとするが故に、多くの人間の命を犠牲にする。
老いとは怖いですね。何が正しいか、すでにわからなくなってしまう
れましたか。」

「あなたは間違っていないだけで、正しいとは限らないですよ。」

僕はいつもの涼しい顔で、そう言っておきながら、珍しく饒舌だ
と、自分で思った。今日の僕は、機嫌がいいのかもしれない。

チラリとクローバーを見ると、どこか嬉しそうに頷いていた。

「仕方ありません。弟子として、乱心した師匠の不始末。きつちりけ
じめをつけましょう。」

オスカーはそう言うと、剣を抜いた。

それを合図に、オスカーが従っていた魔物たちが、一斉に襲いか
かってくる。

恐怖はない。僕とクローバーなら、勝てるという自信が、僕には
あった。

第40話 乱戦その1

戦況は思ったよりも悪くない。数の上では圧倒的に不利だったが、防衛は意外にうまくいっていた。

私は大きく円を描くように、セイクリッドサークルを放つ。向かってくるオーガのうち1匹が黒い霧を残しながら消えていった。撃ち漏らした残りの敵は、エルサイスのメテオフォールで行く手を阻む。あとは1匹ずつ私がウォーターズラッシュや、スカルティガーで狩っていく。

私は騎士をしていた頃の経験から、こんな感じの乱戦には慣れていった。一方エルサイスにとっては、初めての乱戦になるはずなのだが、相変わらず広い視野と、冷静な判断で、いつもと変わらない連携を紡いでいた。この入り乱れた戦闘の中でも、安心して背中を任せられる。

「左から2。先頭の1匹牽制しとく。」

エルサイスはそう言うと、ウォーターヴェインを先頭のオーガにぶつける。オーガを水流に驚き立ち止まり、後ろの1匹もそれに巻き込まれる。そこに私がグランドショットを放つ。2匹ともまとめて黒い霧になった。

魔物1匹1匹はさほど強くない。ただ問題なのはその数だ。十数匹のオーガ軍勢を、私とエルサイスの、たった2人で相手をしなければならぬのだ。

バスタはオスカーとのタイマンで精一杯のようだった。大将戦なので仕方ない。私は雑魚狩りに集中する。

「クロ、一度下がって回復して!」

「そんな暇ねーよ!」

オーガの喉元に剣を突き立てながら、そう怒鳴り返す。私は休むことなく戦場を駆け回り、次から次へとオーガを狩っていく。顔につく血が、自分のものなのか、返り血なのかさえわからない。

「もう……。」

エルサイスは不満そうに眉をよせながらも、アルカナで回復してくれた。暖かい光が一瞬私を包む。

「物理防御あげるけど、過信しないでね。」

エルサイスがウォールの詠唱を始めると、そのヘイトに、数匹のオーガがエルサイスの方を向く。

私はそれを走って追いかけて、後ろから刺す。

「ありがとう。」

エルサイスはそう言いながら、もう既に次の呪文の準備をしている。

時間の経過と共に、戦況は厳しくなっていた。元々この前線を、たった2人で守りきるのは、無理な話なのだ。

既に何匹か敵を撃ち漏らし、農園への侵入を許していたが、追いかけることはできない。今ここを離れるわけにはいかないのだ。

「あ、やばいかも。」

エルサイスの声に、私は一瞬振り返る。農園の方から、火の手が上がっていた。撃ち漏らした敵の仕業だろう。

「くっそ……。」

私はそう言いながらも、目の前のオーガに、剣を振り下ろす。

「右から？。左は僕に任せて。」

エルサイスは冷静だ。

全てを私1人でやりきるのは、どうせ無理なのだ。後ろのことは、後ろに任せればいい。

オーガの爪が、肌を破く。血が吹き出るが、痛みは感じない。

私は振り返りもせず、戦場を駆け、舞い、縦横無尽に暴れ回る。

「どけえー！」

そう叫びながら、オーガにグラウンドショットを食らわせる。

私の中の戦いの血が騒いで止まらない。熱を孕んだ感情が抑えきれないほど膨れ上がっていた。段々目の前が赤くなっていて、視野が圧迫される。

もつと、もつと、切りたい、倒したい、戦いたい。

もうそれ以外何も考えられなくなっていた。私は、走り出したら、

止まらないのだ。

「クロ!!回復を!!」

「うるせえ!」

エルサイスの声さえ振り切る。

「私を止められると思うなよ。」

勝手にそう口走っていた。私の中の、好戦的なもう1人の私が言ったのかもしれない。

「クロ!!」

エルサイスが前に出てきて、私の肩を掴んだ。グツと引っ張られた私は、強制的にエルサイスの方を向く。

エルサイスと目が合った瞬間、私は一瞬で冷静さを取り戻した。

「(紙装甲なのにこんな前線にきたら危ない。)」

急激に冷めた頭でそう思った。血が頬をつたう。痛みを思い出していた。

エルサイスがアルカナを唱えて回復してくれた。

「敵はまだ来る。落ち着いていこう。」

エルサイスはそう言うのと、笑った。戦場には似つかわしくない、爽やかな笑顔だった。

「うん、ごめん。」

溢れだしそうだった感情が、あつという間に収まった。体にたまっていった熱がすつと引いていく。

不快感はない。目も、頭も冴えて、視野が一気に広がり、むしろ気持ちいがよかった。

エルサイスが私の背後に迫るオーガに、メテオフォールを放つ。私は素早く振り返るとウォーターズラッシュをお見舞いする。

戦っている状況は何も変わらない。でも、さっきのような、体の内側から暴れだしたくなるような熱はもうなかった。

第41話 乱戦その2

「(鬼だ。)」

戦場を駆け回るクローバーを見て、僕はそう思っていた。

クローバーは、真っ赤な髪をなびかせ、舞うように飛びながら、次々オーガを切っていく。金色の目が、ランランと光っている。

僕は手を休めず、支援と援護を続ける。

「後ろに1匹いるよ！前のは無視しても大丈夫。」

クローバーは振り返りざまに後ろにいたオーガを切りつけると、前方からきた2匹にも追撃を加える。僕はそれをファイアースピリッツを放って援護する。

僕の声がけを、聞いているのか、いないのかわからない。いつもなら、もっとクローバーからの情報提供があるのだが、それも無い。

僕は広い視野と、観察眼だけで、この戦況をなんとか見極めようとしていた。でも、取りこぼしは、どうしても出てしまう。その僕の見落としを、クローバーの圧倒的な加速度で、何とか補っているような状況だ。

でも、こんな状況は長くは続かない。

戦闘が始まってから、まだ5分足らずしかたっていないが、敵の数は随分減った。あと5分持たせられれば、なんとか切り抜けられるだろう。

しかし、クローバーをこのままにしておけば、あと3分ほどでバテ始める。たった2分の違いだが、それが決定的な敗因になるのだ。

「クロー!!」

呼びかけるが、クローバーは止まらない。

血を飛び散らせ、髪を振り乱し、剣を煌めかせながら敵を倒している。その姿は、強く、美しく、魅惑的だった。

クローバーが騎士だった頃、それに憧れた人たちの気持ちかわかる気がした。

圧倒的な強さは、甘美な罠のように、棘を持ちながらも、色褪せない美しさがあった。

見とれてる場合ではない。僕は右からきたオーガの爪を避けつつ、前に出て、クローバーに近づく。

「クロ!!回復を!!」

クローバーのHPはもう半分以下だった。普通なら、かなりの痛みを伴うはずだが、バーサーカー状態のクローバーは、それを感じていないようだ。

「うるせえー!」

クローバーが怒鳴り返してくる。怒鳴り返すということは、聞こえてるということだ。聞ける耳があるなら、まだ止まれる希望はある。

「クロ!!」

肩を掴んで、無理やりこつちを向かせる。クローバーの、瞳孔の開いた金色の目が、僕を捉える。

「(殺されるかも。)」

そう思うくらい、振り返った瞬間のクローバーの目は、狂っていた。しかし、それも一瞬で、瞳に僕の顔が写ると、スッと色だけ残し、光が消えた。

「(大丈夫そうだ。)」

僕はほっとすると、アルカナでクローバーを回復する。

「敵はまだ来る。落ち着いていこう。」

冷静さを取り戻したクローバーが

「うん。ごめん。」

と、素直に謝る。

思ったよりも数倍楽に収まってくれて、本当によかった。僕は思わず微笑む。

クローバーの目から、ギラギラした光は消えたが、色褪せてはいない。まだまだ戦えそうだ。

クローバーの後ろからきたオーガに、僕はメテオフォールを放つ。クローバーが振り返り、追撃を加える。無理のない滑らかな連携だ。

もう大丈夫だ。

僕らは勝利への道筋を確実に歩んでいった。

第42話 師弟対決

農園の入口付近の敵は、粗方倒した。何匹かは、途中、恐れを為して逃げていったこともあり、乱戦は15分も持たなかった。あとは農園に侵入した数匹の残党を狩れば大丈夫だろう。その残党だって、農園に設置されている罠にかかって、数は減っているはずだ。

私たちの勝利だった。

「クロ?大丈夫?」

エルサイスが駆け寄ってきて、回復してくれる。

「大丈夫。何だろ……すごい気分が楽だ。」

私はそう言いながら、顔についた返り血を拭う。

こういう戦闘が終わった時は、もつと疲れていることが多いのだが、まだまだ戦えそうな余裕があった。

「疲れてないの?」

エルサイスが息を切らせながら聞いてきた。左腕から出血していたので

「回復した方がいいぞ。」

と教えてあげた。エルサイスは自分自身にプネウマをかける。

「思ったより、疲れてないな。」

首や腕を回して、自分の体を確かめる。

息はそれなりに上がっていたが、心音は落ち着いている。激しい戦闘特有の、気持ち悪い虚脱感や、立っていられなくなるような疲労感はずいぶん減った。

「すごいね……僕はヘトヘトだよ。」

エルサイスはそう言いながら、膝に手をつき、肩で息をしている。立っているのが辛そうだ。

「私が見とくから、これ飲んどけ。」

私は辺りを警戒しながら、エルサイスに水の入った水筒を渡す。エルサイスは

「ありがとう。」

とかすれ声で言うと、中身をグビッと飲み干した。

私はエルサイスを連れて、農園を見て回りながら、残党狩りをする。被害は思ったよりも少なかった。消火活動が迅速に行われたらしく、放火の被害もボヤ程度で、大きな火事にはならなかったようだ。

「あれ、バスタさんじゃない?」

エルサイスが指さした方を見る。バスタとオスカーの大將戦は、まだ決着がついていなかったようだ。

「師弟対決かあ。」

大將は大將に任せることにする。バスタの活躍の場を奪うのは野暮だ。

バスタもオスカーも、広い間合いをとって、睨み合っていた。ジリジリとした緊張感が続く。

「動かないね。」

「静かにしてろ。」

私はエルサイスを注意する。何が合図で2人が動くかわからないのだ。不用意な音は禁物だ。

バスタが使う毒の剣は、当たればそれで終わりの、正に一撃必殺の剣技。オスカーだってそれはわかっているのだから、それをくろう前に、終わらせようとするだろう。それはつまり、1回でも先に切った方が勝ちということだ。

初手で勝敗が決まる。これはそういう戦いなのだ。お互い警戒して、動きを見極めようとするのは、当然のことだった。

「(つまらんな。)」

そういう戦い方は否定しない。1発に全てを掛けるというのは、それはそれで尊く、美しい戦いだと思う。

でも、私には合わないし、興味もそそられない。私は接近戦が好きなのだ。交わされ、ぶつかると剣先で、命やり取りを、何度もできる。詰めた距離の分だけ消されるのも当然で、そのスリルがやめられない。

バスタとオスカーの戦いは、そういった派手さが全くなかった。お互いがお互いの動きを、目を凝らして確認するだけで、中々進まない。でも始まれば一瞬で終わってしまう。

そんな刹那的な戦闘では、私は物足りないのだ。

「くる。」

先に動いたのはオスカーだった。正面からバスタに切りかかる。バスタはそれを受け止めると剣を払いのけ、右上から左下に振り下ろす。オスカーはそれをバックステップで避けたが、コンマ一秒遅かった。バスタの剣先が太ももあたりをかすめ、小さな傷をつくる。

「もう終わりさ。」

「つまらなそうだね。」

エルサイス言う通り、本当につまらなかつた。だから最初老兵士を見た時から、興味を持てなかつたのだ。こういう戦い方は、私には向いていない。

傷を受けたオスカーはニヤリと、気味の悪い笑みを浮かべる。私はまだ何か奥の手が出るかと、期待して見ていた。しかし、バスタがオスカーの喉元めがけて切かかると、オスカーはそれを後ろに飛んでかわし、何か魔法の様なものを使って、一瞬で消えてしまった。

私が呆気に取られていると

「転移の魔法だね。敵前逃亡とは、何とも賢い騎士様だよ。」

と、エルサイスが皮肉をいった。

「酷い戦いだよ。まったく。」

ため息をつく私の前で、バスタは虚空に消えた弟子の姿を、まだ見つめているようだった。

「すまぬ、冒険者殿。手間をかけさせたな。」

くすぶっている火を消したり、戦闘で壊してしまった柵を片付けていると、バスタがそう言いながら近づいてきた。

「別に、それなりに楽しめたからいいよ。」

今回の戦闘は、私もかなりいい発見や収穫があった。エルサイスだって、初めての乱戦で、学ぶことはそれなりにあっただろう。私たちとって、大事な経験になった。

「みんな、火は粗方消えたわよ。よくもまあ、畑のまわりをキレイに刈り込んだものねえ。」

ジャムが手を振りながら叫んでいる。酷い目にあつたが、それでも

元気そうだ。

「おかげ様で、畑は全く被害なしですんだわ。」

「ま、時間があつたもんでな。」

バスタはそう言うと言った。草取りがこんな形で効果を発揮するとは、思いもしなかっただろう。

「で、今回も無事、敵は倒せたの?」

「ああ、敵は撃退した。同時に、弟子も失ったがな……。逃がしはしたが、我が剣の傷を受ければ、以前のように戦うことは、もう無理だろう。」

バスタの毒の剣は、恐ろしいシロモノだ。私は絶対に受けたくない。受けても死にはしないが、私にとって『戦えない』ことは、死と同様なのだ。生きながらに死ぬなんて、恐ろしすぎる。

この老兵士と私は、色々相性がよくないようだ。

「冒険者殿にも世話になった。できたら礼をしてほしい。」

バスタがそう言うと、ジャムは困った顔した。

「冒険者さん、ありがとうね。でも、お礼と言つても特に……。野菜くらいしか、渡せるものがないのよね。」

普通の冒険者なら、野菜を渡されても困るだろう。手に余らせて腐らせてしまう。でも、私たちは野菜を買うためにここにきた、特殊な冒険者だった。

私とエルサイスは、期待した目で、顔を見合わせた。

「実は……」

エルサイスは、私が書いたビーフシチューの材料のメモを、ジャムに見せながら、事情を説明する。ジャムは喜んで、野菜だけでなく、牛肉やワインも用意してくれた。

「これからも野菜が必要になったら、取りに来て。いつでもわけてあげるわ。」

私たちに食材の袋を渡しながら、ジャムがそう言う。私もエルサイスも、喜んでそれを受けとった。

いい仕入先ができた。

「いいのか?こんなにもらつて。」

一応バスタの方を見て、確認を取る。

「冒険者殿よ。」

バスタは真剣な表情で、浮かれている私たちを見る。

「これは、口止め料だ。陛下がこの農園を襲わせた、ということは、誰にも言うな。」

「あー、そう言うこと?」

私は眉を寄せる。賄賂の様なものを感じるが、仕方ない気もする。どうせ、誰かに言ったところで、こんな荒唐無稽な話を、誰が信じるのだろうか?」

「わかりました。」

エルサイスがバスタに、真剣な表情で返す。

王様の耳はロバの耳。大事な秘密は他人に漏らしたところで、罰せられ、始末されるのは、結局私たちの方なのだ。

そう思っ、私もエルサイスに続いて頷く。

「世の中には抗いがたい強い力がある。どんなに自分正しいと主張しても、潰される場合もあるってことだ。」

そんな場合の方が、圧倒的に多い気がする。私は『所詮女のいうこと』で、散々嫌な目にあってきたのだ。そうやって、立場の弱いものの言うことを叩き潰す風潮は、形を変えて、様々な場所存在する。

「我々はそれに翻弄される、か弱き存在だが、だがそれに負けず、まっすぐ生きるのだから、冒険者殿よ。」

そう微笑む老兵士に、私とエルサイスはそれぞれ敬礼を返した。

第43話 準備中

「だから、指を離さない。」

クローバーはそう言うと、僕の指に手を添えて、介助してくれる。「なんで私より手が大きいのに、取りこぼすんだよ。」

「そんなこと言われても……。」

公国の宿の鏡の前で、僕はクローバーに、ポニーテールの結び方を教わっていた。自分で自分の髪を結ぶのは中々難しい。僕の場合、どうしてもおくれ毛がでてしまい、全然うまくいかない。

「こうして、ここを押さえたまま……。」

クローバーは僕の後ろから手を添えて、結び方を教えてくれる。こんなに手が触れ合っているのに、意識してるのは僕だけで、クローバーはまったく気にしていないようだ。

「(こういうところは鈍感なんだよなあ……。)」

そう心の中でボヤいていると

「おい、聞いてんのか?」

と、クローバーが平手で頭を叩いてくる。

「痛っ!!叩かないでよ!」

「私が教えてやってんのに、おめーが聞いてねーからだろ!」

「すいません!すいません!」

バシバシ叩いてくるクローバーを避けながら、僕は必死で謝る。本当に痛い。力加減つてもものを知って欲しい。

農園から公国に帰ってきた僕たちは、酒場のチップのところに行つた。そして夜のピークタイムが過ぎた辺りで、厨房の一部を借りて、ビーフシチューを作り始める。

僕はクローバーに言われるがまま、材料を切ったり、洗い物をしたりして、手伝った。

「ここまできたらほぼ完成だ。」

クローバーがそう言ったのは、深夜になってからだだった。

「早く食べたいなあ。」

僕がいい香りする大鍋を見ながら言うと、クローバーが

「よし、1晩寝かせよう。」

と、衝撃の発言をする。

「え!?!今から食べるんじゃないの!?!」

今日食べられると思つて、ビールも飲まずに頑張つたのに、明日まで待たないといけないなんて、辛すぎる。

「ダメダメ、1晩寝かせないとコクが出ないんだ。」

「そんなあ……。」

泣きそうな僕を、クローバーは突っぱねる。

「いっばいあるし、せっかくだから、みんなで食べよう。」

クローバーはそう言うと、ボンド『シルフィード』のメンバーにメツセージを送る。

農園の主ジヤムは、クローバーが書いたメモよりも、幾分多くの食材を渡してくれた。おかげで僕ら2人ではとても食べきれないような、大鍋にいっばいのビーフシチューができそうだった。

「明日のお昼にみんなでビーフシチューパーティーだ。」

クローバーはそう言うと笑つた。僕は今日食べられないことがガツカリしながらも、明日みんなで食べるのが楽しみになった。

ポニーテールは、結局クローバーに結んでもらつた。

「明日から結べるようになるまで毎日特訓するからな。」

鏡越しに僕を見ながら、クローバーが言う。その目は真剣だ。

「スパルタだなあ……。」

「自分のことは、自分でやれ。」

僕のボヤきをクローバーが一蹴する。

「(そういう自分は、1人で朝起きれないくせに。)」

心の中だけでそう思う。余計なことを言つて、クローバーの機嫌を損ねたら、ビーフシチューを食べられなくなってしまふかもしれない。なんとしても、そんな事態だけは避けたい。

僕の髪を結び終わると、クローバーは自分の準備を始める。

「珍しく元気だねー。」

僕はそうクローバーに声をかける。

僕は昨日の疲れがまだ抜けていない。体のあちこちが痛いし、少し気怠い。

「うん、いつもより疲れてないかも。」

激しい戦闘の後のクローバーは、次の日寝込むほど疲れていることが多いのだが、今回は珍しく元気だ。

「前にさ、エルが、体の中で一番消耗が激しいのは頭だっていったじゃん？」

そんなようなことを言ったかもしれないが、僕はよく覚えていない。でもとりあえず

「うんうん。」

と頷いておく。

「あれかな？って。」

「どういうこと？」

一体どの話なのか皆目検討がつかない。

「ああやって戦っているとさ、段々ヒートアップしてきちゃって、もう周りが見えなくなっちゃうんだよね。」

クローバーは一度火がつくと中々止まれない。戦闘で徐々にテンションが上がっていき、一定値を超えると手が付けられなくなってしまうのだ。

「その時頭で考えてることは、意外に単純なんだ。戦いたい、倒したい、切りたい。それだけ。」

随分物騒な思考だ。

「考えてること自体は単純だけど、頭はフル回転で体に指示を出してる。それですごく疲れちゃうんじゃないかなって。」

「ふむ。」

僕は口に手を当て考える。

考えてから手を動かすよりも、考えないで勝手に手が動く方が、ずっと脳の消耗が激しいのかもしれない。中々面白い考察だった。

「無意識で動く方が早いけど、余計なこと考える暇がない分、視野が狭くなる。実際、ああなってる時は、ほとんど目で見えてない。感覚だ

けで体を動かしてる。」

それはそれで素晴らしい感覚だが、同時に恐ろしさも感じる。

「意識の制御がない分、体の消耗も激しそうだね。」

人は本能で動くより、理性で動いた方が、効率的なのかもしれない。「昨日はエルのおかげで、目が覚めた。意識して体を動かした方が、頭も体も疲れないし、すつきりする。今も元気だし。」

クローバーそう言いながら、手早く自分の髪を結ぶ。

「だから、またああならならよろしくね。」

「いや、最初からああならないようにしてよ。」

僕は苦笑いを浮かべる。クローバーはお使いでも頼むように簡単に「よろしくね」なんて言うが、バーサーカー状態のクローバーを止めるのは、本当に命がけなのだ。

瞳孔の開き切ったクローバーの目は、本当に目だけで人を殺せそうなくらい恐ろしい。大分慣れてきてはいるが、今でも時々怖気つってしまうことがある。

おまけに感覚だけで戦っているので、不用意に近づけば、容赦なく切られる可能性だってある。

強い心と意思がなければ、できないものなのだ。

「騎士の頃はどうかやってたの？分隊長だったんでしょ？」

あんなバーサーカーに、分隊長が務まるとは、とても思えない。騎士の頃は、もっとちゃんと冷静だったはずだ。

「うーん？リオンの時はさ、ずっと独りで、誰にも頼れないし、失敗もできないから、多分抑えてたんだよね。色んなこと。」

クローバーがパーテーション越しに着替えながら返す。

「今はさ、エルがなんとかしてくれるからいいやーって。」

クローバーはそう言って、おかしそうに笑った。

いや、僕にとつては笑い事ではない。信頼してくれているのは嬉しいが、任せきりは困る。

「いや、抑えてよ。僕だって、なんとかできない時もあるよ。」

そう反論したが

「エルはなんだかんだで、なんとかしてくれるよ。」

と、クローバーは軽く返してくる。

意外なところで信頼度が高いのは嬉しかったが、中々のプレッシャーだ。

「リオンの時みたく、自分で無理やり抑えてるとき、それはそれで疲れるんだよ。今のこれくらいのがんこ感が心地いいね。」

「クローバーは何気に甘えん坊なんだね。」

つい、そう漏らしてしまった。着替え終わったクローバーはパーテーションから出てくると

「別に、そんなんじゃない。」

と、バツの悪い顔をした。凶星だったのかもしれない。僕は笑った。

「さあ、みんな待ってる。行くぞ。」

クローバーはそう言う、『シルフィード』のメンバーが待っている酒場へ向かった。

第44話 パーティー

僕は酒場の奥の席に座りながら、ボンド『シルフィード』メンバーのテイルと、にもものパートナーもふと一緒に、昼間からビールを飲んでた。真昼間から飲むこの黄金色の飲み物は、背徳感も相まって、格別に美味しい。

ビーフシチューは完成していたが、食べるにはまだ時間が早いので、クローバーたちは、酒場の一部を貸し切って、アフタヌーンティー用の、スコーン作りをしていた。

テイルのパートナーのソラ、ユイゼとそのパートナーのセリク、そして、もふとパートナーを組むにももの4人が、クローバーにその作り方を教わっている。

「姉御、バターこれ全部入れていい?」

「あ、にもちゃん!全部はダメ!ちゃんと計って!」

「くーちゃん、牛乳取ってくれませんか?」

「ユイゼちゃん顔に粉がついてるよ。」

「嘘?今手汚れてるから拭いてー!」

5人で楽しそうにお菓子作りをしている所を、僕とテイルともふは、目を細めながら見ていた。

「若いな……。」

テイルが漏らす。

「若いですねえ。」

もふが同意する。

「若いですよねえ。」

僕が続く。

「そう言えば僕らって、そんなに歳離れてましたっけ?2人とも何歳ですか?」

もふの質問に、僕もテイルも口を閉じる。沈黙。

「俺、聞いちゃいけないこと聞きました?」

もふは、そう言いながらも、悪びれる様子はなくおかしそうに笑っている。

「食えねえ野郎だな。」

テイルがボヤク。僕は苦笑いを浮かべる。

スコーン作りは生地が完成し、型抜きの際になった。

「姉御！ハートが！ハートがいい!!」

「にもちやん落ち着いて。好きなので抜いていいよ。」

「ユイゼちゃんこれ使う?」

「うん、セリクありがとう。やっぱりスコーンは丸がいいかなあ?」

「私は小さいのいっぱいにしますー。」

みんな楽しそうだ。

「そうだ。連邦のことで、何か悪い噂聞きますか?」

「何だよ藪から棒に。」

僕の質問に、テイルが首を傾げる。もふも不思議そうな顔をする。

僕は、農園であつたことを2人に話した。

「きな臭えなあ。」

テイルはそう言いながら腕を組み、考える仕草を見せる。

「よくあることですよ。軍事を拡大したいのは、連邦も公国も一緒です。」

「それはそうですけど、こんな無理な方法で、今すぐに軍事を拡大する意味があります?」

僕の質問に、もふは「うーん」と首を傾げる。

「やっぱあの噂は本当なのかしれねえなあ。」

テイルがそう言いながら、苦い顔をする。

「何か知ってるんです?」

僕はそう言つて、テイルを見つめた。何か大事な話が聞けるかもしれない。

「いや、こないだ昔の仲間に出会ってな。まあその俺も昔は色々やばいことしてたんだが……」

「野盗時代の知り合いですか?」

僕の言葉に、テイルは顔を歪める。バツが悪そうだ。

「え?テイルさん、野盗だったんですか?」

もふはそう言つて驚きながらも、興味津々の目でテイルを見た。

「そこは掘り下げねーからな。」

テイルが先回りして制すると、もふは残念そうな顔をする。

「そいつが言うには、そろそろ戦争が始まるんじゃないかって。」

「戦争……?」

急に降って湧いた言葉に、僕は戸惑う。なぜここにきて急に戦争なのだろう。

「戦争で1番儲かるのはな、裏社会だ。陽の光があたる表の社会を堂々と歩けない奴らが、国と裏で繋がって、金のやり取りをする。」

テイルはそこでジョッキに半分ほど入っていたビールを飲み干し、口元を手の甲で拭う。

「そいつらと同じ裏の社会を生きる野盗も、そのおこぼれに預かれるから、そういう話に敏感なんだ。」

「なるほど。」

僕ももふも真剣な顔で頷く。

「具体的にはどんな動きがあるんです?」

僕の質問に、テイルは「うーん」と考える。

「連邦は金属を買ってるようだ。かなり大量に。出どころが不明の盗品でもなんでも、とにかく買い占めてるらしい。」

それが何に繋がるのかはまだわからない。

「あと公国は、人を集めてる。」

「人を?」

もふが眉を寄せる。

「そう。孤児だとか、捨て子とか、あとは病人とか、無職とか、そういう社会的立場の弱いやつを集めてるようだな。」

「集めてどうするんですか?」

「そこまでは知らねーよ。」

僕の質問に、テイルは匙を投げる。

しばしの沈黙。僕らは、それぞれ考えを巡らせる。

連邦も公国もずっと休戦状態だったただけで、いつまた戦争が起こってもおかしくない状況だったというのはわかる。でも、なぜ今なのだろうか?

休戦している間は、それなりに国も潤い、うまく経済も回っていたはずだ。それを壊してまで手に入れたいものが、他にあるのか。はたまた、潤いも経済も見せかけで、本当はもう破綻しているのか。

「まあ考えてもわかんねーよ。末端の俺らには。」

「そうですねえ。どうせ戦争が始まったも、できることは無いですし。」

「まあそうなんですけどね。」

3人同時にため息をつく。僕らはみんな無力だ。

「エル、ちよつと手伝って！」

クローバーに呼ばれて、僕は急いで立ち上がる。いよいよビーフシチューをお皿に分けるようだ。クローバーが大鍋の蓋を開けると、芳醇な香りが辺りを満たす。自然とお腹が鳴る。

「ねえテイル見て！小さいのいっぱい作ったの！」

僕の横を、スコーンの生地を並べた天板を持ったソラが通り抜けていった。

「おおー！ソラちゃんは器用だなあ。」

いつもソラには甘いテイルは、デレデレしながらソラを褒める。

「もふー！ハートにしたの！見にきてよー！」

にもに呼ばれたもふは、優しい笑顔を浮かべながら、にもの隣に向かう。

「ねえセリク、ビーフシチューにブロッコリー入ってるよね？どうしよう……。」

「ユイゼちゃん好き嫌いしちやダメだよ。」

ユイゼとセリクは、仲良くおしゃべりしながら、スコーン作りで使った器具を、2人で洗っていた。

僕らはみんな無力だけど、こうやって、それぞれのパートナーと、それぞれの道を、真っ直ぐ歩んでいくしかないのだ。

「ほい、エル、みんなにお皿回して。」

クローバーはと言うと、ビーフシチューの入ったお皿を僕に渡す。美味しそうだ。

そうして僕らは、みんなで楽しくビーフシチューを食べた。ビーフ

シチューを食べ終わったら、アフタヌーンティーとスコーンが待っている。今日は1日中パーティーだ。

戦争が始まれば、こんな楽しい時間を過ごすことは、無くなるかもしれない。

だからこそ僕は、この時を一瞬一瞬噛み締めるように味わった。幸せ時間が、いつまでも褪せないように、忘れないように、僕は祈った。

番外編くにもともふと汗疹の薬 前編く

「……あ、待って……やああーもふ……い、いや……！」

ドアの向こうから、くぐもった声が聞こえる。不穏なものを感じたクローバーは、ドアを蹴破り、部屋の中に飛び込む。

不老不死の村の狭い宿は、部屋の大部分がベットに占領されている。そのベットに、にもがうつ伏せに押し倒されていて、その上には、にもものパートナーのもふがのしかかり、服を脱がそうとしていた。

「（あ、これはダメだ。もふさん死んだな。）」

エルサイスは一瞬で悟る。

クローバーは素早い動きで、もふを窓側まで蹴飛ばすと、剣を抜き払い、その剣先をもふの喉元に突きつける。

「覚悟はいいか？」

瞳孔の開き切った目で、クローバーがもふに凄む。もふは何が起こったのかわからないまま目を回していた。

「姉御！」

にもがベットから起き上がりながら、悲鳴のような声を出す。

「違うのー！姉御！」

「庇う必要ねーぞ。大丈夫、私が責任をもってこいつを地獄に送つてやる。」

クローバーは中々物騒だ。

「ちよつと待って下さい!!」

もふが両手を上げ、降参のポーズを取りながら言う。オフホワイトの柔らかい短髪の下で、若草色の目が怯えて震えている。

「もふは、私の背中の汗疹を見ようとしただけなの！」

「汗疹ですか？」

エルサイスが首を傾げながら言う。

「にもが背中の汗疹を見てくれて言うから！」

今にも首に食い込みそうな剣先に、もふは冷や汗をかいていた。

「にもちゃん、これ本当か？」

「本当です。」

にもがクローバーの目を見ながらキツパリとした口調で言った。

クローバーはその返答を聞くと「ふむ」と言って剣を下ろし、にもの方を向く。死の恐怖から解放されたもふは、ため息をつくと額の汗を拭った。

「もふは、私の言うこと聞いたただけなの……」

「でも、にもちゃんは嫌だったんでしょ？」

「嫌というか……服を脱がされるのは……やっぱり……ちよつと……途中で怖くなっちゃって……」

にもが目を伏せ、恥じらいながら言う。

「よし、わかった。ギルティー！」

クローバーはそう言いながら振り返り、無防備なもふに腹パンを食らわす。

「ぐっふっ……!!」

「ひい……」

完全に油断していたもふは、声にならない呻きを漏らし、その場にうずくまった。それを見たエルサイスは小さな悲鳴をあげる。

「姉御!!」

にもは唾然としている。

「頼まれたからって、レデイの服を無理やり脱がそうしたら、有罪なんだよ。」

クローバーはそう言いながら、痛みにうずくまっているもふを睨みつける。もふはカハゴホむせるだけで、返事ができない。

「もふさん、息止めないで、無理にでも深呼吸した方が早く治まりますよ。」

もふは、そのアドバイスを聞きながら、なんとか深呼吸する。

今日は、この前クローバーの予定でキャンセルしてしまった釣りを、4人でする予定だったのだ。しかし、にもともふが、いつまで経っても集合場所にこない。不審に思ったクローバーとエルサイスが、わざわざ宿まで迎えにきたら、この現場に居合わせた、というわけだ。

「まったく……にもちゃん大丈夫？」

「う、うん。私は大丈夫。」

そう言いながら、にもは背中を掻いている。

「とんだ……ゴホッ……とばつちりを……ゴホッゴホッ。」

もふが苦しそうにむせながら言う。

「どれ、にもちゃん、私が見てあげるよ。」

クローバーはそう言うのと、にもを優しくベットに寝かせる。

「野郎共は外で待つてろ。覗いたら殺すからな。」

もふの惨劇を目の当たりにして尚、覗きをしようなんて猛者が存在するのだろうか。

エルサイスは、まだダメージの残っているもふに手を貸すと、2人で部屋を出た。

「災難でしたね。」

エルサイスが、もふを慰める。

「一瞬何が起こったのかわからなかったですよ。突然ゴリラが入ってきたかと思いました。」

「それクロが聞いたなら、もう1発拳が飛んできますよ。」

もふはゾツとしながらお腹を押さえた。もう二度と食らいたくない。

「なんでまた、こんなこと引き受けたんですか？」

パートナーの頼みとはいえ、服を脱がすという行為は、中々ハードルが高い。エルサイスなら嬉々としてやるだろうが、パートナーとの距離に慎重なもふが、手を出す事案とは思えなかった。

「何か最近ダメです……。すぐカツとなって……。」

もふはそう言うのと、不甲斐ない自分を反省するように、頭をかいた。「いつものことなんですよ。出会った瞬間から、にもは上から目線がすごかったんですから。」

もふは公国の酒場で、初対面のにもに「パートナー探ししてるなら、私になつてあげてもいいよ。」と言われて、なぜかそれをOKした。

そんな生意気な誘い文句、普通なら断りそうだが、もふは気にならなかったし、むしろ面白そうだと思ったのだ。

それからもふは、生意気の割には、どこか抜けているにもをうまく

コントロールして、それをずっと楽しんでいた。

「それなのに、何かうまくいかないんです……。今回のことだって、いつもなら受け流せたはずなのに……。」

にももの汗疹はずつと気になっていたので。もふは治療するよう前々から言っていたのだが、にもは面倒くさがって放置していた。そして掻いているうちにどんどん症状が悪化してしまい

「もふが見てくれないからこんな酷くなったんだ！」

と責任転嫁され

「じゃあ見るよ！」

となったらしい。

「珍しいですね。もふさんが、そんな煽りに乗っかるなんて。」

エルサイスともふは、結構仲がいい。お互いパートナーが下戸なので、酔い潰れたクローバーにも尻目に、2人だけでお酒を楽しむことが何度かあった。そこで色々話をして、お互いの性格はだいたい把握していた。

「俺もそう思いますよ。何でこんなことでカツとなるんですかね？」

そう聞かれても、エルサイスはなんと言えばいいのかわからない。でも、にもが変わってないのなら、もふ自身が変わったということなのだ。

「もふさん自身がわからないなら、迷宮入りですね。」

エルサイスはそう言って肩を竦めながら、もふの様子を伺う。もふはきつと、自分の変化の原因をわかっているはずだと、エルサイスは確信していた。もふは賢い。クローバーや、にものように、自分を見失うことは無いはずだ。それでも「わからない」と漏らすのは、きつと、その事実を認めたくないだけなのだ。

「なんだか調子狂いますよ……。」

もふはそう言うのと、ため息をついた。

はぐらかして逃げたり、誤魔化したりしているうちに、自分でもどうしたらいいか、わからなくなってしまふ。

エルサイスともふは、似たもの同士だった。

バンつと部屋のドアが突然開いて、クローバーが出てきた。

「釣りは中止。ありやダメだ。」

クローバーがキツパリと言う。

「先に汗疹の薬を調達しよう。」

クローバー続いて、にもが、バツの悪そうな顔で出てくる。

それを見たエルサイスともふは、肩を竦めながら顔を見合わせた。

番外編くにもともふと汗疹の薬 中編く

国境沿いに住む、天才錬金術師のエンジンから、汗疹の薬のレシピを教わった4人は、2手にわかれて材料を取りに行くことにした。クローバーともふは、国境沿いの道を公国方面に向かって歩いていった。

クローバーは元々そんなおしゃべりな方ではない。特に話題もなく、静かに歩みを進める。いつもにもものマシンガントークに付き合っているもふは、こんな無言の状態が長く続くことに、居心地の悪さを感じていた。

一方クローバーは、出かけにエルサイスが言っていたことを思い出していた。

「もふさんの相談にのってあげて。」

エルサイスはそう言うのと、にもともにも、薬を入れる瓶用のガラス片を集めに、共和国方面に釣りに出かけていつてしまった。仕方なく、残されたクローバーともふは、汗疹の薬に必要なアロエベラとゲルを取りに、公国へ向かうことになったのだ。

「(相談なんて言われてもなあ……。)」

クローバーはチラリともふを見た。

掴みどころのないやつだ。エルサイスと似ているが、本質は全然違う。どっちものらりくらりとかわして翻弄してくるのは一緒だが、それでもエルサイスはクローバーに主導権を握らせている。もふは違う。逃げてくるくせに、にもに主導権を渡さない。エルサイスよりも更にタチが悪い。というのが、もふに対するクローバーの見解だった。考えていたって、仕方ない。クローバーはくよくよするのが嫌いなのだ。

「エルから相談にのれって言われたけど、何か悩んでんのか?」

単刀直入なクローバーの物言いに、もふはキョトンとしてしまう。

「え?……いや……別に……。」

いつもなら、ニツコリ笑って「なんにもないですよ」と受け流すもふだが、今回は急にボールを投げられて、面食らってしまった。しど

ろもどろになりながら、やっとそう返す。

クローバーが訝しげな目を向けてくる。刺すような目線に、もふはたじろくが、そう簡単には崩れない。

「エルさんって意外に世話焼きなんですね。」

そう言いながら、もふはニツコリ微笑む。

「お前とエルは似たもの同士なんだよ。」

「そうですかねえ？まあ気は合うなと思いますよ。」

もふが、うまくかわせたなと思った瞬間

「にもちゃんのことだろ？」

と、クローバーがいきなり核心をついてくる。

「なんのことですか？」

もふは、それでもしらばっくれる。

「にもちゃんとの距離感がわからなくなってるんだろ？」

いつものクローバーは、どこかの外れなことを言いがちなのに、どうしてこういうときは、的のど真ん中に当ててくるのか、もふは不思議でならなかった。

「クローバーさんは不思議な人ですね。」

もふが苦笑いを返す。

「いつまでも誤魔化していると、どんどん苦しくなるだけだぞ。迷子になりたくなきや、ちゃんと向き合え。」

エルサイズをずっと見てきたクローバーは、それをよくわかっていた。

もふは、観念してため息をつく。今のもとの距離感は、もう潮時なのかもしれないと、もふは思っていた。でも、これからどうすればいいのか、全然わからない。その悩みの相談相手が、クローバーでいいのか、もふには判断がつかないが、エルサイズが勧めるなら、やってみるのも悪くないと思った。

「実はですね、先日、にもとキスをしてしまいました…。」

「は？」

「クローバーさん、お願いします。拳、握らないで下さい。」

もふは咄嗟にお腹を守る。腹パンは本当にもう食らいたくない、

怯えていた。

「もちろん俺からじゃないです。にもから不意打ちでされてしまった……。」

その日、公国は雪ではなく、珍しく雨が降っていて、もふはにもに言われるがまま、相合い傘をして、教会の軒下で雨宿りをしていた。

「ねえ？もふはどうして優しいの？」

「さあ？どうしてだろうね？」

降り続く雨を見上げながら、もふはにもに、適当な答えを返す。

「私のこと好き？」

「うん、好きだよ。」

ニツコリ笑ってそう答えても、にもはどこか不満そうだ。

「そーじゃなくてー！」

「どうならいいんだい？」

いつもと同じやりとりだった。こんな会話は日常茶飯事で、寝言でだってかわせる。もふはそう簡単に思っていた。

「ねえもふ……キスしてよお……。」

にもが泣きそうな顔でせがんでくる。それもいつものことだった。もふは

「いいよ。」

と言うと、にものおでこ手を当て、その手の上からキスをする。いつものようにそうやって誤魔化すつもりだった。

「はい、おし……ま……!!」

にもがもふの服の襟を、急にぐいつと引つ張った。突然のことに、もふはバランスを崩し、前のめりなり、そこににもの唇が滑り込む。

一瞬だった。唇を重ねるだけのキスを、もふはにもとしてしまった。

「で、そのあとどうしたの？」

「どうもしませんよ。」

もふはそう言いながら、バツが悪そうにクローバーから目を逸ら

す。

「はあー？にもちやんが！勇気を出して！そこまでしたのに！何逃げたんだよ!?!」

クローバーはイライラしていた。一体どこまで逃げれば気が済むのだ。これではにもがあまりにもかわいそうだ。

「それからにもとの距離感が全然わからなくなってしまったて……。」

「自業自得だな。」

これまでもふは、ずっと2人の距離の主導権を握ってきて、それに胡座をかいていた。

「突然にもちやんが、お前の主導権を無視して一線を超えてきたから、オロオロしてなんにもできねーってわけか。お前本当にクソだせえ野郎だな。」

もふはぐうの音も出ない。クローバーは、もふに軽蔑の眼差しを向ける。

もふは1回ため息を漏らすと、躊躇いがちにクローバーを見ながら「俺今から衝撃の発言してもいいですか？」

と聞く。クローバーは訝しげにしながらも「うん」と頷く。

「俺、男の人を、好きになったことあるんですよ。」

「へー。そうなんだ。」

クローバーはあっけらかんとしていた。そこには嫌悪も戸惑いもない。当たり前のように受け入れている。

「気持ち悪くないんですか？」

「何が？」

「男が男を好きになることが。」

「人を好きになることに、性別なんて関係ねーだろ。」

気を使っているわけではない。元々クローバーは気を使えるような性格ではないのだ。

これだけ堂々と受け入れられると、もふは逆に戸惑ってしまう。でも、チャンスだとも思った。ここで全部吐き出してしまえと、もふは話を続ける。

「俺、よくわからなくて……。にもは女としては1番好きだけど、今こ

ここに俺の1番好きな男がきたら、そっちを好きになってしまいかもしれない。本当に、どうなるかわからないから、踏み出せないんです。」もふはそう真剣に悩んでいた。

男を先に好きになった経験は、今のにもとの関係をもっと複雑なものにしている、自分の心を惑わす。どれが本当自分の気持ちなのか、自分は本当ににも好きになれるのか、もふはいつも不安だった。

「馬鹿馬鹿しい。お前本当に嫌いだわ。」

クローバーに面と向かって「嫌い」と言われたもふは、どうしたらいいのかわからず、困ってしまう。

「お前が今好きなのは、にもちゃんなんだろう？そこは間違いないな？」

もふが「うん」と頷く。

「なら、それで全て解決だろ。両思い、ハッピーエンド。めでたし、めでたし。」

クローバーはそう言うと、公国への道を再び歩き出す。

「え、ちよつ？待ってくださいよー！」

まったく解決糸口が掴めていないのに、話を切り上げようとするクローバーに、もふは焦る。

「馬鹿な野郎だ本当に。男だとか、女だとか、そんな下らない属性に囚われてるうちは、この先誰を好きになったって同じだ。」

クローバーは振り返ると、もふを見つめた。

「本当は自分でわかってんだろ？お前はただ、1度男を好きになった自分に自信がないだけで、その不安を、男が女がって言って、誤魔化してんだよ。」

もふは心の内を言い当てられて、たじろく。

「くだんねーこと言ってないで、男でも女でもない、にもちゃんの存在そのものを好きになってみるよ。」

それだけ言うと、クローバーはまた歩き出す。

もふは、一瞬目を瞑って考えたが、すぐに結論が出せそうな問題ではなかった。

「クローバーさんはどうなんですか？」

先に行くクローバーを走って追いかけるながら、もふが聞く。

「エルさんのこと、どう思ってるんですか？」

「急なんだよ。」

クローバーは面倒そうな返事をする。

「別にどうも思っていない。」

「好きなんですか？」

クローバーに追いついたもふは、回り込んでその表情を確認する。

クローバーは眉を寄せて、本当にただ面倒くさそうな顔をしていた。

「あのなあー、言われっぱなしで一矢報いたいのはわかるが、ズレてんだよ。お前は。」

クローバーはもふの胸に指を突き立てると、ポンと押した。うんざりした様子だ。

「私とエルの関係は、好きとか嫌いとかじゃない。」

クローバーはもふを押しのと、先へ進む。

「でも、エルさんはクローバーさんと同じ思いじゃないかもしれないよ。」

もふは食い下がる。

「だからって私には関係ない話だ。私は、私がどう思ってるかが最重
要なんだよ。」

クローバーは振り返らずにそう言う。

もふの完敗だった。これだけ言い負かされたのは人生で初めてだ。もふはどうすることもできず、ただ先を行くクローバーの背中を見つめていた。

番外編くにもともふと汗疹の薬 後編く

「にもさんは釣りが上手ですねえ！」

エルサイスはそう言いながら、にもが釣り上げたトレジャーから、ガラス片を取り出す。

「ふふん！まあね！」

にもは淡いピンク色のロングヘアを揺らしながら、得意そうに鼻をかく。おかっぱの前髪が、おてんばそうな雰囲気醸し出している。

「にもさんは本当に素直でいいですね。クロも見習ってほしいです。」

にもは「ふふつ」と照れて笑う。褒めれば褒めた分だけ響く。エルサイスは心の中で、なんて扱いやすいのだろうと思っていた。

「姉御は姉御で、かつこよくて、憧れる！」

「でも、にもさんはそのままの方が、いいと思いますよ。」

それがエルサイスの正直な感想だった。

「もふさんだって、今のにもさんの方が、きつと好きですよ。」

エルサイスの言葉に、にもは顔を曇らせる。

「好きなんて……。もふは、私のことなんか、きつとどうとも思っていないんだ……。」「

にもはそう言うと、もふと同じ若草色の目を歪めながら、今にも泣きだしそうな顔をする。エルサイスは慌てて

「僕はそんなことないと思いますけど……。」「

とフオローした。

もふがにものことを好きなのは、エルサイスの目から見れば、明らかなことだった。少なくとも「どうとも思っていない」なんてことはないだろう。

「でも……。でも……。」「

にもが言い淀む。

「ふむ。」「

エルサイスはそううなずくと、にもから釣竿をサツと預かり、近くのベンチまでエスコートする。そして「さあここに座って何でも話して下さい」と言うように、微笑みかける。

にもはエルサイスの行動に戸惑いながらも、ベンチに腰を下ろす。
「何かあったんですか?」

エルサイスがにもの隣に座りながら聞く。

「えっと……実は……」

にもは躊躇いながらも話し出す。

「こないだね、公国でもふに……その……」

にも両手の指を絡ませ、落ち着きなく目を泳がせていた。

「あの……き、キスをしたの……」

「え……う」

予想のはるか斜め上をいくにもの回答に、エルサイスは一瞬固まっ
てしまった。

「もふが悪いんだよ!だって、私の気持ち知ってるくせに、いつも誤魔
化してき!」

にもはそう言いながら、不満そうに口を尖らせる。

「だからーちよつと不意打ちで、驚かせてやったの!」

エルサイスはにもを、扱いやすい単純な人だと思っていたが、それ
は大きな勘違いだった。

「(とんだじゃじゃ馬だ。)」

こんな強烈な反撃をくらえば、それはもふだっておかしくなるだろ
うなど、エルサイスは思った。

「でもね、もふはなーんにもしてこなかった。好きも嫌いも言わない
し、近づいてもこないし、離れてもいかない。」

にもはため息をついた。

「やつぱりもふは、私がなにしようど、どうとも思っていないんだよ
……」

にもともふは、大きくすれ違ってしまった。どっちもお互い好
きなはずなのに、それがまったくうまく伝わっていない。

「にもさん」

「ん?」

エルサイスはにもを見つめる。こうなれば、一か八かだ。

「汗疹の薬が出来たら、もふさんにこう言うんですよ。」

エルサイスはそう言つて、にもに小さな声で、耳打ちした。

連邦の宿でツインルームを隣同士で押さえて、そのうちの1つに、4人は集合していた。

「おかえりー。」

先に帰っていたクローバーともふが、エルサイスともを迎え入れる。

「こっちの薬はできてるよ。そっちは？」

「こっちもできてるよ。」

クローバーの問いかけに、エルサイスは小さなガラス瓶をバツクから出した。

にもともふは、お互い無言のまま、微妙な距離を取っている。

「ほら、瓶に出来た薬入れろ。」

クローバーはエルサイスから小瓶を受け取ると、もふに渡した。もふは何も言わずに、乳白色の薬を瓶に詰めていく。

部屋全体が真空。バツクされているような、なぞの緊張感が流れていた。その空気に耐えられなくなったクローバーは、エルサイスにそつと近づくと

「一体これはなんなんだ。」

と耳打ちする。

「まあまあ見てなつて。」

エルサイスは軽い返事をする。

「できましたよ。」

薬を詰め終わったもふが、瓶をクローバーに渡そうとすると、にも

「あ、あの！待って！」

と、割つて入る。

「ん？」

クローバーともふは、首を傾げながらにもを見る。

「あの……その……もふに塗ってもらいたい！」

にもの言葉にクローバーともふは目を丸くする。特にもふは、しば

らくの間固まってしまふほど驚いていた。

「ほら、どうするんですか？もふさん？」

エルサイズが面白がるように、もふに言う。ふっと正気に戻ったもふは、エルサイズの策略を瞬時に理解し、呆れたようなため息をついた。

「エルさんて、意外に世話焼きなんですね。」

「なんのことかな？」

とぼけるエルサイズを見て、もふは笑った。

「本当、変なコンビですよ。あなたたちは。」

もふはそう言いながら、にもに近づくと、その手を取った。

「それでは僭越ながら、背中に薬を塗らせていただきますよ。レデイ。」

「うさんくせーな。」

サツと仮面を被ったようなもふの態度に、クローバーは正直な感想を述べる。

「大丈夫ですよ。クローバーさんの言葉は忘れていません。」

もふはどこか覚悟したような真剣な目で、クローバーを見た。

クローバーは短くため息をつく

「にもちゃん泣かせたら許さねーからな。あと、変な気起こすなよ。」と、もふ釘を刺し、エルサイズとともに、2人で部屋を出ていく。「にもちゃん！隣の部屋にいるから、何かあったら壁叩いてね！助けにくるよー！」

部屋を出る直前、クローバーがにもにそう呼びかけた。

「はーいー！」

元気に返事をするにも横で、もふは身震いする。クローバーの腹。パンは、もうすでに、もふのトラウマになっていた。

「さて、にも、俺後ろ向いてるから、上着を脱いでベットにうつ伏せに寝て。準備出来たら言っつてね。」

2人が出ていくと、もふはそう言っつて、にもに背を向けた。にもはそれを確認すると、いそいそと服を脱ぎ始める。

もふは薬の瓶を握り締めながら、クローバーから言われたことを考

えていた。

属性に囚われない、にもの存在そのものを好きになれと言われても、もふはピンとこなかった。

にもは、生意気で、ポンコツで、頑張り屋で、かわいい女の子だ。それらはいえただだのにも属性だけれど、その1つ1つが集まって、今のにもの存在を形取っている。

では、にもの属性をそのまま引き継いだ男が現れたら、もふは好きになるだろうか。そう考えた時、答えはNOだった。

もふが好きになった男は、がっしりした体つきで、年上の、物腰の優しい人だ。にもとは似ても似つかない。

結局それが、もふが、にもの存在そのものを好きな証明になっていた。

にものあとに、もふの理想の男が現れて、そっちを好きになったとしても、それは相手が男だからでも、にもが女だからでもない。もふ自身が好きだから、好きなのだ。

結局もふは、男だとか、女だとか言い訳して、逃げていただけだった。先に男を好きになっ自分が、本当に女を好きになれるのか、ただ不安だったのだ。自分の気持ち、正しいのか、真実なのか、わからないまま誤魔化して、ここまでできてしまっていた。

「いいよー。」

にもが準備OKの合図を出す。

そんな誤魔化しは、今日で終わりにしよう。

そう覚悟を決めたもふは、言いたいことをまとめながら、ゆっくり振り向く。

「えっ!はあ?!これ……酷いー!」

まとめていた言葉が全部吹っ飛ぶくらい、にもの汗疹は酷い状態だった。赤いプツプツが、背中の中辺りにぶわあと広がっていて、所々掻きむしったあとで血が滲んでいる。

「にも……これはダメだよ……。」

「姉御にも、まったく同じこと言われた……。」

にもはバツが悪そうに、枕に顔を埋めた。

「ちよつと染みるかも。」

もふはあまりの酷さに顔をしかめながらも、にももの背中に、丁寧に薬を塗っていく。

「にも。」

「ん？」

「ごめん。」

「何が？」

もふは言葉が続けることができなかった。いざとなると、なんと言葉をついだらいいのか、全然わからない。今までずっと向きあつてこなかったことを、もふは本当に後悔した。

「ねえ？もふ？」

黙ってしまったもふに、にもが呼びかける。

「ん？」

「私のこと好き？」

「す、好きだよ!!」

もふは、食い気味にそう返す。誤魔化しではなく、本心からそう言ったが、にもにちゃんと伝わるか不安だった。狼少年だ。今までのらりくらりとかわしてきたことのツケを、今払っている。

「そっかあ……。」

にもはそう言うと、安心したようにふにやつと笑った。幸せそうな笑顔だった。

もふは胸が熱くなるのを感じていた。たった今、確かに、もふの心は、にももの笑顔に救われたのだ。

「ねえもふ？」

「んー？」

「キスしてー！」

にもものお願いに、もふは戸惑う。でも、ここで誤魔化したらまた振り出した。

「いいよ。」

もふは覚悟を決めると、息を大きく吸ってから、ゆっくり顔を近づけ、にももの頬にチュッと短いキスをする。

「はい。おしまい。」

そう言いながら、顔が赤くなるのを感じ、顔を見られたくないもふは、にもが起き上がらないと見えない角度に素早く避難する。

「えー!?口にしてー!」

調子にのってわがままを言うにもに、もふはため息をつく。

「今はダメ。」

「今は?」

「今は。」

それがもふの精一杯だった。

「仕方ないなあ……。」

にもはそう言いながらも、どこか嬉しそうだ。

もうにもは、自分の思い通りにならないだろう。もふはそう感じていたが、後悔は無かった。もうコントロールはできないし、したくない。これからは、2人で舵を取っていくのだ。

どこに向かうのか、何が待っているのか、検討もつかないが、以前に比べれば、2人の目指す先は明るかった。

番外編くにもともふと汗疹の薬 番外編く

クローバーとエルサイスは、にもともふの隣の部屋で、自由にくつろいでいた。

「もふさんと話してどうだった?」

「んー?どうもしないさ。」

エルサイスにそう聞かれたクローバーは、面倒くさそうに返事をしながら、ベットに寝っ転がる。

「ただはつきりしたのは、私はあいつが嫌いってことだけだな。」

エルサイスはクローバーの横に座りながら、苦笑いを浮かべる。

エルサイスは、昔もふが男を好きになったことがあるのを知っていたし、そしてそのことが、にもとの関係のブレーキになっているのも分かっていた。

その辺を、男でも女でもないクローバーなら、救えるだろうと思つて、相談役に推したのだ。

「先に男を好きになったから、その後女を好きになったらダメなんてこと、あるわけねーのに。男だろうと、女だろうと、誰をいつ好きになったって、そいつ自由だろ。結ばれるかは別として。」

「クロはそう言うけどさ、世の中は、男は女を、女は男を必ず好きになるって、当たり前のように思ってる人で、いっばいなんだよ。」

クローバーはエルサイスにそう言われて、うんざりした顔をする。

まったく馬鹿馬鹿しい話だった。

世間は、十人十色とか、個性を大事にとか、そんな言葉を吐いておきながら、実際ちよつと外れた人が現れると、認めなかったり、排除しようとしたりする。

もふだつて、最初自分では、おかしいことは何も無いと思つていたのかもしれない。でも、日々世間から与えられる偏見に満ちた意見や眼差しに、ずっと晒されていたら、男を好きになった自分が特殊なのでは?と思つても仕方がないだろう。

クローバーにとつて、男が男を好きになることは、何ら特殊なことではなかったが、もふの中でそれは、周りと違う特殊なことになって

いて、その固定概念が、今のものとの関係を鈍らせていた。

クローバーは、もふのその固定概念を一蹴してもふの中で詰まっていたパイプをキレイにしただけだった。

「まったく、くだらない話だよ。」

クローバーはそう言うのと、目を瞑った。エルサイスはその隣に寄り添うように寝転ぶ。

「なんだよ。あっちいけよ。」

クローバーは目を瞑ったままエルサイスに言う。

「冷たいなー。」

エルサイスはどける気は無いようだった。

しばしの沈黙。

エルサイスは寝転がるクローバーを観察していた。真紅の髪は窓から差し込む光に透けて、美しいオレンジ色になっている。金色の目は閉じられていて、髪と同じ赤い色のまつ毛が、白い肌に映えていた。そして、柔らかそうな唇はほんの少しだけ開かれ、規則的な呼吸を繰り返している。

「ねえ？僕もクロとキスしたい。」

「はあ？」

エルサイスの言葉に驚いたクローバーは、慌ててベットから飛び起きると、警戒した表情で、彼を見た。

エルサイスはニコニコした笑みを浮かべるだけで、冗談なのか、本気なのかわからない。

「なんだよ急に。」

「にもさんと、もふさんがキスしたって聞いたからさ、僕もしたいなああって。」

エルサイスは、にもからキスの話を聞いたとき、驚いたと同時に、多少のショックを受けていた。自分ともふは、似たもの同士で、同じような位置にいると思っていたのに、随分先を越されてるような気分になったのだ。

「誰が誰とキスしようと、お前にも、私にも関係ないだろ。」

クローバーは呆れ顔でエルサイスに返す。

「ねえダメ?」

「無理。」

甘えた声を出すエルサイスを、クローバーが一蹴する。

「嫌?」

「ダメとか、嫌とかじゃない。無理。」

クローバーはそう言うのと、また寝転がる。

男でも女でもないクローバーだからこそ、そういう行為に抵抗があった。

「キスとかしてる自分が受け入れられない。気持ち悪い。無理。」

クローバーはそう言いながら、寝返り打って、エルサイスに背を向ける。

「そっかあ。」

エルサイスはそう漏らす。残念がる様子も、怒る様子もなく、ただ「そういうものか」と流すような感じだ。

男も女も関係ないと言いながら、クローバーこそ、それにこだわっていた。

男のエルサイスとキスするのは、女の自分だ。クローバーは、自分が『女』になるのが怖い。

「まあ、嫌とかよりは、無理の方がましかも。無理じゃなくなったらできるってことだしね。」

「無理じゃなくなったとして、なんで自分ができるって思うんだよ。私だって相手は選ぶ。」

「え? 僕以外にいるの?」

「お前のその謎の自信はどこからくるんだ……。」

クローバーは呆れたため息をつく。

「そもそもお前も含め、誰も候補じゃない。」

「それはこれからみんなにチャンスが、つまり僕にもチャンスがあるってことだね。」

エルサイスのこの超ポジティブ発言は、ふざけているのか、真面目なのか、クローバーにはまったく見当がつかない。

当のエルサイスは半分ふざけて、半分本気だった。クローバーの

『初めて』は絶対に自分がもらうと、勝手に決意していたが、そんな時がくるとは、エルサイスでさえも想像もできない。

「無理じゃなくなる日なんてくるのかね？」

クローバーが他人ごとのように眩く。

「くるんじゃない？そのうち。」

エルサイスの返しも適当だ。

俺ではなく私と言った日、サラシを外した日、スカートを履いた日、露出の多い服を着た日、髪飾りを買った日。その日がくるまでは、押し込めて、嫌悪したり、我慢したり、見ないようにしていたことをする日は、いつも突然やってきて、いつのまにかクローバーとって、当たり前前の日常になっていった。それと同じように、キスをする日がくるかもしれない。

でもそれは、可能性の話であって、今のクローバーはまだまだ受け入れられそうになかった。

「いや、無理だな。無理。」

クローバーはそう断言すると、エルサイスに背を向けたまま、目を閉じた。エルサイスは苦笑いをする。

クローバーは、男に体を触られるのが恐かった。エルサイスにできえ、急に触られると、一瞬体がこわばるし、他人が触れば、瞬時に反撃せずにはいられない。

いきなり押し倒されたり、上に乗られたり、複数人に囲まれたり、そんな仕打ちを、クローバーは騎士の養成所で受けた。クローバーは強かったし、アジールも用心棒のようにつついていたので、肉体的な大きな被害はなかったが、だから無事だったという訳ではない。その体験は、クローバーの心に深い傷を残した。

この傷が、いつどうやったら癒えるのか、クローバーはわからなかった。

エルサイスは、クローバーにそんな過去があるとは知らないが、クローバーに触れると、一瞬力が入ることは感覚的に知っている。エルサイスはクローバーがそうなる理由がわからなくとも、無理にクローバーに近づかないようにしていた。挑戦はするが、嫌だと言われれば

すぐ止める。

エルサイスはそうやって、クローバーのペースで距離を縮められるようにしていた。それはクローバーのためであり、他人と真剣に関係を築いたことの無い自分のためでもあった。舵を他人任せにしておくのは、思いの外楽で、エルサイスはやめられそうになかった。

にもともふも、クローバーもエルサイスも、それぞれに、それぞれの関係性や、距離の取り方があって、そこに正解ない。

誰かが、部屋ドアをノックする音がする。

「はい。」

無言のクローバーに代わって、エルサイスが返事をする。

「姉御？一緒に夜ご飯食べに行こうー!!」

ドアの向こうから、そうにもが、機嫌のよさな声で呼びかけてきた。

「うまくいったっばいね。」

「ああ。」

エルサイスの言葉に、クローバーは気のない返事をする。

「ご馳走しますよー。」

もふの声に、クローバーはピクつと反応を見せた。

「どれ、もふの財布を空にしてやるか。」

クローバーはそう不敵な笑みを浮かべると、起きあがって支度をする。エルサイスは笑った。

どのパートナーにも、正解はない。正解がないからこそ、誰もが1人1人真剣に悩んで、向き合って、関係を築いていく。

クローバーとエルサイスも、にもともふも、迷ったり、遠回りしたりしながら、2人だけの道を歩んでいくのだった。

第45話 魔王城

私は目の前に広がる怪しげな建物を見て、首を傾げた。

ピンクのステンドグラスで縁取られた門を通って奥まできたら、不思議な場所にたどり着いてしまった。

「派手だな。」

私は建物外観を見渡す。

3階建て位はありそうな大きな建物の上からは、蜘蛛の巣のようなものが放射状に伸びていて、怪しい雰囲気を醸し出している。窓には門と同じピンクのステンドグラス。妖艶としたこの建物は、家と言うより、館とか、城と言った方がいいかもしれない。

「(ハハ、どハハ?)」

「(ヤあ?)」

エルサイスの返事は適当だ。

「世界地図出せよ。」

「地図にない冒険をしようよ。」

エルサイスはそう言っつてニッコリ笑う。何か誤魔化しているときの顔だ。すぐわかる。

「誤魔化してんじゃねーよ。」

私が指摘すると、エルサイスは困ったように頭をかく。

「クロ、本当のこと言っつても怒らない?」

「別に。」

「迷いました!」

エルサイスはそう言っつと笑った。

まったく笑い事ではない。私は呆れたため息をついた。

ナビゲーションはエルサイスの役目だ。エルサイスはいつも私の少し前を歩き、地図を見て、次の目的地に案内してくれる。だが、今回は珍しく失敗したらしい。

別に目指すところがあつたわけではない。ただ3国国境付近でネギの採取をしていただけだつたのだが、ウロウロしているうちに、来たことのないマップに入ってしまったようだつた。

「迷ったなら迷ったでいいから、早くそう言え。」

途中で言ってくれれば、奥に進む前に引き返すこともできたはずなのに、とんだ手間だ。

「何か失敗したの初めてだから、どうすればいいのかわからなくてー。」

エルサイスはそう言いながら地図を広げ、メガネをかけ直す。現在地を割り出そうとしているらしい。私も一緒に地図をのぞき込む。

「うーん……。今いるのは魔王城かな？絵がこの建物に似てるし。」

エルサイスは地図の端を指さす。古ぼけて黄ばんだ地図は、エルサイスの手で、ところどころ補修してあった。使い込まれている感じがする。

「ついでだし、寄っていく？」

「どこに？」

「魔王城。」

エルサイスにそう言われて、私は魔王城を見上げる。誰かが住んでいる気配はあまり感じない。

「まあ、それもいいか。」

エルサイスが言った「地図にない冒険」とやらを試してみるのも悪くない。

私は紫色の池にかかった橋を渡り、魔王城の扉を開けて、中に入った。

中には先客がいた。ユーキとカレンだ。この2人とは、教会で不老不死の洗礼を受けた時期が一緒に、旅の途中何度か顔を合わせたことがある。

私は、うだつのあがらないヘタレなユーキが大嫌いだった。偉そうなくせに、言い訳ばかりで、弱くてダサイ。カレンはしっかり者で、そんなユーキを献身的に支えているが、甘やかしが過ぎると、私は思う。エルサイスだって、私をそんなに甘やかしはしないだろう。

2人の前に立ちはだかるのは、どこかで見たような魔物だ。

「フハハハ、ここまでよく来た、勇者よ。ようこそ、魔王アスタナの城へ。」

「あれ、炎の洞窟で解放しちやつた魔物だね。」

エルサイスが私に耳打ちしてくる。

ライオンのような鬣、4本の角、鋭い爪。猫のような出で立ちのこの魔王は、リーヤンのペンダント事件のとき、私たちが宝箱の封印を解いてしまい、中から出てきたやつだ。

すぐに退治したが、魔王は死なない。また復活して、ここに出てきたと言うわけだ。

「ここまでの死の旅路、よくぞ生きて歩んで参った。誉めてつかわそう。しかし、我に勝てるかな?」

魔王アスタナは、ユーキとカレンに、大層な口上を述べる。

「ち、陳腐な口上じゃないか。でも、僕の退魔の剣で一撃だよ。ねえ、子猫ちゃん。」

ユーキはそう言いながらも震えている。本当にダサイ野郎だ。私はいんざりしたため息をついた。

「迷子になったただけだと思ったら、本当はここを目指してたんですねえ。さすが勇者様。」

「僕も、僕もここを目指してたんだよ。」

エルサイスがカレン言葉に便乗する。

「いいから、わかった。うるさい。」

そうアピールしてくるエルサイスが、心底面倒だった。

「大口を叩くからには楽しませてくれ。そして死んでから黄泉路で後悔するがいい!」

「こ、後悔するのは、ど、どちらだろうな。君に地獄の一丁目行き切符をあげるよ……!」

弱いやつほど、よくしゃべる。そんな言葉が頭をよぎった。この先の戦いに、興味がわかない。きつとつまらないと予想できた。

「やあ!」

ユーキがアスタナに切りかかるが、シールドに阻まれてダメージが出ない。

「あれ魔王の特殊能力?」

「いや、ただ魔王の防御力を、ユーキの攻撃力が超えてないだけ。」

エルサイスの質問に、私は淡々と答える。弱すぎて話にならない。「こんなものか!」

アスタナは腕を払ってユーキを退ける。

「うわああっ!」

弱々しい悲鳴を上げるユーキ。

「無念だ……子猫ちゃん……僕の骨を拾ってくれ……」

ユーキはそう言いながら気を失ってしまった。何という茶番だろうか。私は呆れ返って言葉が出ない。私の後ろで、エルサイスはおかしそうに笑っていた。

「次は誰だ?」

アスタナはそう言うと、私たちをみた。

「今度は貴様か?どこかで見た顔だな。」

「クソボケ魔王は、自分を倒した人の顔も覚えられんのか。」

悪態をつく私を、エルサイスが「まあまあ」と言っただめ。

「次の勇者はなかなか骨がありそうだ。貴様も我を倒しに来たか。」

「勇者って、本来は勇気のある人だよ。それがなんで、魔王を倒す者の意味になったんだろうね?」

エルサイスが、急に謎の考察を始める。私にとっては、どうでもいい話だ。

「さあね。」

とだけ返しておく。

「強い者を恐れ、忌み嫌う。それがか弱き人間の業よ。そうして嫌われるのも魔王の宿命。貴様らの恐怖、怒りを甘んじて受け止めよう。遠慮なく我にぶつけよ。」

ズレている。この魔王はかなりズレている。私は強い者を忌み嫌うどころか、大好きなのだ。そういうところでは、私は、か弱き人間ではないのかもしれない。魔王がなぜ嫌われるのかは、私にはわからないが、少なくとも私は、この目の前の魔王に、恐怖も怒りもまったく感じていなかった。

「さあ、来い!」

アスタナがそう凄む。私はエルサイスをチラリと見るが、エルサイ

スは肩を竦めるだけで、何にも言わない。

勝負を申し込まれたなら、受けるのが私の礼儀だが、こんなにも燃えない戦いは、正直面倒だった。

「まあいいよ。エル、待つという。すぐ終わらせる。」

私は前に進み出て剣を構える。ユーキが邪魔だったので、カレンに目配せしてどかしてもらった。

「さてと、ウォーミングアップといきますか。」

私はそう呟くと、アスタナに切りかかった。

第46話 魔王の役目

勝負はあっという間に決まった。私が切りかかった5秒後には、アスタナは地面に膝をつき、肩で息をしていた。

あまりに骨のない戦いに、私はため息をつく。

「ウォーミングアップにすらならないな。」

そう言いながら、剣を収める。

「お疲れ様。」

「疲れてない。」

エルサイスの労いを一蹴する。腹立たしいくらいつまらない戦いだった。

「魔王とは……つまらぬ存在だ。ただ勇者を名乗る者に倒されるだけの存在……。」

アスタナは倒されたくせに、随分饒舌だ。

「我は長い月日、魔王として君臨した。その中で人間とは何か、魔王とは何か……考え続けた。」

「何か長くなりそう？」

エルサイスが嫌そうに眉を寄せる横で、私はあくびをした。退屈で仕方ない。誰も合図打ちをしないまま、アスタナはダラダラと話を続けていた。その様子を見て、エルサイスが

「早く死なないかな？」

と言った。

「エル、お前ホントに時々馬鹿正直だよな。私もそう思ってたけど、ちゃんと黙ってたんだぞ。」

大人として、それは思っても言っただけじゃないことだ。でも、エルサイスはサラツと言っただけだ。

「ついね、つい出ちゃった。」

エルサイスはそう言うと言った。私よりずっとたちが悪い。

「だが、1つだけ話せるとすれば、聞くがよい、勇者よ、魔王とは……！」

「私は勇者じゃなくて、ただの冒険者だって。」

うんざりしながらそう言う。話が長い上に中身がない。

「ながあいつつっ！」

さつきまでいなかった声が割り込むと、アスタナを岩の柱が貫く。アスタナが

「うわぶべらとてつつっ！」

と、随分複雑な断末魔を上げる。

「あ、魔王ちゃん。」

急いで振り返ると、ピンクのロングヘアに、黒いうさぎの耳のついたフードを被った、魔王ちゃんがいた。

魔王ちゃんとは、フェンダークと同じくらいの時期に知り合いになった。エルサイスと一緒に、小悪党のケインの落とし穴にハマったところを助けたのがきっかけで、仲良くさせてもらっている。

会う頻度はそんなに多くはないが、会えばいつも一緒にご飯を食べ、様々な話を聞いた。永遠に生きている魔王ちゃんは、私たちが生まれる前の、ずっと昔の話を、たくさんしてくれる。そんな魔王ちゃんが、私は好きだった。

「ここは私お城よ。それをあつかましい、我が物顔で語ってくれちゃって！」

魔王ちゃんはプリンしながらアスタナに近づく。

「くっ、き、貴様っ！よくも我が口上を途中でさえぎってくれたな……。奈落の底で悪夢を……！」

「そういうのはヨソでやって！」

魔王ちゃんはそう言うのと、アスタナを火あぶりにする。

「うわあああっ！」

アスタナは最後にそう叫ぶと、黒い霧になって消えていった。

「お気に入りソファ、汚さないでよね！」

魔王ちゃんはそう言うのと「ふんっ」と息をつく。うんざりした様子だ。

魔王ちゃんは、可愛らしい姿をしているが、その実力は確かに魔王そのものだった。

魔王ちゃんさえ良ければ、1度私と手合わせを願いたいところだ

が、彼女は元々争いを好まない性格なので、中々難しい。

「ここ、魔王ちゃんのお家だったんですね。」

エルサイスが改めて部屋を見渡しながら呟く。

「ようこそー…ここは私のお城よー来てくれたのね！」

魔王ちゃんが嬉しそうに言う。

来たたくて来たわけではないが、魔王ちゃんが嬉しいならそれでいいと思う。

「ここ、私が建てたんだよ！」

「え？まじで？」

私もエルサイスに倣って、改めて部屋を見渡す。

壁には美しい金細工で人の横顔のようなものが描かれていて、床一部は特殊な強化ガラスでできている。そのガラスの下にはピンク色の光る花が敷き詰められ、幻想的な雰囲気だ。そして何よりすごいと思ったのが、ハイヒールを履いた女の人の足の形をした柱だ。こんな大胆な細工は、他で見ることがなかった。

「高そうなお城ですねえ。」

エルサイスが素直な感想を漏らす。

「たーつくさん、酒場で働いたりして、こつこつためて……。まだ見ぬ優しき人のすいーとるーむを作るのが、私の唯一の夢」

「すいーとるーむ……。」

魔王ちゃんの思い入れや、その努力には敬服するが、すいーとるーむはちよつと私には理解できない。

「だったのに……。」

魔王ちゃんは、そう言うとき目を伏せる。

「悪趣味だと思う？思うよね？」

そう詰め寄る魔王ちゃんに

「そんなことないと思いますけど？」

とエルサイスが笑って返す。私も、ただ住むには若干派手だなど思うが、悪趣味だとは思わない。

「魔王ってイメージだけで人間が建てたお城だからね。あんまり私の趣味じゃないんだ。」

魔王ちゃんはそう言うど、ため息をついた。

「それは少し残念ですね。せつかくお金を貯めたのに。」

エルサイスが同情するように言う。一世一代の買い物を、自分の趣味にできなかつたのは、不幸かもしれない。

「私ちいさおうちを建ててって、大工さんをお願いしたんだけど、でき上がつたらこんなので……」

「全然小さくないな。」

私は肩を竦める。

『魔王なら、らしくしないと！大赤字だけどおねえちゃんかわいいから、歴史に残るようなやつ、建てといたぜ！』……って。

とんだお節介だ。ありがた迷惑もここまで来ると、文句も言えないなどと思う。

「あまりに素敵なお顔で、怒れなくって……。」

「それは気の毒でしたね。」

エルサイスが眉を下げながら言う。きっと心の中ではどうでもいいと思っっているんだろうなど、私は勘ぐる。エルサイスは、合図うちだけはいつちよ前なやつなのだ。

「でも、他の魔王の感性には合うみたいで、ちよつと家を空けると、みんな自分の城にしたって攻めてくるの。さっきの魔物も多分、そんなヤツの1人ね。私の留守中に入り込んだんだわ。」

なんとも迷惑な話だった。

「家宅侵入罪じゃん。」

私は呆れたため息をつく。魔王ちゃんが本当にかわいそうだ。

「勇者様、ちよつとしつかりして。」

「うーん……」

カレンの声に、みんな振り返る。アスタナの攻撃に気を失っていたユーキが目を覚ましたようだ。

「なんて美しいんだ。」

ユーキはぱつと起き上がると、魔王ちゃんに駆け寄り、その手を取った。私は咄嗟に、ユーキに腹パンをキメたくなって、拳を握ったが、エルサイスに肩を押さえられたので、やめることにした。

「まあ……」

私の行動とは裏腹に、魔王ちゃんは、嬉しそうな声を出す。

「あなたが僕を魔王から救ってくれたのかい、ベイビー？ぜひ名前を教えてくださいませ。」

「私こいつのしやべり方嫌いだよ。」

「僕も何となくその気持ちわかるよ。」

私の肩を押さえまま、エルサイスが苦笑いを浮かべる。

「私？うーん、そうねえ、一部の人からは『魔王ちゃん』って呼ばれるわ」

バットチョイスだ。魔王ちゃんには他に『マイカ』という名前がある。そつちを教えた方がいい気がした。

『魔王ちゃん』？魔王……？君……魔王なの？」

思った通り、ユーキは引いている。

「そう。でも、こわがらないで。私ほど人畜無害な魔王は……」

「魔王はもう勘弁してくれえ……！」

ユーキは魔王ちゃんの話途中で、走って逃げ出してしまった。

「勇者様ったら、まったくもう……。」

カレンが呆れ返りながら、そのあとを追って出ていった。

「あー、もう！みんな魔王ってだけでこの反応なんだから。」

魔王ちゃんは、そう言っとうなだれた。

「大変だね。魔王ちゃんこんなに優しくて面白いのに。」

悲しそうな魔王ちゃんを、私は慰める。

「あーあ……魔王なんてやめたいよ……。」

「魔王ってやめれるんです？やめれるなら、やめたらいいんじゃないですか？」

ため息をつく魔王ちゃんに、エルサイスがそう言う。

「ううん。天から与えられた役目だもの。魔王は、年を取ること、死ぬこともできないの。」

不老不死の村の事件の時に、考えた話だった。永遠の時間を生きること、どれほどの苦痛が伴うのだろうか。それを耐えて生きている魔王ちゃんは、本当にすごいと私は思う。

「魔王は、魔物を生み、使役できる唯一の存在。魔王がいないと、魔物を誰も制御できなくなっちゃう。そうすると、勝手に魔物が増えて人間が減びちゃうんだ。」

魔王ちゃんに、そんな大事な仕事があるとは思わなかった。なんだかとても壮大で大変そうだ。

「魔物を従えて正しくコントロールするのが魔王の役目。ただ勇者に殺されるためだけにいるんじゃないんだよ？」

恐怖の対象として、ガス抜きのように、殺されるためだけに存在するよりは、それなりの使命があった方がいいと、私は思った。

「すこし、お話長くなっちゃったね。」

魔王ちゃんはそういうと、悲しそうに笑った。

「いや、全然長くないよ。ありがと。」

私はそう短く返した。

「私飲み歩きよりも、実は家飲み派なの。だから、あなたたちも遊びに来ていいんだよ？」

私とエルサイスは顔を見合わせる。

「あ、でも基本的におつまみとかなないから持ってきてくれると嬉しいなあ。」

魔王ちゃんが甘えるように言う。私はおかしくなって微笑んだ。

「いいよ。今度私が美味しいおつまみと食事いっぱいつくって持ってきてあげる。」

「お酒は僕が付き合いますよ。」

エルサイスが私に続く。

魔王ちゃんはそれを聞くと、嬉しそうに笑った。

魔王ちゃんの果てしない時間が、いつまで続くのか、私たちには検討もつかない。でも、私たちという間だけは、ほんの少しでも幸せな気持ちになつてくれたらいいなと思った。

第47話 嘘つきユーキ

なんとか魔王城出て、連邦の城塞都市まで戻って来ることができた。なぜ道に迷ったのか、自分でもわからない。僕は改めて地図を見直すと、首を傾げた。

「もういいよ。帰ってこれたんだし。」

クローバーはそう言いながらあくびをしている。怒ってはいやうだ。ただ、呆れている感じはある。

「次迷ったら早目に言え。そんなときは私も一緒に考えるから。」

目からウロコだった。ナビゲーションは僕の役割で、僕が全部何かしなければと、いつのまにかそう勝手に思い込んでいた。でも、旅は2人のものなのだ。一緒に考えたって問題ない。むしろ、それが普通なのかもしれない。

僕はなんだか嬉しくなって、後ろからクローバーに抱きつきながら「ありがとう！」

と言った。案の定、クローバーの腹パンが飛んでくる。

「ぐふう……。」

それなりに覚悟して構えていたとはいえ、痛い。

「急に抱きつくな！」

そう怒る顔もかわいらしいと、お腹を押さえながら思う。

「僕は伝説の勇者ユーキ!!」

朗々とした声に、僕もクローバー顔をあげる。宿屋に向かう途中の道で、ユーキが町民に向かって大声で演説しているのが見えた。

「あいつ、カレンがいないと、ホントただのクズだな。」

クローバーの暴言に、僕は苦笑いを返す。

ユーキは、クローバーの嫌いなタイプど真ん中をいつている。偉そうな大口を叩くが、弱くて、努力もしない男。クローバーは、口だけで、実力がないやつが、大嫌いなのだ。

「地下洞窟に封印されていた魔王は、僕の手で滅ぼした。僕の鋭い一撃が敵を塵にして、ゼロに帰したのだ！」

ユーキはそう大見得を切る。

「すげえな。」

聴衆たちが、目を輝かせながら、感嘆の声を漏らす。

そもそも魔王は死なないのだから、滅ぼしても、ゼロに帰してもいいし、さらに言うならば、ユーキの一撃は弾かれて、かすりもいなかった。ユーキはとんでもない嘘を、いくつもついている。

「手柄取られたけど、どうする?」

「興味無いな。勝手に言わせとけ。」

クローバーはうんざりしたように、ユーキを見ていた。大嫌いもここまでくると、無関心になるようだ。怒りすらわからない。

僕にとっては、ユーキもカレンも、どうでもいい存在だ。目の端に時々映る景色の一部のように、特段気にかけるものでもないもの。僕らに実害がなければ、彼らは彼らで、好きにやってればいいと思っていた。

「それでそれで!」

聴衆に先を尋ねられたユーキは、腕を組み換え、目を瞑って、神妙な顔で話し出す。なんだか演技くさい。

「魔王には人間の手下がいた。見るからに愚鈍そうだが、凶悪な刃を心に秘めている……。」

誰のことだろう?などと、呑気に考えていたら

「それがヤツらだ!」

とユーキが言っ、目を見開き、芝居がかった仕草で、僕とクローバーを指さしてきた。

「はあ?」

突然のことに、クローバーは呆れた顔でそう返す。一体何が起きているのかさっぱりわからない。

一瞬遅れて、僕は

「(してやられた……。)」

と後悔していた。油断して、完全に先手を取られてしまっていた。

これは一種の口封じだ。本当に魔王を倒したのはクローバーだった。それを僕らが町民たちに吹き込んだら、ユーキの立場が無くなってしまう。だからユーキは先回りして、僕らを魔王の手下に仕立て上

げることによって、町民たちからの信用を失わせたのだ。

くだらない嘘のため、ここまでするユーキの執念に、僕はゾツとする。理解できないどころか、得体がしれない。

「お前、今まで散々見逃してきたけど、今回ばかりは見逃せねーなあ。」
クローバーが怒りに燃えた目で、ユーキを睨みつける。ユーキは一瞬怯んだが、今は聴衆が味方についている。

「違うというのか？だが、あんたらと魔王、ずいぶん親しげだったじゃないか。」

怯みながらも、ユーキはそう反論する。

「アスタナは知らんが、魔王ちゃんは私の友達だ。友達で何が悪い？魔王ちゃんは無闇に人を傷ついたりしない。いい魔王だ。」

クローバーがそう言うのと、聴衆たちはザワついた。きつと彼らには、理解できない話だろう。『魔王Ⅱ悪』という固定観念縛られてるのだ。

「人間の姿をしてるけど、本当は魔王の手下の魔物なんだろう？」

「あんたが魔王の手下だって？」

「嘘でしょ？」

聴衆が混乱を見せる。ここは分が悪そうだ。避難しようとして、クローバーの肩に手を置いて引こうとしたが、振り払われてしまう。まだ撤退したくないらしい。

「悪い人ほどうい人に見える。いや、いい人ぶるんだ。」

「私はいいい人ぶったことなんてねーよ。」

クローバーの金色の目が光っていく。怒りのボルテージがじわじわ上がっていくのが、手に取るようにわかった。

「さあ、ここで一戦やるか、ここを去るか、2つに1つだ！」

ユーキの安い挑発に

「上等じゃねーか！そのうるせえホラ口、2度と叩けねーようにしてやる！」

といって、クローバーが剣を抜こうとする。聴衆から悲鳴が上がった。一部の町民が、兵士を呼びに行く。

「クロ。ダメだよ。」

僕はクローバーの腰に手を回し、全力で抑える。

「なんでだよー！一回ぶちのめしてわからせてやらねーと、懲りねえだろうが！」

瞳孔の開き切った目で、クローバーが僕を睨み返してくる。

「彼は何をしても懲りないよ。」

城塞都市で揉め事を起こすのは危険だ。権力の力で、何をされるかわからない。それに今ユーキには大勢の聴衆が味方についている。たとえ剣で勝ったとしても、罰を受けるのは僕たちだ。

「クロ。」

剣にかけてクローバーの手を掴む。クローバーは僅かな抵抗を見せたが、すぐ力を抜いて、諦めたように柄を離した。

「くっそ!!」

クローバーが地面を蹴りながら、悪態をつく。

「やっぱり……この人の言うことは本当みたいだぜ！」

「魔王のしもべは出て行って！」

「出てけ！」

聴衆たちが、押し寄せてくる。危険を感じた僕は、ユーキを睨んだまま動かないクローバーを肩に担いだ。

「わあ！何すんだよ！離せ！おろせ！」

突然のことに混乱しながら、そう暴れるクローバーを何とか押さえ込んで、僕は城塞都市の門の外までダッシュした。

僕はクローバーを地面におろすと、そのまま膝をついて、肩で息をした。たった数百mの距離だが、暴れるクローバーを担いで走るのは、中々骨が折れる。

呼吸が苦しい。額には汗が滲んでいた。

「なんで止めたんだよ！」

クローバーはそう言うのと、僕の肩を持って強く揺さぶる。

「ちよっ……ちよっと待って……休ませて……。」

僕は疲労でフラフラになりながらクローバーを抑える。

「くっそーあいつー！ぜってーいつかぶっ殺す。」

「気持ちにはわかるけど、殺さないで……。」

バックから水筒をだすと、僕はそれを一気にあおった。疲れた体に冷たくておいしい水が染み渡る。

「気にしない方がいいよ。相手にするだけ無駄さ。」

僕は呼吸を整えると立ち上がった。まだ少し足がフラフラする。疲れた。

「あんなコケにされたのに、気にしないとか無理だろ?」

クローバーは抑えきれない怒りを、地面を蹴ってぶつけていた。まるで地団駄を踏む子供のようだ。

「よう!うかねえ顔してるじゃねえか、友人。」

急に現れた声に、僕とクローバーは後ろを振り返る。声の主は、フエンダークだった。

「なんだよ。友人つて。てゆうか、お前この前酒場で飲食代払っていかなかっただろ?今すぐ金出せ。」

クローバーが急にカツアゲまがいのことを始める。飲食代は、カツツとレイカの話をしたときのことなので、もう随分前のことだ。よく覚えているなど感心してしまう。

「冷たいな。親友なのに。」

「お前が?親友?笑わせんな。」

クローバーが呆れたように鼻を鳴らす。

フエンダークの登場で、クローバーの怒りは少し気がそれたようだ。表情が幾分柔らかくなっている。僕は少しほっとした。

僕は人の顔から感情を読み取るのが得意だった。望まざるとも、自分の身を守るために、幼い頃からそう訓練してきたのだ。今ではそれが立派な盾にも、剣にもなる。

「なにかあったのか?」

不満そうなクローバーのかわりに、僕が状況を説明する。

「なんだ、命を張って魔王を倒したのに、助けたやつに裏切られたってか?」

「まあ簡単にまとめるとそうですね。」

なんともくだらない話だった。

「そんなことあ、よくある話だ。恩を仇で返されるなんてことはな。」
「私は命を張ったわけでも、あいつを助けたわけでも、恩を売ったわけでもない。別に感謝しろとは言わねーよ。でも、嘘で貶められるのは我慢ならねえ。」

フェンダークはクローバーの肩に手を置くと「まあまあ」と落ち着くように言った。クローバーは、不愉快そうにその手をすぐ払いのける。僕はなんだかそれが面白くて、笑ってしまう。

「そうそう、こういう時はな。笑うんだよ。」

笑う僕を見たフェンダークがそう言う。

「バカバカしいだろ？ ああいうヤツらが人間だって思うことが。」

フェンダークの言葉に、クローバーが首を傾げる。

「だが、魔物がピーピー言ってるって、気になんないだろ？ それと同じだと思えば、笑いがこみ上げてくるってもんだ。」

僕は「なるほど」と納得する。相手を同じ人間だと思わなければ、怒りもわかないっというわけだ。

「私にはよくわからん。笑えない。」

クローバーはそう言いながら腕を組んだ。

「みんな魔王ちゃんを悪者にしたがるけど、私にしてみれば、あんな当たり前の顔して、くだらない大嘘ついて、人を貶めるヤツの方が、よっぽど醜悪に見えるんだよ。魔物と同じなんておこがましい。人間の方が魔物よりもずっと汚い。」

クローバーの言い分もよくわかる。どっちにしろ、そんなやつらは、相手にするだけ無駄なのだ。フェンダークのいうように、笑い飛ばして、次に進んだ方が時間の使い方として、有効だ。

「俺たちも同じ人間なんだよ。だから、笑うべきなんだ。恥すべき人間の存在に。」

フェンダークの割には、中々平和的だなと思う。なんとなく過激なところがあると思っていたが、そうでもないらしい。

フェンダークという人物は、僕でも本当によくわからない。おそろく色々なものを隠し持っている気はするが、そのどれもが一切見えてこないのだ。中々一筋縄ではいかなさそう。

今のところフェンダークは僕らの味方ように見えるが、人はいつどうなるかわからない。ユーキだって、少しおかしいが、無害だと思つて油断していたら、このしつぺ返しを食らった。フェンダークのことも注意深く見ていくことにする。

「笑つて流せたら、苦労しねーよ……。」

クローバーは笑うよりも、断罪したい派なのだろう。悪くは無いが、危険だ。正しいことが、正しいと評価されるとは限らない。断罪の是非は、僕らだけで決められるものではないのだ。

「まあ、頑張れよ、正義の味方。」

フェンダークはそう言つて手をあげると、去つていった。

「私は正義の味方じゃない！」

去つていくフェンダークの背中に、クローバーがそう叫んだ。

第48話 酔っ払い

「マスター！お酒ちようだい！お酒！」

公国の酒場に入るなり、クローバーは酒場のマスター、チップに向かってそう叫んだ。

「珍しいなあ！酒を頼むなんて。」

チップがフライパンを振りながら、目を丸くして返す。

「クロ、やめときなよ。また吐くよ？」

「うるせえ！これが飲まずにいられるか！」

僕はため息をつく。

クローバーは下戸中の下戸なのだ。とにかくアルコールがまったく飲めない。薄いカクテルの入ったコップを、飲み干す前に、潰れてしまう。

「めちやくちや薄いカクテル出してください。」

僕はクローバーが見ていない隙に、チップに耳打ちする。チップは大笑いすると

「わかったよ！」

とウインクした。

席に着くと、チップがクローバーにレモン色のカクテルを、僕にビールを持ってきてくれる。

「荒れてんなあ？なんかあったのか？」

「まあ色々。」

僕は苦笑いして誤魔化す。僕が料理を注文している横で、クローバーがカクテルを半分ほど一気に飲み干していた。

「クロ！ホントにやめときなって！」

「いいの！！飲みたい気分なんだから！」

今日のクローバーは中々強情だ。

「後で絶対後悔するよ。」

クローバーは、お酒特有の高揚感や、気持ち良さを感じる前に、具合が悪くなってしまうのだ。そんな体質なのに飲むというのは、わざわざ自分から気持ち悪くなりに行くようなものだ。何が楽しいのか、

まったくわからないが、本人が飲みたい気分なら仕方ない。

料理が届く頃には、クローバーの顔は真っ赤になっていた。元々の肌が白いので、余計目立つ。

「もー!!ムカつくー!」

クローバーが乱暴にテーブルを叩く。

「クロー、静かに。」

僕の注意も聞かず、クローバーはバンバンテーブルを叩く。

「だってムカつくんだもん!」

「まだユーキさんのこと怒ってるの?もう忘れなよ。」

「私の頭はそんな都合よくできてない。」

クローバーはそう言うのと、不満そうに口を尖らせた。

僕もクローバーと同じで、ユーキを助けたわけでも、恩を売ったわけでもないと思っていた。ただあの場に、ユーキがたまたま居合わせただけで、それ自体に意味は無い。だから、感謝も、お礼も要らない。そんな期待は1ミリもしていなかった。ただ、こんな形で、害を持って返されるとは、思ってもみなかった。何がどう転ぶのか、わからない世の中だ。

「私は別にいいんだよ。誰が魔王を倒したことになっても。」

クローバーはそう言いながら、プロシエットにかぶりつく。

魔王アスタナを倒したのはクローバー、むしろ、トドメを刺したのは魔王ちゃんだが、それは、僕らにとって、どうでもいいことだった。ユーキが手柄を横取りして、自分が倒したと声高に叫んでも、別に問題は無い。クローバー風に言うなら「好きにしろ」だ。

「そのあとが問題だったね。」

魔王の仲間の濡れ衣を着せられ、僕らは城塞都市を追い出された。ほとぼりが冷めるまで、しばらく城塞都市に入るのは控えた方がいいだろう。クローバーはあそこの宿屋のバスルームがお気に入りだったが、それもしばらくおあずけになる。

「面倒だよ。本当。」

僕はため息をついた。

「あいつが嘘をつこうと、虚勢を張ろうと、興味はない。ただ、私を愚

鈍と罵って、魔王の手下なんて雑魚扱いられたのが気に食わない。」

クローバーはそういうと、カクテルの入ったグラスを飲み干した。「クロの怒りはそっちなんだね。」

濡れ衣を着せられたことも、城塞都市を追い出されたことも、彼女の怒りの論点ではなかったようだ。ただ『下に見られた』ということに、怒っていた。

「なあにが『見るからに愚鈍そうだな』だあ。おめーに言われたくねーよおー！」

クローバーは既に呂律が怪しい。僕はチップに水を頼む。

今回のことは、交通事故みたいなものだ。本当に防ぎようがない。こちらがどんなに無関心を貫いていても、相手から執着されると、こうやって問題が起きる。

僕は、錬金術の師匠とところにいた時を思い出していた。あの頃は、僕がいくら興味を示さなくても、しつこく言い寄ってくる女の人が、いくらでもいた。僕はそんな彼女たちが心底煩わしかった。無視しても、冷たくあしらっても、なぜか付きまとってくる。その執着は、時に僕への攻撃となって、実害を出す。

だから僕は、相手を満足させるだけの言葉に、多くのリソースを払うようになつたのだ。嘘でも、心にも無くても、満足すれば、彼女たちは攻撃してこない。かなりの忍耐が必要で、多少の煩わしさはあったが、自分の生活を円滑に送るには、必要なことだった。

「あつたまいてえー。」

クローバーがうめく。まだ酒場にきて30分も経っていない。

「本当に酔うのが早いなあー。安上がりでいいね。」

僕はそう言いながら、2杯目ビールを飲み干す。まったく全然酔っていない。

「うるしやい！酔ってねーよおー！」

クローバーはもうすでに呂律が回っていない。

クローバーは中々飲まないのです、酔っているところを見るのは、結構貴重だ。顔を赤く染めながら、ふにやふにや言ってる姿は、かなりかわいらしいが、具合が悪そうなどころとはちよつと心配だ。

「んーんー。」

頭を押さえながら唸るクローバーに、僕は水の入ったコップを差し出す。

「んー。」

クローバーは唸りながらそれを受け取ると、一気に飲み干した。

「大丈夫？」

「だいじょーぶ。」

本当に大丈夫なのかは、本人でさえわからないだろう。

「ねえ？エル？」

「ん？」

「あのねえ。」

「うん。」

「私ねえ。」

「うん。」

なんだか子供のような話し方のクローバーがおかしくて僕は思わず笑ってしまう。それでも構わず、クローバーは話し続ける。

「魔王ちゃんがねえ、好きなのお…。」

「仲良しだもんね。」

「うん、おともだちーなの。」

クローバーはそう言うのと、テーブルに突っ伏した。もう眠いのかもしない。

「でもねー、みんな魔王ちゃんを怖がるの。あんなに優しくして、かわいいのにー。」

それは仕方がないことだった。今の世は『魔を滅ぼすことが正しい』とされているのだ。魔物や、魔王は恐れられて当然だ。

「える？。」

「なあに？」

「私はさあ悔しいんだあ。魔王ちゃんより、ユーキの方がずっとずっと汚いの、みんなにユーキは認められて、魔王ちゃんは拒否される…。。なんでえ？」

クローバーは泣きそうな声を出す。今日は泣き上戸の日ようだ。

「みんなさ、肩書きとか、属性で人を見ちゃうもんなんだよ。」

男は強い、女は弱い、魔王は怖い、魔物は乱暴。そんな固定観念で、世界は溢れていて、差別し、差別されながら、みんな生きている。

弱い男だっているし、強い女だっている。優しい魔王も魔物もいる。属性に囚われず、その人個人を見ればわかることだが、中々難しい。

「魔王ちゃんが恐れられるように、クロは女っただけで差別されるし、僕は金髪っただけで差別された。どこにでもあるんだよ。そういうものは。」

取り除くのは不可能な問題だ。

「でもさあ…。嫌なんだよお…。」

「気持ちわかるよ。でも、僕は思うんだ。僕らが差別されるように、僕らも誰かをきつとどこかで差別してる。そのことをちゃんと覚えておかないといけないなって。」

フェンダークの言ったとおり、僕もクローバーも、そしてユーキも、結局同じ人間なのだ。そこはいくら否定しても変えられない。相手を人間と思わないようにすれば、確かにスツキリするかもしれないが、それはまた別のところで、差別を生む。

「うん…：そうだねえ…：気をつけるよ…：。」

クローバーは呟くようにそう言うと、寝落ちした。まだ酒場に入ってから、40分ほどしか経ってない。スピードコースだ。

僕は軽いため息をつくとき、バックから小さなブランケットを出し、クローバーにかけた。そして残った料理を片付けていく。

僕は大層な人間ではないし、聖人君子でもない。だから、きつとどこかで誰かを差別している。誰かの差別を指摘する前に、まずは自分の差別と向き合わなければいけないのだ。

僕はチップに飲食代を払うと、荷物をまとめ、寝ているクローバーを起こさないようおんぶした。

「大丈夫か？」

チップが心配そうに聞く。

「大丈夫です。クロが肩で吐かなければ。」

「危険な賭けだな。」

チツプはそう言うのと大いに笑った。僕は苦笑いを返す。本当に危険な賭けだ。

外に出ると、冷たい風が頬を刺す。背中でクローバーが

「んんん…。」

と呻いて、モゾモゾしたが、吐きそうな気配は無いので、少し安心した。

寝ているクローバーをおぶるのは、中々骨が折れる。筋肉質な彼女は、体重の割には、ずつしりと重いのだ。僕は辛くなる前に宿屋につけるよう、少し足を早める。

「クロ、月がキレイだよ。」

返事はない。

生まれ持ったものは誰も変えられない。自分が持っているカードは、限られているのだ。だからこそ、他人のカードを羨ましがったり、バカにしたりする。

でも僕は、僕のカードで、満足できる道を探っていこうと思う。クローバーとともに。ただそれだけだ。

明日のクローバーは二日酔いできつと大変だろう。朝起こすのに苦労しそうだ。そんなことを思いながら、僕は宿屋へと入っていった。

番外編く夏祭りく

参道は、たくさんの人が行き交っていた。人間、魔物、そのどちらでも無いもの。提灯が、赤く淡い光をチラチラと放ちながら、現し世と隠世の境界を曖昧にしていく。色とりどりではあるが、みんな揃いの極東の地の民族衣装といわれる『浴衣』に身を包み、それぞれに祭りを楽しんでいる。

「エル、私あれ食べてみたい。」

クローバーはそう言いながら、真つ赤で大きな丸い飴を指さした。

「りんご飴？おっきいなあ…食べ切れる？」

「うーん…じゃあ小さい飴にする。」

屋台には、拳大の大きな飴と、ピンポン玉大小な飴が並んで売ってあった。

「その方がいいよ。飴でお腹いっぱいにしちゃったら、もったいないからね。」

エルサイスはりんご飴売りの魔物に『カタヌキ』を渡して小さい方の飴をもらう。

「ありがとう。」

エルサイスからりんご飴を受け取ったクローバーは、嬉しそうに顔をほころばせると、大きな口を開けてガリリとそれを食べた。

甘い飴の中に、りんごの優しい上品な香りがほのかに広がる。

「うん、美味しいー！」

クローバーは口の周りを赤く染めながら、満足そうに笑った。それを見て、エルサイスも微笑む。

紺色の紫陽花柄の浴衣に身を包んだクローバーは、いつもよりも少しだけおしとやかに見える。赤い髪には、レースのついた黒いバレッタをつけ、金魚のかんざしが、涼しげに揺れていた。

エルサイスはクローバーにハンカチを差し出すと、口の周りを拭うように言った。

「僕も何か食べようかな？」

「あれは？あのふわふわしたやつ。」

クローバーはハンカチで口を拭いながら、綿あめを指さした。心なしか目が輝いて見える。

「クロ、食べたいの？」

「あ、いや、そういうわけじゃ……。」

エルサイスに心の内を見抜かれたクローバーは、照れたように頬を染め、目を逸らす。エルサイスは、それを見ておかしそうに笑うと

「半分こしようか。」

と言つて、カタヌキと綿あめを交換した。こんなに食欲旺盛なクローバーは久々に見たので、エルサイスはなんだか嬉しくなった。

エルサイスは藍色の無地の浴衣を着て、髪はいつものポニーテールではなく、右後ろ辺りで、シニヨンにしてまとめていた。結び目には、クローバーとお揃いの、金魚のかんざしが刺さっている。せつかくだからと、浴衣に合わせてクローバーがアレンジしてくれたのだ。

エルサイスは、虹色のふわふわした雲のような飴を受け取ると、それを興味深そうに見回した。

「すごいなあ。これも飴細工の一種だね。熱で砂糖を糸状に溶かして、空気で冷まして綿状にしてるんだよ。機械の中がどうなってるの
か見たいなあ！」

クローバーは呆れた顔で、エルサイスのうんちくを聞いていた。こんな時までエルサイスの頭の中は、錬金術のことでいっぱいだ。

エルサイスは、綿あめに直接口をつけると、はむつと噛んで食べた。
「甘くて美味しいよ。クロも食べる？」

「うん。」

エルサイスは綿あめを少しちぎると、1口大に丸めて

「あーん！」

と言つてクローバーに差し出す。

「え？」

クローバーは嫌そうな顔をしたが

「そのまま口をつけると、顔がベタベタになっちゃうよ。」

とエルサイスに言われ、仕方なく口を開ける。

クローバーの少し恥ずかしそうな様子を、しっかりと目に焼き付けな

がら、エルサイスはその小さな口に綿あめを放り込む。

綿あめは、クローバーの口の中に入った瞬間、泡のようにあつという間に溶けていった。

「んー!」

クローバーが口を閉じたまま、幸せそうな声をだす。その食感と砂糖の強烈な甘さが、くせになりそうだった。

「不思議な食感だね。」

「うんうん、ふわふわしてる。」

クローバーはそう言いながら、エルサイスの持っている綿あめを勝手にちぎって食べ進める。

「食べて、食べて。クロはいっぱい食べて少し太った方がいいよ。」

「エルはそればかりだなあ。世の中痩せたいやつであふれてるのに。」

「クロの健康のために。」

「自分の好みに近づけたいって思いもあるんじゃないの?」

「それは否定出来ない。」

そう笑うエルサイスを、クローバーは呆れた顔で見っていた。

すれ違う人々は、皆一様にどこか浮き足立っていて、高揚感にあふれていた。会場には太鼓や笛の祭り囃子が鳴り響き、賑やかだ。

人混みの中を、クローバーとエルサイスははぐれないような気をつけながら、並んで歩いた。提灯の淡い光で、お互いがいつもと違い、どこか柔らかく見える。

「エル、あれ見て。顔がいっぱいある。あれ何?」

「ん? ああ、お面だね。」

「お面?」

「人や動物の顔を型どって、被るものだよ。ここには魔物のお面あるね。珍しい。」

エルサイスは、ゲルミのお面を1つ取って、クローバーの顔に合わせると

「うーん……なんか違うなあ?」

と言って首を傾げた。

「ゲルミは嫌だよ。」

お面の向こう側から、少し不満げな顔を覗かせながら、クローバーが言う。エルサイスは笑った。

「ねえ？私、あれがほしい。」

クローバーはそう言いながら、白い狐面を指さす。

「これ？」

エルサイスは、それを手に取ると、裏表をひっくり返しながら見回す。

「狐は、極東の地では、神の使いつて言われてるんだ。動物と言うより、妖の一種だね。」

「あやかし？」

「うん、人間でも、魔物でもない。現し世のものならざるもの。隠世を生きるものことだよ。」

「人間でも、魔物でもない？かくりよ？」

クローバーの頭には、クエスチョンマークが並んでいる。エルサイスの言うことは、難しく、よくわからない。

「今度その手の話が書かれてる本を、貸してあげるよ。」

エルサイスは笑いながらそう言うと、お面屋の魔物にカタヌキを渡し、狐面と交換する。

「はい。」

エルサイスが狐面をクローバーに渡そうとすると、クローバーはそれを手で拒んだ。エルサイスは不思議そうに首を傾げる。

「被らないの？」

「エルに被ってほしい。」

「僕？」

クローバーの意外な要望に、エルサイスは目を丸くすると、狐面とクローバーの顔を交互に見比べる。

「貸して。」

クローバーはそう言って、エルサイスから狐面を受け取ると、少し背伸びをして、エルサイスの頭につけようとする。

「転んじやうよ。」

足元はいつもの靴でもブーツでもない。下駄と呼ばれる、木をくりぬいて歯を作りつけ、はなおをすげた履物だ。

いつもよりもずっと不安定で歩きにくいこの下駄で、背伸びをするのは少し危険だ。

エルサイスはクローバーが届くようにと、少し屈みながら、彼女が転ばないように、その腰に手を回し支える。

一瞬体を強ばらせたクローバーだが、すぐ狐面をつけることに集中する。右に左に角度を微調整しながら、エルサイスの頭にお面をつけた。

「うん。これでおっけー！」

クローバーは満足そうに頷くと、エルサイスから離れる。

「似合ってる？」

エルサイスが、確かめるようにお面をぺたぺた触りながら聞く。

「うん、いい感じー！」

クローバーはそう言いながら「うんうん」と頷いた。

エルサイスは、自分がどうなっているのか見えないので、少し不安だったが、クローバーの笑顔を見て、安心した。これだけ満足そうなら、きつと大丈夫だろう。

ドーンと大きな音がする。

クローバーとエルサイスは、思わず上を見た。空には大輪の花が咲き乱れていた。

「わー！ー！」

クローバーが歓声をあげる。

「花火だね。」

花火を見上げるクローバーの横顔を、エルサイスはチラリと盗み見る。

驚きと感動に見開かれた金色の目、口元は嬉しそうに笑っている。白い肌には、花火の光が反射して、赤や青や緑に、代わる代わる色づいていた。

ふと、エルサイスがクローバーの肩に手を回して抱き寄せる。

「わっ……と……。」

クローバーは咄嗟に、エルサイスをおしのけようと手を構えたが、その手を先回りしてエルサイスが掴む。

戸惑うクローバーに

「ダメ？」

と、エルサイスが甘えたような声で聞く。

クローバーの顔をのぞき込むように首を傾げ、困ったように眉を下げているが、目と口はどこかイタズラっぽく笑っていた。

どこをどうとつても、完璧な仕草に、クローバーは思わずエルサイスから顔を逸らした。

クローバーは、時々感じる、エルサイスのこの色っぽさとか、艶っぽさとか、そういうのが苦手だった。普段なら「はいはい」で受け流せるのだが、不意打ちで食らってしまったと、ドキドキしてしまう。祭りの雰囲気もあいまって、今回ののはかなり強烈だった。

「クロ？」

追い討ちをかけるように、エルサイスがクローバーの顔をさらにのぞき込む。

「だ、ダメ……。」

想定していたより、かなり弱々しい声を出してしまったクローバーは、顔を真っ赤にして俯く。

「そっか。」

エルサイスはそう納得したように言いながらも、手に力を入れてクローバーを抱き寄せる。

「わっ！ダメって言うてるのに！」

クローバーが抗議の声をあげたが、エルサイスはどこ吹く風で微笑んでいる。

「(調子狂うなあ……。)」

なぜか抵抗できない自分に、クローバーは戸惑い、頭をかいた。

「ほら、また上がるよ。」

エルサイスにそう言われ、クローバーは空を見上げる。

花火が、ドーンと大きな音を出しながら、夜空を何度も彩っては、パラパラ鳴って、あっという間に消えていく。

それは、ただただ、美しかった。
クローバーとエルサイスは、寄り添いながらそれを見上げていた。
そうして、夏の夜の祭りは、思い出となつて、2人の心にしっかりと、刻まれるのだった。

第49話 塔の外

「神へ続く道の先は、本当に神様に続いているの?」

そんなクローバーの疑問を解消するため、僕は『その先』にきた。たまはそんな冒険も 悪くない。

『その先』には、高い高い塔がそびえたっていて、てっぺんは雲に隠れて見えない。本当に天国へと続いているかもしれないと思う。

「首が痛くなりそう。」

クローバーはそう言うと、塔を見上げるのをやめて、苦しそうに、首をぐるぐる回した。骨がポキポキ鳴っている。

「これは本当に神様がいるかもね。」

「面白そうだ。」

クローバーがニツと笑う。

まだ見ぬ世界を冒険するのは、どんな時でもワクワクするものだ。

「おい、あんたは信者か?」

塔の入口へ続く階段を登っている途中で、怪しい集団に出会った。

揃いの茶色の戦闘服に身を包み、ガヤガヤ何か騒いでいる。その中の1人の男が、こちらに話しかけてきた。

「信者? なんのことです?」

「……違うのか。」

男はほつとしたような顔をする。濃いキヤラメル色のボサボサの髪が顔に垂れ下がり、目つきの悪い三白眼をチラチラ隠している。なんとなく、乱暴そうな印象がある。

「俺はクグツ、教団に奪われた家族を取り戻す活動をしているのさ。」

「教団?」

僕とクローバーは、顔を見合わせる。僕らが知ってる教団というのは、1つしかない。

「けど、あいつらはすげえ門番を用意している。近寄ることすら出来ないんだ。」

「え、じゃあ中に入れないの?」

クローバーは残念そうな顔をする。せっかく塔の中を探検しよう

と思っていたのに、出鼻をくじかれた思いだ。

僕らはクグツから少し話を聞いた。

この塔は『教団』という組織が、一括管理していて、中に入るにはその教団に入信しなければいけないらしい。ただ、このクグツや、ここに集まっている人々の誰も、家族や知り合いが教団に入信し、帰ってこなくなったという事実がある。クグツは家族を取り戻す活動をしながら、この塔に近づく者全員に話しかけて、少しでも信者を増やさないようにし、教団の弱体化を狙っているようだ。

「うわー…。面倒そうだな…。」

クローバーがうんざりした顔をする。

「教団ってさ、あの教団かな？」

「うーん？どうだろう？」

僕は苦笑いを返す。クローバーが言っているあの教団とは、不老不死の村にいた、救済者たちのことだろう。あの人たちが絡んでいるとすれば、確かにクローバーの言うとおり、面倒そうだ。

「……とにかくだ。この先に行くのはやめた方がいい。恐ろしい目にあうぞ。」

クグツはそう言うと、活動を始めるのか、集団の中に去っていき、何やら指示を出し始めた。

「どうする？」

僕は肩をすくめながら、クローバーを見る。

「んー。まあ「行くなー」って言われたら、行きたくないのが、人の性だよな。」

僕は笑った。クローバーらしい回答だ。

「何がやばいのかまったくわからないけど、2人で行けば大丈夫だろう。」

クローバーは謎の自信をのぞかせると、入口へ続く石段を登っていった。

その途中で、今度は意外な人物に会う。

「エナ!?それにマナも！」

「あなたたち……！こんなところで会うなんて……。」

僕たちが驚いているように、エナたちもこちらを見て驚いていた。「マナ、やつとエナと会えたんだね。」

クローバーがマナに声をかけると、マナはおかしそうに「ふふっ」と笑った。

「ようやく、エナを捕まえ……いえ、会えました！おふたりにはご心配おかけしました。」

エナのパートナーのマナは、スカイブルーの目を細め、栗色の髪を揺らしながら、嬉しそうに笑った。ゲルミの頭を型どった帽子が可愛らしく揺れている。

エナとマナは、パートナー同士なのに、よくはぐれてしまって、お互い1人で行動していることが多い。なんのためのパートナーなのか、僕にはよくわからない。

「あなたたちもまさか、知り合いがこの塔に？」

「いや、僕らたまたまここにきただけなんです。」

「この塔をご存じですか？」

マナの言葉に、僕とクローバーは顔を見合わせる。何か詳しい話が聞けるかもしれない。クローバーもそう思ったのか、僕に目配せをすると「コクリ」と頷いた。

「いえ、何も知らずにきたんです。」

僕がそう言うと、マナは塔について話し出した。

この塔のてっぺんには、神様ではなく、巫女が住んでいて、人生に1度だけ、どんな願いでも叶えてくれる。しかし、今はある宗教団体が管理していて、信者にならないと、巫女に会うことができなくなってしまうらしい。そこで願いを叶えたい人が次々と信者になっていくのだが、願いを叶えたという人を、誰も見たことがないのだ。

「怪しいなあ……。」

クローバーの呟きに、僕も頷く。

願いを叶えたくて、教団に入信したら最後、どうなるかわからない。入口はあるのに、出口がない。この塔の中で何が起こっているのか、さっぱり見えないのだ。

「ねえ、エル？」

「んー？」

「なんとなくだけどね、すごく嫌な予感がするよ。」

「奇遇だね、僕もそう思ってたところだよ。」

不老不死の村の時と、同じ匂いがする。あの塔の中で、何かおぞましいことが起こっているような気がするのだが、それはあくまで、気がするだけで、僕らの想像の域を出ない。確固たる証拠が1つもないまま、疑惑だけが深まっていく感覚は、不老不死の村で感じたものと似ている。

「俺たちの家族を返せっ！」

急な叫び声に、僕とクローバーはびっくりして目を丸くする。

「何？あれ？」

「家族や知り合いが『いのりの教団』の信者になっちゃった人が、ここに集まって、いつもこんな雰囲気みたいで……中に入るスキがまったくないんですよ。」

クローバーが聞くと、マナは困ったように眉を下げながら答えた。

「エナの行方不明になった弟がここにいるかもって聞いて来たんです……」

「弟なんていたのか。初耳だな。」

エナとは中々長い付き合いだったが、家族の話をしたことはなかった。エナとはそんなに親しいわけでもないのです、それはお互い様かもしれない。

「……あいつら邪魔！」

エナはツイントールの髪を揺らしながら振り向き、赤い目を不愉快そうに細めた。

確かに邪魔だ。

「俺たちの家族を返せ！」

クグツの声に「返せ！」と人々が続く。シユプレヒコールだ。

「お帰りください。さもないと、神罰が下りますよ？」

新たな声に、僕とクローバーはそちらを見る。

塔の門の前に、青年が立っていた。水色の目は優しそうで、金色の整えられた髪は清潔感があり、爽やかそうな印象だ。ひ弱な優男。誰

もがそう評価しそうな出で立ちだが、あそこに立っているということ
は、彼がクグツの言っていた『すげえ門番』なのだろう。

「あれが、すげえ門番か？」

クローバーが首を傾げる。

「まあ気持ちはわかるよ。でも、人は見た目じゃないから、油断しない
で。」

僕がそう言うのを、クローバーは煩わしそうに手を振って遮った。
「わかってるよ」と言いたげだ。

門の前で、クグツと教団員の青年は、押し問答を始める。クグツの
「家族を返せ」に、青年は「教団に入信してください」としか返さない。
ずっと話は平行線だ。

話の途中で、この塔が、徒歩で登れることを知った。いい情報だが、
一体何階あるのだろうか？僕はまた下から塔のてっぺんを見上げる。
果たして本当に登れるのか、今はわからなかった。

平行線の押し問答の中、エナが前に進みでる。

「どうしたの？エナ？」

マナが心配そうに声をかけるが

「我が十六夜の欠片で固めし焔天の刃が忌まわしの墮天を討たん
……。」

と、エナは意味不明な言葉を返す。

「まーた始まったよ……。」

クローバーがうんざりした顔をする。僕は苦笑いを返す。エナは
本当によくわからない。そんなエナが、僕は嫌いだ、でもだからと
いつてどうというわけではない。ただこの場をやり過ぎすだけだ。

「力づくで通らせてもらおうわ！私に力を貸して……！」

エナがこちら見て助力を願う。僕はクローバーを見て、お伺いを立
てる。クローバーは困ったような顔をしながらも、デモンブレイドⅡ
アビスに手をかけ、参戦する仕草を見せる。

エナは別にどうでもいいが、やべえ門番とやらには、それなりに興
味があるのかもしれない。

「口で言ってもわからないようなら、体で教えないといけないようで

すね。さすが、低能な旧人類……。」

教団員の青年は、やれやれと言うように、手を広げたと思ったら、あつという間に黒い霧に包まれた。そして、次に霧の中から出てきたのは、爽やかさの欠けらも無い魔物だ。不揃いの歯、大きな鷲鼻に、ブツブツの肌。オーガ族と同じ系統の魔物。窪んだ両目の中に光る、水色だけが、元の青年の面影を僅かに残している。

「ここを通りたければ、私を倒してみろ！」

元教団員の魔物がそう叫び終わるか、終わらないかのうちに、クローバーは空中を舞い、魔物に斬りかかった。

第50話 共闘

私は飛び上がると、魔物にスカルティガーをお見舞いする。確実に当たったが、キンつと金属が擦れ合うような音がただけで、それほどダメージを与えることはできなかった。

「固いな。」

バックステップで少し距離を取る。その間に、エナが魔物に追撃を加えていた。

「クロ、盾できる？」

「余裕だ。」

プロヴォォグで、魔物のヘイトを集める。エナの戦闘能力は未知数だが、壁役をさせるのは少し不安だ。確実にできそうな私がやった方がいいだろう。

「回復と支援重視で行くよ。」

「ヘイト稼ぎすぎんなよ！」

私はそう言いながら魔物にエーテルレイを放つ。三方向からの光の矢が、魔物を貫くと、魔物が一瞬膝をつく。物理攻撃より、魔法攻撃の方が効きやすいようだ。

「魔法ダメージ重視でいく。エナを巻き込まないように中距離から様子見ながらやるから、いつもより下がってて。」

「了解。こっちでも見るから、自由にやっていいよ。」

エルサイスはそう言うが、中々難しい。エナと私は、本当に息が合わないのだ。事故になったら困る。

私はエーテルブレイドで、魔物に切りかかる。自分の物理攻撃を、魔法攻撃に変換する魔剣士のスキルだ。私が攻撃している横から、エナが飛び込んできて、魔物の脇腹にファイアスラッシュを叩き込む。

エナが急に近づいてきたので、私は剣を振り下ろす腕を少し緩め、攻撃を当てるタイミングを調節する。

その間に、魔物の爪が私を襲った。まったく避けられる体勢ではなかったなので、顔から腕にかけてまともに食らってしまう。血が吹きでて、一瞬視界を遮る。

私はそのお返しに、エーテルブレイドを魔物の脳天に叩き込んだ。いい手応えがあった。

「クロー！」

エルサイズがエアシールで風印をつけたあと、ウォールを唱えて回復してくれる。痛みはあつという間に引いていった。

下がって1度体勢を整える。その間もエナは、魔物に連続でスキルを使っていた。あまりダメージを与えられていないようだが、ヘイトだけは稼いでしまっている。ヘイトを集めるためのプロヴォーグは、まだクールタイム中で、次いつ使えるか、まだわからない。このまま放っておけば、すぐにエナのヘイトは、私のヘイトを上回る。

「くっそ……。」

私は悪態をつく。本当にやりにくい。

「エナ！1度下がって！」

manaがエナを制止するが、エナはお構い無しだ。

「クロ、タイミング支持するから、スキルバンバン使って。」

苦肉の策だ。エルサイズを信じて、私は前が出る。

「行くよ！」

エルサイズがアルカナを唱えると、HPが全回復した。まだまだ戦える。

「3, 2, 1はい。」

エルサイズの支持で、私は連続でスキルを使う。風迅剣、金剛剣。

「下がって、次4秒後にもう一度。」

エルサイズは、エナの動きを読みながら、私が適切なタイミングで攻撃できるよう支持を出していた。素晴らしい連携だ。

私は敵の動きを先読みするのは得意だが、仲間の動きまで見ることはできない。そこまで気を回せる視野が、私にはないのだ。私ができない分、エルサイズがそれを代わりにしてくれる。

体勢を整えながら、心の中で4秒数えたあと、またエーテルブレイドを食らわせる。

魔物の腕が伸びてきて、脇腹辺りを思いっきり突かれた。

「カツハ……。」

思わずむせるが、膝をつくわけにはいかない。なんとか着地して、持ちこたえる。

「まだいける?」

「余裕だ。」

地面に血の混じった唾を吐きながら、答える。こんなもので、私が倒れると思うな。

「3秒後にスカルティガー。そのあと下がってエーテルレイでいけるはず。」

勝利はすぐ目の前だ。

「がってんしょうち!」

私はデモンブレイドⅡアビスを力いっぱい振り上げた。

第51話 空から降ってきたもの

確かな手応えがあった。目の前の魔物は、倒したはずだ。しかし、魔物は最初と変わらず、何食わぬ顔でそこに立っていた。

「くっそ。」

私は膝をつく。エルサイスも、肩で息をしていた。いつもよりもずつと気を使わなければいけないこの戦闘は、私とエルサイスの体力と精神力を、大幅に削っていた。

頭がクラクラする。

「私の名前はロッツ。私が名を名乗る意味がわかるか!？」

ロッツという魔物がそう叫ぶ。通常、魔物に名前はない。名前がある魔物は『魔王』と呼ばれる。

「そう。私は魔王。私は不死身。旧人類ごときに私は殺されぬ!」

ロッツはそう言うと、ニタアと嫌な笑みを浮かべた。

「キリがない……。」

エナがロッツにやられた傷口を押さえながら、絶望的な声を出す。

私は振り返って、エルサイスを見る。エルサイスは目が合うと、弱々しく首振るだけで、良い策はないようだ。私たちは確かに1度勝利はしたが、最終的には敗北するしかないらしい。

「気を付ける!上から何か来るぞ!」

クグツの声に、全員が上を見上げた。

何か降ってくる。

「エル!!」

私は突っ立っているエルサイスの元へ駆け寄ると、服を引っ張り、引き倒した。

「うわあわっ!」

エルサイスは突然のことに驚き、無様に悲鳴をあげながら倒れ込む。

その瞬間、さつきまでエルサイスが立っていた場所に、空から巨大な生き物が降り立った。

「ドラゴン……!」

ずれたメガネを掛け直しながら、エルサイスが驚愕の声をあげる。白い鱗状の爬虫類のような体に、棘がいくつも生えていて、その棘の先は赤い毛細血管のような模様が浮き出ていた。目はギョロリと飛び出ている、気味の悪さに拍車をかけている。

ドラゴンが青い翼を広げ、激しく咆哮する。

あまりの音量に、私もエルサイスも顔を歪めた。

その場にいた誰もが、唖然とし、何も出来ず立ち尽くしていた。咆哮を終えたドラゴンは、翼に力を込めると、再び飛び立つ。その風圧に、私は思わず後ずさりし、目を細める。

呆然とする私たちを残し、ドラゴンはあつという間に飛び去っていった。

「ヤバイ……！」

そう言つて、最初に行動を起こしたのは、クグツだ。背を向け、一目散に逃げていく。

それを見たエルサイスは、スクッと立ち上がると、私の手を乱暴に引いて、走り出す。

「わっ！ちよっ！お前、待て！」

敵前逃亡なんか、私はしたくなかった。しかし、エルサイスの行動があまりに突然のことだったので、抵抗する間もなく、彼に引きずられるように走るはめになる。

「今の魔物……このなつかしい感じは……何……？」

エナはその場から動けないままだった。そこにマナが割り込む。

「エナ、しっかりしなさい！このままじゃ勝ち目はありません！こういう時は逃げるんです！」

マナはそう言っていると、エナを連れて逃げ出す。

完敗だ。これ程までに打ちのめされたのは、久々だった。

「ここまで逃げてきたら、大丈夫ですかね……？」

神へと続く道の端っことで、私たちはそれぞれ息をついた。

私は深呼吸して息を軽く整える。エルサイスは私の横で、苦しそうに肩で息をしながら、膝をつけていた。まったくだらしがない。私に

太れと言う前に、お前は体力をつけろと思う。

私はエルサイスに水筒を投げて渡す。

「ありがと。」

エルサイスはかすれ声でそう言うと、中味を一気にあおった。

「マナ、やつぱり行かせて……！私、弟を探すために冒険に出たんだもの。ようやく、手がかりをつかんで、ここにいてるってきいたのに……。」

「戻るなら私も行くよ。やられっぱなしじゃ気がすまねえわ。」

エナとマナの話に、私がそう割り込むと、エルサイスが私の肩に手を置き、首を振る。やめておけということらしい。

「でも、今のあなたの力で、あのドラゴンに勝てると思いますか？」

「クロもだよ。僕らではまだ無理だ。」

エルサイスがきつぱりとした口調で言う。

「そんなんやってみなきゃわかんねーだろ？」

「勝てる……私が……本気を出せば……第三の瞳が……深淵に知られず、曼珠沙華のように開けば……」

エルサイスが呆れ返った顔で私とエナを交互に見た。

「前言撤回する。多分無理。」

私はエナと同じに見られたくなくて、仕方なく事実を認める。エルサイスは私の変わり身の早さに笑った。

「勝てません。」

マナが私に続く。

「勝てるー！」

エナは強情だ。意地になっている。

「エナ、冷静になってください。本気で勝てるなんて思ってますよね。」

「死んだお父さんとお母さんからロイをよろしくねって任されて……あの子を守るのは、姉である私の仕事なのよ！」

とんだ思い上がりだなと、他人事ながら思う。守るとか、守られるとか、みんな勝手に自分の役割を決めて、守られる側を弱者と決めつける。

アジールもそうだった。勝手に私を庇護すべき弱い者扱いして、守っていた。確かに彼に助けられたことは何度もあったが、だからといって弱者として見られるのは、我慢ならなかった。

「エナ、私と一緒に強くなりましょう。あのドラゴンを倒しましょう。そして弟さんを探しにあの塔へ。」

マナはそう言うと、エナに微笑みかけた。エナは悔しそうに顔を歪めながらも「うん」と頷いた。

エナには、マナがついていると安心だなと思う。マナはエナの暴走を止めるブレーキ、私とエルサイスみたいなものだ。

できればずっと傍についてほしいものだが、この2人は、しよっちゆうはぐれて、離れ離れになっているのだ。どうしてそうなるのか、私には理解できない。

「お2人ともエナがお世話になりました。またどこかでお会いしましょう。」

2人はそう言うと、去っていった。

第52話 プリン

世界が暗転し、ぐるぐる回る。暗闇の中、一筋の光を見つけ、私は手を伸ばす。

「旅の途中で倒れてしまったか、冒険者よ。だが案ずるな。汝には神の加護がかけられている。目を開けよ。」

聞き覚えのある声に、私はハッと目を開ける。公国の教会の神父、クリフが目の前にいた。

頭がクラクラする。久々の感覚だった。エルサイスが私のすぐ隣で、床に膝をつき、頭を押さえている。

私たちは死んだ。そして、公国の教会で復活したのだ。

「大丈夫？」

エルサイスが立ち上がりながら言う。

「うん、すまんな。持ちこたえられなかった。」

私たちはさつきまで、時涉りの塔を、徒歩で攻略していた。塔は4階から毎回魔物が出て、行く手を阻む。最初は難なく倒していたが、階を上がっていくごとに、魔物はどんどん強くなっていき、20階を過ぎたあたりから、きつくなり、30階を目前にして、私たちは倒れた。

「ごめん、回復間に合わなかった。」

「いや、あれは仕方ない。無理だ。」

カラアゲ3匹の連続火属性魔法攻撃に遭い、私は先に倒れた。そのあと残されたエルサイスもすぐやられてしまったのだろう。2人仲良く教会送りになってしまった。

私たちはクリフに軽く挨拶をすると、宿屋へと向かった。

「こんなもんかー。」

教会から出たところで、私はため息をついた。

「まあ頑張った方なんじゃない？」

エルイスが頭を押さえたまま、疲れた表情でいう。

自分のレベル以上の魔物と戦うのは、体力もそうだが、精神力や集中力が、特に大きく削られる。力で押せない分、頭を使って攻略しな

ければならないからだ。作戦や分析力に長けているエルサイスの負担は、体を動かすだけの私よりも、ずっと重かっただろう。

「とりあえず、休もう。」

私は宿屋への道を急いだ。

あのドラゴンを見た日から、1週間ほど経っていた。1週間の間、私たちは装備やアイテムを整えながら、時涉りの塔の攻略に必要な知識を、他の冒険者にリサーチした。

誰に聞いても、パートナーと2人だけでの攻略ほぼ不可能と言われたが、自分たちの実力を知るためにも、挑戦しようと、とりあえず行ってみた。

そして結果は見ての通り惨敗だ。

やはり、てつぺんにいる巫女に会うには、今のところ教団に入信するしか方法はないらしい。

まだ、昼過ぎだ。公国は、マーケットに行く人、掲示板を見る人、雑談をする人などなど、たくさん冒険者であふれていた。

「あーくーちゃんー！」

酒場の前で、ボンド『シルフィード』メンバー、ユイゼに声をかけられる。

「ユイちゃん久しぶり。」

「どうも、お久しぶりです。」

私がユイゼに近寄ると、ユイゼのパートナー、セリクが丁寧なお辞儀をする。

「こんにちは、お元気でしたか？」

さつきまでの気だるさを、どこにどうやって隠したのか、エルサイスが爽やかな笑顔で2人に挨拶を返す。本当にこういうところは尊敬する。

「うんうん、元気ですよ！」

ユイゼの屈託のない笑顔に、私は心が癒された。

「これからゲルミグランパ狩りに行くんですけど、ご一緒にどうですか？」

ユイゼも、セリクもフル装備で、準備万端だ。

「すまん。今ちよつと塔を登ってきて、もうへトへトなんだ。」

「時涉りの塔ですか？」

セリクが目を丸くする。

「2人で？」

ユイゼも驚いている。

「さすがに無謀ですよ。」

「わかってますよ。ただちよつと自分たちの実力を確かめただけです。」

呆れたようなセリクに、エルサイスが苦笑いを返す。

「くーちゃんはすごいなあ！ねえセリク、私も挑戦したい！」

ユイゼは見た目によらず中々好戦的だ。そんなユイゼに、セリクは困った顔を返す。

「クローバーさんたちでも無理なんだから、僕らだって無理だよ。」

「えーでもだって……。」

「それにあそこは、いのりの教団が関わってる。近寄らない方がいいよ。」

「セリクさんは、いのりの教団について、何か知ってるんです？」

エルサイスがさかさ聞かなく。

「いえ、そんなに詳しく知ってるわけじゃないですよ。ただ……」

「ただ？」

セリクは内緒話をするように、顔を近づけてきた。私たちもそれに従い、額を寄せる。

「公国が人を集めてる噂は知っていますか？」

エルサイスが頷いた。私は、同じく『シルフィード』のメンバー、テイルがそんな話をしていたと、エルサイスから軽く聞いていたが、詳しくは知らない。

「そのことと教団が繋がってるんじゃないかって。」

他の人に聞かれると、まずい話らしい。セリクは周りをキョロキョロ警戒しながら、小さな声でいった。

私とエルサイスは顔を見合わせる。なんともきな臭い話だ。

「あくまで噂です。証拠はどこにもないですしね。教団がどんな組織

で何をしているのか、詳しく知っている人が、どこにもいないので、実際のところは、誰もわからないみたいです。」

声のトーンを戻し、離れながらセリクが言う。

「おかしな話ですねえー。」

エルサイスは顎に手をあて、考え始める。

「お前中々詳しいな。」

私がそういうと、セリクは頭をかいた。

「僕の兄が騎士なので、そういう国の内部の噂話をちよくちよく聞くんです。僕自身も、元は見習い剣士でしたしね。」

セリクの兄ということは、私と同じくらいの年齢かもしれない。養成所の時期が被っている可能性がある。

「ちなみにその兄貴の名前は？」

「……？兄ですか？イヴァンですよ。」

セリクは私になぜそんなことを聞くのか、不思議そうにしながらも答える。

「ああ……イヴァンか……。」

聞き覚えがある。悪いやつではない。

「兄をご存知で？」

「いや、すまん、忘れてくれ。」

過去のことをわざわざ掘り起こす必要はない。触らぬ神に祟りなし、だ。

「そろそろ行くか。」

私がエルサイスに声をかけると、エルサイスは考察から一瞬浮上し「うん」と頷いた。

「じゃ、また。」

「くーちゃんまたね!!エルさんもー」

元気に手を振るユイゼの横で、セリクが丁寧なお辞儀をする。よく見れば、確かに騎士っぽさがあると思う。

ユイゼたちと別れた私は、宿屋へと入っていった。

「疲れたー。」

私は靴を脱ぎ捨てると、ベットへ倒れ込んだ。

死んで復活すると、HPは回復するが、体そのものの体力というか、体調というか、そういうものまでは、元に戻らない。どこかまだ重いような感覚が、私には残っていた。

私の中から入ってきたエルサイスは、口に手をあて考え込んだまま、突っ立っている。

「まだ考えてんの？いい加減休んだほうがいいぞ。」

エルサイスは、私よりもずっと疲れているはずだ。あれだけ戦闘で頭を使っておいて、ここにきてまた何か考えて、脳を酷使し過ぎだ。

「うーん……。」

「何考えてんの？」

「いのりの教団が何をしてるかについて。」

「ほう？」

中々興味深い話だ。私はベットに座り直すと、話を聞く体勢をとる。エルサイスはそれを見ると、椅子に座り、口に手をあてたまま話し出す。

「いのりの教団と、不老不死の村にいたあの救済者は、おそらく同じものだ。」

私そう思う。雰囲気と一緒に、言ってることも、やってることもなんとなく似ている。

「不老不死の村では、人を魔物化して、死なないようにしてた。塔の門番ロッツは、僕らのことを旧人類と言った。そしてあのドラゴン……。」

「つまり？」

話が見えない。

「いのりの教団は、人を集めて、人を魔物にする実験をしてるんじゃないかな？あのドラゴンは、その実験の産物かも……？」

あまり考えたくない話だ。複雑な顔をしている私を見て、エルサイスは苦笑いを浮かべた。

「あくまで推論だよ。でも、そう考えると、色々なことの辻褄があう。エルサイスはそういうと、真剣な顔をする。」

「前にも言ったけど、錬金術では、等価交換は絶対なんだ。永遠の命には、人の命が必要。教団は、集めた信者の命を使って、不老不死の技術を手に入れた。さらに、人を魔物化し、新しい人類を作り、ドラゴンを生み出した。」

「なんのために?」

「うーん……。その辺は、セリクさんが言ってた公国との繋がりが関係してくるとは推察できるけど……。多分、戦争に使うんだろうね。兵器とか兵士として。」

「そこまでして勝ちたい戦争ってなんだ?」

「さあ? 僕にはわからないよ。」

私とエルサイスは、同時に大きなため息をついた。

世界は大きな力によって動かされている。誰もがみな歯車の一部で、嫌でも勝手に回っていく。そうして、全ての人々の、色々なものが干渉し合って、世界が未来を作っていく。

私もエルサイスも、所詮その歯車の一部。何かを変えることなんてできない。でも、だからこそ、できるだけ、自分の思う通りに回りたいと思う。

「なんだか疲れたよ……。」

エルサイスはそういうと、メガネをずらし、眠そうに目をこすった。

「昼寝でもしたら?」

「そうしようかなあ。」

エルサイスはそう言うと、ソーサラーローブを脱ぎ、ベッドに寝っ転がった。

「クロは?」

エルサイスが、メガネを外しながら、眠そうな、ぼやぼやした顔でこちらを見る。不意打ちに、なんだかかわいいな、なんて思ってしまった。

「私は眠くないから起きてるよ。プリンでも作ろうかな? 牛乳と卵あるし。」

「プリン!? 食べたい!」

「できたら起こすよ。雪で冷やせば、1時間かからないでできる。」

「やったー！」

エルサイスはそう喜ぶと、ベットにバフんと倒れ込んだ。幸せそう
だ。

エルサイスは私より歳上だ。でも、こうして時々、弟のような幼さ
を感じることもある。そういう時は、私の中の、世話焼きの私が顔を
出して、つつい甘やかしてしまう。

「まあそれもいつか。」

ベットでエルサイスが寝息を立て始めたのを確認してから、ミニ
キッチンに立つ。

プリンを作りながら、この先起こるかもしれない戦争について思い
を馳せる。

私はもう騎士ではないから、戦争に直接関わることは無いだろう。
でも、無関係を貫けるかといえば、そうではない。戦争が始まれば、多
かれ少なかれ、みんな巻き込まれてしまうものなのだ。

その中で、私とエルサイスがどういう役割を担うかは、まだわから
ない。だからこそ、私はもつと強くなりたい。あのドラゴンを倒せる
くらいに。

材料を混ぜて、プリンを蒸し始めると甘い香りが部屋を満ちた。
腹が減っては戦ができぬ。今必要なのは、休息と腹ごしらえだ。

私はプリンの蒸し上がりを、ワクワクしながら待った。

番外編く誘拐されたソラ その1く

「テイル!!」

ソラの悲鳴のような微かな声に、テイルは振り返る。人混みの中を、何者かに担がれて運ばれて行くソラが、一瞬だけ見えた。

「ソラちゃん!」

急いで追いかけてしようとするが、人混みに押し返され、思うように進まない。

「ソラちゃん!」

もう一度呼びかけるが、返事はない。

やっと人混みを抜けたところで、左右を見回す。地面にソラがつけていたゲルミのお面が落ちていている。

ソラの姿は、跡形もなかった。

数時間前。

テイルとソラは、揃いの浴衣に身を包み、祭り会場にきていた。

「テイル!あれ!私あれが食べたい!」

全体に梅の柄をあしらった、レトロな浴衣を着たソラは、珍しくはしゃいでいて、テイルにりんご飴をねだっていた。

「いいよー、はい。」

テイルはソラに小さい方のりんご飴を渡すと、支払いをする。

「え?イネノミじゃねーの?カタヌキ?これ?どっち?」

テイルが屋台の魔物と支払いで揉めている横で、ソラは受け取ったりんご飴を頬張っていた。幸せそうな笑顔だ。

「おーし、ソラちゃん、行こーかあ。」

やっと支払いを終えたテイルが、そう言って振り向いた瞬間、何者かが、ソラのサイドに手を伸ばしているのが見えた。

「おい。てめえ!」

テイルはその手を掴むと、捻りあげる。

「いててててて!」

イベリコのお面を被った手の主は、悲鳴を上げ、その声に驚いたソ

ラが慌てて後ろを振り返った。

「テイル!どうしたの!?!」

「こいつがソラちゃんのサイフを盗ろうとしたんだ。」

テイルはそう言いながら、空いているもう一方の手で、ソラを引き寄せ、自分の後ろに隠す。

「さあ、顔をだせ。」

テイルはスリが被っていたイベリコのお面を無理やり剥ぎ取る。黒いロングヘアに、赤い目つきの悪い三白眼の男が、バツの悪い顔で立っていた。

「お、お前!テイルじゃねーか!」

男はテイルを見て驚く。テイルはこの男に見覚えがあった。まだソラと出会う前、野盗をやっていた時の仲間の1人だ。

「ティム!」

テイルは捻りあげていた手を離すと、ティムと向かいあった。

「知り合いなの?」

ソラが不安そうにテイルに聞く。

「ああまあ……。」

テイルは困って頭をかいた。ティムとは確かに知り合いだ。野盗をやっていた頃は、よく一緒に組んで、旅人を襲ったり、盗みをしたりにしていたのだ。それはおおびらに人に言えるような関係ではなかった。

「お前、今何やってんだよ?その子は?まさか子供!?!」

「んなわけねーだろ!俺をいくつだと思ってんだ。この子は俺の妹だ。」

「妹お?」

ティムはテイルの後ろに隠れているソラを、不躰にのぞき込む。ソラはテイルにぎゅつとくつついて、その目から逃れようとした。なんだか居心地が悪いし、怖い。

「ソラちゃんに近づくな。」

テイルはティムの首根っこを掴むと、ソラから引き離す。

「なんだよ。正義の味方ヅラしやがって。」

ティムは蔑むようにテイルを見る。

「お前はどうぞせ、俺と同じドブネズミなんだよ。」

テイルを何も言い返せず、唇を噛んだ。その様子をソラは心配そうに見ていた。ティムは追い討ちをかけるように、テイルの耳に顔近づけると

「なあ？こんなガキのお守りなんてやめて、俺とまた一山稼ごうぜ？今は公国も連邦も戦争の準備で、いくらでも稼げるんだ。」

と、囁いた。ベツタリと張り付くような、不快な声だった。

テイルは反射的にティムを突き飛ばす。突然のことに、ティムは無様に尻もちをついた。

「俺はもう、足を洗ったんだ。」

テイルは毅然とした態度で、ティムを睨みつけながらそう言った。ティムは口を開け、呆気取られた顔をしていたが、すぐに嫌悪を滲ませると、テイルの足元に唾を吐きつけた。

「つまんねー野郎だぜ。」

ティムが舌打ちしながら立ち上がる。ソラは、何か言い返したくて、前に出ようとしたが、テイルがガツチリ腕を掴んでいて、動けなかった。

「そうやって潔癖ぶったって、お前の罪は消えねーんだよ。」

ティムは呪いのような言葉を、テイルに向ける。テイルの胸がチクリと痛んだ。1度罪で汚れると、どんなに洗っても、キレイにならない。過去は変えられないのだ。振り払っても、振り払っても、ついでくる。

「まあせいぜい頑張れよ。そちらのお嬢ちゃんも、どこかで会ったら、またよろしく。」

ティムはそう言うと、ソラを値踏みするように見た。舐め回すような視線にソラは不快感を覚える。

「さっさとどっかに行っちまえ。」

テイルがそう凄むと、ティムは不気味な笑みを残し、人混みの中に消えていった。

「ごめんね。ソラちゃん。」

タイムが去ると、テイルは屈んでソラの顔をのぞき込んだ。

「ううん、テイルは悪くないもの。気にしないで。それより、大丈夫？」

ソラはそう言いながら、テイルの頬に触れる。提灯の明かりは薄暗く、チラチラ揺れて、こんなに近づいても、お互いの顔色がはつきり見えない。

「うん、大丈夫だよ。ありがとう。」

テイルはそう微笑むと、ソラの手を取ってそのまま繋いだ。

「はぐれないようにしようね。」

そう言うテイルの笑顔に、ソラはなぜか胸騒ぎを覚えた。笑っているのに、何だかとても悲しそうだ。それでもソラは何も言えず、ただ「うん。」

と頷くことしかできなかった。

ソラは、自分と父親を襲ってきた時のテイルは知っているが、そのもっと前、テイルが子供の頃どんな暮らしをしていたのかまでは、知らない。今でも何となく恐くて、聞くことができなかった。

手を繋ぎながら、祭り会場を2人で見て回った。会場には、大勢の人がいて、少し気を抜けばお互いを見失ってしまいそうだ。テイルはソラの手を強く握り直した。ソラもそれに応えるように、小さな手に力を込める。

「ソラちゃんお面つける？きつと似合うよ。」

テイルはそう言うと、お面屋の前で、白い狐のお面をソラの頭に合わせた。

「テイルとお揃いがいい！」

「お揃い？」

テイルは目を丸くするが、それでもどこか嬉しそうだ。ソラはそんなテイルの柔らかい表情に、少し安心する。

「何の柄にする？」

「うーん……。ゲルミがいい！」

「これ？」

ゲルミのお面を手にとったテイルは首を傾げる。随分攻めた柄の

お面だが、本当にこれでいいのだろうか。疑問に思いながらも、ソラが言うなら仕方がない。カタヌキとゲルミのお面を2つ交換する。

「はい。」

テイルはお面を1つソラに渡した。ソラは嬉しそうにそれを受け取ると、頭につける。

「テイルのは私がやってあげる!」

ソラはそう言うと、テイルからお面を受け取り、屈むよう言った。テイルは少し恥ずかしかったが、ソラの命令には逆らえない。大人しく屈むと、お面をつけてもらう。

「うん!かわいい!」

ソラはテイルの頭にお面をつけると、そう満足そうに笑った。

「えー、かわいいのは困るなあ…。」

テイルはそう言いながら頭をかいたが、まんざらでもなさそうだ。「ふふっ。」

おかしそうに笑うソラを見て、テイルは幸せな気持ちになる。

過去は変えられないし、犯した罪も帳消しにはならない。それでも、今は、この小さな手を守りたい。未来は変えられると信じて。

ドーンと大きな音とともに、花火が夜空を彩る。

「わーキレイ!」

「うん、キレイだね。」

幸せそうに花火を見上げる2人は、自分たちを狙う狡猾な目線に気づいていなかった。

番外編く誘拐されたソラ その2く

「そろそろ帰ろうか？」

「うん！」

たつぷり祭りを楽しんだテイルとソラは、心地よい疲労を感じながら、帰路につく。祭り会場は相変わらず人で溢れていて、前に進むのも一苦労だ。テイルは背の低いソラを庇うように、少し前を歩いていた。

「あつー！」

「ん？」

ソラの声に、テイルが振り返る。

「髪飾り落としちゃった。」

数m後ろに、オレンジ色の花がついた髪飾りが落ちていた。ソラお気に入りの一輪挿し【緋】の花を、アレンジしたものだ。

「取ってくるー！」

ソラはそう言うのと、テイルの手を離した。

「あ、ソラちゃんー！」

テイルの中で胸騒ぎがする。ソラが離れていく指先に、自分の皮膚が剥がされていくような嫌な感覚があった。直感的に、今ソラを離してはいけないと思ったが、ソラはスルリとテイルの手を抜けていく。

「ぎゃつー！」

数m前で、髪飾りを拾っていたソラに、何者かが近づき、あつという間に彼女を連れ去ってってしまう。わずか数秒の出来事だ。

「ソラちゃんー！」

テイルはすぐに追いかけてやろうとするが、人に押され思うよう動けない。その間にソラは、人混みに紛れ、見えなくなっていく。

必死で辺りを見回す。焦りで、額に嫌な汗をかいていた。頭の中では、警告音がずっと鳴り響いている。

「ソラちゃんー！」

何度もそう呼びかける声は、太鼓や笛の囃子、花火の音にかき消されてしまう。

「テイル!!」

ソラの悲鳴のような微かな声に、テイルは振り返る。人混みの中を、何者かに担がれて運ばれて行くソラが、一瞬だけ見えた。

「ソラちゃん!」

急いで追いかけてしようとするが、思うように進めない。

「ソラちゃん!」

もう一度呼びかけるが、返事はない。

やっと人混みを抜けたところで、左右を見回す。地面にソラがつけていたゲルミのお面が落ちていた。

ソラの姿は、跡形もなかった。

「(やばいやばいやばい)」

焦りで思考が回らない。どうすればいいのかわからず、テイルはがむしやらに走り出す。

「わあっと!」

「痛っ!!」

前を見ていなかったため、テイルは誰かとぶつかってしまい、尻もちをついた。

「いったいなんなんだよ……。」

「クロ?大丈夫?」

聞き覚えのある声だった。

「お前ら!」

顔を上げると、馴染みの2人がいた。クローバーと、エルサイスだ。

「あれ?テイルさんじゃないですか。」

「テイル?なんだよ、お前かよ。ちゃんと前見て歩けよ!いつてえなあ!」

クローバーはぶつかった相手がテイルとわかると、早速悪態をつく。

柵からぼたもち、瓢箪から駒、天の助け。テイルは藁にもすがる思いでクローバーの肩を掴んだ。

「な、なんだよ!」

訳も分ならず怯むクローバーに、テイルは構いもせず

「ソラちゃんが拐われたんだ！」
と助けを求めた。

「そのティムってやつが怪しいってわけか。」

3人は、祭り会場の端で、浴衣からそれぞれの戦闘服に着替え、話をしていた。

「応援を呼ぼうか？」

そう言って、ボンド『シルフィード』のメンバーに連絡を取ろうとするエルサイズを

「やめとけ。」

と、クローバーが制止する。

「人探しには、人手が多い方がいいんじゃないの？」

「そうだ！早く見つけないと！ソラちゃんに何かあったら……」

「何かあった時、大勢の人がそれを知ってたら、困るのはソラちゃんだ。」

エルサイズとテイルの反論を、クローバーが一蹴する。

「それって……」

「わかるだろ？ソラちゃんが女の子で、拐った相手が男だ。」

あまり考えたくない事態だが、その可能性がないとは言いきれない。

「そんな！ソラちゃんはまだ子供だ！」

「子供だろうと、大人だろうと、女っていうのは、常にそういう危険に晒されてるもんなんだよ。」

クローバーのきっぱりとした物言いに、テイルは絶望的な思いになった。

「まだそうと決まったわけじゃありません。でも、事態は急を要しています。ティムという人の行き先に心当たりは？」

エルサイズが、地図を広げながら聞く。テイルは回らない頭を必死に働かせて考える。

「ティムは基本的に連邦に拠点を置いて活動してた。」

テイルは地図上の城塞都市を指さす。

「エル、どう思う?」

「こういう推理はエルサイズが得意だった。」

「うーん…：祭り会場の外は公国です。連邦までソラさんを担いで行くには遠すぎます。牛車を使えばすぐですが……」

「牛車はすぐ足がつきやすい。聞き込みはするが、使う可能性は低いだろ。」

クローバーが途中で口を挟む。エルサイズはその言葉に同意するように「うん」と頷く。

「他に心当たりはありますか?」

テイルは顔に手を当て、必死で昔のことを思い出す。どれも思い出したくない酷い思い出ばかりだが、今はそれが必要だった。

「ここだ！滅びの村！ここを拠点にして、公国を行き交う馬車を襲つてた時期が、ちよつとだけある。」

クローバーはエルサイズの顔を伺う。

「滅びの村なら、公国から近いですし、人目にも付きにくい。その記憶が正しければ、ソラさんがそこにいる確率はかなり高いと思います。他に心当たりがなければの話ですけど……。」

テイルはまた考える。考えたが、他に思い当たる場所はなかった。

「いや、他はないな。俺たちは基本、連邦を住処にしてた。だから公国の土地勘は薄いんだ。」

「わかった。急ぐぞ。」

クローバーはそう言うと、あつという間に走り出す。テイルとエルサイズが慌ててそのあとを追う。時間は刻一刻と過ぎていく。ぼやぼやしてはられないのだ。

滅びの村の入口付近の風車前で、クローバーは猫のように目を光らせながら、辺りを警戒していた。

公国を出てすぐ、牛車の御者にソラのことを聞いたが、似たような子に乗せた覚えはない言われた。それでタイムが連邦に向かった可能性はほぼゼロになったので、3人は滅びの村まで走ってきたのだ。

テイルとエルサイズは、クローバーの足元で膝をつき、苦しそうに

肩で息をしていた。

「おま……ちよ、はや……すぎ……。」

「つ……つらい……。」

息を切らせている2人とは対照的に、クローバーは涼しい顔で村全体を見回していた。

「だらしねー野郎どもだなあ。息を整えろ、敵に気づかれるぞ。」

呆れ顔のクローバーに睨まれながら、テイルとエルサイスは大きく深呼吸し、息整える。

「人がいる気配は感じるな。」

息を整えたテイルが立ち上がりながら言う。

「ああ、でもどこにいるかまでは、さすがにわからねーなあ。」

「それぞれに別れて、しらみ潰しに当たりますか？」

「いや、戦力分散は得策じゃない。エル1人だと、すぐ死にそうだし。」

「否定できないのが悲しいなあ。」

エルサイスはそう言っただけで苦笑いをした。

「急ぐぞ。」

テイルは言い合っている2人を置いて、先を急ぐ。荒れ果てた民家のドアを1軒1軒開けて、ソラがいないか確かめていく。

ソラを見つけられないまま、時間だけが過ぎていった。テイルは苛立ち

「くっそっ！」

と悪態をつきながら、4軒目の民家のドアを蹴飛ばして壊した。

「落ち着いてください。」

エルサイスがたしなめる。

「元はと言えば、おめーの不始末だろうが。」

クローバーの言葉に、テイルは顔を歪める。

「おめーが野盗なんてくだらねーことしてたのが悪いんだろ。」

「やりたくてやってたわけじゃねえ。あの頃はそうするしか……。」

「言い訳すんな。同じような境遇でも、真っ当に生きてるやつはいら。」

テイルが突然、クローバーの胸ぐらを掴んで、乱暴に引き寄せた。

その黒い瞳には、怒りの炎が灯っていた。

「最初から持つてるやつが、偉そうな口聞くな。」

静かに、でも確かな怒りを持って、テイルがクローバーに凄む。テイルの突然の激昂に、クローバーもエルサイスも目を丸くする。

「お前はあるのかよ…。何日も空腹に喘いだことが、汚え泥水しか飲めなかったことが、知り合いが毎日のように病気になって死んでいくことが、そんな生活が当たり前だったことが、あるのかよっ!!」

人は生まれながらに、持っているカードが限られている。テイルはそのカードが、圧倒的に少ない側だった。1日を生き抜くのも困難なほど、テイルは何も持っていないかったのだ。その分彼は、奪うことを覚えた。生きるためにそうするしか道がなかったのだ。

「あ、いや、すまん……。勝手なこと言いすぎた……。」

いつもなら言い返しそうなクローバーも、テイルのあまりの剣幕に押されてしまい、たじたじになりながら謝る。

「落ち着いてください。今なにより先に、ソラさんのことですよ。」

エルサイスはそう言うと、テイルの手をクローバーから引き剥がす。テイルは引き剥がされた手をそのまま自分の顔に当てると、ため息をついた。

「悪い……。俺も熱くなりすぎた。」

沈黙。気まづい雰囲気の流れた。

「キヤーーーー!!」

夜の闇を切り裂くような悲鳴に、3人は同時に顔をあげた。ソラの声だ。

「ソラちゃん!」

真っ先に走り出したのは、テイルだった。その後ろに、クローバーとエルサイスが続く。

声の方に行くと、民家で入り組んだ丘の上に、ほんの小さな灯りが見える。そこを目指して、3人は全力で走った。

番外編く誘拐されたソラ その3く

古い民家の、壊れたベットルームの隅に、ソラは座っていた。両手を後ろ手に縛られ、身動きが取れない。すぐ側には、ティムがいて、その様子を見張っている。ロウソクの小さな灯りの中、ティムの赤い目が不気味に光っていた。

「お前らは入口を見張ってる。誰も近づけるんじゃないぞ。」

ティムは数匹のオークにそう言うのと、手で払うように部屋から追い出した。どうやら魔物を雇っているらしい。

「ティル……。」

ソラは泣きそうな声で、助けを求めるように呟いた。ティムはその様子を見てせせら笑う。

「お前の王子様はこねーよ！」

ティムはソラの胸ぐらを掴むと、乱暴に引き寄せた。

「うっ……。」

ソラが痛みに呻き声をあげるのも構わず、ティムは話し出す。

「お前の王子様が、昔何してたか教えてやるよ。」

ティムはソラの耳に顔寄せ、囁く。ソラはその気持ちの悪さに、震え上がった。

「ティルも俺も親に捨てられたんだ。金がねーから口減らしに。俺たちは生きるためになんでもやった。他人を傷つけ、押しつけて、奪った。」

ソラの頬を、ティムの手が絡みつくように這う。まるで蛇のようだ。

「……っう。」

ソラは思わず泣き出した。とにかく怖かった。

「馬車を襲い、お前みたいな弱そうなガキを人質にとつて金を巻き上げた。パンを盗んで、追いかけてきたじじいを切りつけて逃げた。そうすることでしたか、生きていけなかったんだ。お前の王子様の手は、泥と血でもう汚れてんだよ。」

ポロポロと泣いているソラを見て、ティムは満足そうに微笑む。

「今だって同じだ。テイルも、俺も、ずっと変わらない。ただのドブネズミだ。ネズミはネズミらしく、ドブの中這いずり回って生きていくしかないんだよ。」

「違うー！」

ソラは思わず叫んだ。ものすごく怖かったが、テイルを馬鹿にされた怒りが、ソラを動かした。

ティムはソラの急な反応に驚いて、胸ぐらを掴んでいた手を離す。

「テイルは……！テイルはあなたなんかと一緒にじゃないわ！お父さんと私に会って、変わったんだから！」

ティムは呆気に取られた顔で、ソラを見ていた。

「テイルはちゃんと罪と向き合った。あなたみたいに、いつまでも言い訳して、逃げて、正当化しようとなんてしなかったわ。」

「ガキがいきがるなよ！」

ティムは片手でソラの胸ぐらを掴んで持ち上げると、乱暴にベツトに押し倒した。

「お前は朝になったら、売られるんだよ。いい値段がつくぞ。」

ティムはそう言いながら、ソラに馬乗りになる。

「お前みたいな顔のいいガキを欲しがるやつはいっぱいいるんだ。なんでなのか、俺が教えてやるよ！」

ティムがソラの浴衣の襟に手をかける。ソラは思わず悲鳴を上げた。

テイルがドアを蹴破ると、オークの群れが襲いかかってきた。

「うわああー！」

思わぬ不意打ちに、テイルは体勢を崩すが、それをクローバーとエルサイスが援護する。

クローバーは先頭で飛び出してきたオークを、おもいつき蹴飛ばす。よろけたオークに、エルサイスがウォーターヴェインの追撃を加えた。先頭のオークがそれで倒れると、後ろからきたオークたちが渋滞を起こす。

「ここは私とエルでやるから、お前はソラちゃんの所へ行け！」

クローバーがオークの太い腕を剣で受け止めながら言う。

「お、おうー！」

テイルが動揺を抑えながら、返事をしたその瞬間、別のオークがクローバーの脇腹にパンチを食らわせる。

「ぐう……!!」

思わぬクリーンヒットに、体の軽いクローバーは、あつという間に部屋の隅まで吹っ飛ばされてしまった。脆くなっていた壁が壊れ、ガラガラと派手な音をたてながら崩れていく。

「クローバー!!」

テイルが助けに入ろうとすると

「大丈夫ですー！行ってくださいー！」

と、エルサイスが叫ぶ。ちょうどアルカナを唱えたところだ。

テイルは少し迷ったが、気持ちを振り払うように前を向くと、走り出した。

「クロ、立てる?」

テイルの背中を見送ったエルサイスが、杖を構えながら、そう声をかける。

「くっそ………いってえなあ………」

クローバーは切れた唇から流れ出る血を、手の甲で乱暴に拭いながら、ヨロヨロと立ち上がった。

「いける?」

「ぶっ潰すー！」

エルサイスはクローバーの答えに微笑んだ。

クローバーはデモンブレイドⅡアビスを煌めかせながら、オークに切りかかる。それをエルサイスが支援する。

オークごときに、遅れをとる2人ではなかった。

「ソラちゃん!」

テイルがベットルームに飛び込むと、ソラに馬乗りになっているティムが見えた。その瞬間、テイルの頭の中は、怒りで真っ赤に染まる。咄嗟に縋漫桜花短刀を抜き払うと、ティムに斬りかかった。

「おつとー！」

ティムはそれを難なくかわし、自身も短剣を抜き、構える。

「テイル!!」

ティムから解放されたソラは、起き上がると叫んだ。浴衣の前が随分はだけている。

「お前、ソラちゃんに何をした!」

怒りに目を光らせながら、テイルがファイアスラッシュを叩き込む。ティムは力任せのそれを、短剣で受け流すと、テイルの脇腹に蹴りを入れる。まともに食らってしまったテイルは、朽ちたタンスの上に倒れ込み、盛大なホコリを巻きあげた。

「どーしたーそんなもんか!」

ティムが赤い目を光らせながら、倒れたテイルを嘲笑う。

その刹那、ホコリの中からテイルが飛び出し、ティムの喉元めがけて短剣を突き出す。その一撃はギリギリで避けられてしまい、反撃に腕を切りつけられた。右腕から、血が吹き出したが、テイルは構わず短剣を振るう。

剣と剣が擦れ合う、キンっという高い音が部屋に何度も響いた。

「俺はただ、このガキに、自分の身の程を教えてやっただけだ!」

「ふざけんな!」

交わる剣越しに、2人は言い合いをする。

「思い出せよ!テイル!」

ティムはそう短剣を弾き返し

「奪え!!これまで何度もやってきただろ!傷つけて、押しつけて、俺からこのガキを奪ってみろよ!」

と言いながら、テイルの心臓に狙いを定める。ティムはそれをかわすと、突き出した手を払うようにサンダースラッシュを放った。ティムの短剣がクルクル回転しながら部屋の隅まで飛んでいく。

テイルの目が光る。頭の中は怒りでずっと真っ赤だ。

「さあ!奪え!テイル!」

そう叫ぶティムの顔めがけて、テイルの短剣が走る。

「テイル!!ダメ!!やめて!!」

ソラの叫びに、テイルの刃が止まった。

「ソラ……ちゃん……。」

真っ赤になった頭の中に、ソラの怯えた顔が割り込む。

「テイル……お願い！やめて!!」

そう泣くソラを見て、テイルは短刀を下ろした。

「ぬるいんだよ！てめえは！」

正気に戻り呆然としているテイルに、ティムが、隠していたもう一本の短剣で切りかかる。

「テイル!!」

ソラの叫びとほぼ同時に、クローバーが部屋に飛び込んできて、二人の間に割り込み、短剣を弾き飛ばす。そして、そのまま突進し、大剣の面の部分を使って、ティムを壁に押し付けた。

「ぐえっ……。」

無様な呻き声をあげるティムを、クローバーが

「覚悟はできてるか？」

と、瞳孔の開ききった目で睨む。

「くーちゃん!？」

あまりの出来事に、ソラは目を丸くして驚く。

「ソラさん大丈夫ですか？」

後から入ってきたエルサイスは、鞆からサツと狩人の外套を出すと、ソラに巻き付けた。そして、ソラの手の縄を、丁寧に解く。

「エルさんも、ありがとう。」

ソラがそう言っている横で、クローバーがティムを押し潰そうとしていた。

「おい、テイル。こいつどうする？両手切り落として、公国で晒し者にしたあと、八つ裂きにして、オークの餌にするか？」

クローバーは随分物騒なことを言う。

「クロー、落ち着いて。ソラさんの前だよ。」

エルサイスがたしなめる。

「そんなくらいしねーと、気がすまねえだろ！」

「クローバー、お前、ちよっと落ち着け。」

テイルがすっかり冷めきった頭で言う。ソラの声のおかげもあるが、自分よりも怒って暴れているクローバーを見ると、逆に冷静になれた。

「とりあえず、離してやれ。」

「はあ？そんなんでできるかよ！ぶち殺さなきゃ気がすまん！」

クローバーが腕に力を込めると、ティムが

「ぐうおうあ………」

と声にならない悲鳴を上げ、口から泡を吹く。

「くーちゃんやめて！」

「クロー！」

見かねたエルサイズが、クローバーを羽交い締めにして、ティムから引き剥がす。

「ちよつ、離せ！」

暴れるクローバーを、エルサイズは慣れた様子で押さえる。まるで凶暴な野良猫を捕獲した時のような感じだ。

圧迫から解放されたティムは、ガハゴホむせながら、その場に崩れ落ちた。テイルはそれを見て、ため息をつく。

「テイル!!」

縄が解け、自由になったソラが、テイルに駆け寄り抱きつくくと、安心感からか、わんわん泣き出した。

「ソラちゃんごめん。本当にごめん……。」

テイルもソラの小さな肩を、力いっぱい抱き締め返す。それを見たクローバーとエルサイズは、顔を見合わせ、ほっとする。

「くつそが！」

呼吸を整えたティムが、床に唾を吐きつけ、悪態をついた。

「王子様ツラしやがって！反吐が出るぜ！」

「ティム。」

テイルはティムの正面に立ち、向きあう。その背中には、ソラがくっついている。

「俺は確かに、他人から奪って生きてた。でも、今違う。」

テイルはそう言うと、ソラの手を強く握った。

「俺は親父とソラちゃんに教わったんだ。『与える』ってことを。今まで奪ってきた分、誰かに与えて、俺はこれからも罪を償っていく。」
「ドブネズミが、偉そうなこと言うな！一度犯した罪は消えねーんだよ!!」

ティムが嫌悪を滲ませながら反論する。

「消えないからって、償わないわけにはいかねーんだよ!」

ティルとティムが睨み合う。沈黙が流れた。

「私許すわ。あなたを責めない。」

最初に口を開いたのは、ソラだった。その意外な発言に、全員が驚く。

「ソラさん、本当にいいんですか?」

エルサイスが聞くと、ソラは涙を拭きながら「うん」と頷く。

「お望みとあらば、私がいっつを八つ裂きにすることもできるよ?」

クローバーは相変わらず物騒だ。

「くーちゃん、私はそれを望みません。」

ソラはそう言うと、ティルの後ろから前に出て、ティムの手を取った。ティムは驚いて目を丸くする。

「あなたに、これ、あげます。」

ソラはそう言うと、オレンジ色の花の髪飾りをティムに握らせる。

一輪挿し【緋】の花をアレンジした、ソラお気に入り髪飾りだ。

「こ、こんなの!いらねえよ!」

ティムが動揺を隠せない様子で言う。

「いらなくても、あげます。」

ソラはそう言うと、微笑んだ。

「あなたに、神の御加護がありますように。」

一瞬の沈黙。

ティルが諦めたようなため息をついた。そして

「帰るか。」

と言ってソラの手を引く。部屋を出る2人に、エルサイスとクローバーも続く。去り際、クローバーがティムを振り返って

「命拾いしたな。でも、ティルとソラちゃんが許しても、私はお前を許

さねえ。次あの2人になんかしてみる。私がお前を殺すからな。」
と脅す。

「もう関わらねーよ。おめーらみたいに面倒なやつら。こっちから願
い下げだ。」

ティムは俯いたまま、そう力なく返した。

「クロ。ほら、行くよ。」

クローバーはまだ何か言いたそうだったが、エルサイスに引っ張ら
れると、渋々部屋を出ていった。

4人が去っていった部屋で、ティムは1人、髪飾りを見つめていた。
こんなもの、ゴミとして捨てることも、燃やすこともできたが、なぜ
かそうする気になれない自分がいた。

「神の御加護か……。」

ティムはそう呟くと、力なく笑った。

番外編く誘拐されたソラ その4く

不老不死の村の酒場で、テイルとエルサイスは向かい合わせに座っていた。テイルはさつきからずっと、頭を抱えて俯いたまま、動かない。エルサイスはその様子を横目に、優雅に紅茶を飲んでいる。

もう深夜を回っていて、酒場ももうすぐ閉店の時間だ。客は2人だけで、店内は静寂に包まれていた。カウンターの奥で店主のロックが片付けをしている音だけが響く。クローバーは、この酒場の上にある宿の部屋で、ソラの心のケアをしていて、今は不在だ。

ガタンとドアが開く音がして、クローバーが酒場に入ってくる。

「ソラちゃんは？」

テイルが立ち上がりながら聞く。

「寝たよ。泣き疲れて。」

「そ、そうか……。」

テイルは複雑な顔で、また腰を下ろす。

「クロ、お疲れ様。」

「ありがと。」

クローバーはエルサイスの隣に腰を下ろすと、差し出された紅茶に口をつける。

沈黙。

「えっと……ソラちゃんは……その……。」

「詳しいことはお前にも話せない。誰にも言わないって約束したから。」

クローバーが先回りして牽制を送る。

「言えることは、肉体的被害はそれほどなかったってこと。ただ、精神的には、ソラちゃんは今とつても傷ついていて、脆くなってる。私がお前に、今から大事なアドバイスをするから、よく聞いて、絶対守れ。扱い方を間違えると、取り返しのつかないことになるぞ。」

クローバーが真剣な顔でそう言うと、テイルはゴクリと唾を飲み込んだ。緊張が走る。

「まず、ソラちゃんは、祭り会場でお前の手を離したことを、すぐく後

悔してた。だからこそ、そのことを絶対に責めるな。責めたら私がお前を殺す。」

「クロク、殺すとか言わないの。」

エルサイスが注意するが、クロローバーは面倒そうにするだけで、聞く耳持たない。

「責めねーよ。離れたのは、俺が悪いんだ……。」

テイルが俯き、後悔を滲ませながら言う。その様子を見たクロローバーが、テイルの頭をパチンと平手で叩く。

「いつてえーなあ！何すんだよ！」

「そーいうのも！ソラちゃんを傷つけんだよ！バーカ！」

テイルはキョトンとしてしまう。

「ソラちゃんが優しくくて、頑張り屋なのは、おめーが1番わかってるだろ？お前がそうやって落ち込んでると、ソラちゃんは『私のせいでテイルが……』って思っちゃうんだよ！」

幼いながらも、しっかり者で、優しいソラだからこそ、不要な罪悪感を得やすい。クロローバーはそれを危惧していた。

「いいか？全肯定しろ。お前も、ソラちゃんも、何にも悪くない。悪いのは全部拐ったやつだ。」

「で、でも、それでソラちゃんが納得するか？」

テイル自身も、納得できそうになかった。元はと言えば、滅びの村でクロローバーに言われた通り、これは自分の不始末が起こした事件なのだ。

「納得できなくても、そう言え。言うだけならタダだ。」

エルサイスが意外な顔をする。

「クロクが、僕みたいなこと言うなんて、思いもしなかったよ。」

クロローバーは、エルサイスがよく使う、その場しのぎの気休めや、誤魔化しが嫌いだった。でも、今はテイルにそうしろと言っている。エルサイスはクロローバーの新たな一面に驚いていた。

「うるせえなあ。緊急措置だ。真面目に向き合ったら、ソラちゃんが壊れる。それぞれの心の心の中で勝手に反省会開くのは自由だが、外から言葉で責めるのは、絶対にダメだ。わかったか？」

クローバーがテイルの目をまっすぐ見る。テイルはその目を見つめ返すと「うん」と大きく俯いた。

「あと、不用意にソラちゃんに触らないこと。小さな接触でも、必ず許可を取れ。」

「許可?」

テイルが首を傾げる。

「手繋いでいい?とか、いちいち聞け。」

「僕とクロみただね。」

「おめーは最近許可取らねーだろ。気安く触りやがって……。」

クローバーがうんざりした様子で返す。

「だって、聞いても絶対『いいよ』って言ってくれないからさー。それに嫌なら拳が飛んでくるんだから、いいじゃないか。」

テイルは呆れた顔をする。この2人の関係は、自分には理解できそうにない。

「とにかく、今は急に触られることに恐怖を感じやすい。必ず事前確認を取れよ。」

クローバーはそう言うと、一息ついて、冷めた紅茶を飲み干す。

テイルはクローバーに言われてたことを、すっかり胸に刻んだ。ソラは今、不安定な波の上に立っているようなものだ。自分がしっかり支えなくてはと思う。

「あと、個人的に、お前に言っておきたいことがある。」

テイルはなんだろう?と思ひ、顔をあげる。

「お前が昔のことを後悔してるのは、重々わかった。」

クローバーはわざとテイルの方を見ないようにしていた。

「さっきは、勝手なこと言って、悪かったな。」

そっぽを向いたまま、クローバーが謝る。テイルに『同じ境遇でも、真っ当に生きてるやつはいる』と言ったことを、クローバーは反省していた。それは正論かもしれないが、自分がテイルにぶつけていい言葉ではなかったと、後悔していたのだ。

クローバーの様子にテイルは目を丸くして驚いたあと、声をあげて笑った。エルサイスもテイルに続いて笑う。

「笑うことねーだろ……。」

クローバーは不機嫌そうに頬を膨らませる。

「お前からそんな言葉を聞くとは思わなかったよ！大丈夫だ。もう全然気にしてねーよ。ありがとな。」

テイルはそう言うのと、笑い過ぎて出てきた涙を、手で拭いた。エルサイスは微笑みながら、クローバーの頭をよしよしと撫でている。「よく謝ったね」と子供を褒める先生のような様子だ。クローバーは不満げな顔でその手を乱暴に振り払った。

「さあもう行くぞ。いい加減、疲れた。」

クローバーはそう言うのと、立ち上がった。

「僕は公国に宿を取ってあるので、おいとまさせていただきます。」

エルサイスもクローバーに続き、酒場の出口に向かう。

「ソラちゃんには、いつでも相談にのるって言ってあるけど、あの子のことだ、遠慮して自分からは中々呼ばないと思うから、こっちから会いに行くようにするよ。」

「すまん。俺には話しづらいこともあるだろうから、よろしく頼む。」

テイルはそう言うのと、深々と頭を下げた。

「今日はすまなかった。本当にありがとう。」

頭を下げたまま、テイルが言う。

「気にすんな。ソラちゃんのためだ。」

「大丈夫ですよ。クロはかわいい女の子のためなら、なんでもするんですから。」

「お前、いらんこと言うな。」

テイルは顔を上げると、言い合いをしているクローバーとエルサイスを見て、苦笑いを浮かべた。

2人を見送ったあと、テイルは酒場の2階にある宿へと上がる。ソラを起こさないよう、そとドアを開け部屋に入ると、ベットに座り、月明かりの中、外を見ているソラがいた。

「ソラちゃん、起きてたのか？」

「うん、目が覚めちゃって……。」

ソラは、泣き腫らして赤くなった目を細め、困ったように笑った。「疲れただろう？そばに居るから、寝た方がいい。」

テイルはそう言っつて、ソラのベットの端に腰掛け、ソラの手を握ろうとして、途中でとまる。

「手、握つてもいい？」

「うん。」

許可がおりてから、テイルは優しくソラの手を握る。

沈黙。

ソラは眠る気はないようで、ずっと窓の外を見ていた。テイルは何かしてあげたい気持ちをも、必死で抑えながら、ソラをただ見守る。今は何かすることよりも、余計なことをしない方が重要だ。

「ねえ？」

「ん？」

「私がティムさんを許したこと、どう思ってる？」

ソラが外を見たまま言う。

テイルは押し黙ってしまう。それを聞きたいのは、自分の方だった。「本当にこれでよかったのか？」と。でも、今それをソラに聞くのは酷な話だ。絶対にしてはいけない。

テイルはクローバーの言葉を思い出す。

「よかったと思うよ。」

全肯定だ。迷っている暇はない。とにかく今はソラを守らなければならぬのだ。

「ソラちゃんはすごい。俺やクローバーじゃ出来ないことをやったんだ。」

テイルはそう言っつて、ソラの手を強く握った。ソラも少し力を入れて、握り返す。

「私ね、お父さんみたいになリたかったの。」

ソラはそう言いながら、テイルの方を向く。テイルはキョトンとしてしまう。なぜここで急に父親の話が出るのか、理解出来ない。

「お父さんが、テイルを許したように、それでテイルが変わったように、ティムさんも……。」

テイルはハツとする。ソラは、父親がテイルを救ったように、テイルを救いたかったのだ。

こんなに幼い彼女が、そんな大きなことを考えていたとは思ってもせず、テイルは鈍器で殴られたような衝撃を受ける。ソラはテイルが思っていたよりも、ずつと大人で、慈悲深かった。

でも、ソラが慈悲を授けたところで、ティムが変わるかどうかは、まったくわからない。世の中には、何をしても治らない、性根の腐ったやつというのが、ごまんといえるのだ。

それでもテイルは

「ティムが、俺みたいに、裏社会から足を洗うかはわからない。でも、ソラちゃんは確かに、ティムの心に大事な何かを残したと、俺は思うよ。」

と言った。それはテイルの願望にすぎない、祈りのようなものだったが、今のソラには、その祈りが必要だった。

「テイルがそう言ってくれるなら、いいの。もうこれで、いいの。」

ソラはきつぱりとした口調でそう言いうと、ライトグリーンを瞳をほんの少しだけ輝かせ、ニッコリ笑った。

テイルはその笑顔にホツとする。

「さあもう遅いから、今日は寝な。」

「うん。」

ソラは頷くと、ベットに寝転がる。

「手握っててくれる？」

「うん、大丈夫。離さないよ。」

ソラは安心したように息をつくど、目を瞑った。

「おやすみなさい、テイル。」

「おやすみ、ソラちゃん。」

すぐに寝息を立て始めたソラを見ながら、テイルは父親のことを思い出していた。

父親は、自分を襲ったテイルを助け、ご飯を食べさせて、寝床を与え、最終的には家族として迎えてくれた。

「親父……。」

メガネを外す。これは父親の真似をして付けている伊達メガネだ。こんなくだらない真似している自分よりも、ソラの方が、ずっとずっと父親に近かった。テイルは情けない気持ちになる。

それでも、落ち込んではいられないのだ。ソラはまだ不安の海を泳いでいる。それを支えられるのは、自分だけだ。

テイルはソラの隣に寝転ぶ。手は握ったままだ。目を瞑ると、眠りはすぐにやってきた。

その日テイルとソラは、同じ夢を見た。父親と一緒に3人で、シチューを食べる夢だ。それは暖かく、楽しく、幸せな夢だった。

第53話 奪う者

僕は、考え事をしていた。

クローバーはそんな僕を置いて、公国で開催されている本の市を、自由に回っていて、今ここにはいない。

僕は本の市で賑わうマーケットから、少し離れた掲示板の前で、チラチラ舞う雪を見ながら、昨日の夜やった錬金術の実験を、頭の中でトレースして、失敗の原因を探っていた。

「温度の変化か？放出する熱量は微々たるものだと思定していたけど、甘かったかも。氷で冷やせば？いや、涼しいところでやれば……）」

僕は思考の海に深く沈んでいて、自分に向かってくる人影に気づいていなかった。

「おっと!!」

「きゃっ!!」

女の子が、僕にぶつかってくる。歩きながら考える時は、ぶつかったり、転んだりしないよう、よく注意しているのだが、今は立ちどまっていたので、完全に油断していた。

「大丈夫ですか？」

ブラウンの髪を、顔の横で緩く結んだ女の子は、女性と言うより、少女といった方がいいだろう。緑の目はどこか怯えていて、まだ幼さを残した顔立ちだ。

僕はすぐ、ニツコリとした作り笑いを少女向ける。初対面の人には、この顔と、この角度と、この声色というのが、決まっているのだ。これをすれば、相手は僕を敵とは思わない。好意を抱く人さえいる。クローバーだけはなぜか引つかからなかったが…。

「お怪我はありませんか？」

「な、なによ……な、何か用事……私に……」

「……?」

話が噛み合わない。それに少女はどこか挙動不審だ。僕は微笑みながらも、少女をよく観察する。

目は泳ぎ、胸の前で、落ち着きなく指を絡ませている。声もどこか自信がないように震えていた。直感的に、嫌なものを感じる。この少女は何か悪いことを隠している。

しかし、隠しているからと言って、僕には関係のない話だ。詰めてよって追求する気はなかった。

そこにマーケットがある広場の方から

「この泥棒！待て!!」

と、クロバーの声が聞こえてくる。その声を聞いたのか、聞かなかったのかわからないが、僕が

「あ……待って下さい……!」

と止める前に、少女は路地裏へと逃げて行ってしまった。

少女が去った後、クロバーが駆けてくる。

「エル！荷物を盗られた!」

「え?!」

僕は目を丸くする。いつも隙がどこにもなさそうなクロバーが、窃盗に遭うなんて、思いもしなかった。

「大事なものを盗られた?」

「いや、もう売るはずだった読み終わった古本数冊だけだよ。」

僕はそれを聞いてホツとする。

「つい本を選ぶのに夢中になつてたら、袋に入れて足元に置いてた古本を、スツと誰かに持っていかれたんだ。すまん、油断した。」

クロバーはそういうと、珍しく申し訳なさそうに頭をかいた。不甲斐ない自分を反省しているのかもしれない。

「いいよ、別に。損害少ないし、気にしない、気にしない。」

僕はそう言うと、慰めるように、クロバーの頭をよしよしなでる。クロバーはすぐ、その手を不機嫌そうに振り払った。ガードが固い。

「こつちに誰かこなかったか?犯人っぽいやつが、駆けていったから追いかけてきたんだが……」

「うーん……挙動不審な女の子なら見たけど……。あつちに行ったよ。」

僕が路地裏を指すと、クローバーが進み出る。

「追いかける？」

「当たり前だ。この私から盗んだらどうなるか、思い知らせてやる。」

クローバーは怒りの炎を目に宿しながら、路地裏へと歩みを進めた。

第54話 許す者

僕は黙ってクロローバーのあとに続く。僕にはクロローバーのブレーキ役として、ついていかなければいけない義務がある。真っ直ぐ前を見て歩くクロローバーには、既に危険な怒りのオーラが、まわりついているように見えた。

僕は思わず笑ってしまう。こうやって思いっきり怒ったり、時に泣いたりできるクロローバーが、僕は愛おしくて、そして羨ましい。

「あ、彼女だよ。」

路地裏でうずくまる少女を発見した。

「あなた、私を追って……？」

少女は僕を見ると、一瞬怯えた表情をするが、すぐ目に力を入れ直し、敵意を見せる。

「出して……お金を……。」

少女はそう言うと、僕の前に手を差し出す。僕は首を傾げる。急に何を言い出すのだろうか。理解ができない。

「お前、何言ってるんだ？」

クロローバーも、あまりのことに、怒りを通り越して、呆れた顔をしている。

「あなた……持つてるでしょ、大金を。」

この少女は、中々度胸がある。窃盗犯の自分を追ってきた僕らから、お金を巻き上げようとするなんて、そんな馬鹿なこと普通の人ならしないだろう。僕らに勝てるくらいの戦闘能力があるか、何か素晴らしい策を考えているのか、そんな用意がなければ、無理な話だ。

僕とクロローバーは顔を見合わせる。クロローバーの目から、怒りは消えていた。今は戸惑いの方が大きいようだ。訝しげな顔で、首を傾げている。

「ねえ、死んで。」

戸惑う僕らに、少女がそう言う。ますます意味がわからない。

「お前、頭大丈夫か？」

さすがのクロローバーも、支離滅裂な少女を気味悪がっているよう

だ。若干引いたような目で少女を見ている。

「どうして、こんなことをするんです……？」

まともな答えが返ってくるとは期待していなかったが、とりあえず聞いてみる。

「どうして……？みんながみんな、あなたみたいに成功できるわけじゃない、冒険者として。」

少女は、そう言うと、目を伏せた。

「若い者は旅に出る、それが風習だとか言われ続けた。でも、行きたくなかった。私なんか魔物と戦えるわけがないじゃない。」

「魔物と戦って、そこで死んだとしても、冒険者ならまた復活する。それに、魔物と戦うだけが冒険者じゃない。」

クローバーが諭すように言う。珍しく落ち着いていた。人は自分よりもヤバそうな人を見ると、逆に冷静になれるものなのかもしれないなど、僕は思った。

「生き返るとしても……痛みがあるじゃない、怪我をすれば。死ぬほどの怪我ってどれだけの痛みなのよ。」

確かに、死ぬ時はそれなりに痛い。魔物との戦闘で、僕もクローバーも、それなりの回数倒れ、その度に肉体的な痛みは感じていた。刺されれば血が出るし、殴られれば苦しい。それでも、僕らは戦える。なぜ？と言われても困ってしまうが、僕らは、さほど痛みを恐怖を感じないというのが、一因ではあるだろう。クローバーは騎士として、そんな恐怖はとっくの昔に克服しているだろうし、僕も幼少期の虐待経験で、痛みを慣れてしまっていた。

それは普通の生活をしてきた少女からすれば、特別なことかもしれないが、クローバーの言う通り、魔物と戦うだけが冒険者ではない。冒険やり方は、無限にあるのだ。

「でも町には仕事がない。食いあぶれて、日々生活するのもままならない。」

「だから強盗を……？」

僕の問いかけに、少女は頷いた。

「そう……だから、死んで。」

「言ってることの意味がわからん。」

クローバーはうんざりしたようにつぶやくと、少女に背を向けた。もう話したくないらしい。同じ言葉を話しているのに、ここまで話が通じないのは、初めてだ。エナよりも酷いと思う。

「だから」って……どうしてですか？」

僕は何とか話を整理しようと試みる。

「殺すしかないじゃない……顔を見られたらからには。捕まるかもしれない、仕返しされるかも……。」

そんな話で「はい、わかりました」で死ぬ人が、どこにいるのだろうか。この少女はやはりどこかおかしいらしい。

「そうよ、私が悪いのは理解している。けど、こうしてしか生きることができない……。盗みなんかしたくなかった！悪いことなんかしないで、綺麗な自分でいたかった。でも、生きるためには、しょうがないんだ！」

クローバーの目が、ピクリと反応して、不快感を示していた。言い訳ばかりのこの少女に、イラついているのだろう。僕は先回りして、クローバーの肩に手を置き、落ち着くよう促す。

「時代が時代なら、私はもつと優しく生きれたのに……もう、戻れないの！」

「くだらねーな。」

クローバーが僕の手を振り払いながら言う。

「いつまでそうやって言い訳して生きる気だ。」

クローバーに睨まれた少女は、短く「ひっ」と悲鳴をあげる。

「お前本当は、自分が悪いなんて、1ミリも考えてないだろ？仕方ない、時代が悪いで、お前自身はなんの努力もしないで他人から奪う。それでいて偉そうにしている。気に食わねえなあ。」

クローバーはそう言うのと、腕組をする。手をあげる気はないようなので、僕は少しホッとす。

「もう言い訳はやめろ。考え直せ。お前はまだ戻れる。まだ誰も殺してねーんだろ？」

クローバーの意外な言葉に、僕は目を丸くする。いつものクロー

バーなら、とつくの昔に剣を抜き、切りかかってそうなのに、今日は率先して、少女を説得している。

「無理……もう無理なのよ。」

「私を殺るって言うなら、お前は私と戦うことになる。お前なんか2秒もあれば殺れる。弱そうだし。」

「このままだと、私を殺す……というの？」

少女は怯えた表情を見せる。

「クロ、どうするの？」

僕には、クローバーの思惑が見えない。いつもならさつきとぶん殴って放っておくような事案なのに、今日のクローバーはやけに少女に肩入れしているように思える。

「エル、私はテイルの借りを、ここで返したい。」

クローバーのその言葉に、僕は「ああ」と納得した。クローバーは意外に律儀な性格をしているのだ。

クローバーは、幼少期仕方なく野盗をしていたティルと、この少女を重ねていたようだ。ついこないだ、「あの頃は仕方なかった」と言ったティルに「同じような境遇でも、真つ当にいきてやつはいる」と説教してしまったことを、クローバーはずつと後悔していて、ティルに謝罪したあとも、まだ気にしていたのだ。

少女の境遇は、ティルよりもずつと程度が軽そうだが、似たようなものであるのは確かだった。クローバーは、ここで少女を許して、ティルへの説教の借りを返したいらしい。

「好きにするといいいよ。」

ティルはもうそんなこと気にしてないと、僕は思うが、クローバーが気になるなら仕方ない。これでクローバーの気持ちスツキリするのなら、それもいいだろう。

「もう二度とやらないって、約束しろ。それなら助けてやる。」

クローバーから慈悲を授かった少女は、泣き出した。

「うううっ……ごめんなさい……。見逃してくれなんて言わないわ……。お城でもどこへ連れてって……。罰は受ける……。」

「私たちのことはもういい。兵士に引き渡す気もねえよ。その代わ

り、盗んだものをみんなに返せ。」

「……………」

少女は涙を拭くと、コクンと頷いた。僕は、2人の様子をただ見守っていた。

本当にこれでいいのかわからない。ここで許したところで、少女は変わらないかもしれない。でもそれは、仕方がないことなのだ。そこに期待するのはやめた方がいい。今はとにかく、クローバーが少女を許したという事実が残ればそれでいい。

教会へ向かう少女に付き添うクローバーを、僕はチラリと見る。クローバーは、この旅で確かに変わっている。多分、それはいい事だと思は思う。僕も少しは変わっているかもしれない。少女は嫌がっているが、冒険者には、冒険者にしかできない体験がある。それが、自分を良い方向に変えてくれる。

だから冒険は楽しいのだ。

第55話 ポーラの旅立ち

教会に着くと、少女は神父のクリフに懺悔する。

「私はポーラ。盗みをしてしまいました。すべて返します。だから、許して下さい。」

ポーラと名乗った少女は、どこかオドオドしていて、私はイライラを抑えるのに苦労していた。こういうはつきりしないで、いつまでもグズグズいうやつは、大嫌いなのだ。

こんなやつ、いつもならさっさとぶん殴って、放っておくところなのに、私は彼女を許し、償いの手伝いまでしていた。自分でも、なぜそこまでするのか不思議だった。

脳裏によぎるのは、怒りに燃えたテイルの姿だ。あの時、胸ぐらを掴まれた私は、何も言い返すことができなかった。

私は確かに、恵まれていた方だったかもしれない。衣食住の保証はされていたし、それなりの贅沢もできた。しつかりとした教育も受けさせてもらい、生きていく上での不自由は、何一つなかった。

「(でも……)」

そう、『でも』なのだ。

「もうさんざん言われているかもしれないが……。あなたの年頃なら、皆、旅に出る頃なのだ。」

クリフがポーラを、諭すように言う。

私が、このポーラという少女を助けることに、さほど意味はない。私はただ、テイルの気持ちも考えず、偉そうな口を叩いてしまったことへの償いに、彼女を利用するだけだ。助けたあと、ポーラがどうなるうが、知ったことではないと思っていた。

「嫌……生きているのがつらくなつた時、死ねばいいと思うからがんばれるんです。死ねなくなるのは、絶対、嫌……。」

「死は最後の救済ですからねえ。」

エルサイスが他人事のように呟く。中々深い言葉だと思う。

ポーラの言い分はわかる。どんな悲惨な人生を送っている人も、また、どんな輝かしい人生を送っている人も、最後は死ぬ。死は絶対で

平等に訪れる、最終の救済なのだ。

「いくら嫌だと言っても、それが神の運命づけた、人間のとるべき道。」
クリフが強い口調で言う。

私は、この旅に出る風習の意味が、未だによくわからない。神の意思とか、国民の義務とか、色々理由はあるが、結局『昔からそうだから』という説明しか、なされていなかった。

私やエルサイスは、好き好んで冒険者を生業にしているが、ポーラのように、冒険を拒む者もいっぱいいるのだ。そんな人達まで、冒険者にする意味があるのか、私にはさっぱりわからない。

「それに万が一、神が許したとしても、盗みを犯した町で、今後暮らすのは難しかろう。」

クリフはそう言うのと、ポーラの肩に手を置き、その目を真っ直ぐ見つめる。

「旅に出なさい。それが神の意思です。」

「それが罪の償いということなのです……。」

ポーラはそう目に涙をいっばいにためながら、クリフを見つめ返す。クリフは深く頷いた。

「では、あなたに冒険の洗礼を与えよう。」

クリフがポーラに洗礼を施すのを、私は複雑な気持ちで見ている。このモヤモヤした気持ちがなんなのか、自分でもわからない。

「神よ、かの生きる希望に満ち、だがしかし、か弱く浅はかな若き者たちに旅の加護を与えよ。」

教会中にクリフ朗々とした声が響く。

「高くそびえる山も、厄災を帯びた敵も、畏れる必要のない、強き力をここに。」

モヤモヤの答えが出ないまま、洗礼は終わり、ポーラが顔を上げる。

「さあ、行きなさい。」

「はい。」

ポーラはそう返事をする、堪えきれないように泣き出した。グズグズ泣くポーラに、私はうんざりする。本当に、一発殴ってやりたい気分だ。

ポーラは泣きながら教会の出口へ向かう。私たちに感謝を述べるどころか、挨拶すらなかった。別にそれを期待していたわけではなかったが、礼儀としてあるべきものがないと、不快にならずにはいられない。

パタンと扉が閉まる音がして、ポーラの背中が見えなくなると、私は大きなため息をついた。

「お疲れ様。」

エルサイスが私の肩に手を置き、労ってくれる。

「疲れたよ……。」

「なんか甘いものでも食べに行こうか?」

私にとって、感情を抑えるという行為は、脳の消耗が最も激しいのだ。腕立てを100回するよりも疲れる。

「チョコレートケーキが食べたい。」

私がそう言うと、エルサイスは

「ブドウ糖がダイレクトに取れるね。」

と言って笑った。

教会を出た私たちは、公国の酒場へ向かう。

途中ポーラの姿は見当たらなかった。もう町を出たのだろう。

彼女を許したところで、私の気持ちはまったく晴れなかった。それどころか、モヤモヤが増えた気さえする。

「浮かない顔してるね。」

ため息をつく私に、エルサイスが言う。

「なんかモヤモヤするんだ。私はテイルや、ポーラに比べれば、確かに恵まれていたかもしれない。でも……でもなんだよ。」

口に出して呟いて見たが、その先の思考は真つ暗になっていて、これ以上言葉を紡ぐのは無理そうだった。

ポーラを許せば『でも』と思ったことと答えが出ると思っていたのに、ますますわからなくなっていた。

『『でも』か……』

エルサイスはそう呟きながら、酒場のドアを開ける。

脳が疲れて死んでいるような状態で考えたって、何も出てこないの

は当たり前だ。私はすべての思考を、一度、頭の隅に追いやって、今は甘い物を取ることにだけに集中する。

全部はチョコレートケーキを食べたあとに考えればいい事なのだ。

第56話 『でも…』の続き

チョコレートケーキを口いっぱい頬張るクローバーを見ながら、僕はコーヒーを飲んでいた。

「口、ついてるよ。」

僕がそう指摘すると、クローバーは口元についたクリームを親指で拭いて、ペロリと舐める。何だかセクシーだな、なんて思う。

公国の酒場はお昼のピークタイムを過ぎても賑わっていた。本都市との相乗効果があるのか、冒険者だけでなく、一般客も比較的多くいて、いつもよりも騒がしい。

僕はコーヒーの香りを楽しみながら、クローバーが言った『でも』の先について考えていた。

死というゴールは絶対で平等だが、生は違う。人は生まれながらにスタート地点が違っているのだ。そのスタート地点が、厳しく、険しい人もいる。テイルや、ポーラのように。

そこでくるのが、クローバーの言った『でも…』なのだ。

『でも』僕やクローバーが、彼らに比べて、楽で簡単なスタート地点だったという訳では無い。確かにお金もあつたし、衣食住の保証もあり、それなりに恵まれていたかもしれないが、僕もクローバーも、それとは別の困難を、多く抱えていた。

「ねえ？クロー？」

「ん？」

「クロは、自分が他人より不幸だとか、恵まれてないとか、そう思ったことがある？」

クローバーはケーキを口に含みながら、「うーん」首を傾げる。

「あんまりないかなあ……。誰かを羨んだり、妬んだり、月並みにあるけどさ、それと比べて自分は不幸なんて思うのは、なんか違う気がするし。」

僕はその言葉に「うん」と頷く。

どつちがより苦しいとか、どつちがより大変だとか、そういう比較に意味は無い。人はそれぞれ、ある程度の困難を抱えていて、そこに

優劣はつけられないものなのだ。

「クローバーの『でも…』の先はさ。結局それじゃないかな?」
「どれ?」

「ポーラさんは厳しい生まれだった。僕らはそれに比べれば恵まれていたかもしれない。『でも』、僕らには、僕らの辛さがある。その辛さは、誰かの辛さと比べて、軽いつか重いつか、比較できるものじゃないんだよ。」

ポーラが不幸だからといって、僕らが幸福だった訳では無い。そこに因果関係はないのだ。

「うーん…:ちよつと近いかも。なんかさ、なんとなく、楽だろ? って言われてるような気がしてたんだよ。そうじゃなくても、私が恵まれていることと、彼女が恵まれてないことは、関係ない。そんなん知るか。なんだよ。」

クローバーはそう言いながら、チョコレートケーキを3分の1ほど残したまま、フォークを置く。

「食べないの?」
「お腹いっぱい。」

クローバーは本当に少食で困る。こんな美味しいスイーツすら入らないなんて、普通なら考えられない。

「関係ないのに、勝手に羨まれて、それを理由に慈悲だとか、許しを請われて、応えなきゃいけないのが、納得いかない。」

クローバーがケーキの入ったお皿を遠ざけながら言う。本当にもう食べないらしい。

「エル、私はさ、多分、誰か許すのが苦手なんだ。」
クローバーの言葉に、僕はケーキの残ったお皿から顔を上げ、彼女を見つめた。

「私が許されたことが無かったから、誰かを許すと、許されなかった時の自分が、心の中で騒ぎ出す。それでモヤモヤするんだよ。」

それが、クローバーの答えだった。

「クロ、そのモヤモヤは大事なことだよ。無視しちゃダメだ。」

自分の心の声を無視し続けると、取り返しをつかなくなる。

僕はそれをよく知っていた。僕自身がそうやって、もう戻れなくなっ
てしまっていたからだ。

「クロには、ポーラさんを許さなきゃいけない義務も、責任も無かつ
た。」

あそこでポーラを断罪したって、あの時テイルに言い返したって、
それは悪いことではないのだ。ただ、それを『しなかった』ことを選
択には、大いなる意味があるだろう。

「クロがしたことは、特別なことだと僕は思う。でも、自分の心を無視
して、無理にやる必要はないんだよ。」

「そうかあ……。」

クローバーは僕の言葉の余韻を噛み締めるように、目を閉じた。ど
こかすつきりしたような顔をしているようにも見えて、僕は少し安心
する。

しばらく沈黙。

口を閉ざすと、周りの喧騒がより大きく聞こえる。カランコロンと
酒場のドアについているベルの音が聞こえたので、僕はなんとなくそ
ちらを見た。

「あ、テイルさん。」

僕が手をあげて呼び止めると、テイルの横からソラが飛び出してき
て、クローバーに駆け寄り、思い切り抱きつく。

「くーちゃん！」

「ソラちゃん！元気だった？」

クローバーはソラが抱きついた反動で椅子から落ちそうになりな
がらも、ソラを優しく抱きしめ返す。ソラは嬉しそうにクローバーの
胸に顔をうずめながら「うんうん」と頷いて返事をした。

「よお。」

あとからきたテイルは、そう短く挨拶をすると、僕の隣に腰を下ろ
した。

「ソラさんすっかりクロに夢中ですね。」

笑いながら僕がそう言う

「困ったもんだよ。しよつちゆう「くーちゃんがね」って話を聞かされ

る。」

と、テイルが呆れたため息をつく。

クローバーが、余ったチョコレートケーキをソラちゃんにアーンしている隙に

「ソラちゃんの様子はどうですか？」

と、小さな声でテイルに尋ねる。

「一時期に比べれば、随分良くなった。かなり安定してるよ。まだ時々悪夢にうなされることはあるみたいだけどな。」

先日、ソラは誘拐事件に巻き込まれ、心に深い傷を負ってしまった。でも、今は随分元気そうに見える。

「何かあったらいつでも言ってくださいね。すぐクロが駆けつけますよ。」

「くーちゃん、だーい好きです！」

僕の言葉に、ソラが嬉しそうに笑う。テイルは困ったように頭を抱え

「このままだとクローバーを『お姉ちゃん』とか呼びそうで怖い……。兄貴の俺の立場があああ!!」

と、叫んだ。僕はそんなテイルがおかしくて、笑った。

ソラのジュースが届くと、クローバーはソラを誘って2階の席へ移動する。そうやって、時々2人きりで話して、ソラの経過を見ているのだ。

「くーちゃんあのね、こないだテイルがね……」

クローバーに連れられて、2階への階段を登るソラの姿を、テイルが不安そうに見つめる。

「ソラちゃんおしゃべりだから、すぐ俺の失敗とか、見られたくないところを、あいつに話しちゃうんだよなあ……。」

てつきりソラの心配をしていると思っていたのに、テイルは自分の心配をしていた。そんな姿に、僕は安心する。それくらいの余裕が出てきたと言うことだ。

僕とテイルは、向かい合わせに座り直すと、それぞれ飲み物を飲む。

「テイルさん、クロの話をもつ、聞いてくれますか？」

「なんだよ、藪から棒に。」

僕は、ポーラを許したクローバーの話をした。それは元々、テイルへの罪滅ぼしのためにやったことだ。それをテイルにそれ伝えるのは、恩着せがましいかもしれないが、クローバーの気持ちが伝われば、また何か変わるかもしれない。

「珍しいことするじゃねーか。」

テイルがグラスに入ったサイダーを飲みながら言う。

「明日は槍が降るかもな。」

「それくらい後悔してるってことですよ。」

「あいつは正論を言ったまでだ。」

「正論で人が動いたら、苦労しないんですよ。」

僕がお決まりの言葉を言う。

「それもわかる。俺は正論ばっか言うやつが嫌いなんだ。正論じゃどうにもできねー人生歩んできてるから。」

正しい道を知っていても、そこに辿りつくには、本人の努力だけでなく、周りの環境も必要だ。

やりたくても、できない、いくつもの障害が、テイルにはあったのだろう。

一方クローバーは、正しい道に行くのが当たり前で、周りの環境が整ってなくても、自分の努力のみで辿りつくように言われてきたのだ。できないなんていうことは、許されなかった。

どちらも、苦しい事情があった。だからこそ、どっちが正しいとか、正解とか、そういうものはないのだ。

僕が2杯目のコーヒーに口をつけていると、テイルが思いついたように話し出す。

「なにもさ、他人の人生の苦労とか、幸せとか、気にする必要なんてねーんだよ。それがわかったところで、自分がどうこうなるわけじゃねーし。」

そこでテイルは人差し指を立て

「人生はポーカージョーゲームのようだ。」

と、得意そうに言う。

「なんだか素敵な響きですね。」

僕が気のない返事をする。

「適当なこと言ってるなーって思ってるだろ？」

「思ってます。」

「お前さあ、なんで俺には馬鹿正直なんだよ。他のやつの機嫌は、嘘でもとるくせに。」

「だってテイルさん、そういうの好きじゃないでしょ？」

「確かに嫌いだけど、なんかもつと他に言い方あるだろ。」

拗ねるテイルを見て、僕は笑う。

クローバーとテイルは、まったく違う人生を歩んでいるが、なぜか性格は似ているように思う。

「ポーカーゲームですかあ……。」

ひとしきり笑ったあと、僕はそうつぶやいた。響きは素敵だ。

テイルがその意味について、話し出したので、僕は耳を傾ける。とても興味深い内容だった。今度クローバーにも話してあげたい。

「この話、テイルさんが考えたんです？」

「いや、受け売りだよ。」

全部話してすつきりしたのでだろう。テイルは満足気な表情で、サイダーを飲んでいる。そこにクローバーとソラが帰ってくる。

「ただいま！テイル？なんかいいことでもあったの？」

どこかすつきりした表情のテイルを見て、ソラが言う。

「なんでもないよ。ソラちゃん、そろそろ行こうか？欲しい本が、売り切れちゃうよ。」

「うん！くーちゃんまたお願いします！エルさんもありがとうございしました！」

「じゃあ、またな。」

そう言つて2人は、酒場を出ていった。

「お疲れ様。ソラさんはどう？」

2人の背中を見送ったあと、僕がクローバーに聞く。

「大分いいよ。まだ油断はできないけど。」

クローバーはそう言うのと、すっかり冷めた紅茶を飲み干した。

「ポーラさんのこと、テイルさんに話したよ。」

「お前、余計なこと言うなよ。」

クローバーが眉間にシワを寄せる。

「明日は槍が降るかもな」って言った。」

僕がそう言っただけで笑うと、クローバーがうんざりした顔をする。

「もう二度とやらねーよ。あれは気の迷いだ。」

クローバーはそう言いながら、荷物をまとめて、出発の準備をする。

僕はウエイトレス呼び止め、お会計をすませる。

「柄にもないことするもんじゃないな。」

「悪くないことだと、僕は思うけど。」

僕の言葉を遮るように、クローバーが手を振る。

「ないない。私らしくない。次同じようなことあったら、間違いなくぶん殴るわ。」

「暴力沙汰は困るなあ。まあもう同じようなことが起こらないことを願うよ。」

そんな僕の願いは虚しく、同じようなことは起こってしまうのだが、この時の僕は、まだそれを知らなかった。

番外編く Ayami の取り扱い方 その1く

戦況は悪い。

RyuのHPは半分ほどで、AyamiのHPは3分の1を切っている。

「あやみん、下がって。」

Ryuは早撃ちを使って、クールタイムを短縮すると、連続でスキルを使い、Ayamiからヘイトを奪う。

「うるさいなあ！余計なことしないで！」

Ayamiはそう言い返しながらも、後ろに下がってプネウマで自身を回復をする。その回復量は微々たるもので、正に焼け石に水、今の戦況を変える力はまったくくない。

コノミグランマ特効武器、聖なる武器シリーズのラファエルブレイドを握り直しながら、Ayamiは自分の前に立つパートナーの後ろ姿を見つめていた。矢を放つ反動で、コバルトブルーの長髪がふわりと揺れ、その隙間から、敵を睨みつける黒い瞳が見える。真剣な眼差しに、Ayamiは思わず見惚れてしまった。

コノミグランマが炎を吐く。

「あっちい!!」

「あっつー！」

2人は同時に悲鳴をあげた。

「くう……。」

Ayamiは呻きながら、膝をつく。2人とも、HPがもうほとんどない。

「あっいえんじょー(熱い炎上)であっいえんじょ(手厚い援助)がほしいなあ！」

こんな時に親父ギャグを飛ばすRyuに、Ayamiは呆れたため息をついた。

「(かつこいいとおもったのになあ……。)」

AyamiとRyuは、コノミグランマの『初級』を周回してきたのだが、何を間違ったのか『中級』に入ってしまった。気がついたの

は、戦闘が始まったあとで、もうどうにもできない状況だったため、仕方なく戦ったのだが、この有り様だ。コノミグランマのHPは8割以上残っているのに、2人のHPはもう瀕死の域にきていた。

「あー、これ教会送りかも…。」

Ayamiが諦めかけたその時

「あれ？あやみんじゃーん。何してんの？」

「ほんとだ！あやみーん！」

「瀕死じゃないですか。大丈夫ですか？」

「すぐ回復します。」

Ayamiが所属するボンド『シルフィード』のメンバーが続々と戦闘に乱入してきた。

クローバーと、そのパートナーのエルサイス、にもと、そのパートナーもふの4人が、戦闘に加わる。

「本当に手厚い援助がきた！」

Ryuが目を丸くして驚きながら言う。

「親父ギャグは絶対に関係ない。」

Ayamiは冷たくそう返しながらも、内心は安堵していた。教会送りにならなくて済みそうだ。

「クロ、ヘイト取って。回復は僕がします。にもさんはバフ優先で、もふさんは最大火力でどうぞ。」

エルサイスが素早い指示を飛ばす。

「がってんしうちー！」

「はーい！」

「了解です！」

クローバーがフォアフロントでヘイトを集めると、にもがメンテナンスで攻撃低下のデバフを解除し、もふがライトニングアローでダメージを与える。滑らかな連携だ。

「とりあえずお2人はクロがヘイトを取るまで下がっててください。すぐ回復します。」

エルサイスがアルカナを唱えると、AyamiとRyuのHPが半分ほどまで回復する。

さつきまでかなり厳しい戦いをしていたのが嘘のように、戦況はあつという間に好転した。

「よかった、よかった。」

そう安堵しているRyuに、Ayamiは

「よくない！危うく死ぬところだったんだからね。」

と、つい厳しい言葉を返してしまう。

そんなやり取りをしている間にも、コノミグランマのHPはガリガリ削られていく。クローバーがヘイトを奪うと、AyamiもRyuも戦闘に参加し、そのスピードをさらに早める。

6人が勝利を掴むのに、それほど時間はかからなかった。

「ありがとうございます！」

「本当に助かりました！」

戦闘が終わると、AyamiとRyuが口々にお礼を述べ、深々と頭を下げる。

「別にいいよ。偶然だし。」

「そうそう、ホント偶然でびっくりした。」

クローバーにもは、顔を見合わせ「ねー」と頷き合う。

「さすがに2人で中級は無謀ですよ。」

「間違えたんじゃないですか？」

もふの推察に、Ayamiが頷く。

「りゆうが間違えたんですよ。」

「え？俺?!先に入ったのあやみんだろ？」

「うるさい！りゆうが間違えたの！」

言い返されたRyuは不満げに頭をかいた。

「まあまあ、落ち着いて。僕たちはこのまま中級周回しますけど、ご一緒はいかがですか？」

エルサイスがAyamiをなだめながら、そう誘うと、AyamiとRyuが

「是非お願いします！」

と同時に返事する。思わぬシンクロに、みんな笑った。Ayami

だけが

「もう！マネしなでよー！」

と不機嫌そうに頬を膨らませていた。

エルサイスが、それぞれの役割について軽く説明したあと、6人は周回を始める。

中々賑やかな戦闘だった。

基本的に、にもがずつとしゃべり倒していて、もふとエルサイスが、その話に交互に合図打ちを打つ。クローバーは戦闘に集中しているようで、言葉少なめだが、時々、にもものんでもない発言に笑ったり、エルサイスの指摘に反論したりで、みんなそれなりに楽しみながら戦ってる。

AyamiやRyuも、さつきまでとは正反対の、ゆつたりとした気持ちで、時々会話に参加しながら、戦闘を楽しんでいた。

Ayamiは、弓を構えながら、にもの話に笑うRyuの横顔を見ていた。真剣な眼差しもかっこいいが、こうしてリラックスしている顔も素敵だ。そんなことを考えながら、つつい彼を目で追ってしま

う。
軽く微笑みながら、コノミグランマにライトニングアローを放つRyuに、Ayamiが見惚れていると、ふと、目が合ってしまった。Ryuは一瞬キョトンとした顔をして、戸惑ったようにぎこちない笑みを浮かべる。Ayamiは思わず

「よそ見してないで、さつきと攻撃しなさいよー！」

と、強い口調で言ってしまう。その言葉を聞いたRyuは

「よそ見、細身、あやみーん。」

などと、くだらないギャグを飛ばす。

「なんだ、りゆう、よそ見してあやみんを誘惑とは、随分余裕だなあ。私と壁役変わるか？」

そう愉快そうに笑うクローバーに、Ryuは困ったような苦笑いを返す。Ayamiは複雑な思いで、それを見ていた。

AyamiはRyuが好きだった。

冒険者になったAyamiは、1人連邦の酒場で小さな依頼をコツ

コツこなして稼いでいた。そこに現れたのが、Ryuだ。初めてRyuを見た時、Ayamiはその姿に一目惚れしてしまい、彼が受けた依頼を手伝い、近づいた。そうやって何度も一緒に冒険をするうちに、AyamiはますますRyuを好きになり、RyuもAyamiに惹かれるようになっていったのだ。

そうやって、お互い好きはずなのに、2人の関係はなぜか上手くいかない。

Ayamiはその原因が自分にあるとわかっていたが、それでも言動を改められない自分がいて、にっちもさっちもいなくなっていた。

「あやみーん？大丈夫？」

曇りがちな顔をしていたAyamiに、にもが声をかけた。

「疲れましたか？」

もふがラピットショットを放ちながら、Ayamiをチラリと見る。

「そろそろ終わりにしましょうか？」

「私お風呂入りたーい。」

エルサイスの言葉に、クローバーが額の汗を拭いながら返す。

「じゃあ、これ倒したら終わりにして、城塞都市まで戻りましょう。」

エルサイスがそう言うと、みんな口々に「はーい」と返事をする。

「もうすぐだ。頑張ろう。」

RyuがAyamiを励ます。Ayamiはその気遣いが嬉しくて、そして恥ずかしくて、腹立たしい。

Ayamiは照れてしまうのを隠すように、ラファエルブレイドを振りかざし、コノミグランマにトドメをさした。

番外編く Ayami の取り扱い方 その2く

「あやみん胸けっこうあるのね。」

「きやつ！にもしゅん!?何を!?!」

「コラー！揉むな。」

クローバー、にも、Ayami の3人は、連邦の宿の小さなバスルームにぎゅうぎゅう詰めになりながら、一緒にお風呂に入っていた。

城塞都市の宿屋は、混雑していて、3組分の泊まる部屋はなんとか取れたのだが、その中でバスルームがついている大きな部屋は1つしか取れなかった。仕方ないので、女子3人は無理やり一緒にお風呂に入ることにしたのだ。

「ねえねえ！洗いっこしようよ!」

「えー…。絶対自分でやった方が早い。」

そんなクローバーとにももの言い合いを、Ayami は呆気に取られて見ていた。

「2人はよく一緒にお風呂に入るんです?」

Ayami が戸惑いを隠せない様子で言う。

「時々ね。」

「うん、そんなに多くはないけど。一緒に入ると楽しいよ!」

家族以外の人と一緒に風呂に入った経験がない Ayami は、裸が恥ずかしいし、どうしたらいいのかわからないので、混乱していた。

「あやみん、おいで。髪洗ってあげる。」

クローバーにそう手を差し出された、Ayami は、恐る恐る、その手を取った。クローバーは自分の前に Ayami を座らせ、彼女のアップルグリーンのツインテールを優しく解くと、丁寧に洗い始める。

「(ちよつと気持ちいいかも……。)」

最初は緊張でガチガチだった Ayami もだんだんリラククスしてきた。なんだかとても心地がいい。

「ほい、流すよ。」

そう言われ、Ayami はぎゅつと目を瞑る。頭をシャワーで流し

てもらいながら

「私も姉御に洗ってもらいたーい。」

「後で、順番ね。」

という2人の会話を聞いていた。

「はい、にもちやんと交代!」

「あ、ありがとうございます。」

Ayamiは戸惑いながらもお礼を述べると、にもと交代して湯船に浸かる。湯船はちょうどいい温度で、Ayamiは思わず「ふー」とため息をもらした。

「ねえねえ!あやみんはさ、りゅうさんのことどう思ってるの?」

にももの突然の不意打ちに、Ayamiはキョトンとしてしまう。

「りゅうはあやみんのこと好きっぽいけど、あやみんはそうでも無さそうだよね。」

クローバーがにもの髪を、シャンプーの泡でもこもこにしながら言う。

「迷惑なら、私がりゅうに腹パンしとこうか?」

「姉御の腹パンはトラウマレベルって、もふが言ってたよ。」

「えっ?!あっ!ち、違います!私、りゅうが好きなんです!」

クローバーの腹パン発言に焦ったAyamiは、思わずそう口に出してしまい、顔を真っ赤にして俯く。それを見たにもは、ヒューと口笛を吹いて

「熱いねえー。」

と、はやし立てた。

「にもちやん、からかわないの。流すよ。」

ぎゅつと目を瞑ったにもに、クローバーがシャワーをかける。

「あやみんが、りゅうを拒否してる感じがあったから、嫌がってるのかと思ってた。」

「違うんです。なんか……こう……恥ずかしくて、つい冷たくしちゃうんです。」

Ayamiはそう言うと、表情を曇らせる。ずっとこのままではないけないと、いつか嫌われてしまうと、Ayamiは思っていた。

でも、これはRyuが好きで、好きすぎるからこそ、やってしまうのだ。

「なんかこう、キュンとくる仕草とか、言葉とか言われると、わっ！ってなっちゃって……。」

そうやって感情が混乱を起こし、つい天邪鬼なことを言ってしまうのだ。

「それちよつとわかるなあ……。不意打ち食らうと、すげムカつく。」

クローバーが理解を示したので、Ayamiはちよつと嬉しくなる。

「私はわからないなあー。好きな人にそういうことされたら、嬉しいじゃん！ やったー！ ってならないの？ 姉御、交代。」

にもはそう言うのと、クローバーの髪シャワーをかけ、洗い始める。「嬉しいの限界を超えて、腹立たしくなる感じです。」

「理不尽だねえー。」
にもにそう返されたAyamiは、ぐうの音も出ない。

「クロロンは、どうしてるんですか？ エルさんと。」

Ayamiは自分と近そうなクローバーの意見を参考にしたかった。

「え？ 私？ どうもしないよ。そもそも私は、そういうことされてあんまり嬉しくないし。恥ずかしい、腹立たしい以外の感情はないかなー。」

意外な答えにAyamiは驚く。

「えええ！？」

「なんでー？！」

「だって、別にエルが好きじゃないから。」

クローバーとエルサイスは、なんだかんだいいながらも、好き合つてと思っていたAyamiは、クローバーの言葉に混乱する。

でも、よく考えれば、にももの話も、クローバーの話も、どちらも一貫性があった。にもは好きだから、嬉しい。クローバーは好きではないから、腹立たしい。矛盾しているのはAyamiだけだ。なぜか、

好きなのに、腹立たしい。

「あやみんは照れ屋なんだね。」

「でも、それをりゆうさんはわかっているんでしょ?」

「うーん……。多分わかっているとと思いますけど……。」

あまりはつきり答えられる自信がA y a m iにはない。

「あんまり冷たくしてたら、いつか嫌われちゃうんじゃないかって……。」

A y a m iはそう言うと、今にも泣きだしそうな顔をする。

「うーん……。素直になればいいんじゃない?」

にもがクローバーの髪をシャワーで流しながら言う。

「好きなら好きって伝えないと。嬉しいときは、嬉しいって言えばいいんだよ。」

にもが言っていることは、至極当然なことで、なんら難しいことではない。でも、A y a m iにとっては、とてつもなくハードルが高い。

「うーん……。」

A y a m iが悩んでいると

「好きが、恥ずかしいを超えればいいんじゃない?」

と、まだ泡まみれのクローバーが言う。

「もう恥ずかしいとか言ってられない!みたいな感じですか?」

「そうそつ……。うっ……。シャンプーが目……。」

クローバーはにもからシャワーを受け取ると、自分で流し始める。

「好きが、恥ずかしいを超える……。」

そう繰り返し呟くA y a m iの隣に、にもが入ってくる。

「素直になりなよ。」

さらに、逆隣にクローバーが入ってくる。

「素直になると楽だよ。」

2人に挟まれ励まされたA y a m iは、なんだか嬉しくなって、元気が出てきた。

「頑張ります!」

A y a m iはそう言うと、ガッツポーズを作った。

番外編く Ayami の取り扱い方 その3く

エルサイス、もふ、Ryuの3人は、このままいけば、3人で1樽空けられるのではないかと思うようなペースで、ビールを飲んでいった。

「遅いですねえ。」

もふがアルコールで、白い頬をほんの少しだけ赤く染めながら言う。

「3人一緒にお風呂に入るって言ってましたから、そんなにかからないうちと思っんですけど……。」

エルサイスは表向きはまったく変化はないが、どこか気分が高揚して、上機嫌だ。

「一緒に入ったら狭くて大変そうですね。」

Ryuはどれだけ飲んでも、まったく変化がない。3人の中で、1番酒豪そうだ。

「一緒に入るとか……きつと洗いつことかするんでしょうね……。」

「えっ!?! 洗いつこと!?!」

もふの発言を想像してしまったRyuは、思わず頬を染める。

「あー、それ見たいですねー。僕、バスルームの壁になりたいです。」

エルサイスが、とんでもないことを口に出す。

「お2人とも意外ですね。もつと真面目でお堅い方かと思っていました。」

Ryuがそう言うと、エルサイスともふは「ふふっ」と笑った。

「俺らも、健全な男ですからね。つい、こんな話も出ちやいますよ。」

「レディの前ではできませんが……。」

2人はそう言うと、ウェイトレスが持ってきたゲルミアヒージョを仲良くつつく。Ryuは2人の返答に笑うと、ジョッキを飲み干し、次の1杯を追加で注文した。

「あの……。」

次のビールがくるまでの間に、Ryuが躊躇いがちに話し出す。

「はい?。」

「その……。」

エルサイスともふは顔を見合わせ、首を傾げる。

「なんでもどうぞ。」

エルサイスが先を促すと、Ryuは大きく息を吸って

「あやみんのことを相談させていただきたくて……。」

と、言った。

「ほうほう。」

もふがクロケットを口に放り込みながら合図打ちを打つ。

「あやみんと、クローバーさんは、似たタイプだと思うんですけど……。どう思われますか？」

「ツンツンしてるところですか？」

エルサイスが、すんなり返す。

「そ、そうです！」

Ryuは大きく「うんうん」と頷く。

「僕もさつき、エリアボス周回しながら、そう思ってたんですよ。」

エルサイスが、口に手を当てながら考える。

「Ayamiは俺のこと好きはずなんですけど、俺が優しくすると、なぜか冷たくしてくるんですよ。」

「本当は嫌われてるんじゃない……。」

もふが不吉なことを言う。

「でも、好きって告白してきたのはあやみんの方なんですよ？」

「そうなんですか？」

もふは首を傾げる。Ayamiの態度は傍から見れば、Ryuを拒否しているように見える。でも、本当に拒否しているなら、告白なんてしないだろう。

「ツンデレってやつですかね？」

「単に恥ずかしがってるだけかも。」

エルサイスともふが、それぞれ考察を述べる。

「エル殿は、どうしているんです？」

「僕じゃ参考にならないですよ。」

「そもそもクローバーさんはデレないですからね。本気で嫌がってる

んで。」

もふの言葉に、エルサイスは落ち込む様子なく、むしろそれを楽しむように笑い飛ばす。

「クロと、あやみさんは、根本的に違うんです。クロは僕を好きじゃない。あやみさんはりゆうさんを好き。でも、好きなら、大丈夫です。きつと気持ちはちゃんと伝わってますよ。」

エルサイスはそう言うと、ニツコリ微笑む。Ryuは納得のいかな顔で「うーん」と唸っていた。

「あやみさんは、照れ屋なだけですよ。」

もふがそう言うと、隣でエルサイスが「うんうん」頷く。

「では、俺はどうすれば?」

Ryuが途方に暮れたような声を出す。

「うーん……。」

3人同時に考える。

「押しだめなら、引いてみます?」

もふがいたずらっぽく笑いながら言う。

「あやみが、そういう駆け引きに耐えられる気がしないです。」

Ryuが苦い顔を返す。

「もつと単純なのがいいですよ。根本は違いますけど、クロと似たタイプであるのは確かですからね。」

「じゃあもつと押ししてみるとか、どうです?」

もふが妙案を思いついたというように、目を光らせながら言う。

「ふむ、それ、いいですねえ。」

エルサイスも同意する。

「かっこよく、バンつと決めちゃいましょう!」

「バンつとかっこよく?バン……バン……バン……番茶。」

Ryuの返しに、もふは呆れたように首をガクツとし、エルサイスは苦笑いを返す。

「それ、やめた方がいいですよ。」

もふの注意に、Ryuは困ったように眉を下げる。

「無意識なんですよねえ……。」

この親父ギャグは、特に意味がある訳では無い。笑いを取りたいとか、照れ隠しとか、そういう意図は一切ないのだ。ただ本当に、純粹に、思いついたら口に出さずにはいられなくなる、病気のようなものなのだ。

「うーん……。今夜は、それ封印して下さい。代わりに、宿に着いたらこう言うんですよ。」

もふがそう言いながら、声を低くしたので、3人は額を寄せ合って話し合う。

「上手くいきますかね?」

話し合いが終わると、Ryuが不安そうに漏らす。

「信じるんですよ。」

「何を?」

「2人の好きって気持ち。」

エルサイスは、そう言って笑った。

Ryuは、Ayamiが好きだ。だからこそ、どれだけ冷たくされても、Ryuは気にしなかつたし、Ayamiも本心では自分を好いてくれているはずだと思っていた。自分のAyamiが好きな気持ちと、Ayamiの本心、この2つを、どれだけ信じられるのか、Ryuは今、試されているのだ。

「おい、お前ら、どれだけ飲めば気が済むんだ。」

石鹸のいい香りを振りまきながら、クローバーが3人に伝票を突きつける。その後ろには、同じ香りのにもとAyamiがいる。

「もふ、あのね、姉御に髪洗ってもらった!」

にもは嬉しそうにそう言いながら、もふ隣に腰を下ろすと、その肩に顔を埋めグリグリする。

「よかったねえ。いい香りがするよ。」

もふはそう言いながら、にもの頭を優しく抱き、スンスンと鼻を鳴らす。

さすがの甘え上手に、Ayamiは目を丸くして驚いた。こんな自然イチャイチャできるにもは、自分とは次元の違う世界を生きてるのではないかとすら思う。

「お前、この飲み代分、1人で炭坑行って、レンガ掘りして稼げよ。」
クローバーがエルサイスの隣に座りながら言う。

「ピツケル500個分な。」

「さすがにそれは辛いなあ。」

エルサイスは、クローバーの言葉を本気にしていないのか、笑いながら応える。

「おかえり、あやみん。」

「あ、うん。」

Ryuに促され、Ayamiは席につく。Ayamiが動く度、ふわりと広がる石鹸の香りに、Ryuは年甲斐もなくドキドキしてしまっていた。少し酔っているのかもしれない。

「どうしたの?」

「あ、いや、なんでもない。何か飲む?」

香りにぼーっとしていたRyuは頭を振ると、Ayamiにメニューを渡す。

「ビールでいいよ。」

Ayamiはそれを素っ気なく手で制する。クローバーと、にもには「頑張る」と言ったものの、どうしたらいいのかわからない。

そんな2人がまごまごしている間にも、夕げは進む。

「ほら、クロ、もつと食べないと。」

「お前、勝手に皿に乗せんな!」

「あー気持ちいいー。」

「お酒程々にしてね。どうせまた吐くんだから。」

「魚、さかな……もうあさかな(朝かな)?」

「またくだらないこといって……。」

6人はたっぷり食べて、たっぷり飲んで、満足して帰路についた。

番外編くAyamiの取り扱い方 その4く

「はー！疲れたあー。」

宿の部屋に着くなり、Ayamiはベットにうつぶせに倒れ込んだ。満腹感と、酔いと、心地よい疲労で、幸せな気持ちだ。

「今日は大変だったけど、楽しかったなあ。」

Ryuはそう言いながら、Ayamiが寝ているベットの端に腰を下ろした。

沈黙。

Ryuは、エルサイスともふから教わったアドバイスのことで、頭がいつぱいだった。

これからすることは、自分でも初めてのことと、上手くいくかまったくわからない。その前に、上手くできるかさえも、わからないのだ。しかし、こうしてぐずぐずしていれば、大事なものを取りこぼしてしまう。

Ryuは息を大きく吸うと、意を決して、Ayamiに声をかけた。

「あやみん。」

「ん？」

突然呼びかけられたAyamiは少しだけベットから顔を上げRyuを見る。

「今日はお疲れ様、ありがとう。」

Ryuはそう言うと、Ayamiの頭をぎこちなく撫でる。その手は、緊張で震えていた。

「べ、別に、お礼を言われるようなことなんてしてない！」

Ayamiは、嬉しいのに、つい、冷たく返してしまう。

「俺と一緒に冒険して、ついてきてくれるだけで、感謝できるものなんだよ。」

Ryuはそう言って不器用に笑った。

Ayamiはベットに座り直すと、戸惑ったように目を泳がせる。こんなRyuは初めてで、どうしたらいいかわからない。でも、嫌ではなかった。むしろ嬉しい。

「あやみん？あの……」

「ん？」

「きつ……キス……してもっ……いい？」

「えっ？」

RyuはAyamiが返事をする前に、その右手を強く握り、ぐいっと引き寄せる。

「えっ！あっ?!ま、待って！」

驚いて体をこわばらせ、目をぎゅと瞑ったAyamiのおでこに、Ryuは優しいキスをする。

一瞬の沈黙。

本当は口にするよう言われていたのだが、さすがにそこまでの勇氣は、Ryuにはなかった。これだけでも、十分恥ずかしくて死にそうなのだ。

Ryuはゆっくり唇を離すと、Ayamiを見つめた。

Ryuと目が合った瞬間、Ayamiは、思わず彼を突き飛ばし、ぐそつぽを向いてしまう。

「あ、あやみん……。」

Ryuは驚くと同時に、後悔する。

「い、嫌だった？」

柄にもないことをしてしまったので、本当に嫌われてしまったかもしれない。そう思ってRyuは焦った。

「急にやめてよ!!」

Ayamiがそつぽを向いたまま、語気を強めて言う。

「こんな！こんなの！ずるい！」

「ご、ごめん……。」

Ryuはどうしたらいいかわからず、オロオロしてしまう。まさかこんな反応が返ってくるとは思ってもみなかった。

「本当にごめん……。」

Ryuは気まづくなくなってしまい、Ayamiに背を向けた。背中丸まり「しょぼーん」という効果音が出そうなくらい落ち込んで見える。

「りゅう……。」

その背中にAyamiが後ろからそっと抱きつく。

「え？あ、あやみん？」

Ryuは訳が分からず、混乱する。

「ずるいよ……。急に、こんなかつこいいことするなんて……。」

Ayamiはそう呟くように言うと、Ryuの背中に顔を埋める。

「ねえ……りゅう……。好き、好きなの。大好きなの。」

Ayamiはそう言いながら、Ryuの背中をポコポコ叩く。

「好きなのに、好きだから、怒っちゃうの。」

好きだから、怒るのメカニズムは、Ryuには理解できない。でも、

Ayamiが自分を好いてくれているのなら、Ryuはそれで満足だった。

「あやみん……。」

そうホツとしたのも束の間

「ねえ？」

とAyamiがRyuを引っ張り、無理やり自分の方を向かせる。

「な、何？」

「キスして。」

「へ？」

「キスしてって言うてんの!!」

Ayamiはそう言うと、目を瞑り、Ryuに「んっ」と顔を向ける。

「(えええええ?!今このタイミングで?!)」

急に大胆なAyamiに、Ryuは慌てる。Ayamiの要望とは言え、今キスして、あとで文句を言われないか心配だ。

「早くーんっー!」

Ayami中々強情だ。

「(恥ずかしい思いは、今日で全部終わらせてしまえ。)」

そう思って、Ryuは大きく息を吐くと、意を決して、Ayamiの肩を引き寄せ、その唇に自分の唇を重ねる。

1, 2, 3秒。

ゆっくり離れる。

Ryuは恥ずかしくて、まっすぐAyamiを見ることができなかった。Ayamiも恥ずかしいのか、顔を赤くして俯いたまま、動かない。

沈黙。

「もう！りゅうのバカ……。」

「えっ!?!」

「全部、りゅうのせいなんだから!!」

Ayamiはそう言い捨てると、そそくさとベッドに潜り込み、頭まで布団を被って隠れる。

「もう寝る！明かり消して!!」

今日はAyamiに振り回されてばかりだ。Ryuは納得できない思いを抱きながらも、仕方ないと、ため息をつく。

「消すよ。」

明かりを消すと、部屋の中を一気に夜が満たした。

Ryuは、のそのそと自分のベッドに潜り込む。

布団のくるまり目を瞑ると、無意識に、Ayamiの唇の感触を思い出してしまう。

「(ああこれはダメだ……。)」

Ryuはお手上げだというように、息をついた。

一方Ayamiは、布団の中で頭を抱え

「(やっちゃった……どうしよう……。明日からどんな顔すればいいかわからないよお……。)」

と、悩んでいた。

「(今夜は眠れそうにない。)」

2人は、別々のベッドの中で、同時にそう思う。

そうして2人は明け方まで悶々と過ごして、次の日の朝、案の定寝坊をし、お互い「そっちが悪い」と言い合うのだった。

第57話 火傷

今日は風が心地いい。

滅びの村の風車小屋の下で、私は休憩をとっていた。ウッドデッキの上に寝そべって、空を見上げる。雲一つない快晴の青空を、暖かな春の風が吹き抜けていった。寒くもなく、暑くもなく、ちょうどよい陽気だ。とても気持ちよかった。

冒険は楽しいことばかりではない。嫌なことで、心が荒んだり、ささくれだったりすることもある。この景色は、そういうダメージを浄化するとういふか、癒してくれるような効果があると、私は思う。

あまりの心地良さに、私はなんだか眠くなってきた。ゆつくり目を閉じる。今日はもう、何かする予定も、誰かとの約束もない。このまま夕方まで昼寝をしたって、誰も文句は言わないだろう。そういう、いつ何をしてもし自由なところが、冒険者の良いところなのだ。私はうとうと、現と夢の間を行き来する。ゴールドেনスランバー、黄金のまどろみ。脳が溶けて落ちていくような、甘い誘惑。あと少しで、その穴に落ちるという時に、誰かが近づいてくる気配がある。

「クロ？寝ちやった？」

聞きなれた、いつもの声で、エルサイスが呼びかけてくる。「寝てる。」

私は不機嫌な返事を返す。幸せな時間が、台無しだ。

「起きてるじゃないか。」

エルサイスはそう言って、コロコロと笑う。うるさいやつだ。

「あーもー。今最高に気持ち良かったのにー!!」

眠りの女神は、あつという間に私を突き放し、去って行ってしまった。気持ちのいいまどろみは消え、体の重い感覚だけが、残り香のようにならなくなりつつある。

「ごめん、ごめん。起こしちゃったね。」

エルサイスは口ではそう言っているものの、全然申し訳なさそうにしていない。私はため息をつく、目を擦りながら、のっそりと起き

上がる。

「アロエベラは？」

「6個取れたよ。すぐ合成するね。」

エルサイスはそう言うと、火傷に効く薬を合成し始めた。

「すぐ出来るよ。」

エルサイスにそう言われた私は、ウッドデッキに座り直すと、右足を包帯を解き、薬を塗る準備をする。

昨晚。

私は、公国の狭いキッチンで、料理をしていた。

「あっー！」

私がそう声を出した時には、もう遅かった。熱湯の入った鍋は、私手を離れ、床に落ちていく。

ガシャーンという派手な音が響き、パスタと熱湯がそこら中に飛び散った。

「あっつー！」

突然のアクシデントに、私は対処しきれず、右足に熱湯をかけてしまった。ヒリヒリとした痛み顔歪めながら、屈んで見ると、足首のあたりが赤くなっていた。

「クロー！」

音を聞きつけたエルサイスが、ベットから飛び起きて、こちらにかけてくる。

「大丈夫？怪我は？」

「大丈夫。ちよつと火傷しただけ。」

「大丈夫じゃないじゃないか！」

エルサイスはそう言うと、あつという間に私を抱えあげ、宿の外へかけていく。

「ちよつ?!何?！」

突然のことに、私は抵抗もできなかった。

宿の外へ出ると、エルサイスは、私の火傷した方の足を、雪だまりに突っ込んだ。

「痛っ！」

ヒリヒリして痛いのと、冷たくて痛いので、私は呻きながら、エルサイスの服をぎゅっと握る。

「ちよつとだけ我慢して。」

もうすっかり夜になった公国の隅で、私はエルサイスにお姫様抱っこされながら、片足を雪に埋めている。なんとも奇妙な光景だ。

「エル、もう大丈夫だから、降ろして。」

急に恥ずかしさを感じてしまい、私はエルサイスの肩を押しして降りようとする。

「ダメ。」

エルサイスは腕に力を入れて、離してくれそうにない。

「こういうのは、最初の応急処置が大事なんだよ。火傷のあとが残ったら、困るでしょ。」

「別に今更気にしない。」

火傷や、切り傷などの生傷は、騎士のときも、冒険者になった今も、絶えない。戦っている限り、それは避けられないものなのだ。それを今更どうこう言ったって、仕方ないではないかと思う。

「僕が気にするんだよ。」

エルサイスはそう言いながら、真剣な顔を向けてくる。

「そんなん知るかよ……。」

私はそう呟きながら、うんざりする。そんな顔されても、困るし、何となく居心地が悪い。こういう扱いを受けるのに、私は慣れていないのだ。

私はどうしたらいいのかわからないまま、大人しくエルサイスの腕に抱かれていた。

部屋に戻ると、ベットに座らされ、絶対に動かないようにと言われた。

「はいはい。」

反論するのも面倒なので、私は適当な返事をし、エルサイスが鍋を片付けるところを、大人しく見ていた。

「アロエベラがないや。薬を合成するのに必要なのに。」

片付けが終わったエルサイスが、鞆の中を漁りながら言う。

「アロエベラは、こないだ全部草ブロックにしちやったよ。」

「そう言えば、そうだったね。2―3個残せば良かった……。」

そう頭をかくエルサイスを、私は不思議な思いで見ていた。

「何をそんなに慌てるんだ？らしくないぞ。」

エルサイスは、もっと冷静沈着で、ちよつとのこととで慌てたり、焦ったりしないと思っていたが、今日はなんだかおかしい。どこかバタバタとしていて、落ち着かない。

「そりゃ慌てるでしょ。クロが怪我したんだから。」

「怪我なんて、いつもしてるじゃないか。魔物と戦って。」

「それとこれとは別だよ。戦闘の傷はすぐ治るけど、こういうのは、ちゃんと治療しないと治らないからね。」

冒険者は不死だが、その不死は万能ではない。冒険者でも、病に伏せれば、教会での復活はできず、死ぬ。街の中での戦闘や、怪我も、その類に入る。神の加護は、街の中では効果がないのだ。

「別に死ぬような怪我でもねーだろ。こんなの。」

「クロはもつと自分を大事にした方がいいよ。」

「そのセリフ、そっくりそのままバットで打ち返すわ。」

私が言い返すと、エルサイスは困ったように眉を下げ、苦い顔をすする。何も言い返せないようだ。

「とりあえず、今日は包帯で保護して、アロエベラは明日取りに行こう。」

エルサイスはそう言うと、私の足をとり、丁寧に包帯を巻いていく。なんだか変な感じだ。嫌ではない、恥ずかしいとも違う。何とも言えない複雑な感情が、私の心を曇らせる。

「はい、できたよ。触らないでね。」

エルサイスが私の頭を撫でながら言う。私はすぐその手を乱暴に振り払って、不満をエルサイスにぶつける。エルサイスは、それをものともせず、優しく微笑んでいた。

何がこんなに不満なのか、自分でもよくわからない。本当はエルサイスにお礼を言わなければいけないのに、それもできなかった。

エルサイスが、完成した薬を、丁寧に私の足に塗っていく。ヒヤツとする薬の感覚に、私は思わず体を強ばらせる。

「染みる?」

「いや、薬が冷たくてびつくりしただけ。」

「そっか。」

エルサイスはそう合図打ちをすると、おかしそうに微笑んだ。私はなんだかモヤモヤする。昨日と一緒の感覚だ。モヤモヤの正体がわからないまま、エルサイスが包帯を巻き終えてしまう。

「これでもう大丈夫。」

「うん。」

なぜか「ありがとう」が出てこない。

「どうかした?」

「何が?」

「なんか、難しい顔してるからさ。」

エルサイスは、そう言いながら、私の顔を覗き込む。

「別に、何でもない。」

私はそう言うと、エルサイスの肩を手で押し返した。今はあんまり近づいてほしくない。

「そっか。」

エルサイスは、それ以上無理に近づいてこなかったし、追求もしなかったたので、私はホツとする。追求されたところで、言葉にできるようなことを、私はまだ何も持って無いのだ。

沈黙。風車が回るギシギシという音だけが、私たちを包んでいた。

そこに

「お兄ちゃん……!」

と、誰か声が割り込む。私もエルサイスも、同時にそちらを向いた。

第58話 帰ってこない兄

「お兄ちゃん……いや……じゃないのか……。ごめんなさい。私の兄の
エースが働き先からずっと帰らなくて……。」

私とエルサイスが同時に、声のする方を見ると、栗色の髪の女の子
が、申し訳無さそうに立っていた。

「お久しぶりですね。ケイプさん。」

エルサイスが、お決まりの、にこやかな笑みでそう返す。

「誰だっけ？」

私はケイプに聞こえないよう、小さな声でエルサイスに尋ねた。

「前に、枯れない花を合成してあげた人だよ。」

そう言われても、まったく思い出せない。私は人の顔や名前を覚え
るのは、苦手なのだ。

「お兄さんのこと、心配ですね。」

エルサイスが、社交辞令を返す。困ったように眉を下げ、表情まで
完璧だ。本心はきつとどうでもいいと思っているに違いない。

「ええ。働き先の人にさつきもお願いして、早く帰ってくるように
言ってもらったんですが……。」

「どこで働いてるんだ？」

私が見る限り、この辺で働けそうな所は見当たらない。

「ああ、働き先ってというのはこの村の地下工場です。」

「地下工場？」

私とエルサイスは、同時にそう言って、訝しげに顔を見合わせた。

この村では以前、建設したばかりの地下工場で事故があったのだ。
それが原因で人がいなくなり、村は滅んだ。ケイプの話のよれば、そ
の地下工場にあとから来た人たちが、新たな工場を作り、働き手を募
集しているらしい。

「兄もそれに手を挙げたので、私も一緒にこの村に来たのです。」

この地下工場には、色々な日くがある。私は公国の元メイド、ノエ
ルのことを思い出していた。この村出身のノエルは、地下工場で行わ
れていることの真実を暴こうとして、失敗し、粛清された。あのとき、

公国の王ドレイクは『貧しい国を回すための売り物を作っている』と言っていたが、結局それが何なのかは、その時はわからずじまいだった。

「嫌な予感がするな。」

私がそう呟くと、エルサイスも真剣な顔で「うん」とうなずく。

「兄から連絡がなく、もう1週間以上……。兄は体が弱くて、あまり長く働けないはずなのですが……」

ケイプはそう言うと言を伏せた。

私はどうするか考えを巡らせる。地下工場の話は、深淵を覗くような、底が見えない闇があるように思える。ノエルが暴こうとした真実、貧しい国を回す売り物、公国が人を集めている噂、帰ってこないケイプの兄。

「危険な冒険になると思うよ。」

エルサイスが、厳しい表情で言う。真実を知るには、いつだってそれなりの代償が必要なのだ。その代償がいくらになるのか、私にはわからない。でも、このまま放っておくのも、嫌だ。

「好奇心は猫をも殺すか……。」

ドレイクに言われた言葉だ。

真実なんて知ったところで、どうにもできない。私たちは無力だ。でも、だからと言って、始めから知る努力を放棄することは、私にはできない。あがいてやる。ただ流されるのは嫌いなのだ。

「エル。」

私がそう呼びかけただけで、エルサイスは決意を込めた表情で「うん」とうなずく。いいパートナーだ。

私がケイプに向かって口を開きかけた瞬間

「いいわ、私が見にいつてあげる！」

と、突然エナが割り込んできた。

「どこから湧いてでたんだ……。」

出鼻をくじかれた私は、つい不満な態度を漏らしてしまう。

「あなたも……冒険者さん？」

「そうよ！」

エナはそう言うと、ケイプに優しく笑いかける。

「エナさん、ドラゴンの時以来ですね。マナさんは……？」

エルサイスはそう言うと、キョロキョロと辺りを見回した。マナらしき姿は見当たらない。

「マナ？うん、またはぐれちゃってね……。でも、信じていけばまた会える、うん！」

私は呆れたため息をついた。こうしよつちゅうはぐれていたら、パートナーの意味がないではないかと思う。

「それよりも、探しにいつてあげましょうよ、ケイプさんのお兄さんを。困っている人のために働く、それが冒険者ってもんでしょ？」

エナの言葉に、私は顔を歪める。

「そんな話、私は知らないな。」

私は、誰かのために働いているわけではない。ただ自分のしたいことをしているだけだ。冒険というのは、本来そういう自由なものなのだ。誰かのためとか、そういう詭弁はいらぬ。冒険者は、正義の味方でも、何でも屋でもないのだから。

「我は翻弄されし自我を、混沌より導き、救い出すべき運命の担い手。ウフフ……。」

エナは私の言葉をまったく聞かず、完全に自分の世界に入ってしまったっていた。さすがのエルサイスも、エナの横で、うんざりした表情をしている。

「……………うあ、あのお…………。」

ケイプはエナの変化に戸惑っていた。私たちは見慣れてしまったが、初めてエナのこれを見れば、それは驚くだろう。何かが憑依したと思っても、おかしくはない。

「気にしないで！お兄さんのことは私たち任せで。行くわよ！」

エナはそう言うと走り出す。

「お願いして本当にいいんですか？」

ケイプが心配そうな顔で、私たちに声をかける。

「ええ、大丈夫ですよ。」

エルサイスが、いつもの作り笑顔でそう返すと、ケイプは嬉しそう

に笑い、頬を赤らめた。

「(こいつ、モテそうだな。)」

エルサイスを見て、私は急にそんなことを思った。エルサイスは、女の子の扱いに、慣れているのかもしれない。別にそれはそれで構わないが、それを自分に向けられるのは、嫌だ。

何となく、さっきのモヤモヤの正体が輪郭を現してくる。私の不満はその『女の子扱い』からきているのかもしれない。

「ほら、いいから、早く早く!」

先に走り出したエナが上から呼びかけてくる。元々行く気ではあったが、エナに先導されるのは、ちよつと癪だ。

「うるさいやつだ。ほんと。」

私がうんざりしていると、隣でエルサイスが苦笑いを浮かべた。

「行くぞ。」

私たちはエナに続いて、地下工場の入口へと走り出した。

第59話 不満と波

地下工場の中は、同じような景色が続いていて、目印になりそうなものも少なく、少しでも気を抜けば、迷ってしまいそうな場所だった。僕はドアを通るごとに、現在地を照合し、地下工場の新しい地図を羊皮紙に書いていく。

「大丈夫か？」

クローバーが、僕の書いた地図をのぞき込みながら言う。

「うん。今のところ順調。一旦戻って、さつきと反対側の道に行ってみよう。」

「わかった。」

行き止まりも多く、中々奥に進めないが、襲ってくる魔物は、さほど強くない。クローバー1人が1撃で倒せるくらいだ。

今日のクローバーは、いつもの大剣、デモンブレイドⅡアビスではなく、片手剣のデモンソードⅡアビスを装備している。炎の洞窟で、グレンと戦った時のことを教訓にしているのだろう。この狭い空間では、大振りの大剣は不利になる。多少攻撃力は落ちるが、片手剣の方が小回りが効いて扱いやすい。元々騎士だったクローバーは、片手剣を専門にしていたのだから、扱いにも慣れてもいるだろう。

「エナさんいないね。先に行ったのか、迷ったのか……。」

僕がそう呟くと、クローバーが

「どうでもいいな。面倒だから、もう会いたくない。」

と、本音を返す。僕は思わず笑ってしまった。

地下工場の入口で、エナとは別れることになった。入口の見張りを僕らが引き付けて倒している間に、エナだけ先に奥に入っているってしまっただ。

元々そういう作戦ではあったが、クローバーは釈然としないように、不機嫌そうだ。

むしろ、クローバーは、昨日からずっと機嫌が悪い。僕が火傷の応急処置をしたあたりから、不満そうな雰囲気を出している。

何が不満なのかは、僕にはわからない。お姫様抱っこが恥ずかし

かったのか、足を触られるのが嫌だったのか、それとも鍋を落としてしまった自分に怒っているのか。

思いつくのはそれくらいだが、どれも違う気がする。そのくらいの不満なら、一発僕を殴って当たり散らして、あつという間に解消するのが、クローバーのやり方なのだ。

問題はもつと深いと、僕は勘ぐっているが、無理に聞いたところで、返ってくる答えは少ないだろう。クローバーは元々、不満を溜め込んで黙っているような性格ではないのだ。言わないのは、気持ちの整理ができていないだけで、それができれば、話してくれる。僕はただそれを待ってればいい。

「行き止まりだね。」

僕が地図を書きながら言う。

「私、もうどっちが出口かわかんなくなってるから、よろしく。」

「了解。僕は大丈夫。ナビゲーションは任せて。」

今地下2階までできていた。何階まであるのかわからないが、なんとなく、ゴールが近いように感じる。

「ねえ?」

「ん?」

僕は地図から顔を上げ、クローバーを見る。何か話し出しそうな雰囲気だ。

僕はクローバーが羨ましい。不満を堂々と口に出せるのは、彼女の強さだろ。僕は恐くて言い出せなくなったのだ。

幼い頃、不満を言えば、殴り飛ばされた。それはクローバーもきつと同じだったはずだ。

でも、クローバーはそれに立ち向かった。負けないよう言い返した。

一方僕は、逃げた。殴られるのが恐くて、不満を自分の中に押し込めた。そしていつしか、不満を不満とも感じないようになった。嫌なことはあるけれど、仕方ない。特別気にかけることでもないと思うようにし、少しずつ感情を失っていった。

どっちが良いとか、悪いとかではない。同じような目にあっても、

別の選択をしたのは、持って生まれた性格としか言い様がないだろう。

おかげで、僕の心はいつも穏やかだ。不満も怒りもさほど感じない。でも、同時に、大きな喜びも感じることができない。感情とは表裏一体なのだ

そうした常に風の状態の心に、僕自身、虚しさを感じることもある。だからこそ、僕は、クローバーが眩しいくらいに好きなのだ。彼女の感情のうねりに、僕はタダ乗りして、その気持ちをトレースすることで、喜怒哀楽の疑似体験をしている。

我ながら、頭がおかしいと思う。

でも僕はもう、感情を自分のものとして、感じることはできないのだ。

「もし、にもちゃんが、昨日の私みたいに火傷したら、同じ様に応急処置したか?」

「え?」

クローバーの質問に、僕は虚を突かれる。なぜそんなことを聞くのか、まったくの謎だ。でもここで、余計な疑問を挟んで話を遮るのはやってはいけない。

「うーん……するんじゃないかな?」

「じゃあもふだったら?」

「もふさんでも、多分したかなあ……?抱っこは無理だけど。」

「じゃテイルだったら?」

「テイルさんはしないなあ。」

一体これはなんのことなのだろう。

「エルのその基準は何?」

「基準?」

急に聞かれて、僕は返答に困る。何となくとしか言い様がない。

「基準って言われてもなあ……。」

困って頭をかく僕を、クローバーが真っ直ぐ見つめてくる。

「私が『女だから』ああした訳じゃないよな?」

「ああ……なんだ。そういうこと?」

僕は思わず笑ってしまった。

クローバーは『女だから』という理由で、優しくされたり、守ってもらったりするのが、大嫌いなのだ。『男より弱い存在である女を守る』という固定概念からくる優しさは、クローバーにとって、見下し以外の何者でもない。そうやって『女だから』というだけで、下に見られるのを、クローバーは心の底から憎んでいるのだ。

「僕は別にクロが女の子だから、ああしたわけじゃないよ。クロが、クロだから、だよ。」

堪えきれない笑みを漏らしながら、僕が答える。

口に出せば、当たり前のことだ。それ以外の理由はない。昨日あんなに慌ててしまったのも、相手がクローバーだったからだ。あれは自分でもらしくなかったと思う。でも、つい気が動転してしまったのだ。

クローバーは、僕の風いだ心に、時々こうして波を立てる。それは嬉しいことばかりではなく、それなりの痛みも伴うが、悪いことではない。

クローバーのそばに居るだけで、特別なことは何も無くても、僕は少しずつ大事なものを取り戻していける。きっとそれは、素晴らしいことなのだ。

「本当だな？」

「僕は嘘つかないよ。」

「それが既に嘘だろ。」

「そうだね。」

僕が思わず「ふふっ」と笑うと、クローバーがうんざりしたようなため息をつく。

「ずっとそれが引つかかって、不機嫌だったの？」

「不機嫌じゃない。ただ、なんか……モヤモヤしてただけ。最初は自分でもわからなかったけど、アジローを思い出したんだ。あいつは、ああいうとき、私が『女だから』で動いてたやつだったから。それに、お前女の子にモテそうだから、そういうの得意なのかなってさ。」

クローバーはそう言うと、バツが悪そうに頭をかいた。

「私が悪かったな。変に勘ぐったりしてすまん。」
「別にいいよ。」

クローバーにとっても、僕にとっても、この確認は大事なことなのだ。どっちが上とか下もない。対等な関係を築くためには、こういう小さな確認の積み重ねが重要になってくる。

「さつきも昨日も、ありがとう。火傷はもう随分良くなったよ。」

クローバーはそう素っ気なく言いながら、素早く僕から目を逸らし、先に歩き出す。照れているのか、後ろから見ると、耳が真っ赤だ。「(ああなんてかわいいんだろう。)」

僕は愛しくなつて、思わずクローバーを後ろから抱きしめた。案の定、間髪入れず、クローバーの拳が僕のお腹に飛んでくる。

「ぐふう……。」

何度くらつても痛い。

「調子乗ってんじゃねーよ。」

そう言うクローバーの後ろで、僕はゴホゴホむせた。

「ほら、行き止まりだぞ。」

僕を置いて先に進んだクローバーが言う。

小さな部屋の真ん中にトロツコが1台置いてあるだけで、次へ進む道はない。確かに行き止まりだった。

「ゴホ……えっと……。うーん……。」

僕は目の端の涙を拭いながら、地図を確認する。

「あれ？(ここ)が1番奥のはずなんだけどなあ？他はどこも行き止まりだったよ。」

僕はそう言いながら、辺りを見回す。どこかに隠し通路があるかもしれない。

「なんかトロツコから音が聞こえないか？」

クローバーはそう言うのと、壊れかけた車輪に足をかけ、トロツコの中をぞき込む。

「お、ロープがかかっているぞ。」

「本当だ。これで下に行けるね。」

トロツコの床には穴が空いていて、さらに下に行けそうだ。この先

が工場なのだろう。

「クロ、この先は多分、かなり危険だよ。」

僕はクローバーに真剣な目を向ける。

この地下工場は、公国が関わっているだけでなく、あの『いのりの教団』が管理していると、エナが言っていた。

おそらく、一筋縄ではいかないだろう。今回の件は、色々な意味で、かなり危険だ。

それでも

「私は行くよ。知りたいから。」

とクローバーが言う。ならば仕方ない。僕は一緒に行くだけだ。

僕は決意を込めて「うん」とうなずき返す。

「さあ鬼が出るか、蛇が出るか。」

クローバーはそう言いながら、ロープを握ると、ゆっくり下へ降りていった。

第60話 地下工場の秘密 その1

「ここが工場かな？」

エルサイスが、声を潜めて言う。私は見つからないよう壁ぴったり張り付き、そつと中を伺う。

工場の中は、意外に静かで、人の話し声はあまり聞こえない。代わりに、1番奥にある、巨大な装置の歯車のガタガタという大きな音が、工場全体を満たしていた。あまり活気があるようには見えない。動いている人は皆一様に、どこか疲れた様子で、一心不乱に何かを潰して、こねて、運んでいた。

一体何をしているのか、皆目見当がつかない。

「あれ、マナじゃないか？」

私がそう言うと、エルサイスが私のすぐそばまできて、体をくつつけるようにしてくる。

「近い。離れろ。」

「しー。見つかつちやうじやないか。」

そう話している私たちのすぐ前を、人が通っていく。私とエルサイスは、見つからないよう息を殺し、ぎゅっと壁に張り付いた。

嫌な汗が頬を伝い落ちていく。

私はこういう隠密行動は苦手なのだ。スリルがあるのは嫌いではないが、どちらかといえば目立つ方の性格の私は、『見つかったはいけない』というプレッシャーに耐えられない。

カツカツという靴音が、少しずつ遠ざかっていく。幸い、気づかれなかったようだ。

私はホツとため息をつく。

「危ない、危ない。」

エルサイスはそういいながら、いつもの涼しい顔で笑う。

「(こいつ……後で絶対ぶん殴る。)」

私はそう心に決めると、気を取り直して、マナの様子を伺った。

「なあ、マナさん……。俺たちは何をやってるんだろうな。」

大柄青年が、マナに話しかける。青年の顔色はあまり良くなく、ど

こが具合が悪そうに見えた。

「疲れてるんですよ。」

マナは、青年を心配そうに見つめ、気遣う。

「ここへ来てから、ずっと寝ないで働き詰めじゃないですか。少し休んでくださいよ。」

「ありがとう……マナさんもずいぶんと長い間、働いてるな。あんたも休んだ方がいい。」

この工場の労働環境は、どうも悪いらしい。長時間休みなく、人を働かせ、具合が悪くても放っておいているようだ。

「僕これ知ってるよ。こういう異常な労働をさせる会社のことを、あの国では、ブラック企業っていうんだ。」

「ブラック企業ねえ……。」

私は得意気なエルサイスに、気のない返事を返す。

こんな酷い労働環境の工場なんて、さっさと辞めてしまった方がいい。私ならそう思うが、みんなそれぞれ辞められない理由があるのかもしれない。

「ティールさんが言ってた。公国は社会的に弱い立場の人を集めてるって。酷くても逃げられないようにしてるんだらうね。」

エルサイスは、いつもと変わらない飄々とした様子でそう言うが、どこか悲しげでもある。あまりいい気はしていないようだ。

無職で次の仕事のあてがない、孤児で身寄りがいない、病気で普通に働けない。そういう社会的に弱く、金を持っていない人が、こういう仕事にしがみついてしまうのだらう。辛くても、働けるだけ、金を稼げるだけマシだと考えて。

そうやって弱い者から搾取をするシステムに、私は嫌悪を覚える。

「さあ、がんばってみんなで働きましょう。私たちの働きで未来に輝きが灯ります。」

突然朗々とした声が工場内に響き渡り、私は驚いてビクツと体を震わせる。この暗い工場の雰囲気には、似つかわしくない、明るい爽やかな声だ。

「人間の繁栄と発展のために、みんな一緒に懸命に額に汗して働きま

しよう！」

そう労働者に声をかけているのは、金色の髪と青い目の、爽やかな好青年だ。

私はこの青年を知っている。

「塔の門番じゃんか。」

いくら人の顔や名前が覚えられない私でも、この顔を忘れはしない。私たちは、つい先日、時涉りの塔の門番だった、この好青年の姿をした魔王、ロッツに、敗北したのだ。

「エナさんがいつてたことは本当だったね。彼がいるってことは、ここは、いのりの教団が仕切ってる。」

エルサイスが厳しい表情でそう言う。

どうにもできないまま、嫌な予感だけが、ガスボンベに繋いだ風船のように膨らんでいく。いつ破裂してもおかしくないような緊張感に、私は吐き気を覚える。

「すみません。エースさんが、少し気分が悪いみたいで……。」

エースと呼ばれた青年は、バツが悪そうに、ロッツの前に進み出た。どこか怯えているようにも見える。

「あ、あの人がエースさんだったんだ……。ケイプさんのお兄さんの……。」

エルサイスの呟きに、私は目を凝らしてエースを観察する。エースは背が高く大柄だが、どこか気弱そうな雰囲気がある。眉は下がり、目は虚ろで、すぐく疲れているようだ。足元もおぼつかない。

「生きてるだけマシって感じだな。これだと。」

こんな環境で働き続けられ、いずれ死んでしまう。早くこんな工場辞めさせて、ケイプの元に帰さなければ。

「気分が？そうですか、それはいけませんね。どうぞこちらへいらしてください。」

ロッツは優しくそう声をけると、エースを工場の奥へと連れていった。

第61話 地下工場の秘密 その2

「僕たちも行くこう。」

「うん。」

私たちは、工場の端を、物陰に隠れながら進んでいく。気づく者は誰もいない。みんな自分のことだけでいっばいっばいの様子だ。

工場の奥、他の労働者から見えない位置で

「どうやら、あなたはもうダメですね。使いものにならない。」

とロツツが、さっきの優しそうな明るい声色とは違う、冷たい物言いで、エースにそう宣言する。その様子を私とエルサイスは、物陰から伺っていた。

「使いものにならないなんて、そんな……！せつかくお仕事をいただけたのに……。別のお仕事はありませんか？」

エースがそう泣きそうな声を出す。

やはり、そう簡単には抜け出せないらしい。

表向きは、みんな働きたくて、勝手に働いているように装いながら、ここには、人の思考を縛る罫が、幾重にも張り巡らされている。蟻地獄のように、抜け出したくても、抜け出せない。辞めたいのに、辞められないのだ。

「洗脳だな。」

私の呟きに、エルサイスが「うん」とうなずく。見ている気分のいいものではない。

「とりあえず、お休みください。ほら、これを飲んで。」

ロツツはそういうと、グラスに入った水をエースに渡す。エースは少し躊躇ったが、ロツツの有無を言わせぬ雰囲気を押されて、それを一気に飲み干した。

「ゆつくり、お休みください。……永遠に……」

私とエルサイスに、緊張が走る。

「永遠に、ですって……？どういうことですか？」

エースはそう言いながら、フラフラと膝を床につく。立ってられないようだ。

「我々は皆さんの魂を利用し、不死の万能薬を作っているのですよ。」
ロツツの言葉に、私の中の嫌な予感の風船が破裂した。もうそれは予感ではなく、圧倒的な事実として、私の心に刻まれる。

エルサイスの言っていた通りだった。錬金術は、等価交換。永遠の命には、人の命が必要。それが今証明されたのだ。

エースの体が崩れ落ち、床に倒れていく。

私は咄嗟に物陰から飛び出し、その体を支えた。エルサイスも、あとからついてくる。

「おい!!生きてるか!?!」

私がそう呼びかけると、エースは「ぐうぐう」と寝息を返してきた。どうやら眠っているだけで、毒を飲まされたわけではないらしい。その様子に、私は少し安堵する。

「……おや……聞き耳をたててた人がいたみたいですねえ……。」

ロツツが冷たい目で、私とエースを、見下ろす。

「まったく、さすがの僕でも呆れますね。こんなことをしているなんて。」

エルサイスがそう言って、杖を構えながら、ロツツと私たちの間に割り込む。顔はいつもと変わらない、優しげな微笑みを浮かべているが、どこか感情が高ぶっているようにも見える。

「君たちは、先ほど入口で監視している魔物を倒して中に入った冒険者。」

ロツツは諦めたようなため息をつく、話し出す。

「……そう。バレてしまったては仕方がない。私たちは、魂を浄化して不老不死の万能薬としているのです。」

ロツツはそういうと、ニツコリとした笑みを浮かべた。薄ら寒さを感じる嫌な笑みだ。

「お金に困っている人の魂を浄化し、お金のある人の命と変える。」

まるでそうするのが当たり前で、何が悪いのかまったくわかっていないような口振りだ。

「貧乏は不幸です。生きることをさえ否定されるように感じる。だからこそ、私たちは、背中を押してあげてるのです。」

「勝手なこと言うな!!」

私は剣を抜くと、構える。エルサイスが切かからないようにと、手で制してきたが、そんなものお構い無しだ。ここでこいつの意見を否定しなければ、私の中で色々なものが失われる。

「貧乏が不幸も、生きること否定されるように感じるのも、全部お前らの主観だろう!勝手にかわいそうって哀れんで、挙句の果てに、勝手に命を奪う。そんなことが、許されてたまるか!!」

貧乏だろうと、病気だろうと、ひとりぼっちだろうと、その人の幸せは、その人が決めることだ。それを他人が勝手に不幸と決めつけて、人生を奪うだなんて、許される行為ではない。

「背中を押してあげてるなんて、厚顔無恥も甚だしい。お前がやっていることは、ただの人殺しだ!恥を知れ!」

私の言葉にロッツは「やれやれ」というように、首を振る。呆れ返ったようなその態度が、私の怒りを逆撫でする。思わずぐっ体に力が入るが、エルサイスが肩に手を置いて、それを抑えてくる。

「てめえ……。」

そう悪態をつくが、エルサイスはビクともしない。

「もう少し、情報がほしい。」

エルサイスが、私にしか聞こえない小さな声で言う。こんな時でも、彼は冷静だ。私が切りかかってごちやごちやにする前に、できるだけ多くの情報をロッツから聞き出しておきたいらしい。

「人類を皆救うの到底無理なこと。少ない犠牲で、最大の幸せを考える。これは、人類のための慈善事業なのです。」

ロッツはそう言うと、優しげに微笑んだ。

「お話はそれくらいですか?」

エルサイスが負けず劣らずの笑顔で返す。

「こんな事業は、早々に潰れた方が、人類のためだと僕は思いますよ。」私の肩から、エルサイス手が離れる。私はそれをGOの合図として受け取って一直線にロッツに向かい、切りかかる。

「おっと。」

ロッツは涼しい顔で、私のファイアスラッシュを細身の剣で弾き返

した。私は1度バックステップして距離を取り、剣を構え直す。一撃目でだいたいわかる。こいつは手強そうだ。

「ここで冒険者であるあなた方を倒しても、生き返ってしまう。ならば……」

ロツツはそういうと、口に手をあて考える。

「面白いことを思いつきました。神の祝福を受けて不死になったという冒険者。あなたがたにこの不死の万能薬を与えるとどうなるか。興味はありませんか？」

ロツツの胸ポケットから出された小さな薬瓶の中には、無色透明の薬が入っていた。人の魂から作られた、不死の万能薬。おぞましい薬だ。

「どちらの神が勝つか。気になります。神を試すなかれといいますが、私たちの信じる神が正しいのか。あなたがたを生かす神の加護が正しいのか。試してみるとしますか。」

そう言って切りかかってきたロツツの剣を、私は盾で受け止めた。

「エル。全力で行くぞ。」

私の言葉に「うん」とエルサイズがうなづく。

この戦いは、絶対に負けるわけにはいかない。

私はロツツの剣を盾で受け流すと、デモンソードⅡアビスを振り上げた。

第62話 否定

全力で行く。

クローバーはその言葉通り、次から次へと休みなく剣を走らせる。僕はその支援を、ただ淡々としていた。

ロッツは、見た目は細身の優男で、とても強そうには見えない。しかし、魔王というだけのことはあった。クローバーの目にも止まらぬ剣戟を、難なく受け止め、次々に反撃を返してくる。

クローバーが風迅剣で、ロッツのレイピアを薙ぎ払う。ロッツはそれを流れるように受け流し、一瞬体勢を崩したクローバーの肩に、レイピアをふわつと突き刺す。

「くっ……。」

戦いづらそうだ。

クローバーの剣技は鋭く、速い。一方、ロッツの剣技は、柔らかく、緩い。ふわふわとした掴みどころのない動きで、でも、確かな強さを持って、ロッツはクローバーを追い詰める。

ロッツの緩く突き出したレイピアを、クローバーが盾で受け止めた。すぐく重そうだ。歯を食いしばって耐えている。ロッツのあの涼しい顔から、どうやったたらそんな馬鹿力がでるのだろう。魔王というのは、よくわからない。

僕はハイオーラを唱えて、クローバーの攻撃力をアップさせる。その後にウォールで物理防御力を上げ、ついでにHPの回復も行う。

「無駄ですよ。低能な旧人類に、僕は倒せません。」

ロッツはそういうと、レイピアでクローバーを押しながら、魔法の詠唱を始める。

「クロ、何かくるよ!」

僕はそう警告しながら、ペールを唱えて、魔法防御力を上げる。レイピアを持つ手とは逆の手に、ロッツの魔力が集中していく。くるとわかっていても、クローバーはレイピアを盾で防ぐのが精一杯で、動くことができなかつた。

「くっそ……。」

「さあどうぞー！」

ロツツはそう言うと、クローバーの脇腹目掛けて
フrintトファイアを放つ。

「ぐう……。」

防御体勢も取れず、至近距離でまともに攻撃をくらってしまったクローバーは、うめき声をあげると、あつという間に壁際まで飛ばされていった。壁にぶつかるドカツと鈍い音と共に、辺り土煙が舞い上がる。

「クロー！」

心配だが、駆け寄ることはできない。今僕が前に出たら、ロツツのヘイトを奪いかねない。そうなったら、数十秒と持たずにやられてしまっただろう。まだ戦いは続いている。落ち着いて連携を紡ぐのが、今の僕の使命だ。

「こんなものですか？まあいいでしょう……ちよつと物足りませんが、さっさと神を試すことにしましょう。」

ロツツはそう言いながら、万能薬の瓶を手に取り、土煙の中にいるクローバーに、1歩1歩近づいていく。

僕はクローバーのステータスを確認する。先に防御力を上げておいたので、HPはそれほど減っていない。

「(まだ、戦えるはずだ。)」

僕はライトニングを放って、ロツツを牽制する。ロツツはそれを面倒そうにレイピアで切り裂き、弾いた。全然効いていない。

「弱いというのは、それだけで哀れですねえ。」

ロツツがそう言いながら、僕を振り返る。悲しそうに眉を下げているが、口元には嘲笑を浮かべていた。

「よそ見をするな。」

土煙の中から、クローバーが飛び出してきて、ロツツ目掛けて鋭い突きを繰り出す。破甲衝だ。

「おっと。」

ロツツは緩い動きでそれを避けようとしたが、クローバーの不意打ちに完全に対応できず、背中に切り傷を負った。

「哀れだとか、不幸だとか、そうやって勝手に優劣をつけて、誰かを下に見て嘲笑ってるだけのくせに、慈善事業だ？笑わせんな!!」

クローバーの流水剣を、ロッツはレイピアで受け止める。

「あなたたちは、ただの差別主義者ですよ。」

僕はそう言いながら、クローバーにハイオーラをかけ直す。

「どうとでもどうぞ。」

ロッツは僕らの言葉をまったく意に介さず、涼しい顔でクローバーの剣を弾き返し、魔法の詠唱を始めた。僕は先にペールを唱えて攻撃に備える。

「させるか!」

ロッツの詠唱の妨害をしようと、クローバーが距離を詰めるが、多分あの距離では間に合わない。僕はエアシールで風印をつけ、すぐ回復できるように準備をしておく。

僕は、先回り先回り、クローバーの援護をする。10秒先の戦闘を予測するのが、僕の仕事なのだ。

案の定、クローバーが攻撃するよりも前に、ロッツの魔法が放たれた。肩の辺りで、ファイアーアローの炎が炸裂する。

「痛つてえ……!!」

うめきながらも、クローバーは倒れなかったし、怯みさえしなかった。僕はすぐウォールを唱えてHPを回復させる。クローバーは一直線にロッツに向かうと、蒼炎剣を叩き込んだ。いい手応えがありそうな一撃だった。ロッツは

「うっ……。」

と、うめくと、その涼しい顔を崩し、歪ませた。

「他人の正しさの主張は否定しない主義だが、てめーはダメだ。今お前を許したら、私の中の大事なものが否定されるからな。」

クローバーはそう言いながら、バックステップして、一旦後ろに下がる。

「そうですね。見逃すことはできません。」

僕はそう言うと、詠唱を始める。

「神様気取りで優劣つけて」

「下と決めつけた方を切り捨てる。」

「そんな考えは」

「全力で」

「否定する!!」

僕とクローバーは同時にそう叫ぶ。

詠唱が終わり、僕がジャツジメントを放つのに合わせて、クローバーがペネトレイトを使う。

協力技だ。

僕は高く飛び上がり、魔法陣の上から、クローバーに魔力を送る。クローバーは僕の魔力を受けると、一直線にロツツ目掛けて走っていった。

デュアルアーツ。

クローバーの剣が、ロツツを貫く。

クローバーが剣を払い、こちらを向いてほんの少しだけ笑いかけた瞬間、ロツツは倒れた。

第63話 消えたマナ

「私が負けるなんて……。」

ロッツはそう言い残すと、ボタンと床に倒れた。
私たちの勝利だ。

私は肩で息をしていた。戦闘の疲れもあるが、それ以上に、私は怒っていた。ロッツを倒しても、その怒りは収まるどころか、暴れだしたくなるような熱を持って、私の体を駆け巡る。

貧しい人たちの魂を浄化して万能薬を作る。そして金持ちにそれを売る。ドレイクが言っていた「貧しい国を回すための商売」とは、人の命を売るものだった。

そんなことが許されてたまるものかと、思ったところで、私には何も出来ない。これは公国の深い闇の秘密。世界を回す大きな歯車の前では、私はあまりにも無力なのだ。

だからこそ、こんなにも腹立たしい。何も出来ない自分が。

エルサイスが近づいてきて、私の肩に手を置く。

「水、飲む？」

そう微笑みかけてくる彼の目は、どこか悲しげだ。

私は水筒を受け取ると、中身をグイッと飲み干した。ほんのりレモンの香りがする冷たい水は、怒りで熱い頭を冷ましてくれて、視界が幾分スツキリする。

「ちよつと落ち着いた？」

「うん。」

私は目を瞑って、ほんの少しだけエルサイスに寄りかかる。エルサイスは、茶化しも、からかいもせず、黙ってそれを受け入れてくれた。怒りで波立っていた心が、少しずつ凪いでいく。どこにもぶつけないこの怒りは、消えることはないが、どうにか落ち着くことはできた。

「あれは……？おーいー！」

マナがそう呼びかけてくる。私は目を開け、エルサイスに寄りかかるのをやめて、まっすぐ立つと、そちらを見た。

「マナさん、こんなところで何をしてるんですか？」

「エナとまたはぐれちゃって。でも、エナが新興宗教のあとを追ってたから、ここに居れば必ず来るって思って、労働者として入り込んで待ち伏せしてたんです。」

エルサイスの質問に、マナはそう答えた。

たった1人で潜入捜査とは、マナは中々度胸がある。

「エナさんなら、多分そのうち来ますよ。さつき外で一緒でしたから。」

エルサイスがそう言うと、マナは嬉しそうに目を輝かせた。

「やっぱり！ここに来たんですね！エナのことを一番わかってるのは私。旅の相棒も私なんです！」

マナが興奮した様子でそうまくし立てるのを、私とエルサイスは、若干引き気味に見ていた。

「そう思いませんか？」

マナにそう聞かれたエルサイスは

「ええ、そうですね。」

と、いつもの作り笑顔で、ニツコリそう返す。また心にもない合図うちをしてるなど、私は勘ぐる。

「あの子は本当に昔から私がいなくて何もできなくて……。あつ、エナと私は幼なじみなんですよ。」

マナはそう言って、エナの失敗談を幾つかあげ

「私がフォローしないと、失敗して、ずっと泣いてばかりだったんです。」

と言って笑った。

今の勝気でお転婆なイメージのエナからは、想像も出来ない話だ。

エナとマナの関係は、エナとその弟のロイとの関係に似ている。相手を「自分がいないとダメ」と勝手に思っている所なんかは、そっくりだ。

それが良いとか、悪いとかではないが、私にはそういう関係は合わない。どちらかが、一方的に守られる関係というのは、お互いどこかでフラストレーションが溜まってしまうものだ、私は思うからだ。

「はっ！とところで、お二人はどうして？」

一通り話して落ち着いたManaが、そう尋ねてきた。

「エースさんの妹さんに、お兄さん帰ってこないって相談を受けて、様子を見にきたんです。」

「なるほど……。」

「世間話はそこまでだ。」

突然割り込んだ不吉な声に、私思わずデモンソードⅡアビス柄を握る。

「なっ、何をするんですか……！」

突如倒れていたロツツが起き上がり、Manaを後ろ手にして、押さえつける。

「てめえ！」

「さあ、この人の命が惜しければ大人しくしなさい。」

私の悪態をもともせず、ロツツがそう言って、押さええたManaを盾のように前に出す。

「くっそ……。」

「クロ。」

エルサイスに促され、私は劍柄からゆっくり手を離す。悔しいが、今抵抗はできない。

「おや……この子も……もしかして冒険者じゃないか？」

ロツツはそう言うと、ニヤッと嫌な笑みを一瞬浮かべた。
嫌な予感がする。

「お嬢さん、お疲れではないですか。この薬を飲んでみませんか？すべての疲れが吹き飛びますよ。」

「え、な、なんですか、これ……やめて、ください……。」

「ほら、飲んで！」

「やめろ！」

「Manaさん！」

私の叫びも虚しく、ロツツに薬を飲まされてしまったManaは、ゴホゴホむせたかと思うと、その場に崩れ落ちた。私が助け起こそうと近寄ると同時に

「マナ！あなたたちマナに何を……!？」

と、エナが突然現れた。エナは私に変わって、マナを抱き起こす。「不死の薬を飲んでもらっただけですよ。」

ロッツが冷めた様子でそう言う。

「神の恩恵を受けて不死なのに、わざわざ不死の薬を飲むなんて、神を冒瀆する者は果たして、蘇ることができるのでしようか。」

なんとという恐ろしい実験だろうか。神の加護vs不死の薬。永遠に生きることと二重に強要する呪いだ。

「でも、それを最後まで見届けることができないのは、残念です。」

ロッツはそう言い残すと、黒い霧となって消えた。

「マナ、しつかりして！死んじゃダメー！」

エナがマナを必死で揺すって呼びかける。

「エナ……死にませんよ……私……あなたと旅をしないと……うっ……。」

マナは意識が朦朧としているようで、弱々しく、今にも気を失いそうな様子だ。

「私がないと……あなた、泣いてばかりで……。」

「全然泣いてなんていないわよ！マナ、ちゃんと教会で復活するの！」

「大丈夫……復活する……エナ……ほっとけないから……。」

「私も探しに行くから！教会に！」

「……………」

マナの体が光り輝くと、あとも残さず消えてしまった。

沈黙。

本当に教会で復活出来るのか、できないとしても、不死の体はどこに行くのか、誰も予想できない。

「……復活……できるよね……たぶん……いや、絶対に……。」

そう言い聞かせるように呟くエナに、エルサイスでさえ、慰めの言葉をかけることは、できなかった。

私はエースを叩き起こすと、事情を説明して、ケイプ元に帰るよう促す。

「僕たちも行きましょう。」

まだ名残り惜しそうに、マナのいた場所を見つめるエナに、エルサイスが声をかける。

エナは何か振り払うように勢いよく視線を外すと、先に走り出した。

「エル、行くぞ。」

「うん。」

私たちもそのあとを追う。

何とも言えない思いを残したまま、私とエルサイスは地下工場を後にした。

第64話 命の価値

熱湯の入った鍋を持ち上げたら、一気にメガネが曇り、前が見えなくなってしまうた。

「あ……。」

「もう……。だから自分でやるって言ったんだよ。ほら、こつちだ。」
クローバーが手を添えて、誘導してくれる。

「気をつけろよ。」

クローバーの介助を受けながら、僕は鍋をひっくり返し、ザルに茹で上がったパスタの麺を移す。湯気がさらに上がり、頬がほんのり熱くなる。

「もう自分でやった方が早いんだけど。」

クローバーが不満そうに漏らす。

「また落としたり危ないでしょ?」

「もう落とさねーよ。それに、前が見えないお前より、私の方がずっと安全だ。」

クローバーはそう言いながらザルを持ち上げ、パスタの湯切りをする。

その横で、僕は空っぽになった鍋を片付けると、服の裾で曇ったメガネを拭いた。これがないと、本当になんにも見えないのだ。不便で仕方ない。

公国の狭いキッチンに、僕とクローバーは、寄り添うように立って、昨日落としてしまって食べることでできなかった、ミートソースパスタを作っていた。

「エル、バターちょうだい。」

「はい。」

僕は、昨日鍋を落として火傷してしまったクローバーが心配で、手伝いにきたのだが、あんまり役には立っていない。むしろ邪魔かもしれない。でも、クローバーが僕を無理に追い出す素振りを見せないの、そのまま居座ることにする。今は、何となくクローバーの傍に居たい気分だった。

僕が渡したバターの欠片を、クローバーはパスタの麺に丁寧に絡ませる。ほのかに甘い香りが、キッチンを満たす。自然とお腹が鳴った。

僕がトングをつかってパスタを皿に盛り付けると、その上から、クローバーが、温め直したミートソースをかける。

「ほい、できた。」

ドライパセリで彩りを添えれば完成。

美味しそうだ。

テーブルセッティングをして、僕らはそれぞれ席に着く。

「いただきます。」

そう手を合わせて、僕はパスタを一口頬張った。ひき肉の旨みと、トマトの酸味がマツチしていて、最高に美味しい。

「んーんー最高！」

「うん、麺の茹で加減もちょうどいいな。」

僕が目を瞑って最初の一口の余韻を楽しんでいる向かいで、クローバーが満足気にうなづく。

こんな時間が、僕らの、何気ない普通の幸せなのだ。

貧しいことは、それだけで不幸だと、ロツツは言った。ロツツだけではない。あの地下工場に人を集める手引きをしている公国も、きつとそう思っているのだ。

何ともめちやくちゃで、乱暴な話だった。貧しいことは、不自由ではあるが、不幸であるとは限らない。

そもそも、国こそが、そういう貧しい者を幸せにするシステムを考えるべきなのではないだろうか。

「ねえ、エル。」

「ん？」

「この国のこと、どう思う？」

食事の終盤、クローバーがフォークを置きながら聞いてくる。僕がちよっと多めに盛った分を、きっちり残していた。

「残してるよ。」

「食べられない量を盛る方が悪い。」

どうやらバレていたようだ。

「もつと食べないと。」

「はいはい。それより、質問に答えろよ。」

クローバーは僕の言うことを聞きはしない。僕はため息をついた。

「難しい質問だなあ。抽象的だし。クロはどう思ってるの?」

「気に食わない。」

クローバーらしい回答だった。僕は思わず苦笑いを返す。

「エルは?」

「うーん……。国の政策の一つとしては、まったく無い話ではないかな。でも、良策とは思えない。先々まで考えれば、とんでもない愚策だと思うよ。」

上の者のために、下の者を切り捨てるとするのは、どの時代の、どの国でも、ある程度行われてきたものだ。だが、それで良い結果を残した国はほぼないと言っているだろうか。

「本当のこと言えば、こんなめっちゃくちゃなことしないと、国を保てない時点で、この国は既に終わってるんだよ。」

「だよな。こんな国、さっさと滅んだ方がいい。」

クローバーの言葉に、僕は肩を竦める。国の最期とは、どんなものだろうか。滅んだら滅んだで、たくさんの人が死ぬだろう。不死の薬を作るよりもずっとたくさんの方が。

「エル、私は許せないんだ。」

クローバーはそう言いながら、食後の紅茶をゆっくりと喉に流し込む。

「死は平等で絶対のはずだ。貧しかろうと、金持ちだろうと、死ぬ時は死ぬ。それなのに、あいつらは、それを勝手な基準で選別して、操作した。」

国が滅んで人が多く死ぬことは、ある意味仕方ないことなのだ。それよりも、死が平等であるという真理を破壊される方が、ずっとずっと許せない。

「これは数の問題じゃない。質の問題だ。」

クローバーはそう言って、真剣な目で僕を見る。

「エル、これはすごく大事なことなんだよ。神でもないやつが、勝手に人の生き死にを決めてる。しかもその基準が『金』なんだよ?」

そもそも、人の命の価値に、基準なんて設けられない。金持ちだろうと、貧しかりょうと、健康だろうと、病気だろうと、強かりょうと、弱かりょうと、生きる権利は平等であるはずだ。

「自分は上だと思い込んで、下の方を切ることに、なんの痛みも感じないやつは、きつといっぱいいるよ。まったく、想像力が足りない。」
クローバーはそう言って、うんざりしたため息をつく。

「そうだねえ。いつ自分が下になるかなんて、わからないのに。」

僕はそう言いながら、空っぽになったお皿をテーブルの奥に押しやって、赤ワインが入ったグラスを傾ける。安物のお酒だが、中々美味い。

人生何があるかわからない。今お金を持っていて、数年後に全てを失っているかもしれない。いつ病気になるか、いつ事故に遭うか、世の中一寸先は闇なのだ。上の者が下に、下の者が上に、立場は目まぐるしく入れ替わる。

「いつ下とみなされて、誰が犠牲になってもおかしくない社会っていうのは、恐ろしいよね。」

僕は苦い顔をする。

「僕はさ、世界にとってなんの価値もない人間だから、真っ先にやられる気がするよ。」

僕は、誰にも必要とされずに生きてきた。

社会に貢献することもなく、誰かを救うこともなく。

身近な人からは、疎まれ蔑まれ、兄や父のサンドバッグになるくらいしか能がなかった。唯一僕を必要としてくれた妹は、死んでしまったし、クローバーだって、僕がいなくても全然問題なく生きていけるだろう。

だからといって、僕は誰かに必要とされたいのかといったら、それはまた違う。誰かに絶対的に必要とされるのは、それはそれで苦しいものだ、師匠のところで学んでいたから。

僕はただ、何となく、ふわふわと、クローバーに寄り添って生きて

るだけでいい。

「お前馬鹿だな。」

クローバーが呆れたように漏らす。

「そもそも、価値のある人間なんて居ないんだよ。」

クローバーの言葉に僕はポカンとしてしまう。

「人は皆、誰かに必要とされてるとか、役割があるとか、そんなこと言うやつはいっぱいいるけど、そんなのは全部嘘っぱちだ。」

クローバーはそう言いながら、腕を頭の後ろで組んで、大きく伸びをする。

「何にも持つてなくても、何にもできなくても、何の役にも立たなくても、生きてていいんだ。命っていうのは、本来そういうもんだろ。価値がなくても、全然問題じゃない。」

目から鱗。そんな考え方があるとは、思いもしなかった。

命に価値があると思うからこそ、相対的に価値のない命がある。全部に価値がないなら、そこに優劣はつかない。

だが、価値がないからといって、簡単に切り捨てていいものなのかといえば、それは違う。たとえば世界に貢献していなくても、平等な命の1つとして、大切に扱われるべきなのだ。

「クロは、意外に頭がいいんだね。」

「意外ってなんだよ。」

不満そうな顔をするクローバーを見て、僕は笑った。

何だかとても心が軽い。劣等感に苛まれ続けていた僕を、クローバーはいとも簡単に救ってくれた。当たり前のように、飾らない言葉で。

しばしの沈黙。

僕らはそれぞれに思いを巡らせる。

きつと僕は、何もできない。万能薬の秘密を知ったからといって、この国ごと動かす力なんてもってないのだ。だからといって、何もしないというのとは、違う。ただ、黙っていれば、簡単に潰されてしまう。たとえ無力でも、抵抗する。流されて終わる人生なんて、僕はもう、受け入れられそうにない。

「(なんだか僕も、クローバーに似てきたな。)」

僕はそう思つて「ふふっ」つと笑つてしまった。

「何笑つてんだよ。」

クローバーは中々目ざとい。

「別に。僕はクロが好きだなーつて。」

僕の返答に、クローバーはうんざりした顔を返す。

「くだらいこといつてねーで、さっさと皿片付けろ。」

「まだ残つてるよ。」

僕が、パスタの残つたお皿を突き出すと、クローバーはバツの悪い顔をした。

「はい、あーん。」

麵をフォークで巻いて、クローバーの口元に持つていく。クローバーはすごく嫌そうな顔をしたが、最後は諦めたように口を開け、パクリと一口食べた。その要領で、4口程でお皿を空っぽにした。

「よし、いい子。」

僕は満足した気持ちでお皿を下げた。

「くっそ……。もう二度とお前に盛り付けやらせねー。」

クローバーはそう言いながら、テーブルに突っ伏し、うなだれた。それを見て、僕は笑つた。

こんな小さな幸せ瞬間を、赤の他人が不幸と決めつけて、奪うことなど許されないのだ。

僕は、僕の大事な幸せを守るため、この歪んだ国と戦おう。たとえ無謀でも、クローバーと一緒になら、大丈夫な気がした。

番外編〜Enjoy☆海!! その1〜

「海だ!!」

「うみーー!!」

「きゃーー!」

ユイゼ、セリク、Ayamiの3人は、ビーチに着くなり、そう叫んで、一直線に海に飛び込んでいく。

「おい、準備運動くらいしろ!」

クローバーがそう呼びかけるが、3人はどこ吹く風で、水をかけ合って「きゃーきゃー」はしゃいでいた。

「まったく……。」

クローバーは呆れたため息をつく。

「姉御おお!!」

そんなクローバーに、にもが抱きついてくる。

「うおわっ!なんじやい、にもちゃん。」

「何で水着じゃないのおおお!!」

クローバーはタンクトップにストラックスト、軽装だが、海で遊ぶには若干不向きである。

「私は水着とか似合わないから。」

「そんなことない!早く着替えて。」

「てゆーか、にもちゃん……か、貝殻水着……!」

クローバーは貝殻水着を完璧に着こなすにも姿に、思わず頬を染める。

「そーだよ!可愛いでしょ!」

にもはそう言いながら、ポーズングを取った。「バーン」という効果音が付きそうな大胆な姿だ。

「にも、キレイだよ。」

もふが恥ずかしげもなく、ニッコリ笑いながらもを褒める。その言葉に、にもは嬉しそうにふにやっと笑った。

「ほら、クロも着なよ。持ってるでしょ?水着。」

エルサイスはそう言いながら、デッキチェアや、パラソルなどを積

んだ、大きな荷物を降ろす。既に汗だくの様子だ。

「嫌だよ。」

「ダメ。着るの。」

にもはそうキツパリと言うと、嫌がるクローバーを無理やり岩陰へと連れていく。

「えっ?にもちゃん?!ここで?あ、待って!脱がさないで!いやああああああああ」

岩陰から聞こえるクローバーの断末魔の叫びを、もふとエルサイスは、ニヤニヤしながら聞いていた。

「最高ですね。にもさんグツジョブです。」

「良かったですねえ。これでクロさんの水着姿が見れますね。」

「にもさんが着てるあの貝殻水着、白染めにしたのもふさんの趣味ですよね?」

「バレました?最高でしょ?」

「最高です。クロにも着せたいです。」

そう言い合う2人に

「しゃべってないで、設営手伝えよ!!」

と、パラソルを砂浜に刺しながら、テイルが呼びかける。

「このむつつりスケベ共め!!」

テイルが、エルサイスともふをそう罵ると、2人は

「シスコンに言われたくありません。」

「むしろロリコン?」

と、言い返す。

「誰がロリコンだ!!」

「まあまあ、皆さん落ち着いてください。」

3人の間に、Ryuが割って入る。

「もう、テイル!ケンカしないの!」

Ryuの影から、ソラが顔出す。黒い水着に身を包み、いつもより大人っぽく見える。

「そろそろソラちゃん!!水着似合うね!似合うけど……似合うけど……ダメだあああ!!」

「え？」

テイルは戸惑うソラをバスタオルでぐるぐる巻きにする。

「他の男にこんな姿は見せられない！」

「アホですね。」

「ソラさんのその姿に興味があるのは、ロリコンのあなただけですよ。」

テイルの行動を、エルサイスともふは冷めた目で見ていた。間に挟まれたRyuは、困った苦笑いをする。

「もー、テイルったら！馬鹿なこと言っていないで、早く設営するよ！みなさんも、お手伝いお願いします。」

ソラがそうやって頭を下げると、男達は

「はーい。」

と行儀よく返事をして、ビニールシートや、パラソル、デツキチエアの設置を始めた。

テイルとRyuは積極的に働き、設営をサクサク進めていく。一方、エルサイスともふは、パラソル1個を立てると、その下にデツキチエアを2つ並べ、それぞれ寝そべり、既に休憩を取っていた。

「お前ら自分のスペースだけ確保して終わりにするな！」

テイルが2人を叱り飛ばす。

「心外ですねえ。」

「僕らはこうしながらも、皆さんのお昼の準備をしているんですよ。」

2人は寝そべりながらも、合成棒をいっぱいに使って、プロシエツトや、フラウンダームニエルなど、ランチ用の料理を作っていた。

呆れたため息をつくテイルの元に、ソラが寄ってきて

「ねえ？テイル、私も海行ってきたもいい？」

と上目遣いで聞く。早く遊びに行きたくて、仕方ない様子だ。

「いいよ、ソラちゃんは遊んでおいで。あ、浮き輪忘れないようにね！溺れたら大変だから。おーい！！お前ら！！」

テイルが先に海はしゃいでいたユイゼ、セリク、Ayamiに声をかける。

「ソラちゃん行くから一緒に遊んで、見ててくれー。」

「はい。」

「了解しました！」

「ソラちゃんこっちおいでー!!」

3人はそれぞれ返事をすると、ソラを手招きして迎え入れる。ソラは嬉しそうに浮き輪を抱えてトタトタと走っていった。

「気をつけて行っておいでー。」

テイルはソラを満足気な表情で見送る。楽しそうなソラを見て、自分まで嬉しくなったようだ。

「じゃーん！」

岩陰から、にもが、水着姿のクローバーを連れて出てくる。クローバーは恥ずかしそうに頬を染め、ソワソワと落ち着きがない。

「おおー、クローバーさん似合ってますよ。」

「クロ、キレイだよ。」

デッキチエアから体を起こし、エルサイスともふが、交互に声をかける。そんな褒め言葉に、クローバーはますます照れて

「う、うるさい!!見るな！」

と顔を真っ赤した。

「姉御、私たちも海行こう！」

にもがクローバーの手を引いて走り出す。

「え、にもちゃん!待って!私…泳げないの!」

そう言いながらも、何の抵抗できず、連れ去られて行くクローバーに、エルサイスは命綱の浮き輪を投げる。クローバーはそれを華麗に受け取ると、にもに引っ張られるように、海に引きずり込まれていった。

「きゃー!!」

というクローバーの悲鳴を、エルサイスともふは苦笑いしながら聞いている。

設営が終わり、落ち着いたテイルは、パラソルの下のシートに寝そべり、1人ハイボールを飲んでた。その近くでは、ソラとAyamiとRyuが、砂でお城を作っている。

「あやみん、暑いからこれ被って。熱中症になっちゃうよ。」

Ryuがそう言って、Ayamiに麦わら帽子を差し出す。

「うるさいな！わかってるよ。」

Ayamiはプンプンしながらも、Ryuから帽子を受け取り、被る。

「あやみさん、ここにトンネル作りたいですー。」

「おっけー！ソラちゃん任せて。ほら、りゆう、手伝って！そっち側から掘ってよー！」

「え!?!ああ、うん。」

RyuとAyamiは、砂山の両側から、手で砂を掘り進め、トンネルを開通させていく。

「わー！早いー！」

ソラは嬉しそうだ。

砂山の真ん中で、トンネルが開通し、AyamiとRyuの手が触れ合う。

「あっ……。」

お互い意図しない接触に、2人は思わず声を上げ、頬を赤く染めた。照れて俯く2人を、ソラは不思議そうに見つめる。

「どうしたんです?」

「え、あ……別に……。」

「い、いや……なんでも……。」

恥ずかしさに、しどろもどろになるRyuとAyami。

そこにテイルが割り込んできて、ソラの目を手で覆い隠す。

「ソラちゃんにはまだ早い。」

「……………?」

照れてお互いの顔も見れないAyamiとRyuの間で、ソラはわけもわからず、テイルに目隠しされながら首を傾げた。

番外編くEnjō☆海!! その2く

「気持ちいいねえー。」

ユイゼは、海岸から少し離れた底が深い場所で、浮き輪の上に乗る、波の上をゆらゆらと漂っていた。近くにはセリクがいて、ユイゼの周りをグルグル泳ぎ回っている。

「ユイゼちゃん、暑くない?」

「うん、大丈夫。ありがとう、セリク。」

ユイゼは波に揺られながら、日光浴を楽しんでいた。波の上にただプカプカと浮かんで脱力していると、とても気持ちがいい。

そこへ、少し大きめの波がくる。

「あつ。」

ユイゼがそう声を出した時には、もう遅かった。浮き輪はあつという間にひっくり返り、ユイゼの体は海に投げ出されてしまう。

「きやつー!」

「ユイゼ!!」

セリクは急いで潜って、水中でもがいているユイゼを抱き寄せ、水面まで引つ張りあげる。

「ぶはあつー!」

「大丈夫!?!」

「う、うん……ゴホツゴホツ……。」

セリクは、むせるユイゼを砂浜まで引つ張って泳いだ。砂浜につくと、ユイゼを座らせ、その顔を、心配そうにのぞき込む。

「セリク、コホ……ご、ごめん……。」

水に濡れ、目を潤ませながら、そう謝るユイゼを、セリクは不可抗力ながら、至近距離で見つめてまい、その色つぽさに、思わず目を下にそらす。そして今度は、水着姿のユイゼの、胸の膨らみを見てしまう。

「(う、うわあ……。)」

目のやり場がない。ついさっきまで、まったく意識していなかったのに、一度気になると、そこばかり見てしまう。白い肌、やわらかそうな肉、真ん中にはいる谷間の線。

「セリク……?」

無反応なセリクに、ユイゼが首を傾げる。

「あ、いや!!なんでも……な……い……。」

罪悪感に襲われたセリクは、思わずユイゼから顔を背ける。

「(ダメだダメだダメだ!!)」

理性を総動員して、よからぬことを考えてしまいそうな頭を、なんとか制御する。

「ユイちゃん大丈夫?」

そこに貝拾いをしていた。クローバーともが、心配そうに割り込んできた。

「くーちゃん、にもちゃん!大丈夫ですよ!油断してたら、ひっくり返っちゃいました。」

ユイゼはそう照れたように笑う。

セリクは2人の登場をチャンスと思い

「ぼ、僕、泳いでくるので、ユイゼちゃんのことお願いします!」

と言い残すと、振り返りもせず、海に飛び込んでいった。

「あつ!セリク!」

「なんだあいつ。」

「さあ?なんかちよつと変だったねー。」

首を傾げる乙女たちを置いて、セリクはがむしやらに泳ぎ、今は何も考えないようにと、体を動かし続ける。

「(早く忘れないと……。)」

セリクは瞼に焼き付いたユイゼの姿を、何とか振り払おうと、必死になっていた。

「ちよつと……今の見ました?エルさん。」

「ええ、見ましたよ。もふさん。」

エルサイスともふは、デツキチエアに寝そべりながら、セリクとユイゼの間に起こったことの一部始終を見て、ニヤニヤ笑っていた。

「セリクさんは相変わらず若いですねえー。」

「ユイゼさんは流石ですね。あれは童貞殺しですよ。」

エルサイスの言葉に、もふは思わず吹き出す。

「セリクさん、ガッツリ見てましたからね。ユイゼさんの胸を。」

「うんうん、羨ましいですね。あれ相手がクロだったら、0.5秒で腹パンが飛んできますよ。」

もふはゾツとして自分のお腹を押しやる。クローバーの腹パンは、完全にトラウマになっていた。

「もふー!!」

そんな2人の元に、クローバーともが帰ってくる。

「見てー、キレイな貝殻拾ったの。」

にもはそういうと、ピンク色の小さな貝殻を、数枚手のひらに乗せ、もふに見せた。

「あのねー、これとこれを組み合わせると……」

にもは貝殻をパズルように合わせて

「ハートになるんだよ!」

と、手のひらの上で小さなピンクハートを完成させる。

「おおー!すごいね!」

もふはそう褒めながら、にもの頭をよしよしと撫でた。にもは得意そうに「ふふんっ」と笑う。

「もふに1個あげる。半分ずつ持って、お守りにしたい。」

もふは貝殻を大事そうに受け取る

「ありがとう。後でネックレスか、ピアスに加工してあげるね。」

と言って、ウィンクした。それに気を良くしたにもは

「お礼はキスでいいよ。」

と言って、目を瞑り、唇を「んっ」と突き出す。もふは一瞬困った顔をするが、すぐに取り直し、そつとももの頭を抱くと、その耳に口を寄せ

「キスは夜、2人っきりの時にね。」

と囁く。その言葉に、にもは溶けるようにその場に崩れ落ちた。

顔を赤く染めて「キヤーキヤー」言っているにもを、クローバーは呆れたように見ていた。

「クロもやって欲しい?」

「間に合ってる。」

顔を寄せてきたエルサイスの頬を、クローバーは手で突っぱねる。
「つれないなあ……。」

「うるせえ。くだらねーこと言ってないで、ランチの準備しろ。」
「はい。」

エルサイスは不満そうに返事をしながら、もふと一緒にテーブルセッティングを始めた。

レジャー用のダイニングテーブルに、所狭しと並べられた料理。ブ
ロシエツト、クロケツト、フラウンダームニエル、マーリンソテー、ア
オバカツオのたたき。

どれも美味しそうだ。

育ち盛りの若者たちと、大食いの成人男性の前では、大量の料理た
ちは、あまりにも無力だった。あつという間にテーブルの上は空にな
る。

「はぁーお腹いっぱい!!」

Ayamiがそう息をつくとき、Ryuが

「はぁーいっぱい……ハニーパイ!!」

と、親父ギャグを飛ばす。笑ったのは、本人とテイルだけだった。

「ははは」と馬鹿笑いしているテイルの横で、ソラが眠そうに目をこ
すっている。

「ソラさん疲れちゃいました?」

エルサイスが声をかけると、ソラは

「うーん……。」

と、ウトウトしながら、あくびをした。

「こんな大勢で出掛けて遊ぶのは初めてだからな。はしゃいで疲れた
んだろ。」

テイルはソラを抱き上げると、よしよしと頭を撫でる。ソラはテイ
ルの肩にごしごしと顔を擦り付け

「寝たくないよお……。まだ……みんなと遊びたい……。」
と甘えたように呟いた。

「大丈夫。あとでちゃんと起こすから、今は寝な。」

テイルはそう言いながら、ソラをデツキチェアに寝かせると、背中

をポンポン叩いて、寝かしつける。スヤスヤ眠るソラの横顔を見て「さすがテイルさん、もう立派なパパですね。」

と、もふがからかう。

「誰がパパだ。殺すぞ。」

テイルがギリリと音がしそうな目で、もふを睨みつけたが、もふは怯むどころか、ニコニコした笑みを返し、余裕の表情だ。

「まあまあ、落ち着いて。」

見かねたRyuが仲裁に入る。

「なんだ？ケンカか？そーいうのは、レイドで発散しろ。」

そう割って入ってきたクロバーは、水着姿に剣と盾を装備していて、なんとも奇妙な格好だ。

「腹ごしらえが終わったら、レイドだろう？」

そうするのが当たり前と言うようなクロバーの口ぶりに、男性陣は一樣に首を傾げる。それとは対照的な、女性陣は皆水着姿のまま武器を構え、準備万端の様子だ。

「クロ、本当に行くの？レイドに。」

「当たり前だろ。」

やる気満々なクロバーを前に、エルサイスはため息をついた。

1パーティは8人。海には10人が遊びにきていたが、ソラがお昼寝をしてしまい、その付き添いで、テイルはレイドの参加を辞退した。

レイドに参加するのは、聖騎士壁のクロバー、短剣援護&回復のエルサイス、機工士援護のにも、両手剣火力のもふ、拳聖火力のユイゼ、両手剣火力のセリク、両手剣火力のAyami、弓回復のRyu、以上の8人だ。

「じゃあ、軽く打合せしましょう。」

エルサイスはそう言うのと、レイド参加メンバーを集めて、ミーティングを始める。

「レイドボスのトコナツミ自体は火属性ですが、攻撃の主な属性は水属性なので、武器、防具、スキルを水属性で固めて下さい。」

エルサイスの指示に、何人かが下を向いてステータスを開き、装備

やスキルを変更する。

「ナツミは処理しますか？」

セリクが質問する。

「どうしましょうか？」

エルサイスが全員に聞き返す。

レイドボスのトコナツミが召喚する雑魚のナツミは、物理&魔法攻撃が大きく低下するデバフをこちらに付与してきて、戦闘を大きく遅滞させる原因になっていた。だからといって、安易にナツミを倒すと、トコナツミの攻撃力が超絶強化されてしまい、全体攻撃で全滅する恐れがある。

「倒すか。ダメージ上がると気持ちがいいし。」

クローバーがあっけらかんと言う。

「え？倒したら死んじやうんじやないです？」

「タイミング良く倒せば、全滅はしませんよ。」

心配そうなAyamiに、エルサイスが返す。

「津波攻撃の直後に処理すれば、次の津波攻撃までに攻撃力超絶アツプのバフが切れるから、全滅は免れるらしいですね。タゲ取ってる人は痛いですけど。」

もふが壁のクローバーの様子を伺いながら言う。

「クロなら大丈夫ですよ。ちよつとやそつとじゃ死なないので。」

エルサイスはそう言ってニッコリ微笑む。どこか自慢げだ。

「問題は誰がナツミを処理するかだな。タイミングを間違えば全滅必至。責任重大だ。」

クローバーがそう言って、パーティーメンバー1人1人を見回す。誰も目を合わさなかった。

「臆病者め。」

クローバーがそう揶揄すると、おずおすとユイゼが手を上げ

「誰もやらないなら私が……」

と立候補する。

「大ボスの候補に応募する……。」

「りゅうは黙ってて。」

ダジャレを挟むRyuを、Ayamiが注意して黙らせる。

「ユイゼちゃんいいの?」

「うん、誰もやりたがらないし。仕方ないかなって。」

セリクが心配そうにそう聞くと、ユイゼは無理に笑顔を作った。

パーティーメンバーのうちアタッカーは、もふ、ユイゼ、セリク、Ayamiの4人。その中で、ユイゼは拳聖で、トコナツミ特攻武器の脱種チェインソーではなく、拳武器をメインしていて、ナツミ処理に向いているというわけではなかった。

「おい。」

どこかうかない顔のセリクに、クローバーが声をかける。

「はい?」

「ナツミ処理、お前やれ。」

「えっ?!」

突然の命令に、セリクは戸惑った声をあげた。

「男ならデカイ責任持つ経験も、たまには必要だろ。」

セリクは困ったように頭をかく。そんな姿を気遣って

「無理しないで、私がやるよ?」

とユイゼが声をかける。ユイゼに心配はかけられない。セリクは覚悟を決めると

「わかりました。僕がやります。」

とクローバーを見つめ返した。

「おっし、決まりだ。」

クローバーはそう言うと、満足気に微笑んだ。

番外編〜Enjoy☆海!! その3〜

合図の鐘がなる。

砂浜に現れた、巨大な魔物、トコナツミ。赤い色をしたゲルミ族で、麦わら帽子にスイカの浮き輪と、可愛らしい格好している。しかし、その見た目とは対照的に、すごく強い。さすがレイドボスだった。

クローバーはフォアフロントを唱えたあと、クロスブレイドでトコナツミを切り裂く。どちらもヘイトがつく、特別なスキルだ。

「火力はタゲが安定するまではクリティカル重視で。にもさんデバフ優先でお願いします。りゅうさんはHP減るまで攻撃してていいですよ。」

エルサイスが滑らかな指示を出す。

にもがスモックボールで敵の攻撃力を低下させている横で、もふが涼しい顔で流水剣を放つ。特攻武器&弱点属性のクリティカルヒットで、かなりのダメージを与えていた。

「もふは強いなあー！」

にもはそう言いながら「ひゅー」とはやし立てるように口笛を吹いた。

「にも、集中しないと危ないよ。」

「大丈夫、姉御が守ってくれる!」

「そんなんで死んでも知らないからね。」

クローバーがカレッツブレイドで攻撃しながら、にもに言い返す。にもはおかしそうに笑うだけで、全然気にしていない。随分余裕がありそうだ。

一方Ayamiは、初めてのレイドに緊張していた。震えだしたくなる両手を、キツく剣を握り締めて、押さえ込む。足がすくんで、中々攻撃できないでいるAyamiの隣で、Ryuが

「トコナツミ……トコナツミカン。」

と、小声で言いながら、ライトニングアローを放っていた。Ayamiは思わず、脱力して、ため息をつく。

「どうしたの?あやみん?」

Ryuが不思議そうに首を傾げながら聞く。

「別に、何でもない！」

いい感じに力が抜けた。もう震えはこない。

「(りゆうのくだらない親父ギャグも、たまには役に立つ。)」

Ayamiはそう思つて、ほんの少しだけ微笑むと、ウォータースラッシュでトコナツミに斬りかかった。

「ナツミ出現。」

クローバーの報告に、セリクは緊張する。

「セリクさん、一撃で倒せる位まで、ナツミのHP減らしといて下さい。」

エルサイスの指示に、セリクは

「は、はい！」

と、緊張で裏返りそうな声をなんとか押さえ込んで返事をする。

「セリク？大丈夫？」

「大丈夫。」

心配そうなユイゼに、セリクは無理やり笑顔を返す。ここで弱みを見せたら、男がすたる。

セリクは自分を奮い立たせるように、力いっぱい剣を振り上げ、氷晶刃でナツミに切りかかった。半分ほどHPを削つて、待機する。

「タイミングきたら合図します。」

エルサイスの指示を待ちながら、セリクはタイミングを見計らっていた。

トコナツミが両手を上げ、ウネウネとダンスを踊るような仕草をする。

「津波がくるぞー！」

クローバーがそう叫ぶ。その後ろで、エルサイスがエアシールで風印を付け、回復の準備をしていた。

「くっ……。」

「ぎゃっ……。」

トコナツミが呼び寄せた津波の威力は中々だった。激しい水流に揉まれ、何人かは怯む。

「セリクさん！」

エルサイスに言われる前に、セリクは波をかき分け、ナツミに流水剣で切りかかっていた。

「あっ……。」

それは思わぬ失敗だった。

「おい、ビビってんじゃねーぞ。」

クローバーが笑いながらセリクを揶揄した。

「ご、ごめんなさい！」

セリクは、涙目になりながら謝罪する。

「大丈夫です。そのまま放置で、次のタイミング待ちましょう。」

「気にしない。気にしない。」

エルサイスと、にもが、励ましの言葉を送る。

セリクが切りかかったタイミングはバツチリだったが、ほんの少しだけ攻撃力が足りなかった。ナツミを一撃できず。倒せなかったのだ。

それでも、休んでいる暇はない。全員津波でびしょ濡れになりながらも、戦闘を続ける。

「にもさん、メンテナンス使えます?」

「おっけー。」

にもが攻撃力低下のデバフを一時的に解除する。

「一気に叩き込め！」

クローバーがクロスブレイドでトコナツミを切り裂きながら叫ぶ。クローバーの言葉に反応して、ユイゼがバフ付きの嵐を食らわせる。防御無視の多段攻撃で、ユイゼはかなりのダメージを叩き出していた。

「ユイゼさんは強いですねえ。」

もふはそう言いながら「あなたはどうか?」というように、セリク様子をチラリと伺う。安い挑発だ。でも、セリクはそれに乗った。一瞬ムツとした顔を見ると、トコナツミにウォータースラッシュを放つ。

「もふさん、若人をからかってはいけませんよ。」

エルサイスがウォールで、津波のダメージを回復しながら言う。

「エルさんだって、人のこと言えないでしょう?」

「まあそうですね。」

「まったく。嫌なやつらだよ。」

クローバーがうんざりしたように漏らす。AyamiとRyuは、困ったような苦笑いを返した。

「ほら、くるぞ。次は仕留めろよ。」

クローバーがそう言った直後、津波が全員を襲う。

激しい水流の中、セリクは目を凝らしてナツミに狙いを定めた。オーシャンリッジの一撃で、ナツミは黒い霧になった。

「クロ!!」

エルサイスの呼びかけに、クローバーはすぐ反応して、デイフェンススタンスで自身の物理防御力を上げる。エルサイスは、すかさず暗い霧を唱えて、トコナツミの攻撃力を下げた。

「Ryuさん多重回復を。」

「はい!」

攻撃力が超絶アップしたトコナツミが、クローバーに次々攻撃を加える。攻撃種類よっては、1000以上のダメージを食らっているが、クローバーはまったく怯まない。減ったHPは早打ちでスキルの回転率をあげたRyuが回復する。

「さすが姉御!!」

にもはなぜか嬉しそうだ。

「相変わらずの鉄壁ですねえ。」

もふはそう言いながらも、トコナツミへの攻撃の手を緩めない。次々にスキルを使い、ダメージを与えていく。

「ナツミ復活。」

クローバーの報告とほぼ同時に、セリクが動く。

「いい動きだ。」

クローバーが満足気に微笑む。

「津波きます。」

「痛てえぞ。全員頑張って耐えろ。」

クローバーはそう言いながら、プロテクションで全員の防御力を上げる。超絶アツプはしていないが、トコナツミの攻撃力は高いままだ。さっきの津波とは比べ物にならないくらい重い波が、パーティメンバーを襲う。

「ぐう……。」

「いたーいー！」

膝を付かなかったのは、クローバーとセリクだけだった。セリクは波に顔を歪ませながらも、一直線にナツミに向かい、黒い霧へと変える。

「やれば出来るじゃねーか。」

「セリク……!!！」

ユイゼの尊敬の眼差しを受けて、セリクは嬉しそうに、そして少し恥ずかしそうに頬を高揚させた。

「ゴツホっ……被害報告。最大ダメージでHPの60%喪失。」

エルサイスが、波にむせながら報告する。

「デバフ後回しで、回復優先にしろ。私は自分で何とかする。」

「了解。りゅうさん、僕も補助ヒーラーするので、クロ以外のメンバーのHPを次の津波まで90%回復させましょう。」

「はいー！」

Ryuはウォール、エアシール、パールと順番に唱え、あつという間に全員のHPを回復させていく。

「あやみん大丈夫?」

次の呪文を準備しながら、Ryuは膝をついてヨロヨロしているAyamiに手を貸した。

「わつと!!！」

RyuがAyamiの手を力いっぱい引っ張って起こしたため、勢い余ったAyamiはバランスを崩し、Ryuに抱きつくような格好になってしまう。Ryuも思わずAyamiを抱きしめて、その体を支える。

「あつ……。」

照れて顔を真っ赤にする2人の間に

「おい、イチヤつくのはあとにしてくれ。私が死ぬ。」

と、HPが半分ほどまで減っているクローバーが割り込んでくる。

「ああ！すみません！」

「い、イチヤついてなんかいません!!」

2人は慌てて離れると、それぞれ回復と攻撃を再開した。クローバーは呆れたため息をつく。他のメンバーはニヤニヤしながらその様子を伺っていた。

「にもさんクールタイムが終わり次第スモックボールでデバフをお願いします。火力はDPS優先で回転率上げてください。」

「はい。」

「ほいつ。」

「はい！」

エルサイスの指示に、それぞれが返事を返す。

「あと少しだ。出し惜しみすんな！ぶっ倒せ！」

クローバーがその声をかけると、全員が一気にトコナツミにスキルを叩き込む。

そうして8人は、小さな連携を幾重にも積み重ねながら、勝利への道突き進んでいった。

番外編くEnjoy☆海!! その4く

テイルは、デツキチエアの上でぐっすり眠るソラの隣で、1人ハイボールを飲んでいた。

炭酸のピリピリとした感覚と、レモンの爽やかな香りが、喉を突き抜けていくと、うだるような暑さが、あつという間に吹き飛んでいく。

「はー。うまい。」

思わずそう呟きながら、ソラの様子を伺う。

ソラはスヤスヤと規則的な寝息を繰り返し、気持ちよさそうに眠っていた。

その姿がなんだかとても愛おしくなって、テイルはソラの柔らかいブロンドの髪を、優しく撫で付けた。

今までずっと家族で旅をしていたが、こうやって大勢で集まって遊ぶというのは、テイルにとっても、ソラにとっても、初めてのことであった。

それはとても刺激的で、同時にとても穏やかで、素敵な経験だ。

「う……うん……。」

ソラがモゾモゾと動き、寝返りを打つ。

「ソラちゃん?そろそろ起きようか?」

ソラが寝てから、30分ほど経っていた。

「う?……うん……。」

ソラはまだ眠そうな目を擦りながらゆっくり起き上がる。

「大丈夫?」

「あ!!私寝ちゃった!みんなは!」

はっと目を覚ましたソラが、慌てたように辺りを見回し、テイル以外誰もいないとわかると

「帰っちゃった?」

と、泣きそうな顔をした。そんなソラを見て、テイルは笑った。

「誰も帰ってないよ。みんなレイドに行ったんだ。」

「よかったー。」

ソラは安心したため息をついた。

「ソラちゃん、海は楽しい?」

「楽しい!!みんなとなら、毎日行きたい!!」

「毎日はさすがに無理だなあ。」

テイルはそう困ったように笑いながらも、心の中では喜んでいた。

ソラに普通の仲間がいて、一緒に楽しい時間を過ごして、幸せな思い出が作れる。それはテイルが子供の頃は、できなかった経験だ。

「私もレイド行ききたかったなあ。」

「また今度、一緒に行こう。みんなで。」

「うん!」

そう笑顔で返事をするソラの頭を、テイルは優しく撫でた。

レイドに行っていた8人が帰ってくると、ソラは大喜びで走っていった。

「くーちゃんおかえりなさい!」

先頭を歩いていたクローバーに、ソラが抱きつく。

「おー、ソラちゃん!ただいま。」

クローバーはソラを優しく抱き上げると、そのままぐるぐる回り、振り回す。ソラはきやつきやと声を上げて笑った。

「どうだった?」

テイルが訪ねると

「とても良かったですよ。みなさん総ダメージ上位報酬ももらえたようですよ。」

と、エルサイスが答える。

「セリクさんも大活躍でしたし。」

もふがニヤリとしているのを、テイルは呆れた様子で見つめ返す。

「どうせまた、からかってたんだろ?」

「失礼な。ちよつとハツパをかけただけですよ。」

不満そうな顔をするもふに、テイルは嫌そうな顔をした。

「セリクかつこよかった!」

憧れに目を輝かせたユイゼに、そう言われたセリクは、思わず頬を赤く染め、照れたように頭をかく。

「いい経験になっただろ?」

クローバーがソラを地面に下ろしながら言う。

「はい。ありがとうございますー！」

セリクはそう返しながら、丁寧なお辞儀をする。騎士らしい、真つ直ぐで整ったお辞儀だ。クローバーはそれを見て満足そうに微笑んだ。

「ねえ、クーちゃん、私まだ海で遊びたいです。」

ソラが上目遣いで、クローバーの手を引きながら言う。

「うん、遊ぼう！遊ぼう！今日は夜まで遊ぶよ！」

「やったー！」

「姉御行こう！行こう！」

にもがクローバーの手を取り、一直線に海へ走っていく。その後ろから、浮き輪を抱えたソラが続く。

「にもちゃん待って！！私泳げないんだってばっ！！」

「私が教えてあげるよ！」

「わああああ！！キヤー！！」

クローバーの叫びを、エルサイスは笑いながら聞いていた。

エルサイスの隣で同じように笑っていたRyuの肩を、Ayamiがトントンと叩く。振り向いたRyuにAyamiは

「りゅう、さつきは起こしてくれて、ありがとう。」

と言いながら、頬染め、すぐに目をそらす。

お互い、さつき抱き合った時の感覚がまだ体に残っていた。なんだか恥ずかしくて、でも嬉しくて、2人は照れたよう笑い合った。

「あやみんさーん！！ここお山作って、水流したいです！」

波打ち際で浮き輪を背もたれにしながら、砂遊びをしているソラが、大きくAyamiに手を振る。

「おっけー。大きいやつ作ろう。ほらー！りゅうも手伝って！」

「う、うん。」

いつもより少し素直なAyamiに、Ryuは戸惑いながらも、喜びを感じていた。

「セリク、私たちも行こう！」

ユイゼはそう言いながら、セリクの腕に抱きつく。腕に当たる柔ら

かい感触に、セリクは思わず『そこ』を見てしまう。柔らかい膨らみが、自分の腕にぎゅっと押し付けられていた。

「(ああああ!!ダメだダメだダメだ!!)」

セリクは叫び出したくなる気持ちを何とか押さえ、腕を振り払い、そっぽを向く。

「セリク?」

振り払われたユイゼは、多少のショックを受けていた。なぜ振り払われたか理解できない。

「どうしたの?遊ぶの嫌だった?」

「あ、いや……。」

顔を真っ赤にしたまま、返答に困るセリクを、ユイゼは不思議そうにのぞき込む。

「(う、上目遣い……!!)」

セリクのライフは既にゼロだ。

「ユイゼさん、セリクさんは少しお疲れのようですから、先にクロたちと遊んで下さい。」

エルサイスがそう助け舟を出しながら、ユイゼをセリクから離し、海の方に手を振る。

「クロ!!ユイゼさんがそっちに行くよ!」

「ちよつ……今それどころじゃ……ゴホツゴホツ!死ぬ!」

「はーいー!」

スパルタ水泳教育を受けているクロバーの代わりに、講師のにもが大きな返事を返す。

「さあ、ユイゼさんも、クロに泳ぎを教えてください。」

エルサイスはそう言っユイゼにウィンクした。ユイゼは少し躊躇って、チラリとセリクを1度見たが、最後は

「はい……。」

と返事をして海へとかけて行った。

「まったく……。」

一部始終を見ていたテイルが、呆れたため息をつく。

「ほんとに……勘弁してくれ……。」

そう独り言を言いながら、顔を押しさえてうなだれるセリクを、エルサイスともふはニヤニヤして見ていた。

「ソラちゃんの前でそういう破廉恥なことすんなよ。」

「僕は破廉恥なことなんか……!!」

「してるだろ?」

「うっ……。」

テイルに一言も反論できないセリクは、悔しそうに唇を噛んだ。

「まあそういうお年頃ですから、仕方ないですよ。」

「羨ましいですねえ。」

エルサイスともふが、涼しい顔でセリクをからかう。セリクの心は今にも折れそうだ。

「まあ健全な反応なんじゃねーの?この2人よりはマシさ。お前らどーせ、レイドでも、水着姿で戦う女ども見て、心の中でニヤニヤしてたんだろ?」

テイルが、エルサイスともふに軽蔑の眼差しを向けながら言う。

「そりゃあそうですよ。あんな軽装でボスの攻撃に一切怯まないク口。美しすぎます。」

「波飛沫の中、髪を揺らすにもも、かわいかったですよ。」

ニコニコしながら答える2人に、セリクは戸惑う。どうしたらここまで開き直れるのかさっぱりわからない。

「ソラちゃん行かせなくて良かった。このむつつりスケベめ。」

「ロリコンに言われたくありません。」

そう睨み合う3人を前に、セリクは大きなため息をついた。どうやらまともな大人はここには居ないようだ。

「とにもかくにも、パートナーを悲しませてはいけません。」

「ユイゼさんに、ちゃんと謝ってきた方がいいですよ。」

そう言われたセリクは、海で遊んでいるユイゼを見る。ユイゼは、うかない顔をしていて、笑い方もどこかぎこちない。腕を振り払われたことが、かなりこたえているようだった。セリクの胸が罪悪感で痛む。不可抗力とはいえ、申し訳ないことをしてしまった。

「さあ!!」

もふにそう背中を叩かれたセリクは、一瞬戸惑って3人を振り返ったが、テイルが

「さっさと行ってこい。」

と言いながら、手をしっしつと振ると「うん」とうなずいて海へと走っていった。

「まったく、世話が焼けるぜ。」

テイルはそうため息をつきながらも、どこか気分が良さそうだ。意外と世話焼きなのかもしれない。

「さあ、僕らは夕飯の用意をしながら休憩です。」

「暗くなったら花火もやりますから、それまでの体力温存しておきましょう。」

エルサイスともふはそう言うと、順番にあくびをし、デッキチェアに寝そべり合成を始めた。

テイルは2人とは少し離れたシートの上に直接寝転がると、またハイボールに口をつける。

海では、クローバーがにもの地獄の水泳レッスンを受け、セリクとユイゼがそれを笑って見ている、AyamiとRyuとソラが、その近くで砂のお城を作っていた。

それぞれが、それぞれに海を楽しんでいた。

夜にはバーベキュー、そして最後は盛大な花火で、幕引きだ。

そうして、8人心に、夏の思い出がまた1つと、刻まれていくのだった。

第65話 嘘つきの末路

疲れていた。

クローバーも、僕も泥だらけだ。

連邦の大農園に、野菜をもらいに顔を出したら

「おお!!これは冒険者殿、これから秋野菜の収穫をするのだ。手伝ってはくれんかの?」

とバスタに捕まってしまい、普段から大量の野菜を無料でもらっている僕らは、その恩から断ることが出来ず、農作業を手伝った。

最初は新鮮な体験を楽しんでいた僕らも、バスタの人使いの荒さに疲れ果て、農園を出た夕方頃には、クタクタになっていた。

広がる平野をとぼとぼ歩きながら、僕らは帰路につく。

「宿、どうしようね……。」

「うん。」

「公国まで行くの面倒だね。」

「うん。」

流石のクローバーも疲れているのか、いつにも増して口数が少なく、うつむきがちだ。

ユーキが僕らを『魔王の手下』と嘘の街宣してから、連邦の城塞都市には、もう長いこと泊まっていなかった。

「お風呂に入りたいなあ。」

クローバーがため息まじりにもらす。

クローバーは連邦の宿にある小さなバスルームがお気に入りなのだ。

今日は疲れているし、農作業で泥だらけなので、お風呂に入りたくなる気持ちはわかるが…。

「城塞都市かあ……。」

僕はため息をつく。

人の噂も七十五日というが、ユーキが街で僕らを『魔王の手下』呼ばわりしてから、まだ1ヶ月ほどしか経っていない。

家を持たずに、毎日泊まるところを探さなければならぬ僕ら冒険

者にとつては、泊まれる宿が制限されることは、大きな痛手になっていた。

「もういいんじゃないか？何と言われようと。」

「厄介事は禁物だよ。連邦は特にピリピリしてるからね。」

事はそんな単純な問題ではないのだ。戦争前に、動き回って、その動向を探る僕らは、連邦にとつては目障りな存在だろう。

連邦は、何かしらのきっかけさえあれば、いつでも目障りな僕たちを捕らえて、首を跳ねることだってできる。気をつけなければいけない。

「わかってる。でも、挑戦してるみる価値はあるだろ？城塞都市にく、宿に止めてもらうよう頼む、無理ならそのまま牛車で公国へ。OKだったらラッキーって感じで。」

「断られても暴れない？」

「暴れる元気もねーよ。今は。」

バスタは本当に人使いが荒い。戦闘以外でこんなに疲れたクローバーの姿を見たのは、初めてだ。

「とりあえず行こうか。城塞都市に。」

僕はそういいながら、励ますようにクローバーの頭をクシヤツと撫でた。いつもならすぐ振り払われるのだが、今はその気力さえないらしい。クローバーはうつむき加減で、黙って僕を受け入れていた。

「助けてくれ……魔王が……魔王が町の中に……！」

城塞都市につくなり、町人の男がそう言って、助けを求めてきた。

僕とクローバーは顔を見合わせる。何かよからぬことが起こっているらしい。

僕が「どうする？」と尋ねる前に、クローバーは既に走り出していた。さつきまで疲れた姿はどこに消えたのか、クローバーの体力は底が知れない。僕は疲れて悲鳴をあげる体を必死で動かして、そのあとに続く。

「うわあああ……。」

叫び声が聞こえる。広場で、人が倒れていた。僕らを陥れたユーキ

と、そのパートナーのカレンだった。

倒れている2人の前には、魔物が立っていた。

「ふん、お前らでは話にならん!」

そうユーキとカレンを見下ろす魔物を見て

「またお前か!!」

と、クローバーが呆れ返った声をあげる。

ライオンのような鬣、4本の角、鋭い爪。猫のような出で立ちのこの魔物は、すでにクローバーに2回討伐されている、魔王アスタナだ。

「無念……!」

アスタナの足元で、ユーキはそう漏らすと、気を失った。カレンはユーキより先にやられてしまっていたようだ。先程から目を瞑ったまま動かない。

「来たか、勇者よ! 忘れはせぬぞ、貴様の刃の痛み!」

アスタナがそうクローバーを責む。

「私は勇者じゃない。ただの冒険者だ。」

クローバーがうんざりしたように返す。

前回あった時からそうだが、この魔王はどこかズレている。クローバーとまったく波長が合わないのだ。

僕はそのズレがおかしくて、思わずクスクス笑いを漏らす。

「今回は前回のように行かぬ! 墓標に刻む名を考えておけ!」

「うるせえなあ……。性懲りも無く何度も挑んできやがって……。いい加減にしろ。」

クローバーはそう面倒そうにしながらも、デモンソードⅡアビスを抜くと、構える。

「手伝おうか?」

「必要ない。」

とりあえず聞いてみたが、予想通りの答えが返ってきた。

「あまり無理せず、ゆっくりやって。」

僕がそう声をかけている途中で、クローバーはアスタナに切りかかる。本当にクローバーは僕の言うことを聞きはしない。僕はため息をついた。

勝負はあつという間だった。10秒経たずにアスタナは膝をつき「ぐはあ……1度ならず2度までも……!」

と言いつつ、黒い霧になって消えた。

「正確には、3度目ですけどね。」

僕がそう呟いた声が、アスタナに届いたかどうかはわからないが、それはもうどうでもいいことだった。

「クロ、お疲れ様。」

「まったく疲れてない。」

僕が声をかけると、クロローバーが不機嫌そうな返事をする。僕はそれがおかしくて笑ってしまった。

「まあ前より確かに強くなってたよ。でもまあ、レベル1が5になった程度、誤差の範囲だ。弱いことに変わりはないな。」

剣を収めながらクロローバーが言う。

魔王は倒す度に強くなって復活するというが、アスタナがクロローバーより強くなるには、あと100年くらいの時間が必要かもしれない。その頃には、僕もクロローバーもきつとこの世には居ないだろう。

「おい、起きろ。」

「う、うーん……。」

クロローバーがユーキを蹴って、乱暴に起こす。

「クロ、そんなことしちゃダメだよ。」

「クズ相手に丁寧でいられるほど、私はできた人間じゃねーんだよ。」

僕はため息をつくつと、ユーキの方は諦めて、カレンに手を貸す。

「大丈夫ですか?」

いつもの笑顔と、声色と、角度だ。我ながら完璧だと思う。カレンは戸惑いながらも僕の手を取り、立ち上がった。

「魔王を倒したのは、やっぱりこの人たちじゃねーか!」

「うそをついたのね! 恥ずかしくないの!?!」

立ち上がったユーキとカレンに、町人たちの罵倒が飛ぶ。

「出ていって……この町から出ていきなさい!」

僕とクロローバーは、口出しせず、その様子を伺っていた。

「……みんな、嘘について悪かったよ……。」

彼をもつと生き汚い人だと評価していた僕は、素直に謝るユーキを意外に思った。

引き際は潔く、悪くない。

詰んでからダラダラと言いつつ訳や弁明を繰り返し、嘘を重ねる人が多い世の中で、こうして自分の罪を認めて、謝罪することができるのは、良いことだろう。

「僕たちは町を出ていく。行こう子猫ちゃん。」

ユーキがそう言いつつ、カレンの肩に手をかけた。しかし、カレンはそれを振り払うと

「何よ！あなたたちだってよく確かめもしないで、この人たちを追い出したくせに！」

と反論する。

それは確かにそうだが、それをカレンが言うのは違う。クローバーが僕の隣で

「お前が言うな……。」

と呆れたように呟いていた。正にそれなのだ。

「ユーキが本物じゃないとわかったら、手のひら返すの？ユーキだって、この町を救いたい、この世界を救いたいって気持ちで旅をしている。でも、想いは強くても、なかなか行動や実力がついていかないの。」

カレンは町人に向かいそう演説する。勝手な主張だ。僕には理解できない。

「すべての人間が想いを実現できる勇者になれるわけじゃないのよ！」

「だからって、嘘をついていいわけじゃねえだろうが！」

カレンの演説に、町人が割り込む。一分の間もないまったくの正論だった。ユーキに能力がないのと、僕らを貶めて町人を騙すことは、まったくの無関係の話なのだ。

「そう、だからユーキはそのことに関しては謝った。でも……。」

カレンは一瞬言い淀むと、そのまま押し黙った。ユーキを庇おうとしているのだろうか、かえって傷口を広げているように思える。

もう話とはつづくの昔に詰んでいるのだ。今更何を言ったところで
変わらない。

「何を言っても自分たちのやったことを棚上げにもできないし、言い
訳にもならないのね……。」

カレンは1人納得したように呟くと、顔を上げ

「もういい……行きましょう。」

と言って、ユーキを連れて、去っていった。

第66話 夢をもつということ

心地が良い。

ふわふわゆらゆら漂うように、私はまどろんでいた。暖かい体は、少しずつ感覚失っていき、湯船のお湯と同化していく。揺れて、溶けて、染まって、薄れていく意識。

「クーロ？大丈夫？」

ドアの向こうからかけられた声に、私はハツとして、あつという間に現実に引き戻される。

「寝てる？」

ドアノブに、手がかかる気配がする。

「入ってきたら殺す。」

パシャッと水しぶきをあげながら、私は慌てて湯船から立ち上がり、そちらを睨みつけて牽制を送る。

「のぼせないでね。」

エルサイスは、そう言い残すと、ゆっくりドアから離れていった。

私は長いため息をつくと、再び湯船に身を沈めた。疲れていたので、ついお風呂で眠ってしまったっていたようだ。

入った当初は熱かった湯船も、今はすっかりぬるくなってしまっていた。

ユーキとカレンが連邦を去ると、町人たちは私たちを英雄扱いし始めた。

口々に賛辞を送り、褒め称えてくる彼らに、私は心底うんざりしていた。そうして、明らかに不機嫌になっていく私の手を、エルサイスは強引に引っ張って歩き、私はそれに引きずられるように、宿へときたのだった。

「言い返してやりたかったなあ……。」

宿のバスルームで、私はそう一人呟いた。思うところは色々あった。ユーキのことも、カレンのことも、町人たちのことも、色々納得いかない。

なぜこんなごたごたに、私たちは巻き込まれてしまったのか、さつ

ぱりわからない。

「クロ？また寝てる？」

「起きてるよ。今上がるから、あっち行け。」

まったくうるさいやつだ。私は少々湯船から身を起こすと、バスルームを出た。

「クロがお風呂で寝てる間、何件か貢物があつたよ。」

「貢物？」

服を着て、髪をタオルで拭きながら、パーティーションの向こう側に出ると、エルサイズが机の上にくっつかの料理と、花束を並べて待っていた。

「何これ？」

「魔王退治のお礼だつてさ。」

「くだらねーな。」

私はため息をつくとき、エルサイズから水の入ったコップを受け取り、中身を飲み干す。

「まあいいんじゃない。もらつといて損は無いさ。」

エルサイズはそう言いながら、私と入れ違いでバスルームへ向かう。

「美味しそうなグラタンと、バケツト、フライドポテト、デザートフルーツまであるよ。」

パーティーションの向こう側で、ゴソゴソ服を脱ぎながら、エルサイズが言う。

「なんかさ「これで許してください感」があつて、嫌だな。」

「まあ本音はそうだろうね。」

エルサイズの返しに、私はため息をつく。

こういうそろりそろりと擦り寄ってくる感じが、私は大嫌いだ。ベタベタしたオイルで汚れていくような、気持ちの悪さがある。

「深い意味は考えない方がいいよ。知らないふりして、食べてしまえばそれでおしまい。すぐ上がるけど、お腹がすいてるなら先に食べていいからね。」

エルサイズはそう言い残してバスルームへと消えていった。

私は仕方なく、フライドポテトを一口つまむ。カリカリ感は無かったが、まだ少し温かさは残っていた。

窓から町を見下ろす。もう黄昏時も終わり、夜のベールが町を覆い始めていた。人々は家路へ急ぎ足で向かい、どこか忙しく感じる。

ユーキは勇者になりたかった。強くて、みんなを守れる、勇敢な英雄に。

想いは人一倍あるくせに、彼はそうなるための努力を怠った。そして、見せかけだけで、そうなるうとして、こんな事態を引きをこしたのだ。この結果は、当然のものだった。

カレンは「すべての人が想いを実現できる勇者になれるわけじゃない」といった。それは確かにそうだ。

他の誰よりも騎士になりたいと人一倍願った私だって、結局、騎士になれなかった。

でも、だからといって、私はそうなる努力をしなかった訳では無い。そこがユーキと違う。

私は騎士になるために、死にもぐるいで努力した。様々なものを犠牲にし、傷つき、傷つけられながらも、茨の道を歩み続け、そして最後は届かなかった。

ユーキはその努力を放棄し、口先だけで夢を実現させようとしたのだ。

なんと空虚なものなのだろうか。

私はため息をつく。理解ができない。

みんながみんな、なりたいたいものになれるわけではない。でも、努力することを放棄すれば、いつまで経っても、それになることはできない。

夢を持つということは、かくも恐ろしいことなのだ。絶対に努力しなければ実現できない。でも、精一杯努力したとしても、実現できるとは限らない。

「自分努力だけで、なんでも叶えられるなら、人生ずっと楽なんだけだな……。」

思わずそう口に出してしまう。世界には、自分の努力だけでは、思い通りならないことが多すぎる。

ユーキがこれからどうするのか、私にはわからない。夢を諦めるか、鍛錬に励むのか、どちらにせよ、あのヘタレクズが、勇者になるなんて、私には想像もできない。

でも、人生は何が起こるかわからないのだ。サナギが蝶になるように、騎士になれなかった私が冒険者をしているように、ユーキも思わぬ変化をとげるかもしれない。

「ふー、スツキリした。あ、待つてくれたの？」

バスルームから、エルサイスが出てきて、まだ濡れている金色の長髪をかきあげながら、席に着き、フライドポテトを一口つまんだ。

「ちよつと考えごととしてただけ。」

「ふーん。」

エルサイスは興味が無さそうな返事をして、テーブルセットイングを始める。私はその向かいに座り、食卓を囲む。

「では…」

「じゃあ…」

「いただきます。」

2人で同時にそう手を合わせ、食事を始める。料理は少し冷めていたが、それでも美味しかった。

今私に、絶対に叶えたいという夢はない。ただ、なんとなく毎日を過ごしている。それくらいがちょうどいいかもしれない。

今はただ、エルサイスと2人、この小さな幸せを守っていければいい。でも、そんな簡単な願いでさえも、努力しなければ、壊れてしまうのだ。

「うん、美味しい。このベーコン最高。」

エルサイスは素晴らしいながら、ベーコンとじゃがいもが入ったグラタンを、美味しそうに頬張った。気の抜けたその顔に、私は思わず笑みを漏らした。

「何？」

エルサイスは中々目ざとい。

「別に。口の周りにソースついてるぞ。」

私がそう指摘すると、エルサイスは舌でペロリと唇をなめた。なんだか子供みたいだ。

夢とか、幸せとか、努力とか、つつい昔のくせで、難しく考え過ぎてしまうが、あまり肩肘張らずにいつてもいいのかもなつと、グラタン1つで幸せそうな顔をしているエルサイスを見て、私は思った。

番外編く乙女達のアドバイスく

時刻は午後4時。

お昼と夜のピークタイムの狭間のこの時間帯は、いくら人の多い公園の酒場でも、閑散としがちだ。

そんな静かな酒場の端の席で、エルサイスは優雅にコーヒーを嗜みながら、うら若き乙女達の会話に耳を傾けていた。

エルサイスの向かいの席には、ボンド『シルフィード』のメンバー、ユイゼと、Ayamiが座っていて、レモネードを飲みながら、お互いのパートナーの話に、花を咲かせていた。

「えー!!りゅうさん急に大胆!!」

「でしょ?いきなりそんなことするからさ、私も……パニックになっちゃって……その……きつ、キスを……。」

「きゃー!あやみんすごい!」

「(あやみさんと、りゅうさんが勢いでキス……。)」

エルサイスは、大事そうなどころだけ頭にメモとして残し、あとは小鳥のさえずりを聞くように、きゃーきゃー言い合う2人の会話を、聞き流していた。

エルサイスのパートナーのクローバーは、夕食の買い出しに出掛けている。今夜はハンバーグだと言っていて、エルサイスはそれが楽しみだった。

ユイゼのパートナーのセリクは、騎士時代の友人と偶然会い、そのまま剣の稽古に、AyamiのパートナーのRyuは錬金素材の買い物に、それぞれ出掛けていた。

パートナーに置いていかれた3人は、たまたま酒場に居合わせて、こうして午後のブレイクタイムを共にしている。

エルサイスは、年の離れた妹を見る様な気持ちで、ユイゼとAyamiを見ていた。

「(ルルが生きてたら、こんな感じだったのかな……。)」

そんな感傷にひたりながら、少し冷めたコーヒーを飲んでいると

「エルさんは、どうなんですか?」

と、ユイゼが聞いてくる。まったく話を聞いていなかったエルサイスは

「何がです?」

と、聞き返す。

「クロロンとどうなんです?」

Ayamiは興味津々の様子で、少し前のめりになっている。

「どう、という?」

話が見えないエルサイスは、首を傾げた。

「くーちゃんとどこまでいってるんですか?」

ユイゼがどこか期待した目で、エルサイスを見つめる。

2人のキラキラした目に晒され、エルサイスは苦笑いを浮かべた。

「どこまで」と聞かれても、困る。そもそもクローバーとエルサイスは、そういう関係ではないのだ。

しかし、その説明をしたところで、まだまだ若い乙女のこの2人は理解できないだろう。エルサイスはそう思って

「さあ、どうでしょうね?」

と、誤魔化してニツコリ笑うだけにする。

それを見たユイゼと、Ayamiは不満そうな顔をした。2人も、もつと甘くて、キラキラした、幸せな話を望んでいるのだ。

「エルさんはいつもそうやって誤魔化して! ずるいです! もつと素直になって、クロロンにアピールしないと!」

そう語気を強めるAyamiがおかしくて、エルサイスは思わず吹き出した。一体どの口が言うのだ。素直になった方がいいのは、Ayamiの方だ。ツンデレなAyamiは、いつも天邪鬼な言動で、パートナーのRyuを振り回していた。

「笑い事じゃないですよ! くーちゃん何だかんだで鈍そうなんですから、はつきりアピールしないと!」

ユイゼの言葉に、エルサイスは堪えきれず、声を上げて笑った。鈍いのはユイゼの方だ。天然鈍ちゃん、伝説のフラグクラッシャーは、何度もセリクの恋心を折っていた。

「エルさん!」

笑っているエルサイスに痺れを切らした2人が、同時にそう責め立てる。

「はいはい、すみません。つい、笑ってしまっただけ。」

エルサイスが目の端の涙を拭いながら言う。

「真面目に考えてくださいー！」

「大事なことなんですよー！」

なぜ2人がこんなに真剣なのか、エルサイスにはさっぱりわからない。女心というものは、不思議なものだ。でも、嫌ではない。むしろ、エルサイスは、どこかワクワクしている2人の様子を、楽しんでいた。「では、どういうアピールをしましょうかね？」

エルサイスがニツコリ微笑みながら、ユイゼとAyamiに質問をぶつける。

「うーん……。」

2人が同時に考え始めた隙に、エルサイスはクッキーをつまむ。Ayamiの手づくりクッキーは、ココア風味のちよつとビターな味わいで、コーヒールによく合う。

「簡単などこでいうと、頭などでなでとか？」

ユイゼがAyamiの頭をよしよししながら言う。

「こーやって優しく撫でられると、安心しますー！」

そう言うユイゼの言葉に、Ayamiが「うんうん」と首を大きく縦に振り、同意を示す。

「軽くぽんぽんするのもいいよねー！」

Ayamiがそう言うのと、2人は顔を見合わせ「ねー」と頷き合った。

「(姉妹みたいだな。)」

エルサイスはつい、話と関係の無いことを考えてしまう。

「あとは……お姫様抱っことかかー！」

「お姫様抱っこ！いいね！憧れるー！」

Ayami提案に、ユイゼが目を輝かせる。

「お姫様抱っこですかあ……。」

随分ハードルが高い要望だ。

「どんなときにやればいいですかね？」

エルサイスがそう聞くと、2人は待つてましたと言わんばりに話し出す。

「怪我した時とか「無理するな」とか言って、強引にグイツと抱き上げるとか！」

「うんうん、それいい！あとは、戦闘でピンチのときに颯爽と駆けつけて、ひよいつと抱えるとか！」

どれもエルサイスには無理そうな話だった。

「エルさん聞いてます？」

気のない様子でコーヒをすすするエルサイスに、A y a m i が口を尖らせながら聞く。

「ええ。つまりお二人は、セリクさんや、りゆうさんに、そうして欲しいんですね。」

「え？」

エルサイスの思わぬ反撃に、ユイゼとA y a m i は目を点にして固まってしまう。

「ちちちちち違います！私はそういうつもりじゃ!!そんなんじやありません!!」

A y a m i は慌てた様子で、手を大袈裟に振って、否定する。

「え……う・セリクに……え……？」

ユイゼは自分の気持ちはまだ理解出来ていないようだが、わからないうなりにも、照れているようで、頬を赤く染めていた。

エルサイスは戸惑う2人を見て、満足気に微笑む。若人をからかうのは、中々楽しい。それは大人の余裕がある者の、特権的な遊びなのだ。

「ユイゼちゃん、遅くなつてごめんね。」

「あやみーん、ただいまーリンソテー。」

あたふたしている2人の元に、セリクとR y u が大きな荷物を抱えて戻ってくる。

「どーも。」

あまりのタイミングに固まっているユイゼとA y a m i を差し置

いて、エルサイスは2人に挨拶を返す。

「いやー、疲れた。ちょうどき、2人に会ったから、6人分のハンバーグの材料買ってきたよ。」

クローバーが、セリクとRyu間から顔を出し、固まっているユイゼとAyamiに目を止める。

「何?この空気?」

「さあ?」

エルサイスは知らないふりをする。

「ユイゼちゃんどうしたの?」

セリクはそう言いながら、ユイゼの頭を優しく撫でる。

「あやみん熱でもある?」

りゆうがAyamiの額に手を当てる。

「な、何でもないから!!」

顔を真っ赤にしながら、声を揃えてそう叫ぶユイゼとAyamiに、エルサイスは声を上げて笑った。

「お前、2人に何したんだよ。」

「僕は別に何もしてないよ。うら若き乙女達の素敵なアドバイスを、真摯に受け止めただけさ。」

そうイタズラっぽくウインクするエルサイスに、クローバーはうんざりしたため息をつく。

「まったく、嫌なやつだ。」

そう言うクローバーの後ろで、ユイゼはセリクの胸に顔を埋め赤い顔を隠し、AyamiはRyuを突き飛ばし、恥ずかしさを誤魔化していた。

第67話 酒場に集まる冒険者

連邦の酒場は今までにないくらい大盛況だった。

席は2階を含め、すべて埋まっっていて、入りきれないお客が、店の外にまで溢れている。

「なんだこれは？」

クローバーが不思議そうに首を傾げる。

「祭りかなんかか？」

「うーん……そういう訳でもなさそうだけど。」

僕は辺りを見回し、様子を伺った。お客はみんな冒険者のようだ。どの人もいつでも戦闘でできるような格好で、遊びにきているような感じはしない。

国境沿いで釣りをしていた僕らは、昼食を取りにこの城塞都市へとやってきたのだが、どうやら選択を間違ったらしい。

カウンターのの中では、店員たちがてんやわんやで働いていて、次々に料理や飲み物を運んでいく。キッチンには戦場のような雰囲気できより怒号が飛び交い、料理人たちが目を回しながら忙しく動き回っていた。

この状態では、いつご飯にありつけるのか、まったくわからない。

「うーん……牛車で公園に行こうか？」

気長に待っていられるくらいの、空腹具合でもないの、僕らは諦めてこの場を去ろうとする。

「あ、姉御!!」

聞きなれた声に、クローバーがそちらを振り返る。

「にもちゃん!!」

隅の方のテーブル席に、にもとそのパートナーのもふが座っていた。

「ここ空いていますよ。座りますっ。」

2人はそう言うと、ベンチシートの上に置いてあった荷物を床にポイッと投げると、無理やりスペースを作る。

「いいんですか？」

「うんうん、いっぱい頼んだから一緒に食べよう！」

にもがそういいながら、大皿の料理をテーブルの真ん中に持つてくる。

僕とクローバーは顔を見合わせると「うん」とうなづき合い、それぞれ席についた。

「姉御に会えるなんてラッキー！」

にもはそう言いながら、隣に座るクローバーにギュツと抱きつく。

「にもちゃん、この混雑ぶりは何？みんな何しにきてるの？」

「あれ？姉御知らないの？」

「知らないできたのなら、とんだ災難でしたね。」

もふはそういうと、最近この辺に出る魔王の話をした。僕と、クローバーは運ばれてくる料理をつまみながら、話半分で聞いていた。

一晩で店の酒を飲み干したとか、カミナリで勇者を圧倒したとか、どれもなんだか胡散臭い内容だ。

「普通の魔王なら、大したことないんですけど、その魔王を封印できたら、報酬もそれなりに期待できるらしいですよ。」

「お前その話、全部信じてるのか？」

「まさか、そんなわけじゃないですよ。」

クローバーの問いかけに、もふはおかしそうに笑った。

「魔王についての噂はどれも眉唾ものですね。でも、報酬については、本当みたいです。実際に連邦の兵士が、その魔王を追ってるみたいですし。」

クローバーが「どう思う？」というように、僕の方をチラリと見てくる。僕は肩をすくめることしか出来ない。

僕らが把握している魔王は3人。

地下工場を縄張りしていたトツポ。この魔王は、先日公国の桜の木の力で封印し、今は公国の宝物庫の中で眠っている。

もう1人は炎の洞窟で僕らが封印を解いてしまったアスタナ。この魔王は1週間ほど前、この城塞都市に出現し、クローバーが討伐したばかりだ。

残る魔王は、人畜無害な魔王、マイカ。僕らは魔王ちゃんと呼んで

いて、クローバーの大事な友人だった。

「その封印されそうになってる魔王って、魔王ちゃんのことなんじゃ……。」

「姉御何か知ってるの？」

にも詰め寄られ、クローバーは困った顔を返す。

「魔王ちゃん、もといマイカさんは、クロの友人の1人なんです。」

クローバーの代わりに、僕がにもに説明する。

「そうなんですか？それなら、この状況はあまり良くないかもしれませんね。」

「こんなにくさんの人がその魔王を狙ってるんだもん！お友達が危ないよー！」

にもも、もふも、クローバーが魔王と友人同士ということに、特段の驚きを見せなかった。

こういうところが、ボンド『シルフィード』の良いところだ。そのメンバーである彼らは、肩書きや属性で、人を安易に判断したり、差別したりしない。

「お友達に知らせてあげたら？逃げた方がいいって。」

にもの提案に、クローバーは

「でも……」

と、言い淀む。そうしたいのは山々だが、そうすれば、魔王封印の報酬目当てでできた、にもともふの邪魔をすることになってしまう。

「にもさんたちは、それでいいんですか？」

僕がそう尋ねると、2人は顔を見合わせ、笑い合った。

「俺らには、絶対に魔王を封印したいなんて強い気持ちはまったくないですよ。」

「そうそう、ただなんとなく、みんな集まってて楽しそうだなあ！って思ってきただけだし。」

そう笑う2人を見て、僕もクローバーもほっと息をつく。利害関係がなければ、気を使う必要も無い。

「お友達を助けてあげて。」

にもにそう言われたクローバーは、決意を込めた表情で「うん」と

うなずいた。

第68話 追われる魔王ちゃん

「もうしつこいってば！」

「いい加減逃げるのを諦めたらどうだ。おとなしく封印されるのだ。」
「なんで封印されなくちやいけないの！」

「災厄を振りまくだけの存在がいてはこまるのだ。神妙にしろ！」
「やめて！」

言い争う魔王ちゃんと、連邦の兵士オスカーの間に、クローバーが滑り込む。

「やめろ。嫌がってるだろ。」

クローバーはそう言ってオスカーの手を掴むと、目力だけで射殺さんとばかりに、その顔を睨み返した。

そのあまりのプレッシャーに、オスカーは一瞬たじろぐ。しかし、そこは訓練された兵士だ。そこら辺のチンピラとは違う。1歩も引かず、クローバーの手を振り払うと

「なんだお前は？」

と、冷静に返す。

「たまたま通りかかった冒険者ですよ。」

僕はそう言いながら、にこやかな笑みをオスカーに向ける。

連邦の酒場で、にもともふと別れてから、僕とクローバーは、魔王ちゃんを探しに、この三国国境まできた。この場所の奥に、魔王ちゃんの自宅があるのだ。

そこを目指している途中で、魔王ちゃんを見つけることができた。それはとても幸運なことだった。

「どこかで見た顔だな。」

「大農園では大変お世話になりました。」

僕がそう言って恭しくお辞儀をすると、オスカーは不快そうに鼻を鳴らす。

オスカーは、大農園の用心棒バスタの弟子で、随分前だが、連邦の王の命令で、大農園を潰しにかかり、バスタと僕らの返り討ちにあっていた。

「毒剣はどうした？もう今頃動けなくなってると思ってたんだけど。」
クローバーがそう聞くと

「どんな時でも先に、解毒薬を飲んでおけっていったのは、あの師匠さ。」

と、オスカーは面倒そうに返した。

バスタの毒剣が、解毒できるとは知らなかった。それが分かれば、あの剣は怖くない。敵を殺傷する剣というよりは、追い払うためのものなのだろう。

「俺はお前らとおしやべりしてきたわけじゃない。そこをどけ。」

オスカーがそう言って、クローバーをおしのけようとするが、クローバーは

「嫌だね。」

と言って道を譲らない。

そうして睨み合いをしている隙に、魔王ちゃんはオスカーの前からスルリと逃げ出す。

「待て！」

あとを追いかけようとしたオスカーを、クローバーが足をかけて転ばせる。

「うぐっ！貴様！」

派手にすっ転び、地面につつぷしたオスカーは、クローバーに怒りの目を向けた。

「事故だよ、事故。足が滑っただけだ。」

クローバーがイタズラっぽい笑みを返す。僕よりたちが悪い。

「クロ、行くよ。」

僕はクローバーに声をかけると、魔王ちゃんの行方を追いかけた。

「また来たー！……ってあなたち……。」

追いかけてきたのが、僕たちだと気づくなり魔王ちゃんは

「あなたたちも、私を封印するために追いかけて……？」

と、猜疑心に満ちた目で、こちらを見てきた。色々な人に追い回されていたのだろう。その表情はどこか疲れて見える。

「僕たちは、魔王ちゃんを封印しようなんて思ってたませんよ。」

僕がそう言うと、魔王ちゃんは、安心したため息をつく。

人間の憎悪や畏怖を受け止めるのが、魔王だと、アスタナは言っていたが、これはあまりにも辛すぎるなど思う。魔王ちゃん自身は人畜無害で、何も悪いことはしていないのに。

「私は封印されるようなこと、何もしてないのに……！」

「魔王ちゃん……。」

クローバーが哀れみの目を魔王ちゃんに向ける。

「……いや、このないだ、ちよつと飲みすぎて、暴れてお皿を4、5枚……10枚ぐらい割っただけだよ！」

「魔王ちゃん……。」

魔王ちゃんの話に、クローバーは、今度は呆れた目を向ける。

「……他のテーブルのお客さんとケンカになって、ただミルクを相手の頭からかけたり……。寝ちゃったお客さんの顔に落書きしたり……。」

僕もクローバーと同じく、呆れ返つてため息をついた。前言撤回だ。魔王ちゃんは、何も悪いことはしていないわけではなかった。

「したよーいろいろしたー悪かったと思ってるー！でも、そんなの大したことじゃないじゃない！」

魔王ちゃんはそう言うと、俯いて唇を噛んだ。

そうなのだ。魔王ちゃんがしたことは、確かに悪いことだが、許されないようなことではない。子供のいたずらのような、かわいいものだ。

魔王ちゃんよりも、もつと醜悪なことをしている人は、魔王、人間、問わず、いっぱいいる。

人を騙して利用しようとしたリーヤン、無意味に農園を潰そうとしたオスカーや連邦の王、物取りを繰り返すポーラ、人の命で万能薬を作るロツツや公国の王ドレイク。

そうやって、大なり小なり罪を犯して、それでもものうのうと生きる人は、ごまんという。

それなのに、比較的罪が軽い魔王ちゃんばかり責められる。理不尽

な話だった。

「確かにちよつと、いたずらの度が過ぎるかもしれないけど……。それだつて魔王ちゃんが、封印される理由にはならないでしょ。」

そう言うクローバーの後ろで、僕は「うんうん」とうなずき、同意を示す。

オスカーは魔王ちゃんを「災厄を振りまくだけの存在」と言ったが、そんなのは嘘だ。

確かに時々厄介事を起こしているようだが、それは些細なことだ。それよりも、魔王ちゃんはいつも色々な人の相談に乗っていたし、様々な話でみんなを楽しませてくれていた。

「見つけたぞー！」

胸に土をつけたままのオスカーが、こちらを見つけ駆けてくる。

「ね、あなたは私の味方？それとも……人間の……？」

魔王ちゃんがオスカーと僕らを交互に見比べながら、素早く言う。

「私は、人間でも魔王でもない、魔王ちゃんっていう存在の味方だよ。」

クローバーが真剣な顔で返す。

「貴様らは魔王の味方なんだな。いいだろう。まとめて叩き斬ってやろう。」

オスカーはそう威勢よく言うと、剣を抜き払う。クローバーも負けじと、デモンソードⅡアビスの剣柄に手をかける。

「待って、こつちよ。」

魔王ちゃんはそう言うと、クローバーの手を引いて走り出す。僕も素早くその後が続く。

走りながら、チラリと後ろを振り返ると、立ったままのオスカーが見えた。僕らを追ってくる様子はなかった。

「ここまでくればもう大丈夫。」

そう言う魔王ちゃんの横で、僕は肩で息をした。そんなに遠くまで走ったわけではないが、瞬間的に全力疾走をすれば、それなりに疲れる。

「あいつ追つてこなかったけど、何で？」

クローバーは僕とは対照的に、息一つ乱していない。涼しい顔で、

魔王ちゃんに疑問をぶつけていた。

「ここは北のアブル連邦と、東のクリシユナ魔王国、南のマーロ共和国との国境地帯。どの国でもない、非武装中立地帯ね。」

「ああなるほど。」

魔王ちゃんの答えに、僕は息を整えながら、そう呟き納得する。

中立地域に、連邦の兵士が侵入したとなれば、他の2国に対する軍事行動と思われるもおかしくはない。

「連邦の兵士がここでひと暴れしたってなれば、外交問題になりかねない。場合によっては、戦争の引き金になる可能性だってあるから、オスカーさんは動けなかったんだよ。」

よくわかっていないクローバーに、僕が説明する。魔王ちゃんは僕の説明に「うんうん」とうなずいた。

「さて、私たちも魔王国にも共和国にも入れないし、連邦にも戻れない。一旦、お城に戻るしかないかな……。」

僕らは魔王ちゃんの言葉に従うと、その後ろをついて歩き、魔王城へと向かった。

第69話 封印

魔王ちゃんの自宅、魔王城に私たちはきていた。

「とりあえず、座って。」

と魔王ちゃんに言われるが、座れるような場所は、部屋の真ん中にそびえる大きなソファアーベッドしかない。あとは床にベタ座りするのだ。

私はそろそろと、ソファアーベッドの端にすわり、ほっと息をついた。それも束の間、すぐ隣にエルサイスが割り込んできて、肩と肩がベツタリくつつくような位置に腰を降ろしてくる。

「くつつくな。うざったいな。」

私はそう言って、エルサイスを押し、ソファアーベッドの下の床に突き落とす。

「酷いなあもう。」

エルサイスはそう文句を漏らしながらも、顔は笑っている。こんなとわかってやっているのだ。

まったくタチが悪い。

そうやってじゃれてくるエルサイスに、私は心底うんざりしていた。

「ごめんね。お茶くらい出してあげたいところんだけど、なんにもないの。」

魔王ちゃんが、私が座ってる場所とは反対側の端に座りながら、申し訳なさそうに言う。

「大丈夫ですよ。紅茶くらいならすぐ合成できます。」

エルサイスはそう言うと、布袋とアロエベラを使って、紅茶を合成し始める。

合成を待っている間、魔王ちゃんがポツリポツリと愚痴をこぼし始める。

「魔王ってだけで、事情も聞かず追いかけられるなんて……。」

そう目を伏せる魔王ちゃん頭を、私は慰めるようによしよしと撫でた。魔王ちゃんは唇を噛み、今にも泣きだしそうな顔をする。

「あなたまで巻きこんで……。」

「私は別にいいよ。どちらかっていうと、自分から巻き込まれにいったんだし。」

いつもは、わけもわからずブルブルと面倒ごとに巻き込まれる私たちだが、今回の件は、自ら進んで飛び込んだ結果だ。大事な友人の1人である魔王ちゃんを守るためなら、多少の厄介事は致し方ない。

「もう死にたいよ……でも死ねない。魔王だからね……。」

そう呟く魔王ちゃんに、エルサイスが無言のまま、合成したばかりの紅茶を渡す。魔王ちゃんは小さく「ありがとう」と言うと、カップを受け取り、一口口をつけた。

沈黙。

私はチラリと横目で、エルサイスの様子を伺う。

いつもと同じ、ほんの少しだけ口角が上がって、どこか微笑んでいるようにも見えるような顔で、彼は空中に目を向けていた。

魔王ちゃんの話に、あまり興味はなさそうだ。

エルサイスは魔王ちゃんのことを、私の、つまり『クロの友人』とは言うが、『僕たちの友人』とは言わない。

結局、そういうことだ。

これはパートナーである、私の友人の問題であって、彼にとっては、直接関係のない話なのだろう。

「薄情なやつだな。」

今更ながら、そう思う。

ボンド『シルフィード』のメンバーだって、私の仲間だから仲良くしているだけなのかもしれない。

エルサイスのそういうところは、本当に嫌いだ。変に他人と距離を置く。いつまでも心にブレーキがかかったままのようで、もどかしい。

「何？」

私の目線に気がついたエルサイスが、不思議そうに首を傾げながら、こちらを見る。上目遣いが、どこか子供っぽくみえた。

「別に。」

私が素っ気なく返すと、エルサイスはふっと笑みを零す。そうやって自然に笑ってる方がいいのにと、どうでもいいことを考えてしまう。それはさておき。

「どうしよう……。」

魔王ちゃんが、そう俯きながら呟いたので、私は意識をそちらへ持っていく。

「封印されるしかないのかな……。」

私もエルサイスも、なんと答えたらいいかかわからず、沈黙を続ける。

封印されると、一体どういう状況になるのか、私たちにはわからない。そうした方がいいとも、悪いとも、言えるだけの材料を私たちは持っていないのだ。

「あいつらじゃなくて、あなたたちになら、封印、されてもいいかな。どう？魔王を封印してみたくない？」

「え?!」

何度も言うように、封印されたあとの状況はわからない。しかし、何となく暗くて、狭くて、冷たい場所に閉じ込められるというイメージがあつて、あまりいい気はしない。

私は困って、エルサイスに助けを求めた。エルサイスは肩を竦めて首を左右に振るだけで、助言をくれそうな雰囲気はない。

「(役立たずめ。)」

心の中で毒づいて、八つ当たりする。

「外の人たちは、私が封印されていれば、納得してもらえるんでしょ？」

「そうだとしても、魔王ちゃんを封印するなんて……。」

私は途中で言い淀んでしまい。先を続けることができなかった。どうするのが正解なのか、私にはまったく見当のつかない話なのだ。

「うん……そうしよ、そうしよようよー!」

魔王ちゃんは一人で勝手に決意すると、私の両手を手に取り、ニッコリ微笑んだ。嬉しそうなその姿に、私は戸惑うが、どうにもできず、ただ黙ったまま魔王ちゃんを見つめ返す。

「どうせ封印されるなら私の大切なものに……そうね、私の杖の石に。」

魔王ちゃんはそういうと、自分の杖の先から、ハート型の石を取り出すと、私に握らせた。

ずっしりと重いそれは、沈みゆく太陽のような赤さで、ルビーのように煌めいていた。

「クロの髪と一緒に色だね。」

何気ないエルサイスの言葉に、私はなんだか嬉しくなる。

「そのかわりね、約束。封印されたら私のこと、誰にも渡さないでね？」

宝石の上から、私の手をギュツと握りながら魔王ちゃんが言う。夕方と夜の間の空のような紫色の目は、真剣そのもので、有無を言わせぬ威厳が宿っていた。

私は何も言い返すことができず、ただコクンとうなずいた。

「それじゃあ……やるね。」

魔王ちゃんに押し切られる形で、こうなってしまった感はあるが、私にもそれなりの覚悟はあった。大事な友人を守れるなら、私それを受け入れよう。

魔王ちゃんは立ち上がると、両手を組み、宝石に向かって祈りを捧げる。

私とエルサイスは、その様子を部屋の隅から見ていた。

覚悟はあったものの、これから魔王ちゃんがどうなってしまうのか、何か悪いことが起きてしまうのではないかと、心配で、怖かった。はからずも、藁にもすがるように、隣にいるエルサイスのローブの裾をギュツと握ってしまおう。強く握りすぎて、爪が白くなっていた。しかし、それでもして縋りついていないと、深い闇のような不安に、押しつぶされてしまいそうだった。

エルサイスはそんな私を見て、ふっと笑うと、私の肩に手を回し

「大丈夫だよ。」

と囁いた。

口先だけの、適当な言葉だ。それでも、私は少し安心する。気休め

だって、時には役に立つのだ。

魔王ちゃんの祈りに反応するように、ハート型の石は空中に浮き、その姿を星のように煌めかせる。

金色の光が、幾筋も魔王ちゃん体から伸び、胸の前に、集約されていく。

これが、魂の輝きなのだろうか。とても神秘的で儂く、蜂蜜酒のように甘美で、美しい。

光がゆっくりとハート型の石へと吸い込まれていく。

私はその眩しさに、思わず目を閉じる。

気がついた時には、魔王ちゃんの姿はなく、ハート型の石だけが、無造作に床に転がっていた。

第70話 魔王ちゃんは渡さない

「魔王ちゃん……!」

私は駆け寄り、石を拾い上げる。ハート型の石は、さつきと姿かたち、色、重さも、まったく変わらず、煌めいていた。

「大丈夫かなあ?」

誰に向かって言ったわけでもなかった。独り言というか、ただ口から滑りでるように漏らしただけで、誰の返事も期待していなかったのだが

「う、うん……。聞こえるよ。」

という声がして、私は思わずギョツとする。

「え?魔王ちゃんなの?!」

石に向かって話しかけると

「うん。っていうか、封印されても、喋ることできるんだね。」

と、若干くごもった声で、魔王ちゃんの返事が返ってくる。

「……なんか、封印されるって変な感じ……。もっと気持ち悪いのかと思っただけど、割としっくりくるかも。」

その言葉を聞いて、私は安堵する。思ったより酷いことにはなっていないさそうだ。

「よかったね、クロ。」

エルサイスは私の横に立つと、髪をクシヤツと撫でてくる。私はすぐその手を振り払うが、動作はいつもより数倍優しくした。安心したのはたしかだったから。

「さあ、じゃ、魔王を封印した冒険者様!凱旋に連邦まで向かいますよ?」

そうおどけたように言う魔王ちゃんに、私は思わず吹き出した。封印されても、魔王ちゃんは、魔王ちゃんだった。

「行くかうか?」

エルサイスに促され、私たちは魔王城を後にした。

魔王城を出て、三国国境に戻ると、まだオスカーがウロウロしている

た。

「魔王手下め、覚悟しろ！」

「まだいたのか。しつかけーなあ。」

勇んで私の胸ぐらを掴んできたオスカーに、私は冷たい目を向ける。

「あんまりしつこいと、女性に嫌われますよ。」

エルサイスが割り込んできて、オスカーの手を引き剥がす。

私はチラリとエルサイスの様子を伺う。顔にはいつもの優しい微笑みが貼り付いているが、かなりの力が入っているようで、手の甲に血管が浮き出していた。

「(中々いい用心棒かもな。)」

そう思ったのも束の間、次の瞬間、エルサイスはオスカーに突き飛ばされ

「うわあわつとー！」

と無様な声をあげながら、フラフラと尻もちをつく。よろける姿は風に舞う紙のように軽く、用心棒というには、明らかに弱そうだ。

「なにやっつてんだよ。」

呆れながらも、エルサイスに手を貸し、引っ張って起こす。

「ははは……ごめん……。」

エルサイスはそうどこか照れたように力なく笑いながら、頭をか

く。
私を守ろうなんて1000年早い。

「魔王をどこへやった？」

オスカーが剣柄に手を添えながら、凄む。血気盛んなやつだ。人のことは言えないが。

「魔王は僕たちが封印しましたよ。」

エルサイスはそういうと、鞆からハート型の石を出して、オスカーに見せる。

「封印されちゃったああつ！」

石の中から、魔王ちゃんが大袈裟に叫んだ。いい演技だ。

オスカーは一瞬、驚くように目を見開いたが、それが本物とわかる

と、劍柄から手を離し

「ふむ。なるほど、魔王の味方のふりをして奴を封印するとは、善人面して、さすが冒険者。やるな。」

と、私たちに賛辞のようなものを送る。

オスカーセリフについては、大いに引つかかるところはあったが、彼をまんまと騙せたなら、今は目を瞑ってもいいだろう。

「じゃ、これで。」

私がそう言っつて、この場をそそくさと立ち去ろうとすると、オスカーが

「待て。それをこちらへ渡せ。」

と、引き止めてきた。

私は思わずギクリと体を強ばらせる。

「だめーやだー！」

魔王ちゃんが必死の抵抗を見せる。

肌身離さず持つてると約束したのだ。こんな雑魚に渡すわけにはいかない。

「なぜ渡さなければいけないのですか？」

どう言えばいいのかわからず、オロオロしている私に代わって、エルサイスが前に出る。いつもの、仮面のようなにこやかな笑みで、オスカーの前に立つ彼の姿は、堂々としていて、相手を欺いていることなど、微塵も感じさせない。

「(用心棒より、詐欺師が似合うな。)」

つい、そんなことを考えてしまう。

「もともと、その魔王は連邦の地下に封印されていたのだ。我々に渡すのが筋だろう。」

「そうは言っつても、魔王を封印したのは僕らです。そう易々と、他人であるあなたに簡単に渡すわけにはいきません。」

「渡せないっていうのか？」

オスカーがエルサイスに睨みを利かせながら、再び劍柄に手をかける。それに反応して、私もデモンソードⅡアビスの柄を握る。すぐさまエルサイスが私の肩に手を置き「待て」をしてきたが、かまってい

られない。向こうが抜いたら、こっちだってやるしかないのだ。

「ちよつといいか。」

睨み合う私たちの前に、フラリとフェンダークが現れた。地面からぬつと湧いてきたかのように、何の気配も感じさせず、本当にそれは突然だった。

「おい、友人。」

なんて声をかけてくるが、本当にこいつは神出鬼没で、よくわからないし、なんとなく信用出来ない。

「誰だ、お前は？」

剣柄に手をかけたままのオスカーが、フェンダークに食ってかかる。

「なに、シュリンガー公国のドレイク大公の使いさ。連邦の魔王を封印してこいつって言われてな。」

「なんだと？公国の大公が？」

私とエルサイスは顔を見合わせた。

降って湧いた公国の話に、私は戸惑っていた。連邦で悪さをしている魔王を、公国が封印するメリットは？フェンダークと大公の関係は？魔王ちゃんを巡って連邦と公国がやり合う可能性は？

様々な疑問が、泉の湧き水からふつつつと膨らむ泡のように、生まれては消えていく。

キャパオーバーだ。

「クロ、動いちやダメだよ。」

エルサイスがそう小声で警告してきた。そして私の肩から恐る恐る手を離し、私が飛び出さないのを確認すると、安心したように息を吐いて、ほんの少しだけニツと笑う。

彼はそのまま目線を前に、柔和で温厚そうだが、確かな自信と威圧を漂わせる顔で、オスカーと私の間に立ちはだかる。その隣には、フェンダークが腕組みをしたまま、これから楽しいイタズラをする子供のような顔で立っていた。

どうやら、下がっている、ということらしい。幾らばかりかの不満はあったが、こいつらの話に、ついていけそうな気はしない。

私は小さなため息をつく、構えを解き、行き場を失った両腕を抱え込むように腕を組み、事の成り行きを見守ることにする。

私が構えるのをやめたので、オスカーも剣柄から手を離す。

「公国が何を企んでいるのか知らんが、こいつは連邦のものだ。渡すわけにはいかん。」

オスカーはそう言いながら、エルサイスの手に握られた石を顎でしゃくる。

「誉れ高き騎士様が、手柄の横取りですか？」

エルサイスがいつものものにこやかな笑みを貼り付けたまま皮肉を言う。

「どうしても言うなら、国も絡むことだ。戦争にもなりかねん。」

フエンダークが意地悪そうにニヤニヤ笑いながら、エルサイスに続く。

私はこれから繰り広げられる展開を予想して、オスカーを哀れむ。

「一兵士が、手柄ほしさに、他国の使いを斬った、となるとどうなりますかねえ？」

「お前のせいで、一兵士の勝手な判断で。」

「どれだけの人が命を落とすのでしょうか……」

「ヒツヒツヒ。楽しみだねえ。」

エルサイスとフエンダークから、交互に繰り出される言葉のパンチに、オスカーはたじろぎ、奥歯を噛んで、悔しさに顔を歪ませた。

グウの音もでないようだ。

思った通り、この2人を敵に回すところくなことがない。口達者で皮肉屋で、あつという間に相手を丸め込んでしまう。

私は思わず身震いした。こんな猛攻撃には、絶対に遭いたくない。

「ふん……よかろう。だが、陛下には報告させてもらうぞ。どういう展開になるかは保障しない、そう大公に伝えろ。」

苦し紛れに、オスカーが捨て台詞を吐く。そこで離してやればいいものを、趣味の悪いフエンダークはまだ絡みつく。

「はいはい。私は魔王を封印できず、公国から依頼された冒険者に手柄をとられました。冒険者を肅清する能力も私にはありませんでし

た。つてきつちり報告するんだぞ?!」

つと嫌味を重ねる。本当に、オスカーが哀れだ。

「くっそ!!」

オスカーはそう悪態をつくど、苛立ちに足を踏み鳴らしながら去っていった。

第71話 フェンダークとドレイク王

僕の向かいで、フェンダークが足を組み、豪華なソファに寄りかかっていた。両手をソファの背に回し、ふんぞり返るその姿は、偉そうで、明らかに態度がでかい。

クローバーは、フェンダークのように粗暴さこそないが、緊張する様子もなく、僕の隣で紅茶を優雅にすすっていた。そして時々、テーブルに並べられたアフタヌーンティーセットの中から、マカロンやクッキーを好きに摘んで、美味しそうに食べている。なんだか機嫌が良さそうだ。

僕は、メイドのナギから差し出されたカップに目を落とす。琥珀色の水面に、ゆらゆらと自分の顔が映り込んでいた。それを消し去るように、カップを持ち上げ、一口する。ほのかに香るベルガモット。アールグレイだ。その美味しさに、満足した気持ちで息をつく。

3人とも、これから一国の王に謁見するとは思えないリラックス具合だ。

「ドレイク公がその魔王を欲しいって言ったのな、ありや嘘だ。」

オスカーが去ると、フェンダークはあっさり自分の嘘を認めた。

僕は始めからそうだろうと思って、話を合わせていたので、特段驚きもしなかったが、クローバーは予想外だったようで

「はっ？」

つと間の抜けた声をあげた。

「全部ハツタリだったってこと？」

驚きと呆れが入り交じった顔で、クローバーが僕を問い詰める。僕はその顔がおかしくて

「うん、そうだよ。」

と答えながら思わず笑ってしまった。

「お前はこいつと相性がいいみたいだからな。そういうことにして、ためえが持つてりゃいい。」

フェンダークはそういって、僕から魔王ちゃん封印された石を奪う

と、ポーンとクローバーに向かって投げた。

クローバーは魔王ちゃんを落とさないようにと、慌てて手を伸ばす。石はクローバーの手の中で3、4回お手玉のように跳ねて、最後はその胸元に収まった。

「危ねえだろ!!」

不満そうに口を尖らせるクローバーを、フェンダークが気にする様子はない。

飄々としているといえば、僕もそうだが、彼はまた僕とは違う。僕はどちらかと言うと、特に感情が湧き出ないので、そういう態度になっってしまうのだが、フェンダークは何かを隠しているような、わざとそう振舞っている気がする。

だからといって、彼を問い詰めたところで、それこそ飄々とかかわされてしまうだろう。

今のところ、フェンダークが何を隠しているようと、僕らに害はない。ならば、わざわざそうする必要はなかった。

「持つてろとは言いが、そうするなら一応、大公陛下の許しをもらわにやいけねえ。まずは公国に顔出しに行くか。」

フェンダークの言う通りだ。キチンと筋を通しおかなければ、後々面倒なことにもなりかねない。

そうして僕らは、シュリンガー公国まで、王の謁見に向かったのだった。

相変わらず、ゆったりとした時間が流れていた。

クローバーがレモン色のマカロンに手を伸ばし、カリッと一口噛むと、爽やかなシトラス香りが、僕の方まで漂ってくる。

「うん、美味しい。」

そう満足そうに呟くクローバーを横目に、僕は2杯目のアールグレイに口をつける。

ドレイク王に会うのは、これで3回目だ。

1度目は、公国の小狡い兵士長フランクに着せられた濡れ衣を晴らすため。2度目は、ドレイク王のメイドの1人だったノエルを救うた

め。

自分で言うのもなんだが、こんな小汚い冒険者が、一国の王に謁見するなど、先の2回のように、何か特別な用事がない限り、ほぼ不可能だ。

こうしてここで紅茶を嗜みながら、謁見の準備ができるのを待つていられるのは、もつぱらフェンダークのおかげだった。彼はメイドのナギに

「フェンダークだ。王さんに言っとけ。」

と言うだけで、取り次いでもらっていた。

彼は本当によくわからない。見た目も思想も、その辺にいるチンピラをちよつと上品にしたような感じなのに、王と簡単に謁見できる人脈を持っている。一体何者なのだろうか。

「準備ができました。こちらへ。」

ナギが僕らの前にスつと姿を現し、王の元へと案内してくれる。その凛とした雰囲気は、メイドというより、騎士のような風格だ。

僕とクローバーは、フェンダークの後ろに続いて、王の間に足を踏み入れた。

「久しぶりだな。フェンダーク。」

公国の王ドレイクが深いゆつたりとした声で挨拶する。白い髪に白い髭、相当な年齢なのだろうが、老人の弱々しさはない。むしろ、年輪を重ねた太い大木のような、強い力が感じられ、どっしりとした威厳漂う風貌だ。

「あれ、俺とは初対面じゃなかったか？ドレイク王さんよ。」

フェンダークが意味ありげにドレイク王に軽口を叩く。王はほんの少しだけ眉をピクリと動かしたが、表情自体はさほど変わらない。前にあつた時もそうだったが、ドレイク王の表情は、石膏でできている像のように、ほとんどまったく動かない。いつも同じ、相手を射るような強い眼差しの厳しい顔で、怒ることも、笑みを浮かべることもない。

僕の卓越した顔色伺いの能力をもってしても、この顔から、内なる感情を読み取るのは、相当難しいものだった。

「……して、何用か。」

「こいつの持つてる宝石をよ、この国で預かってるってことにしておいてほしいのよ。」

ドレイク王にしてみれば、フエンダークの頼みは、なんとも奇妙なものであろう。

「大丈夫かよ？あれ。」

クローバーが僕に顔を近づけ、耳打ちしてくる。フエンダークの気安い態度を、心配しているようだ。

クローバーだって大概だが、さすがにあそこまでぞんざいではない。あんな態度をとつても大丈夫なほどの関係なのかもしれないが、相手は一国の王だ。そんな関係にどうやったらなれるのか、僕には皆目検討がつかなかった。

「唐突すぎる頼みだな。して、何ゆえに？」

「頼み事つてのはいつも唐突なもんよ。詳しく聞くのは野暮つてもんだろ。」

「しかし、一国の王が嘘をつくなど。やすやすと受け入れられる話でもない。」

「んー？どの口が言ってるんだ？言われたくないこと、たくさん、あるよな？」

フエンダークの言葉で、場の空気が変わった。

ヒリヒリとした緊張感が、静かだった水面に石を投げ入れたときのさざ波のように、部屋全体にじわじわと広がって、僕の体を締め付ける。

本能的に、今しやべつてはいけないと悟る。始めから、口を出す気なんて更々なかったのだから、ちょうどいい。僕はにこやかな表情を崩さないよう気をつけながら、2人のやり取りを見ていた。

「ついでに言うと、こいつは魔王を封印した石だ。解放したら、お前の命も危ないよなあ？」

「この不屈き者！叩き斬る！」

メイドのナギが、槍のような武器を持ってドレイク王の前に躍り出る。

「薙刀か、珍しい武器だな。」

クローバーがそう言いながら、当たり前ように応戦しようと、劍柄に手をかけたので、僕は慌てて、その手を引っぱって、無理やり下がらせると、自分の体の後ろに隠すようにして押さえる。出鼻をくじかれ不満なクローバーは

「何すんだよ!」

と悪態をついた。

「今は手も口も出すべきじゃない。」

思いがけず、強い口調で、ぴしやりと言ってしまった。

クローバーは、驚いて目を見開いたあと、何度か戸惑ったようにまばたきし、最後は諦めたように「ちっ」っと小さく舌打ちをし、引き下がった。

「まあ待て。」

ドレイク王がそう言って、ナギに下がるよう目で合図を送る。ナギはクローバーと同じ、不満そうな顔でフェンダークを睨みつけていたが、王の命令には逆らえないのだろう。ゆつくり武器を下ろし、下がっていった。

「フェンダークの頼みでもあるし、断ることは……できないが……。」

「俺は、あんたとは初対面なんだよ。わかってるよな!」

「あ、ああ……わかった。」

ドレイク王の表情は、さほど変わらない。でも、何となくフェンダークに怯えているような雰囲気を感じられる。

僕は2人の様子をよく観察した。

2人の力関係は、拮抗していて、対等のようにもみえるが、僕は、フェンダークの方が若干優勢だと勘づっている。何か弱みを握られているのか、それとも何か大きな助けを借りているのか。

ドレイク王は、フェンダークが何かしでかすのを恐れているのかもしれない。

ますます、フェンダークの正体がわからなくなった。

「いいだろう。その石を我が欲していることにして、主らのものにする。それを保証しよう。」

ドレイク王から許可を引き出すと、フエンダークは満足げに口角を釣り上げた。

第72話 2人＋1人

「ねえねえ魔王ちゃん？」

石に話しかけても、魔王ちゃんの返事はない。封印されたまま話すというのは、結構疲れるらしく、そう軽々しく無駄話はできないようだった。

3人で旅をしているかのように、いつでも魔王ちゃんと話が出ると思っていた私は、なんだかがっかりした。

「魔王ちゃんだって疲れてるんだから、休ませてあげな。」

エルサイスは、そう言いながら、テーブルに酒場でテイクアウトしてきた料理を並べる。

公国の酒場のチップが作った料理はどれもいつも美味しくて、外れない。

私は、エビのフリッターを1つ手に取り、つまみ食いをする。

「あ、手洗ってから食べないとダメだよ。」

エルサイスは母親みたいなことを言う。口うるさくて面倒だ。

「クロのお行儀が悪いところ、全部魔王ちゃんが見てるからね。」

そう言われて、私は思わずサイドテーブルに置いたままの石を見た。魔王ちゃんは何も言わないし、反応もない。

「見えてるのかな？」

「見えてるでしょ。さつきフェンダークさんのことも見えてるみたいな話し方だったし。」

ドレイク王との謁見が終わり、魔王ちゃんにことの次第を報告する。

「私たちが持っていていいって、王様のお墨付きをもらったから、もう大丈夫だよ。」

「よかったじゃねえか、望み通りそいつが手に入って。」

フェンダークが横から口を挟んでくる。

こうなったのは、ほぼ彼のおかげなのだが、なんだかお礼を言う気にはなれない。

私はフェンダークのことがあまり好きではない。嫌いというより、得体が知れず、なんだか気持ち悪い。実体のないふわふわとした霧を掴むような不安定さが、私の警戒心を掻き立て、何かあれば、いつでも首を取ってやるといふ気持ちになってしまふのだ。とても友人なんて親しい関係になれそうにもない。

「フェンダークさんは、王と何か関係があるんですか？」

エルサイスがいつものものにこやかな表情で聞く。なんの意図も裏もないような自然体を装っているが、メガネの奥の赤い目は、大事な何かを見据えようと、キラリと光っていた。

「別に知らねえおっさんだよ。ま、男には秘密があるってものだ。」

暖簾に腕押し。フェンダークはのらりくらりとかわし、動揺さえ見せない。食えない野郎だ。

エルサイスも諦めたように、首を左右に振る。腹の探り合いをする気はなさそうだ。

そこに

「思い出した！私が説明……」

と魔王ちゃんが割り込む。

「ああ？小娘。言ったら望み通りこの世から消し去るぞ!」

フェンダークのドスの効いた声に、私もエルサイスもギョッとする。

「ごめん……言えないかも。」

「気にしないで。」

謝る魔王ちゃんを慰めながら、フェンダークをチラリと見る。

変化は一瞬で、今はもう何事も無かったように飄々としている。本当に、食えない野郎だ。

「でもあなたがこの子たちを気にかけるってことは……。」

「親友だからな。当然だろう。男は友人のために何でもする。それ以上の理由が必要か？」

なんとも白々しい。でも、それ以上の回答は得られそうにもない。エルサイスも、もう追求する気は無いようだった。

「……言わないほしいってことね。わかったわ。ごめんね。この人の

正体教えてあげられない……。」

「まあ別にいいよ。」

フェンダークの正体が気にならないといったら嘘になるが、どうしても知りたいわけでもない。理由がどうであれ、助けてくれるというのなら、それを享受することに、なんら問題はない。

「じゃあな、俺と会えなくても泣くなよ。」

フェンダークはそんな軽口を残して、去っていった。

フェンダークを見送った私たちは、酒場で食事をテイクアウトすると、そのまま宿屋へと向かったのだった。

料理が並べられたテーブルにつくと、私はエルサイスと共に手を合わせ

「いただきます。」

つと声を揃えて言う。

「結局フェンダークの正体って何なんだろうな？」

「さあ、さっぱりわからないよ。」

人の心を何でも読み取りそうなエルサイスでも、フェンダークのこととは、さすがにわからないらしい。それなら私が考えたところで、無駄だろう。

私は早々に思考を切り上げ、食事に集中する。

「魔王ちゃんってお腹すかないのかな？」

「どうだろう？でも、魔王だから、お腹がすいても餓死するってことはないだろうね。」

熱々のスタンポットに手をつけながら、テーブルの上の石を見つめる。やはり何の反応もない。

「本当に見えるのか？」

「見えるけど、今は見てないのかも。」

私はマッシュポテトを口に含みもぐもぐと口を動かしながら、石を手に取り、まじまじと見回す。

いつ、どのタイミングで魔王ちゃんがこちらを見てるのか、まったくわからない。

嫌なことが続いて泣いてしまっているところや、酔っ払ってエルサイスに絡んでいるところや、シャワーのあと着替えを用意するのを忘れて、エルサイスが出かけているのをいいことに、裸で部屋を歩き回っているところを、見られてしまうかもしれない。

それはいくら相手が魔王ちゃんといえども、恥ずかしい。気をつけなければと思う。

そんなことを考えていると、エルサイスが、パツと私の手から石を取り上げ、彼がいつも肩からかけている青いショルダーバッグの中に嚴重にしまい込んでしまった。

「ちよーちよつと!!」

「ずつとここに魔王ちゃんがあると、集中できないでしょ。いろんなことに。」

あつげに取られている私に、エルサイスがそうニツコリ笑いかけてくる。

「普段は僕がバツクに入れて大事に保管しておくよ。」

何だか見透かされたようで、居心地が悪い。私はバツの悪さを飲み込むように、スタンポットの付け合せのソーセージを、口いっぱい頬張った。

その様子を、エルサイスがおかしそうに笑いながら見てくる。まったく嫌なやつだ。

魔王ちゃんが加わって、楽しい3人旅とはいかない。旅は道連れ世は情けというが、思いやりを持ったためにも、ある程度の適切な距離感が必要なのだ。魔王ちゃんには申し訳ないが、今のところ私にとって、この位の距離が心地いい。

私とエルサイスの2人旅+魔王ちゃんという、新たな形で、私たちの旅は続いて行くのだった。

番外編く迷子のレア その1く

激しい雨が、窓を叩きつけていた。

強風にガラスがガタガタ鳴り、その音に驚いて、レアはソーダブルーの髪をビクツと震わせる。

神へと続く道の途中にある空き家で、レアは1人泣きそうになっていた。

時涉りの塔を目指し、レアは1人、神へと続く道へきていた。

そこに思わぬアクシデントが降りかかる。

突然、快晴だった空に、ペンキをこぼしたような黒く厚い雲が広がっていき、あつという間に空が破け、大雨になったのだ。

山の天気は変わりやすいと聞いていたが、こんな急変をレアは体験したことがなく、慌てて空き家に逃げ込んだ。

空き家は、つい最近まで人が住んでいたもので、中はまだキレイだった。この住人だった天才錬金術士のアルスは、時空を超える装置で、どこか別の次元に行ってしまったので、急に戻ってきて、レアと鉢合わせすることもないだろう。

「お兄ちゃん……。」

雨で濡れた体を自分の両手で包みながら、心細そうにレアが呟く。エリアスの返事はもちろんない。

白い稲光が空を駆け、薄暗い室内を一瞬だけ真昼のように染めた。そしてそれを追いかけるように、巨人の唸り声のような雷鳴が、部屋いっぱいに鳴り響く。

「ひゃああ!!」

レアは思わず耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んだ。目には涙が滲む。

「お兄ちゃん!!」

助けを求め、縫い付くようにレアが叫ぶ。しかし、エリアスの返事は、やはり無かった。

公国の市場は、月に1度の本の市で賑わっていた。

エリアスとレアは、本が欲しくてきたわけではない。今日は時涉りの塔を攻略するつもりで、その準備のため公国に立ち寄り、たまたま居合わせたただけだ。

たまたまとはいえ、祭りのように盛り上がる公国全体の雰囲気、2人は高揚感を覚え、わくわくしていた。

「せっかくだし、ちよつと見ていこうか？」

エリアスの言葉に、レアは

「うん！」

と、ツインテールの髪を揺らしながら頷く。

2人はそんな軽い気持ちで、フラッと市場に立ち寄った。

広場いっぱい、本の露店が開かれ、様々な人が行き来している。

レアは、エリアスとはぐれないようにと、手を伸ばしたが、その先に既に彼はおらず、2、3歩先の露店でパラパラと本をめくっていた。

「お兄ちゃん！」

そう呼びかけるも、エリアスは本に夢中になっているようで、レアを振り向きもしない。

「あ、ちよつと……あつ……。」

団体客が、レアの後ろから押し寄せてきて、身長110cmと小さい彼女を、あつという間にもみくちゃにする。

「お、お兄ちゃん！」

レアの呼びかけに、エリアスはハッと顔を上げ、やっとこちらを見た。

「レアちゃん！」

でも、もう遅かった。お互い必死に手を伸ばしたが、レアは人の波に飲まれ、エリアスと離れ離れになってしまった。

レアはなんとか人混みをかき分け、市場の端っこの、比較的空いているエリアまで移動することができた。キョロキョロと辺りを見回しても、エリアスの姿は見当たらない。

「どうやら完全にはぐれてしまったようだ。」

「どうしよう……。」

レアは泣きそうになっていた。エリアスがいないと、不安で堪らな

かった。

レアにとってエリアスは、ただの冒険のパートナーではない。物心がつく前からずっと一緒に、自分を育ててくれた親であり、ちよつと抜けてるところもある兄であり、大事な人だ。

レアはエリアスを探して歩き出す。

人の多い市場は避けて、酒場の方へと向かうと、人通りも幾分少なくなる。それでも、エリアスは見当たらなかった。

1人になると、今よりもっと幼い頃の感覚を思い出してしまう。

寒くて、暗くて、怖い。

レアは戦争孤児だった。戦火から逃れ、ひとりぼっちになってしまったところを、エリアスに拾われたのだ。

まだ幼かったレアに、本当の家族の記憶はない。

暗くて、冷たい中に、鳴り響く地鳴りと、迫りくる赤い炎。それが、レアの1番古い記憶だった。

恐怖と物理的な寒さで、徐々に冷たくなっていく両手を、レアは擦り合わせてなんとか温めようとする。

早くエリアスに会いたい。

酒場で待っていれば、迎えにきてくれるかもしれない。レアはそう思っ、酒場の前までトタトタと走ると、重いドアを、力を込めてなんとか開けた。

陽気な音楽と喧騒が、レアの耳になだれ込む。アルコールと、タバコの煙が鼻をついて、レアは思わず顔をしかめた。

「おっと、お嬢ちゃん通るよ。」

「あ、ご、ごめんなさいです……。」

レアは後ろからきた大きな男に、道を譲り、酒場に入る。

ドアがバタンと閉まると、備え付けられたベルがカランカランと音を立てた。

「いらっしやいませー!!」

酒場のマスター、チップの掛け声に合わせるように、次々店員が「いらっしやいませー」と続く。

レアどうすればいいのかわからず、入口のすぐ横の暗がり立ちす

くんだまま、まごまごしていた。

酒場はよくくる場所だ。ここでご飯をたべたり、休憩したり、何度も訪れて、慣れているとレアは思っていたが、それはエリアスがいたからだった。

1人で訪れる酒場は、たくさんの大人が行き交いし、騒がしく、危険な香りに満ちているように感じた。

「おや、レアさん、こんにちは。」

「おおーレアちゃん、どうしたの？1人？」

カランカランとベルがなると、ボンド『シルフィード』のメンバー、クローバーと、そのパートナーのエルサイスが入ってきて、レアに声をかける。

「あ、くーしゃん……！」

知った顔に会えて安心した反面、どうしていいのかわからず、レアは俯いたまま両手の指を絡ませた。

「エリアスは？」

「待ち合わせですか？もしよろしければ、僕らと一緒に待ってます？」

エルサイスはそう言うと、レアに手を差し伸べる。でもレアは、その手を取らなかった。

「あの……レア……エリアスと、塔に行かないと……！」

レアはそう言い残し、酒場を飛び出した。

残されたクローバーと、エルサイスは顔を見合わせ首を傾げる。

「どうしたのかな？」

「さあ……？」

「レアちゃん1人で大丈夫かな？」

「うーん……レアさんはなんだかんだいって強いし、ちよとくらい1人でいても、大丈夫だと思っただけ……。」

「まあ塔に行くって言ってたから、どこかでエリアスと合流するよなきっと。」

クローバーと、エルサイスは気になりながらも、納得すると、席について食事を注文した。

酒場の外に飛び出したレアは、途方に暮れてしまう。

本当は、エルサイスの手を取りたかったのだが、人見知りのレアは、怖くてそれができなかった。

『シルフィード』のみんなは、優しくて、頼りになって、良い仲間だ。同じボンドメンバー、テイルのパートナー、ソラは、特に仲良しで、大切なお友達だった。

他のメンバーも嫌いではないし、むしろ好きなのだが、まだ慣れることができてなくて、エリアスなしでは会話もままならない。

「……………どうしよう……………」

レアはため息をつく。

冒険は好きだ。色々な景色を見たり、色々な人と出会えたり、そうして幼い頃の辛い記憶を、塗り替えて、素敵な記憶をレアにくれる。でもそれは、エリアスがいるからできていることなのだ。

最近のエリアスは、冒険にあまり乗り気ではなかった。どこか落ち着ける街に腰を据え、ゆっくり暮らしたいというようなことを、頻繁に言う。

レアはその気持ちに気づきつつも、知らないフリをしていた。自分はまだ冒険をしていたい。

レアには、エリアスの言うような幸せな暮らしが、イメージできない。今はまだ、外の世界に触れ、遊んでいた気分だった。

そうは願っても、エリアスがいなければ何にもできない自分では、エリアスが冒険をやめると言えば、それに従うしかないのだ。

レアは顔をあげる。

ここから塔までかなりの距離があるが、道中の魔物はさほど強くない。1人でも行けるはずだ。

1人で何もできずに、泣いていたら、閉じ込められてしまう。レアは自由でいたかった。

時涉りの塔に先に行つて、待っていれば、エリアスも、きっと自分を見直して、冒険を続けてくれだろう。

レアはそう思うと、公国を出て、1人塔を目指した。

番外編く迷子のレア その2く

公国は、激しい吹雪になっていた。

思わぬ天候悪化に、広場に露店を出していた本屋たちは、慌てて店を閉め、客も蜘蛛の子を散らすように、あつという間に引いて行った。

「レアちゃん!!」

雪でキャラメルブラウンの髪を真っ白に染めながら、エリアスが叫ぶ。

ほとんど誰も居なくなった広場に、レアの姿はない。

「くっそ……。」

焦りのあまり、つい、そう毒づいてしまう。

もう外には居ない可能性が高いと考えたエリアスは、酒場へ向かって走り出す。

あの人ごみの中で、一瞬でもレアから目を離れた自分を、エリアスは悔いていた。

レアがまだ幼い頃から、ずっと面倒を見てきたエリアスにとって、彼女は家族同然だった。血は繋がってなくとも、大切な妹だ。

エリアスは、本当の家族を知らないレアに、家族の温もりを教えなかった。だから、いつでも愛情を持って、大事な妹としていつも傍に寄り添ってきた。

嫌な想像が、エリアスの頭を支配する。

レアが見知らぬ男に連れられてしまったかもしれない。どこか狭くて暗い場所に閉じ込められているかもしれない。1人で寂しくて泣いているかもしれない。

自分が目を離れたせいで、レアが酷い目にあっているのではないかという妄想が止められず、エリアスは気が狂いそうだった。

早くレアに会いたい。

レアに家族を教えたいといいながらも、家族の大切さを教えられていたのは、エリアスの方だった。

だからこそ、レアがいなくても、こんなにも苦しい。

エリアスは酒場のドアを開け、中に入った。

酒場は本の市を見にきた客で、2階席まで満席だ。立って待っている客もいる。

エリアスは腰を屈めて、キョロキョロしながら、レアを探す。

「おや、エリアスさん？」

「あれ？お前、レアちゃんはどうした？」

レアを探して、テーブルの下を覗き込んでいたら、上から声をかけられる。

振り向けば、ボンド『シルフィード』のメンバーのクローバーと、そのパートナーのエルサイスが、ベンチシートに座って食事をしてた。

「クロさん！エルさん！レアを見ませんでしたか?!」

エリアスは藁にもすがる思いで、そう聞いた。

「先程見ましたよ。」

「ああ、この酒場で。」

思いもしなかった良い返答に、エリアスは目を輝かせる。

「ホントですか!?!」

「ああ、でも……」

戸惑ったようにエルサイスに目配せするクローバーの姿に、エリアスは不安を覚える。

「でも……?」

「レアさんは、あなたと塔に行くと言って、酒場を出て行きました。」

「ええ!?!なんでですか!?!」

「いや、なんでと言われても……。むしろなんでお前が1人でここにいるのか、こつちが聞きたいくらいだ。」

エリアスは呆然としてしまう。

「レア……どうして……?」

1人で？ なぜ？ 自分を置いて？ どこへ？

様々な疑問が渦まき、エリアスの思考は混乱していく。

「とりあえず、その頭拭け。風邪を引くぞ。」

クローバーはそう言うと、エルサイスに顎で指示を出し、タオルを渡すよう言う。エリアスはエルサイスからタオルを受け取ると、心こ

ここに在らずという感じで、雪が溶けて濡れた頭を撫でるように拭いた。

エリアスは、ショックが大きすぎて、自分の体が、自分のものではないような、そんな感覚に陥っていた。

「エリアスさん大丈夫ですか？一体何があつたんです？」

エルサイズがエリアスからタオルを返してもらいながら聞く。エリアスはハッと我に返ると

「実は……」

と、今までの経緯を話し出した。

「宿には居なかったよ。」

エルサイズが、頭に雪を積もらせたままクローバーに報告する。

「ごつちもだ。やっぱり酒場には戻ってない。」

エリアスが経緯を説明すると、クローバーはレアと一緒に探す申し出た。

レアが気がかりなのもあるが、それ以上に、エリアスの方が心配だった。

エリアスは、いつもしつかりしていて、甲斐甲斐しくレアの世話を焼き、頼りになる兄の見本のような人なのだが、ところどころ抜けているのだ。

さつきも

「レアは一体どこに……？まさか!?家出!?!」

などと、すっとんきようなことを言っ

「いや、落ち着け。冒険者になった時点で、家を出てるぞ。」

と、クローバーにたしなめられていた。

ここままエリアス1人で探させて、レアがちゃんと見つかるか、不安になったクローバーは、手を貸すことにしたのだった。

「エリアスさん、他にレアさんの行きそうなところは？」

エルサイズがそう聞くと、エリアスは

「うーん……。」

と考え込んでしまう。

レアが1人で行きそうなところなど、まったく思い浮かばない。

レアは単独行動なんてできないと、エリアスはついさつきまで思っていたのだ。だから、レアが1人で行きたいところがあるかなんて、今の今まで、考えたことがなかった。

「ダメだな。当てにならない。」

考え込むエリアスを見て、クローバーがため息をつく。

「すみません……。」

グウの音もでないエリアスは、うなだれると、そう呟いた。

「うーん……。レアさんは、エリアスさんと塔に行くと言っていました。公国に居ないとなると、そこを目指したと考えるのが、妥当んじゃないですかね？」

エルサイスが推測を話すが、エリアスは懐疑的だ。

「レアが1人で塔へ？無理ですよ。」

「無理かどうかはわからんだろう？」

「でも……。」

この吹雪の中、レアが屋外にいるとは考えにくい。公国に居るなら、必ず宿屋か、この酒場にいるはずだ。居ないということは、もうレアは公国を出ているということなのだ。

「お前、見張りの兵士に怪しいやつがいなかったか聞いたんだろう？」

「はい。怪しい人は今日は見ていないと……。特に今日は本の市で流入が激しいので、警備が厳しいんですよ。だから、確かな情報だと思うのですが……。」

犯罪に巻き込まれた可能性も低い。

「なら、答えは1つだ。レアちゃんは、自分の意思で公国を1人で出ていった。」

クローバーが結論を出す。

エリアスも、頭ではわかっていた。そう考えるのが論理的で、合理的だ。

このままここでグズグズしていても、恐らくレアには会えないだろう。

そうわかっているながら、受け入れられない自分がいて、エリアスの胸の中で、黒つぶいモヤモヤしたものが渦巻く。彼自身、それがなん

なにかさっぱりわからない。

「とりあえず、牛車の御者の方たちに話を聞きましょう。可能性は低いですけど、レアさんが牛車に乗っていないか確かめて、それから次を考えましょう。」

「はい……。」

エリアスは納得できない思いを抱えたまま、クローバーとエルサイスの後に続いて公国を出た。

番外編く迷子のレア その3く

公国の外に出て、雪山と平原に出れば、あつという間に吹雪はおさまった。今いる雪山の方では、まだチラチラと雪が舞っているが、先の草原の方は快晴だ。

結局、牛車の御者に話を聞いても、レアを乗せた記憶はなかった。

「それだけ小さい子が一人で乗れば、印象に残るから、間違いないよ。」

御者の男はそう言って、自分の記憶に自信をみせる。

「まあそうだよな。」

クローバーもエルサイスも納得する。エリアスだけが、いつまでもモヤモヤしていた。

「塔に行くぞ。」

エリアスの返事も待たず、クローバーが先を急ぐ。

「ま、待っててくださいー！」

きちんと納得できないエリアスは、クローバーを引き止めた。

エリアスは良くも悪くも真面目だ。思考の整理がついて、自分が正しいと思わなければ、行動できない。曖昧にしたまま、その場の状況にズルズルと引っ張り回されるような、無責任なこととはできないのだ。

「お前さ、さつきから何なんだよ。めんどくせえな。」

「まあまあ……。」

エルサイスが、クローバーの肩に手を置き、抑えるよう促す。

クローバーは感覚だけで動くので、慎重で思慮深いエリアスとはあまり相性がよくない。

「ちよつと、考えさせてください。」

「どうぞ、どうぞ、お手伝いできることがあったら、何でも言ってくださいね。」

エルサイスはそう言うと、につこり笑いかける。その笑顔にエリアスは安堵すると、ゆっくり思考の整理を始める。

「公国にいればいずれは会えたはずです。時間がかかったとしても。それなのに、レアは公国を出た……なぜでしょう?」

「知らんがな。」

エリアスの思考を、クローバーが一刀両断する。

「クロ……落ち着いて。」

エルサイスが困ったように笑いながら、クローバーをたしなめる。

「そこに納得できません。レアはそんなことしないはずですよ。」

レアは自分を置いて、街の外に行くなんてできないはずだ。ずっと一緒に暮らしてきた自分には、そうわかる。

「そんなことしないはずといっても、現実問題、レアさんは、1人で公国を出た可能性が高いです。」

エルサイスが淡々と事実を述べる。

「お前な、レアちゃんを舐めすぎ。そんなことしないはず、なんていうのは、てめーの主観だろ。レアちゃんのこと何でもわかってると思ったら、大間違いなんだよ。」

クローバーの指摘に、エリアスの胸の中の黒いモヤモヤが、ズキリと痛む。

「でも……」

「でもでも、だってでもねーよ。問題はレアちゃんじゃなくて、お前の方にあるはずだ。」

「今はレアさんの気持ちよりも、ご自分の気持ちに向き合った方がいいかもしれないですね。」

「僕の気持ち……?」

2人指摘され、エリアスは考える。

さつきから自分の胸を圧迫してくる、この黒いモヤモヤの正体が気になっていた。

「僕は、レアのことなら、なんでも知ってると思ってました。」

でも、今回のレアの行動は、さっぱりわからない。予測できない。そのことに、エリアスは戸惑うというより、恐怖を感じていた。

怖いから、受け入れたくない。

「僕は、怖いんです。レアが僕の予想の外の行動をするのが。僕目の届く範囲にいて欲しくて、最近は冒険も、あんまり乗る気になれなくて、静かに街で暮らしたいと思っていました。」

それくらい、レアが心配なのだ。それはレアへの愛情だ。レアが大
事だから、大切な妹で、家族だから、守りたい。

でも、これが愛情だとするなら、このモヤモヤは、なぜこんなにも
黒く汚れていて、ズキズキ痛むのだろうか？

「お前がやろうとしてることは、支配だ。」

クローバーの言葉に、エリアスは顔面を殴られたような衝撃を受け
る。咄嗟に

「違います！」

と否定する。

「違わねえ！」

「僕は、レアが心配だから……」

「そんな優しい言葉で包んで、レアちゃんの自由を奪う気か？」

エリアスは言葉を詰まらせた。

本当は、自分でもわかっているのだ。これが正しい感情でないこと
が。

自分の胸を苦しめる黒いモヤモヤは、自分の支配欲。レアを縛って
おきたいと思う、自分のエゴの塊だ。

「レアさんが心配なもの、大切だと思うのも、エリアスさんの本当の気
持ちでしょう。それは悪いことではありません。でもだからといっ
て、1人の立派な人であるレアさんのことを、どうこうすることはで
きないんですよ。」

「いつまでも子供だつて思ってるから、こんなことになるんだよ。」

クローバーとエルサイスにそう言われたエリアスは、胸の痛みに唇
を噛んだ。

自分の黒い部分と向き合うのは、とても辛かった。でも、今向き合
わなければ、きつとどこかで道を誤ってしまう。この黒いモヤモヤ
は、今ここで、キレイにしなければいけないのだ。

確かに、エリアスはレアが心配のあまり、彼女を鳥籠に閉じ込めよ
うとした。自分が「旅をやめる」と言えば、レアがそれに従うしかな
いことを知っていながら、それをほのめかし続けた。

それが、レアは嫌だったのかもしれない。今回のこれは、彼女がエ

リアスに、反旗を翻した結果だった。

本当にレアが大事なら、彼女の意志を尊重するべきなのだ。ちゃんとして話合って、レアがどうしたいのか聞いて、その上で自分がどう思っているのかも話して、落とし所を見つける。それが、今までずっとそばで寄り添って、レアを見守ってきた、エリアスの役目。

しかし、エリアスはそれをサボった。クローバーの言う通り、まだ子供だからと侮って、相手にしなかった。

そして、今のこの結果に至る。それは当然の結果だった。迷子はただのきっかけに過ぎない。起こるべくして起こった事件なのだ。

エリアスは自分の不甲斐なさにため息をついた。

黒いモヤモヤはまだ残っていたが、随分小さくなって、痛みはもうない。

「そうですね。レアのことを、なんでも知ってるなんていうのは、僕の思い上がりでした。僕は、何にもわかっていませんでした。でも……だからこそ、謝りに行かなければいけませんよね。」

エリアスはそう呟いて前を向く。目指すは時渉りの塔だ。

「まったく……」

クローバーが「待たせやがって」と言うように、悪態をつく。

「行きましようか。」

エルサイスの声に、3人は時渉りの塔を目指し、急ぎ足で歩き出した。

番外編く迷子のレア その4く

雨はまだ降り続いていた。

「ふっ……ぐすっ……うう……」

レアは次から次へとこぼれ落ちる涙を、手で拭う。

空き家のダイニングの隅っこに座り込み、レアはエリアスの助けを待っていた。

でも、エリアスは自分がここにいるなんて、夢にも思わないだろう。絶望的な思いを抱えたまま、レアはこない助けを待つ。

なぜこんな無謀なことをしてしまったのだろうと、レアは後悔していた。

涙は枯れることなく、次々溢れ出して、レアの顔を、手を、心を濡らしていく。

「お兄ちゃんに会いたいよお……。」

レアにとつてエリアスは、太陽だ。冷たく暗い世界から、自分を救い出してくれた。強くて、眩しくて、暖かい人。

だからこそ、逆らえないというか、わがままを言っではいけないと、レアは思っていた。

エリアスの圧倒的な優しさを前に、レアは尻込みしてしまう。自分はタダでそんな献身を受ける権利はないと。

レアは、いつも、黙って、我慢して、笑って、何でもない振りをして、やり過ぎして、いい子の優等生を演じてきた。

エリアスはそのようなことを望んでないのに。

「僕たちは家族なんだから」とエリアスはよく言う。家族だから、甘えて、頼って、わがまま言ってくれと。

でもレアは、エリアスに本音を言うのを、ずっとずっと恐れていた。レアは、わがままを言って、嫌われるのが怖かった。自分が口ごたえしたら、エリアスから見放されてしまうと、心の隅でいつも怯えていた。

エリアスは、いつだって、そばにいて、微笑んで、暖かい手で、自分を包んで、見守ってくれていたのに。

エリアスは、確かにどこかに安住の地に腰を落ち着きたいと言っていたが、それ以上に、レアが冒険で新しいことを体験するのを、喜んでくれていた。

レアが、初めて魔物を倒したとき、強い武器を手に入れたとき、ポンド『シルフィード』に入ったとき、ソラと友達になれたとき。

エリアスは、いつでも、自分のことのように喜んでくれた。ちゃんと話せば、エリアスだってわかってくれたはずだ。

それなのに、レアは言い出せず、でも我慢もできず、こんなところまで1人できて、1人でシクシク泣いている。

結局レアは、エリアスを信じられなかったのだ。

「レア……馬鹿ごとしちゃったなあ……。」

涙で枯れた声で、そう呟く。

レアは、自分は1人前なんだと示して、エリアスに認められたかった。

そうすることで、自分の発言権を手に入れようとした。そんなもの、ずっとずっと持ってたのに。

エリアスはいつでもレアを許していたことに、レアは今になってやっと気がついた。

「お兄ちゃん……。」

バンつと乱暴にドアの開く音がする。

「くっそ……びしょ濡れじゃねーか。」

「公国は吹雪で、神へと続く道は大雨……異常気象ですかね？」

ガヤガヤと数人が家の中に飛び込んできた気配を感じたレアは、恐る恐る玄関の方を見る。

「レアは、大丈夫でしょうか？」

聞き慣れた声、見慣れたキャラメルブラウンの髪、クリムゾンレッドの優しい目。

エリアスだった。

「お兄ちゃん!!!」

レアは思わずエリアスの胸に飛び込む。

「うわああ?!レアちゃん!?!」

なんの準備もできていなかったエリアスは、レアを支えきれず、その場に尻もちをついた。

「お兄ちゃんんん……うわああああん！ごめんなさいいいい！」

レアは構わずエリアスの胸に顔を埋めると、子供らしくわんわん泣き出した。

「レアちゃん!!どうしてここに!？」

エリアスは、こんなところで見つかるとは思ってもみなかったの
で、とても驚いていた。

「雨宿りしようと……ひつく……思ってた……」

「そっかそっか。良かった……会えて本当に良かった……」

エリアスは呟くようにそう漏らすと、レアをギュッと抱きしめる。
その様子に、クローバーとエルサイスはホッと息をついた。

「エル、暖炉に火入れられるか？」

「お易い御用で。」

エルサイスは暖炉に近づくと、ファイアボールを放ち、火をつける。
暖炉の薪が、パチパチと楽しげに爆ぜる音を立て始めた頃、エリア
スとレアはその前に座り込み、静かに話し合った。

クローバーとエルサイスは、そこから少し離れたドアのところに腰
を下ろし、2人の様子を見守っている。

エリアスは、レアのことが心配なこと、そんな思いから、レアをコ
ントロールしようとしたこと、今はそれに気づいて申し訳ないと思っ
ていること、自分の汚くて暗い部分も、包み隠さずレアに洗いざらい
話して聞かせた。

「本当にごめん……辛い思いさせて……。でも、今更かもしれないけ
ど、レアちゃんに安全な街で暮らしてほしいと思う一方で、冒険で、
もつともつと色んな体験をしてほしいとも、思うんだ。それも、本当
僕の気持ち。僕はレアちゃんが、新しい経験をすることが、とつても
嬉しいんだよ。」

エリアスはそう言いながら、優しくレアの頭を撫でる。レアは撫で
られるのが嬉しくて、エリアスに擦り寄った。

「レアも、ごめんなさい……。レア、お兄ちゃんが、そうやって喜んで

くれるの、ちゃんとわかってた。わかってたけど、信じきれなかったの……。わがまま言っちゃダメだって、嫌われちゃうって……。」

「わがままなんかじゃないよ。」

「うん、お兄ちゃんなら、そう言ってくれるって今ならわかるのに、さつきまでは、そう思えなくて……。」

そう目を伏せるレアを、エリ阿斯は優しく抱きしめる。

「ごめんね、僕のせいだ。僕が怖かったんだよね。」

「違うの、レアが……。」

「どっちのせいでもないだろ。」

自分が悪いと言い合う2人の間に、クローバーが割り込む。

「ただちよつと、道がズレて、すれ違っただけだ。よくあることさ。」

「お互いに近い存在だからこそ、わかってるつもりになりがちです。そうして、いつの間にか道を外れてしまうことはありませんが、絆があれば、また戻れます。」

エルサイスが、クローバーの後に続く。

「そうそう、家族なんだろう?」

クローバーがそういって、2人の顔を覗き込む。

エリ阿斯とレアは、一瞬顔を見合わせ笑い合おうと「うん」とうなずいて返した。

「なら、大丈夫だ。」

クローバーはその返答に満足げに微笑んだ。

「さあ、服も乾きましたし、外の雨も上がりそうです。」

エルサイスにそう言われて、みんな窓の外を見る。

雨は土砂降りから、パラパラ時々雫が落ちてくるような小雨に変わってきていて、外は静かだ。黒い雲も薄れ、ところどころ薄日が差していた。

ドアを開け、空き家の外に出れば、雨上がりの湿った地面の匂いが鼻をつく。

「では、僕らはここで。」

「まだどこかで。」

そう言って、立ち去ろうとするクローバーたちの前に、レアが進み

出る。

「あ、あの……」

「うん？」

クローバーが首を傾げると、レアはモジモジしながら、指を絡ませ合う。それでも、何とか顔を上げ

「くーしゃん、エルさん、探しにきてくれて……あの……あ、ありがとうございます。」

と、絞り出すように言った。

クローバーとエルサイスは、人見知りのはずのレアのその行動に驚いて、思わず顔を見合わせる。でもすぐレアに向き直り

「レアさん、お気になさらず。」

「どういたしまして。またなんかあったら、いつでも言ってくれていいからな。」

と、微笑んだ。

その様子を、エリアスは幸せそうな顔で見っていた。

家族だからこそ、相手のことを知っていると思いついてしまう。でも、人は変化していくもの。レアがこうやって成長していくように、エリアスだって、いつまでも同じ考えでいてはいけないのだ。

「じゃ、またな。」

そう短く言うと、クローバーとエルサイスは去っていった。

残されたエリアスとレアは、無言のまま、手を繋ぐ。

自分たちは、家族だ。家族だからこそ、忘れてはいけないことがある。

「レアちゃん、僕らも行こうか？」

「うん!!」

そうして2人は歩き出す。新しい家族の絆を、しっかりと胸に刻んで。

第73話 城門下の騒ぎ

叫び、逃げ惑う人々。

怒号や悲鳴があちこちから飛び交い、騒がしい。

連邦の城塞都市の前にできているテントで、ちよつとした混乱が起きていた。

「助けてくれ！魔物がテントのところにも！」

「あっちへ行け！」

「扉の中に入れて！」

「お前らは町に入る資格はない！」

門の下では、テントの住人と兵士が言い争っている。

この城塞都市は『義務を果たした者』のみに、通行許可証が授与される。テントは、義務を果たさず、かといって引き下がることもできない者が、集まってできたものだった。

そんな弱者が集まっているのだ。現れた魔物に、まともに応戦出来る者は、きつと居ないだろう。

城塞都市の扉の中に逃げ込もうにも、門番の兵士があのような様子では、望めない。

「助けてくれ!!」

そんな悲痛な叫びがこだまする。

「なんか荒れてるね。」

エルサイスが事も無げに感想を述べる。

逃げ惑う人々を見ても、何も感じないようだ。焦りも、戸惑いもなく、ただこの成り行きを見ている。

私も、エルサイスと同じような気持ちだ。

ここには、怪我をした人や、壊された建物、物が燃やされた匂いなど、戦いに関係ありそうな空気が、一切ない。

長年戦いに身を置いてきた私は、そういう空気に敏感なのだ。そのセンサーが反応しないということは、つまり、そういうことなのである。

「うるさいやつらだよ。まったく。」

無視して城塞都市に入ろうとすると、1人の男が

「あんた、冒険者か？薄情な兵士の代わりに魔物を追っ払ってくれ！」

と、急に私の腕を掴み、縋ってきた。

突然のことに、私は驚いて、男を乱暴に振り払う。

いきなり体に触れるとは、不躰なやつだ。許せない。腹が立つ。目がくらむような怒りが、一瞬で私を満たす。

思わず剣に手をかけようとした私の左手を、エルサイスが掴む。

「落ち着いて。大丈夫だよ。」

怒りに燃える目で振り返れば、エルサイスがどこか心配するような、真剣な顔でこちらを見ていた。

私はそれが不愉快で、腹立たしくて、でも、なんだかとても安心できて、嫌だった。

「ちっ……。」

と舌打ちをして、エルサイスの腕を振り払う。怒りの炎は、冷水をかけられた焚き火のように、一瞬で、炭にくすぶる火種だけ残り、消えていった。その温度差にクラクラする頭を、私は手で押さえる。気持ちが悪い。

「行こう。」

エルサイスが私の手を引く。私はめまいを押さえつけながら、なんとかエルサイスについて歩く。

「まっ……。」

さっきの男が、今度はエルサイスにしがみつく。

エルサイスは一瞬バランスを崩したが、不快な様子は、微塵も感じさせない。そして、いつもの口角の上がった優しい微笑みで

「報酬はおいくらですか？」

と男に尋ねた。

「そ、そんなものあるわけが……。」

男が言い淀むと、エルサイスはわざとらしく大きなため息をつく。

「報酬がないなら、話になりませんね。申し訳ないですが、僕らはお暇させていただきます。」

そう眉を下げ、申し訳なさそうな顔するエルサイスを見て、男は

「そんな……」

と悲痛な声を漏らした。

他人と話すときのエルサイスは、表情豊かだ。

私の前では、そんなに大袈裟に振る舞うことは、余程のことがない限り、ない。

他人と話すときだからこそ、彼の表情は、より大きく動くのだ。どこか説得力を持って、何か大事なものを隠すように。

私にはそれが、仮面を被っているように見える。

笑った顔、困った顔、申し訳なさそうな顔、悲しげな顔、色々な表情がついた顔を、アタッチメントがついた人形のように、その場面に合わせて、取っかえ引っ変え組み替えているような、そんな不自然さ。それが彼の武器であり、身を守る盾でもある。嘘で塗り固めた仮面の下で、どんな顔をしていようと、誰も咎めることはできないのだ。

「ひええ、魔物がやってきた!!」

男はそういって、私達を置いて逃げていった。

去っていく男の後ろ姿を見て、エルサイスは「ふう」とため息をつくと、私に向き直った。

「クロ、大丈夫?」

「うん……。」

めまいは大分治まって、もう頭を押さえる必要はなかった。

「落ち着いた?」

沈黙を返す。

一瞬であんなに怒ってしまった理由は、自分が一番わかっていた。でも、それを認めたくない自分もいる。

「大丈夫だよ。」

エルサイスがそうにつこり笑いかけてくる。

エルサイスは、きつと何にも知らない。私がなぜあんなに激昂したのか、わかってない。多分知る気もないだろう。

それでも「大丈夫」と根拠の無い言葉をかけてくる。まったく馬鹿馬鹿しい話だった。

私は小さなため息をつく。ムキになったって、仕方ない。

「あ、魔物ってあの人かな？」

突然のエルサイスの言葉に、私は顔を上げる。

テントの奥の方から、ピンク色の物体が、のっそりこちらへ向かってきていた。

第74話 紳士オーク

「皆、私を恐れて逃げてしまった……。まったくもって人間というヤツは……。」

魔物はそう言うと、呆れたように首を降った。

なんとも奇妙な格好の魔物だ。最初見た瞬間、その見たことも無い出で立ちに、私もエルサイスもギョツとしてしまった。元のベースはその辺にいるオークだ。でも、格好がまったく違う。

その格好から『紳士オーク』とでも名付けようか。

「お前らは逃げないのか……?」

紳士オークが不思議そうに尋ねる。

私とエルサイスは、顔を見合わせた。予想外の格好に驚きはしたが、敵意は感じないし、むしろ格好通り、どこか柔和で友好的な雰囲気さえある。

「あなたが、僕らを攻撃する意思を示さない限りは、逃げたり、または襲ったりはしませんよ。」

エルサイスがそう説明する。私も大筋そんな感じだ。

私はどうしても気になってしまい、不躰だと思いつつも、まじまじと紳士オークを見てしまう。

赤いリボンをあしらった黒いシルクハットを被り、首には白地に赤のストライプ柄の蝶ネクタイ、そしてサイズがキツそうだが、仕立てのいいスーツを着ていた。

私も騎士時代は、正装用に何着かスーツやテイルコートを持っていたが、それと比べても遜色ないくらい立派だ。

そんな立派な濃いグレーにストライプ柄のジャケットの胸ポケットには、なぜか、緑のカエルが突っ込まれていた。

何もかもが奇妙だが、私が何より驚いたのは、その顔だ。鼻から上がマスクの様なもので覆われていて、そこには不自然なほど、大きく立派な白い髭がついていた。

「実は私は人と話がしたくて、遠くクリシュナ王国から来たのだ。」

紳士オークの話によれば、彼はクリシュナ王国の女王陛下の依頼

で、かつて連邦の王が奪い取ったという、魔王国の宝を取り戻しにきたらしい。

「平和的解決を図りたいという陛下の意向で、ニンゲンである私が交渉役に立つことになったのだ。」

紳士オークはそういつて、自慢げに胸を張る。

「人間？」

「誰が？」

私とエルサイスは、同時に首を傾げた。

服装はそれなりに人間っぽくはあるが、元はどう見ても魔物のオークだ。

「私はニンゲンだ！魔物に見えるか!?この凛々しい髭、これこそニンゲンたる証……。」

白い髭をなぞるように撫で付けながら、紳士オークが言う。

「はあ……………」

さすがのエルサイスも、理解できないらしい。曖昧な返事をするのと、私の方を見て肩を竦めた。それに私も、首を振って応える。わけがわからない。

「まあよい。」

紳士オークは、自分がニンゲンかどうかという議論から、あつさり引き下がると、ここにきた経緯を話し始める。

彼は女王陛下からの依頼を果たすため、道行く冒険者に協力を頼もうとしたが、自分を見るなり刃を向けてくる彼らに困り果て、さらに、ならば自ら王に会いに行こうと、ここまできたら、テント村の住人に見つかり、騒ぎになってしまったようだ。

まさに踏んだり蹴ったり。

「連邦のやつらは、他の地域の奴らに比べて、特に魔物への恐怖心が強い。仕方ないことだ。」

私がそういうと、紳士オークは悲しい顔をする。自分は魔物ではないのに、とでも言いたげだ。

「ことを荒立てたくない。ひとつ頼まれてはくれないか。」

紳士オークはそう言うのと、ジャケットの内ポケットから白い封書を

出した。

「ここに女王陛下の親書がある。親書を粗末に扱えば戦争になることは必至。少なくとも王に我らの意思は伝わるだろう……。」

私はエルサイスの様子をチラリと伺う。「どう思う?」と。

エルサイスは、いつものように、口に手を当て、考えていた。

「上手く行く気がしないな。そもそも私たちはただの冒険者だ。そうおいそれと、王に会うことなんてできねえよ。」

考えるのに夢中なエルサイスの代わりに、紳士オークに言う。

公国のドレイク王と謁見できたのは、本当に幸運だっただけで、本来はしがない冒険者風情が、国のトップと話をするなんて、有り得ないことなのだ。

紳士オークに協力したい気持ちはある。でも、私たちでは役者不足だった。

「入口で暴れていた魔物を追い返した。それを王と会うための功績として使うといい。」

紳士オークの言葉に、私も、考え込んでいたエルサイスも、鳩が豆鉄砲を食らったあとの様な顔をしてしまう。

「そんなんでいいのかよ?」

「……さあ剣を構えよ。」

紳士オークが、覚悟を決めた顔でこちらを睨んでくる。

私はため息をついた。

「エル、この話に勝算は?」

「あるよ。80%くらいかな?あとはやる気次第。僕は別にいいと思うよ。」

私の好きにしろということらしい。

別にどうでもいい話だった。魔王国と連邦がどうなろうと、私には関係ないし、魔王国の宝にも興味はない。

でも、この紳士オークには、それなりの興味がある。その辺の人間よりもずっと高貴で紳士的な振る舞いのこの魔物は、どこか憎めないし、魔王国の使者という肩書きは、魅力的だ。今お近付きになっておけば、今後助けになるかもしれない。

「仕方ないか。できるだけ痛くしないようにするよ。」

私はそう言うと、デモンソードⅡアビスを抜き払う。

「よし、準備はいいな。」

八百長なんてくだらないこと、やる主義では無かったが、この状況では仕方がない。

私は剣を構えると、一直線に紳士オークに斬りかかった。

第75話 連邦の王

窓は遮光のカーテンで覆われていて、外の様子は見えない。火の灯されたいくつものロウソクやランタンが並べられ、チラチラと揺れる炎が、薄暗い部屋を照らしている。

公国とは雰囲気は全く違う、少し陰気臭い応接室で、僕とクローバーは、隣同士に座りながら、連邦の王との謁見を待っていた。

僕もクローバーも、それなりに緊張していた。出された紅茶やお菓子に、手をつける余裕はない。

紳士オークは、あっさり倒されてくれた。

八百長ということで、クローバーは切る真似だけで、実際は峰打ちをし、それに合わせて

「うわあああああ、やられたあああ!!」

と紳士オークが、わざとらしい断末魔をあげる。

兵士やテント村の人々に、魔物を倒したことをしつかりアピールできたのを確認すると、紳士オークは「頼んだぞ」とでも言うように、目配せし、去っていった。

去っていく紳士オークを見て、歓声上がる。

クローバーはそれを面倒そうに手で払って黙らせようとしたが、観衆はそれを、手を振って応えてくれたと勘違いしたらしい。拍手やコールが次々沸き起こり、收拾がつかなくなる。

僕とクローバーは堪らず、城門の中へと逃げ込んだのだった。

「まったく……くだらねえやつらだよ。」

クローバーが、不満そうなため息をつく。

「まあ名誉がもえたんだからいいんじゃない？」

元々そういう作戦なのだ。予想より少し派手になってしまったが、悪くは無い。むしろ、今後役に立つだろう。

「私は結果が良ければそれでいいって、納得できる性格じゃねーんだよ。」

クローバーはそう言って、苦い顔をする。

クローバーにとって、八百長で手に入れた名誉は、ゴミ同然なだろう。むしろ、彼女の本当の名誉を傷つける、棘かもしれない。

クローバーは人を欺く嘘が、大嫌いなのだ。

「仕方ないよ。大事な任務を遂行するための、作戦の1つさ。責任は僕が取るよ。」

少しでもクローバーの心を軽くしようと、そう言っただけだが、クローバーは

「そういう問題じゃねーんだよ。」

と、呟くだけで、あまり効果はなさそうだった。

どうすることもできない僕は、ただ肩をすくめる。

「おお、これはこれは冒険者殿。あの魔物を追っ払うとは流石だな。」連邦の兵士の、アンドルが声をかけてくる。ホライズンブルーの髪色のこの青年は、その真面目そうな雰囲気から、公国の国境警備隊のブライドを思い出す。髪型も同じような整えられたショートカットで、どこか似ている気もした。しかし、アンドルの方が、ブライドよりは長身で、ガタイも良く、兵士としてはそれなりに強そうだ。それはさておき。

アンドルは僕らに賛辞を送ると

「陛下も褒美を取らずとおっしゃっている。ぜひ、王の間へ……」

と言って、恭しくお辞儀をした。

僕とクローバーは顔を見合わせる。願ってもな展開だ。しかし、虫が良すぎる気もする。

「さっきの魔物が、連邦にある魔王国の秘宝を返してもらいきたと言っていましたか……」

僕は持っていた情報のカードを1枚見せて、アンドルの様子を伺う。

「何？魔王の国の秘宝？」

アンドルは首を傾げる。

「秘宝が何かはわからないが、陛下が直接知るものなら、謁見の際にも聞いてみると良いだろう。」

不思議そうな顔でそう答えるアンドルを見て、僕は、罨では無さそ

うだと判断する。何かあるにしても、少なくともこの兵士には何も知らされていないようだ。

どうしたものかと悩む僕の服の裾を、クローバーがちよいちよいと引っ張って、目配せしてくる。「行くぞ」と言っていた。

考えたところで、始まらない。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。

僕たちは、アンドルの後ろに続いて、王の間へと向かった。

クローバーは目を閉じていた。

眠いというわけではなく、瞑想をしているようだった。凜とした空気が、彼女を包んでいる。

今のクローバーは、戦闘待機をしている騎士だ。集中して、心を落ち着け、いつでも戦えるように備えている。

「謁見の準備が整いました。」

メイドの声に、僕は思考を一旦止める。

隣でクローバーがゆっくり目を開け、息をつく。

「行こうか？」

「うん。」

そう短いやり取りをして、メイドの後に続き、僕らは王の間へ足を踏み入れた。

「ふむ。お前が魔物を追っ払ったというのか。」

白髪に、褐色の肌、身につけた黒い鎧には、美しい金細工の様子が描かれている。

公国の王ドレイクとは違う。連邦の王は、他を寄せつけない威圧感があり、どこか攻撃的にも見える。

「何か褒美を授けたいが……希望はあるか？」

王がそう言いながら、こちらを睨む。とはいっても、目は見えない。顔は、鎧と同じ金の装飾がついた黒い仮面で覆われていて、その表情を伺うことはできないのだ。

仮面の奥から、王が僕らを睨んでいるような気がする。ただ、それだけだ。

クローバーは王を見据えたまま、微動だにしない。ドレイク王と謁見した時の、リラックス具合とは打って変わって、目には戦意が宿っていた。

クローバーは戦いの雰囲気を感じ分ける能力に、恐ろしいほど秀でているのだ。彼女が警戒態勢を敷いているということは、ここにはそれがあるのだ。僕には見えない、戦火の火種が。

親書を握りしめる手に、汗が滲む。

余計なことをすれば、あつという間に、どうにもならない運命の渦に飲み込まれるだろう。

でも、もうすでに、ここに来た時点で、余計なことに手を出した感
は否めない。

「実は、追い払った魔物から、魔王国の親書をもらい受けました。」

僕は、国王に親書を差し出す。

今更、止まることはできなかった。

ドレイク王と謁見の経験の実績があった僕は、連邦の王を過小評価していた。もつと簡単に話が進むだろうと、楽観的に考えていたのだ。

でも、実際に王に会って、僕はその考えを悔いた。

クローバーが警戒する意味が、僕にも何となくわかる。この王は危険な匂いがする。どこがと、はつきり明示することが出来ないが、僕の本能がそう叫んでいるのだ。

しかし、軽く見ていたとはいえ、僕だってそれなりの覚悟はもってきたつもりだ。どんな展開だろうと、甘んじて受けよう。

王は親書を広げ、読み始めた。

「魔王国の宝を返せ、とな？」

王が手紙から顔を上げ、訝しげにこちらを見る。

「……お主、魔王国の回し者だな。」

「いえ、違います。」

そう冷静な声で返す。

「僕らはその手紙を預かっただけで、魔王国とは関係ありません。」

「このような親書を持ってきて何が違うものか！」

王はそう僕らを怒鳴りつけると、親書を破り捨てた。

僕は思わずビクッと体を震わせたが、クローバーは相も変わらず、王をまつすぐ睨みつけていた。怒鳴り声くらいでは、引きもしない。

「お前がなんであれ、この国を脅かす不届き者であることに相違ない！」

「待ってください！話を！」

「兵よ！こやつを引つとらえよ！」

「僕らが本当に魔王国の回し者なら、親書なんて渡さず、あなたに危害を加えるでしょう。でも、僕らはそれをしなかった！それが僕らがただの冒険者である証明に……」

「地下牢へ入れるのだ！」

なんとか軌道修正を図ろうとするも、王は聞く耳を持たない。

「私に触るな！」

クローバーが、取り押さえようと、肩を掴んできた兵を振り払う。

剣柄に手が伸びていた。

「クロッ！」

僕は慌ててその手を押さえる。今ここで剣を抜いたら、さらに厄介なことになりかねない。

僕は王の説得を諦めて、どうにかクローバーをこの場から離す方向にシフトする。暴れられたらたまったものではない。

「抵抗はしません！だから、乱暴しないで下さい！」

僕はクローバーの手を引くと、抱き寄せ、押さえ込んだ。

「てめえ！離せ!!」

クローバーがいつもの人を射殺しそうな目で、僕を睨んで、腕の中で抵抗する。あまりの恐怖に、僕は思わずゴクリと唾を飲み込んだ。多分今手を離したら、確実に切られる。

向こうから、アンドルが駆けてくるのが見えて、僕はホツとする。顔見知りである彼なら、僕らに危害は加えてこないだろう。

「こいつらは、俺が連れて行く。付いてこい。」

僕はクローバーを押さえたまま、アンドルに続いて地下牢へ向かった。

第76話 地下牢

地下牢までくると、私はエルサイスの手を乱暴に振り払い、怒りを込めた目で睨みつける。

不愉快だった。

「クロ、ごめんつてば、そんなに怒らないで。」

エルサイスが眉を下げ、困った顔でこちらを説得してくる。

「仕方なかったんだよ。」

「仕方ないにしても、気に食わねーんだよ！」

私はぶつけどころのない感情を、とりあえず目の前のエルサイスに投げつけた。何もかもに腹が立つ。

私たちを反逆者扱いしたジョージ王も、取り押さえようと体に触れてきた兵士たちも、反撃しようとした私を止めたエルサイスも、全員切ってやりたい気分だった。

「クロ、落ち着いて。大丈夫だよ。」

「何が大丈夫だっていうんだ。」

「それは……まあとりあえず落ち着こう？」

「そーやって誤魔化して！私の事何にも知らないくせに！わかったような口きくな！」

一瞬だけ、エルサイスが悲しそうな顔をしたので、私は思わず口をつぐむ。言いすぎだ。つい、口が滑ってしまった。

しかし、エルサイスが悲しげだったのはほんの一瞬で、すぐにいつものこやかな表情に戻ると

「大丈夫だよ。」

と繰り返した。

胸がズキリと痛む。この痛みが何なのか、自分でもよくわからなかった。

「おまえも運が悪かったな。」

言い合いをしている私たちの間に、アンドルが割り込む。

「可愛そうだからこの鍵はしめないで置いてやる。適当に逃げ出すがいい。」

「そんなことしていいんですか？」

エルサイスが訝しげに首を傾げる。そんなことをしたら、今度はアンドルが反逆罪に問われるのではないだろうか。

「最近はこのんのが毎日のことだな。全員、牢に入れておいたら、いっぱいになっちまう。」

アンドルはそう言うと、疲れたため息をつく。

「最近あの王はどうも様子がおかしい。すぐにキレて、牢にぶち込めと怒鳴るんだよ。」

それは王の資質として、問題があるのではないかと、私は思った。

気が短いというのは、私も人のことは言えないが、国1つを動かす権力を持った者が短気では、それに振り回される国民達が大変だ。

「安心しろ。国王は人の顔を覚えられない。逃げたとて、明日には忘れていくさ。」

「それはそれで問題のような気がしますね。」

エルサイスがアンドル苦笑いを返す。

連邦の王は、変な王だ。あんまり近づかない方がいいかもしれない。

「ああ、それと……」

一度立ち去ろうとしたアンドルが、立ち止まってこちらを振り返る。

「魔王国の宝、だが、おそらくこの地下牢の奥にいる、あれのことだろう……。」

「いる？」

「あれ？」

私とエルサイスは顔を見合わせ、首を傾げる。アンドルの表現になんとなく違和感を覚えたが、それがなんなのかまではわからない。

「この国の宝は、地下牢の奥、宝物庫に眠っている。が、奥は魔物の巣だな。簡単には立ち入れないのだ。」

アンドルは簡単な情報だけ残すと

「じゃあな。」

と言って去っていった。

「さて、どうしようか？」

さつきあんなに言い争ったのに、何事もなかったかのように接してくるエルサイスが、私は嫌だった。

彼にとっては、あんなの言い争いとも言わないのかもしれない。私が一方的に、勝手に怒りをぶちまけている。ただそんな状況に過ぎない。

私ため息をついた。とにかくすべてがバカバカしかった。

別にエルサイスに、自分をもっと知って欲しいなんてことは、1ミリも思わない。

実際私は、まだこの気持ちを説明できるだけの言葉を持っていないし、他人に話せるほど、傷も癒えていない。

ただ、腹は立つ。

私が何に怒って、何に苦痛を感じているのか、何も知らなくせに、無責任になだめすかされるのは、自分の気持ちを軽く見られているように、不快だった。

魔王国の宝がなんだろうと、私にはどうでもいい。ただなんとなくむしゃくしゃしていたので、体を動かして発散したい。そんな気分だ。

「行くぞ。」

私はそう短く言うと、エルサイスの返事も待たずに、地下牢の奥、炎の洞窟へと入っていった。

第77話 知らないからこそ

クローバーは言った。「私の事何にも知らないくせに」と。それはその通りだった。僕はまだ、彼女のことを知らな過ぎる。

でも、だからどうというわけではない。そう言われたところで、悲しみも、怒りも、湧いてこなかった。ただ何となく、一瞬チクリと胸が傷んだ。それだけだ。

炎の洞窟は、小さな小部屋がいくつも連なり、その四方にドアがあつて、迷いやすい。行き止まりも多く、少しでも方向を見失ったら、脱出するのも困難になりそうだ。

僕の後ろを、クローバーは黙ったまま付いてくる。元々クローバーは口数が多い方ではないので、特に珍しいことでは無いが、今日は一段と無口だ。僕が話しかけても返事さえしない。

「行き止まりだ。戻って別のドアに行こう。」

僕はそう言って1つ前の部屋に戻ると、開け終わったドアにチョークで×印をつける。

僕がそうしている間も、クローバーは無言でコノミを狩っていた。機嫌が悪いのかもしれない。

「クロ。」

「……………」

返事はない。

知っているつもりになるよりは、知らないとわかってる方が、ずっといいと僕は思っている。

相手を知ったつもりになって、あれこれ決めつけて見ていると、本当姿が見えなくなってしまうものなのだ。

そうなってしまうくらいなら、いつでも、何も知らないという気持ちでいた方が、事故が少ない。

でも、気になることがある。それは今確かめなければならなかった。だった。

「クロ、聞いてもいい?」

「……………」

相変わらず返事はないが、僕は構わず話を続ける。

「僕はさ、クロのこと何にも知らない。だからこそ確認したいんだけど、クロは自分のこと、僕にもっと聞いてほしいって思うかい？」

「はあ？」

クローバーが不機嫌な顔で、こちらを振り返る。

「私がそんな面倒なやつに見えるか？」

「大事なことから、一応確認しておきたくて。」

僕がそう言うと、クローバーは呆れたような深いため息をついた。

「くだらない」とでも言いたげだ。

「私はお前が聞いてこなくても、言いたいことは言うし、知っててほしいことは伝える。逆に聞くが、エルは私のことをもっと聞きたいって思うか？」

「うーん……。」

クローバーのことを知りたくないわけではない。でも、積極的に聞き出したいかと言われれば、そうでもなかった。

僕は他人に興味がない。それは一番身近であるクローバーにも、当てはまることだった。

彼女が何を考えて、どうしようが、僕は気にしない。ただ、僕自身に不利益になることがあるならば、それは知っておきたいという程度だ。

その他のことを、クローバーが言おうが、言わまいが、話そうが、隠そうが、僕にとっては関係ないことで、耳を塞いで聞かないということもないし、無理に聞き出すこともない。

「別に思わないかな。」

「だろ？」

クローバーは最初からそうわかっていたようで、そこには怒りも呆れもない。

師匠のところに居た女性たちは、僕がこういう態度を取ると、怒り出すばかりだった。自分に興味がないと言われるのは、彼女たちにとって、存在を否定されるのに等しいことだったのだ。

そうやって、誰かの思考まで独占したいと思うのが、恋とか、愛と

か言うものならば、僕は一生理解できそうにない。

だからこそ、クローバーの言葉に、胸が傷んだのかもしれない。できないことを、要求された気がして、どうにもできない罪悪感のようなものがあつた。

でも、その罪悪感は杞憂だつた。クローバーは、僕が他人に興味がないということ、重々わかかつていて、僕に無理な要求をしたわけではない。

「興味がないのに、あるフリされるなんて、まっぴらごめんだ。そんなふざけたことお前がしたら、確実にぶん殴るね。」

クローバーの強烈な腹パンが脳裏に浮かび、僕は思わずお腹をガードする。

「私が怒ってるのは、そこじゃない。」

クローバーはそう言うのと、僕にまっすぐ向き直つた。

「私はもう大人だ。大丈夫なんて簡単な言葉で、何度も誤魔化される程、幼稚じゃない。私には私の、どうにもできない感情がある。それをないがしろにしないでくれ。」

クローバーはそう言つて、僕を睨んだ。

僕はクローバーの感情を、軽く見ていたわけではない。ただ、情報がないから、慰め方がわからず「大丈夫」と言うしかなかったのだ。でもそれこそが、ないがしろしているということなのだろう。

早く落ち着いてほしくて、彼女の感情を、乱暴に押さえつけようとした自覚はあつた。

「わかつた。ごめん。」

僕は素直に謝る。そんな僕を見て、クローバーは小さくため息をつくと、バツが悪そうに俯いた。

「私もだ。さつきは言い過ぎた。自分が話してないだけなのに、何にも知らないくせになんていうのは、理不尽だつた。悪かつたよ。」

そう謝るクローバーがかわいくて、僕は思わずクローバーの頭を撫でる。

「仲直り。」

そう僕が笑うと、クローバーは

「うるせー。」

と言って僕の手を振り払った。

僕らは新たな気持ちで、炎の洞窟の奥を目指す。

とつても単純で、小さなことだが、やはり話し合うということは大
事なのだと思う。僕もクローバーも、互いのことは何も知らない。
でも、だからこそ、話し合う必要があるのだ。いつでも、どんな時で
も、対等に。

「なんか雰囲気変わったな。」

「最深部が近いのかも。」

扉の先は、牢屋のような鉄格子の部屋が連なっていて、床も石畳が
敷かれ整備されている。1つ前の地面がむき出しの小部屋とは、少し
空気が違っていた。

「そこの方……」

どこからか、か細い声が聞こえる。

「今しゃべったのは……?」

声のする方に目を向ければ、黒い毛並みのネズミのような魔物がい
る。どことなく、地下工場にいた魔王トツポに、出で立ちが似ている
気がしなくもない。

「この魔物か?」

クローバーがデモンソードIIアビスを魔物に向けながら言う。

「違う……そいつは見張りだ。」

「後ろの牢屋に誰がいる……?」

僕は目を凝らして、牢屋の奥を覗き込もうとしたが、暗闇が深く、何
がいるのか全く見えない。

「誰かは知らぬが、こいつを倒して、ワシを解放してくださいませんか?」

謎の声に、僕とクローバーは顔を見合わせる。

「どうする?」

「うーん……。まあ解放したやつが悪いやつだったら、ここで倒せば
いいだけのことだし。とりあえずやるか。」

僕はクローバーの声にうなずくと、彼女に倣って杖を構えた。

第78話 魔王国の宝

見張りの魔物は、特別な連携も必要なく、クローバーの一撃であっさり倒れた。

「なんだ、スカスカだな。」

クローバーはつまらなそうにそう言うと、ため息をついた。退屈そうだ。

「刺激が足りないかい？」

「全然足りないな。」

僕は肩を竦めることしかできない。

平穏とは呼べない世の中だが、それでも、クローバーが求めるような、ギラギラとした劇物は、中々落ちていないものなのだ。

「助かった。礼を申す。」

見張りの魔物がいた牢屋の奥から、新たな魔物が姿を現す。見た目は、痩せたお爺さんのようだが、下っ腹だけが赤子のように突き出ている。その不格好な出で立ちが、魔物っぽさを引き立てている。

「ワシは魔王国の宝とも呼ばれた武人。」

「え、魔王国の宝って……」

「あなたのことなんですか？」

僕もクローバーも固まってしまう。

魔物国の宝がなんなのか、ある程度予想はしていた。金銀財宝だとか、調度品だとか、特別な技術が記された資料だとか。しかし、そんな安易な予想は、ことごとく裏切られた。魔王国の宝が、魔物だったとは、流石の僕でも、予想外だ。

「いや、これは……うん……刺激的かもしれん。」

クローバーはそう言っ、啞然としている。僕はその様子がおかしくて、少しだけ笑った。

思えば、ここに来る前、連邦の兵士のアンドルは「この地下牢に『いる』あれのことだろう」と言っていた。最初は違和感があったが、生きている魔物なのであれば『ある』よりは『いる』という表現が正しい。今振り返れば、それがヒントになっていた。

「魔王国からの命で来たのか？」

解放された武人はどこか嬉しそうに、僕らに尋ねる。

「そうであるような、そうでないような……」

僕は困ってクローバーを見る。今の僕達は、とても微妙な立場だ。僕らは、魔王国の命を受けた紳士オークの依頼でここにいるだけで、直接魔王国の依頼を受けたわけではない。広い意味で捉えれば、魔王国の命とも言えるが、魔王国の使い本人ではないのだから、違うとも言えた。

「お前の仲間に、親書を渡すよう頼まれたんだが、魔王国の回し者扱いされてな。」

クローバーが事情を説明する。

「そうか」

武人は1度深く目を瞑り、感慨に耽る。

「ワシは魔王の命を受け、この国に来た。」

再び目を開けると、武人は話し出す。

「この国にも我らが知識を広めんと。そして友好を築こうとな。しかし捕らわれてしまつてな。」

「そりゃ災難だなあ。」

クローバーが武人に哀れみの目を向けた。

意外にも、魔王国は他国と友好的な関係を築くことに前向きなようだ。

ただ、相手が悪かった。ここにくる前、城門であったことを見ればわかるが、この国民は皆、魔物の存在に敏感だ。アブル連邦は、反魔物国家つと言つてもいいほど、魔物排除を推奨しているような国なのだ。

そんな国と、いきなり友好関係を結ぶのは、相当難しいミッションだろう。

「人の思想を変えるっていうのは、一筋縄じゃいかねーもんだ。」

「個人ならまだしも、相手は国ですからねえ。そう簡単にはいかないでしょうね。」

合理的で、経済的な利があるとしても、人の心は早々変えられない

ものなのだ。人の感情というものは複雑な上に、固まりやすく、溶かしにくい。面倒だ。

僕とクローバーは、武人と共に、ため息をついた。
「ん？」

急にクローバーが、後ろを振り返り、今入ってきたばかりのドアを見る。

「どうしたの？」

「いや、なんか嫌な感じが……。」

クローバーはそう言いながら、剣柄に手を伸ばし、辺りに目を光らせる。僕には何が起こってるのか、さっぱりわからないが、クローバーに倣ってとりあえず杖を持つ。

「……なんだ、この匂いは。火、火だ！誰かが火を放った……！」
「……!!」

武人の声に、僕は焦る。こんな狭い洞窟では逃げ場がない。危険な状況だった。

「クロ!!」
「分かってる。」

クローバーは素早く出口に向かって走り出す。僕もその後が続く。さらにその後ろから、武人が来ていた。

クローバーが、元来た扉を開ける。

その先は、熱い炎の絨毯が広がっていた。

第79話 炎に追われて

「くっ……。」

熱風に、私は思わず片手で顔を覆う。呼吸をするだけで、その熱さで喉が焼けそうだ。

「ゴッホ……ゴッホ……」

私の隣で、エルサイスが口を押さえながら、苦しそうにむせる。

狭い部屋全体に、真つ赤な炎が広がり、ゆらゆらと風になびくカーテンように揺れていた。

「ダメだ、もう入口まで炎に包まれている!」

後ろから来た武人が叫ぶ。

走って出口を目指すことは、足の速い私なら、きつとできる。だが、エルサイスには無理だろう。

この緊急事態で隠された才能が開花し、彼の普段の実力とはかけ離れた速度を出せたなら、いけるかもしれない。しかし、そんな火事場の馬鹿力なんてものは、中々出せないものなのだ。途中で力尽きるのが関の山だろう。

かといって、エルサイスを置いて行くこともできない。私は道が一切わからないのだ。彼が居なければ、例え火が回っていなくとも、1人でここを脱出するのは困難だろう。

「ここは私に任せろ。一瞬だけ炎を治める。その間に入口へ!」

武人はそう言うと、何やら呪文を唱えた。緑色の光が、辺りを照らし、優しい風が私たちを包む。一瞬で、赤い炎の絨毯は消え去り、出口までの道ができる。

「いけ!」

武人の声に、私はエルサイスの手を引いて走り出す。

「うわっ!!」

「走るぞ!どっちに行けばいいか指示しろ!」

「ええ?!ちよつと……わっ!!」

突然のことに、エルサイスは戸惑って、情けない声を上げる。でも、私はお構い無しに扉を蹴破りながら、先へ進む。グズグズしてはいら

れないのだ。

「どつちだ？」

「右！」

「次は？」

「はあ……はあ……まっすぐ！」

足がもつれ、へトへトになっていくエルサイスを、私は無理やり走らせ引きずり回す。

繋いだ手に汗が滲む。それは疲労か、焦りか、はたまたトキメキか。そんなことを考えて、あまりのくだらなさに、自嘲する。バカバカしい。

こういう時、どうでもいいくだらなことを考えてしまうのは、私の癖だった。でも悪くない癖だ。ピンチの時こそ、こうやって笑っていれば、チャンスが訪れるものなのだ。

とはいえ、状況は芳しくない。武人がかけた魔法の効果が切れかけているのか、辺りの空気はじわじわと焼け付くように、少しずつ温度を上げていく。

エルサイスの指示で、正面の扉を蹴破った瞬間、真っ赤な炎が、クラッカーから飛び出すリボンのように、私たちに降り注ぐ。嬉しくないサプライズだ。

「あっついー！」

「うわあっ!!」

私もエルサイスも、思わず怯む。

「くっそ!!」

もう先に進めそうにはなかった。少しでも前に出れば、紅の炎があつという間に私たちの身を焼き尽くすだろう。

地獄の業火と呼ばれるような高温で、一瞬で蒸発するくらいの熱ならまだマシだが、このまま普通に焼け死ぬのは、苦しそうで嫌だ。

「どうしようか……？」

息を上げてへトへトな様子で、エルサイスが尋ねてくる。その表情からは、死の恐怖は感じられない。ただ、本当に、純粹に疲れた様子だった。

「うーん……」

これはもう詰んでいるのではないかと思う。絶体絶命。万事休す。

「私は……この守り神。炎の精霊……」

突然の声に、私とエルサイスは顔を上げる。

揺らめく炎の中に、巨大な蛇のような魔物が姿を現す。

「なっ……?!」

「?!?!」

急展開に、私もエルサイスも言葉を失う。

この魔物は敵か？味方か？判断がつかず、私は咄嗟に剣柄を握るが、自分でも意味があるとは思えなかった。この炎の中だ。どっちにしろ勝ち目はないだろう。

「火は我が一部、この火、我に任せよ。」

魔物がそう言うと、メラメラと舐めるように近づいてきていた火が、引き波にでもあったようにまたたく間に消えていく。

「すごい……。」

驚愕に息を飲む。

あまりのことに、呆然としている私たちに、魔物がぐつと力を込めた目配せをする。私はハッと我に返るとエルサイスの手を取り、走り出す。

「えっ？うわああ?!」

当然のことにエルサイスは無様な悲鳴をあげる。私は構わず彼を引きずるように引つ張りながら

「ありがとうー!!」

と魔物にお礼を言うと、出口を目指した。

地下牢までなんとか戻ってきた私は、膝に手をつき、肩で息をする。走って疲れたのは久々だった。死ぬかもしれない緊張感と、火の熱と、エルサイスを引きずったのが合わさって、普通の何十倍もの体力を使ってしまった。

エルサイスは、限界まで無理やり走らされ、もう立ち上がることもできないのか、地下牢の床にうつ伏せに倒れ込み、苦しそうに激し

い呼吸を繰り返していた。

「はあはあ……もう……無理……。」

「だらしねえな……。」

そう言いながらも、私も疲れた足を休ませるため、地べたに座り込む。

「火は治まったようだ。」

突然の声に、私は思わず剣柄を握る。対照的にエルサイスは、ピクリとも動かない。むしろ動けないようだ。敵襲だったら、真つ先に殺られてしまうだろう。

幸い、敵襲ではなく、武人が追いついてきただけだったので、今のところ問題はない。

「しかし、あの感覚は何だったのだろうか？」

武人が言っているのは、あの魔物がやったことだろう。

「魔物が現れて、火を治めてくれたんだ。」

エルサイスに水筒を渡しながら、私が答える。エルサイスはのろのろと起き上がり、床に座り直すと、水筒を受け取り、中身をおろす。

「ゴッホ……ガッハ……ゴホゴホ……。」

「落ち着いて飲め。」

むせるエルサイスの背中をバンバン叩いてやる。

「ゴホゴホ……ごめん……。」

涙目になっている彼を見て、私は呆れたため息をついた。頼りないパートナーだ。

「火の精霊の仕業か……。だとしたらあの洞窟が燃えたのは、精霊の怒りではなく……人為的なものか。」

武人の呟きに、私「うん」っとうなずく。

誰が、いったいなんのためにかは、私にはわからない。私もエルサイスも、恨みを買っていないとは言いきれないが、火を放たれるくらの殺意を向けられるほどのことをした覚えはない。

心当たるところは、連邦の王のあの怒りだ。あの傍若無人なキレやすい王なら、洞窟に火を放つくらいことは、やりそうな気がした。「ともかく、ここから出よう。ワシも魔王の元に戻らねばならん。」

武人がそう言うので、私は立ち上がった。

「エル、立てるか？」

「ええ……。ちよつと待って……。」

私は嫌そうにするエルサイスの手を取ると、力を込めて引つ張り、無理やり立たさせた。

「ううう……。」

足をプルプルさせながら何とか立ち上がる彼を見て、生まれたての子鹿を連想してしまい、私は思わず笑ってしまった。

「ははっ！だせえなあ！」

「もう……笑わないでよ。」

不機嫌そうにメガネを押し上げるエルサイスを見て、ちよつとホツとする。

「生きて出られてよかったな。」

私がそう言うと、エルサイスはやつと笑って

「そうだね。」

と、言った。

私が手をあげ構えると、エルサイスがパチンと手を合わせる。

勝利のハイタッチだった。

第80話 英雄の休息

ピクピクと小さな痙攣を繰り返す両足を、僕はゆっくり湯船に沈めた。温かいお湯が、疲れた体に優しく染み渡る。手触りのいい毛布に包まれるような、甘美な癒しに、僕は思わず

「ふあああー……………」

と長い息をついた。

疲れていた。とにかく今日は疲れてへトへトだ。

連邦の宿のバスルームで、僕はその疲れを癒していた。今日泊まる部屋は、いつもよりグレードが高い。バスルームは、いつもと違って広めで、湯船に足が伸ばせて入れるのはラッキーだった。

目を瞑り、肩までお湯に浸かれれば、酷使された全身の筋肉が、弛緩していく。そのまま湯船に溶けだしてしまいそうな気分になる。

ふわふわと、空中に浮かぶような感覚で、まどろむ。「寝てはいけない」と頭のどこかで思いつつも、思考は流れ、徐々に白く染まっていく。

「おーい、まだー?」

クローバーの声に、僕はハッと目を開ける。どれくらいの時間が経ってしまったのか、まったくわからないが、そんなに長い時間では無いはずだ。

「今上がるよ。」

いつものようにクローバーに1番風呂を譲ろうとしたのだが、あまりにも疲れている僕の様子を心配してくれた彼女が

「今日はいいから、先に行って休め。」

と言ってくれたので、僕はその言葉に甘えることにしたのだった。湯船の縁を持って、腕の力でなんとか立ち上がる。足は相変わらず小刻みに震えていて、しばらく使い物になりそうになかった。

ヨロヨロと脱衣場で着替えを済ませる。身体のあちこちが痛い。こんなにへトへトになったのは、久々だった。

「飯さっつききたよ。」

テーブルの上には、所狭しと料理が乗せられていた。アブル産の

マーリンソテー、ゲルミアヒージョ、プロシユート、バケツトに、ポテトに、フルーツと、中々豪華な夕飯だ。

「これもサービス？」

「そうだな。なんか複雑だけど。」

「まあ2度も魔物を退治した英雄だからね。」

僕はそう言いながら席に着くと、ゲルミアヒージョをフォークでつついた。

「きゃあ！魔物よー！」

炎の洞窟から出るなり、武人の姿に驚いた町人が悲鳴を上げ、走り去っていく。

「やはり魔物と見るだけでこの反応か……。同じ生活圏で暮らすという共存には程遠いな……。」

そう武人が悲しそうに呟いたので、僕は肩を竦めた。本当にそうなのだ。そこまで辿り着くには、まだまだ時間が必要そうだ。

「魔物の手先め。その魔物と結託して、地下洞窟で火を放つとは。」

テラスの上から、連邦の王がこちらを見下ろしていた。

「はあ？知らねえ話だな！火をつけられたのはこっちの方だ！危うく死ぬとこだったんだぞ！」

クローバーがそう怒鳴り返すが、連邦の王は顔色1つ変えず、効果はあまりなさそうだ。町人たちも、僕たちを遠巻きにし、敵意の目を向けていた。あまりいい状況ではない。

「魔物と手を組み、町を混乱させた罪は、重いぞ！兵士共。ひとつとらえろ！燃えている地下牢に押し込んでしまえ！」

王がそう命令すると、数人の兵士が武人へと群がる。

「ぐあああああ！」

「武人っ!？」

助太刀に走ろうとしたクローバーの周りを、連邦の兵士が取り囲む。僕は慌てて彼女の肩を掴み止める。多勢に無勢。ここで暴れるのは得策ではない。

「くっそっ!!」

悪態をついて地面を蹴るクローバーに

「ワシと戦いなされ……ワシを殺すのじゃ……。」

と、武人が声をかける。

「そんなこと……。」

躊躇うクローバーをよそに、僕は杖を取る。

「クロ。」

僕が促すと、クローバーは

「2回も八百長か……ろくな日じゃないな……。」

とため息をついた。

「仕方ないよ。こうしないと納得しない人ばかりなんだ。」

「ホント、くだらない世の中だ。」

クローバーはそう言いながらも、剣を抜き構える。

「行くぞ！」

武人に切りかかるクローバーに、僕はハイオーラをかけて支援した。

「うまいな。」

「うんうん。」

お風呂から上がってきたクローバーとともに、豪華な夕食を取る。たまにはこういうのも悪くない。

武人を倒したあと、町人たちは手のひら返して僕たちを賞賛し、英雄だともてはやした。

連邦の王は

「ふん……民に見られては仕方あるまい。お前は街の救世主、か。」

と、諦めたように言い残し、マントを翻しながら城の中へと引っ込んで行った。

噂には聞いていたが、本当にめちやくちやな王様だ。できることなら、もう2度と関わりたくない。

「あいつは無事帰れたかな……？」

プロシユートにかぶりつきながら、クローバーが言う。

「あいつって、さっきの魔物のこと？」

「うん。」

「どうだろうね？無事帰れて、僕たちのことを覚えてたら、女王様に報告してくれるって言ってたけど……」

クローバーの一撃で倒れた武人の魂は、何もなければ魔王国へと還り、そこで再び復活する。黒い霧になる直前、武人は

「ワシを迎えに来ている我が同胞には女王様陛下の元に戻ったと伝えてくれ……」

と、言付けを頼んでいった。

「変なオークの方も、悪いやつじゃなかったな。」

「そうだね。その辺の人間より、ずっと紳士的だった。」

武人の言付けを伝えると、紳士オークは喜び、感謝の意を示してくれた。

「変な魔物たちだったな。」

「うーん……そうかもね。この辺りじゃ珍しい魔物だったね。」

この辺りの魔物といえは、こちらを見れば襲ってくるし、言葉も話せない。そんな凶暴で、野蛮な者が多いのだ。

「魔王国か……。」

「行ってみたい？」

「うーん……どうだろう？今すぐってわけじゃないな。」

クローバーはそう言いながらも、どこか期待した顔をしている。

「いつか、行きたいね。」

僕がそう言うと、クローバーは

「そうだな。」

と笑った。

第81話 恐怖と差別1

私は何度目かわからない寝返りをうった。

スイートルームのベットは、広く、マットは柔らかく、掛け布団は羽のように軽く、素晴らしい寝心地だった。

しかし、私にとってそれは、慣れない感触で、落ち着かない。そのせいで疲れているのに、中々寝付けず、こうしてゴロゴロ何度も寝返りをうって、眠気が落ちてくるのを待っていた。

「ねえ……エル……？」

眠れない私は、隣のベットにいるエルサイスに声をかける。返事の期待はしていなかった。あんなに疲れていたのだから、きつともう寝ているだろう。それを承知で、ただなんとなく、呼びかけただけだった。

それなのにモコモコの羽毛の布団の下から

「んー？」

という返事が返ってくる。

私はびっくりして、何も返せない。

「どうしたの？」

「あ、いや……」

「眠れないの？」

しどろもどろになる私の様子に、エルサイスは「ふっ」っと笑いを漏らすと、起き上がり、ベットに腰掛け、そのまま流れるように、サイドテーブルのライトをつけた。

「な、何？」

何だかよくわからない展開に、私は戸惑いの声を上げながらも、エルサイスにつられて上半身を起こす。

「僕も眠れないんだ。」

エルサイスはそう笑うと、ライトの下に置いていたメガネを取り、かける。

「あんなに疲れてたのに？」

「疲れてるからこそかな？」

エルサイスはそう言うと、よろよろと立ち上がり、どこかへ行ってしまう。

私はベットにうつ伏せに寝そべりながら、掛け布団をクッション代わりに抱きしめる。最初から起きていたのだから、私が無理に起こしてしまったわけではない。エルサイスが勝手に起き上がっただけなのだが、なんだかちよつとバツが悪かった。

「はい、どうぞ。」

両手にマグカップを持って戻ってきたエルサイスは、その片方を私に差し出す。

「ホットミルク。」

エルサイスはそう言いながら「ずずー」と音を立てて先に中身をすすった。湯気でメガネが曇っている。

「前、見えてないぞ。」

私はそう指摘しながら、ベットに座り直すと、カップを受け取り、恐る恐る一口口を付ける。熱すぎず、温すぎずの、いい温度だった。ゴクリと喉を通っていけば、ふわふわと体が温まっていく。

「落ち着いた?」

「うん、まあね。」

私がそう答えると、エルサイスは嬉しそうにニッコリ笑った。

私はエルサイスが嫌いではない。男にしては、好きな方だと思う。

そう考えてしまう辺りに、私の差別心があった。

「ねえ、エル?」

「ん?」

「前にさ、私たちが差別されるように、私たちもどこかで人を差別してるって言ったじゃん?」

「ああ、随分前だね。ユーキさんに怒って、クロがヤケ酒してたときだ。よく覚えてたね。あんなに酔ってたのに。」

エルサイスは、思い出し笑いを漏らす。

少し恥ずかしくなって、私はムツとした顔を返す。確かにかなり酔っていた気がするが、ちゃんと記憶はある。

「それが?」

「なんか今回のことで、急にそれを思い出したんだ。」

この国では、魔物の存在そのものが差別され、話し合いすらできない。紳士オークは「お互いの理解をもっと深めることができればいいんだが」と嘆いていた。

「ねえ、エル。私はさ、恐怖は差別とセットになりやすいんじゃないかって思ったんだ。」

私はそう言いながら、まだミルクの残った温かいマグカップを、両手で握りしめる。

「この国の人は、魔物を恐れていて、魔物を見るだけで、その魔物がどんな人格を持っていようとお構い無しに、悲鳴を上げる。」
「うん。」

エルサイスは、合図打ちをしながら、空っぽになったマグカップをサイドテーブルに置き、私のベットの端に腰掛けた。近過ぎず、遠過ぎず、ちょうどいいくらいの距離だ。

「そんなのは、バカバカしいって思ってた。くだらない、理解できないって。」

所詮は他人事だった。私はそんなやつとは違う。ちゃんと1人1人、個人を見て、話が出来ると、自分で自分を買っていった。

「でもさ……、結局私は、そいつらと同じなんだって、気づいたんだ。」

私は顔を上げ、エルサイスを見つめる。ルームランプの淡い光に照らされた彼の表情は、優しかったが、真剣で、笑ってはいなかった。

第82話 恐怖と差別2

私は覚悟を決めて、大きく息を吸い込むとエルサイスの目を真っ直ぐ見ながら、言葉を紡ぐ。

「ねえ、エル。私は、男が怖い。男が恐くて憎い。」

そんなこと、本当は認めたくなかった。でも認めなければ、自分の差別と向き合えない。

城門下で腕を掴まれたときも、王の間で兵士に囲まれたときも、あんなに怒ってしまったのは、相手が『男』だったからだ。

結局、魔物を見れば悲鳴を上げる人々と一緒に、私は相手が『男』というだけで、怒りをぶつけていた。

「そっか。」

エルサイスはそう素っ気ない返事をしながら、マグカップを握りしめる私の指先に、ふっと触れる。私はびっくりして一瞬体を強ばらせた。

「僕が怖い？」

「エルは……多分、大丈夫。でも、男の中ではマシな方って感じですか、評価できない自分がいて、嫌だ。」

私はずっと『女にしては強い』という評価に苦しんできた。元々男が1番であって、その下に女がいて、その中では上の方という評価軸の中では、私は一生1番になれなかった。

それと同じことを、私は大事なパートナーにしているのだ。それが自分で許せない。

「うーん……。僕は別に構わないけどね。」

エルサイスはそう言って一瞬だけニコツと笑う。

「僕はさ、ただ単純に魔物を恐がる彼らと、クロが一緒だとは思えないよ。」

私は首を傾げる。他にどんな余地があるのか、自分ではわからない。

「僕はよく知らないけどさ、クロが感じた恐怖は、クロのものなんでしょ？ 誰に言われたわけでも、教えられたわけでも、世間の風潮でも

ない。クロが実際に経験して感じたことなんじゃないの？」

私は「うん」と頷く。

思い出されるのは、騎士時代のことだ。いきなり髪を掴まれたり、後ろから抱きつかれたり、不意打ちで組み伏せられたり、他にも思い出すだけでも吐き気がするようなことを『男』たちにされた。

「その恐怖と、この国の人たちが感じる恐怖は、質が違うんじゃないかな。この国の人は、ただ何となく怯えている。でもクロは、実際に何らかの被害に遭って、相手から恐怖を植え付けられた。」

エルサイスはそう言いながら、私のマグカップを指さし、中身を飲むように促す。私はそれに従って、少し冷めたけれど、まだほのかに温かいミルクを喉に流し込んだ。少しだけ、ホッとする。

「クロの言うとおり、恐怖と差別はセットになりやすい。だからこそ、立ち振る舞いには気をつけなきゃいけないだよ。僕ら人間も、魔物も。クロで言うなら、男も女も。」

スつと私の心の糸が解けていく。

エルサイスは、私の恐怖を、そこからくる差別心を否定しなかった。それは差別を作ってしまった側が、気をつけなければならぬことだと、言ってくれた。

私は、騎士時代のことを、仕方ないことだと、女で騎士になろうとした者の宿命だと思って、今までずっと、その気持ちにフタをしてきた。

「ああ……エル……。私はずっとね、なんでもないことって、思おうとしてきたんだ。不当な扱いを受けてたんだって、自覚すればするほど、怒りとか恐怖が私を支配して、どんどん『男』ってだけで嫌な目で見ちゃうから。」

なんだか急に泣きそうになって、私は手の甲で涙を拭う。

「私、弱くなったのかなって……。」

気にしなければ、傷だと思わなければ、私の心もつと強ければ、こんな思いはしないで済んだはずだ。でも私は、触れてしまった、気づいてしまった。

「それは違うよ。見ないふりするの、きつと簡単なんだ。クロは

ちやんと自分の痛みと向き合ってる。それが本当の強さだと、僕は思うよ。」

エルサイスの言う通りだとしても、私はまだこの痛みをコントロールできていない。ただ恐くて、その恐さから、差別を振りまき、自分がされたらぶん殴りたくなるようなことを、他人にも、エルにもしてしまっている。

「それでも……。嫌なんだ。個人じゃなく、カテゴリーでしか見れない自分が。」

「クロがそう思うなら、戦うしかないんじゃないかな?」

「戦う?」

「自分の恐怖心と。」

言葉にすれば単純だが、現実はその簡単な話ではない。私が行こうとする道は、厳しく辛い。きつとかなりの痛みを伴うだろう。

でも、それから逃げてたら、ずっとこのままなのだ。

「クロは十分強い。羨ましいくらいに。僕はまだ逃げてるよ。考えないようにして、忘れたふりしてる。向き合うのが怖いから。」

そうエルサイスが自嘲する。その姿があまりに儂げで、消え入りそうだったので、私は思わずその頬に手を伸ばす。柔らかな肌にと触れれば、命の温かさがあり、彼は確かにそこに居て、生きていた。

「クロ……?」

エルサイスの驚いた顔を見て、私はハッと我に返る。

「あっ……えっと……。」

慌てて手を離すと、熱くなる顔を見られないように、ルームランプの明かりが届かない暗がりへと、体を引っ込めた。

「なんか……どっか行っちゃいそうだったから……。」

しどろもどろになりながらも、なんとかそう絞り出す。

「僕はどこにも行かないよ。」

エルサイスはそう言う。「ふふっ」っと笑った。

沈黙。

夜の静けさが私たちを包む。でも冷たくはない。むしろ、暖かくて、柔らかく、安心できた。

「そろそろ寝ようか。一緒のベッドで寝る？」

そうエルサイスがいたずらっぽく笑いながら、私の頭を撫でようとする。

「調子に乗るな。」

私はその手を振り払い、あつちへいけと蹴って彼を追っ払う。

エルサイスは

「つれないなあ……。」

と不満漏らしながらも、顔は笑っていた。

すぐ茶化して、嫌なやつだ。私は小さくため息をついた。

「消すよ。」

「うん。」

ルームランプが消えると、夜のベールが部屋を包んだ。柔らかなベッドに身を横たえながら、私はゆっくり目を瞑る。

痛みも恐怖も、すぐには癒えないし、消えない。私はまだ自分が傷ついていたんだと、自覚しただけで、癒し方も、向き合い方も、これから考えていくのだ。

私はまだスタートラインに立ったばかりだった。

どうすればいいのか見当もつかないが、私は1人ではない。大事なパートナーがいる。しかも『男』のパートナーだ。それがいい方向に私を導いてくれる。

ただ、漠然と、そんな風に思った。

隣のベッドから、すやすやと安らかな寝息が聞こえる。その息遣いに合わせて、私も呼吸を繰り返す。眠気は急にやってきた。熱湯に入れた氷のように、私の意識はあつという間に、夜の闇へと溶けていった。

番外編くレッコとラトの経験値 その1く

危機的な状況だった。

レッコのHPは残り6割ほど、ラトは2割以下だ。3匹いた魔物のうち1匹は、なんとか倒した。しかし、残り2匹のHPはまだほぼ満タンで、ピンピンしている。

ハーピーが、鮮やかな黄色の翼を広げると、辺りに竜巻が巻き起こり、レッコとラトに襲いかかった。

「ひゃあー！」

「くう……。」

HPがあつという間に削られ、ラトは思わず膝をつく。視野が狭まっていく感覚に、死を覚悟した。

「ラト!!」

アッシュブラウンの髪が、暗い森に沈んでいく。水色のキレイな瞳は、徐々に閉じられていき、命の火が見えなくなる。

その光景に、レッコは頭を熱くする。

「よくもラトを!!」

レッコがラトを庇うように、前に出る。黒いロングヘアと、星夜銀漢杖の房を振り乱しながら、レッコはハーピーにペネトレイトを放つが、思ったよりダメージは与えられなかった。

「ちくっしょ……。」

レッコは赤と黒のオッドアイに怒りをチラつかせ、悪態をつく。

魔物たちはその様子に、怒ることも、囓うことも無かったが、同時に攻撃の手を緩めることもなかった。

「レベル上げをしよう。」

そう先に提案したのは、ラトだった。

冒険を始めて、もう随分時が経ち、冒険者という生活が、板に付いてきた。依頼をこなしてお金を稼ぎ、ご飯も寝床も安定して確保できるようにになったし、ボンドに入つて、他の仲間と共に冒険を楽しむ機

会も増えてきた。

まだまだ初心者の域を出ないが、2人の冒険は順調だ。

だからこそ、ここら辺で少し力をつけて、更に上の経験をしたい。そんな欲が出てきたのだ。

「いいねえー私もっと強くなりたい！」

レッコもラトに同意し、レベル上げに前向きだった。

問題は、どこでレベル上げをするかだった。

魔物を倒せば、経験値がもらえるが、レベルが低い魔物を倒しても、その経験値は雀の涙ほどしかもらえない。レッコとラトがよくうろついている雪山と平原や、国境沿いには、そういうレベルの低い魔物しかない。レベル上げにはあまり向いていない地域だった。

どうしたものかと悩んでいると、酒場にいた他の冒険者が「初心者レベル上げなら、塔の外がいいぞ」とアドバイスをくれた。

塔の外は2人も何度か行ったことはあるが、その魔物と戦闘をしたことは無かった。あそこの魔物は、見た目が大きくて、獰猛そうなので、避けていたのだ。

「うーん……どうしようか？誰かについてきてもらおう？」

ラトは自信がなかった。2人だけであるの凶体がでかい魔物に挑むのが恐い。

「大丈夫しよっ。」

ラトとは対照的に、レッコは余裕の表情を見せる。

「でも……」

「私らだって、強くなったし、武器も防具もある。それに、ボンドのみんなは、それぞれ忙しい。」

「そうなんだよね。」

レッコとラトが入ったボンド『シルフィード』のメンバーは、みんな冒険の玄人ばかりだった。強くて、経験豊富で、なんでもできる。そんな人たちが、今更になって、塔の外に用事があるとは思えない。レッコとラトが誘えば、きつときてくれるはずだが、自分たちのためだけに呼びつけてしまうのは、気が引けた。

「うーん……」

ラトはまだ悩んでいた。本当に2人だけで、あの魔物に太刀打ちできらるだろうか？

ラトは元々臆病な性格なのだ。彼の心には、いつも、ただ漠然とした不安があった。連邦でストリートチルドレンをやっていた頃から、何かを失う恐怖が、ずっと消えない。それは今でも続いていて、ラトの決断を鈍らせる。

一方で、レッコは

「大丈夫！大丈夫！私たちならできる!!」

と言って、自信満々な様子を見せた。

レッコにだって、何か確信があるわけではない。ただ、なんとなく、できそうな気がする。それだけだ。

レッコとラトは、それぞれがそれぞれに、根拠の無いふわふわとした感情を、心の中に持っていた。

「行こう!!」

「うーん……。」

「大丈夫だって!」

「レッコが言うなら……。」

こういう時は、いつも、レッコにラトが押されがちになる。自分に自信のないラトは、レッコの強さに負けてしまうのだ。

ただ、先に言ったように、レッコの自信には根拠がない。結果が良いものになるとは、限らないのだ。2人はそうやって、不安定な賭けをしながら、旅を続けていた。

フクログマが、鋭い爪を振り上げる。

「レッコ……。」

守りたいと思いつながら、ラトは、声を張り上げることすらできなかった。自分の弱さに、ラトは悔しくて泣きそうになる。

「くう……。」

レッコは杖を斜めに構えて、ガードの体勢を取るが、焼け石に水だった。

「(もうダメだ……。)」

2人がそう目を瞑った瞬間。

キンッと金属の擦れ合う音と共に、クローバーがレッコとフクログマの間に滑り込む。

「姐さん!!」

レッコはそう叫びながら、バランスを崩し、足元の泥だまりに尻もちをついた。

「エル、回復してやれ。」

フクログマの爪を、盾で弾き返しながら、クローバーが言う。そしてその次の瞬間には、シユヴァリックブレードで魔物を真つ二つにしていた。

「大丈夫ですか?」

あとからきたエルサイズが、アルカナを唱えてレッコとラトを回復する。

「エルさん、すみません……。」

暖かい光に包まれたラトは、ヨロヨロと立ち上がった。

「いえいえ、お易い御用ですよ。」

エルサイズはそう言いながら、追加でウォールを唱え、更に2人を回復する。その後ろで、クローバーがカレッツジブレードでハーピーを黒い霧にしていた。

「っ、強い……。」

「さすが姐さん!!」

敵を倒したクローバーは、泥だまりに座り込むレッコに手を貸すと、立たせた。

「まったく、このガキ共は…世話が焼ける。」

「すみません……。」

「ごめんなさい。」

レッコとラトは意気消沈した様子で謝る。

「無理はいけません。今回は僕らがたまたま通りかかったから良かったですけど、いつもこうとは限りませんよ。」

「死んでもまた復活できるから大丈夫です。」

「そういう問題じゃねえんだよ。」

単純な考えのレッコに、クローバーは呆れ返る。

「レッコ……」

ラトは泥だらけのレッコに、タオルを渡しながら、非難を込めた強い眼差しで、彼女を睨む。ラトは命を軽く扱うことが、大嫌いなのだ。「そんな怒ることないじゃんか。」

レッコはそう言っつて、不満そうに口を尖らせる。自分は事実を言っただけだと思っつていた。

ラトは、タオルを受け取り、顔の泥を拭うレッコを、厳しい目で見つめていたが、やがてため息をつき、俯いた。

「ごめん……守れなくて……。」

レッコの言っつていることは、確かに事実なのだ。死んでも生き返る。

そうならないように、死なないようにする術を、彼女を守る力を、ラトはまだもっつていなかった。それなのに命を大事にしるなんて偉そうなこと、言えたものではない。

そう目を伏せるラトに

「別にいいよ。そんなことより、私たち、めっちゃ頑張っつたじゃん！」

と、レッコが笑顔を向ける。

ラトの胸がキュンと締め付けられる。嬉しいような、恥ずかしいような、わずかな痛みを伴うその感情の名前を、ラトは知っつている。でも、目を向けないようにしっつていた。

ラトにとっつて、幼い頃から一緒にいるレッコは、家族のようなものなのだ。その安定しっつた地位を、ラトは手放しっつたくない。

ずっつとそばにいるのも、守りたいと思っつうのも、大好きなもの、家族だから、で、説明がっつく。

ラトは、それ以上のことを望まないうようにしっつていた。

「ひでえ汚れだな。1回流しっつた方がいい。」

泥だらけのレッコを見て、クローバーは眉を寄せる。

「風呂のある連邦まで歩いて行っつたら、途中で乾きそうっつすけどね。」
「さすがに連邦は遠すぎますよ……。」丸岩周辺に川が流れてますから、そこで水浴びしてはいいかがですか？」

エルサイスの提案に、レッコは首を傾げる。

「丸岩周辺ってどこっすか？」

ラトも困ったように眉を下げ

「行ったことないです……。」

と申し訳なさそうに言う。

その様子に、クローバーとエルサイスは顔を見合わせる。2人は時
涉りの塔を攻略しに、ここを通りかかったのだが、それは別に急ぎで
はない。

冒険者は自由だ。今日やらなければいけないことなど、それほどな
いのだ。

「しかたねーな。案内してやるよ。」

クローバーはそう呆れながらも、満更でもなさそうに笑った。

番外編くレッコとラトの経験値 その2く

「覗いたら殺す。」

「姐さん！大丈夫つすよ。私、見られる胸も無いつすから。」

「馬鹿野郎！レッコ、胸は大きさはじゃないんだぞ。」

「形ですか？」

間髪入れずそう返したエルサイスを、クローバーが

「黙れ。殺すぞ。」

と、本当に人を殺しそうな、瞳孔開いた目で睨む。

その様子に、ラトは思わず

「ひい……。」

と小さな悲鳴をあげた。

睨まれた当のエルサイスは、軽く肩を竦めるだけで、何処吹く風だ。

泥だらけのレッコを水浴びさせるため、4人は塔の外から、丸岩周辺までやってきた。

「くつそ野郎どもは、黙って火おこしとけ。」

クローバーはそう言い残し、レッコを連れて、小川に水浴びに向かう。

「は、はい！」

クローバーの剣幕に押され、ラトは思わず敬礼しながら返事をした。

ラトが手際よく集めた小枝に、エルサイスがファイアボールで火をつける。あつという間に焚き火の完成だ。

エルサイスは慣れた様子で、焚き火の周りに赤と白のギンガムチエックのクロスを敷くと、その上に座り、合成した紅茶を広げる。

「1杯いかがですか？」

そう微笑む彼に、ラトは気圧されながらも

「いただきます。」

と返し、カップを受け取った。

「すみません……。いつも迷惑ばかりかけてしまつて……。」

みんなの手を煩わせたかと思つて、2人だけで何とかしようとする。

したのに、結局何にもできずに、こうして迷惑をかけている。ラトはそんな自分が不甲斐なく、申し訳なかった。

「いえいえ、迷惑ではありませんよ。最初から強い人なんていません。ある程度力がつくまでは、遠慮せず、クロを頼って下さいね。」

そう微笑むエルサイスに、ラトは嬉しくなって頬を高揚させた。しばしの沈黙。

紅茶をすすりながら、ラトはチラリとエルサイスを盗み見る。

優雅に紅茶をたしなみながら、ランチ用のクロムツシュを合成するエルサイスは、ラトからは、柔和で優しく、大人の余裕があるように見えた。

「あの……。」

「はい？」

「エルさんたちは、どうしてそんなに強いんですか？」

聞いてどうなるわけでもないということは、ラトもわかっていた。でも、聞かずにはいられなかった。

レベルが違うのも、装備が違うのも、わかっている。でも、それだけでは説明出来ない、大きな違いがあると、ラトは感じていた。

「僕らは、ラトさんが思っているほど、きっと強くありませんよ。」

ラトの予想通り、エルサイスは話をかわす。

「そんなことありません！何か、大切に思っていることとか、心構えとか、何でもいいので教えて下さい！」

負けじとラトは食い下がる。

「うーん……。」

ラトの熱意に、エルサイスは困ったように眉を下げる。

エルサイスが言ったことは、謙遜でもなんでもない。ただ、エルサイスは、自分の本当の実力を、正しく知っているだけだった。

それこそが、2人の決定的な違いなのだ。

「ラトさんは、さっきの魔物に勝てると思いましたが？」

「え？」

ラトは一瞬たじろぐ。エルサイスは柔らかな笑みを浮かべていて、自分を責めているわけではないとわかっていたが、それでも居心地が

悪かった。

「思いませんでした……。」

「いつの段階で？」

「いつ……？」

ラトは、目をパチクリさせる。

正直なことを言えば、戦う前の段階から、自信がなかった。少し戦って、やっとそれが無理だと確信に変わったのだ。

そうラトがエルサイスに説明をすると

「自信が無かったのに戦おうと思ったのは、試してみたかったからですか？」

と、エルサイスがさらに質問を重ねる。

「うーん……。」

それはまた違う気がした。ラトは、レツコが「大丈夫」と言ったから、やっただけだ。1度自分の実力を試そうなんて、思いつきもなかった。今エルサイスに言われて、そういう考えもあるのだと、やっとな気がついたくらいだ。

「違いますね……。レツコが大丈夫って言うなら、出来るかもしれないって、ただなんとなく思っただけです。」

自分の浅はかさが申し訳なくなり、ラトは俯く。

「なるほど。」

エルサイスは一通り質問を終えたようで、顎に手を当て、なにかを考え始めた。

ラトは答えを待ちながら、もぞもぞと体を揺する。なんだか落ち着かない。面接というか、面談というか、エルサイスに自分が批評されているような気がして、少し恐かった。

「ラトさんはまだ、自分が何者かわかっていないのかもしれないですね。」

やっと口を開いたエルサイスは、不思議なことを言う。

「僕が、何者か？」

ラトはラトである。それ以外の何者でもない。それは生まれた時から持っている確信で、1度も疑ったことなどなかった。

「まずは、自分を知ることですよ。自分は何が苦手で、何が得意か。何ができて、何が出来ないか。」

「自分を知る……。」

考え込むラトに、エルサイスはさらに質問をする。

「ラトさんが、魔物と戦う自信が無かったのは、なぜですか？」

ラトの頭をよぎるのは、ストリートチルドレン時代のことだ。

仲間が病気で死んだり、ご飯を盗るのに失敗した女の子が大人に殴られていたりしても、ラトはただ見ていることしか出来なかった。

自分は何も出来ない。そんな無力感が、ずっとラトの心にこびりついて離れない。

「僕は……何にもできないから……。」

ラトがそう呟くと

「本当にそうですか？」

と、エルサイスが食いつく

「えっと……あの……。」

「本当に？」

エルサイスに詰め寄られ、ラトは混乱して、言葉を詰まらせる。

「落ち着いて、よく考えて見てください。過信も、不信も、根拠が無ければ、ただ自分の目を曇らせる、汚れでしかありませんよ。」

エルサイスの言葉が、ラトの心に突き刺さる。

ストリートチルドレン時代の自分は、確かに無力だった。でもそれと、今日の前の魔物に勝てるかどうかは、因果関係がない。

今の自分には、武器がある、防具がある、スキルがある。それをどう駆使するかこそが、自信の裏付けに必要なものなのだ。

「僕に、何が出来て、何が出来ないか……。」

そう考え込むラトに、変化を感じたエルサイスは、満足気に微笑む。こういう若者を見るのは、嫌いではなかった。

自分には無い輝きを放つ子供たちに、エルサイスは目を細め、羨望の眼差しを向ける。眩しくて、美しいと思うと同時に、自分の心が空っぽなことを虚しく思ってしまう。

「まあ、僕でも、いまだに自分の実力を測り間違ふことはあります。焦

らずゆっくり考えればいいですよ。」

考え込んで、ずっと黙ったままのラトに、エルサイスが声をかける。ラトは

「はいー!」

と元気よく返事をする、嬉しそうに笑った。憑き物が落ちたような、スッキリした顔だった。

沈黙。

鳥のさえずりと、木の葉が擦れる音の間に、クローバーとレッコの笑い声が、風に乗って、エルサイスとラトの耳に届く。

「楽しそうですね。」

2杯目の紅茶を飲みながら、エルサイスは合成が終わったクロムツシユをラトに渡す。

「レッコはクロさんが大好きですからね。」

ラトは受け取ったクロムツシユにかぶりつく。

「クロは女の子にモテモテで羨ましいですね。」

エルサイスはそんな冗談を言いながら、ずっと紅茶をすすする。

「エルさんとクロさんは、どうして付き合わないんですか?」

前々から思っていた疑問を、ラトは口に出した。

「さあ?どうしてでしょうね。」

エルサイスは言われ慣れているので、動揺することなくかわす。そんな彼の態度に、ラトは少しだけ不満そうにする。

「好き合ってるんですよね?」

さらに質問を重ねるラトに

「そういうラトさんこそ、レッコさんと両思いなんじゃないですか?」

と、エルサイスが反撃する。

「へっ?」

思わぬカウンターに、ラトは面食らってしまった、間抜けな返事を返してしまう。

「れ、レッコは、好きっていうか……家族だから、す、好きだけで……」

明らかな動揺を見せるラトに、エルサイスは意地悪な笑みを浮かべ

る。

「家族ですか……。でも、キスしたいとか思わないんですか？」

「き、キスっ!!?そ、そんな……。こと……。」

顔を真っ赤にして、しどろもどろになるラトに、エルサイスがさらに追い打ちをかける。若者をからかうのは、思いのほか楽しくて、やめられそうになかった。

「さっきの話から言えば、胸を見たいとか、触りたいとか……。。」

「エルさん!!本当にやめてください!」

ラトの精神HPは瀕死だ。

「だいたい、レッコは揉めるくらい胸ないですよ。」

「誰の何が無いつて?」

突然割り込んだクローバーの声に、ラトは凍りつく。

「ひい……。。」

「覚悟は出来てるか?」

泣きそうなラトと、失敗したなと苦笑いを浮かべるエルサイスに、クローバーの鉄拳が飛んだ。

番外編くレッコとラトの経験値 その3く

レッコは、鎧を着たまま川に浸かり、ついた泥を流す。茶色い泥水に混じって、わずかに赤黒い自分の血が浮き上がり、あつという間に流されていく。

痛みはなかった。ただ、悔しい。出来ると思ったのに、手も足も出なかった。

「おーい？大丈夫か？」

クローバーの声に、レッコはハッと我に返る。

「大丈夫です！」

浅瀬の岩に座り込み、足先だけを水につけているクローバーに、レッコが返事をする。

鎧の泥をあらかた落とし終わると、今度は星夜銀漢杖の房を水につけて洗う。戦闘中バサバサと舞う房は、結構汚れがつきやすく、水につけると黒い汚れが浮き上がり、サラサラと流されていく。

「レッコはさ、魔法職なのか？」

「魔法が好きってわけじゃないです。ただ、今もってる強い武器が、これしかないから……。」

レッコは、魔法が得意な方ではない。どちらかといえば、物理でガンガン殴りたい性格でもある。だから、杖を持ちながら、スキル構成は物理攻撃にしていた。特に不便はないし、杖で殴るのも悪くないので、そのままのスタイルが、レッコの中で確立してる。

「杖の使い方間違ってるぞ。」

「それ、前にエルさんにも言われたっす。」

「エルが？そんなこと言ったか？」

「あ、いや、言っていないかも……。」

それはレッコが、クローバーとエルサイスに初めて会った時の話だ。

ボンド【シルフィード】に入る前、レッコとラトは、飢えのあまり、野党まがいのことをして、クローバーとエルサイスを襲ったことがある。

当然のごとく、返り討ちあったレッコは、クローバーから慈悲を授かり、許してもらった上に、食料まで恵んでもらった。

そして、エルサイスには「杖はこうやって使うんですよ」と回復してもらった。

それからレッコにとって、クローバーは懐の深い姉御のような存在で、エルサイスは優しい先生のような存在だった

その時のことを、クローバーが覚えていないなら、わざわざ思い出させる必要はない。自ら悪事をバラすほど、レッコは清廉潔白な性格でもなかった。

「やっぱりダメっすかね？杖は。」

レッコは星夜銀漢杖を川からあげ、水気を切るように、ブンブンと上下に振る。しゃんしゃんつという鈴の音が、あたりに凜と響く。

「ダメってことはないけど、向いてはないよな。」

クローバーはそう言いながら、レッコにタオルを投げた。レッコはそれを受け取ると、濡れた手や頭を拭く。

「人には向き不向きがある。武器もそれと一緒にだ。わざわざ向いてない武器で、向いてないことする必要はないだろ。」

クローバーの言葉は、レッコだって、なんとなくわかっていた。でも、どうすればいいのかわからない。

選択肢は無数にある。職業と、武器と、スキルの組み合わせは無限だ。その膨大な組み合わせの中から、最適なものを選び出す術を、レッコは持っていないかった。

「姐さんは、どうしてそんなに強いんですか？」

川からあがり、服を着替えながら、レッコはクローバーに尋ねた。どうということはない。憧れの先輩の意見を、聞いてみたいという好奇心しか、そこにはなかった。

「私は強くない。」

「またまたー。」

クローバーの有り得ない謙遜に、レッコは苦笑いを浮かべる。

「姐さんが強くないんなら、私なんかアリンコくらい強さになっちゃうっすよ。」

レッコの冗談に、クローバーはどう返せばいいのかわからず、呆れたため息をついた。

「私は強くない。ただ、私はレッコよりも、知ってることがちよつと多いだけだ。」

「知ってること？」

首を傾げるレッコに、クローバーは話を続ける。

「敵に勝つには、まず相手を知ること。弱点属性、物理、魔法どっちの攻撃に弱いかな。または、どっちの攻撃をしてくるか。どの攻撃が大丈夫で、どの攻撃が痛いかな。どういう順序で攻撃してくるか。」

一気に言われたレッコは混乱する。そんなにいっぱい考えられない。レッコは元々、考えるのは苦手な方なのだ。

「姐さんは、いつもそんなにいっぱい考えながら戦闘してるんすか？」
そうだとしたら、とても追いつけないと、レッコは思った。

レッコはいつもいっぱいいいっぱいで、本能のままに体を動かし、戦っていた。とりあえず力で押す、脳筋的な戦い方しか知らない。それはストリートチルドレン時代から、ずっとだった。

知識も教養も乏しかったレッコを守っていたのは、物理的な力だ。腕力があれば、逃げ足が早ければ、丈夫な体があれば、生き残る確率は格段に上がった。生存戦略として、そこに特化したレッコは、ツライ時期を何とかやり過ごすことができたが、その時の戦い方が、未だに抜けない。

レッコにとっては、力こそが全てで、考えながら戦闘するなんて器用なことは、そう簡単に出来そうもない。

「私だって、毎回毎回考えてるわけじゃない。ただ何回も戦っているうちに、わかってくるんだ。そのうち考えなくても、体が動くようになる。」

「私も何度も戦えば、できるようになるっすかね？」

「何も考えなくて、漫然と戦っても意味はない。」

レッコは「うーん」と頭を抱えた。

「よく見て、よく聞くこと。諦めないで、何度も挑戦すること。まあそんな単純なことしか、私からは言えないな。」

クローバーはそう言つて自嘲した。

クローバーのアドバイスを、レッコはゆつくり噛み締める。

言葉にすれば、クローバーの言うとおり、単純なことだ。でも、実際にやるとなれば、とても難しいだろう。

できるかどうかはわからない。でも、レッコはやりたいと思つた。ストリートチルドレンの時のままでは、もうダメなのだ。今はもう、力しかない子供から、技術を持った大人になる段階だ。

「レッコは、死ぬのが恐いか？」

クローバーの突然の質問に、レッコは一瞬考え込む。

レッコは、死を恐れてはいなかった。それは自分が冒険者で、不死であるからではない。レッコにとって、死はいつもそこにある日常だった。冒険者になるずっと前から、それこそ、ストリートチルドレン時代から、死はいつでもレッコの近くにあった。

病気で死ぬ者、飢えで死ぬ者、争いに負けて死ぬ者。泥と血で汚れた両手の間を、小さな命が零れ落ちていくのを、レッコはただ見ていた。

自分もきつと、そうやって命の流れに乗って、いつか呆気なく死ぬのだと、レッコはわかつていたし、それを世界の理として受け入れていた。

「私は恐くはないです。でも……」

レッコは、自分が死ぬのは恐くない。でも、仲間が、大事な人が、ラトが死ぬのは、恐い。もう他人が死んでいくのは見飽きた。それは自分が死ぬよりも、大きな痛みを自分に残すと、レッコはわかつていた。「誰かが死ぬのは、もう嫌ですな。」

レッコが伏し目がちに返す。

ストリートチルドレンだった自分を引き取ってくれた老人が、レッコにとって、唯一の家族と呼べる人だった。でもある日、その老人はどこかに消えてしまった。生きているのか、死んでいるのかもわからない。

そうして一人ぼっちになったレッコの傍に来てくれたのは、ラトだった。今は、ラトがレッコの大事な家族だ。

そのラトの死を想像するだけで、レツコの胸の奥は、キリキリと締め上げられるように痛む。

「自分の死を恐れず、そして守りたいものがあるなら、やるべきことは自ずとわかるはず。良くも悪くも、冒険者は不死だ。負けてからが、死んでからが、勝つための本番だ。」

クローバーはそう言うのと、レツコの頭をガシガシと乱暴に撫で付ける。元気付けられたような気がして、レツコは頬を高揚させて照れたように「へへっ」と笑った。

「死んでからが本番かあ……。ラトが聞いたら、怒りそうっすね。」

「あいつは真面目すぎる。将来過保護な母親みたいに、口うるさくなるタイプだぞ。」

「あー!!それめちやくちやわかるっす!今でもそういうところあるっすもん。」

「だろ?」

クローバーはそう言って、声をあげて笑った。レツコもつられて「ははは」と笑う。

中々和やかな時間だ。

「さあ、そろそろ行こう。エルがランチを用意して待ってるはずだ。」
クローバーはそう言って立ち上がった。

「姐さんとエルさんって仲良いっすよね。なんで付き合わないんっすか?」

クローバーのあとに続きながら、レツコは前々からの疑問を口にする。その裏で、クローバーとエルサイズをくつつけたという思いが働いていた。

「私とエルは、そういう関係じゃない。」

クローバーはお決まりの言葉を返す。

「でも、好きなんすよね?」

「だから、違うって。」

うんざりしたため息をつきながら、クローバーはエルサイズが待つ岩場へと歩き出す。その後ろを、レツコが早足で着いていく。

「お前も、ユイちゃんとあやみんと同じで、妙に私とあいつをくつつけ

たがる系か？勘弁してくれよ……。」

若い女の子というのは、男と女がいれば、すぐ恋愛話に持ち込もうとする。クローバーは、そんな彼女たちが理解できない。

「姐さんは、照れ屋だから。」

「そんなんじゃないやねって。そういうレッコはどうなんだよ。ラトと。」

急にボール返されたレッコは、キョトンとしてしまう。ラトは、家族であつて、それ以上でもそれ以下でもない。

「ラトは家族つすからね。」

「私とエルも、そんなようなもんだ。」

「姐さんは違いますよ。」

「違うない。」

話は平行線だ。どっちも相手の言い分を理解する気はないようだった。

「まったく……。あ、ほら、もう先にラトがランチ食ってるぞ。」

クローバーは話題を変えるため、そう言つてクロムツシユもぐもぐしているラトを指さす。エルサイスと何やら話していて、盛り上がっているようだ。

「だいたい、レッコは揉めるくらい胸ないですよ。」

ラトがそう言うのだけは聞き取れた。

クローバーはチラリとレッコに目配せする。レッコは悲しそうに眉を下げながら、自分の胸のわずかな膨らみに、両手を当てていた。

「レッコ、私に任せとけ。」

クローバーはそう言つて

「誰の何が無いつて？」

と、レッコを庇うように、ラトとエルサイス前に進み出た。

番外編くレッコとラトの経験値 その4く

エルサイスとラトの頭には、クローバーの鉄拳により、大きなたんこぶが1つずつできていた。

「たつく……。ゴミ野郎どもめ。大きいだの小さいだの、2度とほぎくな。」

クローバーがギロリと睨みを効かせると、ラトは「ひい」と小さな悲鳴をあげる。

「姐さん、私の胸……。もう大きくならないっすかね……。」

しゅんとしているレッコの様子に、ラトの心は罪悪感で満たされた。

「レッコ、胸は大きすぎじゃないぞ。この馬鹿な野郎どもはな、触れる胸の前じゃ無力なんだ。」

クローバーの言葉に、エルサイスは吹き出し、大いに笑う。

「ごもつともですね。」

そう言うエルサイスの隣で、初心なラトは、顔を真っ赤にして、気まづそうに俯く。

そんな2人をクローバーは蔑むように睨んだ。

クローバーとレッコは、エルサイスからクロムツシユを受け取り、おしゃべりしながら、もぐもぐと食べ始める。

「姐さんとエルさんは、冒険を始めてどれくらいになるんすか？」

「結構経つよな？」

「2年くらいですかね。」

「おおおー！」

「レッコとラトは？」

「まだ始めたばかりっすよ。」

「1年経ってないですからねー。」

そう言って、2人は「ねー」と顔を見合わせた。

随分仲が良さそうだが、その様子は、確かに恋人というよりは、兄妹のような感じがして、家族と主張するラトの言い分も、あながち嘘

ではないようだ。

「そういえば、ラトさんと、ユイゼさんは、ご姉弟なんですよね？」

レッコとラトの兄妹ぶりを見たエルサイスが、思い出したように言う。

「そうなのか!？」

寝耳に水だったクローバーは驚愕の声をあげた。

クローバーがマスターのボンド、「シルフィード」に所属するユイゼは、一緒に旅をしているパートナー、セリクのわかりやすい恋心にも気付かない、超天然系の女の子だ。

そんなユイゼに、双子の兄がいるのは知っていたが、弟がいるというのは初耳だし、しかもその弟が、同じボンドにいるラトだなんて、クローバーはまったく知らなかった。

「血は繋がってませんけどね。」

ラトは、驚くクローバーの前で、困ったように頭を掻く。言う機会がなかっただけで、隠していたわけではないが、なんだか罰が悪い。

「ストリートチルドレンだった僕を、引き取ってくれたのが、お姉ちゃん……いえ、ユイゼさんの家族だったんです。」

「知らなかった……。でもまあ、ユイちゃんの家族なら、根性ありそうだな。」

「そうですねえー、ユイゼさんは大人しい顔して、かなりのファイターですからね。」

否定できずに、ラトは苦笑いを返す。

先に冒険者になった姉と、そのパートナーのセリクから、よく冒険の話聞かされていたラトは、エルサイスの言うことが、嫌という程わかる。

だからこそ、そんな話を聞いて、自分も冒険者になりたいと思ったのだ。

姉の様に、強くなりたいたいと思ったラトは、ちょうどその時、扶養者の老人が失踪したレッコと旅に出た。

そして今に至る。何にも強くなれないまま、クローバーとエルサイスに助けられた自分を、ラトは情けなく思った。

「自分を知る……か……。」

ラトは自分の手を見つめる。エルサイスに比べると、細くて、小さい。でも、だからといって、逃げてはいられないのだ。経験値は、戦わなければ貯まらない。

「あの……!!」

「ん？」

「稽古を、つけてくれませんか？」

ラトの提案に、レッコも「うんうん」と頷いて賛同した。前のめりになって意気込む2人に、クローバーとエルサイスは顔を見合わせる。

「どうしますか？」

「まあ、いいんじゃないの？ただ、私の指導は厳しいぞ。」

クローバーはそう言つて、満更でもなさそうに笑った。

レッコは目の前の魔物にウォーターベインを放つ。赤い大きなトカゲのような魔物、ベニネツシーは、激しい水流に巻き込まれ、叫び声をあげたが、ダメージはそれほど与えられていない。ベニネツシーが、ラトに体当たりし、反撃してくる。結構なダメージを食らっていた。

「物理攻撃痛い!!」

「OK、ウォールで回復する。」

ラトの叫びに、レッコが反応して回復する。

「レッコ、敵の属性は？」

「火つす!!弱点水!!」

クローバーの短い質問に、レッコは的確に答える。

「ラトさん、次はどうしますか？」

「うーん……攻撃したいけど全然ダメージ通りません！」

ラトが考えているうちに、ベニネツシー3匹が猛攻を仕掛けてきて、ラトのHPがみるみる減っていく。

「クロ、お願いします。」

「あいよ。」

クローバーがセイクリッドサークルを放つと、ベニネツシーは一掃されて黒い霧になった。

「わ、ワンパン……。」

「姐さんばねえっす！」

「いいから、今戦闘してわかったこと参考に、装備とスキル考えろ。」

「はい!!」

4人は、連邦の炭鉱前まできていた。ここは初心者のレベリングとしてよく使われる場所で、人気が高い。クローバーやエルサイスが冒険を始めたばかりのころも、よくここに籠ってレベル上げをしていた。

レッコとラトは、戦闘が終わる度に、その都度話し合って、直前の戦闘の良かった点悪かった点を話し合う。そうして、スキルや装備、連携の仕方を調整しながら、レベル上げをした。

ピンチの時や、わからない時は、クローバーやエルサイスに助太刀してもらった。

「レッコ、大丈夫？」

前に出過ぎてしまい、瀕死になったレッコを、ラトが気遣う。クローバーが助けに入らなければ、やられてしまっていただろう。

「無理は禁物です。性格的に前に出たいのはわかりますが、幻術師レッコさんはどちらかといえば、後衛向きです。」

「前衛はラトに任せとけばいいんだよ。」

「はいっす……。」

レッコも、頭ではわかっていた。でも、ラトがピンチになると、どうしても体が先に動いてしまう。

「大丈夫、僕が守るよ！」

至近距離でレッコの顔をのぞき込みながら、そう爽やかな笑顔を向けるラトに、レッコはドキリとしてしまう。急な不意打ちは、本当にやめてほしい。心臓が潰れてしまいそうだ。

レッコはこの胸の痛みの原因がなんなのか、薄々勘づきながらも、なるだけ目を向けないようにしていた。レッコにとってそれは、荷が

重すぎて、持て余してしまう感情だ。自覚したところで、どうすればいいのかわからない。

レッコもラトも、その感情の先が、どこに繋がるのかわからず、不安なのだ。

今を壊すのが怖い2人は、自分の気持ちに蓋をして、家族という関係を続けていた。でも、結局それでは、自分の気持ちも、相手の気持ちも、きちんと考えられない。

それは今までのレッコとラトの戦闘仕方そのものだった。自分のことも、敵のことも知らずに、ただ闇雲に恐れたり、自信をもったりする。

「安定してきたな。」

1時間程で、ベニネツシー相手に、慌てず焦らず、落ち着いて戦える様になってきて、レベルも随分上がった。クローバーとエルサイスの手助けも、もう必要なかった。

あたりはすっかり夕方になり、カラスがやかましく鳴きながら、赤く染った空を飛んで、巣へと帰っていく。

「ありがとうございます！」

「あざっすー！」

稽古を終え、そう頭を下げるレッコとラトに、クローバーは満足そうに微笑んだ。レッコもラトも、度重なる戦闘で、埃と土にまみれ、随分汚れていたが、顔は清々しく、スッキリした目をしていた。

「最初から完璧な人などいません。失敗しても、そこから学んで次に活かせばいいんですよ。」

「そうそう、やらなきゃわからん。やらないでビビってたら、何にも始まらない。失敗覚悟で本気でやってみて、初めて自分がわかるし、相手がわかるんだよ。」

エルサイスとクローバーが、それぞれ2人に声をかける。これからの激励のつもりだった。

2人の言葉に、レッコとラトは顔を見合わせる。その言葉は、戦闘的な強さだけではなく、2人の関係性にも、変化をもたらしそうなのだった。

「自分を知る……。」

「相手を知る……。」

壊れるのを恐れて、何もしなければ、結局お互いを真に知ることのないまま、終わってしまうかもしれない。月日は勝手に流れて、否が応でも2人は歳をとる。いつまでも子供ではいられないのだ。

でも、たととしても、今はまだ子供でいたかった。

顔を見合わせたまま、2人は「ふふつ」と照れたように笑う。そこに、言葉はいらなかった。

「レッコ、明日も頑張ろう！」

「おう！全職カンストだ!!」

お互い、今はこの恋心に蓋をして押し込める。まだまだ安定の上で遊んでいたい年頃なのだ。

そんな2人を見てエルサイスは

「どう思います？クロ？」

と、面白がるように尋ねる。

「んー？まあいいさ、かわいいガキ共だよ。」

クロバーはそういつて笑う。

ひなむくたちの前途が、本当に楽しみだった。

レッコとラトの人生の経験値は、これからゆっくり、貯めていくのだ。

第83話 望まぬ再会

「はあ？お前またしよーこりもなくこんな馬鹿げたことやってるのか？」

クローバーの呆れ声に、少女は緑色の瞳を潤ませ、怯む。そのビクビクした姿に、クローバーは更にイライラを募らせていた。

ふらりと不老不死の村を訪れた僕たちは、思わぬ人物と再会を果たした。

以前クローバーから古本を盗んで捕まった、ポーラだ。彼女はクローバーの慈悲で無罪放免となり、冒険者として、旅に出たはずだった。

しかし、ポーラはクローバーの言う通り、性懲りも無く、また盗みを繰り返して、ルークという男に捕まっていた。

「五体満足のかせに強盗する理由を時代のせいにするとは、まったくとんでもない話だな。」

ルークはクローバーに続き、呆れた声を出す。

「……わかってるわ、ただの言い訳だということは……。でも、生きるためには必要なこと。」

「生きるためと言うなら、誰かを脅迫する前に他にやれることがあるだろう。」

「私にだってプライドがある。意地もある。泥水をすすするようなマネはできない。」

ルークが困ったような顔で、こちらに助けを求めてくる。クローバーは肩を竦めるだけで、何も返せないようだった。僕は思わず笑ってしまう。

相変わらずポーラの理論は破綻していた。

プライドも、意地もあるかせに、盗みはするし、捕まれば往生際悪く、相手に死ぬよう脅迫する。本当に意味がわからない。理解できないさすぎて、笑えてくる。

「まあ落ち着いてください。ポーラさんには、ポーラさんの事情があつて、こんなことをしてしまったんですよ。」

僕はなんとか笑いを抑えながら、ポーラとルークの間に入った。

「みんな、何か訳あって、それでもまっすぐ生きるもんだ。訳があるから悪いことをしていいわけじゃない。」

ぐうの音も出ない程の正論だ。僕の隣で、クローバーが「うんうん」と大きく首を縦に振って、ルークに同意を示していた。

「お前の話は確かに正論だ。私もその通りだと思う。ただな、こいつにそれが通用すると思ったら、大間違いだぞ。」

1度ポーラと対面して、ある程度の耐性がついたのか、クローバーの思考は意外にも柔軟だ。

「お前もわかるだろう？こいつの頭は狂ってる。」
「クロー。」

本人の目の前での悪口を注意したが、クローバーは面倒臭そうに目を細めるだけで、どうでもよさそうだった。

「まともに関わるより、引いた方が楽だぞ。」

クローバーの忠告を聞いたルークは、困ったように頭を掻く。どうすればいいのか、逡巡しているようだった。やがてルークは

「盗んだ財布の中身には、まだ手をつけていないようだ。今回はあんなの顔に免じて勘弁してやるよ。」

と言って、大きなため息をついた。どこか疲れたようなその顔に、僕は同情する。突然こんなことに巻き込まれて、災難だっただろう。

去っていくルークの背中を見送ると、僕とクローバーはポーラに向き合った。

「さてと……。まずお前、もう二度と盗みはしないって、私と約束したよな？」

クローバーに凄まれたポーラは、ビクリと体を震わせ、オドオドと目を泳がせる。

「プライドがあるから物乞いは出来ないくせに、約束を守るプライドはねーのか？あぁ？」

そう言いながら、クローバーはポーラの目を睨みつけた。

ポーラは「ひい」と小さく悲鳴をあげると

「うっ……うっうっ……お母さん……」

と、幼い子供のように、声を上げ泣き始める。

分が悪くなると泣き出すのは、ずるい女の人がよくやる手口だ。僕は何度もその場面にあったことがある。

「クロ、あんまりポーラさんを責めないであげて。」

僕がそう言うと、クロバーは不快そうにこちらをギロリと睨みつけてきた。確実に怒っている。「お前はこんなやつの味方をするのか？」と言いたげな目だった。

別に僕は、ポーラの味方ではないし、彼女を庇ったわけでもない。はつきりいえば、ポーラは馬鹿なのだ。

目先のことしか考えられない。結局自分がやりたくない言い訳に、プライドやら、意地やら言うが、その意味すらわかっていない。計画性以前に、論理的思考力もない。簡単な行動の実行力すらない。

そんな彼女が、僕は哀れで、かわいそうで、そして、心底どうでもいい。

所詮は低能な人なのだ。真面目に説教をしたところで、理解どころか、会話すらできないだろう。さつさと見切りをつけてしまうのがいい。

そのためなら、僕はいくらでも優しい言葉を吐こう。心のない、冷たい、誰も救わない言葉だ。

「私、母と約束したの……どんなつらいことがあっても、死んじやダメだって……。」

ヒックヒックしゃくりあげながら、ポーラが言う。

大切な人からの「死ぬな」という言葉は、「死ぬ」と言われるのと同じくらいの呪いを持っていると、僕は思う。ポーラの母親は、娘への愛情上に、そう言ったのかもしれないが、結局それが、彼女人生を縛り、こんなにめちやくちやにしているのだ。

「だから、誰かに殺されようと頑張ったのに……。」

「迷惑な話だ。お前なんかを殺さなきゃいけない、相手の身にもなってみろよ。本当にどこまでも身勝手なやつだなあ……。」

クロバーが堪らず、呆れたため息をつく。

ポーラの言い分はいつも自分本位で、相手の人格など無いものとし

ている。そのくせ繊細を装い、被害者を演じているのだ。

さつさと切り上げた方がいい。こういう、自己愛が強い自覚がない上に、被害妄想で相手を傷つけるような人は、危険だ。不用意に関われば、こっちが悪者にされてしまう。

「もうずっと生きなきやダメなの……。でも……。もうダメかもしれない……。」

「そりゃよかったな。望み通り死ぬるじゃねーか。」

クローバーが絶妙な合いの手を入れる。僕は思わず吹き出しそうになるのを何とか我慢して、ポーラを心配するような顔を作る。

「教会に行ってみてはいかがですか？教会ならご飯を食べさせてくれますよ。」

僕がそう言うと、ポーラは一瞬顔をあげた。

「教会に行っても、不器用な私は何もできない……。教会には他も人もいるし……。他の人の居場所を奪うわけにもいかないわ。」

意外な回答に、僕とクローバーは顔を見合わせる。

自分本位かと思いきや、こうして他者の立場を気遣うこともある。ポーラは本当によくわからない。様々な感情の羅列を、適当に繋ぎ合わせているような、一貫性のない発言に、振り回されそうになる。

「それでは、工場があった村はいかがですか？あそこはまだ住んでいる人も少ないですし、行けば歓迎してくれると思いますよ。」

滅びの村の地下工場でロツツを倒したあと、村にはエースとケイプの兄妹が残り、村の復興をしようと、様々な試みを行っていた。ついこの前も、鍋夜会をするからといって、大量のじやがいも集めを手伝ったばかりだった。

今定住者を欲しているあの村に行けば、きっと歓迎してくれるだろう。

「あそこには教会もありましたし、行ってみてはいかがですか？」

僕がそう言うと、俯いて、ポーラは考え込む。

「……。」

「おい、行くぞ。」

沈黙を続けるポーラに、痺れを切らしたクローバーが、僕に声をか

ける。これ以上、ここに残る理由は、僕ももう持っていなかった。

クローバーのあとに続いて、僕はこの場を去ろうとする。その姿を見て、なにか言いたげに顔をあげたポーラに、クローバーが

「お前がどうしようかと、私には関係ない。でもな、自分の生き死にを、他人にどうこうしてもらおうと思ってるうちは、いつまで経っても救われねえよ。」

と言って、牽制する。

ポーラは開きかけた口をつぐんで、また俯いた。

「まあまあ、そう怒らないであげて下さい。行きましょう。」

僕はそう言うと、クローバーと共に、不老不死の村をあとにした。

第84話 ポーカーゲーム

食卓には、クローバーの手作りの料理が並ぶ。サラダと、ガーリックトースト、そしてメインのホワイトシチュー。

熱々のシチューを一口頬張れば、身体の芯から温まる。

「うん、美味しい。」

「当たり前だ。」

美味しさに思わず笑顔になってしまう僕を見て、クローバーは満足げに微笑んだ。

「ポーラさんは、温かい食事でありつけたかな？」

昼間あったことを思い出し、僕は特に意味もなくそう口に出した。別に彼女が心配なわけではない。噂話をするような感覚だった。

「さあな、興味ねーよ。」

クローバーはそう言いながら、ガーリックトーストをちぎってシチューに沈める。

「そうなの？クローは随分、ポーラさんに肩入れしてるなって、僕は思ったんだけど。」

クローバーの言葉は、確かに見た目は悪かったが、僕が吐くただ優しいだけの言葉よりは、ずっと意味がある内容だった。しかし、当の本人は自覚がないようで、

「はあ？私か？ないない。」

と言つて、うるさそうに手を振る。

「もうあんなやつ助けてやんねーよ。」

クローバーはそう言いながら、シチューに沈めたガーリックトーストを、スプーンですくって口に運ぶ。面白い食べ方だ。

「まあ、彼女が大変なのはわかるけど、僕らだって、それなりに大変だからね。」

ポーラが生きづらい人生を送っているのはわかる。でも、だからといって、僕たちがそれをどうこうしなけばいけない義理はない。

「そうそう、そういえば前に、テイルさんが面白い話をしてくれたんだ。」

「テイルが？」

クローバーがマスターのボンド「シルフィード」に所属するテイルは、ぶつきらぼうで、傍若無人だが、血の繋がらない妹のソラにだけは、大甘な青年だ。

そんなテイルが、前回ポラとあつた直後に、酒場で興味深い話をしてくれた。

「人生はポーカーゲームのようだ。」

僕はテイルの真似をして、人差し指を立てて、得意そうにいう。案の定、クローバーの

「はあ？」

という呆れ声が返ってきて、思わず僕は吹き出した。

「お前、バカなの？」

「もー、酷いなあ。真面目な話なのに。」

「真面目な話なら、それらしく話せよ。」

クローバーはそう言うと、空っぽになったシチューのお皿にスプーンを投げ入れ、グラスに手を伸ばす。そうして、中の水をゴクリと一口飲み干すと、こちらを見つめ、先を促すように首を傾げた。

「人生はポーカーゲームのようだ。」

僕は気を取り直して話し始める。

「人は生まれながらに、持っているカードが決まってる。」

それは神様から配られたカードで、内容は選べない。いいカードもあれば、悪いカードもある。

「さらに、追加で山札から引けるカードにも限りがある。誰かが先に引いたカードを、その人から奪うことはできない。」

「よくわからないな。」

クローバーは、腕組みをして首を傾げた。僕は少しだけ微笑んで、話を続ける。

「最初に持っているカードが自分の能力。山札のカードは世界のリソース。2つのカードを交換しながら、自分のポーカー・ハンドを作っていくしかない。」

どちらも限られた枚数の中で、やらなければいけない。山札のカ

ドの枚数も、数字も、スートも、限られている。リソースは、世界中の人で分け合っているものなのだ。ただ、誰がどれを引くかはわからない。

「みんながみんな、ロイヤルストレートフラッシュを、作れるわけじゃないのに、みんなそれを目指そうとするから苦しくなる。」

「持つてるカードの中で、ワンペアとかを探した方がいいってことか。」

僕はコクリとうなずく。

「誰かのポーカークハンドの点数が低いからといって、僕らとは無関係なんだよ。その人がその点数で満足できないなら、山札からさらにカードを引くしかない。」

「まあ引いたところで、いいカードがくるとは限らないけどな。」

クローバーの言う通りだ。

先にいったように、リソースは限られているのだ。無闇に山札に手を伸ばしたところで、他の誰かが既に引いた、絶対もう手に入れないカードを、知らず知らずのうちに、探し求めることになるかもしれない。

「人はみんな強欲だ。ワンペアじゃ満足できない。」

「そうかもしれないね。でも、満足できないからって、他の人に当たっていいわけじゃないよ。」

「ポーラみたいにか?」

僕は「ふっ」と笑って同意を示す。

「これ、本当にテイルが言ってたのか?」

「本人も、受け売りって言ってたけどね。」

「だと思った。あいつがこんな話思いつくわけねえよな。」

クローバーはそう言いながら、テーブルに肘を付き、考え込む。

沈黙。

僕は残り少ないワインを、グラスについだ。もうボトルは空に近い。安物のワインは渋みが少なく、つつい飲みすぎしてしまう。そろそろ新しいのを買わなくてはいけない。

「ポーカークゲームか……。まあ言ってることは、わからなくはないし、

ある程度同意できる。」

思考の海から浮上したクローバーが、呟くように言う。

「ただ、やっぱり、山札のリソースのランダム性には疑問があるし、ポーカールと違って、人生は生まれ持ったカードを全部捨てられないし、穴はいくつでもあるよな。」

それは仕方の無いことだ。ひとつの言葉で言い表せる程、人生は、世界は、簡単なものではない。もっと複雑で、様々な要因が混ざりあって、絡み合って成り立っているのだ。

「でも、良い話だよ。私はさ、騎士としてのロイヤルストレートフラッシュュを作りたかった。もしくはストレートフラッシュュ。」

僕は「うんうん」とうなずく。

「私は最初からそれに有利なカードを持っていたし、他も努力で手に入れた。でも……」

クローバーはそう言うのと、眉を下げて悲しげに自嘲する。

「スートを揃えられなかった。スペードが欲しかったのに、私は最初からハートしかなくて、それは捨てられないカードだった。」

ハート、つまり女であることは変えられない。クローバーは、他のカードを揃えたはいいが、1枚だけは、どうしても手に入れることができなかつたのだ。

「でも、ストレートにはなつた。騎士にはなれなかつたけど、今は冒険者として、まあまあ楽しくやってるよ。」

クローバーはそう言って、笑った。

人生は、思い通りにいかない。どんなに努力してカードを集めても、理想のポーカール・ハンドになるとは限らないのだ。

カードを引き続けるのか、クローバーのように、今持つてるカードで勝負するのか。

その選択は自由で、どの選択をしても、誰も咎めることはできない。「僕らは、僕らのカードだけみて、ポーカール・ハンドを作ればいいんだよ。ポーラさんのは、ポーラさんが決めることなんだから。」

「エルは、どうなんだ？」

「んっ？」

「エルは、どんなポーカー・ハンドを目指してるんだ？」

思わぬ質問に、僕は困惑する。

僕が今持っているカードは悪くない。でも、それ自体に僕はあまり興味はない。これ以上悪くならうが、良くなるうが、どうでもいい。慰め程度に、良いカードを集めたところで、ある日突然消えてしまうことだつてある。

思い出されるのは、あの日、事故で失った妹、ルアンナのことだ。絶対離すまいと握りしめていたはずなのに、結局無くしてしまった。むしろ、強く握りしめていたからこそ、失ったのだ。

「僕は、どこも目指してないよ。」

僕はそう言つて微笑む。

「ずるいな。」

「そうだね。」

テーブルの向かい側で、クローバーが、浅いため息をついた。呆れているのか、哀れんでいるのか、どちらにせよ、僕の感情は動かない。

僕はもうカードを集める気も、揃える気もなかった。全部無くなるなら、無くなつてもいい。

「エルは一体、誰の人生を生きてるんだろうな。」

クローバーが、空中に向かってそう呟くのを、僕はただ見つめていた。

僕は結局、ポーラと一緒になのだ。自分の生き死にを、自分の外に任せている。自分の人生を生きていない。ただ、ポーラと違うのは、それを他人に強く求めていないし、責任も自分で負っている。それだけが、それだけでも、彼女よりは幾分マシであろう。

「自分の人生を生きるって、難しいんだよ。」

「そうやって楽しんでると、いつか後悔するぞ。」

クローバーはそう言つて、僕を睨む。

そう凄まれたとことで、僕はどうすればいいのか、さっぱりわからない。

表情を変えない僕に、クローバーは「はあ」とため息をついた。

「まあ、まずはワンピースから、揃えよう。」

クローバーはそう言いながら、立ち上がると、僕の頭に手を伸ばし、ぐしゃぐしゃと髪を乱す。僕の方が年上なのに、子供扱いされた気分だった。

何だかんだいって、クローバーは優しくて、世話焼きだ。本人は絶対認めないと思うが、僕もポーラも、そんな彼女に救われている部分がある。

「ありがとう。」

僕はそう微笑む。偽りではない。心からの笑みだった。

「礼なんかいっていいのか？このポーカー・ハンドは、険しい道だぞ？」

クローバーはそう言って、ニツと笑う。

クローバーが導くポーカー・ハンドは、きつと僕があまり得意な手ではない。それでも、彼女と一緒になら、それなりに楽しめるような気がした。

第85話 ポーラの決意

教会の椅子の上でうずくまるポーラに、私は、エルサイスが合成した精旅丸を渡す。

「ほら、解毒剤だ。」

「……持ってきたのね……」

悲しそうな、でも、どこか覚悟を持ったような顔で、ポーラは私を見上げた。

滅びの村を訪れた私たちは、この村を復興させるために尽力している、エースとケイプの兄妹に会った。2人から、教会に神父様の代わりの人が入ったと聞いて、見に来てみれば、床に毒キノコを食べてしまったポーラが、倒れていたのだ。

「私は死ねないんだ……母さん。これは生きろっていう神の思し召しなの……?」

「神なんかいねえよ。私が、お前を生かそうとしてるだけだ。」

ポーラのことに関しての私の言動は、本当にどうかしている。

毒キノコを誤って食べてしまったポーラは

「私は約束した、母と、自分から死なないって。でも、こうして誤って毒で死んだなら……許してくれると思うの……。」

なんて言いながら、そのまま死のうとしていた。

これまでの私なら「そうか。」で、見捨てていただろう。それで全て丸く収まる。ポーラは望み通り死ぬことができ、これから先、死にたいポーラを、殺さなければならなくなる人もでない。

彼女1人がこの世からいなくなったところで、誰も損をしないし、誰も悲しむことも無いのだ。

だから何だってことはない。私には関係の無い話だし、そうだったのはポーラ自身の問題でもある。

それでも、ここで彼女を見捨てたら、私は何か大事なカードを捨ててしまうような気がしたのだ。

だからこうして、わざわざ精旅丸の材料を集めてまで、彼女を助けている。

「……いただくわ。」

ポーラはそう短く言うと、精旅丸をゴクリと飲み込んだ。

これは、私の選択だ。ポーラを生かすも、見捨てるも、自由だった。私は生かす選択をしただけだ。

その先のこととは、知ったことではない。それはポーラの実験だ。彼女の好きにすればいい。

「……少し横になって、いいかしら。」
「どうぞ。」

無言の私の代わりに、エルサイスが、いつもの柔らかな笑みを浮かべて答える。

最初にポーラを見つけた時も、精旅丸の材料を取りに行った時も、エルサイスは珍しく無口で、私に意見することも、疑問を挟むこともなかった。ただ黙って、私の好きなようにやらせてくれた。

エルサイスは、いつだって私の選択の邪魔をしない。そういうところ、一緒にいて安心出来る要素でもあった。

「こういうときは『ありがとう』って言えばいいのかしら……。」
「別に。そういうのは求めてない。」

私のぞんざいな返しに、ポーラは眉を下げる。

「また死にぞこなっちゃったわ。ここに来ても食うや食わずやの生活……。ようやく食べ物にありついたかと思ったら、口にしたものが毒だった……。」

とんだ災難だ。ポーラはとにかくカードの引きが悪い。その上、引いたカードに対して対処も下手だ。

「もう……なんのために生きているのか……。」
ポーラはそう言って、今にも泣きだしそうな顔をする。

「落ち着け。毒を食ったことと、この世を生きる意味は、無関係だ。」
カードの引きが悪いからといって、人生そのものが悪くなるわけではない。どんなカードでも、どう利用するか、なのだ。

私は災難にも、ポーラというカードを引いた。捨てるのが簡単な、安いカードだ。それでも私は、それを捨てずにキープした。彼女を助けることで、別の誰かを、例えば、ポーラと同じように、自分の

人生を生きれない、私のパートナーの心を、もしかしたら救えるのかもしれないと思っただのだ。

そんなものは私の願望に過ぎないし、世の中そう簡単に上手くいくものではないのは、百も承知だ。それでも、私はエルサイスに、私というカードを引いたことを、後悔させたくない。

それはエルサイスが大事だからとか、そういう純粋で単純な感情ではない。もっと利己的で汚い、複雑な感情だ。

「顔色、少し良くなりましたね。」

エルサイスがそう言うのと、ポーラはのっそり起き上がり、椅子に腰掛けた。

私は結局、自分のプライドを、力を誇示したいだけだった。

やり方は違えど、私がやっているのは、前にフェンダークが言っていた、人の人生に介入することと一緒にだ。

興味がないと言いつつも、誰かの心を動かしたい、誰かの心に残りたいと思ってしまうのは、人の性なのかもしれない。

「ポーラさん、大丈夫ですか!?!」

「あれ?」

突然、エースとケイプの兄妹が、教会に飛び込んできて、私たちは驚きつつもそちらを見る。

「大丈夫そうじゃない! また、お兄ちゃんの早とちり?! もお!」

ケイプはそう言いながら、兄のエースを不機嫌そうに睨みつける。

「どうかしたんですか?」

エルサイスが、2人の間に入って尋ねる。

「ポーラさんが、床の上に倒れてて……。間違つて毒キノコでも食べたんだつたらどうしようと……。」

エースが、元氣そうに座っているポーラを見ながら、頭を掻く。

「いくらなんでも、そんな間抜けなことしないわよね! お兄ちゃんじゃないんだから!」

ケイプはそう言って、ポーラに同意を求める。ポーラは

「え……………!? え、ええつと…………。」

と言葉を濁す。

本当は、エースの鋭い洞察通りなのだが、ケイプそう言われてしまつては、言い出しにくいだろう。

私とエルサイスは顔を見合わせて、肩を竦めた。

「……でも、よかつたです。ポーラさんが無事で。だって、せつかくこの村に来てくれた人なんですよ。」

そう言われたポーラは、驚いたように、目を丸くする。

きつとポーラは、自分の存在を肯定してくれる他人がいなかったのだろう。それをしてくれていた彼女の母親は、既に他界していた。

それが、こんなところで、思わぬ歓迎にあつたのだ。

「なかなか誰もやってくれなかつた、教会の神父さんの役割を果たしてくれてるんですから。」

ケイプはそう言つて、ポーラに笑顔を向ける。ポーラは戸惑うように俯きながらも、照れて頬を染めた。

「神父様の役割ついても、まだ同じだけのことはできないけどね……。」

「よけいなこと言わない、お兄ちゃん！」

「すみません……。」

申し訳なきそうに悲しい顔をするポーラを、

「こんなお兄ちゃんの言うことは聞かないで！」

と、ケイプが慰める。

「こんなつてなんだ！」

ケイプの態度に、エースは食つてかかり、2人は言い争いを始める。

そんな様子を、ポーラはおかしそうに

「フフツ……。」

つと笑いながら見ていた。

「ごめんさい。心配おかけして……。ありがとうございます。」

ポーラはそう言つて、言い争う兄妹に声をかける。

世界は優しくくない。ポーラの引くカードは、いつだってポーラを傷つけて、彼女を拒否し、ポーラもまたそのカードを拒否した。

「……あなたたちにも迷惑かけたわ。もう少し自分で頑張ってみる。」
今回ポーラが引いたカードが、良いものなのかは、まだわからない。

それでも、彼女が頑張るといふのなら、望みはあるだろう。

「神父の仕事なんて、お前にできるのか？」

私がそう問うと、ポーラは苦笑いを浮かべる。

「私は、神父様みたいに偉そうなことも言えない、神の恵みを与えることもできない。私にどれだけのことができるか……私には全然わからないけど……。」

私の隣でエルサイスが微笑んでいた。いつもの愛想笑いとは違う、どこか嬉しそうな顔だ。

「ここで少しやってみるわ……。ありがとう……。」

ポーラはそう言うと、にっこりと微笑んだ。

第86話 寝物語に

「ねえ?クロ?」

「ん?」

鏡の前で、髪を梳かすクローバーに、僕はベットのの上に寝そべったまま声をかける。

公国は今日も雪だ。宿の部屋にいればそれなりに暖かいが、それでも、寝間着姿でいれば少し肌寒い。

僕はしっかりと毛布を身体に巻き付け、深々と布団の中に潜り込んだ。

「もう寝る?」

「うん。」

クローバーは短い返事をする、鏡の前から立ち上がり、僕の隣のベットに滑り込む。

「今日は寒いな。」

冷たいシーツに顔を歪めながら、クローバーは身震いし、それでもなんとか暖まろうと、身体を丸めて布団を被る。

「一緒のベットであつたまる?」

僕の軽口に、クローバーは返事もせず、枕元のランタンに手を伸ばし、火を落とすと

「おやすみ。」

と言つて、眠りを強要してくる。

「まだ話したい。」

「私は寝る。」

クローバーは譲歩という言葉を知らない。とにかく自分が優先なのだ。それが面白くて、僕は「ふふっ」と笑ってしまった。

「じゃあ勝手に話す。」

「好きにしろ。」

僕を無視するように、クローバーは寝返りを打ってこちらに背を向けた。僕は気にせず、その背中に向かって話し出す。

「僕はさ、もう諦めたんだ。」

幼い頃、僕は大切な妹を失った。それで、あつという間に人生の全てが、どうでもよくなってしまうた。それくらい、僕にとって妹のルアンナは、この世界の全てだったのだ。

ルアンナは、疎まれ、奪われ、虐げられるだけの僕を、唯一受け入れてくれた。ただ愛してくれた。そんな彼女がいなくなった世界に、既に未練はない。

もう僕を、タダで愛してくれる人はいない。それが、悲しくて、僕はカードを集めることを放棄した。欲しいポーカ・ハンドは、もう二度と作れないのだ。

「欲しいカードはもう手に入らないって、僕は知ってるんだ。ないものねだりはできない。だから、もういいやって……。」

「子供かよ……。」

背を向けたままのクローバーが、呆れたように漏らす。

「違うカードで、似たような手を作ればいいだけなのに、それすらやらないのは、ただ怠惰なだけだ。」

クローバーの言うことも一理ある。面倒であるのは確かだ。でも、それ以上に、僕は虚しかったのだ。

「代わりのカードを作ることが、僕にとっては空虚なことだったんだ。」

ポーラは、母親の代わりに、自分を認めて受け入れてくれる人を探していた。そして、あの教会に辿り着いたのだ。エースとケイプの兄妹も、そしてクローバーも、条件付きで、ポーラを許容した。

無償の愛を他人に求めても、手に入らない。だから、条件付きので許容してもらう。

それは空虚なものだと、僕は思っていた。ポーラあの笑顔を見るまでは……。

「でもね、今日のポーラさんを見て、そうでもないかなって。」

覚悟を決めて、嬉しそうに微笑むポーラを見て、僕は羨ましいと思ったのだ。

「だから、ありがとうって。」

「文脈がまったく読めない。」

クローバーはそう言いながらも「ククツ」と笑いを堪えている。

クローバーがポーラを助けた理由は、僕にはわからない。クローバーのことだから、きつとポーラのためでも、僕のためでもないだろう。それでも、僕は確かに、クローバーの行動によって、新しい世界を見ることができた。

「悪くないだろ？この世界も。」

クローバーが、寝返りを打って、僕の方に身体を向ける。珍しく上機嫌だ。僕の言葉のどこが嬉しかったのか、皆目見当もつかないが、機嫌がいいことにこしたことはない。

「悪くないかもね。」

僕はそう言って笑った。

無償の愛なんてものは幻想だ。そんなものは存在しない。でも、存在しなくても、この世界は案外悪くない。

「さあ、もう寝ろ。そして、明日私をまた起こしてくれ。」

クローバーはそう言いながら、頭まで布団を被る。

「おやすみ。」

「おやすみなさい。」

僕はメガネを外すと、クローバーにならって布団に深く潜り込む。奪われるくらいなら、誰にも愛されなくていい、誰も愛さなくていい。もう僕は、何も持たない。僕はそうして世界を拒否していたけれど、愛が何かを奪うとは限らないらしい。それがわかったただけで、僕の心は軽くなった。

人は簡単に変わらない、変えられない。それでも、クローバーと一緒になら新しい何かを掴めるのではないかと、柔かい期待を抱いてしまふ。裏切られてもいい、そもそもそんなに強く願っていることでもないのだ。

ゆっくり呼吸を繰り返せば、ドロリと甘い睡魔が思考を支配する。僕は抵抗せず、その甘さに飲み込まれるように淡い夢へと落ちていった。

番外編くユイゼお姉ちゃん その1く

「あー！ラトちゃん!!」

遠くに弟であるラトを見つけたユイゼは、パートナーのセリクを置いて走り出す。

「あ、急に走ると危ないよー!」

ユイゼはセリクのそんな注意も聞かず、石化した村の大通りをパタパタ走っていった。その後ろをセリクが急いで追いかける。

ユイゼの目線の先には、何やら真剣に話し合うレツコとラトがいた。2人はまだユイゼの存在に気がついていないようで、ユイゼの呼びかけに反応を見せなかった。

「ラトちゃん!」

ユイゼは走りながらも一度呼びかけ手を振る。やっと気がついたラトが、驚いて顔を上げた。それが嬉しくてユイゼが顔をほころばせた瞬間

「きやつ!」

ユイゼは石につまづき、すてーんと前のめりにすっ転んだ。派手に転んだせいであたりにもわんと土埃が舞った。

「ユイゼ!」

「お姉ちゃん!」

セリクとラトが慌てて駆け寄って、ユイゼを助け起こす。ユイゼは「うろうう……セリクうう……。」

と弱々しい声を上げながらゆっくり起き上がる。

「大丈夫?」

目に涙を浮かべるユイゼにセリクはハンカチを渡した。

いつもなら「うわーん」と泣き出してセリクに抱きついてしまうユイゼだが、今は弟のラトが傍で見ている。ユイゼは大きく鼻をすすって涙を押し込めると、セリクからハンカチを受け取り土埃で汚れた顔を拭く。

「大丈夫?」

「大丈夫。」

ラトに顔を覗き込まれたユイゼは、奥歯を噛んで込み上げる嗚咽を飲み込んだ。ラトの前でいつもの甘えん坊の泣き虫の姿は見せられない。たとえ1歳しか違わなくても、自分はお姉ちゃんなのだ。ユイゼはそう強かった。

「ユイゼさん、セリクさん、お久しぶりっす!」

ラトの後ろからレッコがひよっこり顔を出す。

「久しぶりだね。元気だった?」

セリクはそう言っつて2人に優しく微笑みかける。ラトはユイゼの弟だが、セリクにとつても弟みたくないものだし、そしてそのパートナーであるレッコも妹ように思っていた。それはユイゼも同じだった。2人はレッコとラトの前ではお兄ちゃんとお姉ちゃんなのだ。

「元気っす!冒険者も板についてきたし、もうなんでもできるんっすから!」

そう得意そうに言うレッコを

「なんでもはさすがに言い過ぎだよ……。」

つとラトがたしなめる。

その横でセリクがユイゼのスカートについたホコリをポンポンと叩いて払おうとする。

ユイゼはそれを手で制して

「大丈夫。」

つと言っつて不満そうに唇を尖らせた。ラトの前で世話を焼かれるのが恥ずかしいらしい。そんなかわいいプライドを見せるユイゼが愛おしくて、セリクは思わず笑ってしまった。

「2人はどうしてここに?」

セリクがそう尋ねると、レッコとラトはギクリと体を強ばらせ目を泳がせる。

「えつと……」

「ちよつと用事があつて……」

俯き加減に目を逸らす2人を見て、ユイゼとセリクは顔を見合わせた。石化した村は、いつも連邦や公国をウロウロしているレッコとラト

の行動範囲からいうと、随分遠い場所だった。わざわざこんな所まで来たのには、それなりの理由があるはずなのだが、その理由が人と言えないようなものなら、少し心配だ。

ユイゼとセリクは目だけでそう会話すると、うんつと頷き合いラトとレッコに向き合う。

「ラトちゃん！隠し事してるでしょ！」
「うっ…………。」

ユイゼ詰め寄られ、ラトは困ったように呻き声をあげる。
「なんにもしてないっすよ！」

横からレッコが助け舟をだしたが
「ほんとに？」

つと真剣な顔のセリクに射抜くように見つめられ
「ほ、ほんと…………っす…………よ…………。」

と尻すぼみになってあつという間に沈没してしまった。

「何か困ってるなら、相談してくれていいんだよ？」

「そうそう、私たち姉弟なんだから！ね？」

2人がそう優しく言うと、レッコとラトは「どうする？」というように顔を見合わせる。

「そんなん、とつとと事情話して、手伝ってもらったらええんちゃう？」

「ボルシチ!!」

ラトの鞆の中から紫色の鳥が飛び出してきて、名前を叫んだレッコの頭にとまる。

「お前！よけーなことやってんじゃねーよ！」

頭にとまったボルシチを捕まえようとしたレッコの手を、ボルシチはひらりとかわすとパタパタと羽ばたき、今度はラトの肩にとまる。

「ボルちゃん久しぶり。」

「おおきに。」

ユイゼの挨拶に、ボルシチは気のいい返事をする。

「うーん…………レッコ、とりあえず話してみよう？僕ら2人じゃ難しいの確かだし…………。」

ラトが降参したようにレツコに言う。レツコはしばらく不満そうな顔で黙っていたが、やがて諦めたため息つくとき「そうだね。」

とラトの提案に従った。

番外編くユイゼお姉ちゃん その2く

薄暗い洞窟の中を4人は固まって慎重に歩く。先頭はセリクその後ろにレツコ、ラトと続き、しんがりはユイゼが務めた。

枯れ果てし炭坑の魔物は体躯が大きく、凜猛そうな姿をしていた。ラトは魔物に気づかれぬよう洞窟の壁際の方を歩きながら、こっそりその様子を伺う。

クロコワニは大きな口から白く鋭い牙を覗かせながら、グルルつと唸り声をあげて、ラトの数m先をうろついていた。その隣には大きな木の盾を持ったウツサーがギョロリとした目を左右に動かしながら獲物を探している。

その凜猛そうな見た目と気味の悪さに、ラトは思わず身震いした。

「ラトちゃん大丈夫？」

ブルブルと震えるラトを心配したユイゼが声をかける。ユイゼの方が背が低いので、ユイゼがラトの顔を見ようとすると、不可抗力で上目遣いになってしまう。下から心配そうにこちらを見上げてくるその顔に、ラトは羞恥を覚え

「だ、大丈夫です。」

と、慌てて返す。姉とはいえ、自分より体の小さい女の人に心配される自分が情けなかった。

「お姉ちゃんが守るからねー！」

ユイゼはそんなラトのプライドなど知らずに、グツとガッツポーズを作る。

ユイゼには双子の兄がいて、幼い頃はしつかり者の兄がちよつとドジなユイゼの面倒を見てくれていた。ボンド『シルフィード』ではクローバーやにもが手を貸してくれるし、パートナーのセリクもユイゼを甘やかす。

ユイゼはいつも誰かを頼る側、守られる側だった。

でも、弟のラトの前では違う。年上で冒険者としての経験も上で、頼れるお姉ちゃんでなければいけない。そんな思いから、ユイゼはいつもよりも張り切っていた。

「僕らレベリングがしたくて……。」

気まづそうに目を伏せながら、ラトがポツリポツリと話し出す。

連邦の炭鉱前や、塔の外でのレベリングに限界を感じたというか、簡単に言えば「飽きた」レッコとラトは、酒場に居た他の冒険者から『ダンジョン』の存在を聞いた。クリアすればかなりの経験値がもらえるを知った2人は、さっそく地下工場、炎の洞窟を軽々クリアし、最後にこの枯れ果てし炭坑を目指して石化した村まできた。しかし、ここに来るまでの道中の魔物でさえ骨が折れた自分たちだけで、ダンジョンをクリアできるのか心配になって、直前でまごついていたのだ。

そこをユイゼとセリクに見つかった形だ。

「なんだ、そういうことか。」

「じゃあ私たちと一緒にやろうよ!」

意外にもあっさりと受け入れる2人にレッコとラトは目を丸くして驚く。

「いいんすか!？」

「もちろんだよ。むしろなんで隠すの?」

不思議そうに首を傾げるユイゼに

「だって……怒られると思ったから……。」

とラトがぼつが悪そうに答える。

「こないだ姐さんに『調子に乗っていると死ぬぞ』的な注意を受けたばかりなんすよ……。」

レッコはそう言っただけで頭をかいた。

「こいつらほんまにアホでな、塔の外でクローバーさんとエルサイスさんに、3回も!助けられてるんやで。」

3回というところを強調するボルシチをレッコは恨めしそうに睨みつける。でも本当のことなので反論はできない。

「2人だけで行ったらそれは無謀かもしれないけど、僕たちと行けば大丈夫だよ。」

「うんうん、何度も行ったことあるから道も大丈夫だし!怖くないよ

！」

ユイゼやセリクは、クローバーやエルサイスほどは経験はないかもしれない。それでもこの弟と妹よりは1歩先を行く先輩だ。クローバーのように指導することも、エルサイスのように助言を与えることもできないが、共に歩んで力になれることはできる。むしろ今のレツコとラトにはそういう助力の方が必要だった。

「じゃあ……」

「うん。」

レツコとラトはお互い目配せし合うと

「よろしくお願いします！」

と声を揃えてお辞儀をした。

それを見たユイゼは高揚感に包まれる。本人の自覚はあまり無いようだが、セリクから見れば十分はしゃいでいると言ってもおかしくないテンションの上がり方だった。

いつも誰かを頼ってばかりで、鈍くて、どんくさくて、ドジで役に立たない。そんなお荷物のような自分に、ユイゼはどこか劣等感を抱いていた。

みんなは「いいよ」と「気にしないで」と許してくれても、ユイゼ自身がそうやって周りに甘えている自分を許せない。

冒険者として、1人の人として、頼るばかりでなく、自分も誰かの力になりたい。そういう思いはユイゼの中で日に日に大きくなっていった。

今回ユイゼは頼られる側になれた。それが嬉しくて、ユイゼはいつも以上にわくわくしていた。

静まり返った洞窟の中では、自分の足音さえ大きく聞こえる。魔物に気づかれないよう、ユイゼは慎重に息を殺して歩みを進めた。

いつもは壁役のセリクの後ろに隠れてついて行くだけだが、今日はその間にレツコとラトがいる。何かあった時は、自分が2人を守る。ユイゼはそう心に決めていた。

「ダンジョンの法則は知ってるね？」

セリクが小さな声でレッコとラトに確認を取る。2人は声で魔物に気づかれるのが怖いようで、周りを警戒しながら素早く「うんうん」っと何度も首を縦に振って、意思を伝えた。

タンジョンは他のフィールドとは作りが違い、今いるエリアの魔物を1体以上倒さなければ、次のエリアに進めないというルールがある。つまり、戦闘を避けて最深部まで行くことはできないのだ。

「基本的にHPの低いゲルミを狙ってエンカウントする。ゲルミの弱点は……」

「土つすね。」

レッコの回答にセリクは満足気に微笑んだ。

レッコとラトは早速装備とスキルを変ええる。相手の弱点に合わせてそうすることは、もう2人にとつて朝飯前のことになっていた。

「ラトちゃん大丈夫？準備できた？」

そう言いながらユイゼはリラックスした様子でラトの腕に甘えるように絡みつく。

「あ……は、はい……。」

相変わらず距離が近い姉の行動にラトは戸惑い頬を染める。

ユイゼは人に対する警戒心が無さすぎる節があった。普段は引っ込み思案の人見知りでどこか距離があるが、セリクやラトなど1度親しくなった人には、途端に距離がゼロになるのだ。誰の前だろうとどこだろうと関係なしに、くっついてしまう。セリクもラトも、それが嫌ではないが恥ずかしくて、手を焼いていた。

「ユイゼちゃん、僕が盾になるから攻撃お願いね。」

「任せて！」

ユイゼは気合い十分な返事をする。と制作したばかりの真新しいウーシアナイフを手に取り、構える。

「準備はいい？」

「OKつす。」

「はいっ！」

「はいっ！」

全員の返事を聞いたセリクは剣と盾を構えると、ゲルミの前に躍り

出た。

番外編くユイゼお姉ちゃん その3く

セリクが盾としてヘイトを取り、レツコがデバフやバフで支援、ユイゼとラトが攻撃という編成で、特に苦労もなくゲルミを倒すことができた。

問題は倒した後だ。

セリクはいつも通り右の道を選んだが、戦闘で方向がわからなくなっていたユイゼは左の道に入ってしまったのだ。

「あれ？」

ユイゼが気がついた時にはセリクとレツコはすでに見当たらず、近くにラトしか居なかった。

「はぐれちゃった……？」

ラトの心配そうな問いかけにユイゼは

「そう……かも……。」

と自信のない声で返す。

黒い不安の波が一気にユイゼの心に押し寄せた。棘の付いた布で心臓を締めあげられるような恐怖でユイゼは泣きそうになってしまう。足元からじわじわと込み上げてくる苦しさに涙を滲ませるユイゼを見て、ラトも不安を募らせる。

「お姉ちゃん……？一日戻ろうか？」

心配そうにこちらを覗き込むラトにユイゼはハッと我に返る。今は1人ではない。守るべき大事な弟がいる。そんな大事な人に心配をかけて、メソメソなどしてられないのだ。

ユイゼは頭を左右に振って気を取り直すと、滲んできた涙を拭い、精一杯笑顔を作る。

「ラトちゃん大丈夫だよ。お姉ちゃんが付いてるからね！」

そう言っ手取るユイゼにラトは目を丸くして驚く。

弟のラトから見ても、ユイゼは泣き虫で甘えん坊なところがあつた。でも今は自分のためにこんなに頑張ってくれている。ラトはそんなユイゼの心遣いが嬉しくて、でもそうされる自分が情けなくて、複雑な気持ちになった。

「戻ってセリクたちが居なかつたら、また戦闘しなくちゃ先に進めないの。右に行っても左に行ってもこの先は繋がってるはずだから、下手に動いて戦闘で消耗しちゃうよりは、先に進もう。」

盾役のセリクも、支援のレツコもない。そんな状態で何度も戦闘をするのはリスクが高い。

ユイゼは意外にも冷静だった。冒険者としての経験と知識はユイゼに正しい判断と自信をくれる。

「僕たち2人で大丈夫かな……。」

「大丈夫。お姉ちゃんが守るからね！」

不安そうなラトを励ますように、ユイゼはにっこり笑顔を作る。

内心のユイゼは焦りと不安でいっぱいになっていった。しかし、それらの負の感情をぐるぐる巻に押し込めて頭の隅に追いやる。落ち着けと何度も言い聞かせて、ウーシアナイフを握りしめれば、力がみなぎって来るような気がした。まだ戦える。自分にはその力がある。守られてるばかりではいられないのだ。

ユイゼは立派な1人の冒険者だった。

ラトはそんなユイゼに気圧されながらも「うん」と力強く頷き返した。

「僕もお姉ちゃんを守るから。」

怖くない訳では無い。本当は震え出したいほど怖いし、自信がなかったが、ユイゼがこんなに頑張っているのだ。ラトだって頑張らなわけにはいかない。ラトはありったけの勇気をかき集め、ユイゼの小さくて細い手を握り返すと

「頑張ろう。」

と声をかけた。

ユイゼは蝶のようにヒラヒラと舞いながら、攻撃を繰り返す。ラトは出来る限りの防御体勢で敵の攻撃に耐えていた。ゲルミが体当たりの体勢に入ったので、ラトは盾を構え応戦する。

「うっ……。」

一直線にこちらに突っ込んできたゲルミに、ラトは思わず呻き声を

漏らす。体への直接の攻撃は防いだが、守った盾から振動が伝わり、手が痺れるように痛い。間髪入れず別のゲルミが魔法を唱えて攻撃してくる。

「わっ！つとあ?!」

少ない量の水を頭から浴びせられ、ラトは戸惑った悲鳴を上げた。

「ラトちゃん、次左から体当たり！もうすぐ倒せるから頑張って！」

ユイゼの報告を聞いたラトは咄嗟に左に盾を構えるが間に合わず、脇腹痛い一発を食らってしまう。

「ぐはっ……。」

膝をつきそうになりながらも、なんとかウォールを唱えて自身を回復する。痛みは残ったが思っていたよりは酷くない。そうしている間に、ユイゼがグリムリーパーでゲルミを切り刻み黒い霧にする。

「ごめんね、ラトちゃん。痛たいよね。ごめんね。」

戦闘が終わるとユイゼはラトに駆け寄ってその身を案じる。眉をへの字に下げ、自分の不甲斐なさを必死に謝罪するユイゼに、ラトは「全然大丈夫！」

と笑顔を向けた。

ラトが回復と支援スキルを積み、ユイゼが火力でんこ盛りで攻撃する。『殺られる前に殺る』作戦で2人は先に進んだ。

エリアを1つ進んでも、セリクたちには会えなかった。少し待ってみたが、2人が来る気配はない。

「先に行ったのかな?」

「うーん……。多分この先でセリクが待ってるはず……。」

少し不安そうにしながら、ユイゼが呟く。確信はないし、予想というより不安定な予感しかないが、セリクが自分たちの強さを信じてくれていると願うしかなかった。

さつきと同じ要領でゲルミを倒し、エリアを更新するが、その先にもセリクたちは居なかった。

「セリク……。」

「レツコ……。」

ユイゼとラトは不安そうに顔を見合わせる。中々2人に会えない状況に、さらに先に行けばいいのか、戻るべきなのか、すっかりわからなくなってしまう、ユイゼは途方に暮れてしまう。

この先も2人で行けるのか、再計算を繰り返すユイゼにラトが「お姉ちゃん……レッコは大丈夫かな？」

と不安そうな声をかける。その言葉にユイゼははつとす。ユイゼは自分たちの心配ばかりしていたが、ラトはパートナーの心配までしていたのだ。

戦力的には自分たちよりもセリクとレッコのペアの方が上なので、実際心配無用なのだが、それでもすぐ自分のことでもいいっばいになってしまいういぜは、ラトの言葉でそれを思い知らされ羞恥を覚える。

「ラトちゃん……。」

ユイゼは泣き出しそうになるのを、歯を食いしばって堪えた。お姉ちゃんだから、冒険の先輩だから、そんな風に経験を盾に強がったところで、ユイゼ自身の心が強くなければ大事な人を守るなんてできないのだ。

ウーシアナイフを握り直し、前を向く。出来ないからといって、メソメソ泣いている暇はない。そうしてしまったら、本当にいつまで経っても弱いままになってしまう。

「先に行こう。大丈夫！セリクたちが居なくても、お姉ちゃんがラトちゃんを守るから！」

ユイゼがそうラトに声をかけた瞬間、ユイゼの頭部にガツンと重い衝撃が走る。

「お姉ちゃん!!」

「ぐっ……。」

体勢を崩しながら振り返ったユイゼの目に写ったのは、たった今杖を振り下ろし自分の頭を殴ったクロコワニの姿だった。ドロリと冷たい感触が額を伝わる。それが自分の血であると認識した後に痛みが遅れてやってきた。

ラトはパニックを起こし順序立てずにスキルを使い、効率よくユイ

ゼを回復することができないでいた。

「ラトちゃん落ち着いて！エアシールのあとにボール！」

ユイゼはそう言いながら体勢を立て直し、ラトを庇うように前線に立ち攻撃を開始する。

そんなユイゼの前に立ちはだかるのは3匹のクロコワニ。その中の1匹がギザギザの白い牙を光らせながら、大きく口を開けると、赤い燃え盛る炎が見えた。

「ラトちゃん来るよ！」

矢継ぎ早にスキルを使いクールタイムに巻き込まれたラトが震える手で盾を構える。

全身を舐めるように赤い炎の渦が一瞬で2人を包む。

「きやつ……。」

「うっ……わあ！」

HPがガリガリ削られたが、ユイゼは怯むことなく反撃し、あつという間にクロコワニの1匹を黒い霧にする。

たとえここで倒れたとしても、最後の最後まで戦い抜く。それがユイゼの冒険者としての覚悟だった。

番外編くユイゼお姉ちゃん その4く

「はぐれちゃったか……。」

「どーします?」

心配そうにこちらを見上げてくるレッコに、セリクは困ったため息を返す。まさかこんな事態になるとは予想外だった。

「事前にはぐれた時の行動を決めておくべきだったな。」

そう呟いてみても、すでにあとの祭りだ。

「1度戻るつすか?」

「うーん……。」

ユイゼはレッコとラトのこの依頼にいつになく張り切っていた。なのでアリアドネちゃんを使用して脱出、退却する可能性は限りなくゼロに近い。そうなると先に進むか、1度戻るかの2択になるが、どっちもアタッカーであるユイゼとラトのペアは、戦力バランス的に不利な状況である。つまり2人だけで先に進むのはリスクが高い。

「1度戻って待ってみよう。」

「はいっす!」

そう言っただけで元きた道に戻るセリクに、レッコが続く。

「居ないっすね。」

「うーん……とりあえずちよつと待ってみて来ないようなら先へ進む。」

沈黙。

ユイゼたちが来る気配はない。

「もう外に出たとか?」

ラトならそうしそうだレッコは思っていた。無理そうなら退却するのが彼の性格だ。無謀なことをしてしまうのは、だいたい自分が無理やり付き合わせている場合が多い。背中を押すレッコが居なければ、本来のラトは慎重でリスクを避ける傾向があった。

「ラトくんはわからないけど、ユイゼちゃんは脱出なんて選択肢は持っていないよ。」

それは断言できる確信があった。ユイゼは大人しそうに見えるが

は強いのだ。ちょっと頑固で、いざという時は火の玉みたいに飛んでいく、そんな勢いと強さがある。

「ユイゼちゃんなら、ラトくんをしっかりと守って進むって考えると思う。」

セリクはそう言いながら、剣を抜くとゲルミを探す。

「セリクさんはユイゼさんを信じてるんっすね。」

「信じるというか、知ってるだけだよ。他の人よりユイゼちゃんのことを。」

自分のことも、ラトのこともまだよくわかっていないレッコは、そう堂々と言えるセリクが少し羨ましい。だから

「ラブラブなんすね。」

なんて言って茶化してしまう。

「い、いやそんなんじゃないよ……！もう、年上をからかうもんじゃないよ。」

セリクはそう窘めるように返したが、照れて頬を染めながらだったので、威厳は感じられなかった。そんなセリクの姿に、レッコはニヤ顔が隠せない。

「さあ、ユイゼちゃんたちは戻ってこない様だし、先に進もう。」

セリクはごまかすようにそう言うと、剣を取りゲルミ目掛けて斬りかかった。

痛む体でウーシアナイフを振りかざし、ユイゼは懸命に戦う。フェイタルエツジでクロコワニを切り割けば、肉に食い込む確かな手応えがあった。けして勝てない相手ではない。

そうして戦いながら、ユイゼはいつも自分を守ってくれるセリクに思いを馳せる。セリクと一緒に戦闘する時のユイゼはいつも自由だった。地を舞い、空を駆け、敵に攻撃することだけを考えていればいい。いわゆる脳筋だ。それができていたのは全部セリクがいたからだったと、ユイゼは今になって気がついた。

ラトを守りながら戦うことは、すごく難しいし、そして何より怖かった。自分のせいで大事な人に痛い思いをさせてしまう、最悪死なせてしまう、そんな責任を負うことが、ユイゼは何よりも恐ろしいの

だ。

セリクにそんな重責を負わせていたことに今まで気づかなかつた自分が悔しいと思うと同時に、今すぐそれに縋りたいという、弱い自分が出てくる。ユイゼは歯を食いしばって涙を堪えながら

「セリク……。」

と小さく呟く。その瞬間

「ユイゼ!!」

聞きなれた声とともに、セリクがクロコワニの前に躍り出た。

「レッコちゃん、回復を。」

そう指示しながらセリクはヴァンガードを使い、ユイゼからハイトを奪う。

「ラト?大丈夫?」

レッコの呼び掛けにラトは

「レッコ……。」

と、安心したため息をついた。

クロコワニの攻撃を盾で防ぎながら、セリクはソイルスラッシュで反撃する。対ゲルミ用のスキルだったので、さほどダメージは与えられない。

そんなセリクの横からユイゼが風のように飛び出し、フロストライズをお見舞いする。死角から急に弱点属性攻撃を食らったクロコワニは雄叫びのような悲鳴をあげる。ユイゼはその叫びをもともせず、華麗に着地すると、バックステップでセリクの後ろに陣取り、ウーシアナイフを構え直した。

「ユイゼちゃん、行くよ!」

「うん!」

武器を構える2人をレッコがハイオーラを唱えて援護する。

ユイゼの中にじわりと安心感が広がっていく。緊張で冷たくなっていた心がゆつくりと解きほぐされ、陽だまりのような暖かさに包まれた。セリクが来れば恐れるものは何も無い。ユイゼは水を得た魚のように、縦横無尽に駆け回る。

セリクがアースリッジでクロコワニを怯ませた隙に、ユイゼはセリ

クを飛び越すように高く舞い上がった。ユイゼの若草色の目が、クロコワニをゆっくり捉え、鋭く光る。次の瞬間、ユイゼのグリムリーパーでクロコワニは一瞬で黒い霧になった。

「セリク!!」

「おわつと!!」

戦闘が終わり洞窟内に静けさが戻ると、ユイゼはセリクに駆け寄り、抱きつくように縋った。

「ゆ、ユイゼちゃん!?!」

突然の出来事にセリクは顔を赤くしながら戸惑った声を上げる。

「ごめんね、セリク。ごめんなさい!」

はぐれて、迷惑かけて、いつも守ってくれて、簡単なことに気づけなくて。それらを伝えようにも、どう言ったらいいのかわからず、ユイゼは結局ごめんしか言えなかった。

「ごめんなさい、ほんとにいつもごめんね。ごめん……。」

「だ、大丈夫。ユイゼちゃんは悪くないよ。むしろ、ラトくと2人でいっぱい頑張ってくれたじゃないか。」

そう優しく微笑むセリクに、ユイゼの心は救われる。セリクはいつも優しく、自分を許してくれる。そんなセリクにユイゼはまだ甘えていたい。

ユイゼはセリクにギュツと抱きつくとき、堰を切ったように

「ふえーん!」

っと泣き出した。

「ゆ、ユイゼちゃん落ち着いて……だ、大丈夫だよ!」

いつもなら受け入れてヨシヨシし返すセリクだが、今回はすぐ近くにレッコとラトがいる。

レッコが目を見開きニヤニヤしながらこちらを見ているのに気がついたセリクは、恥ずかしきにあわあわしながら、早くユイゼが落ち着くよう、繰り返し「大丈夫」と声をかけた。

「レッコ、ごめんね。」

「無事ならよかったよ。久々の家族水入らずの時間はどうだった?」

「中々刺激的だったよ。」

珍しく軽口を叩くラトに、レツコは少し驚きながらも笑顔を向ける。

「僕も強くなりたいなあ……。」

1つしか違わない姉のユイゼは、自分のために覚悟を持って戦ってくれた。その強さがラトは羨ましい。

「さあ、ユイゼちゃん、まだボスが残ってるよ。」

だんだん落ち着つきを取り戻してきたユイゼに、セリクが声をかける。

「ボスって強いんすか？」

「そうだね。でも、4人いれば大丈夫だよ。」

セリクの微笑みに、レツコとラトは顔を見合わせ期待に胸を膨らませた。強い敵と戦って、いっぱい経験値がもらえる。それは今の2人にとって勲章のような栄誉だった。

「ユイゼちゃん大丈夫？行ける？」

「う、うん……。」

目と鼻を赤くしグズグズいながらユイゼが返事をする。

「ラトちゃん、ごめんね……。また泣いちゃって……。お姉ちゃんなのに……。」

「泣いたっていいですよ。泣き虫だってユイゼさんは僕の強いお姉ちゃんです。」

心の底から出た真実の言葉だった。ユイゼは強くて、かっこいい。自分もいつかそうなりたいと思える存在だ。

ラトは一生懸命涙を拭うユイゼに微笑みかけると、背筋を伸ばし「守ってくれてありがとうございました。」

と最敬礼した。

マール共和国の宿屋で、ユイゼは陽の香りのするベットに倒れ込み「ふー」と安心した息をついた。

外はすっかり日も暮れて薄墨を流したような空にいくつもの星が瞬いている。

そんな夜の気配を窓の外に感じながら、セリクとユイゼはまどろみの前のリラックスタイムに浸っていた。

「ユイゼちゃん、今日はお疲れ様。頑張ったね！」

シャワーを浴びまだ乾かしきっていない髪をタオルで拭きながら、セリクがそう声をかける。ユイゼは猫のようにタオルケットに絡みつきながら

「うーん……。」

と悩ましい声を返す。

「ねえ、セリク。」

「ん？」

「私ちゃんとお姉ちゃんできたかなあ……？」

ユイゼはそう問いかけながら、今日の出来事を振り返っていた。思い出されるのは、慌ててドジをしてどうにもできなくて泣いている自分ばかりで、ユイゼは暗い気持ちになる。

「私ってほんとドジでいつも迷惑かけて……。セリク、ごめんね。」

ユイゼはタオルケットを頭から被って顔を隠しながら、今にも泣きそうな濁った声で謝罪する。

「ユイゼちゃん……。」

セリクはそつと寝転がっているユイゼの隣に腰掛けると、タオルケット越しに優しく頭を撫でた。

「大丈夫だよ。ユイゼちゃん、いっぱい頑張ったじゃないか。」

「でも……。いっぱい迷惑かけた。」

頑張っても上手くない。それどころかどんどん問題を起こしてしまう。ユイゼはそんな自分が嫌いだった。

「迷惑じゃないよ。それにユイゼちゃんが頑張ってくれたから、無事に合流出来たんだよ。」

セリクはユイゼが被っているタオルケットをガバつと引き剥がすと、素早くその顔を覗き込む。そして目を真っ赤にしてポロポロと涙をこぼすユイゼに微笑みかけた。

「ああ……。」

泣いているところを見られてたくないユイゼは慌てて手で顔を隠

すが、セリクは気にせず続ける。

「ユイゼちゃんは確かにちよつと抜けてるところもあるけどさ。でも、僕はユイゼちゃんの頑張ってるよとか、できてるよとか、ちゃんと見てるよ。ラトくんも、みんなだつてそうだよ。だから、ユイゼちゃんがミスしたつて気にしないんだ。」

「みんながそうやって、気にしないで許してくれるのは、みんなが優しいからでしょう?」

ユイゼが涙で滲んだ声で絞り出す。自分はその優しさに甘えてるだけで、本当は何も出来ていない。そんな思いばかりが膨れ上がつて、ユイゼの自信を根こそぎ奪っていた。

「ユイゼちゃん、みんな必ずしもタダでユイゼちゃんを許してるわけじゃないんだよ。」

手放しで全てを許してくれる人など早々存在しない。みんながみんな聖人君子ではないのだ。

「みんなユイゼちゃんを見て、大事なものをもらってるから、ユイゼちゃんのこと認めてるから、許してくれるんだよ。」

「大事なもの?」

自分はいつも与えてもらっているばかりで、何かを与えているなんて考えもしなかったユイゼは、こぼれ落ちる涙をタオルケットで拭いながら、不思議そうに首を傾げる。

「優しさとか、勇気とか、強さとか。ラトくんはユイゼちゃんを見て、それをちゃんと受け取ったから「強いお姉ちゃん」って言ったんだよ。」

自分の意識では計り知れないところで、誰かに何かを与えている。

セリクだつてそうだ。セリクの優しさはいつもこうやってユイゼを救ってくれるが、セリクはユイゼに何かを与えているなんて意識はないだろう。それはユイゼが勝手に受け取ったものだ。ユイゼがそうするように、セリクもラトも、ユイゼから何かを受け取っていた。

それに気づいたユイゼは、暖かい気持ちに包まれて安堵する。出来ないことを嘆きながら、無理して頑張らなくても、ユイゼが何かを与えようとしなくても、みんな勝手に受け取ってくれるのだ。

もつとちゃんとやらないと、頑張らないとと、ユイゼはいつも焦っていた。その焦りがユイゼの足枷になり、ミスを呼び、失敗してしまい、またちゃんとやらないとと焦る。ユイゼはその悪循環にずっと振り回されていた。

でも、もう大丈夫。セリクが気づかせてくれた。

「ねえ……セリク……。私もう無理して頑張らなくてもいいかな……？」

「うん、そうだね。ユイゼちゃんはもう少し肩の力抜いた方がいいよ。」

セリクはそういうとユイゼの柔らかい髪を撫で付ける。ユイゼはそれが嬉しくて、心地よくて、安心できて、ゆっくり目を瞑るとセリクに身を任せた。

頑張らなくても大丈夫。その安堵から、ユイゼのまどろみは強くなる。

「ねえ？セリク……？」

「ん？」

「セリクは私から、どんなものを受け取ってるの……？」

「……！」

ふわふわとおぼつかない思考の中に浮かんだ1つの疑問を、何も考えずにユイゼは口にした。

「ぼ、僕は……。」

セリクは思わず頬を染めてユイゼから目をそらしたが、睡魔に押しつぶされそうなユイゼは気づかない。

「セリクあのねえ……セリクが私から何か受け取って、それでセリクが幸せになってくれたら……嬉しいなあ。」

ユイゼはそう呟きながら温い夢へと落ちていく。

「セリク……ありがとう……。」

そう言うか言わないかのうちに、ユイゼは寝落ちた。

残されたセリクはすやすや眠るユイゼの頭を優しく撫でていた。

「僕はユイゼちゃんが大好きで愛おしくって、ユイゼちゃんが居ればなんだって頑張れるって思うくらい、ユイゼちゃんから元気をもらっ

てるんだよ。」

そう呟きながら、セリクは顔を真っ赤にして俯く。ユイゼが寝ていたらから言えることだった。面と向かつては恥ずかしすぎて絶対無理だ。

「ふにゅ……うん……。」

急に寝返りをうったユイゼに、セリクはビクツと体を震わせ、心臓をバクバクさせた。恐る恐るユイゼの様子を確認すると、ユイゼはむにやむにやと寝言を言うだけで、再び深い眠りに落ちていく。

セリクは安堵すると同時に、そんな自分が本当にくだらなくて、馬鹿らしくて、思わず笑ってしまう。クスクス笑いを押し込めながら、セリクはユイゼに優しく微笑みかける。

「ユイゼちゃん、ありがとうは、僕の方だよ。」

セリクはそう言って愛おしそうにユイゼの頭を撫でつけた。

第87話 魔王ちゃんの願い

「おひさし……ぶり……かな」

突然の声に、私とエルサイスは顔を見合わせる。エルサイスはバツクをガサゴソとあさると、タオルに包んだハート型の石を取り出した。

「すみません……あなたはどなたですか？」

石に封印された魔王ちゃんが、恐る恐る話しかけてくる。

「私は私だよ。どうしたの？魔王ちゃん。」

私がそう応えようと、魔王ちゃんは

「よかった……。私、捨てられてなかった！」

と、安堵の声をあげた。

「魔王ちゃんを捨てたりなんかしないよ。」

私はエルサイスから石を受け取ると、ギュツと抱きしめるように握る。大事な友人を捨てたり、誰かに渡したりするものか。

「どうかしたんです？」

封印された魔王ちゃんは滅多なことでは話さない。話すとエネルギーを使うというのもあるが、敢えて外界との関わりを絶っているような節もあると感じていた。その魔王ちゃんが自ら口を開いたということは、よつぼどのことなのだ。

「この塔は願いが叶う塔なのよね」

魔王ちゃんに言われ、私とエルサイスは時渉りの塔を見上げる。塔は高く、その先は雲に隠れ、てっぺんは見えない。

「まあ……そう言われてるけど……。」

この塔はあの『祈りの教団』が管理している。人間に魔物の血を混ぜ不老不死にし、人の命から万能薬を作る、あの教団だ。

この願いが叶う塔だって、一体本当は何をしているのか わかったものではない。

私は曖昧に言葉を濁した。

「神様、私の願い事、かなえてくれないかなあ」

「願い事？」

「私を死なせてくださいって……」

「!!」

思わず否定の言葉を叫びそうになった私を、エルサイスが肩に手を置いて制止してくる。

ここで「そんなこと言わないで」と言うのは簡単だろう。でも、永遠に生きる苦しみがどんなものなのか、想像すらできない私に、そう言う権利などあるのだろうか。

魔王として追われ、人間に恐れられることに疲れた魔王ちゃんは、自ら封印されることを選んで、外界との関わりを絶った。でも、そのせいで寂しさは埋まるどころか、どんどん深くなってしまったのだ。今は私が居てあげられるが、この先何十年後はどうなっているかわからない。その責任まで持てないのであれば、安易に「死なないで」なんてことは言えない。

私は言いかけた言葉をぐるぐる巻にして、胸の奥に押し込めると、粘度の高いため息を吐く。針金を飲み込んだような気分だった。

うなだれる私の背中をエルサイスが優しくさすってくれていた。ふと、その顔を見ればいつもの優しくそうな笑みが張り付いていて、目が合うと「よく我慢したね」と言うように、ニコツと笑いかけてくる。

上から目線が鼻について、私はその顔を手でグイッと押しつけて遠ざけた。

死なないでとは言えない。でも、魔王ちゃんは寂しいのが辛いだけなのだから「死ぬ」という選択肢は違う気もする。

「ねえ？魔王ちゃんはそれで本当にいいの？」

私がそう尋ねると、魔王ちゃんは一瞬迷うように押し黙った。

沈黙。

「本当の願いは、もう、叶わないから」

魔王ちゃんが悲しそうな声でそう沈黙を破る。

「私、人間に戻りたい。」

魔王ちゃんの願いに、私は心を揺り動かされた。死にたくなんかない、ただの人として生きたい。当たり前前の生と死を持っていることが、どれだけ尊いことなのか私は思い知らされ、その言葉に畏怖さえ

覚える。

「つて、ムリよね！願い事って一生に1度だけだもの。私はもう叶えちゃたし。気にしないで！私は今、こうやって冒険できるだけでも楽しいから！本当よ！」

「魔王ちゃん……。」

空元気なのはすぐにわかった。でも、そうでもしないとやってられない気持ちもわかる。私は少しでも魔王ちゃんを慰めようと、石を撫でて擦ってみたが、冷たい感触が手に伝わるだけで、大した意味はなかった。

「さて、どうしようか。」

再び黙ってしまった魔王ちゃんをタオルに包み直し、バックにしまいなながらエルサイスが聞く。

「うーん……。」

魔王ちゃんのこととは、なんとかしてあげたい。でもそれには、この塔の上を目指さなければならぬ。それは、祈りの教団に関わるということだ。

「祈りの教団はすごく厄介だよ。」

エルサイスが警告してくる。

「わかってるよ。」

それは不老不死の村や、地下工場で散々見てきたことだ。それでも尚、私には貫きたい思いがある。

「エル、私は魔王ちゃんの願いを叶えてあげたい。」

私は魔王ちゃんが好きだった。強くて優しくてかわいい魔王ちゃん、私の大事な友達だ。その心を救ってあげたかった。

「クロがそう言うなら、行こう。」

エルサイスはそう言って微笑む。

いつだってそうだ。エルサイスは私のやることを否定しない。必ずついてきてくれる。そういうところは好感が持てた。

「とりあえず、行こうか。」

私たちはゆっくり塔の入口へと歩みを進める。塔の扉は押すと意外にも簡単に開いた。鍵もないし、見張りもない。

「拍子抜けだな。」

「信者を集めるには、このくらいのセキュリティの方がいいのかも。」
エルサイスの言う通り、幅広く人を集めるには、このくらいの方が
罫にかけやすい。毎回毎回ロツツのような魔王を門番として置いて
いたら、来る者も来なくなってしまうだろう。

「あなたも我が教団に入信を？よい心がけでございませう。さきほどの
方に続き、箱にお入りください。」

中にいた教団の関係者、ドライドという老紳士にそう案内される。
箱に入れば塔のてっぺんまで一瞬で連れていかれ、箱の中で魂を俗世
から分かち、神の世界とチャンネルを合わせる禊が行われるらしい。
何を言っているのか私にはさっぱりだったが、この高すぎる塔の
てっぺんまで簡単に行けるなら悪くはないだろう。

てっぺんには願いを神に取り次ぐ人がいるようで、その人会って願
いを叶えてもらうシステムのようだった。

「誰か先に来てみたいだね。」

案内された箱の前で、エルサイスが耳打ちをしてくる。

「先に？」

「さきほどの方に続きって言ってたからね。」

言われればそうだった。エルサイスは細かいことによく気がつく。
しかし、それがどんな意味を持つのかは彼にも、私にもまだわからな
い。

「あんまり関わりたくないな。」

私はあくまで魔王ちゃんの願いを叶えるために来たのであって、祈
りの教団に入信をする気はない。こんな教団に自ら進んで入信する
やつとは、気が合いそうにもなかった。

ガシヤンと音を立てて、箱の格子戸が勝手に開く、特殊な機械仕掛
けに、エルサイスは興味津々の様子で顔を近づける。

「挟まれるぞ。」

そう注意しながら、私は箱に足を踏み入れた。

「あ。」

「あなたたち！」

「おや？エナさんではないですか。」

先客というのはエナのことだったようだ。

思わぬ遭遇に、私もエルサイスも目を丸くして驚く。

「あなたたちも来ちゃったの？本気？この先は危険かもしれないわよ？」

危険かもしれないではなく、危険なのだ。エナいつもどこか少しズレている。

「エナさんはどうしてここに？」

エナの説明によれば、地下工場でロツツに万能薬を飲まされたエナのパートナーのmanaはまだ見つからないらしい。それは心配だが、とりあえず居場所がわかっている弟のロイをなんとかしようと思い、教団に入信するふりをしてここに来たようだった。

「!!」

「動き出した……!」

突然箱がガタゴトと音を立てて動き出し、ゆっくりと上へと引つ張り上げられていく。エルサイスはうろちよろと狭い箱の中を動き回りどういう仕組みになっているのか調べ始める。

「怪我するぞ。」

私は呆れたため息をつく。錬金のこととなると、エルサイスは夢中になって周りが見えなくなってしまうがちだ。

「これをつけて。」

そう言って、エナがガスマスクを渡してきた。

「なんだこれ。」

エルサイスも私も、怪訝な顔をする。

「いいから、早く。」

有無を言わせぬエナの物言いに、一瞬反発を覚えたが、本能的に従った方がいい様な悪い予感がして、私は渋々ながらもマスクを被る。

次の瞬間、箱の中に白い霧が散布された。

「!?!」

「多分毒はないよ。死にはしないし、肌に触れても大丈夫。」

パニックになりかけた私に、エルサイスが冷静に言う。

見た目だけで何がわかるというのだと思ったが、エルサイスにはそれなりの知識がある。今は自分の思い込みよりそれを信じた方がましだろう。

「あなたの願いは教団が最強の人類を作り出すことあなたの願いは教団が最強の人類を作り出すことあなたの……」

「なんだこれ。」

どこからともなく不気味な声が、箱の中に響き渡る。

「これ、暗示ですか？」

エルサイスがエナに尋ねた。

「そう。今の白い霧は催眠効果を引き起こすガスよ。実際、信者だったって冒険者を探し出して、その時のことを聞いたの。」

「なるほど、それで願い事をすり替えるんですね。」

教団が言う禊とは、そういうことだったのだ。催眠効果で洗脳して教団の願いを叶えさせている。信者はそのコマに過ぎない。

「多分教団が作った錬金術でしょうね。」

「そういうことなら、今のガス吸ってみたかったですね。どんな風になるのか体験したかったです。」

「馬鹿なこと言うな。」

私はエルサイスを小突いて窘める。本当に錬金のこととなるとエルサイスは見境がない。私以上に危ないやつだ。

「最強の人類ってなんだろうな？」

私がエルサイスに聞くと、エルサイスは肩をすくめるだけで何も言わない。知らないと言うより、興味があまりなさそうな顔だ。

「それもだけど、もうひとつわからないことがあって、願いを叶えた人は、どこに……」

塔の外で家族や友人が教団に入ったきり戻ってこないという人たちが、クグツという人物をリーダーにして抗議活動をしている。その戻ってこない彼らの家族や友人たちは、一体どこに消えたのだろうか。

「行きは良い良い帰りは怖い……だなあ……。」

「なにそれ?」

「通りやんせ。童歌。」

急に歌い出した私に、エルサイスが怪訝な目を向ける。危ないやつと思っっているのかもしれない。でもそれはお互い様だ。

「……そろそろ着くかしら……。」

全ての答えはこの上にある。答えが多ければ多いほど知る代償も大きい。それに私は耐えられるのか。

結局「わからない」というのが答えだった。全てはなるようにしかない。

ただ代償を払う覚悟はあった。

箱が止まり、格子戸がガシャンと音を立てて開く。

私とエルサイスは覚悟を持って、塔の最上階へと一歩踏み出した。

第88話 願いを取り次ぐ巫女

「いらつしやいませ。私たちは神様にお仕えする巫女。」

「我々があなた方の願い事をお届けします。さて、どなたからお聞きいたしましょう?」

石畳の参道、赤い鳥居、白い障子の奥に、巫女はいた。巫女の2人は姉妹のようで、服や出で立ちが似ていたが、先に口を開いた妹のコミットの方はボソボソとはつきりしない話し方で、後の姉のクラナはハキハキと気持ちのいい話し方という違いがあった。

巫女の2人は人間のような姿をしているが、中身までそうかはわからなかった。神に仕えているというなら、肉体も魂も神に近い存在なのかもしれない。

では、その神とはどんな存在なのかと言われれば、私には検討もつかない話だ。私はそこで思考を止める。神とは?なんて不毛な問は今ここで問題にすべきものでもない。

「私……いいかな?」

エナが遠慮がちにお伺いを立ててくる。私は一瞬エルサイスに目配せしてみたが、彼はもつと他のことで頭がいっぱらしく、顎に手を当てたまま考え込み、心ここに在らずだった。

私は呆れたため息をつくとき、エナに「うん」とうなづいて返し、先を譲る。

「弟がこの教団の信者になったんです。その弟と会わせてもらえませんか。」

エナの願いに巫女たちは困ったように顔を見合わせた。なんだか気まづそうなその雰囲気にも、私は嫌なものを感じる。

「えつと……ごめんなさい。あなたの言う教団と私たちは直接のかかわりはなくて、ですな……」

コミットが困ったように言う。

「我々は神からの言いつけにより、ここにいて、皆様の願い事をお聞きするだけ。」

クラナがキツパリとした口調で続く。

「つまり、あなた方は教団とは無関係で、別の意思で動いているというわけですね。」

エルサイスが真剣な表情で確認する。

「無関係と言っても、ここに来る手段として教団があるわけだから、知らぬ存ぜぬで通すのは無理があるだろ。」

巫女が祈りの教団について、何も知らないはずはないのだ。

「教団では入信するとあなたたちに会えて、願いがかなえられるって宣伝してるけど……」

エナが困ったように眉を下げながら言う。ここに来れば教団の核心をつけるような気がしていたのに、あてが外れて戸惑っているようだ。

「つまり、利用されてるってわけね。」

魔王ちゃんが突然割り込んできた。エルサイスは慌ててバックから石を取り出すと、手のひらに乗せて巫女たちが見えるようにする。

「ええ、知っています。でもそれも人が願った結果。」

コミットが感情のこもっていない声で返す。

「教団を作った人たちが私たちを利用したいと神様に願ったから、それが叶えられたまで。すべての人の願い事を平等に叶える。それが神様の信念ですから。」

なんだか気持ちが悪い。納得のいかない話だ。教団は元より、この巫女も神とやらも、どこか歪んでいるようで居心地が悪かった。

私はエルサイスが何う。彼は口には手をあて、まだ何か考えていた。

「どう思う。」

「うーん……なんとも言えないね。神様って本当になんなんだろうね。」

エルサイスはそれだけ言うのと押し黙ってしまう。なんの参考にもならなかった。

神様が平等に願いを叶えるというなら、教団が言う「最強の人類を作り出すこと」に対して、私が「最強の人類を作り出すことを阻止すること」と願ったら、一体どうなるのだろう。誰かの願いは、誰かの不幸で、その逆もまた然り。平等に叶えていったところで、どちらか

1つを選ばざるおえない状況のときに、神は一体どんな判断を下すのだろうか。

考えても栓のないことだった。わかったのは神はただ願いを叶えるだけであって、その人を幸せにするものではないということだけだ。それは万能の神としてふさわしい振る舞いかもしれないが、どこか機械的でもあり、違和感があった。

「それはそれとして、あなたの弟さんの件ですが……」

クラナがエナに向き直って話を変える。

「ロイはどこにいるんですか？」

エナは少し期待した目でクラナを見つめ返した。

「あなたはその弟さんに、つい先ごろ再会されていますね。」

「!!」

エナは驚きを隠せない様子で目を見開き「いつ……?」つと呟くように漏らす。

「この塔を守る白いドラゴンをあなたはご記憶ですか？」

嫌な予感が黒い霧のようにまとわりついてくる。吐き気がしそうだ。

「まさか……?」

エルサイスが眉間にシワを寄せながら先を促す。彼もまた、いい気はしていないようだ。

「そうです、あのドラゴンが弟さんです。」

思った通りの結果に私はため息をつく。なんとも救われない話だ。何をどうしてそうなったのか私には皆目見当もつかないが、嫌悪感だけが胸に重くのしかかる。

「え……それって……どういうこと……?」

事態をうまく飲み込むことができないうエナはポカンと口を開けたまま呆然としていたが、みるみる怒りを込み上がらせると

「……ロイ……!!」

と、言い残しこの場を乱暴に去っていった。

どうにもならない怒りをぶつけて去る姿は子供じみていたが、今回ばかりは同情できる。探していた実の弟がドラゴンになって敵対す

る勢力に利用されていたなんて、受け入れ難い事実だろう。

「エナはどうするんだろうな。」

「さあ、僕らじゃどうしようもない問題だよ。」

案外冷たい態度のエルサイスに私は肩を竦める。人を好きにも嫌いにもならない彼だが、不老不死の村での事件からエナとはかなりの距離を置いているようだった。

そういう小さな心境の変化が今のエルサイスを少しずつ動かしている。それが良いもものか悪いもののかは私にはわからないが、ずっと閉じ込められた感情を持ったままよりはましなように思えた。

「次は……誰ですか？」

コミットが目配せしてくる。私はエルサイスに目線で合図を送ると、魔王ちゃんが封印された石を受け取って、巫女の前に差し出した。「私、神様に魔王にされちゃったの。でも、私、魔王にしてなんて願ってないのよ。だから、人間に戻してほしいの!」

事情を聞いた巫女は一瞬顔を見合わせると、少し考えてから魔王ちゃんに向き直る。

「なるほど。あなたにはとつても強い強い願い事があったんですね。だから私たちのところに来ずとも、神様が聞き届けてくださった。」
「気まぐれな神もいたものだ。この神というのはルールが曖昧過ぎる。」

死ぬ間際に「死にたくない」と心から強く願う人は一定数いるだろう。神はその願いを全員叶えてる訳ではない。むしろ、そのまま死ぬ人が大半だ。

平等に叶えると言いながら、そこには選別が存在し、選別があるなら優劣がつく。そうなればそれはもう平等ではない。

強く願えば聞き届けてくれる者と、聞き届けてもらえない者の差はなんなのだろうか。

「あなたの願い事は既すでに1度叶えられているんです。なので残念ながら人間に戻してほしいというのは……」

「でもその願い事は間違つて叶えられちゃったの。だからキャンセル……」

「……本当にそれは叶えられていませんか？魔王になることで叶えられたわけではありませんか？」

魔王ちゃんが一瞬押し黙る。魔王ちゃんがどんなお願い事をしたのか、私にはわからないし、なんとなく聞けない。それはものすごくセンシティブなことと、デリカシーがない私でも、早々聞いてはいけないことだと思っていた。

「神様は結果はどうあれ、最短の方法で皆さんのお願い事を叶えています。それが皆さんにとって多少、不利益なことがあるにしても、結果的には願い事は叶えられるはずです。」

「やっぱり……そっか……そうだよね……。」

叶えられる願い事は1つだけで、その方法までは選べない。願いは叶っても、望んだとおりになるかは別な話。

本で見た悪魔の契約ようだと私は思った。

悪魔は言葉巧みに人を誘惑し、願いを叶える代わりに魂の契約をする。願い事以外、契約に書いていないこと以外は全て悪魔の自由で、結局その人を不幸にして最後は全て奪われてしまう。

巫女たちが言う神も似たようなものだ。むしろ、悪魔のように悪いことをしているという自覚がないだけ、さらにタチが悪いかもしれない。

「そうですね。例えばそちらの冒険者の方々。まだ1度も願いを叶えておられません。」

ガツカリする魔王ちゃんが言う。

「その方の願いを使えば、あなたを人間に戻すという願いは叶えられるかもしれません。」

私とエルサイスは顔を見合わせる。

「どうする？」

エルサイスの問に、私は

「うーん……」

っと難色を示す。

魔王ちゃんのためなら自分の願いの機会を使っただってかまわない。でも、今までの話を聞く限りではリスクが大きいように思える。魔王

ちゃんが人間になったとして、そのあとはどうなるのか。結局魔王ちゃんを不幸にしてしまうのではないかという疑念が拭えない。

「人間に戻っても、あなたの肉体は、あなたの生きてきた年月に耐えられず、自壊をします。それでもあなたは人間に戻りたいですか？」

クラナの間に魔王ちゃんは

「それでも、戻りたい、けど……。」

と、こちらを伺うように呟く。

「魔王ちゃん……。」

「クロはあんまり、それを望んでいないようですよ。」

エルサイスが私の気持ちを勝手に代弁したので、思わず睨む。私が嫌だと言えば、魔王ちゃんはそうできない。そうやって彼女の選択の自由を奪うのは良くない方法のように思えた。

魔王ちゃんは私たちが居なければ、前に事故にあつて魔物にくわえられて、連邦から公国まで引きずり回されたように、何が起きてもどうにもできない。封印されるということは、全てを持ち主に委ねるということと一緒だ。

だからこそ、私は魔王ちゃんに親切でいたいし、何もできないからといって支配もしたくない。

「これはクロの願い事だよ。クロが望むもので無ければ意味がないじゃないか。」

エルサイスがキツパリとした口調で言う。全くその通りの正論で、私はぐうの音も出ない。

支配したくないとはいえ、実際に動くのは私たちで、そのリソースには限度がある。何でもかんでも魔王ちゃんの望み通りにはできないのもまた確かなのだ。

「魔王ちゃん……ごめんね。」

「悲しむ人がすぐ近くにいます。私たちが望むのは、人間の幸せ。悲しみを生むことをおすすめてできません。」

私の発言を後押しするようにコミットが続く。

さつきとまた趣旨が違う気がした。さつきは願いを叶えるのが仕事で、その後の不利益は関係ないと言っていたのに、今は幸福を願っ

ていると言っている。

この巫女も神も矛盾だらけで、どこか信用できない。

「そちらのお2人からは何か？」

クラナが目配せしてくる。

「僕たちは特に……。」

「何も。」

「そうですか。」

私自身は今すぐ叶えたい願いはないし、この先も叶えてもらいたいような願いができる気はしない。そうやって誰かに与えられるよりも、自分で勝ち取っていく方が、私の性格的に向いているのだ。

「私たちはずっとここにいます。願い事があればいつでも来てくださいます。」

コミットが言う。

「しかし、願い事は1人1度きりです。その願い事を今すべきかどうか、それをよく考えてからおいでください。」

クラナが続く。

魔王ちゃんの願いは今すぐどうこうすべきことでもない。少なくとも私の目が届くうちは、一緒にいて守りたいという気持ちがある。その先のことは、その時考えよう。

「では、ごきげんよう。」

「ごきげんよう。」

クラナとコミットがそう言うのを聞くと、私たちは巫女の間を後にした。

第89話 神を信じるか？

限りなく広がる青い空と、エアスプレーで吹き付けたような白い雲のコントラストが美しかった。

冒険者になって僕はこれまでに様々な景色を見てきた。黎明に白む朝の海、風に吹き荒む風車列、光の粒を反射する湖。それらと同じく、この景色も、きつとクローバーの心に残るのだろう。

自分の心には残らないと僕は知っていた。目に映る景色は景色でしかなく、心を満たす何かではない。空が青いのは光の波長の反射だし、雲はただの水蒸気の塊でしかない。

クローバーをちらりと見れば、脳に焼き付けんばかりに目を見開き「わあ……。」と感嘆の声を漏らしている。それが見ただけで、僕は満足だった。

僕らは下山を目指して、ここまで来るのに使った箱へと向かう。さして苦労はなかったが、同時に成果もなかった。

魔王ちゃんの願いは叶えられず、教団についてもほぼ謎のまま。神とは何なのか、その問の答えもないし、むしろ謎はもっと深まるばかりだった。

「神様ってなんなんだろうね。」

「わかんねーなあ。でも、あんまりいいものには感じなかったな。」

クローバーはそう言っって苦い顔をする。

「僕もだよ。」

巫女の説明には矛盾点が多いように思えた。

宇宙には果てがない。広がるその先がどうなっているのか、誰もわからない。それは宇宙に果てがないというより、人の思考に限界があるということだ。宇宙の果ては人の頭の中にしか存在しない、ただの概念だ。

神の存在も似ている。僕が思う神とは、そういうもつと概念的なものに近い。目に見えないし、理解も超えている存在。

だが、巫女の言う神は、確かにそこに存在していて、人々の願い事を叶えている。そこが既に胡散臭い。

「クロは神様を信じる?」

僕の問にクローバーは呆れ返った目を向ける。

「くっだらねえ。私が信じるのは私だけだよ。」

「だと思った。」

僕は思わず笑ってしまう。

「そーいうお前はどうかんだよ。」

「僕? うーん……。」

難しい質問だった。信じているといえはいるし、ないといえはない。

「僕はさ、錬金術師なんだ。」

「知ってる。」

クローバーが何を今更というように鼻を鳴らす。

「錬金術は科学、一定の法則に沿わなければ成り立たない。随分前に質量保存の法則は話したでしょ?」

クローバーが「うん」とうなずく。

「1からは1だけしかできない。0から1、1から2は無理って話だろ?」

ほぼ完璧な回答に、僕は微笑む。

「その法則を作ったのは誰なんだろうって。」

三角形の3つの角を合わせると180°になるのも、植物が二酸化炭素を酸素にかえるのも、DNAが螺旋状なものも、全て最初からそこにあって、あとから人が発見したにすぎない。

「僕ら錬金術師は、元からそこにあつたものの中から法則を発見して名前をつけていくだけで、何かを生み出してるわけじゃない。」

「つまり、その法則を最初に生み出したやつが……」

「そう、神様ってものなんじゃないかなって。」

僕の錬金術は、誰かが、それこそ神が作った箱庭の中で、小さな疑問から法則を知り分解しそれ再構築しているだけだ。それは神が作った物語の一遍を見ているに過ぎない。勉強すればするほど、知識が増えれば増えるだけ、その機会に触れることも多くなった。

「僕は錬金術の中に神様を見るよ。でも……」

「でも?」

「あの巫女たちが言う神様は信じられないね。」

美しい化学式が僕に神の存在を教えてくれた。だが、巫女たちが言う神は、それとは真逆のもののように思える。法則も規律もなく、ふわふわとした感情論と、公平を欠く平等。

「不安定すぎるよな。なんだか、気持ちが悪い。」

クローバーの言う通りだった。生死を決める願い事をするには、信用が足りなすぎだ。

「クロは神様を信じないの?」

「私はエルみたいに、そんなもの感じたこと無かったからなあ。」

クローバーはそう言いながら、吹き荒ぶ風に髪を押さえ目を細める。

「この世にはさ、どうにも出来ない力が存在してるっていうのは知ってる。」

運命とか、宿命とか、そんなような言葉でしか言い表せない事柄は無数にあつて、それらを神の仕業と言う者もいる。

「でも、私はそれは結局人の業が集合してそうなっているのであって、神とかいう1人の意思でどうにかできるものじゃないと思うんだ。むしろ、そんな強権許したくない。」

クローバーはいつでも自分の人生を自分のものとして生きていた。だからこそ、神にその先を決められているという話は、信じたくないのかもしれない。

それは彼女の自信だ。自分の全ては自分が掌握している。決定権は自分にしかない。

そう思うことは簡単なようで実は難しい。自分に対して全ての決定権を持つには、責任も不利益も全部自分が持つという覚悟が必要だ。それは全ての結果を誰のせいにも、神のせいにもできないということなのだ。

クローバーの強さに、僕は目を細める。眩しいくらいに美しい。でも、どこか脆さも感じる。

「クロは少しは信じてもいいと思うよ。」

「神を？」

怪訝な顔をするクローバーがおかしくて、僕は笑う。これっぽちも信じる気がない。

「ないない。神なんてものより、お前のこと信じた方がよっぽどマシだよ。」

「え？」

急なクローバーの発言に僕は面食らって口をポカンと開けたまま固まってしまう。

「え？」

僕の動揺に驚いて、クローバーは首を傾げる。

「私、なんか変なこと言ったか？」

「え、いや……。そんなこと言われるとは思ってもなかったから。」

なんだか変な気分だった。心の表面がくすぐられたようなモゾモゾ感がある。

訝しがるクローバーに、僕は背を向け先を急ぐ。

クローバーの言葉が嬉しいわけではなかった。ただただ本当に驚いたのだ。自分にそんな信頼が向けられるとは思ってもいなかった。

嘘と虚構で塗り固めていた頃は、そうやって寄りかかってくる人はいっぱいいた。それが僕の生存戦略だった。僕の演じる僕を信頼した人を、利用して生活を成り立たせる。表情、しぐさ、言葉はすべてその道具だった。

しかし、クローバーの前ではその戦略が通用しない。彼女は僕の嘘を瞬時に見抜く。僕はそれが心地よくて、少し苦手だ。クローバーの前では僕は僕でしかない。その何も取り繕っていない素の僕が、信頼を得られるなんて信じられなかった。

チラリと目だけで振り返り盗み見れば、クローバーがなんでもないような顔で僕のあとをついてくる。

こんな僕を信じるより、神を信じた方がいい。そう言い出したくなったが、クローバーは自分のことを自分が決めたことを信じているのだ。僕が何を言っても変わらないだろう。

僕はせめて、クローバーの信頼を裏切らないように気をつけたいな

と、畏れながらもそう思った。

第90話 最強の人類

先に飛び出して行ったはずのエナが箱の前で立ち往生していた。私たちが近づくと、エナは困ったような顔でこちらを振り返り

「上がってきた時みたいにか動かないの……」

と呟く。

私はエルサイスを伺った。この箱もきつと錬金術の一種だろう。専門の彼なら何か分かるかもしれない。

「ちよつと失礼します。」

エルサイスはエナを押しつけて箱に入ると中を入念に見て回る。何に使うのかわからないレバーを左右に動かしたり、ボタンを押したりするエルサイスを、私はドキドキしながら見ていた。

未知のものに対して度胸は、私よりエルサイス方がある。エルサイスは知的好奇心が旺盛だ。新しいもの、見た事のない機械、本、細工、そういうものに臆することなく近づいていく。彼は人よりもそういうものに対しての興味関心の方が高かった。

「うーん、壊れてはいないようですね。多分これを動かすためのエネルギー源がなくなったから動かないんだと思います。」

箱から出てきたエルサイスが口を手をあて考えながら言う。

「エネルギー源って？」

「さあ？そこまではわからないよ。」

私の質問にエルサイスは肩を竦める。彼だってなんでも知っていない訳ではないのだ。知らないからこそ、興味があるのかもしれない。「でも、さつきも言ったように壊れた訳では無いから、誰かが意図的にエネルギー源の供給を切ったって考えるのが妥当かな。」

一体誰が？の答えはすぐわかった。

「おや、あなた方はどちらかでお会いしましたね。」

声の方を振り返れば、祈りの教団幹部で魔王のロツツが物陰から現れたところだった。

「てめえ……。」

「クロ。」

悪態をつく私の肩をエルサイスはギュツと掴んで制止してくれる。エネルギー源を断ったのはこいつの仕業だろうと推測する。私たちを足止めして、今更何を話すことがあるのだろうか。

教団は滅びの村の地下工場で、人の命を使って万能薬を作っていた。私はそのことも、その施設の責任者であったロツツのことも許していない。何度だって全力で否定し続ける気でした。

「ロイはどこ？ね、白いドラゴンは!？」

私とロツツの間に割り込むように、エナが詰め寄る。

「まあ、そう焦らないで。皆さん、もう巫女様へのご訪問はお済みで？」

涼しい顔でそう聞いてくるロツツに対して

「済んだわよー!」

とエナが食い気味に返す。

悪役なら悪役らしく悪い顔をしてればまだマシだった。しかし、このロツツというやつは、涼しげな優しい笑みを浮かべながら、当たり前のような顔で、おぞましいことをやってのけるやつなのだ。それがすごく腹立たしい。自分たちが何より正しいと思いついでる悪こそ、一番タチが悪い。

エナが腹立たしそうにロツツに詰め寄る気持ちはわからなくはない。ただ、そうやったところで相手の思う壺だ。ロツツはわざとこちらの神経を逆なでし、乱れた隙を突いてくる。エルサイスはそれがわかっていのだろうか。だから、私の感情を抑えてくれているのだ。

相手の術中のはハマりたくない。だけど私一人で自分の感情を制御するのは難しかった。私は元々直情的な性格なのだ。この教団のやり方とはすこぶる相性が良くない。冷静なエルサイスが居てくれて助かった。

「では、ご案内しましょう。こちらへどうぞ。」

ロツツはそういうと、塔内部へと私たちを招き入れた。

教団の研究室といわれる場所に連れてこられた私は、ゆっくりと辺りを見回す。

机が並び、その上には実験器具のようなものが乱雑に置かれ、床には書類が散乱してた。「ぎゃー」という鳴き声に振り向けば、部屋の隅に置かれた檻の中に得体の知れない生き物が閉じ込められている。部屋を歩き交う人は少なくないのに、気持ちの悪いほど静かだった。「ここは我ら教団の研究室。ここで我らは最強の人類を作っているのです。」

「最強の人類?」

私とエナは、顔を見合わせて首を傾げる。エルサイスだけが、ロツツを見つめその口から話される言葉の真意を汲み取ろうとしていた。「我ら人類は太古の昔から凶暴な魔物たちに常に生活圏を脅かされてきました。考えてもみてください。この世界は、産業も発展し、一見希望に溢れていますますが得体も知れない、神の存在によつてその発展が妨げられている。」

「妨げられてるって、魔物?」

話の流れからいけばそうであろう。でも、ロツツは首を横に振る。「違いますよ。煙です。煙を使わないという教え、それが人間の力を奪っているのです。」

何を言っているのかさっぱりわからない。私はエルサイスを見上げ、知恵を求める。ロツツの言葉に考え込んでいたエルサイスは私の目線に気が付くと、目を合わせほんの少しだけ肩を竦めた。

「よくわからないよ。でも、連邦の教会のルーラさんが、火を使つてはダメって言つてたでしょ?あれと関連はありそうかなって……。」

彼はそうごによごによと呟く様に言うと、口に手を当てたまま思考の渦へと沈んでいく。

教会では、煙を起こすことは禁忌とされており、どうしても火を使う場所には護符を置くというルールがあった。私も修道士の証を手に入れるため、その護符を連邦の住民に配つたことがある。

それがどういう原理で、人間の力を奪つて発展を妨げているのか、私には皆目見当がつかない話だった。

ただ、私は神が力を奪っているのではなく、私たち人間がまだ理解が出来ない領域なのではないかと思うのだ。エルサイスのような錬

金術師は、私よりもその領域が少し広い。神が作った法則を自分で見できる力がある。でもそれは神が作った箱庭の中で、小さな花の1つに正しい名前をつけているようなものだ。

全て知っている神が、なぜ人間にそれを開示しないのか、そういう苛立ちのようなものを、ロッツや教団は神に抱いているのかもしれない。

「……まあ、冒険者にはわからないでしょう。」

ロッツが諦めたように言う。こんな狂った奴らの話なんてわかりたくもないと、私は思考を遙か彼方に投げ飛ばす。エルサイスだけが、石にかじりつくように眉間のシワを深くしながら考え込んでいた。

「では、話をかえて。ひとつ質問します。魔物の存在についてどう思いますか?」

「どうって……?」

あまりにも抽象的過ぎて、何とも答えられない。そんな私たちを見かねて

「人間にとって魔物は敵。あっていますよね。」

とロッツが断定的に言う。

そうとも限らないというのが私の見解だが、多くの人間はそう思っているのかもしれない。連邦のやり方を見れば、一目瞭然、今は魔物を断つのが正義という風潮だ。

「多くの人にとっては、そうかもしれないですね。」

エルサイスがボヤけた返しをする。彼は本当にこういうのが上手い。主語を曖昧にしたり、省略したり、あとからどっちとも取れるような言い方をしたり。それに助けられることもあるが、口論の際私がボコボコに言い負かされるのは癪だった。口が上手いやつは本当に苦手だ。

「同じく、魔物にとっても人間は敵。実は、新人類たる魔物に世代交代せんと、人類は滅亡に向かっていてと考えられませんか?」

人間と魔物は敵同士で、種の保存のためお互いを潰し合っている。そして魔物は人間より力があって、しかも不死だ。圧倒的に人間側が

不利であり、滅亡の可能性がある。

「錬金術の知恵と神の恩恵を受け、生き延びてきた我々ですが、それでも衰退の一途を辿るばかり。私は、魔物の存在によって滅亡へ向かう人類の未来を、変えたいと願ってきました。そこで考え出したのが、最強の人類です！」

如何にも危険そうなその響きに、私は眉を寄せる。無邪気な子供のように笑うロッツが、私の不安をさらに駆り立てた。これは年端のいかない小さな子供がノートに落書きしている話ではない。大の大人が真剣に大真面目にやっているのだ。ここまで本気だと嘲笑すら出来ない。

「いえ、人類すら超える最強の生き物です。新たな世界に君臨する、魔物でも人でもない、知性も力も最高の存在。ここはそういうものを生み出す研究室なのです。」

ロッツはそう言って、自慢げに笑った。

第91話 教団の研究

今の人間を凌駕する知性と力をもった新しい人類。そんなものを作ったところで、一体何になるのか、僕には理解不能だった。

ロツツが言うように、魔物と人間の間に種の保存戦争があるとして、そこに最強の人類を人間側が作ったところで、結局は魔物、人間、最強の人類の三つ巴になる未来しか見えない。

そうやって弱肉強食の世界線を生きている限りは、強い生物を生み出したところで、生み出した側がそれに淘汰されるという本末転倒なことになるだろう。

相手より強い武器を持てばいいというような考えは所詮人間の浅知恵に過ぎない話だ。そんな愚鈍な思考しかできない者たちは、その武器に振り回されるのがオチ。

この教団の人たちからは、錬金術や科学、数学に対する畏怖の念というものが一切感じられない。そこにある奇跡の法則に尊敬などなく、ただただ利益を得てそれを利用することしか考えていない。結局それは、エンジンが作った素晴らしい機械人形を戦争の道具にしようとする、汚い国家権力たちと何もかわらない思想だ。

自分の本当の父親で師匠でもある偉大な錬金術師のことを思い出す。彼は恐ろしいほど純粋に錬金術を愛していた。好きな物を楽しんで、やってみたい、作ってみたい、どうなるか知りたい。そんな興味関心だけで、便利な道具も危険な兵器も生み出した。

それは正に彼が狂人だから出来たことだ。本物はそんな純粋無垢な狂人にしか作れない。僕はそう思うのだ。

僕にもその狂人の血が流れている。師匠と同じ純粋無垢の錬金術師の血が。

そうだとしても、最強の人類なんてものに、僕は興味を惹かれない。僕はまだまだ狂人にはなれそうにもなかった。

「エル、どう思う？」

クローバー声で、僕の思考は引き戻される。

「何が？」

「最強の人類について。」

なんとも曖昧な質問だ。しかし、それが具体的であったとしても、僕が言えることは少ない。

「僕はあまり興味はないよ。ただ、出来るか出来ないかで言ったら、多分出来る。」

「エルなら？」

「僕でなくても。」

僕は研究室の隅に置かれた檻に目をやる。

「合成獣、キメラって知ってる？」

「神話に出てきた化け物？」

「語源はそうだね。」

クローバーは案外博識だ。キメラの語源はライオンの頭、山羊の体、蛇の尻尾を持った、神話上の生物キマイラからきている。

「キメラっていうのは生物学上では同体異質の存在。ある生き物と、それとは別の生き物の遺伝子を掛け合わせてできる、新たな生き物のことだよ。」

馬の体に鷲の頭を持つグリフォンや、同じく馬の体に白鳥の翼を持つペガサスもキメラと言えるだろう。ただそれは神話上、空想の中の生き物に過ぎない。でも、今の錬金術の技術があれば、それを現実に創り出すことが出来ないという訳では無い。

「つまり、最強の人類とやらは……。」

「簡単だよ。知性を持った人間と、力を持った動物あるいは魔物を錬金術で合成すればいいんだ。」

クローバーの表情がみるみるうちに固くなっていく。無理もないだろう。僕だっていい気はしない。

そもそも生き物を改造し、新たな生き物を生み出す行為は禁忌とされている。出来るか出来ないかではない、やらないという選択肢を選べるかどうかなのだ。

「あなたの弟さん、ロイクくんは、教団へきて、強くなりたいた願われました。弱くて、いつもお姉さんに守られてた彼。」

ロッツが話し出すと、クローバーはますます顔を歪ませた。結末の

予想は大方つく。予想できるからこそつらいのであろう。

「彼は何者にも守られない、自分の身は自分で守れる、そのうえ、愛する人を守りたい強い人間になりたいと願ったのです。」

そう願うことは素晴らしい志だ。

「そう、私たちの技術でロイクくんはドラゴンになったのです。」

でも彼は、やり方を間違った。

僕の隣でクローバーが、諦めたような深いため息をつく。

「なんてことを……」

エナが青い顔で呟く。

こうなってしまったことの一因はエナにもある。誰かを守ることが結構なことだ。でも、そうして守る一方で、その誰かを弱い者として扱ってきた結果がこれなのだ。

『弱くて何も出来ない無力な君を守ってあげる』そういうメツセージをエナから受け続けた弟のロイの自尊心はボロボロだっただろう。

エナは程度や形が違えど、僕を虐げた育ての親と一緒だ。僕の親は殴る蹴る罵倒するで僕から抵抗する力と感情と自尊心を奪った。それは即効性があったが、わかりやすいだけまだマシかもしれない。エナは、エナ自身もロイ自身も気づかなかないうような真綿で、ロイの首を絞め続けた。かわいそうだから、出来ないから、弱いから、守ってあげる、代わりにやっであげる、そんな優しい言葉をまとった薄い毒が、徐々にロイの心を蝕んだ。

それがエナの愛情だったのかもしれない。でも、ロイがそれに苦しんだのは確かだ。苦しんだ結果、安易な手段に出て、力を手に入れた代わりに、人間としての姿を失った。

誰が悪いわけでもない。ただ少しボタンをかけ間違えたただけだ。こうしたことは誰にでも起こりうる。

だからこそ、僕はクローバーと同じ目線でいるか常に確認し合う。面倒で、大変で、煩わしいが、必要なことだった。言わなくてもわかるなんてことはない。わかった気になることが何より危険なのだ。

「まだまだ研究の余地はあり、最強の人類というわけではありませんがね。人類のために、多少の犠牲は止むを得ません。すべて弟さんの

強い希望でしたしね。」

犠牲になった上に、失敗作扱い。さすがにロイを哀れに思う。

「ご心配無用。すぐにあなた方も同じように最強の生物の研究のための材料になるんですよ?」

「はあ?」

ロツツの不穏な発言に、クローバーが不快な返事をする。

「巫女様に願いを済ませた人は、一部を除いて、研究の糧となっていただいてるのですよ。」

「願いを叶えたやつが戻ってこないってのはそういうカラクリか……。」

「皆さんここでキメラの材料になってしまったのですね。」

僕の言葉にクローバーは顔を歪ませる。彼女にとっては、なんとも恐ろしくおぞましい研究だろう。でも、僕にとっては無い話でもない。未知なるものを生み出したい、そういう野望を持っている錬金術師は少なくない。しかしそこで、やらないという選択をできるか、それが別れ道だ。しかし、やりたいと思つて実際にやる人がいることに、特段驚きはしない。

「それではあなた方も研究材料になっていただきましようか。」

ロツツの言葉にクローバーがドミネイトウオーソードを抜く。剣柄に赤いコアがハマっている強化したばかりのものだ。

「そんな簡単にあなたの思い通りにならないわ!」

エナもそう言つて剣を抜く。

「野蛮な。すぐに剣を抜くのですね。」

ロツツが軽蔑した眼差しを2人に向けるが、クローバーもエナも怯みさえしない。静かに構え、両肩からは怒りの炎が溢れて見えた。

「死ぬか死なないか、ギリギリの線で、存分に苦しんで頂きましたよ。まずは弟さんに会いたいということでしたから、願いを叶えて差し上げようと思ひましてね。」

ロツツはそう言うと、奥の廊下へと消えていく。

「待て!!」

クローバーとエナがその背中を追いかける。

この先にはきつとあのドラゴンがいるだろう。勝てるのかと問われれば、わからないというのが僕の本音だ。むしろ、勝つていいのかさえわからない。エナの弟ロイはどうなるのか、そんなことが一瞬頭をよぎったが、すぐに考えるのをやめる。僕にはどうしようもできないことだ。

フアントムロットIを握りしめる。向かってくる敵は敵であつて、それ以上でもそれ以下でもない。僕はただ、クローバーと連携を紡ぐだけだ。

チラリとクローバーを見る。金色の瞳に宿る光は怒りか悲しみか、はたまた最強の人類と戦う興奮か。

真つ直ぐ前を向くクローバーに続き、僕は暗い廊下を駆け抜けて行った。

第92話 ドラゴン戦その1

この痛みはどこから湧いてくるのだろうか。

暗い廊下を走りながら、私は胸を押さえる。少し走ったくらいでは、息切れなどしない。でもなぜか息苦しい。

ロイはかつての私だ。

どんなに努力して力をつけようとも「女だから」で認められず、いつでも守られる側であることを求められた。それは結局守る側の都合でしかない。私は相手の自尊心を満たすための藁人形で、相手に私の実体は見えていない。

アジールを思い出す。彼は正にエナだ。騎士時代はいつも傍で私を庇い守ってくれたが、結局それは私をか弱い者にしておきたかっただけで、私を認めてくれていた訳では無い。むしろ、積極的に貶めていた。それに気がついた時の絶望は、騎士を辞めるように言われた時よりも深かった。

誰も自分を見てくれていなかった。そんなあの時、誰もが認める強さが手に入るとしたら、きっと私は飛びついたのである。ロイのように。

前を走るエナの背中を切りつけたくなる衝動に駆られ、私はギョツと剣を握りしめる。

そんなことをしても、昔の私は救えない。エナとロイは、アジールとも私とも無関係だ。過去の自分を重ねたところで、所詮は他人。八つ当たりにはかならない。

「クロ、そろそろだよ。」

エルサイスの声に、私は顔を上げる。廊下の先が白み始め、もうすぐ外に出れるようだ。

「ドラゴンだね。」

「ああ。」

ロイの気持ちはわかる。だが、自分で強くなる努力を怠り、外に力を求めたのは、結局心が弱いからだ。私も自分自身にもあるその弱さと戦わなければならない。

「いつも通りクロが壁で、僕が援護するよ。」
「うん。」

本当の強さは自分の弱さを認めた上で手に入るのだ。
勢いよく扉を開ける。

ここに来るまで使った箱があつた場所と同じ、テラスのような広い空間に白いドラゴンが鎮座していた。白い鱗状の爬虫類のようなトゲトゲした体、棘の先には毛細血管のような赤い模様が浮き出ている。前に塔の外で見たそれと全く同じだった。

「さあ、ごらんなさい、我が最高傑作を！」

ドラゴンの前で、ロッツが朗々と叫ぶ。

「強くて知性のある生物、我らが研究結果を！」

自慢げに笑みを浮かべるロッツ見て、吐き気を覚える。確かにロイの心は弱かった。でも、だからといってそれを利用した教団が悪くないわけではない。むしろ、そうやって弱い者を食い物にするようなやり方は気に食わない。

「まだコンパクトさには欠けますが、地上最強の名はダテではありませんよ！」

「こんなものが地上最強なんてバカバカしい。」

人の弱さが生んだものに、負ける気はしない。

私の横でエナが厳しい顔で剣を構えていた。姿形はドラゴンだが、中身は自分の弟だ。きつと迷いも葛藤もあるだろう。

私がエナやロイに出来ることはない。ただ私はドラゴンを倒して、過去に同じように力を求めようとした私を乗り越えたいだけだ。誰のためでもない。私はいつだって私のために戦うのだ。

「さあ！行きなさい！」

ロッツがそう号令をかけると、ドラゴンは青い翼を大きく広げ構えた。

「ロイ！私よ、姉ちゃんよ！」

エナの悲痛な叫びは、ドラゴンの激しい咆哮によってかき消されてしまう。

「来るよ。」

「距離5m、単体パターン、属性不明。攻撃開始。」

咆哮に負けない声量でエルサイスにそう返すと、私はドミネイトウォーソードをかざし、ドラゴンに斬りかかった。

バツ印を描くように、私はドラゴンの体を激しく2回切りつける。確かに肉を切った感覚が手に伝わった。クロススラッシュはヘイトがつく特別なスキルだ。ドラゴンの目が赤く光りゆっくり私を捉える。成功だ。どこからでもかかってこい。

エナが私よりも先に突っ込み、戦っていたがあまりダメージを与えられていないようだった。エナとの共闘は前回ドラゴンに会ったとき以来だが、その頃に比べれば私もエルサイスも随分強くなっていて、彼女のヘマをカバーすることくらいはできた。

「あんまり固くはなさそうだね。」

エルサイスはそう言いながら、ハイオーラで私とエナの攻撃力を上げる。

「攻撃予告あり。」

ドラゴンが咆哮しながら顎が壊れたおもちやのように大きく口を開け、私に向かって牙を剥く。襲いかかってくる白く鋭い牙を私はファントムガードで防ぐ。重い。潰れそうになる私をエルサイスがウォールで援護してくれた。

耐えている私の横から、エナが飛び出し流水剣を叩き込む。さつきよりましなダメージを与えていた。

「魔法有利かも。」

エルサイスにそう言われるが、残念ながら今セットされているスキルは物理攻撃しかない。

盾で牙を弾くとシールドストライクを唱えて、ドラゴンの防御力を下げる。ないならあるものでなんとかすればいい。

私は不自由だ。この世界は規制だらけで、ステータスには上限があるし、スキルにだってコストが必要だった。でもこれがエルサイスの言っていた世界のルールなのだ。誰が作ったのか、神が作ったのかわからないが、払わなければならないリソース。ならば私はその中で最適解を見つめるだけだ。

「全体攻撃予告あり。」

「魔法かな？」

エルサイスはベールを唱えて攻撃に備えた。ドラゴンが再び口を開ける。黒い炎が喉奥に溜まっているのが見えた。

「来るぞ！耐えろよ。」

私はエルサイスを庇うように前に立つ。ドラゴンが背中を仰け反らせ勢いよく息を吐き出すと青紫色の不気味な炎がテラス全体を這うように広がる。

「ぐっ……。」

「きやあ!!」

後ろでエルサイスとエナが呻く。防御の薄い彼らにはキツイ攻撃だっただろう。吐き出される炎を直接受け止めた私も無傷では居られなかったが、膝について止まることはできない。

「回復優先。」

私はそう言いながら、ドラゴンにシュヴアリックブレードをお見舞する。聖騎士のスキルの中でもとびきり攻撃倍率の高いスキルだ。流れるように剣を振れば、ドラゴンが悲鳴をあげる。

「いけそう。」

いい手応えだった。このまま押し切れそうだと思ったのも束の間。

「クロ！尻尾！」

「ん？」

エルサイスの声に振り向けば、地面からドラゴンの尻尾のようなものが生えていて、こちらに攻撃予告を出していた。

「かまうもんか。」

あと一撃でいける。私は剣を構えると高く飛び上がりドラゴン本体に斬りかかる。片手剣印がついたカレッツジブレードでドラゴンを一刀両断。

するはずだった。

第93話 ドラゴン戦その2

クローバーが空高く飛び上がる。空を描く直線と曲線の軌跡は正確な角度と質量で、ドラゴンに確実なダメージを与える。

僕はそう確信していた。

クローバーが放ったカレッジブレードはキンッ甲高い金属音とともに弾かれる。

「っ!？」

「クロ！落ち着いて。」

予想外のことに目を見開く彼女に僕はそう声をかけながら、僕自身の心も落ち着かせた。戦闘にイレギュラーは付き物だ。確実に仕留められると思っけていてもそうはいかないことだつてある。

とは言え、僕だつてこれで決まると信じきつていたわけで、あてが外れて多少なりと動揺したのは確かだつた。

「攻撃が効かない。」

クローバーの報告のあと、エナがドラゴンに突進していつて、風迅剣を当てる。クローバーの時と同じく弾かれてしまう。

「クロ、一旦下がつて回復しよう。」

僕がそう声をかけても、クローバーは聞く耳持たず通常通りの攻撃を繰り返していた。苛立っているのが手に取るようにわかる。冷静さを欠いたクローバーは何をしでかすかわからない。ただでさえイレギュラーなのに、ここで更なる問題を抱えるのは危険だ。

アルカナを唱えて全員を回復しながら、僕は全体の状況を確認する。

最初ドラゴンには全ての攻撃が通っていた。その後何らかの作用で攻撃が通らなくなった。何がスイッチになったはずだ。それがなんなのか解き明かす必要があつた。

杖をかざし、呼吸を深くする。落ち着け、よく見ればわかるはずだ。

ドラゴン、クローバー、エナ、ロツツ、それぞれの位置を確認しながら、1つ1つの可能性を考えていく。残りのHPか、特定の属性攻撃か、1回の攻撃のダメージ量か、可能性を思い浮かべては状況を照

らし合わせ、合わないもの切り捨てていく。中々時間のかかる作業だ。

ドラゴンは激しく咆哮するとクローバーに噛み付く。

「ぐっ!!」

右肩をズブリと噛まれたクローバーは痛みにも呻いた。グジュツという嫌な音とともに赤黒い血が吹き出す。

「クロー！」

焦ってはいけない。あのくらい攻撃を食らってもクローバーなら倒れることは無いだろう。しかし、放っておいていい状況でもない。

「ちっ……くしょ……。」

ボタボタと血をこぼしながらクローバーが毒づく。剣も盾も構えのまま、戦意をまったく失っていない。それが彼女の強さだった。

「エル！わかったか!」

「まだ分析中。」

物理も魔法も効かない、デバフも効果なし、まったくの無敵。時間経過でそれが解除される気配もない。

「クロ、あと少し時間ちようだい。」

「どれくらい?」

「30秒。」

「わがままめ。」

クローバーはそう揶揄しながらも楽しそうに笑った。

痛みが、死にそうになる戦いこそが、彼女の生を燃え上がらせる。クローバーは死にたいわけでない。むしろ人一倍生きることには貪欲だろう。でも死に近づかなければ生きていることを感じられない。生きるために死にいく。そんな矛盾を抱えて彼女は戦っていた。

クローバーは目を閉じ、体の前で剣を真っ直ぐ立てる。それが彼女の奥の手の合図だった。

クローバーのHPは残り3分の1ほど、一撃を食らえば倒れてしまおうだろう。

「行くぞ。」

そう言って、目を開けたクローバーの金色の瞳が、ドラゴンを捉え

る。

戦闘中熱くなり過ぎてなりふり構わず暴れ回るクローバーが赤い火の玉なら、今のクローバーは青い火の玉だ。恐ろしく落ち着いていて、でも赤い時と同じくらい感覚が冴え渡っている。

先に動いたのはドラゴンだ。トゲを持った尻尾でクローバーを尻払おうとしたその瞬間、クローバーは目にも留まらぬ速さで、振り下ろされた尻尾をくぐり抜けるようにかわし、その後ろからカウンターを入れる。

回避、avoidだ。それがクローバー特有の技だった。

それを初めて見たのは、僕がクローバーと冒険を始めて間もない頃、塔の外でカタキグマに会った時だった。その頃の僕達は今のようには装備もスキルもなく、かなり不利な状況でギリギリの線で戦っていた。あと2、3回攻撃すれば倒せる。でも、こちらはあと一太刀でやられてしまう。そんな状況の時に、クローバーはその技を使った。

「0.2秒の軌道を読む」とクローバーは僕に説明した。よくよく話を聞くと、敵の動きがコマ撮りのように0.2刻みで2秒先まで見えるらしいのだ。それはあくまで僕がクローバーの説明を聞いた話をなんとなくまとめただけで、実際にクローバーにはどう見えているかわからない。でも彼女は実際にそうやって敵の動きを先読みし、攻撃をかわしカウンターを入れている。

しかし、その攻撃はドラゴンの尻尾にも効果が無かった。

「ドラゴンに攻撃が入らなくなったのは、その尻尾が出てきてからだ。」

僕はウォールでクローバーのHPを回復させながら呟く。風印が付いていないので、回復量は雀の涙ほどしかない。焼け石に水だ。

「尻尾が何か関係してるのは確かんだけど……。」

ドラゴンが羽ばたき激しい風を巻き起こした。クローバーはそれも回避すると、カウンターを食らわせようとドラゴン目掛けて剣を振りかざす。

目の端で、つぼんでいた尻尾の先が花のように開くのが見えた。僕の頭に閃きの神が舞い降りる。

「クロ！今だ！尻尾を狙って！」

僕の叫びに、クローバーは驚きながらも華麗に体勢を変え、尻尾目掛けて剣を振り下ろす。一撃だった。尻尾はユラユラと左右に揺れたかと思うと、パタリと倒れ、黒い霧になった。

「入った！」

「こつちも？」

エナがドラゴンに向かって流水剣を放つと、ドラゴンが悲鳴をあげる。

「やつぱりスイッチはあの尻尾だったんだ。」

「でも、尻尾だって最初は無敵だった。」

「先がつぼんでるときは、固くて攻撃が通らないけど、先が開いてるときはダメージを与えられる。」

「なるほど。」

アルカナでクローバーを回復する。もう奥の手を使ってもらわなくても大丈夫だった。

「クロ、もう大丈夫。通常通り行こう。」

クローバーの奥の手は、早々簡単に何回も使えるものではない。それは集中力と精神力が大きく削られるし、消耗すれば読み間違いのミスも増える。あまり頼りすぎてはいけない力だ。

放っておけば、延々と力を使いすぎてしまうクローバーにブレーキをかけるのは僕の仕事だった。クローバーが2秒先を読むなら、僕は10秒先の流れを読む。

「行くぞ。」

クローバーは静かにそう言うと、反撃を始めた。

勝利は目前だ。最強の人類を倒したその先に何かがあるのか、僕らはまだ知らない。僕らはただ、目の前に立ちはだかる壁を乗り越えるだけだった。

第94話 本当に欲しかったもの

横たわるドラゴンに、エナがゆっくりと近づく。

最強という割には、案外呆気なかった。トリックさえ分かれば十分攻略可能で、それほど難しい敵ではない。尻尾の仕掛けに気がついた僕らはいつも通りの連携を繰り返し、それほど苦労せずドラゴンを倒した。

倒れたドラゴンが「ぐぐつ」と苦しそうな呻き声をあげる。

「ね、ロイ……どうしてこんな姿に？」

目に涙をいっばいに溜めたエナが呟く。

「そんなに悩んでたの？強くなりたいって。でもそんな魔物みたいな姿になっちゃって、何になるのよ。」

僕にもそれはわからない。自分を失ってまで、手に入れたいものなんてない。それは自分が大事なわけではなく、ただ純粹にそこまで求めるものが存在しないだけだ。

「あなたは何のために強くなりたかったの？それはその姿になってまでやりたかったことなの？」

ロイにはそれがあつたのかもしれないが、今はもう聞き出すことはできない。エナの問いにドラゴンは猛々しい咆哮を返すだけで、会話が成立しなかった。

「もう人間の言葉が話せないのね……。姉ちゃんの質問にも答えてくれない……。」

ロツツは知性と力を持った最強の人類つと説明していたが、言語の理解も発語もできないようでは、知性があるとは言いがたい。前に不老不死の村で見た豚のカツツの方が賢くて理性的で、このドラゴンよりも断然知性的だった。

「ねえ、強くなりたいって願いを叶えたなら、次はちゃんとその力でやりたいことを見つけなさい。でないと、姉ちゃん許さないからね……。」

エナはそう言い捨てると、溢れ出る涙を拭ってドラゴンに背を向ける。

「許さないから、なんだっていうんだ。」

僕の隣でクローバーが呟く。とても静かな声だったが、どこかエナを批判しているようにも聞こえる。

騎士としての強さを求められながら、女として守られる側を強要されたクローバーは、どちらかといえばロイよりの思考かもしれない。

僕はクローバーの頭を撫でようと手を伸ばしたが、燃えるような紅色の髪に触れる前に振り払われてしまう。どうやら慰めは必要ないらしい。

「ドラゴンよ、いつまで寝ている！起きるのだ！」

ロツツが苛立った様子でドラゴンに近づき、珍しく声を荒らげる。

「今日のところはこれくらいしておきましょう。だが、いずれ我らの作った最強の人類はこの世界を統べる。そのことを覚えておきなさい！」

負け犬の遠吠えとはこのことだった。テンプレート通りのそれに、僕は思わず苦笑いをこぼす。

ズズズつと大きな音と振動を響かせながら、ドラゴンが立ち上がった。ロツツは駆け出すとその背中に華麗に飛び乗る。翼を広げ咆哮するドラゴンが地面を蹴った瞬間、ドラゴンは狭いテラスからあつという間に大空へ舞い上がっていった。

くるくると曲線を描きながら空高く登っていく巨体は神秘に満ちていて、興味がそえられるのは確かだ。でも、積極的にそれを生み出したいのかと問われればそれはまた別の話だった。

僕はまだ狂えない。僕の中にはちゃんと常識があつて、倫理があつて、責任がある。

でも、もしそれらが周囲から問われない世界線なら？僕がそれをやらないとは限らない。今はただ条件が揃っていないだけで、揃えばやってしまうような気がする。

チラリとクローバーを伺う。金色の目を細め、厳しい顔つきで、見えなくなっていくドラゴンを見上げていた。

彼女が僕のブレーキかもしれない。クローバーに軽蔑されたくない、信頼を裏切りたくないという思いが、今の僕を保っていた。

「ロイ……。」

エナの眩きに、僕とクローバーは同時に振り返る。かける言葉はない。所詮僕らは他人なのだ。

「下へ……降りるわ……。今日はありがとう。あなたたちがいて、本当によかった……。」

感謝されるようなことはなにもしてないが、その思いを受け取らない選択をする必要も無い。僕は

「どういたしまして。」

と短く言うと、エナとクローバーと一緒に箱に乗り込み、塔の1階へと向かった。

エナと別れた僕らは、塔の外の階段でお昼ご飯のクロムツシユにかぶりつく。こんがり焼けたトーストとハムの塩気、伸びるチーズが絶妙なバランスで美味しかった。

「エナとロイはどうすんだらうな。」

クローバーが頬つぺについたパンくずを拭いながら呟く。

「さあ、それは2人の問題だよ。」

「それはそうだけど……。」

僕の返答にクローバーは不満げに眉を寄せる。

沈黙。

先に口火を切ったのはクローバーだった。

「私は、ロイの気持ちがわかるよ。」

ため息を吐くように、クローバーが暗い声を出す。

「誰よりも強くなりたかった。」

「どうして?..」

僕から見ればクローバーは十分強い。騎士時代の話を聞いても、その強さは変わらず、他の騎士を圧倒してただろう。才能もあり、技術もあり、努力も怠らなかつた。そんなクローバーがそれ以上を求める必要などあったのだろうか。

「クロは十分強かったし、今も強いじゃないか。」

「誰もが認める強さが欲しかったんだ。」

圧倒的な力。それはロイが求めたものと一緒だ。

「うーん……それを得て、どうするつもりだったの？」

「私を弱い者扱いするやつに、私を認めさせたかった。」

「ああ、強くなりたいは目的じゃなくて手段だったのか。」

全ての合点がいった。

「クロは見て欲しかったんだね。ちゃんと自分を。」

クローバーは「女」という属性のイメージで、「か弱い」「守られる」存在として扱われ続けた。誰も彼女を見ない。彼女がそんな存在でなく、誰よりも強くて努力していることなど、認めない。

「それでもしなきゃ、見てもらえないって、思ってた。そう考えれば、エナの弟はドラゴンになって、本当に願いを叶えたのかもしれないな。」

クローバーはそう言つて、少し悲しそうに笑う。悲劇だった。

「それでもしないと見てくれない人なんて、さっさと見切りをつけた方がいいよ。」

だいたいそういう人は何をしたらって認める気がない場合が多い。僕の育ての父親や、兄だつてそうだ。僕がどんなに錬金術の素晴らしい技術を身につけようと、くだらないと唾棄し、貶めた。

それは自分を苦しめる毒にしかならない。

「そうだつてわかつてたんだけどなあ。でも、どっかで認められたかったのも確かだよ。」

クロムツシユを食べ終わったクローバーは、両手をパンパンと払い合わせて、パンくずを地面に落とす。それを合図に、僕は立ち上がった。

クローバーが飲まされた毒は中々消えないだろう。

「エルは見てくれてるか？」

クローバーの声に僕は振り返る。

「何を？」

「私を。」

沈黙。

「多分、見てるよ。」

少し考えてそう返す。

「多分かよ。」

「うん、多分。」

僕はそう言って微笑んだ。

「まあ、そのくらいがちょうどいいな。」

僕の見ている世界と、クローバーが見ている世界は違う。僕が見ているクローバーだって、本物とは少し違うだろう。だから、多分だ。

ズレていたっていい、ズレているからこそ、話し合おう。

「クロは僕のこと見てる？」

「見てないな。私は私のことでいっぱいだ。」

そういたずらっぽく笑うクローバーが愛しくて、僕はますます笑みを深くする。

僕は何かを与えられるような立派な人間ではない。でもせめて、大事なパートナーの毒にならないようにはしたい。

「さあ、行くぞ。」

そう言って塔の外の森へと進むクローバーの背中を、僕は早足で追いかけた。

番外編くリフルとルアナの肝試し その1く

不自然な丸い穴。そこだけぽっかり空いていて、ピースの足りないパズルのようだ。

リフルは自分がリフルだと言われているから、ずっとそんな穴を心にかけている。何か忘れていて、でも、忘れていたことすら思い出せない。リフルだと言われても「そうなのか」という感想しかなく、それが自分のものである実感はない。穴は穴であって、そこだけを切り取ることはできないのだ。

だからと言って、悲観的なわけではない。リフルにはルアナがいる。大事な大事なパートナー。それだけはリフルにとって、確かな記憶だった。

「猫又……ですか？」

リチャードの言葉に、ルアナはミントグリーン色の髪を揺らし、緋色の目を訝しげに細めた。この不気味な鳥居の奥に、それがいるらしい。ついでに言えば、お化けのような魔物の目撃情報もあるとのことだった。

「お化けかあ……でも結局は魔物なんですよ？」

リフルはそう言ってソーダブルーの髪をかきあげながら武器を手取る。翡翠の色の瞳は自信に満ちていて、どこか楽しそうだ。

お化けとか、幽霊とかは、得体が知れなくて、戦えるかもわからないが、魔物であるならば倒せばいい話、リフルはそう思っていた。

「大丈夫じゃない？」

そんな楽観的なリフルにルアナは

「うーん、でもお……」

と難色を示す。

「そもそもここはまったく調査の進んでいない、未探索のスポット。どんな危険があるか私たちにもわかりません。一説には戦いに敗れた魔物や人が、恨みのあまり怨霊となり、彷徨っているとも言われますし……。」

リチャードの話にルアナは顔を青くし、身震いする。一方リフルは気にする様子なく

「魔物は死なないのに、どうやって怨霊になるの?」

と至極冷静な意見を述べた。天真爛漫なリフルは、その自由な振る舞いで、ルアナを困らせることもあつたが、このようにストレートな物言いで、矛盾点を見つけているのも得意であつた。

「怨霊にも色々あるんじゃないかな? ほら、生霊とかあるし。」

「ふーん……。」

ルアナの答えに、リフルはどうでも良さそうな返事をする。さして興味があるわけでもない。

「ここに迷い込んだ冒険者は呪われて死んだり、幽霊に取り憑かれて性格が豹変してしまうとも噂されています。」

「性格が変わる?」

リフルが少しだけ反応を示す。幽霊に取り憑かれるとはどのような状態になるのだろうか。

「そんな場所を調査させようだなんて、私をひどい人間だと思いでしよう。」

「そんなことはないですよ……。」

返答に困つたルアナは、リチャードに曖昧な苦笑いを返す。

リフルもルアナも、調査に不満があるわけではない。農作物に被害が出てるし、今はそれだけでも今後何らかの人的被害が起こるかもしれない、それを食い止められるなら、自分たちが先陣を切って調査に行つても構わないと思つていた。

ただ若干の不安はある。

ルアナは鳥居を見上げた。古ぼけた鳥居は所々塗装が禿げ、その不気味さに一層拍車をかけている。鳥居の先を見ようとよく目を凝らしてみたが、深い暗闇が広がっているだけで、何があるのか見当もつかなかつた。

「あなたがたには本当に申し訳ないのですが、猫又や幽霊が何をしようとしているのか、その目的を探ってきてもらえないでしょうか? もちろんお化け退治もしていただけるのでしたら、それに見合った報酬

もお支払いします。」

女の冒険者が稼げる仕事は、それほど多くはない。どこの世界もまだ男性優位で、女同士で旅をしているリフルとルアナは、それだけで敬遠され、かなり不利な状況が続いていた。

裕福とは言えない生活をしている2人にとって、リチャードの報酬の提案は確かに魅力的だ。

「どうしようか?」

ルアナの問いに

「行ってもいいんじゃない?」

っと、リフルが返す。

不安げなルアナとは対照的に、リフルはあっけらかんとしていた。

元々リフルは恐怖という感情が薄いところがある。

自分に確かな記憶が無いということ、急に突きつけられたら、普通なら不安になるだろう。でも彼女は、初めて自分が「リフル」であると知った時も、「そうなんだ」と思っただけで、知らなかった事実恐怖さは感じなかった。

「うーん……得体が知れないのは怖いけど……。」

尻込みするルアナに

「でも、アタシたちがやらなきゃ、もつとひどいことになるかもだし。」

と、リフルが言う。

猫又や幽霊が、どんな意図を持ってこんなことをしているのかわからない状態では、このまま作物を荒らすだけで済むとは限らない。

「目的を調査するだけでもやってみよう?このまま放っておいて、誰かが怪我をしたり、最悪死んだりしてから、後悔するの嫌だもん。」

リフルの提案に、ルアナは

「そう……だね。」

と、若干躊躇しながらも同意を示す。

リフルはそんなルアナを見て「大丈夫」と言い聞かせるように微笑む。迷いが拭いきれなかったルアナも、そんなリフルを見て少しだけ安心する。先はわからないが、リフルと一緒になら大丈夫なような気がした。

顔を見合わせ「うん」と頷き合った2人は、リチャードに向き直った。

「覚悟はできましたか？何かあったら必ず声を上げて下さいね。それではよろしくお願いします。」

リチャードはそう言うと、鳥居の真下まで2人をエスコートする。

「行こうか。」

いつもと変わらないリフル。

「う、うん。」

いつもより少しだけ腰が引けているルアナ。

鳥居の奥へと進んでいく2人の後ろ姿を、リチャードは静かに見送った。

番外編くリフルとルアナの肝試し その2く

その日現れた男は、当時「リユク」と名乗っていたリフルに、「リフル」というのが本当の名前だと教えてくれた。

リフルには、自分の記憶がなかった。生まれはどこか、家族はいるのか、自分の名前が「リフル」だということも知らなかった。

知らなくても、リフルは「リユク」と名乗り、それが自分の名だと疑わず、なんの不自由も感じることなく暮らしていた。自分は自分であって、他の何者でもなく、ただそこに存在することに、過去の肯定は必要なかったのだ。

リフルとルアナが鳥居をくぐると、どこからともな鈴の音が聞こえた。チリンとか細く鳴るそれは、寂しげで悲しそうな音色だった。

リフルはいつもと変わらない様子で、ずんずん先にへと進む。その後ろを、ルアナが周囲を警戒しながら着いていった。

「ん？ルアナ、あそこ見て、なにか落ちてる。」

「リフル！勝手に進むと危ないよ！」

ルアナはそう言いながらも、急に走り出したリフルに続く。

「きゆうりだ。」

地面に食べかけのきゆうりが落ちていた。

「こんなところになんで……？猫又の仕業かな？」

きゆうりが落ちていた先の道を、リフルはジッと見つめる。奥に道は続いていたが、街灯の役割の提灯に火が灯っておらず、真っ暗になっっていた。

「行けそうにないね。」

ルアナの言葉に、リフルは少し不満そうに「うん」つとうなづく。先は続いているのに進めないのがもどかしい。

「別の道探してみよう？」

「そうだね。」

静かに来た道に戻るルアナに、リフルは続いた。

しつかり者のルアナは、天真爛漫で時々危ないことに足を突っ込み

そうになるリフルのいい相棒だ。

ルアナの両親は既に他界していた。兵士長だった父は戦争で殉職し、母は病に倒れ、1人ぼっちになったルアナは、遠い親戚の家に引き取られる。親戚の人は皆優しく、ルアナを案じてくれたが、几帳面で責任感のあるルアナは、ずっと居候していることに、どこか引け目を感じていた。

そして、15歳になったとき、ルアナは連邦の小さな家で1人暮らしを始める。1人立ちすることに不安はあったが、何でも自分の力でやる代わりに、なんの負い目も感じることなく、自由に暮らせる生活は素敵だった。

そんな生活を始めたルアナの隣の家に引越して来たのが、リフルだった。同じ女の子で、一人暮らしで、歳も近く、2人はすぐに仲良くなった。

親戚の家では常に気を使っていたルアナだが、リフルの前では素の自分で居られた。何でも自由に明るく振る舞うリフルの前で、あれこれ気にする必要はない。リフル自身がそういうことを気にしない性格なのだ。

ルアナにとってリフルは家族よりもずっと大切な親友になっていった。

「わあっ!!」

突然上から降ってきたナンバンに、ルアナは驚いて声を上げる。

「わあーもう、びっくりしたなあー。」

リフルはそう言いながらも、全く驚いた様子はなく平然と手でナンバンを押しつけた。

「リフルは怖くないの?」

「怖いっていうか、びっくりする。」

道で突然知らない人に「わっ!」つとやられたら、誰だつてびっくりするし、声を上げてしまうこともあるだろう。でも、それはそれだけであって、リフルは訝しく思っても、恐怖は感じない。

「リフルは強いのか、ズレてるのか、ちよつとわからないよね。」

ルアナはそう言つて、苦笑いを浮かべる。リフルとは随分長い時間

を一緒に過ごしているが、まだまだ彼女の思考回路は、よくわからない。

「うーん……アタシは別にアタシの中では普通なんだけどなあ……。」
そうぼやくリフルの前に、怪しい宝箱がぼんやりと姿を現す。広場の真ん中に不自然に置かれた宝箱を見て、2人は顔を見合わせた。

「どうするっ？」

「どうしようっ？」

明らかに怪しいそれに、リフルもルアナも警戒心を抱き、とりあえず遠巻きに様子を見る。

「開けちゃうっ？さすがのアタシでも怪しいって思うけど……。ルアナはどう思うっ？」

リフルはこういう判断が苦手だ。直感では怪しいとは思うが、他のやることがないなら開けてしまえとも思う。そんな大胆な思考になれるのは、ルアナがいるからだ。ルアナなら、なんとかしてくれるし、自分もなんとかできると思える。

「先に進める仕掛けがあるかもしれないって思うけど、開けた瞬間、中から幽霊が飛び出してくる想像も捨てきれなくて、怖い。」

広場の周りは血のように赤い湖で囲まれており、先に進めそうな様子はなかった。このまま戻ったとしても、もう他に道がない。この宝箱がなんらかのトリガーになって、新たな道を示してくれるかもしれない。ルアナは冷静な分析で、そう考えたが、宝箱を開ける勇氣はまったくもって湧いてこなかった。

正直なルアナに、リフルは思わず口元を緩める。ルアナがそう言うのであれば、自分がこの宝箱を開けよう。

「開けるよ。」

「開けちゃうの？」

覚悟を決めたリフルとは対照的に、ルアナは情けない弱々しい声を出す。

「大丈夫。何かあっても、そばにいるよ。」

ルアナを置いて逃げたりはしない。絶対に守るという覚悟がリフルにはあった。宝箱に1歩ずつ近づいていくリフルの服の裾を、ルア

ナはギュツと握りしめる。怖いけれど、リフルに何かあったら、守るのは自分だ。ルアナはビクビクしながらも、それなりの覚悟を持って、リフルの後ろをついて歩いた。

「行くよ。」

振り返ったリフルに、ルアナが「コクコク」うなずき返す。声は出せなかった。今は息さえ止めて、自分の中に湧き出る恐怖心を抑え込まなければならぬ。

「せーの！」

リフルはそう掛け声をかけると、勢いよく宝箱を開けた。

「わっとっ！」

「ふわあわああ!!」

地鳴りと共に、一瞬地面が揺れる。リフルはバランスを崩し一瞬よろめき、ルアナは驚いて腰を抜かす。

沈黙。

地鳴りは一瞬で収まり、すぐに静けさが訪れた。

「何……？」

「……なんだろう？」

リフルとルアナはお互いポカンと口を開けたまま、顔を見合わせる。

「ふふっ……。」

「ふははっ……。」

2人とも、呆然とした相手の顔がおかしくて、思わず笑ってしまった。

「笑わないでよー。」

「そっちこそー！」

お腹を抱えて笑いながら、そう言い合う。

「一旦戻ろう。新しい道が出来てるかも。」

ひとしきり笑ったあと、ルアナがそう切り出し、リフルは「うん」っとうなずき続いた。

リフルとルアナはいつもこうして、お互いを守りたいと思いながら旅を続けていた。そこに優劣はない。どっちも支え合って、笑い合っ

て、楽しむ。

それはとても素敵で、幸せな時間だった。

きゆうりが落ちていた所まで戻ると、提灯に火が灯り、何とか先に進めそうになっていた。

「やったね！」

「うん。行こう！」

またリフルを先頭にして2人は先へと進む。

辺りは静けさに包まれ、虫の声と、自分たちの足音しか聞こえない。時折カラコロと下駄の音がするような気がして、ルアナは恐る恐る後ろを振り返ると、立ち止まった。

「どうしたの？」

「うんと……。」

下駄の音はピタッと止んでしまった。

「ん？」

不思議そうに首を傾げるリフルに、ルアナは

「ううん、なんでもない！」

と、苦笑いを返しながら、もう一度後ろを振り返る。そこにはただ、暗闇が広がっているだけだった。

「ルアナ、見て、なんか落ちてる。」

リフルはそう言うと、またルアナを置いて走り出す。

「ちよっと！リフル危ないよ！」

下駄の音が怖かったルアナは、駆け足でリフルを追いかけ、彼女がいつも身につけている赤いマフラーに縋った。

「なんだろ？手紙？」

リフルは地面落ちていたメモのような紙を拾う。

所々赤い不気味な染みが付いたメモには『おまえの大切なものをこれから奪う』とある。

その震えるような赤い文字を見たリフルは咄嗟に自分の首に巻いたマフラーをギュツと握りしめた。

大事なものなど、さほどもってはいない。元々記憶がなくても何不自由なく暮らしていたのは、こういう執着しない性格があるからだろ

う。

でも、このマフラーは、冒険を始めて間もない頃、ルアナがプレゼントしてくれた大事なものだ。リフルにとってこのマフラーはルアナとの親愛の証で、何にも変え難い大切なものなのだ。

それを奪われると思ったリフルは、咄嗟にマフラーを掴んだが、一向にそんな気配はない。

「ねえ？ルアナ、これってどういう……」

そう尋ねようとパートナーを振り返ったリフルは、言葉を失う。

そこに居たはずのルアナの姿はどこにもなく、暗がりには虫の声と、誰のものかわからない下駄の音がカラコロと響いていた。

番外編くリフルとルアナの肝試し その3く

「ルアナ……？」

足元の地面が抜けて、果てしなく下へ落ちていくような不安に襲われ、リフルはマフラーにかけた手をさらにギュツと強く握る。そうすれば、親愛で繋がったルアナが応えてくれるかもしれない。

そんな願いは虚しく、リフルの眩きは虚空へと消えていった。

「ルアナ？どこ？」

辺りを見回しながら、努めて冷静さを保とうと、気を強く持つ。

自分に記憶が無いと知った時も、ショックがなかったわけではない。過去がないということは、自分の基盤がないことだ。それは本来とても不安定で、暗闇の中を綱渡りしているようなものだった。

それでもリフルは、明るくよくよくない性格と、いつもそばにいて支えてくれるパートナーのルアナのおかげで、なんとか自分の足で前を向いて立っていた。

ルアナがいなかったら、今頃リフルはもつと別の道を歩んでいたかもしれない。不安定なリフルにとってルアナは、命綱のような、なくてはならない存在なのだ。

「ルアナ!!」

名前を幾度となく叫んでみても、返事はなく、リフルの声は冷たい暗闇の中にどんどん吸い込まれていってしまう。

リフルは拾った紙切れをもう一度見た。赤い染みの付いた紙には『おまえの大切なものをこれから奪う』と変わらず書いてある。

大切なものとは、マフラーではなかった。それをくれた本人、ルアナのことだったのだ。

リフルが初めに感じたのは怒りだ。自分からルアナを勝手に奪っていった怒り。そのあとから、ルアナの身を案じて、心配と不安が追いかけてくる。

自分がひとりぼっちになってしまった恐怖より、ルアナが酷い目にあっているのではないかという不安の方が、ずっと大きく重くのしかかり、リフルの心を乱す。

「ルアナ……。」

リフルは前を向く。ルアナとはぐれてからさほど時間は経っていない。そう遠くへは行っていないはずだ。

歩き出したリフルの後ろから、カラコロと下駄の音がついてくる。リフルはあえてそれを無視した。怖くはない。むしろ腹立たしかった。

「あんたたち、ルアナに何かしたら許さないんだからね！」

暗闇に向かってリフルは威勢よくそう言い放つ。姿の見えない何者のかは、カラコロと下駄を鳴らすだけで返事をしない。

階段を下り、さらに奥へと進むと、途中の道に緑色の丸いものが転がっているのが見えた。不気味な物体に一瞬警戒したりフルだったが、それが食べかけのスイカだとわかると、近づいてよく調べる。

鋭い牙で一部が噛み砕かれたスイカは、赤い実がボロボロとこぼれ、皮に爪で引つ掻いたような跡が残っていた。

「うーん……。」

猫又の仕業なのかは分からない。ただ消えたルアナとこのスイカは、関係が無さそうだった。

「ルアナ……。」

親友を求め、リフルはさらに奥へと歩みを進める。道は暗く、どんどん狭くなっていた。

暗闇に続く細い道、その真ん中に白い着物を着た女が立っていた。ルアナではない。黒い長い髪に、色白というには白すぎるほど青白い肌の女だ。

「誰……？」

リフルが恐る恐る声をかけると、女はニタつと口元に笑みを浮かべ白目を向いた。

彼女がなんなのか、リフルにはわからない。幽霊なんてものが存在するのか、しないのか、そんな議論はどうでもよかった。ただ、あの死装束の女は、本来ここに居るべきものではない。

「ねえ、あなたの場所はここじゃない。あなたはあなたのあるべき場所に帰った方がいいよ。」

リフルはそう呟くように言う。そこにあるのは哀れみだ。悲しき魂の彷徨いに対する同情だった。

リフルが近づくと、死装束の女はフツと煙の様に消えてしまう。ホツとしたのもつかの間。すぐ先に、また同じ女が立っていた。

そこだけ白く浮かび上がるようにボヤッと光って見えるので、何かの目印のようだ。そう思って、リフルはピンっとくる。

「あなた、もしかして!」

リフルは走って死装束の女を追いかける。女はリフルが近づくと、またあつという間に消えてしまう。顔を上げればその先に古い井戸があつて、またそこに女が立っていた。

慌てず、ゆっくりリフルがまた死装束の女に近づく。

「あなたは……?」

リフルが女に触れようと手を伸ばすと、死装束の女は不気味な断末魔の叫び上げた。それに驚いたリフルは

「きゃっ……!!」

つと怯んで目を瞑る。落ち着いた頃、恐る恐る目を開くと、女の姿はどこにもなかった。

「今のは……?」

呆然としているリフルの耳に

「おーい……!誰かいる?リフル?」

と聞きなれた声が飛び込んでくる。リフルはハッと我に返り、急いで井戸の底を覗き込んだ。

「ルアナ!!」

「リフル……!これ、どうなってるの?」

井戸の底から、ルアナが困惑した様子でリフルを見上げる。

「こつちが聞きたいくらいだよ!」

リフルはそう言いながら、ルアナと再開できた嬉しさに顔をほころばせた。

「うーん……よく覚えてない。」

ルアナは困ったように頭を掻きながら、難しい顔をする。

「リフルのマフラーに縋ったところまでは覚えてるけど、その後からの記憶がバツサリとない。気がついたらここにいて、誰かの声が聞こえたから声をかけたらリフルだった。」

訝しげに眉を寄せながらそう話すルアナに

「体は？痛くない？」

とリフルが心配そうな顔で尋ねる。

「うんうん、どこも痛くないし、悪くないよー！」

リフルを安心させようと、ルアナはめいっぱい微笑んだ。

「そっか、良かったあ……。」

リフルはそう呟くように漏らすと、ぎゅつとルアナに抱きついた。ルアナの柔らかい肌に触れれば、安堵がさざ波のように体を駆け巡る。

「心配した？ごめんね……。」

ルアナはリフルを抱きしめ返すと、その背中を優しく撫でた。

沈黙。

そうして2人は再会の喜びを分かちあった。

「さあ、先に進もう！ルアナがいない間、食べかけのスイカを見つけたんだ。」

リフルはそう言いながら、ルアナの手を取り、ぎゅつと握る。

「う、うん。え？このまま行くの？」

手を繋いだまま歩き出すリフルに、ルアナは戸惑った声をあげた。

「うん、またはぐれたら困るでしょ？」

リフルはそうやって目を細め、いたずらっぽく微笑む。ルアナは安心感に包まれつつも、少し恥ずかしさを覚え、はにかんで頬を染める。でも、嫌ではなかった。

「さあ、猫又に会いに行こう！」

「うん！」

2人はそう言って肝試し会場の最奥を目指した。

番外編くリフルとルアナの肝試し その4く

薄暗い石段に腰掛けたルアナは、闇に染まる空を見上げながらボーツとしていた。

猫又の正体は魔物でリフルと協力して懲らしめたので、もう大丈夫だ。そのあと本物の猫又らしき妖怪とも会ったような気がするが、全てはこの空のような暗くて冷たい闇の中の話だ。

リフルは先にリチャードに事の次第を報告しにいき、今ルアナは一人で彼女が帰ってくるのを待っていた。

待ちながら、ルアナは猫又探して起こった様々な奇妙な現象を振り返っていた。

怪しい宝箱、女の人の叫び声、どこからともなくついてくる下駄の音、赤ん坊の鳴き声、頬に当たるこんにやく、どれもが奇妙で不気味で、でも経験した実感が薄く、夢の中の出来事のように曖昧だった。

特にリフルと離れた時のことは、思い出そうとしても何も浮かばず、完全な空白がそこにあった。

寝ていた時のような感覚とは違う。確かにそこに何かあったことは覚えているのだが、何があったのかだけ真っ白なのだ。

追いかければ追いかけるほど、指の隙間から水が流れるように、記憶が溶けていき、その白さがいっそう増す。

もどかしくて、居心地が悪くて、ルアナは思わず頭をトントンと叩いた。

「ルアナ、おまたせ。」

リチャードの報告から戻ってきたリフルがそう声をかけると、ルアナはハツとして顔をあげる。

「ルアナ大丈夫？ 疲れた？」

なんとなく落ち込んでいるようなルアナの様子を察したりフルは、そう言いながら流れるように彼女の隣に腰をおろし、その背中を優しくさすった。

「ううん。大丈夫！ ちよつと考え事してて……。」

「考え事？」

首を傾げるリフルに、ルアナは記憶の欠如について説明する。

「なんか……すごく気持ち悪くて。気になるけど、全然思い出せないし、モヤモヤするの。」

手羽先の骨が喉の奥につかえたような息苦しがあつて、ルアナは髪をぐちゃぐちゃと掻き乱した。

「大丈夫大丈夫。無事だったんだから、気にしない方がいいよ。」

リフルはそう言って、慰めるようにルアナの頭をよしよしと優しく撫でる。

「うん……。」

そう頷きながら、ルアナはリフルを見つめ返す。

「リフル……。」

「ん？」

「リフルはもっと辛いんだよね。」

ルアナの突然の同情に、リフルは訳が分からず、きよんとしてしまふ。

「辛い？アタシが？なんで？」

「今はね、ほんの一時の記憶がないだけで、すっごくもどかしくて、居心地が悪くて、そしてなんだかとても不安で怖いの。」

ルアナはそう言うと、今にも泣きそうな顔で眉をへの字に下げた。

「私リフルの辛さ、何にもわかってなかった。リフルは私なんかより、もっと大きな記憶が無いんだから、もっと不安だよね。」

ルアナの心配にリフルは「ふふっ」と笑う。

「馬鹿だなあ！そんなこと気にしてたの？」

リフルだって不安がないわけではない。ぽっかりと空いた記憶の穴は、覗いても覗いても真っ暗で、底が見えない深淵だ。油断すればあつという間に心が引きずり込まれてしまう。

でも、リフルにはルアナがいる。

「アタシは一人じゃないって知ってるから。」

暗闇の中、いつも手を取ってくれたのはルアナだ。この先に希望の光を灯して、新しい記憶を、未来をくれた。

「ルアナが居るから、アタシは大丈夫だよ。」

リフルはそう微笑むと、ギョツとルアナの手を握った。細くて白くて小さな手だ。でも、暖かくて力強い。ルアナが居れば、自分は大丈夫。どこにだって行けるし、なんだってできる。

元気付けられたルアナは、一瞬悔しくなつて、唇を噛み締めたが、すぐ精神を立て直し

「リフル！ありがとう！」

と笑顔で返した。

自分の不甲斐なさを嘆いている場合ではない。辛いのはリフルで、自分ではないのだ。

リフルは自分を頼ってくれている。その期待に応えたい。前を向くりフルの隣でその姿の支えになりたい。

「ぎ、そろそろ行こー！」

「うん。」

2人は立ち上がり、また新たな旅に出る。

失った記憶が何なのか、取り戻せる日が来るのか、リフル本人にもわからない。

でも、たとえば失ったものが取り戻せなかったとしても、ルアナと旅したこの新しい記憶は、忘れられない一生の思い出になるはずだ。その思いを胸に抱いて、今日もリフルはルアナと旅を続ける。忘れないよう、1つ1つを心に刻みつけて。

リフルはトレードマークの赤いマフラーをたなびかせ、走り出す。

「待ってよー。」

ルアナが慌ててあとを追いかける。

親愛の絆で結ばれた2人の旅はこれからも続いていくのだ。

第95話 フェンダークの頼み事

「最強の人類か。最強には程遠かったな。」

「どうやら彼女にとってあのドラゴンは物足りなかったらしい。」

「研究が進めば、少しはマシになるんじゃないかな。」

「研究が続けば犠牲者が増えるだろ?」

「そうかもね。」

「どんな技術もタダでは無い。それなりのお金がかかる。さらに言えば、この研究にはお金だけでなく、人の命がかかっていた。」

「コスパが悪いだろ。こんな研究。」

「どうだろう? 前にロッツが地下工場で万能薬を作ってたでしょ? あの時と同じ思想なんじゃないかな。」

「お金が無い、病気である、孤児である、不幸な命を材料にすれば、低コストだと考えるやり方だ。」

「弱者を殺してそれを材料に利益を得るシステムなんてクソ喰らえよ。」

クローバーが苛立ったように地面を蹴った。

塔の外の森は鬱蒼と木が生い茂っていて、日当たりがあまり良くない。そのおかげで、クローバーの靴の先にはぬるぬるとした泥がくっついてしまっていた。

そんなことはお構い無しに、彼女は足を踏み鳴らしながら、僕の前をせかせかと歩く。

「相手が役に立たない生きてる意味が無いものって思えばさ、罪悪感も薄れるし、むしろそう思うからこそ積極的に研究材料に出来るんじゃないかな。」

人は生まれた瞬間から場所を取る。そこに様々なコストがかかって、そのために世界のリソースを奪い合う。

役に立たない生きてる意味が無い命を断れば、そのリソースを守れるし、守ったその人はそれで役に立ったと言える。

「弱者が弱者を切り捨てて、強者に媚びてる。生きるために。役に立つために。」

「殺伐としてるな。誰が役に立たないなんて、生きてる意味が無いなんて決めるんだよ。どいつもこいつも神様気取りで馬鹿らしい。」

価値のある命なんてないと、僕に教えてくれたのはクローバーだった。相対的に価値のない命もない。誰もがみな尊重される命なのだ。

「言い訳なんだろうね。研究をするための。」

それが条件だ。常識も倫理も責任も問われないようにするための、自分を納得させるため言い訳。

「エルはどう思うんだよ。」

「僕？」

突然ボールを投げられて、僕は面食らってしまう。

「錬金術師として、エルはこの研究をどう思うんだ？」

「無い話ではないと思うよ。やりたい人はいる。」

僕の返答に、クローバーは首を振る。

「そうじゃない。お前自身はどう思うんだ？」

「僕は興味が全くないわけじゃない。でも、様々なリスクを超えられるくらいの関心はないね。」

それが今の僕の正直な気持ちだ。

「ずるい言い方だな。」

「そうだね。」

やりたくないから、やらないではない。リスクがあるからやらない。そういう話だ。

「でも、多分やらないよ。クロがいるうちは。」

「私が居なくてもやるなよ。」

クローバーが僕の目を射抜かんばかりに見つめてくる。

きつと僕はできない。それに手を出そうとすれば、呪いのように、何度でもクローバーのこの顔を思い出す気がした。

それでも

「わからないよ。」

としか答えられない。

相手がクローバーでなければ「しない」と宣言するのは簡単だっただろう。現に僕はそうやって嘘をついて生きてきた人間だ。

耳障りのいい言葉で優等生を演じる。

僕を10歳まで育てた父親や、半分血の繋がった兄は、僕から奪うことそのものが目的で、それに付随する不利益も、利益も、これっぽちも気にしていなかった。

奪うことで支配する。そこに僕が抵抗する意味はなかったのだ。

でも、クローバーの前では、そうするべきではない。彼女は僕を支配したい訳ではないだろうし、不確実なことを約束するのは、不誠実である。誠実であるためなら、多少の不謹慎は仕方ないことなのだ。クローバーが諦めたようなため息をつく。

「おう、友人。奇遇だな、こんなところで会うなんて。」

聞き覚えのある声に、僕もクローバーも立ち止まってそちらを振り返る。

銀色の髪に切れ長の鋭い目、フェンダークが馴れ馴れしく手を上げて立っていた。

神出鬼没で正体不明。いつも手を貸してくれるが、頼りになるかと言えばそうともいえない。敵では無いが、完全に味方とも思えないというのが、彼に対する僕の評価だった。

「こんな所に何の用だ。」

その評価はクローバーとも一致するらしく、彼女はフェンダークに訝しげな目を向ける。

「上から降りてきたのか。どんな様子だ？」

こちらの質問には答えず、空高くそびえる塔を顎でしゃくりながら、フェンダークがこちらの情報を探ってきた。

「別に。まあ良くはない。」

ぶすつとした声でクローバーが返す。

「良くはないというか、最悪だな。」

そう言つて酷く気分を害しているクローバーの代わりに、僕が上であったことをフェンダークに説明する。

隠し持っていて仕方がない情報だ。惜しくはない。それに顔の広そうな彼なら、とつくに知っている情報かもしれなかった。

「なるほど。そんなことになってんのか。ろくなことしやがらねえ

な。」

僕の説明を聞いたフェンダークは呆れた声を出す。クローバーのような、苦々しい嫌悪や、怒りはそこにはない。どちらかといえば、面倒臭そうにしている感じだ。

「そのロツツつてやつがこのボスみたいだな。」

「彼はここだけじゃありません。滅びの村の地下工場も仕切っていましたよ。不死の薬を生産するとかで……。」

僕はそう言つて、フェンダークの様子を伺う。僕の探りにピンと来たのか、フェンダークはふっと一瞬笑みを漏らすと

「いいことを教えてやろう。」

と、いつもの高慢そうな物言いで目を細める。

「でつかいことをやるには、後ろ盾つてのがいるんだ。」

「パトロンか？」

クローバーが揶揄するように突っ込む。

今の時代、研究職にお金持ちの愛人は付き物である。僕の師匠がそうだった。次々に女の人をたぶらかしては金品や生活費、そして身の回りの世話など労力を巻き上げていた。いや、正しくは彼女たちが勝手に差し出しただけであつて、師匠自体は女の人を分け隔てなく、心から愛していたので、騙していたわけではない。ただ問題がなかったかと言えば、そうではないだろう。

問題が無いなら、僕はあんな迷惑を被ることはなかったし、多感な時期に受けた影響のせいでこんな性格にはなつてないし、もう少しましな生活ができたはずだった。

「金を出す奴つてイメージだろうがそれ以上に大きくなる過程で、目障りな奴が出てきた時それを排除する役割つてのが一番大事だな。」

「暗殺か？」

クローバーの考えは悪くは無い。ただありきたり過ぎる。

「暗殺というのは中々ハードルが高いんですよ。殺すこと自体は簡単ですが、後処理が難しいのが現実です。急な失踪は不審に思われやすいですし、現にエナさんがロイさんの失踪からこの教団の秘密に近づきました。」

近しい人が急にいなくなれば、それを追う者も現れてしまう。そうやって少しずつ情報が漏洩していく。

「必要なのは権力ですよ。」

僕の言葉にフェンダークが大きく「うん」と頷く。

「こいつらの場合、おそらく、バックには公国がいる。ドレイク大公がな。」

嫌そうに眉を寄せるクローバーの横で、僕は

「やっぱりそうですよねえ。」

とため息をつく。ドレイク大公と交流のある彼なら、そのことを知っているはずだと思っていた。

予想が現実のものであったという確信を得たが、特に収穫はない。絶望感が増しただけだった。

邪魔者を排除するのに必要なのは暗殺だけではない。それを正当化するための権力も同時に要るのだ。

「汚ねえ世の中だなあ。」

「だが、公国は公国で、教団を利用するつもり満々だ。その最強の人類つてのを使って、何かしようと思んてるってことさ。」

「これ以上最悪なことが起こるって言うのかよ?」

呆れたような声を上げたクローバーは、うんざりしたように空を仰ぐ。残念ながら天井はむせかえるような緑で埋め尽くされていて、青い空は見るできない。

太陽も見えないので、今何時頃なのかもわかりづらいが、まだ気温が暖かいし、お腹の減り具合からしても、まだ昼下がりといったところだろう。

「そりゃ……戦争だよ。」

平和な昼下がりととは程遠い言葉が、フェンダークの口から発せられる。

「少し前からききな臭かったが、そろそろそいつが本格的になってきやがった。」

戦争の予兆はそこかしこに落ちていた。自国の農園を襲った連邦、不死の薬を作る公国、テイルが聞いた噂、セリクの兄の騎士が言う公

国内部の情報。それ1つ1つは小さな火種で、取るに足らないものだ。

でもそういう歯車が少しずつ合わさって、どうにもならない戦いを産むことは、過去の歴史が証明していた。

「どうしようもないですね。ほんと。」

この世界は本当に理不尽で、汚れていて、くだらなくて、心底うんざりする。

だから僕はこの世界を生きることにごだわりはない。手放しても惜しい現実などないのだ。

「どうしようもなくとも仕方ねーんだよ。」

クローバーは、そうため息をつきながらも事実を受け入れて、それでも生きる選択をしているようだった。

「てめえにちよいと頼みがある。ここから国境を越えたあたりの岬にエージンってじいさんが住んでる。知ってるか？」

僕とクローバーは顔を見合わせる。エージンと僕らは友達だった。ビモットとという機械人形を助けたのが縁で知り合い、今も旅の途中でふらりと立ち寄っては、錬金術の話に花を咲かせるような仲だ。

思えば最近立ち寄っても不在のことが多く、しばらく顔を合わせて居なかった。

「そのじいさんのところを訪ねてもらっていいか？」

珍しく神妙な顔のフェンダークに、僕は何となく嫌な予感を覚える。

「なんのために？」

クローバーも何か感じているのか、フェンダークに鋭い視線を向けながら、質問を投げた。

「まあご機嫌うかがっていいのかな。じいさんがこの戦争を前にどうしてるかって思ってたな。」

「エージンさんが戦争とどんな関係があるっていうんです？」

「まあ、いきやわかるって。頼んだぞ。」

煙にまくような返事をするフェンダークに僕は小さくため息をつく。この人は真意は絶対に見せない。何を考えているのかさっぱり

だった。

それでも、いつも飄々としている彼が念押しする頼み事だ。それになんとか嫌な胸騒ぎがする。引き受けておいた方がいい気がした。

「ま、じいさんは友達だし、必ず行くよ。」

そう言つて、こちらに目線を送ってきたクローバーに、僕は笑みを返す。話し合わなくても心が通じるのは中々嬉しい体験だった。

第96話 開戦のプロローグ

「おお、なんの用だ？」

フエンダークに言われ、エージンの元を訪ねてみたが、彼は変わらずどこか気難しそうな、そして同時に少年のような無垢な笑顔で迎えてくれた。

「こんにちはエージンさん。」

「よお。」

エルサイスに続いて、私は短い挨拶を返す。

もう午後も遅く、今から何かしらを始めようとするには、中々躊躇われるような時間帯だ。

この世界の夜の闇は深く、ランタンや魔法の灯りをもつてしても、それを追い払うことは難しい。1日は24時間あっても、その中で人が活動できる時間は、お日様が出ているわずか数時間しかないのだ。

大きな街や、城下町の中心街なら、それなりに明るく、遅くまで活動することもあるが、エージンのように、どの街からも離れた岬に、ぽつん立っている家に住んで居るならば、その時間は幾分短くなる。

そんなエージンがこれから客人を迎えるとなると、泊める覚悟が必要になるだろう。

そういう配慮を欠いた訪問は、正直気が引けた。それでも、私たちは最短で、エージンに会いに来なければならなかった。

フエンダークは「エージンを訪ねろ」とは言ったが「すぐに」とは言っていなかった。いつもの私ならば、そのうち気が向いた時に、いつでも寄ればいいと思ったはずだ。

でも、今回はすぐにでも会いに行った方がいいと思った。そして、私とエルサイスは、フエンダークと別れた翌日、1日かけて公国を横断し、夕方前にエージンの家に到着した。

最近、しゃべるカカシが出てくる小説を読んだ。未来が見えるそのカカシは「未来は神様のレシピでできています」なんて、詩的なことを言っていた。1つ1つの事象は取るに足らない小さなものだが、それらの細々した材料が集まって、神様が作るレシピ、すなわち未来と

なっていく。というようなことらしい。

今、現在進行形で、私の目の前で紡がれているこのレシピは、嫌な材料が集まりすぎてる。それが胸騒ぎの原因で、私をここまで駆り立てるのだった。

この先がどうなっているかなんて、カカシでもない私にはわからない。私のこの行動すら、神様のレシピの中の1つになるとして、それが良い方向に転ぶとは限らないのだ。

それでも、私は今、ここに来なければならなかった。私の本能が何かを求めて、この場所に私を連れてきたのだ。

「お元気ですか？」

「最近会えなかったからよ、どうしてつかないかな？と思って。」

当たり障りのない会話で場を繋ぎながら、私とエルサイスはエージンに案内されるまま、ダイニングのテーブルに腰を下ろす。

私の心配をよそに、エージンは私達をいつも通り歓迎し、快く家にあげてくれた。気難しいが、気のいい爺さんだ。

「あれ？」

エルサイスが部屋をキョロキョロと見渡し、目当てのものを探す。

彼はここにいる機械人形のビモットが大好きなのだ。

「jeeさん、ビモットはどうした？」

エルサイスの疑問を代わりに聞いてやる。

いつならビモットはダイニングの隅に佇んで、大人しくこちらを見ているのだが、今日はその姿が見当たらない。ビモットは図体が大きいので、見落とすなんてことはできるはずもなく、見当たらないということは、どこか別の場所にいる可能性が高かった。

「ビモットなら……奥で休んでおる……起動システムを抜いたのさ……。」

キッチンに向かい、カップにピンクテイーを注ぎながら、エージンが小さく呟く。どことなくその背中には寂しさが宿っていた。

「どうしてまた？」

娘と言って可愛がっていたビモットは、エージンにとって家族のようなものだ。起動システムを抜いてしまえば、動くことはなく、交流

も難しいだろう。

「どうしてかって？あいつは生まれるべきではなかったのだ。」

テーブルにカップを置きながら、エージンが強い口調で言う。

「あの子には魂が入っておるのだ。そう、人間や魔物と同じ、な。だが、魂だけで感情はない。生きる目的も持たない。しかし、それだけ私にとって愛おしい存在だった。」

エルサイスはビモットが好きだが、それは「研究対象として興味がある」レベルのものであって、エージンのような「情愛」ではない。「愛おしく思うたびに、この子の反応に何か感情が潜んでいると思う私がいる。だから、こいつを私以外の者の好きにさせたくはないのだ。」

所詮機械は機械なのだ。こちらがいくら愛情をかけようと、応えてくれるものには無い。採光レンズの奥には、複雑な術式と、鉄でできた無機質な構造があるだけで、感情などという人的なものはないはずだ。

エルサイスなら、そう言うだろう。もうろく爺さんの妄想だと。

でも、私はエージンの気持ちが変わらないでもない。

子供が大事に抱えているぬいぐるみと一緒に、それは慰めなのだ。応えてくれないとわかっていても、それに慰められている。その慰めはどこから湧いて出るのか考えた時に、自分ではなく他者、子供であるならぬいぐるみに、エージンならばビモットに、原因を求めた結果が、これなのだ。

別に良い悪いの話ではない。妄想だと言われれば、確かにそうだが、責められることでもないだろう。

私はピンクティーを一口すすする。砂糖をたっぷり入れたそれは、甘くフルーティーな香りだ。

しばしの沈黙。いつもは錬金術について、エージンを質問攻めにするエルサイスも、珍しく黙っていた。

「こいつは……」

エージンが口を開く。

「戦争の道具にもなりうるのさ。悪魔の子だよ……。」

漬物石を丸ごと飲み込んだみたいなの、重苦しい空気が流れる。

あまりの息苦しさに、私はチラリとエルサイスを見た。彼は涼しい顔でピンクティーのカップをあおるだけで、この空気をもものともしていかないようだ。

いつかのエルサイスが「機械人形は兵士して都合がいい」と話していた事を思い出す。そう、これは当然の話で、彼にとつては今更のことなのだ。

「いっそ、壊してしまいたい。だが……我が子を殺すことなんて、誰ができる?」

「無理でしょうね。」

エルサイスが優雅にカップをテーブルに置きながら応える。

「ビモットは、あの機械人形は何も悪くないでしょう? 機械自体に感情がないなら、目的がないなら、それを与えるのは人です。エージンさんがビモットに感情があると思ったのは、あなたが彼に与えたからですよ。人の想いが機械を動かす。」

「それは所詮、人が機械を通して、自分を表現してるだけじゃん?」
私の突っ込みに、エルサイスは至極当然というように「うん」と大きくうなずく。

「要は彼はただの鏡のようなものです。人写す鏡自体に罪はないでしょう?」

同意を求められて、私は困ってしまう。確かに罪は無いかもしれない。でも、反射する鏡が無ければ、その眩しさに目を焼かれる人がいなくなるのも確かなのだ。

道具を扱う人が悪い。それで済めば世の中もつと簡単に平和にいられるのは、百も承知だ。しかし、人の意識の変化を待っている暇など、大抵の場合ない。

「なあ……あんた……ビモットを壊してくれないか……?」

しんつという音が聞こえそうなくらいの静けさが、ダイニングを満たす。

私がこの問いに答える権利はおそらくない。私には、機械人形の価値などこれっぽちもわからない。惜しいとは思わないし、それでエー

ジンが救われるなら安いもんだと思う。

でも、私のパートナーはどう思うだろうか？

私はエルサイスの様子を伺った。

彼は少し悲しげな笑みを顔に貼り付けて、身じろきもせず、エージンをただ見つめていた。

そこにあるのは憂いか、同情か、軽蔑か。外向けの、アタッチメントパーツを取り付けたような顔なので、そこから真意を読むのは難しかった。

「僕は……」

やっとエルサイスが口を開いたタイミングで、乱暴なノックの音が転がった。否、音大きさ的には、さほど乱暴とはいえない。だが、外にいる凶暴な何かを知らせるような、威圧的な響きを、私は確かに感じ取っていた。

第97話 暴走する機械人形

「エージンさん。いらっしやるのでしよう、開けてください。」

私を感じた威圧感に対して、ノックの主は丁寧な言葉使いで、声色だけで気品を感じるような雰囲気だった。

「誰だ？」

エージンはそう言いながら、私たちに目配せする。

招かれざる客がきたのだ。

下がっていると言われたような気がしたが、それに逆らい、私は大剣を、エルサイスは杖を構えて立ち上がる。

ドアの前に立ったエージンは、呆れたようなため息をついたが、努めて諫めることもなかったので、好きにやらせてもらうことにした。

エージンが開けたドアの向こうに居たのは、タレ目が特徴の気品溢れる青年だった。銀色の髪にスカイブルーの目、丁寧に編み込まれた前髪を耳にかけた姿は、どことなく中性的で、優しげに見えた。

「来たか。」

どこか覚悟を持った重苦しい声で、エージンが呟いた。

きつと私は、これを見るために、ここへ来たのだ。根拠など何も無い、ただ直感でそう思ったただけだが、私にとってそれは、天啓のように感じられた。

「あなたはハクロ王子。殿下じきじきにいらっしやるとはな。」

一言目のエージンの声はどこか弱々しく、呆れを含んでいるように軽いもので、少し頼りなく思ったが

「だが、あんたらにはうちの子は渡さんぞ。」

と、二言目が力強く発せられたのを聞いて、私は満足する。

エージンはただのもうろく爺さんではない。公国の兵士を怒鳴って送り返し、それでも菓子折りだけはちやつかりもらう、鉄壁の厚かましさを持っているのだ。王子がでてきたくらいで、怯むことなどないだろう。

だからといって、連邦がそう易々と引き下がってくれるはずもなく、ハクロ王子と呼ばれた青年は

「残念ながらあなたに選択肢はありません。」

と、厳しい言葉を投げかける。

この王子とやらは、その地位から予想するに、連邦の王の息子なのであろうが、息子にしては、父親とは似ても似つかない。ジョージ王はもつと攻撃的で威圧的な空気を持つていたが、このハクロ王子は、柔和で優しい雰囲気醸し出している。母親似なのかもしれないが、それだけではない大きな隔たりを、私は感じた。

本当にあの王とこの王子は、血が繋がっているのだろうか？

そんな疑問が一瞬頭をよぎったが、今それは重要な問題では無いだろう。

「陛下はあなたの技術を必要としています。」

淡々と話すハクロ王子に

「お呼びじゃないんですよ。」

と、珍しく、エルサイスが、私より先に言い返した。

エージンにビモットを壊してくれと言われたエルサイスは「僕は……」のあと何と続けるつもりだったのだろうか？おそらく、彼なりの想いを込めた言葉を紡ぐはずだったのだ。それを邪魔されて、幾分気が立っているのかもしれない。

しかしながら、その変化は僅かで、長年彼を見てきた私くらいしか、その怒りに気づくことはないだろう。

「おとといきやがれ。」

エルサイスに続いて、私も王子様に向けるには、酷く汚い暴言を使って言い返す。ほんの少しだけ、エルサイスの口角が上がった気がした。これで満足してくれたならいいと思う。

私達を前に、ハクロ王子は悲しげに息を小さく吐いた。ため息できえ、お行儀がいい。

ハクロ王子は無言のまま、玄関外の階段を降りて行った。下には、護衛と思われる連邦の兵士が、数人剣を構えて並んでいた。

その臨戦体勢に違和感を覚えた瞬間、急に目の前に影ができ、私はびっくりして振り返る。

私たちの後ろには、物言わぬビモットが立っていた。

「えっ?」

「わっ!?!」

なぜ? どうやって? 様々な疑問が頭をよぎったが、ドア枠をバキバキと破壊しながら、ビモットが家から出てきたことに驚き、思考は遮られてしまう。

私は咄嗟のことに飛びのき、階段の手すりの上に避難する。エルサイスは飛び散るドアの破片を手でガードしつつ、反対側の手すりまで避けていった。

「ビモット!!」

エンジンは驚きつつも、ビモットを止めようと、勇敢にもその前に立ちはだかった。

しかし、マスターであるエンジンの制御失った機械人形は、無機質な無情で、彼をあつという間に吹き飛ばす。エンジンは無様に階段下まで転げ落ちていく。

「jeeさん!!」

私はその声を張り上げたが、ミシミシつと階段全体が軋む音にかき消されてしまう。

「クロ、避けて!」

「くっ……。」

バリバリと音を立てながら、ビモットは床に踏ん張るように伏せると、一気にその力を解放し、私の横を飛び上がっていった。恐ろしいほどの質量をもった物体が、頬を掠めていく感覚に、私は危険を感じて背中をゾクゾクさせる。これは厄介なことになった。

「エンジンさん!!」

小さなクレーター状の割れ目を作りながら、ビモットは下の地面に着地し、潰れたカエルのようになったエンジンを見下ろした。

嫌な予感がする。

「ビモット……?」

エンジンが僅かにそう呟いたその瞬間、機械人形はエンジンの首を両方のアームで掴むと軽々と持ち上げた。

「ぐふう……!! かはっ! ビモット……!!」

エージンは驚愕と恐怖に目を見開きながら、足をばたつかせ、苦しそうな呻き声をあげる。

私は大剣の柄を強く握ると、そのまま階段上から飛び降りた。

「やーめーろー!!」

飛び降りながら、ドントレスで自傷をする。今の私は勇士、HPが減れば減るほど攻撃力が増す特殊な職業だ。

地面に着地するとともに、シェイカーを放ち、連邦の兵士達を牽制する。スキルの効果で、私のHPはみるみる減っていくが、気にすることは無い。

階段を駆け下りてきたエルサイスの、支援が飛んでくる。ハイオーラで私の攻撃力をあげつつ、蝕む雨で機械人形の防御力を下げる。相変わらずいい反応速度と支援内容だった。

アベレージでもう一度自傷。狙うのはビモットのアームの連結部分。

「じーさんを離せよーこのデカブツー」

そう叫びながら、レンド。最初に刃を寝かせて刺し、抜く時に立て、肉をえぐるような技だ。減ったHP分の攻撃力を乗せたそれは、機械人形の腕を切り落とし、致命傷を与える、と思っていた。

ガキンと金属が擦れる音がして、機械人形は一瞬止まる。しかし、その両方のアームはビクともせず、そこにくっついたままで、今尚エージンを締め上げる。

「まじかよ……………」

ほぼ無傷の機械人形に、私は絶望的な呻き声を漏らす。一体こいつはどれだけ硬いんだ。

「クロ!!」

エルサイスの叫びに反応して、私は大剣を盾にするように体の横に構えた。その瞬間、機械人形の太いもう一本のアームが、私の脇腹に掛けて飛んでくる。

「ぐあっ……………」

巨大な鉄の塊がものすごい速度でぶつかってきて、骨が軋み、脳が揺れる。私のか細い腕では、とてもじゃないが支えきれぬ質量ではな

かった。

私の体は空中を舞い、ほとんど受け身も取れず地面に叩きつけられ、そのままきりもみ状態で転げ回る。口の中が血の味で満たされ、草と泥の匂いが鼻をついた。

「クロっ！」

私の元に駆け出そうとしたエルサイスを、連邦の兵士が取り囲む。私の周りにも連邦の兵士が走ってくるのが見えたが、体が痛くて立ち上がれない。頭もグラグラしている。脳震盪を起こしたかもしれない。

「いつのまに、こんな細工をしおった！」

地面に降ろされ、ハクロ王子の前に突き出されたエージンが叫ぶ。

「このロボットはすでに我々の管理下にある。あなたを連行するようになというのが、陛下からの命令。」

礼儀正しくはあるが、感情のこもっていない声で、ハクロ王子が返した。

その口ぶりから察するに、もつとずっと前から、連邦はビモットに何らかの仕掛けをしていて、それが発動したために、こんな事態になってしまったようだ。

それにしても酷い。我が子と慕うものに、首を絞めあげられるエージンの絶望は計り知れないだろう。

「来て頂こう。」

冷たく響くハクロ王子の声を最後に、私は目を瞑り、ゆっくり意識を手放した。

第98話 悪夢

僕の膝に頭を乗せて、静かに寝息を立てるクローバーの頬を、そつと撫でた。顔色は悪く無い。回復魔法で傷は癒えている。もう少しすれば、じきに目を覚ますだろう。

連邦の地下牢は薄暗くジメジメと湿っていて、放っておけば、あつという間に体温が奪われてしまう。地面の固さと冷たさから彼女を守るため、鞆から出した野宿用の毛布をかけ直しながら、僕は胸ポケットから懐中時計を取り出した。

20歳の誕生日に、師匠からもらったそれは、錬金術の技法と精巧な機械仕掛けで、正確な時を刻む。

時刻は午後9時を回っていて、エンジンの家でのビモット暴走事件から、5時間程経っていた。

エンジンに「ビモットを壊してくれ」と頼まれたとき、僕はなんと言うつもりだったのか。

「やりましょう」「できません」「他に方法を考えましょう」「どれも違う気がする。

結局答えが見つからず、言い淀んでいたところに、邪魔が入ったのだ。

たとえ時間をかけたとしても、良い返答は思い浮かばないということとは、今でも明白であったが、それでも尚、あの時邪魔が入らなければ、もつとマシな答えが見えたのではないかという期待が、捨てられずにいた。

だがしかし、それはもう取り返しをつかないものだ。邪魔は入り、僕らは囚われ、連邦の地下牢に閉じ込められている。

悪い夢を見ているような気分だった。

僕はユーリエフ家に生まれた瞬間から、疎まれ、蔑まれ、両親や兄からは人間としての扱いを受けたことなどなかった。衣食住の保証はあっても、居場所は決して与えられない。家のどこに居ようと邪険に扱われ、相手の視界に入るだけで殴られた。暴力に理由などない。僕は元々そういう、殴られても仕方ない存在として、あの家にいたの

だ。

何も与えられず、元から持っていたものは奪われた。

唯一の理解者であった妹も、僕の手によって死んだ。事故だったといえ、そうであろう。でも、あれは僕の心が、彼女を縛り付けてしまっていたから、起きたのだ。

僕はもう何も望まない。失うくらいなら、壊してしまうくらいなら、何も持たなくていい。

そう思っ、師匠の、血の繋がった本当の父親の元で、錬金術を学んだ。

それは救いだった。

錬金術は持つていても裏切らないし、決して失わない。知識は誰かの手によって消えるものではないのだ。

誰にも奪われないし、誰も傷つけない。

「はあ……。」

またため息をついて、僕はまたクロバーの頬をそつと撫でる。こんなことは、寝てる今しかできない。起きている時は、すぐに鉄拳が飛んでくるのだ。

暴走し、エージンの首を締め上げるビモットを思い出す。

錬金術で得た知識は、こうして奪われ、誰かを傷つける。

エージンの知識の結晶のビモットは、連邦にその中身を奪われ、エージン自身を傷つけ、次はどこかの誰かを傷つけるだろう。

僕は、大事な宝物が、世界で唯一愛したものが、奪われる瞬間を目の当たりにしたのだ。

本当にバカバカしい。この世界には砂の城しかない。ずつとそうわかっていたはずだった。確かなものなど何もない。手に入れば奪われる。そんなことは幼少の頃何万回と経験していたのに、僕はまた錬金術の美しい化学式に、合理的で無駄のない世界に目がくらんで、バカな妄想に浸っていたのだ。

それを奪いたいと思う者がいれば、すべては容易く奪われてしまう。僕の手で守れるものなどないのだ。

「悪い夢なら、ずつと見てるじゃないか……。」

今この僕が生きている世界そのものが、正に悪夢だった。
氷のような静けさが、地下牢を満たす。

「エル……？泣いてる？」

クローバーの暖かい手が下から伸びてきて、僕の頬に触れた。

「クロ？起きたの？大丈夫？」

ハッと我に返って彼女を見下ろす。ぼーっとした目をしているが、口元は優しく微笑んでいた。

「泣いてるのか？」

尚もそう聞いてくる彼女に、僕はキョトンとしてしまう。

「泣いてないよ？」

嘘ではない。涙などこれっぽちも出ていなし、その証拠に、クローバーに触れている僕の頬は濡れていない。

「そうか……。」

寝起き特有のぼやぼやした声で、クローバーが呟く。

「どうして、泣いてると思ったの？」

「ん、何となく。」

クローバーはぬるりと体を反転させながら起き上がると、僕の首に縋るように抱きついてきた。

「うえ？あつ？く、クロ？」

突然のことに、僕の思考は追いつかず、目を白黒させる。

背中に回されたクローバーの手は暖かく、細い首元からはほのかに優しい肌の香りがした。

抱き締め返したい衝動に駆られたが、2本の腕をわなわなと震わせることしかできず、自分の情けなさに苦笑いがこぼれる。

怖かった。それに触れてしまえば、また失って惜しいものが増えてしまう。もう絶望はたくさんだった。僕は臆病者なのだ。

「泣いたっていいんだぞ。」

クローバーが僕の肩に顔を埋めたまま、くごもった声で言う。

「泣かないよ。」

強がったわけではない。涙なんて、本当に一滴もでてこないのだ。
「そうか。」

クローバーは案外あっさり引き下がると、体を離し、眠そうに目を擦る。

「大丈夫？」

「うん。」

まだ意識がはつきりしないのか、クローバーは言葉少なで、どこか気だるそうだ。

急にガチャガチャと牢屋の扉が開けられる音がして、囚人が1人追加された。

僕とクローバーは一瞬顔を見合わせると、新入りの方に目を向ける。

「おお、お互い落ちぶれたもんだな、友人。」

聞きなれた声で、フェンダークが軽い挨拶をしてきた。

「お前何やってんだ？」

怪訝な顔で、クローバーが返す。

「どうしたんです？」

「ま、大体、友人と同じ理由だな。不穏な動きをしてるヤツは大体、こういう目に遭うってわけだ。」

フェンダークはそう言いながら、地面にどかっと座り込むと、胡座をかいた。もうどうしよもないからゆっくり休むというような態度だ。

「不穏な動きをするよう仕向けたのはお前だろ？ 私らは、あんたがエンジンに会いに行けって言うから、会いに行っただけだ。」

クローバーの主張に、フェンダークは肩をすくめるだけで、何も言わない。

フェンダークがどこまで予想していたのかは、僕にもわからない。でもその口ぶりから察するに、少なくともエンジンに会いに行けば連邦と何らかのトラブルになることは、ある程度想定内だったようだ。だがしかし、そんなことをして一体なんになるのか？

「これからどうするんですか？」

僕はフェンダークの向かいに座り直しながら聞く。クローバーも僕の隣に腰を下ろし、3人で丸くなるように座った。

「まあ、自由はき利かねえが、ここは平和だ。メシも出るし、外の世界なんて関係ねえ。」

クローバーが口をへの字に曲げてこっちへ合図を送ってくる。まったく同意できないらしい。

「このまま、ここで残った人生を罪の禊に費やしてもいい。」

呆れ返ったクローバーが、眉をよせ、ゴミを見るような目をフェンダークに返す。

僕はそれが面白くて、思わず笑ってしまう。

「……なんてな。」

最後、フェンダークは片方の口の端だけ釣り上げる笑顔で、冗談を締めくくった。すぐに

「全然面白くねえな。」

と、クローバーの辛口な批評飛ぶ。

「こういうとき、冒険者はどうするか。ここの門番をぶっ殺して、出てって、平和のために働くんだよな。」

「聞かねえ話だな。」

冗談の続きだと思ったクローバーが、そう、不愉快そうに鼻を鳴らす。

でも僕には、フェンダークが至って真面目に、本気でその話をしてるように思えた。そう考えた方が、辻褄が合うのだ。

目的は不明だが、フェンダークは、僕らを戦争に参加させたがっている。しかも、純粋な戦力ではなく、もつと複雑で乱雑な交渉ごとに巻き込もうとしているように思えた。

問題はなぜそんなことをするのか？

先にいったように、目的は不明。皆目見当もつかない。元々フェンダークは、何を原動力に、何の目的で動いているのか、まったく見えない人物なのだ。

それでも今まで特に不利益もなかったし、むしろ魔王ちゃんの件では助けてもらったこともある。だから正体不明でもそれを享受してきたが、今回の件は問題が大きすぎだ。

それでも、事態はもう引き返せない所まできているような気がし

た。

「ぶつ殺した時点では悪だと言われる。だが、その先で侵略者を数千人殺し、多くに国民が幸せになれば英雄と呼ばれ、正義だ。何が正義で何が悪か……。てめえの中で正義は、どっちか……。」

そう言いながらフェンダークは「ふああ」と大きなあくびをする。「俺は寝る。」

フェンダークはそう短く言うと、立ち上がり、牢屋の隅に行き、ゴロンと寝転がってしまった。

「勝手なやつだな。」

呆れたため息をつくクローバーに、僕は肩をすくめて返す。

フェンダークが勝手ではなかったことなんて、きつと1度もないのだから、仕方ないだろう。

第99話 ハクロ王子の希望

「泣いてないよ」と不思議そうに言うエルサイスは、なんだかとても痛々しくて、儂くて、消えてしまいそうで、私は思わずその体を抱きしめた。

そうすることに、何らかの効果があつたかと言われれば、ないかもしれない。

それはただ彼を戸惑わせただけで、何も響いていないように思えた。

自分の感情を表現したり、自覚したりするには、ある程度の訓練が必要なのだ。

悲しい時には泣いて、嬉しい時には笑って、腹が立つたら怒る。そんな単純な動作1つとっても、その思考の流れを読み解けば、とても複雑で、大人でもコントロールするのは困難である。

私はすぐ怒りや高揚感に振り回されるし、イライラの原因を言語化するまで、時間がかかりがちである。

でもそれは、何らかの事象に反応して、感情が動いている証拠だ。問題は、そのあとの「自分の感情の自覚」という点で不具合が起きやすいということなのだ。

ところが、エルサイスはその前の時点「事象に対する感情の反応」で、不具合を起こしているように思える。

悲しい場面で悲しいと思えない。我慢しているわけではないのが、また厄介だった。

事象に対して、反応するスイッチを切ってしまっているようなのだ。

その心には何も響かない。

動揺もないし、痛みも感じない。ある意味穏やかであろう。

でも、慰めで癒しを感じることもまた、できないのだ。

誰が彼をこんな風にしたのか、責任者がいたら訴えたい。

「クロ？大丈夫？」

フェンダークが寝ている場所とは反対側の壁に寄りかかった私た

ちは、肩を寄せ合い暖を取る。

薄暗い地下牢はひんやりと冷たい空気が漂っていた。息が白くなるような寒さではないが、じっと地面に座っているだけだと、体温は奪われ、指先はどんどん氷のようになっていく。

「寒い。」

「うん、寒いね。」

エルサイスは同意を示すと、膝にかけていた毛布を口元まで引っ張りあげてくれる。

「さて、どうしようか?」

「さあね……。」

はつきりした回答は元から期待していなかったので、気のない返事にも腹は立たなかった。

「どうにもできないか。」

「そうだね。」

「じゃあ……どうしたい?」

「僕?」

意外そうな顔で、エルサイスが首を傾げる。

「そうだよ。エルはどうしたい?」

私がさらに続けると、彼は困ったように眉を下げ困惑を示す。

「僕は別にどうもしたくないよ。強いて言うなら、なるようになればいいと思ってる。」

「jeeさんは、エージンことはどう思うんだ?」

私はそう核心を突いたつもりだった。でもエルサイスは

「どうも思っていないかな。技術を生み出すということには、それなりのリスクがある。そこから永遠に逃れる方法なんて、僕ら錬金術師持ち合わせてない。エージンさんのことも、ビモットのことも仕方ないことなんだよ。」

と言うだけで、暖簾に腕押しだ。

「そんなもんか。」

深く追求はしない。追いかけたところで、意味のある論議にならないのは一目瞭然だった。

痛みを感じないやつに、痛みとはどういうものなのか説明するのは、途方もなく複雑で乱雑で大変なことで、私1人で面倒を見切れるわけがないのだ。

「クロはどう思うの？」

「私？私にはさつきとここから出たいね。寒いし、お風呂に入りたい。」私が冗談混じりにさつきと、エルサイスがおかしそうにクスツと笑った。じんわり安堵が広がる。

「フェンダークさんは、ここから出て、戦争に参加しろ、みたいなこと言ってたけど。」

そう、冒険者なら平和のために戦う、なんてうそぶいていた。

冒険者は冒険者であって、英雄でも勇者でも、ましてや正義の味方でもない。

ただ世界を自由に旅して、冒険をする者であって、そこに他の意味を持たせようというのは、随分乱暴な話だった。

「聞かねえ話だなあ。」

このセリフは2回目だ。

「根拠が薄すぎる。動機としては弱いね。」

エルサイスが同意を示す。

お互い見つめ合って、ため息と苦笑い。

なんとも言えない気分だった。

コツコツと、こちらへ向かってくる足音に、私とエルサイスは顔をあげ、牢屋の外に目を向ける。

反対側で寝っ転がっていたフェンダークも「ふあーあ」っと大きな欠伸をしながら、床に座り直していた。

現れたのは、銀髪の青年、ハクロ王子だ。

意外な訪問客に、私とエルサイスは訝しげに顔を見合わせる。

「さつきは悪かった。おまけにこんなところに閉じ込めて……。陛下の言うことには逆らえないんだ。王子と言えね……。」

ハクロ王子はさつきと、小さく息を吐いた。相変わらず、お上品なため息だった。

「君を捕まえたのは、君にお願いしたいことがあるからだ。」

ハクロ王子の言葉に、私は眉を寄せて身構える。面倒事が増えそうな、嫌な予感がした。

「魔王を封印した話や、魔物退治のこと、噂はいろいろ聞いている。」
「瑣末ことだ。」

一応牽制を送るが、王子の目は変わらない。もう既に、覚悟を持ってここに来ているのであろう。無駄弾に終わった。

「そんな君に王を脅して欲しいんだ。僕を人質にしてね。奪った機械兵の生産を止めるようにって。」

「はあ？」

若干語気を荒ぶらせながら、眉を寄せる。無茶苦茶過ぎて、そうとしか返せなかった。

一体こいつは何を言っているのだ。

「クロ。」

仮にも一国の王子を前にして、随分失礼な態度を取る私を、エルサイスが窘めてくるがお構い無しだ。

「バカバカしい。そんな脅しが効くようなやつかよ。お前んとこの王様は。」

私の言葉にハクロ王子は唇を噛む。でも、もう止まれないのだろう。

「陛下は戦争をしたがっている。どこでもいいから手当たり次第に。手始めは公国だろうか。」

と、言葉を紡ぐ。

「お前の親父の目的は一体なんなんだ？」

そもそも戦争というのは、極めてリスクの高いビジネスなのだ。どんな大義名分を振りかざそうと、負けたら全て水の泡。やるならそれなりのリターンが見込めなければならない。

連邦は戦争を起こすことで、一体何を得ようとしているのか？それがさっぱりわからない状態だった。

私の質問にハクロ王子はしばし沈黙する。

しかし、最後は諦めたように頭を左右に振ると、肩を竦めてみせるだけで、意味のある言葉を練ることはできなかったようだった。

「わからない。というわけですか。」

エルサイスが、いつものよそ行きの微笑みを貼り付けた顔でハクロ王子に返す。

王子は申し訳なさそうに「うん」と頷く。

「とにかく、陛下は戦争をしたがっている。そんな時に、おあつら向きの機械兵を手に入れた。だが機械兵を使用すれば、この世界はバランスを崩し、世界そのものを崩壊させてしまうんだ。」

「目的と手段が逆の可能性もありますね。」

ハクロ王子の話に、エルサイスが反応を示す。私はその意味がよくわからず

「つまり?」

と聞き返した。

「機械兵という強い武器を手に入れた。だから、戦争がしたい。という可能性もあります。圧倒的な武力があれば、戦争に「負ける」というリスクを極限まで減らせますからね。」

リスクが無いなら、リターンを望まなくてもいいという暴論だ。

「子供じゃねーんだよ。「ぼくのさいきょうのぶきをためしたい」なんて初めて木刀を振り回した5歳児か?」

正直な感想をぶつけるが、エルサイスは肩を竦めるだけで

「5歳児の思考と、さほど変わらない大人は、結構いっぱいいるんだよ。」

と、窘めてきた。

バカバカしい話だ。なんでそんなやつらに、平和な暮らしを引っ掻き回されなければいけないのだ。

「君の協力があれば、機械兵を止められるかもしれないんだ。」

ハクロ王子がそう割り込んでくる。

「失敗したら、世界は……終わるかもしれない。……今は君しか頼れないんだ。頼む。世界を救ってくれ。」

冷たい牢屋に、沈黙が広がる。

世界を救ってくれとは、大きく出たもんだ。壮大すぎるが故に、全然心に響かない。

チラリとエルサイスを盗み見る。なんでもない、いつもと同じ、僅かに微笑んでいるような柔和そうな顔で、感情の反応のスイッチを切ったままだ。

私はため息をついた。

「断ってくれても構わない。逃げてくれても構わない。君たちが、救ってくれることを期待して、牢屋の鍵を開けて待っている。」

ハクロ王子はそう言って、カチャリと牢屋の鍵を開けると、期待を込めた眼差しで、こちらを見つめてくる。

そんな目で見られても困ってしまう。世界を救うなんて大それたこと、私たちがやる義理などどこにも無いのだ。